以一一」

【布帛】ハク もめんを布といひ、きぬを帛といふ。

【布帆】ハン ぬのほ。書、顧誥之傳「布人安饗一一無ノ怠」

【布被】ヒフ もめんのふとんん。後漢の書。史記「公孫弘、以ノ漢相ノ一一、食不ノ重ノ味、賓ニ天下先ニ」

【布置】フチ 底くしきおほふ。蔦賦、長笛賦「氣噴勃以一一兮」

【布總】フソウ ぬのと。より いと。古、年貢として徴収す。孟、盡心「一一之征」征は稅。

【布令】フレイ 命令法令等をひろく一般に示す。又、其の命令など。周語「一一既ノ能而立又不ノ至」

【布海苔】フカイ 國海藻の一、海中の石に繁生す。長さ二三寸、多くの枝に分る、乾かして溶き汁の如く製し、煮て糊を作り、又は藥を洗ふ料とす。＝鹿角菜。

【布袋】ホテイ ○陵朝の僧、腹は長汀子、體肥え腹便たり、常に杖を以て布の袋を擔ふ、測勒菩薩の化身身といふ。七福神の一。○ぬのの袋。くるる。「常客、食貧而週二乾糧一以ニ一一一一一」＝布囊。

【布袋竹】ホテイチク 國竹の一種、こまんちく、幹短く節多く、杖などにつくる。＝佛面竹。

巾　部

【巾】キン 國 ○ぬの、植物の纖維にて織り物たるもの「綿一」「麻一」○しく（施）陳列（ノ）廣く行きわたる。「流一」「遍一」○のべひろげる、敷行する「宣一」○ぜに（錢）「泉一」詩、衛風「抱一貿絲」○ちらす（分散）「散一」「莽一」

周　布・敷・鋪・蘊・帝・擂○布は一面に廣くしく義。流布・宣布・布列と熟す。○敷は布に同じ、布政を敷政とも書く。書經「弘敷ニ五典」○鋪はならべしく義、布に近し、滿園などを敷くにも用ふ。禮記「鋪ニ筵席ニ陳ニ尊俎」、陳れ布く義より轉じて賈肆の義に用ふ。鋪は俗字。○蘊は草を下にしく義より、廣く下地のしきものにする義とす。易經「蘊以ニ白茅」漢之主也」○帝は草をしきものにする義とす、藉に近し。○擂は擂と用ふ、又たねまきの義にも用ふ。詩經「始擂二百穀」

【布衣】フイ ○官位なき人、古は無官の人。「布帛」は布を衣る、被にいふ。史、田單傳「王蠅一一也」○國狩衣の異稱。

【布袋】ホテイ 國菩提目の交互に色をかへたる布帛の紋樣。

【布袋樣】ホテイサマ 國菩提目の交互に色をかへたる布帛の紋樣。

【布安笠】ヌリガサ 國菩、婦人用の中高の笠。

【布】 フ 國

○ぬの、植物の纖維にて織り物たるもの「綿一」「麻一」○しく（施）陳列（ノ）廣く行きわたる。「流一」「遍一」○のべひろげる、敷行する「宣一」○ぜに（錢）「泉一」詩、衛風「抱一貿絲」○ちらす（分散）「散一」「莽一」

周　布・敷・鋪・蘊・帝・擂○布は一面に廣くしく義。流布・宣布・布列と熟す。○敷は布に同じ、布政を敷政とも書く。書經「弘敷ニ五典」○鋪はならべしく義、布に近し、滿園などを敷くにも用ふ。禮記「鋪ニ筵席ニ陳ニ尊俎」、陳れ布く義より轉じて賈肆の義に用ふ。鋪は俗字。○蘊は草を下にしく義より、廣く下地のしきものにする義とす。易經「蘊以ニ白茅」漢之主也」○帝は草をしきものにする義とす、藉に近し。○擂は擂と用ふ、又たねまきの義にも用ふ。詩經「始擂二百穀」

【布衣】フイ ○官位なき人、古は無官の人。「布帛」は布を衣る、被にいふ。史、田單傳「王蠅一一也」○國狩衣の異稱。

【布衣之交】フイノマジワリ 利によりて結ぶまじはり。史、鄭廣傳「天下以ニ市道交、君有ノ錢、我則從君、君無ノ錢則去」

【布朝】フチョウ ○朝廷をいふ。市は帶說なり。論、憲問「吾力猶能肆諸一一」○まちう、又市井と朝廷と。

【布曝】フバク 米を買ひ入れる。宋史「連歲大饑、命使糴米粟、糴價何一一、自ノ是率以爲ノ常」

【布國】フコク まちや。女同詩「西岡頻幽僻、愛此遠二一一」

【布買】フバイ かふ、市も買。史、武安侯傳「治ノ宅甲ニ諸第、田園極ニ膏腴而一一郡縣、蒔物、相ニ駕於道」

【布船】フセン 商船（唐書、盛矣傳）

【布脯】ホフ 買ひたるほにし、脯は乾肉。論、鄉黨「沽酒一一不ノ食」

【布民】フミン 市中に居る民。申甕、山民樓「一一玩、處也」

【布門】フモン 「卿ニ輔文ニ不ノ如ノ侍一一一」

【布里】フリ まちの魏志、華歆傳「無ノ不ノ遊二行一一」

【布子】ヌノコ 國かみおろし、口よせなどの法を行ふ女。＝巫女。

【布施】フセ 施を爭ひて至るをいふ。孟子「仁人也、不ノ可ノ失也、從ノ之者、一一也」

【布袋樣】ホテイサマ 國菩提目の交互に色をかへたる布帛の紋樣。

【布安笠】ヌリガサ 國菩、婦人用の中高の笠。

【帆】 ハン 國 ○ほ、舟上の幔「布一」「篷一」「帆一」「征一」「雲一」「掃一」○轉じて船の義とす「歸一」○ほを上げる。韓愈詩「無因一一江水」

【帆影】ホエイ ほかげ。李嶠詩「岸邊一一爽風遊蕩聲遲」

【帆竿】ホカン ほばしら。＝帆檣。

【帆檣】ホショウ ほばしら。史、孫和傳、注「有ノ檣巢ニ於一一」＝舟檣。

【帆席】ホセキ ほのむしろ。木華、海賦「蕭長霜而挂ニ一一」

【帆船】ホセン 帆前船に同じ。

【帆布】ホフ ほもめん、粗翅にして堅く厚き布。

【帆掛船】ホカケブネ 國ほをあげて進むふね。＝帆船。

【帆立貝】ホタテガイ 國貝の一種、北海に產す、介殼の一片はふくれ、他の一片は平たし、平たき方を上に開きて帆とし、風に腹ひて水に浮び行く、肉は美味なり。＝海鬼。

【帆前船】ホマエブネ 國帆をあげ、風の力にて進む船。＝帆船。

四　畫

【希】 キ 國 ○まれ（罕）＝稀。すくなし（少）寡（若）殆と無し。論、季氏「十世一一不ノ失」○こひねがふ（願）のこと。「希聲」は無し、形無し。○一膳の略。「一上戰爭」

周　希・罕・少の別は罕（罔部三畫）の條を見よ。

【希夷】キイ ○美ふかき道理。老子「視之不ノ見、名曰ノ夷、聽之不ノ聞、名曰ノ希」に本づく。○靈芝の異名。

【希意】キイ 人の意をむかへて氣に入るやうにする。莊子「一一道言、謂之諂」＝希指。

【希有】ケウ 極めてまれに有る、めつらし。漢書、王莽傳「千載一一」＝稀有。

【希革】キカク 鳥獸の毛がすくなくしてあらたまりかはる。書、堯典「厥民因、鳥獸一一」

【希冀】キキ こひねがひのぞむ。奚子「下無ニ一一之望」＝希願。

【希望】キボウ こひねがひのぞむ。願は望。「希望」は不ノ應ノ夜有ニ分外一一」＝希望。

【希求】キキュウ こひねがひもとめる、こひねがふ。＝希望。

【希望】キボウ 國あやし、ふしぎ。

【希罕】キカン まれなり。漢書、龍樂志「一一不ノ識」

【希賢】キケン 賢人たらんことを希望する。周濂溪文「聖希ノ天、賢希ノ聖、士一一」

【希古】キコ 古人を以て自ら期する。楚詩「抗心一一、任ニ其所ニ尚」

【希旨】キシ 次條に同じ。

【希指】キシ 人の意をむかへる。人の氣に入るやうに迎合する。指は旨。漢書、孔光傳「上有ノ所ノ問、輒以ニ心所ニ安而對、不ニ一一ノ苟合」＝希意。

【希世】キセイ ○世にまれなる珍しきもの。歐陽修詩「家藏有ニ此一一珍」○世におもねりて俗に阿ふ。莊子「一一而行、比周而友」

【希聲】キセイ 聖人たらんことをねがふ。

【希賢】希賢を見よ。

【希少】キショウ すくなし。書、堯典、傳「夏時鳥獸毛羽、一一改易」＝稀少。

【希代】キダイ ○世にまれなりの意。高適詩「淮淵行路難、頭白一一珍」＝希世・稀世。○國ふしぎ、奇異。

【希圖】キト くはだて。＝希圖・計畫。

【希望】ボウ こひねがひのぞむ。のぞみ。＝願望。

【希毛】キモウ すくなきけ。漢書「烏獸一一、其性能暑」

【希聲數】ケイセイスウ 耶蘇教の一派。

【帛】 ハク 紙（糸部四畫）に同じ。

【帕】 ハ 國 ○ことばり（帳）○かしらつつみ、頭巾の類。蘇軾

商人が一定の日時に集りてあきなひする場所。

【市道之交】シドウノマジワリ 利によりて結ぶまじはり。史、鄭廣傳「天下以ニ市道交、君有ノ錢、我則從君、君無ノ錢則去」

【市朝】シチョウ ○朝廷をいふ。市は帶說なり。論、憲問「吾力猶能肆諸一一」○まちう、又市井と朝廷と。

【市糴】シテキ 米を買ひ入れる。宋史「連歲大饑、命使糴米粟、糴價何一一、自ノ是率以爲ノ常」

【市國】シコク まちや。女同詩「西岡頻幽僻、愛此遠二一一」

【市買】シバイ かふ、市も買。史、武安侯傳「治ノ宅甲ニ諸第、田園極ニ膏腴而一一郡縣、蒔物、相ニ駕於道」

【市船】シセン 商船（唐書、盛矣傳）

【市脯】シホ 買ひたるほにし、脯は乾肉。論、鄉黨「沽酒一一不ノ食」

【市民】シミン 市中に居る民。申甕、山民樓「一一玩、處也」

【市門】シモン 「卿ニ輔文ニ不ノ如ノ侍一一一」

【市里】シリ まちの魏志、華歆傳「無ノ不ノ遊二行一一」

【市子】イチコ 國かみおろし、口よせなどの法を行ふ女。＝巫女。

【如ノ鉤市】ヒトシキイチ 先を爭ひて至るをいふ。孟子「仁人也、不ノ可ノ失也、從ノ之者、一一也」

【市袋樣】ヒトフクロサマ 國菩提目の交互に色をかへたる布帛の紋樣。

【帛】ハク ○ぬの。もめんを布といひ、きぬを帛といふ。

【帛帆】ハクハン ぬのほ。書、顧誥之傳「布人安饗一一無ノ怠」

【帛被】ヒハク もめんのふとんん。後漢の書、史記「公孫弘、以ノ漢相ノ一一、食不ノ重ノ味、賓ニ天下先ニ」

【帛賦】ハクフ 底くしきおほふ。蔦賦、長笛賦「氣噴勃以一一兮」

【帛總】ハクソウ ぬのと。より いと。古、年貢として徴收す。孟、盡心「一一之征」征は稅。

【帛令】ハクレイ 命令法令等をひろく一般に示す。又、其の命令など。周語「一一既ノ能而立又不ノ至」

【帛海苔】ハクカイ 國海藻の一、海中の石に繁生す、長さ二三寸、多くの枝に分る、乾かして溶き汁の如く製し、煮て糊を作り、又は藥を洗ふ料とす。＝鹿角菜。

【帛袋】ホテイ ○陵朝の僧、腹は長汀子、體肥え腹便たり、常に杖を以て布の袋を擔ふ、測勒菩薩の化身身といふ。七福神の一。○ぬのの袋。くるる。「常客、食貧而週二乾糧一以ニ一一一一一」＝布囊。

【帛袋竹】ホテイチク 國竹の一種、こまんちく、幹短く節多く、杖などにつくる。＝佛面竹。

三　畫

【希】 キ 國 ○まれ（罕）＝稀。すくなし（少）寡（若）殆と無し。論、季氏「十世一一不ノ失」○こひねがふ（願）のこと。「希聲」は無し、形無し。○一膳の略。「一上戰爭」

周　希・罕・少の別は罕（罔部三畫）の條を見よ。

【希夷】キイ ○美ふかき道理。老子「視之不ノ見、名曰ノ夷、聽之不ノ聞、名曰ノ希」に本づく。○靈芝の異名。

【希意】キイ 人の意をむかへて氣に入るやうにする。莊子「一一道言、謂之諂」＝希指。

【希有】ケウ 極めてまれに有る、めつらし。漢書、王莽傳「千載一一」＝稀有。

【希革】キカク 鳥獸の毛がすくなくしてあらたまりかはる。書、堯典「厥民因、鳥獸一一」

【希冀】キキ こひねがひのぞむ。奚子「下無ニ一一之望」＝希願。

【希願】キガン こひねがひのぞむ。願は望。「希望」は不ノ應ノ夜有ニ分外一一」＝希望。

【希求】キキュウ こひねがひもとめる、こひねがふ。＝希望。

【希望】キボウ 國あやし、ふしぎ。

【希罕】キカン まれなり。漢書、龍樂志「一一不ノ識」

【希賢】キケン 賢人たらんことを希望する。周濂溪文「聖希ノ天、賢希ノ聖、士一一」

【希古】キコ 古人を以て自ら期する。楚詩「抗心一一、任ニ其所ニ尚」

【希旨】キシ 次條に同じ。

【希指】キシ 人の意をむかへる。人の氣に入るやうに迎合する。指は旨。漢書、孔光傳「上有ノ所ノ問、輒以ニ心所ニ安而對、不ニ一一ノ苟合」＝希意。

【希世】キセイ ○世にまれなる珍しきもの。歐陽修詩「家藏有ニ此一一珍」○世におもねりて俗に阿ふ。莊子「一一而行、比周而友」

【希聲】キセイ 聖人たらんことをねがふ。

【希賢】希賢を見よ。

【希少】キショウ すくなし。書、堯典、傳「夏時鳥獸毛羽、一一改易」＝稀少。

【希代】キダイ ○世にまれなりの意。高適詩「淮淵行路難、頭白一一珍」＝希世・稀世。○國ふしぎ、奇異。

【希圖】キト くはだて。＝希圖・計畫。

【希望】ボウ こひねがひのぞむ。のぞみ。＝願望。

【希毛】キモウ すくなきけ。漢書「烏獸一一、其性能暑」

【希聲數】ケイセイスウ 耶蘇教の一派。

【帛】 ハク 紙（糸部四畫）に同じ。

【帕】 ハ 國 ○ことばり（帳）○かしらつつみ、頭巾の類。蘇軾

詩「絳―蒙頭讀道書」」

五畫

【帚】シウ 有 通音 サウ
○ははき、塵を掃ふ具、箒の正字「斂―」曲禮「凡爲長者糞之禮、必加―于箕上」」○はく（掃）はらひ淸める。○王―はははきぎ。爾雅、註「王―似藜其樹可爲掃」」

【帙】チツ 質
○ふみづつみ（書衣）「書―」「卷―」「縹―」○こぶくろ（小囊）古の書は皆卷子にて囊を以て之を盛る。○轉じて書物の義「梵―」

【繙帙】書物を開きて讀む。＝開卷。

【帖】テフ デフ 葉
○かきもの（帛書署）○陣中の告示文「軍―」○てがみ（書翰）「乞米―」○石ずり。轉じて手本「法―」「臨―」○牀の前のとばり（帷）○つく（著）○したがふ（服）○さだむ、さだまる（定）「妥―」○ふだ、進士の試驗に問題を記せし札、轉じて進士の試驗。唐書、選擧志「記―括」」○國でふ、紙又は海苔などを一括したる稱。

【帖黃】黃色のはりがみをする、唐代の制、詔勅に改正を要する所あれば、勅書と同じ色の黃紙の附箋をせしをいふ〔石林燕語〕

【帖括】○帖は經中の文字を拔き記して問題とせし紙札、それに對して一經の文を總括して答案を作るをいふ〔唐書、選擧志〕一說、經書の文に所所紙をはりつけて隱したる文字をあてしめて學力を試みる法。＝帖試。○淸朝にて科擧應試の文をいふ。

【帖經】帖括を見よ。

【帖子】ちやうめん。金史「六品以下、則具二――以進」＝帳簿。

【帖耳】耳を垂れて馴れ伏する。韓愈文「俛首――、搖尾乞憐」＝帖伏」

【帖試】帖括を見よ。

【帖然】おちつきて安んずる貌。晉書、劉琨傳「羣情――矣」

【帖息】やすんじおちつく。宋史、張詠傳「氣遂――」＝安堵。

【帖妥】やすくおちつく。李賀詩「空光――水如天」＝妥帖。

【帖著】はりつける。南史「剪紙方寸、――二帛枕一」＝帖附。

【帖帖】○物のゆつたりと垂れさがる貌。釋名「牀前帷曰帖、言――而垂也」○おちつきて定まる貌。杜牧詩「壇宇寬――」＝帖然。

【帖附】帖著に同じ。

【帖伏】馴れ伏する。薛季宣詩「請君懸二之政事堂一、坐令――二犬與一羊」

【帖服】從順なる義。王安石文「後遂――、皆爲用」＝帖伏。

【帑】㊀ド ㊁タウ 虞 養 通音 ド
㊀こ（子）つまこ（妻子）「妻―」＝孥。○とりのを（鳥尾）左、襄二八「以害鳥―」㊁かねぐら（金庫）「府―」「公―」「禁―」

【帑廥】くら。唐書、張文瓘傳「養二廐馬一萬匹、――空虛」

【帑庫】貨財ををさむるくら。宋史「選二富家子弟一、掌二――」」

【帑藏】貨財ををさむるくら。後漢書、桓帝紀「嘉禾生二大司農――」」＝帑庫。

【帑廩】かねぐらと米ぐらと。唐書、王虔休傳「性恪敏、節二用度一、旣沒、所レ部――、皆可レ支二數歲一」

【帛】ハク 陌
○きぬ（縞）○にしき（錦）○ぬさ「幣―」禮物に用ふるきぬ。○かとり（縑）古、文字を書くに用ふ。轉じて書冊・記錄の義とす。後漢書、鄧后紀「必書二功於竹―」（竹は竹簡）

【帛書】うすぎぬに書きし文字。又、其のきぬ。漢書、蘇武傳「天子射二上林中一得レ雁、足有レ係二――」」

【帗】バツ 黠 曷
○てぬぐひ（巾）かしらづつみ（幞頭）づきん（頭巾）○おび（帶）○たび（足衣）

【帗首】づきんをかぶる。

【帕】㊀バツ ㊁ハ 黠 禡 ハク 陌
㊀はちまき（抹額）古の軍容「―首」㊁はらまき（腹卷）「―腹」

【帕首】はちまき。韓愈詩「以レ錦纏レ股、以レ紅―レ―」

【帕頭】づきんの類。＝幞頭。

【帔】ヒ 寘 支
○もすそ、すそ（帬）○そでなしばおり（褙子）○國むしのたれぎぬ、苧麻の布にて製す、上古の婦人が、外出の時、笠の四檐にさげて身を被ひし布。

【㡀】ヘイ 霽
○衣やぶる、やぶれたる衣（敗衣）敝の古字。○いやし（鄙小）

【帘】レン ロン 鹽
酒屋のはた（酒旗）古時、酒店の招牌は旗を懸けて望子とす「酒―」鄭谷詩「靑―認二酒家一」

六畫

【帟】エキ 陌
○ちいさきまく（小幕）○上に在る帳

【帣】ケン 霰
○底のあるふくろ（囊）○たすき。

【帥】㊀シユツ ㊁スキ 質 寘 ㊀の通音ソツ
㊀ひきゐる（率）易、師卦「長子―師」○したがふ（循・遵）禮、王制「命鄉簡二不―教者一以告」○あつまる（聚）○てぬぐひ（佩巾）㊁をさ（主）かしら（統領）しやうぐん（軍之主帥）「元―」「將―」「督―」「主―」「渠―」○國太宰府の長官。

【帥先】みちびき先だつ。晉書、禮樂志「躬二稼穡之艱難一、以―二―天下一」＝率先。

【帝】テイ タイ 霽
○みかど、きみ（天皇・天子）「皇―」○あまつかみ「上―」「天―」○神の貴き者「白―」「赤―」○あきらか（諦）大いなり。

【帝猷】天子のはかりごと。猷は謀。後漢書「――顯丕」＝皇猷・聖猷・帝謨。

【帝姻】天子と嫁娶の緣を結びし家がら〔宋史、錢端禮傳〕＝帝戚。

【帝胤】天子のちすぢ。蔡邕文「羨肱出レ自二――一」＝皇胤・皇統。

【帝掖】天皇のゐます御所、掖は宮城の正門の左右の掖門をいふ〔宋書、陳貴妃傳〕＝皇城・宮庭・禁庭・禁掖。

【帝綱】天子の天下を治めらるるおほづな。晉樂章「讚二武文一、建二――」」＝帝紘。

【帝閑】天子のうまや。閑は馬を繫ぐをり。蘇軾詩「看下賜二飛龍一出中――上」

【帝畿】天子の領地。杜審言詩「朋遊滿二――」」＝邦畿・王畿。

【帝鄉】○天帝のみやこ。莊、天地「乘二彼白雲一、至二於――」○天子の鄉里。後漢書、劉隆傳「南陽――多二近親一」

【帝弓】虹の異稱〔白虎通〕

【帝紘】紘はおほづな、帝綱に同じ。班固、答賓戲「廓二――一、恢二皇綱一」

【帝京】天子のゐますみやこ。白居易詩「歌諸滿二――」」＝帝都・帝城。

【帝系】天子のちすぢ。庾信文「――極二於輿圖一」＝皇統・帝胤。

【帝業】天子の事業。陸機文「齊民免二干戈之患一、戎馬無二晨服之虞一、而――固矣」＝帝緒。

【帝國】○皇帝の統御する國。共和政治の國などの對。○國天皇の治め給ふ我が大日本國、すめらみくに。＝皇國。

【帝國議會】○立憲帝國に於て立法に協贊する合議體の名。○國我が帝國の國會。衆議・貴族兩院より成る。

【帝國主義】國土國權の擴張を計る主義。

【帝閽】○天帝の宮門。張衡賦「叫二――一、使レ闢レ扉兮」＝天閶・天門。○轉じて天子の宮門。

【帝座】○天帝のゐます所。○たかみくら、天子のゐまし給ふ所。＝玉座。

【帝子】天子。又、神のみこ。王維詩「桂尊迎二――」」

【帝師】天子の師傅。＝帝傅。

【帝室】天子の御家。＝皇室。

【帝臣】天子の臣。論、堯曰「――不レ蔽、簡在二帝心一」

【帝宸】帝王の宮殿。李商隱詩「淪謫千年別二――」」

【帝城】帝京に同じ〔漢書、陳咸傳〕＝帝都。

【帝者師】天子の師。史、留侯世家「張良從レ上入レ關、遂道引不レ食、曰、今以二三寸舌一爲二――一、封二萬戶侯一、是布衣之極也」＝帝傅。

【帝緒】天子の事業。王襃文「擴二帝緒一」…

【帝緒】天子の事業。王襃文「擴二郤西戎一、始開二――」」＝帝業。

【帝制】○天子ののり。王勃詩「爰述二――一、大蒐二王道一」○皇帝となりて天下を制御する。又、天子となりて政令を布く。又、其の制度。

【帝壻】天子のむこ、公主卽ち皇女を娶りし者。北史、楊素傳「以二――之重一」

【帝戚】天子の親類。唐書「世爲二――一、不二亦貴一乎」＝帝姻。

【帝祚】天子のみくらゐ。＝帝位・皇祚。

【帝則】天帝又は天子の定められたるのり。詩經「不レ識不レ知、順二帝之則一」

【帝道】○天子が國を治め民を安んずるみち。＝帝綱。○理想上最善とする政治、王道・霸道の對。史、商君傳「吾說レ公以二――一」

【帝宅】天子のゐます所。庾書「東

都、乃一一、公啓守之」＝宮城。

【帝祉】ティシ　天よりくだされいはひ、福は福。詩經「既受二一一、施二子子孫孫」。

【帝儲】ティチョ　天子のよつぎ。謝朓「君奉二儲于一一」＝皇太子・東儲・春宮・春宮。

【帝都】ティト　天子のるまつみやこ。李白詩「日本晁卿辭二一一」＝帝城・帝京。

【帝國】ティコク　天子のはかりごと。北齊書、儒林傳贊「一一雖鑽、儒風未レ絕」＝帝謀。

【帝苑】ティエン　天子の太宗親ら撰して太子に賜ふ所、帝王たる者の模範とすべき事を記す。

【帝傅】ティフ　宰相。薩游詩「天爲二明時一生二一一」。

【帝謀】ティボウ　帝圖に同じ、謀は謀。法言「舉陶以二其智一爲二一一」。

【帝命溥將】ティメイフショウ　溥は徧く、將は助く。天子の命を受けて、諸侯が徧く祭祀を助くる義。宋史、樂志「隆化洋洋、一一」詩、商頌「我受レ命溥將、自レ天降康」とあるに本づく。

【帝旅】ティリョ　天子の軍隊。離騷「公徒既振、一一凱入」。

【帝陵】ティリョウ　天子のみさざぎ。

【帝力】ティリキ　帝王の恩德。康衢謠「一一何有於我哉」。洪大なる天子の御恩をかうむりながら其の餘りに縱づかざるを以てそれに縱づかざるなる大なるを以て、

【帝釋】ティシャク　圖天竺の神。須彌山上、利天主、其の中央に居る三十三天切釋天。

【帝王】ティオウ　てんし。杜甫詩「氣節二是象數一、同感二一一恭」。

【帝王之兵】ティオウノヘイ　天子が權を以て下を平定せんとする軍隊。戰國策「一一、取用不レ過三萬、而天下服矣」。

【帝都】ティト　天子のるまつみやこ。李白詩「日本晁卿辭二一一」＝帝城・帝京。

【帝國】ティコク　天子のはかりごと。北齊書、儒林傳贊「一一雖鑽、儒風未レ絕」＝帝謀。

【帝苑】ティエン　唐の太宗親ら撰して太子に賜ふ所、帝王たる者の模範とすべき事を記す。

【帝傅】ティフ　宰相。薩游詩「天爲二明時一生二一一」。

【帝謀】ティボウ　帝圖に同じ、謀は謀。法言「舉陶以二其智一爲二一一」。

【帝命溥將】ティメイフショウ　溥は徧く、將は助く。天子の命を受けて、諸侯が徧く祭祀を助くる義。宋史、樂志「隆化洋洋、一一」詩、商頌「我受レ命溥將、自レ天降康」とあるに本づく。

【帝旅】ティリョ　天子の軍隊。離騷「公徒既振、一一凱入」。

【帝陵】ティリョウ　天子のみさざぎ。

【帝力】ティリキ　帝王の恩德。康衢謠「一一何有於我哉」。洪大なる天子の御恩をかうむりながら其の餘りに縱づかざるなる大なるを以てそれに縱づかざるなる

【帽】ボウ　圓

○かしらつつみ（幞頭）○はちまき。＝帕。

七畫

【帶】タイ　図

○もすそ（下裳）すそ（裾）＝裙・帷。○中一はだぎ（襯衣）

【師】シ　図

○人を教へ導く人、人の模範とする人「百世之一」○先生。○のり（法）ならふもの（效）○おほし（衆）○おさ（長）○官の名「大一」「諫一」「少一」○いくさ、周代の軍制に、一千五百人の隊、

五一を軍（一萬二千五百人）とす「王一」「六一」「舟一」「疋一」○易の卦の名。坎上坤下。○神の稱「雨一」「雲一」○職業「醫一」「巫一」○しし（師子）＝獅子。○京一は天子の都する所。

【師友】シユウ　師と仰ぐべき友。漢書「唯以二同郡荀淑・陳寔爲二一一」○先生と友人と。

【師尹】シイン　周の太師の尹氏。詩、小雅、節南山「維仲山一、民具爾瞻」。

【師旅】シリョ　軍隊を引き率ゐる。書、夫禹謨「一一一振旅」。

【師師】シシ　軍隊をねぎらひなぐさめる。左、僖二六「齊孝公伐二我北鄙一、使二展喜一犒一師一」。我とは魯國。

【師傅】シフ　先生より受けし學。

【師客】シカク　先生の客。世說「殷一一受レ書還」。

【師行】シコウ　軍隊のあゆみ、軍隊の進行。詩經、疏「一一三十里」。

【師姐】シシ　師匠。

【師長】シチョウ　傳「卿家患孝、除子姐以一一」＝師範・師法。

【師曠之聽】シクワウノチヨウ　師曠は晉の樂師、能く音をききわけし人、聰は耳きとし。孟離婁「一一、不レ以二六律一、能レ正二五音一」。

【師教】シキョウ　先生のをしへ。詩經、簫「尊二師重一一也」。

【師嚴道尊】シゲンダウソン　教師が嚴格なれば、自然に其の傳ふる道も尊くなる。禮、學記「師嚴然後道尊」。

【師古】シコ　古を以て法とす、古道をたふとびてのつとる。史記「事不レ一一、而能長久者非レ所レ聞也」。

【師祭】シサイ　いくさのまつりの禮。王制、注「謂、一一也」。

【師氏】シシ　○周代の官名（周禮）○女師。詩、葛覃「言告二一一」。

【師事】シジ　師としてつかへる。左傳「孟僖子與二南宮敬叔一一一仲尼」。

【師帥】シスイ　相師としてのつとる。書、皐陶謨「俊乂在レ官、百僚一一、傳「一一相師」注」。

【師資】シシ　○先生はこのたすけとなる師匠と弟子と。

【師子吼】シシク　圖佛者があらゆる迷妄を退けずして說法するをいふ。獅子が吼ゆれば、百獸おそるるに喻ふ。師は獅に同じ。注、華嚴經「以二大聲一唱——」。

【師子國】シシコク　古の國名、今の印度の錫蘭島。宋書「——元嘉五年奉表」。

【師子座】シシザ　佛菩薩の坐する所の座の稱、佛は人中の師子と爲すが故。「翻譯名義集」。

【師匠】シショウ　○てほんとする人。王珣文「一代一一、四海推尊」。○技藝を敎ふる人。

【師承】シショウ　師よりをしへを承ける。黃庭堅詩「我學無一一、次非可、窺諧藝を演じて人をよせ集める所。＝帝席。

【席】セキ　○席次のすゑ、末席。儀禮「一一坐啐酒」注「啐亦嘗也」。○己のすわり場所を讓していふ。

【席門】セキモン　むしろにて作りたる貧家の門。宋書、袁粲傳「一一常挂二三逕」。

【席藁】セカウ　圖席をかり入るるために拂ふかれ。＝閑代。

八畫

【帷】イ　図

とばり（帳）たれぎぬ（幔）ひきまく、四方に引きまはしたる幕「鍾」「羅」「綿」「簾」「謙」。

【帷幄】イアク　帷も幄も幕の類。よりて陣營又は謀臣の義とす。漢書、高帝紀「運二籌一一之中、決二勝千里之外一」＝帷幕。

【下帷】カイ　とばりを垂れおろす、塾舍を開きて諸生を敎ふる。漢書、董仲舒傳「爲二博士一一、講誦、三年不レ窺レ園」。

【帷月】イゲツ　まくたれぎぬ。鮑照詩「徘徊一一中」。

【帷裳】イショウ　○出仕又は祭祀の時の下の裳は正幅を用ひて帷の如くす、故にいふ。論語、鄉黨○婦人

月・季冬・臘月。

【師法】シホウ　のり、てほん。漢書、魏相傳「相明二易經一、有二一一」＝師範・師矩。

【師範】シハン　○てほん、師法模範。又、其の人。北史、楊播傳論「恭儉慎行、爲二世一一」＝師表。○圖劍道・柔道などの先生。

【師父】シフ　○先生。ちちと。○先生を父としてあがめる。

【師傅】シフ　○太傅と太傅、共に皆帝王を輔佐する大官。○道をしへ導くもの。やくそく。疏、遺傳「父子一一並貧」。

【師叔】シシュク　てほん。又、其の人。史、太史公自序「國有二賢相賈將、民之一一也」＝師範。

【師模】シボ　てほん、師表模範。三國志、注、張摩別傳「誠學者之一一也」＝師表・師範。

【師旅】シリョ　五百人の軍隊を旅とし、五旅卽ち二千五百人を師とす。論「先進「加レ之以二一一」因之以二饑饉一」。

【帨】ゼイ　圖

てぬぐひ（佩巾）

【席】セキ　圖

○ひしらう（莞・蒲・竹等にて織りたる敷物）ござ「筵」「枕」「座」「茵」○すわり場所「筵」「座」

月・季冬・臘月。

【師法】シホウ　のり、てほん。漢書、魏相傳「相明二易經一、有二一一」＝師範・師矩。

【師範】シハン　○てほん、師法模範。又、其の人。北史、楊播傳論「恭儉慎行、爲二世一一」＝師表。○圖劍道・柔道などの先生。

【師父】シフ　○先生。ちちと。○先生を父としてあがめる。

【師傅】シフ　○太傅と太傅、共に皆帝王を輔佐する大官。○道をしへ導くもの。やくそく。疏、遺傳「父子一一並貧」。

【師叔】シシュク　てほん。又、其の人。史、太史公自序「國有二賢相賈將、民之一一也」＝師範。

【師模】シボ　てほん、師表模範。三國志、注、張摩別傳「誠學者之一一也」＝師表・師範。

【師旅】シリョ　五百人の軍隊を旅とし、五旅卽ち二千五百人を師とす。論「先進「加レ之以二一一」因之以二饑饉一」。

【悅】ヨツ　圖

てぬぐひ（佩巾）

【席】セキ　圖

○ひしらう（莞・蒲・竹等にて織りたる敷物）ござ「筵」「枕」「座」「茵」○すわり場所「筵」「座」「席」「次」「酒」「末」○しく（藉）敷物をしく。○とる（資）よる（因）漢書、劉向傳「呂產・呂祿「太后之寵」○やすんず（安）○つらぬ（貫）

【席不暖堗】セキフダンヨウ　孔子が四方に奔走して其の席の暖まる暇なきをいふ。韓愈、爭臣論「孔一一」。

【席前座】セキゼンザ　親心に人の話を聞きて夫婦に坐席を遇ふる。史、賈生傳「孝文帝因、感二鬼神事一、而問二鬼神之本一、賈生因具道二所以然之狀一、文帝一レ夜半前二文帝一レ」。

【席上】セキジョウ　酒宴の席をはづす。本事詩「連飛二千數魚、不レ勝二其因一、一レ而去」。

【席門】セキモン　むしろを門とす、貧家の形容。史、陳丞相世家「平家乃負郭窮巷、以二蓽席一爲二門一」。然門外多車轍」＝席門。

【席卷】セキケン　むしろを卷く如く、かたつぱしより卷き收める。賈誼、過秦論「一一天下、囊括四海之意」。

【席次】セキジ　すわるべき座席の順序。＝座次・席順。

【席上之珍】セキジヤウノチン　珍は善、上古の聖人の美くしき道をならべつらねる。一說、儒者の學德を席上の珍に喩へていふ。禮、儒行「儒有二一一一以待レ聘」＝席珍。

【席談】セキダン　圖よせ、講談・落語などの諧謔を演じて人をよせ集める所。＝帝席。

【席藁】セカウ　○席次のすゑ、末席。儀禮「一一坐啐酒」注「啐亦嘗也」。○己のすわり場所を讓していふ。

【席門】セキモン　むしろにて作りたる貧家の門。宋書、袁粲傳「一一常挂二三逕」。

【席藁】セカウ　圖席をかり入るるために拂ふかれ。＝閑代。

八畫

【帷】イ　図

とばり（帳）たれぎぬ（幔）ひきまく、四方に引きまはしたる幕「鍾」「羅」「綿」「簾」「謙」。

【帷幄】イアク　帷も幄も幕の類。よりて陣營又は謀臣の義とす。漢書、高帝紀「運二籌一一之中、決二勝千里之外一」＝帷幕。

【下帷】カイ　とばりを垂れおろす、塾舍を開きて諸生を敎ふる。漢書、董仲舒傳「爲二博士一一、講誦、三年不レ窺レ園」。

【帷月】イゲツ　まくたれぎぬ。鮑照詩「徘徊一一中」。

【帷裳】イショウ　○出仕又は祭祀の時の下の裳は正幅を用ひて帷の如くす、故にいふ。論語、鄉黨○婦人

の革のひきまく。詩、衛風「車漸漸」＝車帷。

【帷幄之制】ヰアクノセイ　帷はとばり、幕類の居る所、幄はかき、臣隷の居る所、卽ちはしたものの義にて、人主たる者が近侍の臣妾に制し押へられるをいふ。漢書、鄭崇傳「今人主沈溺諂諛之辭、幸一一」

【帷闥】ヰタツ　天子の典御殿。闥は宮殿中の小門。

【帷幄】ヰアク　とばり、幕府の義、將軍の陣營。史、高祖紀「運籌帷幄一一之中、決二勝千里之外、吾不レ如二子房一」＝帷幄・幕幄。

【帷房】ヰバウ　とばりの中、ねやのうち。宋史、后妃傳「書、愛二正一一、權無二外授一」＝閨房。

【帷蓋】ヰガイ　○まくの用意、天官、注「在レ旁曰レ帷、在レ上曰レ蓋」○帷帳に同じく陣營の義とす。

【帷薄】ヰハク　閨門の亂るる義。薄はすだれ、宮內外を蔽ふもの、閨房の義とす。漢書、賈誼傳「生二汚穢淫亂男女七レ別者、不レ目二汚穢一目二帷薄不レ修一」＝閨房不レ整。

【帷扆】ヰイ　たれたる幕のおほひ。南史、羊侃傳「盛設二一一、列二女樂一」

【帷幬】ヰチウ　たれぎぬ、まく。後漢書、竇憲洪傳「盛陳二一一、大會二諸將一」

【帷蹇】ヰケン　たれまくと、すだれと。南史、樂元寧傳「記錄夕、雪叢交下、一一皆白」

【帷子】ヰシ　圖　厩、又、裏にて縫りし夏衣、又、衣の布。

【常】ジヤウ　陽

○つね（恒）平生、ふだん、いつも「日一」「平一」とこしなへ（永遠）○のり（典・法）「國一」常に行ふべきみち、高世不易の道「五一」○ひさし（久）○もすそ（裳）○こうあ（常様）＝常様。六〇尋の二倍の長さ卽ち、一丈六尺。○なみ、普通、凡庸「尋一」「異一」「非一」○つねに、ここしなへに。○かつて、古、嘗と通ず。○西方の神。○日月を盡はける天子の御旗「天一」○一山。

同訓異義　常・恒・雅・每・庸・彝○常はあけくれと解す、平常の義。漢書「常常顯以示之」○恒はいつもかはらざる義。孟子「人恒過、然後能改」○雅は素なり、平素の義、かれなり、もとより、もと訓む、下地から の義。論語「子所二雅言一、詩書執レ禮」○每は其のたび毎に の義。每年・每人などと用ふ。○庸は常常なり、常に近し、庸行は日に立たぬ常法をいふ。○彝は定りたる常體の行をいふ。○彝は定りたるとき、常と同じ用ふるとき、常と同じ。

【常貞】ジヤウテイ　常に定まれる人數。唐書、百官志「職有二常守一、而位有二一一一也」

【常住】ジヤウヂウ　常にすこやか。王羲之交「知二體氣一一、此大慶也」

【常格】ジヤウカク　常に定まりたる格式、一定のきまりの宋書「皆依二一一一」

【常紀】ジヤウキ　つねののり。＝常度。

【常軌】ジヤウキ　つねののり。北史「是百王之一一、爲レ政之所レ先」＝常道。

【常規】ジヤウキ　つねののり。＝常度。

【常義】ジヤウギ　定まれるひとのみち。左傳、疏「天以二光明一爲二一一」

【常經】ジヤウケイ　永久に守るべきのり。漢書、黃憲傳「天地之一一、古今之通誼」

【常業】ジヤウゲフ　常に定まれるしごと。宋史、臣有二常職一、民有二一一、物有二常形一」

【常憲】ジヤウケン　「のり、常に守るべきおきて。書經「先王受二天戒一、人臣受有一一一」

【常操】ジヤウサウ　かはらざるつねのみさを、終始一貫せる操守。素書「上無二一一」

【常產】ジヤウサン　つねの產業。宋史「役レ人必用二窮月一、貧二其有一一一、則自重」＝恒產。

【常享】ジヤウキヤウ　つねなるみのはかりごと。記「狗彘一一」

【常山蛇陣】ジヤウザンダジン　常山の蛇は首尾相應じ、左右前後相救ふといふ。以て陣勢に喩ふ。孫子、九地「善用レ兵者、譬如二率然一、率然者常山之蛇也、擊二其首一、則尾至、擊二其尾一、則首至、擊二其中一、則首尾俱至、敢問レ交章の首尾相照應するに喩ふ。

【常記】ジヤウキ　常に定まれるまつり。唐書「凡歲之一一、二十有二」

【常叢】ジヤウソウ　平生の金物。杜甫詩「數爵倍二一一一杯、綻顏寬二一一」

【常式】ジヤウシキ　○つねののり。管子「國有二一一一、故法不レ隱」＝常法。○一定の格式。＝常格。

【常識】ジヤウシキ　圖普通の人の有する理解力。

【常事犯】ジヤウジハン　過常の犯罪。國事犯以外のつつみ。

【常習】ジヤウシフ　いつものくせ、平生の習慣。

【常人】ジヤウジン　あたりまへの人、尋常の人。＝凡人。

【常常】ジヤウジヤウ　つねに。孟、萬章「欲二一一而見之、故演演而來」

【常寂光】ジヤウジヤククワウ　圖佛の眞身の常住の處。天台觀無量壽經疏「一一者、常卽法身、寂卽解脫、光卽般若」

【常準】ジヤウジュン　さだまれるうまり、常に定まれる標準。後漢書「輕二殺死之刑、自是以後、酒酒三一一」

【常贊】ジヤウサン　一定の職業。孟、萬章「抱關擊柝者、皆有二一一、以食二於上一」

【常數】ジヤウスウ　○一定せるかずの儀禮、聘

禮、燕禮、義無二一一」○自然のさだめ、一定の運命。

【常勢】ジヤウセイ　つねのいきほひ。庶書「一酌二貧、兵家之一一」

【常惺惺】ジヤウセイセイ　平常心が昏昧ならずして、知識の明かなる義、惺は醒に通ず。上蔡語錄「敬是一一法」

【常設】ジヤウセツ　つねにまうけ置く。＝常置。

【常膳加】ジヤウゼンカ　食事の平常よりすすむる義、身の健かになりたるをいふ。門唐賦「常膳加、酒肩有控」

【常態】ジヤウタイ　常に一定せるやうす。平常の狀態。後漢書「舞無二一一、設無二常節」

【常美】ジヤウビ　いつものありふれたるしかたづつきなみ。

【常道】ジヤウダウ　常に定まりてかはらざる道。老子「道可レ道非二一一」

【常置】ジヤウチ　つねに設けおく。＝常設。

【常秩】ジヤウチツ　さだまれるやくめ、一定の官職。＝常職。

【常住】ジヤウヂウ　○圖常にとどまりて何時もかはらず、永久に變ぜず（法華經）○僧の一寺に定住して遊方せざるをいふ。

【常調擧生】ジヤウテウキヨセイ　官吏の登用試驗に應ずる通常の人人（謝獻、上神宗二書）

【常度】ジヤウド　○永久に變らざるのり。史、屈原傳「一一未レ審」＝常規・常紀。○平常の態度。後漢書、吳漢傳「常常法をいふ。

【常倫】ジヤウリン　なみなみのなかま。江淹詩「高步超二一一」

【常綠】ジヤウリヨク　ありふれたる魚類。凡庸の人に喩ふ。韓愈、應二科目一時與人書「選非二一一凡介之品幾兩儁也」＝凡鱗。

【常綠】ジヤウリヨク　草木の葉の一年中みどりなる義。常綠樹「一一灌木」

【常例】ジヤウレイ　常のならはし、慣例。北齊書「才高不レ使一一」

【无レ常】ムジヤウ　定りなき義。書經「民心一一、惟歸之懷」＝無常。

【常綠】ジヤウリヨク　圖年木の葉が年中その綠色をかへざる義「一一木」＝常綠。

【常綠植】ジヤウリヨクシヨク　圖沸羅頭項節の一派、延享の頃一一——文宇大夫の創めしもの。

【常夏】ジヤウカ　圖所生の携子の異名。＝瞿麥。

【常圈】ジヤウケン　圖永久のくらやみ。轉じて衆き周の世のみだれ。

【常世國】ジヤウセイコク　圖○往來の田來さる遠き國土。＝蓬萊。○遠き不變不死の國。○よみぢ、夜見の國、卽ち人の死後往く所。＝黃泉。

【常陸帶】ジヤウリクタイ　圖昔、正月十四日常陸國の鹿島神社の祭に男女の緣を占ふに用ひし紐の帶、其の占を帶占といふ。

【帶】タイ　泰

○おび（紳）「衣一」「冠一」「韋一」「博一」「襟一」「鍔一」○おび、おびをしめる、はく（佩）「一劍」

【帶刀】タイトウ　おびに刀を帶びる「一一者」

【帶劍】タイケン　劍を帶びる。漢書、「一一遊俠」＝佩劍・帶刀。

【帶劍】タイケン　おびかね、かね合せて帶を締める金具。式、齋宮寮「新中二小白一一」

【帶袋】タイタイ　おほおびと、しゃくとの文官の朝服。宋史、儀衛志「樂二畢帶本袋一」

【帶笑】タイセウ　笑を帶びる、ゑがほをつく

る。李白詩「名花傾國兩相歡、常得二君王一一笑一者」

【帶刀】タイタウ　○帶劍に同じ。○タイタウ　國たちはきの音便。古、貴者に仕へたる隨衛の士。

【帶同】タイドウ　いっしょにつれ行く、同伴する。＝同行。

【帶方】タイハウ　地名。漢書、地理志「樂浪郡、縣一一」鴻臚卿道、望海詩「雷霆鬬二溟水一、鷁鷁出二一一」

【帶分數】タイブンスウ　分數を帶びたる數、整數のはしたのあるもの。

【帶厲之誓】タイレイのチカヒ　山嶽河帶の略、功臣の家を永久に絶たずといふちかひ。史、高祖功臣年表「封爵之誓曰、使二黃河如一帶、泰山若厲、國以永存、爰及苗裔」

【帶金】タイキン　國劍を帶びるとき其の紐を結びつけるため鞘につけし鐶＝佩金。

【帶置】タイヂ　國女の帶のとけざるやうに帶の上に締めるひも。

【帳】チャウ　圜　に作通じて張に作り俗に賬

○とばり、たれぎぬ（帷）「錦一」「綺一」○ちゃうめん（計帳）「一簿」

【帳帷】ちゃうい　まく。神仙傳「青錦一、下鋪二白氈」＝帳帷。

【帳合】ちゃうあい　國帳面上の勘定、收入支出の帳面上の計算。

【帳飲】ちゃういん　送別の宴、餞酒のこと。供張飲餞。李白詩「一一與二君別」＝餞別。

【帳瓦】ちゃうくわ　國喪儀の終、決算の結果、差引勘定。

【帳中】ちゃうちう　とばりのうち。史、項羽紀「四面皆楚一一一」斬二宋義頭一」＝幕裏。

【帳場】ちゃうば　國商家にて帳面の記入又は會計を取扱ふ所。會計室。

【帳幕】ちゃうまく　大業雜記「并載二兵器一一」＝幕帷。

【帳簿】ちゃうぼ　ちゃうめん。計算簿。

【帳帳】ちゃうちゃう　とばりと、まくと。市肆記「一一酒幕、多用二綺繡一」

【帳面】ちゃうめん　國ちゃうづら、帳簿のおもて、轉じて帳簿の義。

【幹】カン　圜

○おほふ（覆蔽）○たれぬの（帷）とばり（帳・幄）

「幹幄」とばり、旁に在るを幹といひ、上に在るを幄といふ。注言「於後知二夏屋爲一一一」

【帽】帽（巾部九畫）の俗字。

【幄】アク　圜

九畫

【幄合】アクあい　國幄面上の勘定、收入支出の帳面上の計算。

【幄飲】アクいん　送別の宴、餞酒のこと。供張飲餞。李白詩「一一與二君別」＝帳飲。

【幄瓦】アクくわ　國喪儀の終、決算の結果、差引勘定。

【幄中】アクちう　とばりのうち。史、項羽紀「四面楚一一一」斬二宋義頭一」＝帳裏。

【幄場】アクば　國商家にて帳面の記入又は會計を取扱ふ所。會計室。

【幄幕】アクまく　大業雜記「并載二兵器一一」＝帳帷。

【幄簿】アクぼ　ちゃうめん。計算簿。

【幄帳】アクちゃう　とばりと、まくと。市肆記「一一酒幕、多用二綺繡一」

【幄面】アクめん　國ちゃうづら、帳簿のおもて、轉じて帳簿の義。

【幹】カン　圜

○おほふ（覆蔽）○たれぬの（帷）とばり（帳・幄）

「幹幄」とばり、旁に在るを幹といひ、上に在るを幄といふ。注言「於後知二夏屋爲一一一」

【帽】帽（巾部九畫）の俗字。

【幄】アク　圜

九畫

○婦人のかみかざり、首飾。晉書、宣帝紀「諸葛亮數挑戰、帝不出、因遺帝巾一一婦人之飾」一說に婦人の喪冠。○轉じて巾一を婦人の義に用ふ。

【幘】シャク　圜

巾かしらづつみ（覆髻）髮を包む頭巾。

【幜】サン　國　サン　國

○サン　○サン　○サン　○サン

○衣裳。又、毛羽の垂るる鋩。

○はたあし（斿）

【幕】ボク・マク　圜

○まく、とばり（帷）たれぬの（帳）「帷」「幕」○將軍の軍の政を行ふ所「一下」○轉じて軍略又は參謀の義とす。○まとふ（絡）○おほふ（覆）○ここで、すれあひて（冒胥）戰則斬、堅甲鐵一」○演劇傳「當登場必ず一を開く、故に云ふ。○すなはち（沙地）古、漠に通じて文なき處。○國客居のひとまり。

【幕友】マクイウ　將軍を輔佐する參謀官。＝幕士・幕客・幕賓。

【幕賓】マクヒン　將軍の陣營。

【幕燕】マクエン　極めて危き喩、下の巢幕燕を見よ。元史、外戚傳「朋黨一一、亡在二旦夕」

【幕下】マクカ　○將府の下、即ち將軍のひざもと、大將の麾下。轉じて將軍の稱。左傳「晉攻二邯鄲一、取二趙旗于子蟜之一一」○國相撲の幕內の力士の次に位する力士。

【幕論】マクロン　幕論に同じ。

【幕朔】マクサク　幕は漠朔は北、沙漠の北の地。漢書、敍傳「龍荒一一、莫不二來庭一」＝幕北。

【幕臣】マクシン　はたもと將軍のけらい。

【幕天席地】マクテンセキチ　志氣の壯大なるを いふ。劉伶、酒德頌「有二大人先生一、以二天地一爲二一朝一、萬期爲二須臾一、日月爲二扃牖一、八荒爲二庭衢一、行無二轍跡一、居無二室廬一、縱二天地一之間、意之所一如」

【幕幕】マクマク　極めて危くして安からざる喩。左、襄二九「夫子之在上也、猶二燕之巢于幕上一」＝幕燕。

【幕賓】マクヒン　入幕之賓の略語、諸侯の謀臣にあづかる人、幕府の賓客として遇せらるる者。黃庭堅詩「一一徵出紫微郎」

【幕府】マクフ　○大將軍の本營、一定の所なく隨處に幕を以て府とするが

【幅】フク　ヒョク　圜匿　フク　ヒョク

㊀はば、布帛又、すべて物の面積の廣さ「一員」「半一」「全一」○ふちべり（緣）「邊一」○きれ（布帛）○かけもの。又、かけものを數ふる稱「三一對」㊁むかばき（行縢）○國はば、はぶりの義。

【幅員】フクヒン　ひろさ、大徐に同じ。

【幅頭】フクとう　はば、めぐり、頭は員、四面ずつ。詩「綿頭一一一長」＝幅員。

【幅巾】フクキン　一はのきれにて作りし頭巾、隱士などの用ふるもの。後漢書、鮑永傳「永悉召兵、但一一與三諸將及同心客百餘人一詣二河內一」

【冪】ベキ　圜

巾にて物をおほふ。おほひ（覆）＝冪。

【冪冪】ベキベキ　雲などのおほへる貌。吳融詩「紫閣高翻冪冪一一」

【幣】ホウ　圜

たすくる（補助）＝幣。

【幣門】ヘイもん　○兩者の門をとりもちたすける者。黃元文雜纂「子弟窮袋遊二一一」○國酒四をとりもちもちたい。＝亡逃八興をたすける者、たいこもち。八宮。

【幣助】ヘイじょ　國輔護する。

【幣助】ヘイじょ　たすける。

十畫

【幎】ベキ　圜

○とばり（幔）すだれ（簾）○おほふ（覆）かほかくし（覆面）十八史略卷一「夫差曰、吾無以見二子胥一、爲二冒幎一以死」冒は帽。

【幎目】ベキもく　死者の面をかくす帛。儀禮、士喪禮「一一用レ緇、注「一一覆レ面者也」＝幎冒。

【幔】マン　圜

○たれぎぬ（帷幔）とばり（凡帳）「幕一」「珠一」「文一」○おほひ（覆）ほろ（被布）今は馬事・人力車などの雨よけ。○一子は俗に酒帛を いふ。

十一畫

【微】キ　圜

○はた（幟）○さしもの、のぼり（幟）○しるし、徽に通ず。

【幟】クワク　圜

○婦人のかみかざり、首飾。晉書、宣帝紀「諸葛亮數挑戰、帝不出、因遺帝巾一一婦人之飾」一說に婦人の喪冠。○轉じて巾一を婦人の義に用ふ。

【幟】シャク　圜

巾かしらづつみ（覆髻）髮を包む頭巾。

【幟】サン　國　サン　國

○サン　○サン　○サン　○サン

○衣裳。又、毛羽の垂るる鋩。

○はたあし（斿）

【幟】ボク・マク　圜

○まく、とばり（帷）たれぬの（帳）「帷」「幕」○將軍の軍の政を行ふ所「一下」○轉じて軍略又は參謀の義とす。○まとふ（絡）○おほふ（覆）○ここで、すれあひて（冒胥）戰則斬、堅甲鐵一」○演劇傳「當登場必ず一を開く、故に云ふ。○すなはち（沙地）古、漠に通じて文なき處。○國客居のひとまり。

【幟】ヨウ　圜

ふんどし、ふしまき（腰布）＝褌。

【幀】タウ　圜

○裝飾ものを張る。山幀。○轉じて書畫の一幅を一一といふ。

【幟】モウ　圜　字所同は古字、幟は古俗

かぶりもの「落一」「紗一」「烏一」今は專ら頭に戴くものの通稱、おもに西洋風のかぶりものをいふ。ぼうし。

「帽纓」ぼうしのふち。李商隱詩「一一一」

【帽子】ボウシ　○頭にかぶるもの、子は助語。宋史、輿服志「皇帝服一一一」國○女のかぶりもの「紗一一」○しゃっぽ、西洋風のかぶりもの。

【帽額】ボウガク　國○すだれの上邊に懸に引く帛の如きもの。○救所の名。羅救、もつかから。

故。史、李將軍傳「大將軍使₂長史急責₁廣、之₂一一₁對₁簿」○國武家の政を行ふ所「德川一一」

【幕北】幕朔に同じ。史、匈奴傳「以₂精兵₁待₂於一一₁」

【幕末】國德川幕府のすゑつかた、幕府の末路。

【幕僚】○將軍を輔佐する參謀官。宋史「藩鎭一一勿₂得₁任₂臺官₁」＝幕友。○國陸海軍の司令官・總督等に屬して參謀事務に參與する將校。

【幕論】幕府の人人の主張、幕府の評議。＝幕議。

【幕內】國角力道にて力士の上級に列する資格、昔、上覽相撲に幕の內に伺候するを得る上級力士の稱。

【幔】バン　マン　翰

○まく（幕）とばり（帳）「羅一」「帷一」○おほふ（覆）

解字 幔は漫なり、漫漫として相連る義。

【幔帷】まく、とばり。司馬相如、長門賦「張₂羅綺之一一₁兮」

【幔幕】ひきまく。名畫錄「以₂一一₁遮蔽、不₂令₂相見₁」

【幟】サン　旱

十二畫

【幟】シ　寘

○きぬがさ（絹蓋）晉書、輿服志「功曹吏一扇騎從」＝繖・傘。○かさ（蓋）

【幟】

○のぼり、はた（幡）「彩一」「旌一」○めじるし（標）「標一」しるしばた（旛）史、高祖紀「旗一皆赤」○しるし、はたじるし（記號）後漢書、虞詡傳「以₂采綖₁縫₂其裾₁爲₁一」志に通ず。

【幢】㊀タウ・ドウ　㊁タウ・ドウ　江　絳

㊀はた、旌旗の屬。㊁后妃の車のたれぎぬ、ほろ。

【幢幢】○おほはれて明かならざる貌。元稹詩「殘燈無₂焰影一一₁」○羽毛布帛などの垂れたる貌。張衡、東京賦「樹₂羽一一₁」

【幢幡】○はた。後漢書、禮儀志「單衣持₂一一₁」○佛堂に飾る旗。法華經「一塔一廟各千一一」＝幢旛。

【幡】ハン　ホン　元

○はた、のぼり（幟）「龍一」○かへる（反）ひるがへる。＝翻。

【幡竿】はたざを。宋書、武帝紀「一一亦折斷」

【幡旗】はた〔史、天官書〕

【幡然】ひるがへる貌。さらりとかはる貌。孟、萬章「既而一一改」＝翻然。

【幡葆】はたじるし、葆は鳥羽をつけたるはた。西京雜記「如₂撞₂鐘擊₁、如₂飛₂一一₁」

【幡幡】○ひるがへる貌。詩、小雅「一一瓠葉」＝翻翻。○威儀を失ふ貌。詩、小雅「威儀一一、舍₂其坐₁遷」＝翩翩。

【幣】ヘイ　霽

○ぬさ、しで、神にささぐる禮物の帛「一帛」にぎて、みてぐら、天子に奉る禮物。○賓客に贈るつかひもの「重一」○たから（財用）管、國蓄「以₂珠玉₁爲₂上一、黃金爲₂中一、刀布爲₂下一₁」○ぜに（錢）「貨一」「造一」○國ごへい、ゆふしで。

【幣貢】みつぎもの。周禮、九貢の一。注「一一、玉馬皮帛也」＝貢物。

【幣制】國家にて規定する貨幣の制度。

【幣束】國ごへい、ぬさ。

【幣帛】○神にささぐるぬさ。○天子に奉り、又、賓客に贈る禮物の帛。

【幣物】おくりもの（禮物）國語「使₃下臣奉₂其一一₁」

【幣聘】禮物を贈りて賢者を招く。

【幞】ボク　沃　樸に通ず

○かしらづつみ（帊）○はちまき（帕）づきん（頭巾）

【幞頭】づきん。廣韻「一一周武帝所₂製、裁₂幅巾₁出₂四脚₁以₂一₁、乃名焉」

十三畫

【幧】セウ　サウ　蕭　豪

○かみづつみ（斂髮之巾）「一頭」○はちまき（絡頭）

【幩】フン　文

古、馬のくつわにまとひて汗を扇ぐもの。詩、衛風「朱一鑣鑣」

十四畫

【幪】幪（巾部十一畫）の俗字。

【幬】㊀チウ　㊁タウ　尤　號

㊀とばり（禪帳）「羅一」「綘一」○かや「蚊一」○くるまおほひ（車帷）○こしきがは（轂革）㊁おほふ（覆）中庸「辟如₂天地之無₁不₂持載₁、無₁不₂覆一₁」

【幬帳】かや。南史「夏日無₂一一₁、而夜臥未₂嘗有₁蚊蚋₁」＝蚊幬。

【幪】㊀ボウ・モウ　㊁ボウ・モウ　東　董

㊀おほふ、おほひ（覆）㊁一一は茂り盛んなる貌。

【幪幪】茂り盛んなる貌。詩、大雅「麻麥一一」

【幫】幇（巾部九畫）に同じ。

十五畫

【幮】チュ　虞

○とばり（帳）「紗一」○かや「蚊一」

【幭】ベツ　バツ　屑　月

○おほひ（覆）○よぎ（禪被）○車のおほひ、てすりかけ、車の覆式。

十六畫

【幰】ケン　阮

ほろ、車上の幔。熱を禦ぐ爲めに設く。倉頡篇「帛張₂車上₁爲₁一」

十七畫

【幱】タウ　敬

○畫緒を開張する。又、其のゑぎぬ。黃庭堅詩「畫出西樓一一秋」＝幀。○英語、パノラマの譯語。

干部

【干】カン　寒

○をかす（犯）さからふ。○もとむ（求）自ら進みてをかし求める「一祿」○たて（盾）矢をふせぐ具。○轉じていくさ道具の總稱「一戈」○ふせぐ（扞）○たに（澗）みぎは（水涯）ほとり「河一」がけ（厓）○てすり「欄一」「闌一」○みやこのそと（國郊）○あづかる（預・參）「一涉」「一預」○かわく（乾）○いし。＝矸。○えびすのいぬ。＝豻。○十一は木火土金水の五行を陰陽に分ちたる稱、えと、甲より癸に至る。＝十幹。○そこばく、若一は、未定數を示すことば。＝幾許。

同訓異義 干・侵・犯・冒は侵（人部七畫）の條を見よ。

【干羽】夏の禹王の舞樂の名、干舞・羽舞。書、大禹謨「舞₂一一₁于兩階、七旬有苗格」

【干諱】いかりにふれる。楚辭「恐₂犯₁忌而一₁一」

【干戈】○たてと、ほこと。詩、大雅「一一戚揚」○轉じて戰爭の義。文天祥詩「一一落落四周星」

【戢₂干戈₁】兵器をおさめて用ひず、戰のやみしをいふ。詩、周頌「明昭有周、式序₂在位₁、載一一、載櫜₂弓矢₁」

【倒₂載干戈₁】戰をやむるをいふ、兵器を車に載するに、出征の時は刃を前に向け、凱旋の時は刃を後に向く、故に倒載といふ。禮、樂記「一一一、包₂之以₂虎皮₁」

【倒₂置干戈₁】武器をさかさまにしておく、世の太平無事となりし義。史、留侯世家「一一一、覆以₂虎皮₁、以示₂天下不₁復用₁兵」＝偃武。

【干支】えと、十干と十二支と。＝幹枝。

【干城】たてと、しろと、共に外を扞ぎ內を衞るもの、國家を守る武夫に喩ふ。詩、周南、兔罝「赳赳武夫、公侯一一」

【干將莫邪】古代の二つの名劍、吳王闔閭、干將に劍を作らんことを請ふ、干將は吳人、其の妻を莫邪といふ、干將、五山の精、六金の英を采りて二劍を成す、陽を干將といひ、陰を莫邪といふ〔吳越春秋〕莫邪は一に鏌鎁とも書く。○轉じて廣く名劍の義。

【干戚】たてと、まさかりと。轉じて兵器の總稱。詩、大雅「干戈戚揚、爰方啓₂行」

【干涉】其の事にあづかる、關係する、さしでて世話をする。金史、撒离喝傳「固不₂敢一一₁」

【干掫】夜を警むる者。干は扞、掫は擊。左、襄二五「倍臣一一有₂淫者₁」

【干潮】ひきしほ。

【干冒】をかす。呂溫文「一₂一陳獻₁」

【干犯】をかしきかふ。魏志、蘇則傳「明爲₂禁令₁、有₂一一者₁輒戮」

【干滿】しほのさしひき、干潮と滿潮と。＝滿干。

【干與】あづかる、關係する。＝干預・參與。

【干預】前條に同じ。

【干櫓】たて。禮、檀弓「儒有₂忠信以爲₂甲冑₁、禮義以爲₂一一₁」

【干祿】○天祐をもとめる。詩、大雅、旱麓「豈悌君子、一₂一不₁回」○仕へて俸祿を求める。論、爲政「子張學₂一一₁」

二畫

【平】㊀ヘイ・ヒヤウ　㊁ヘン　庚　先　㊀の一音ビヤウ

㊀たひらか、たひら（坦）「均

「一」「一坦」「砥一」高低凸凹なし、ひらたし「扁一」○ただし(正)○たひらぐ、たひらかにす、やはらぐ(和)をさまる(治)「升一」「康一」「泰一」「和一」○なかが直る、和睦が成り立つ。春秋、宣十五「宋人及楚人一」○なみなみ、尋常「一一凡凡」○ひとし(齊等)○やすし(易)○みのる(歲稔)○おほいなる野。○漢字の發音上の四聲の一「一上去入」○嘉一は陰曆十二月の異名。史、始皇紀「更名臘曰嘉一」㈡一一はととのふ(均)辨治する。國○切に「一に御免」○「一椀」○盡す「飲み一ぐ」○一氏は四姓の一、桓武天皇の曾孫高望王に始まる。

【平起】絶句の起句の第二字を平字にして作る。仄起の對。

【平聲】四聲の一、上平・下平の二に分つ、上平は、東・冬・江・支・微・魚・虞・齊・佳・灰・眞・文・元・寒・刪の十五韻、下平は、先・蕭・肴・豪・歌・麻・陽・庚・靑・蒸・尤・侵・覃・鹽・咸の十五韻、平聲に屬する字は皆平字にて、字の左の下の隅に圈點を付して別つ。

【平仄】○平韻の字と仄韻の字と。平韻三十、仄韻七十六。仄韻は分ちて上・去・入の三聲とす。○國つぢつま、順序「一一が合はぬ」

【平等】ひとし、差別なし。涅槃經「悉皆一一、無有差別」

【平等界】佛萬有の差別なき世界、眞如の世界。

【平安】○たひらかでやすらか、無事息災。岑參詩「憑君傳語報一一」○國京都の異稱。

【平安朝】國延曆十三年、桓武天皇が平安卽ち京都に都を遷されてより鎌倉時代に至るまで凡四百餘年間の稱。

【平夷】○たひらぐ。七發「一二一西畔一」○たひらか。

【平易】○たやすし、てがる。史、魯世家「一一近人、人民必歸之」政を簡易にして、人民に近づき親む。○わけもなし。＝容易。

【平意】しづかに平かなるこころ。鬼谷子「虛心一一」

【平允】公平にして、えこひいきがない、公平無私。次條參看。

【平允之士】公平誠實にして慘刻ならざる士。宋史、仁宗紀、贊「刑法似縱弛、而決獄多一一」

【平衍】たひらかにひろし。蘇軾詩「泉旁地一一」＝平廣。

【平穩】○おだやか。徐照詩「江神應念我、一一不生風」○無事にして安泰なり。

【平康】○たひらかにやすし。忠經「人臣和悅、邦國一一」＝平安。○唐の時の里の名。開天遺事「長安有平康坊、妓女所居之地、每年新進士、游謁其中、時人謂爲風流藪澤」

【平衡】○正しきはかり(漢書、律歷志)○衡は平なり、人を拜する時、手を拱きて心胸と平かにする義。荀、大略「一一曰拜、下衡曰稽首、至地曰稽顙」

【平格】公平にして天道に至り通ずる、格はいたる。書、君奭「天壽一一」天は公平無私の人に長壽を授ける。

【平氣】○氣を平かにおちつける「虛心一一」莊子「欲靜則一一、欲神則順心」○國何とも思はぬ、むとんぢゃく。

【平均】○たひらかに、ひとしくす、公平均一。詩、曹風、鳲鳩、傳「下上一一、如一」○ならし、不同なし。

【平居】ふだんに、いつも。水經、注「有神穴、一一無水」＝居常。

【平虛】心がたひらかにして何物もなし。管子「或以一一請論七主之過」＝平澹虛心・虛心平氣。

【平廣】たひらかにしてひろし。＝平衍。

【平闊】たひらかにしてひろし。＝平敞・平廣。

【平寬】たひらかにゆるやか。朱熹詩「莫笑君家五畝園、要須胸次亦一一」

【平家】國○平氏の一門。○平家琵琶の略語。○二階以上の家の對「一一建」＝平房。

【平家琵琶】琵琶に合せて平家物語を謠ふもの。

【平原】たひらかにひろきはら。漢書、鼂錯傳「一一廣野」

【平原君】戰國の趙の武靈王の子、名は勝、平原は其の號、客を好み、其の門下の食客常に數千人に至る、史記に一一列傳あり。

【平原督郵】惡酒の異名。世說、術解「晉桓溫有主簿、善別酒、有酒輒令先嘗、好者、謂青州從事、惡者、謂——、靑州有齊郡、平原有鬲縣、從事謂到臍下、督郵言在膈上住」美酒は臍の下に下り、惡酒は膈の上に滯る、齊は臍なり、鬲と膈と音通ず、靑州從事は美酒の異名。

【平午】まひる。錄異記「或平旦、或一一」＝正午。

【平語】平家物語の略。

【平沙】たひらかなるすなはら。何遜詩「遠岸一一合、連山遠霧浮」

【平日】つねのひ。後漢書、鄧皇后紀「一一尙無惡言」＝平生。

【平濕】たひらかにしてうるほふ。周禮、疏「高平曰原、一一曰隰」

【平身】國からだを低く垂れて恐

れ入る「一一低頭」

【平信】無事なることをしらせるてがみ、平安の通信。

【平常】つねづね。後漢書、光武紀「飮食言笑如一一」＝平日・平生。

【平敞】平かにしてひろし、敞は寬。後漢書、陳紀傳「三輔一一、四面險固」＝平闊。

【平章】○庶民をひとしくあきらかにをさめる。書、堯典「一一百姓、百姓昭明」○公平に品評する。陸游詩「一一春韭秋菘味」○夫婦を媒合する。太平廣記「吾外甥女、有姓鄭者、甚有容質、當爲見一一」

【平出】文章中に敬ふべき人の名などを書く時、行を改めて前の行と同じ高さの所より書き出す書式。

【平準】○物價の均一公平を保つ法、漢の武帝にはじまる。準は水もり、卽ち水平。史記に一一書あり。○たひらか、平均。＝水準。

【平水】平日に於ける河海の水かさ。增水・減水の對。

【平生】○ひごろ、かって、むかし。論、憲問「久要不忘一一之言」＝宿昔。○ふだん、つねづね。宋史、司馬光傳「自言吾無過人者、但一一所爲、未嘗有不可對人言者耳」＝平日。

【平政】政を公平にする。韓詩外傳「正法以齊官、一一以齊下」

【平整】たひらかにととのふ。佛國記「師子國屋宇嚴麗、巷陌一一」

【平靜】たひらかにしづか。後漢書「宜須一一更議其事」＝寧靜。

【平生歡】平生のよしみ。史、張耳・陳餘傳「勞苦如——」

【平昔】ふだん、つね。杜甫詩「書此諧一一、回首猶暮霞」＝平生。

【平泉】莊の名、河南洛陽縣の南に在り、周回四十支那里、唐の李德裕の別墅。劇談錄「一一莊、卉木臺榭、若造仙府」

【平素】○つね、ふだん。＝平生。○過去。又、往事。陶潛詩「促席延故老、揮觴道一一」

【平旦】よあけ。孟、告子「一一之氣、其好惡與人相近也者、幾希」(平旦之氣とは夜のひきあけ頃の未だ物と接せざる時の清明の氣分)＝黎明・平明。

【平坦】たひらか、地面に高低無し。

【平淡】次條に同じ。阮籍、樂論「道德一一、故五聲無味」

【平澹】おだやかにしてあはし。晉書、郗鑒傳「遺韻一一、體識沖粹」

【平地】○平かなる地面。左、隱九「一一尺、爲大雪」○地を平かにならす。荀、勸學「一一若一、水就濕也」

【平地起波瀾】おだやかなる所に强ひてなみかぜを起させる。次條を見よ。

【平地風波】事を好みて、徒に紛爭を生ぜしむる義。劉禹錫、竹枝詞「長恨人心不如水、等閑平地起波瀾」

【平治】平かにをさめる。孟、離婁「堯舜之道、不以仁政、不能一一天下」

【平晝】まひる。阮籍詩「一一整衣冠、思見客與賓」

【平疇】たひらかなるはたけ。陶潛詩「一一交遠風、良苗亦懷新」

【平澄】たひらかにすむ。符載文「一一無邊、天空境明」

【平定】たひらげさだめる、亂を平げて安んずる。漢書、高帝紀「一一海內、功臣皆受地食邑」

【平糶】價を平かにして米を賣出す。史、貨殖傳「一一齊物、關市不乏、治國之道也」宋史、度宗紀「自是米價高、卽發廩一一、以爲常」

【平殄】たひらげほろぼす。隋書、音樂志「命將出征、一一北荒、滅其國也」

【平頭】ちゃうど。白居易詩「火銷燈盡天明後、便是一一六十人」＝零頭。

【平年】○日數のあたりまへのとし。閏年の對。○米のみいりの通常のとし。豐年・凶年の對。

【平方】○同じ數を掛け合せる。＝自乘。○相乘積、又正方形の面積。

【平房】ひらや(平家)＝平屋。

【平反】訴訟を繰りかへし、しらべて、前の裁判を改めて公平の宣告を爲す。漢書、雋不疑傳「多有所一一、母喜笑」

【平板】○たねまきの時、地ならしに用ふる農具。○平かなるいた。○轉じて詩文などの抑揚も變化もなく終始同じやうなる口調なるに喩ふ。＝千篇一律。

【平服】國ふだんぎ、平常の服。禮服・制服などの對。

【平復】病が全くいえる。韓詩外傳「一一如故」＝平癒。

【平文】散文をいふ。墨客揮犀「往歲士人多尙對偶爲文、穆修・張景輩、始爲一一、當時謂之古文」

【平分】兩方を公平にわける、眞半分にする。楚辭、九辯「皇天一一四時兮、竊獨悲此凜秋」

【平平】○つねなみ、平凡なる貌。平淡にして他の奇なし。後漢書、班超傳「今所言一一耳」○均しく治まる貌。辨治する義。書、洪範「王道一一」

【平平坦坦】平坦を重ねたる語、甚だ平かなる貌。又、何等の變化も無きさま。

【平平凡凡】甚だつまらぬさま、

平凡を重ねたる語。

【平勃】ヘイボツ　漢の高祖の功臣、陳平と周勃と。漢書、刑法志「以孝文之仁、一ノ之知、猶有過刑譏焉、加ノ此世也」

【平凡】ヘイボン　つねなみ。尖蓋、蓋居感興詩「思致一一、筆力萎弱」＝平平凡凡。

【平民】ヘイミン　○おしなべての民、庶人、平は普、農民をいふ。書、呂刑「蚩尤惟始作ノ亂、延及于一一」○國庶人、籍上の階級の稱、皇族・華族・士族を除きたる以外の人。

【平民主義】ヘイミンシギ　眞殿上下の階級に關せずして高等で がる主義。

【平脈】ヘイミヤク　つねの健康の人の脈搏、一分間に凡七十四五らつの。史、倉公傳、法「其脈沈而滑、名ニ一一一也」

【平明】ヘイメイ　よあけがた。史、酒筵世家「五日一一臭往」＝平旦。

【平面】ヘイメン　平かなるおもて。

【平野】ヘイヤ　たひらかなる野はら。杜甫詩「星垂ニ一一闊、月湧大江流」

【平愈】ヘイユ　病がいえること、病氣がなはる。本復する、愈は癒。＝平復。

【平癒】ヘイユ　前條に同じ。

【平地】ヘイチ　○高低なき平かなる處。諸語「一一引ニ走流」＝平地。○齊の邑の名。孟子「五子之ニ一一」

【平良】ヘイリヤウ　○公平にして善良。書、經、序「惟ニ一可ニ以斷ニ獄」○陳平と張良と、共に漢の高祖の功臣にて智

のすぐれたる人。隋煬帝詩「英名歌ニ一面雲、智筆滅ニ一一」

【平和】ヘイワ　書、天文志「七曜由ニ手天衝、則天下一一」＝平靡。

【平和條約】ヘイワデウヤク　交戰國が互に平和に復することを目的として結びしやくそく。

【不平】フヘイ　○ひとしからず、公平ならず。詩、小雅「昊天一一」○心が平かならず、心が不滿である。

【平打】ヘイダ　國ひも或は金圓をひらたくうつ「一一の組」

【平巻】ヘイケン　國巻をひくくさげて仕立てたる巻。まちだか巻の對。

【平目】ヘイモク　國海魚の一、扁平にして右側白く左側灰黑色、眼は左側につく。比目魚・鮃ともいふ。

【平梅】ヘイバイ　國匠のあさきわん。略して平又は平ともいふ。

【年】ネン　囲

○とし（歲）地球が太陽を一週するに三百六十五日閏の稱。夏に歲といひ、殷に祀といひ、周に年といふ。一はもと、禾の熟する義、每歲一熟、故に歲の義となす。○よはひ（齡）○みのる（熟）「有一」「豐一」五穀がのるる皆

【年魚】ネンギヨ　國雫魚の異名。

【年貢】ネング　國○每年のみつぎ物。租稅。○小作人が地主に納めるる米錢。

【年華】ネンクワ　としつき。華は光、光陰。度「一一」＝年光。

【年光】ネンクワン　「一一邊盡、鬢ノ白崩ノ心、抜ノ力含ノ愁、語不ニ申具ニ」

【年賀】ネンガ　二國以上の出來事を年を追ひ對照せし年表。和漢一一

【年限】ネンゲン　定めたる年のかぎり。唐書、薛登傳「請覓ニ一一以容ニ簡

【年功】ネンコウ　年來のほねを「一一」に加へ給するもの。

【年貢】ネンコウ　こくもつ、五穀。「一年に一度納する穀、倉庫、「一一熟」

【年穀】ネンコク　夾穀に同じ。穀は穀の實、禮記、王傳「兆高不食有ニ一一」

【年歲】ネンサイ　「年五穀不ノ登、一一未ノ復」＝年紀。年歲載。

【年始】ネンシ　としのはじめ。＝年首・年頭・年初・年朔・歲首。

【年紀】ネンキ　とし。紀も年。周書、字文護傳「吾今ニ逮ニ歲、多歷ニ一一」＝年齡・年歲。

【年齡】ネンレイ　書、顧帝紀「不ノ殉ニ一一」＝年齡。

【年首】ネンシユ　としのはじめ。史、封禪書

よく出來る。左、宣十六「大有ニ一」○同一は同時に進士に及第せし者が互に呼ぶ稱。又其の家人の交際際を一誼とい人人ふ。

【年賀】ネンガ　○としのはじめのよろこび、新年の祝賀。＝新歲。○老人の長壽を祝ふ。

【年號】ネンガウ　年に名づける稱號。漢の武帝、建元と號せしを始とす。我國には、孝德天皇の大化を始とす。書、舜典、諸侯「肆ニ覲以前則書ニ晉氏朱書」

【年額】ネンガク　一年間に於ける總ての計算高。宋史、食貨志「今只歲額穀帛、實石匹兩ニ定ニ一一」

【年鑑】ネンカン　一年中の重要なる事件を集め記せしもの。「宋史、藝文志」

【年忌】ネンキ　○忌みきらふ年齡。「漢書、郊祀志」「凡七歲・十九歲・六十一歲・七十二歲・八十一歲・九十六歲・二十五歲・四十五歲」○國年の忌日の略、人の死後、其の月日に相當する年年の月日。＝年回。

【年季】ネンキ　國雇人の奉公する約束の年限。

【年紀】ネンキ　○よはひ。後漢書、光武紀「不ノ計ニ一一、奉ノ勞ノ、不ノ論ニ一一」○年數の義。晉書、儀人傳「但計ニ秋收之時、以爲ニ一一」

【年金】ネンキン　功によりて終身又は一定の年限間年年下賜せられる金。

【年俸】ネンポウ　一箇年に定めたる給料。月俸の對。

【年豐】ネンポウ　豐年に同じ。左、桓六「奉ノ盛以告曰、潔粢豐盛、謂ニ主三時不ノ害、而民和ニ一一也」＝年登。

【年末】ネンマツ　年のをはり。十二月二十日過の稱。＝歲暮・年杪・歲末。

【年來】ネンライ　としごろ。「數年ニ一一、語林「我一一忍ノ饑讀ノ經」

【年輪】ネンリン　雙子葉植物、及裸子植物の幹の横斷面に、每年一つづつ增してあらはれる輪の形せるもくあ。

【年力】ネンリキ　人の年と精力と。范雎詩「周ノ道雖ニ已積、一一之頹後」

【年例】ネンレイ　每年のきまりの孟浩然詩「國中有ニ老姥、一一犯ノ霜開」

【年齡】ネンレイ　よはひ。「禮、文王世子」「一一俄頃、風電相摧」＝年齡。

【年賀】ネンガ　國武家にて新年の儀式迫の豆打などを行はする役。

【年子】ネンシ　國年每につづきて生れる子の略。

【年寄】ネンヨリ　國○老人。○相撲の頭問・監督などを務める者。○若一一は武家にて老中の次に位する役人。

【并】ヘイ　囲

井（干部五畫）の俗字。

【幸】カウ　囲

○さいはひ、しあはせよし、さち（福祿）「一福」「天一」○ほこれ、さいはひ（僥倖）「小人行ノ險以徼一」○さきはふ。○さいはひす、幸福を與へる。漢書、高帝紀「願大王以一天下」○かはゆがる（寵愛）又寵愛を受くる者「侯一」「嬖一」○よし（好）○ここびねがふ（願願）「希一」○みゆき、天子のいでまし。其の地方の民衆にさいはひがあら義「行一」「臨一」「巡一」

同訓異義　幸・福・祐・祿・倖等の別は福（示部九畫）の條を見よ。

【幸運】コウウン　よきしあはせ。幸福なる運命。＝好運。

【幸姦】コウカン　お氣に入りのをんな。史、孟嘗君傳「使ノ人抵ニ昭王一一、求ノ解」＝寵妾。

【幸慶】コウケイ　しあはせ・よろこび。

【幸臣】コウシン　お氣にいりのけらい。「嬖臣」＝寵臣。

【幸甚】コウジン　○しあはせ多し。史、淮陰侯傳「蒯何曰、「一一」○有ノ權ノ、手弧ノ柳中委ニ書「不ノ悟ニ毋聽ノ示一一不宜」

【幸倡】コウシヤウ　君の寵を受くるわざを業、注「一一、倡優之見幸者也」＝幸娼。

【幸生】カウセイ 〇幸をもとめて苟も生きながらへる。國語「媮居——」〇しあはせに生れ出る。韓愈文「——二天下無事時一、承二先人之遺業一」
【幸便】カウビン 國よきついで、よきたより。
【幸福】カウフク しあはせ。
【幸免】カウメン まぐれざいはひにのがれる。論、雍也「子曰、人之生也直、罔レ之生也、幸而免」

【幷】ヘイ 〔庚〕 并は俗字倂に通ず

〇あはす(合)「合—」かぬ(兼)「兼—」おなじ(同)〇古の十二州の一、舜、冀州を分ちて幽州・—州と爲す、今の直隸省の眞定・保定、山西の太原・大同等の地方。
【幷有】ヘイイウ あはせたもつ。史記「——天下一」
【幷兼】ヘイケン あはせて一つにす。史記「秦—二諸侯一」＝兼幷。
【幷州之情】ヘイシウノジヤウ 唐の賈島が久しく住せし幷州を去りて後、幷州を望みて第二の故鄕の感をなしたる故事、其の詩に曰く「客舍幷州已十霜、歸心日夜憶二咸陽一、無レ端更渡二桑乾水一、卻望二幷州一是故鄕」
【幷州剪】ヘイシウセン 幷州より產する剪刀は極めて銳利なり、故に事の爽利なる者に喩ふ。杜甫詩「焉得幷州快剪刀」＝幷刀。
【幷刀】ヘイタウ 幷州剪を見よ。
【幷呑】ヘイドン あはせのむ。賈誼、過秦論「——八荒一」＝兼幷。

十畫

【幹】㊀カン ㊁カン 〔翰〕〔寒〕

㊀みき、草木の莖「本—」「根—」〇からだ「軀—」〇もと(本體・主要)易、乾卦「貞者事之—也」〇任に堪へて事をよくする(能レ事)易、蠱卦、注「—二父之事一」其の任に堪ふるはたらき(伎倆)「才—」「器—」「吏—」「武—」〇せぼね(脊骨)わきばら(脅)〇えと(干支)〇しろ、器具の用材。〇つよし(强)㊁ゐげた、井上の木欄。莊、秋水「吾跳二梁乎井—之上一」＝榦。〇管と通ず。後漢書、竇憲傳「內—二機密一」
【幹莖】カンケイ 木のみきと、草のくきと。
【幹蠱】カンコ 幹は善、蠱は事、事を善くする、子が父の失敗せし事を取りかへす。易、蠱卦「初六幹二父之蠱一、有レ子考无レ咎」考は父。
【幹才】カンサイ はたらき。伎倆。＝才幹。
【幹止】カンシ 幹は事、止は居、事とする所に安んじ、居る所に安んずる義。書、多士「爾乃尙寧二——一」
【幹枝】カンシ えと。十幹と十二枝と。＝干支。
【幹枝術】カンシジユツ 人の生れし年の干支によりて吉凶禍福をうらなふ術。
【幹事】カンジ 〇幹は善、事を善くする。易、乾卦、文言「貞固足二以—一レ事」〇國主として事務を執る人の職名。
【幹線】カンセン 主要の線路。支線の對。＝本線・幹路。
【幹部】カンブ 事務をとりあつかふ本部。又、其の事務員。
【幹練】カンレン 物事に熟練する。蔡邕文「——機事一」

幺部

【幺】エウ 〔蕭〕 么は俗字

〇ちひさし(小)「微—」〇いとけなし(幼)をさなし(稚)〇俗に一を呼びて—と爲す、一は數の初、故に小の義を取りて名づく。〇六—は琵琶の曲名。
【幺弱】エウジヤク かよわし。柳宗元、童區寄傳「縛二取——者一」
【幺小】エウセウ ちひさし。
【幺微】エウビ ちひさし。＝微幺・幺麼。
【幺麼】エウマ 〇ちひさし、麼は細。隋游詩「鯤鵬尙——」＝幺微。〇つまらぬもの。班彪、王命論「又況——、尙不レ及二數子一」

一畫

【幻】ゲン 〔諫〕

〇まぼろし。金剛經「一切有爲法、如二夢—泡影一」〇まどはす、くらます(詐惑)「妖—」〇かはる(化)「變—」〇てづま(妖術・魔法)刀を呑み、火を吐く如き奇術の類。或は眩に作る。
【幻影】ゲンエイ 〇まぼろしと、かげと。〇はかなき物のたとへ「夢幻泡影」〇心理學にて、感覺のあやまりより生ずる現象、幽靈・ばけものの類。
【幻戲】ゲンギ てじな。唐書「禁下人爲二——一者上」
【幻境】ゲンキヤウ まぼろしの如き、きやうがい、うき世。
【幻化】ゲンクワ 〇まぼろしの如くに變化する。列子「知二——不一レ異二生死一」〇轉じて人の死をいふ。
【幻想】ゲンサウ とりとめなきおもひ。
【幻人】ゲンジン てじな師。＝奇術師・魔法づかひ。
【幻術】ゲンジユツ てじな、變幻の技術。＝奇術・妖術・魔法。
【幻世】ゲンセイ まぼろしの如くはかなき世の中。白居易詩「——如二泡影一」
【幻塵】ゲンヂン まぼろしと、ちりと、生命のはかなきに喩ふ。圓覺經「幻心滅、故——亦滅」

【幻燈】ゲントウ うつしゑ、かげゑ。
【幻沫】ゲンマツ まぼろしと、うたかたと。夢幻と泡沫と。葛長庚詩「聚散如二浮萍一、死生猶二——一」
【幻惑】ゲンワク まどふ。人をまどはす。＝眩惑。

二畫

【幼】㊀イウ・ユウ ㊁エウ 〔宥〕〔嘯〕 通音エウ

㊀いとけなし、をさなし、わかし(稚・穉)「童—」「—稚」「蒙—」「孩—」曲禮「人生十年曰レ幼學」〇こども(小兒)〇幼者をいつくしむ(慈愛)孟、梁惠王「—二吾—一」㊁くはしくこまか(精微)「—眇」＝杳。

解字 幼は少なり、力に从ひ幺に从ふ、幺は少なり、俗に刀に从ひ幼に作るは非。

【慈レ幼卹レ孤】 幼兒をめぐみ、又、父なき孤兒をあはれむ。管子「九惠之敎、一曰老レ老、二曰慈レ幼、三曰、卹レ孤」
【幼艾】エウガイ 容色のうつくしき少年。戰國策「王不二以予一レ工、乃與二——一」
【幼孩】エウガイ みどりご。＝嬰孩。
【幼學】エウガク をさなき時の學問。曲禮「人生十年曰レ幼、學」
【幼愚】エウグ をさなくしておろか〔汲冢周書〕＝幼昧。
【幼君】エウクン をさなき主君。
【幼字】エウジ 幼名に同じ。
【幼兒】エウジ をさなご。＝幼童。
【幼志】エウシ をさなごころ。儀禮「始加二元服一、棄二爾——一」
【幼齒】エウシ こども、齒は齡。竇泉、述書賦「南平休元、筆力自全、——結構、老成天然」
【幼弱】エウジヤク いとけなし。又、其の者。韓愈文「執レ兵之卒、四向侵掠、農夫織婦、攜二持——一、餉二于其後一」
【幼主】エウシユ をさなき主人、をさなき君主。＝幼君。
【幼孺】エウジユ いとけなきこども、孺は童子。蕭穎士賦「有二啼呼之——一」＝幼童・幼蒙。
【幼少】エウセウ をさなし。禮、月令「養二——一存二諸孤一」＝幼弱。
【幼懦】エウダ をさなくしてよわし。五代史、楊隆演世家「隆演——、不レ能二自持一」
【幼稚】エウチ をさなし、いとけなし。漢書、王莽傳「君年——」＝幼穉。
【幼穉】エウチ をさなし、わかし。穉は稚。＝幼沖。
【幼沖】エウチユウ をさなし。沖も幼。書、大誥「——人」＝幼稚・幼少。
【幼蟲】エウチユウ 昆蟲等が卵よりかへりしままの形せる間の稱。成蟲の對。
【幼帝】エウテイ をさなき天子。
【幼童】エウドウ こども。蔡邕文「叔父親レ之、猶若二——一」＝童幼。
【幼年】エウネン としわかし。又、其の者。こども「——學校」漢書、匡衡傳「朕以二——一」
【幼敏】エウビン をさなくしてさとし。元史、李好文傳「如二漢孝昭後漢明帝——之類一」＝夙慧。
【幼眇】エウベウ 〇くはしくこまやか、精微。漢書、元帝紀贊「窮二極——一」＝微妙・要眇。〇おくゆかしくたへなる貌。
【幼昧】エウマイ をさなくして才智くらし。阮籍文「季陰——」＝幼蒙。
【幼名】エウメイ をさな、小兒の時の名。＝幼字。
【幼妙】エウメウ すぐれておくゆかし。司馬相如、長門賦「聲——而復揚」
【幼蒙】エウモウ をさなくして事理に昧し、こども。陸機文「誕自二——一、逮レ事二武皇一」＝童蒙。
【幼齡】エウレイ をさなきとし。孟郊詩「——思二奮飛一、弱冠遊二靈臺一」＝幼年・幼齒。

【𢆰】 幼(前條)に同じ。

六畫

【幽】イウ 〔尤〕

〇かくる(隱)ひそむ(潛)禮、儒行「—居而不レ淫」〇くらし(闇)荀、解蔽「上—而下險」明かならず。又、隱れて人に知れざる所。〇ふかくとほし(深遠)〇かすか(微)ほのか、おくぶかし。〇しづか、陰氣、くろし(黑・黝)〇とらふ、とらはる(囚)一室にとぢこめられる。〇あの世(冥途)〇風景の淸勝なる義。杜甫詩「長夏江村事事—」〇古、十二州の一、舜、冀州の東北の地を分ちて—州と爲す、其の北方—昧の地に在るを以て—と名づく、今の直隸省の順天・永平及び奉天・錦州の西北一帶の地。
【幽意】イウイ しづかなるおもひ。江淹賦「必居レ閑而就レ寂、以二——一之深傷」＝幽思・幽懷。
【幽蔚】イウヰ おくふかくしげる。郭璞賦「林薄叢蘢、——隱藹」＝幽茂。
【幽幽】イウイウ 〇深遠なる貌。詩、小雅「秩秩斯干、——南山」〇くらき貌。韓愈詩「蟲鳴室——」
【幽悠】イウイウ かすかにとほし。阮籍、大人先生傳「左蕩莽而無レ涯、右——而無レ方」
【幽憂之病】イウイウノヤマヒ ふさぎこむ病氣、鬱憂病。莊、讓王「我適有二——一、方且治レ之」

【幽隱】イウイン ○世を避けて深くかくれる。禮記「君子隱而顯」疏「君子身雖二——一而道德潛通、聲名顯著、故云二隱而顯一也」○暗くかくれて顯はれず。漢書、朱博傳「所下以廣二聰明一燭中——上也」

【幽鬱】イウウツ ○草木がこんもりと茂る。○氣のふさぐ貌。柳宗元文「長吟哀歌、舒二泄——一」＝鬱結。

【幽窅】イウエウ しづかにしておくふかき貌。鄜經詩「水花濟二晚色一、——足二眞趣一」

【幽咽】イウエツ 水の聲がかすかにむせぶ、琵琶の聲の形容。白居易、琵琶行「——泉流水下レ灘」

【幽冤】イウエン かくれたる無實のつみ。崔顥詩「天道何期乎、——遂見レ明」

【幽娟】イウエン しづかにしてうるはし。杜顗、集賢院山池賦「見二藤篠之——一、弄二石泉之明媚一」

【闡レ幽】センイウ 闡は開、かくれて明かならざる者を開發して、明かならしむ。易、繫辭「夫易彰レ往而察レ來、而微顯——」深。

【幽遠】イウエン おくぶかくとほし。漢書、桓榮傳「五經廣大、聖言——」＝幽深。

【幽佳】イウカ しづかにしてよし。吳鎮詩「景——兮足二靜賞一」＝幽勝。

【幽遐】イウカ かすかにとほし。晉書、桓溫傳「九域宅レ心、——企レ踵」

【幽香】イウカウ おくゆかしきにほひ。溫庭筠詩「綠渚——生二白蘋一、參差小浪吹二魚鱗一」＝幽馥。

【幽客】イウカク ○しづかに暮し居る人。謝朓詩「——滯二江皐一」＝幽人。○蘭の異名。花譜「蘭曰二——一」○山礬の異名〔三柳軒雜識〕

【幽閑】イウカン 次條に同じ。詩、周南、傳「——貞專之善女」

【幽閒】イウカン しづかにして、おくゆかしくしとやか。曹昭、女誡「——貞靜、守レ節整齊」

【幽澗】イウカン おくふかき谷川。晉書、曹毗傳「蘭生二——一玉輝千仞」＝幽谷。

【幽巖】イウガン おくぶかくして、しづかなるいはほ。遊二天台山一賦「凝二思——一、朗二詠長川一」

【幽禽】イウキン しづかなる所に棲む鳥。陸游詩「——窺レ戶語、落日傍レ窗妍」＝幽鳥。

【幽琴】イウキン しづかなることのね。江孝嗣詩「——一罷レ調、淸醑復誰同」＝幽瑟。

【幽襟】イウキン しづかなる思。唐明皇、送二賀知章歸二四明一詩「寰中得二祕要一、方外散二——一」

【幽居】イウキヨ ○しづかにかくれ居る。禮、儒行「——而不レ淫」○しづかなるすまひ。張籍詩「爐峯寺後著二——一」＝幽棲。

【幽圄】イウギヨ くらきひとや。王庭筠詩「況復——中、萬古結二愁霧一」＝幽囹。

【幽興】イウキヨウ しづかにして面白きおもむき。杜甫詩「平生爲二——一、未レ惜二馬蹄遙一」

【幽窟】イウクツ おくふかきいはや。柳宗元詩「高巖瞰二淸江一、——潛二神蛟一」

【幽花】イウクワ しづかにさびしき花。杜甫詩「——敧滿レ樹、小水細通レ池」

【幽晦】イウクワイ くらし。韓愈詩「白日變二——一」＝幽昧。

【幽懷】イウクワイ 心の底にいだくしづかなおもひ。韓愈詩「——不レ可レ寫」＝幽襟。

【幽光】イウクワウ おくふかきひかり。人に知られざる德の光。韓愈、答二崔立之一書「發二潛德之——一」

【幽篁】イウクワウ しづかなる竹やぶ。王維詩「獨坐——裏、彈琴復長嘯」

【幽迥】イウケイ おくふかく、はるかなり。孫綽、遊二天台山一賦序「所レ立冥奧、其路——」＝幽遠。

【幽蹊】イウケイ おくふかきこみち。謝朓詩「兼得レ尋二——一」＝幽徑。

【幽穴】イウケツ 奧深くしづかなるあな。摯虞賦「探二龜蛇於——一兮」

【幽玄】イウゲン 道理がおくふかく知り難し。

【幽嚴】イウゲン 目には見えざれども何となくおくふかくして神神し。顏延之文「皐塗昭烈、神路——」＝邃嚴。

【幽顯】イウケン かくれると、あらはるると。莊子「——無レ愧二乎心一、則獨行而不レ懼」

【幽戶】イウコ おくふかき戶。朱熹詩「靑山遶二蓬廬一、白雲障二——一」＝幽扉。

【幽谷】イウコク おくふかきたに。詩、小雅、伐木「出レ自二——一、遷二于喬木一」

【幽昏】イウコン かすかにしてくらし。楚辭「方二世俗之——一兮、眩二白黑之美惡一」＝幽闇・幽昧。

【幽恨】イウコン 心の底にひめたるうらみ、人の知らぬうらみ。元稹、楚歌「各自埋二——一、江流終宛然」＝幽愁・幽懣。

【幽魂】イウコン ○しづかなる心。○死者のたましひ。＝幽靈。

【幽齋】イウサイ しづかなるへや。岑參、對レ雨詩「隔レ簾濕二衣巾一、當レ暑涼二——一」

【幽草】イウサウ しづかにさびしき草。李白詩「石蘚刷二——一」

【幽藏】イウザウ 深くかくれる。白虎通「五行北方水、萬物所二——一也」摯虞、孔子贊「河圖沈翳、鳳鳥——」

【幽朔】イウサク 北方のえびすの地。隋煬帝文「省レ俗觀レ風、爰屆二——一」

【幽殺】イウサツ おしこめて殺す。後漢書、宦者傳「——二太后一」

【幽贊】イウサン 人の知れざる所にてひそかに助ける。易、說卦傳「昔者聖人之作レ易也、——二於神明一而生レ蓍」

【幽思】シイウ 心の底のかなしみ。鮑照詩「歎息空房婦、——坐自傷」

【幽囚】イウシウ とらはれ。史、管晏傳「吾——受レ辱」

【幽愁】イウシウ 人に知られぬうれひ。白居易詩「別有二——暗恨生一」

【幽室】イウシツ 奧ふかくしてうすぐらきへや。後漢書、張湛傳「居二處——一、心自修整」

【幽人】イウジン 世を避けてかくれ居る人。易、履卦「履レ道坦坦、——貞吉」

【幽眞】イウシン しづかにして自然のまま。仙靈をいふ。王安石詩「南堂棲二——一、晨起瞻二像圖一」

【幽深】イウシン ○しづかにしておくぶかし。水經、注「空谷——」

【幽櫬】イウシン ひつぎ、棺。潘岳、祭二庾新婦一文「潛形——、寧神舊宇」

【幽情】イウジヤウ しづかなる心情。王羲之、蘭亭序「一觴一詠、亦足二以暢二敍——一」

【幽賞】イウシヤウ しづかにほめ味ふ。李白、春夜宴二從李園一序「——未レ已、高談轉淸」

【幽趣】イウシユ しづかにおくふかきおもむき。梅堯臣詩「種レ竹——深」

【幽樹】イウジユ おくふかくしげれる樹。錢起詩「暮鳥棲二——一、孤雲出二舊丘一」＝幽木。

【幽峻】イウシユン おくふかくしてけはし。南史、孔淳之傳「性好二山水一、每レ有レ所レ遊、必窮二其——一」

【幽處】イウシヨ しづかなる處に身を置く。說苑「吾嘗——而深思、不レ若二學之速一、吾嘗跂而望、不レ若二登レ高之博見一」

【幽勝】イウシヨウ しづかにしてすぐれたる景。唐書、裴度傳「沼石林叢、岑繚——」

【幽翠】イウスヰ おくふかくして靑し。王昌齡詩「林色與レ溪古、深篁引二——一」＝幽碧。

【幽邃】イウスヰ しづかにおくふかし。王延壽、魯靈光殿賦「洞房叫窱而——」＝幽深・幽遠。

【幽砌】イウセイ しづかなる庭のいしだたみ。李商隱詩「——欲レ乾殘菊露」

【幽栖】イウセイ 次條に同じ。

【幽棲】イウセイ しづかなるすまゐ。杜甫詩「——地僻經過少」

【幽寂】イウセキ さびしくしづか。盧象詩「雲氣轉——、溪流無二是非一」

【幽絕】イウゼツ しづかにかけ離れたる場所。李羣玉詩「採レ藥歷二——一」

【幽然】イウゼン しづかにおくふかき貌。晉書、裴楷傳「山濤若二登レ山臨一レ下、——深遠」

【幽潛】イウセン ○水の伏し流るる所。韓愈詩「虎豹僵二穴中一、蛟螭死二——一」○しづかにひそみかくれる。九懷「鯨鱏兮——」

【幽討】イウタウ しづかにたづねる、名勝の山水などを尋ね歩く。杜甫詩「脫レ身事二——一」＝幽探・幽尋。

【幽堂】イウダウ ○しづかなるへや。張協、七命「——晝密」○はか、墳墓。

【幽探】イウタン おくふかき景をさぐる。張籍詩「——道侶榮」＝幽討。

【幽潭】イウタン しづかなるふち。王勃賦「——採レ蓮」潭は正音シン

【幽天】イウテン 西北の天。淮南子「西北方曰二——一」

【幽都】イウト ○堯の時の北方の都。書、堯典「宅二朔方一、曰二——一」○地下の稱。楚辭「君無レ下二此——一」

【幽洞】イウドウ しづかにおくふかきほらあな。陳子昂詩「石林何冥密、——無レ留レ行」

【幽念】イウネン しづかなるものおもひ。謝朓、春思詩「——漸鬱陶」＝幽思。

【幽葩】イウハ しづかなる花びら。蘇軾、寒菊詩「輕肌弱骨散二——一、眞是靑君兩髻丫」＝幽花。

【幽芳】イウハウ しづかなるにほひ。張九齡詩「欲レ贈——歇、行悲二舊賞移一」＝幽香。

【幽房】イウバウ しづかにおくぶかきへや。張華詩「淸風動二帷簾一、晨月燭二——一」＝幽室・幽堂。

【幽漠】イウバク かすかにしてしづか。孫綽銘「肅二形枯林一、映二心——一」＝幽寂。

【幽祕】イウヒ おくふかくひめる。崔融文「天道——、生涯糾錯」

【幽憤】イウフン 人知れぬいきどほり。晉書、嵆康傳「性愼二言行一、一旦縲紲、乃作二——詩一」

【幽閉】イウヘイ ○一室にとぢこめる、拘禁する。○古、婦人に適用せし淫刑。

【幽眇】イウベウ 奧深くしてたへなる道。玄妙にして深微なる理。韓愈、進學解「張二皇——一」＝幽妙。

【幽僻】イウヘキ しづかなるかたゐなか。杜甫詩「渚柳元——、村花不二掃除一」＝幽偏・僻幽。

【幽偏】イウヘン しづかなるかたゐなか。宋之問詩「宦遊非二吏隱一、心事好二——一」＝幽僻。

【幽昧】イウマイ くらくして明かならず。隋書、經籍志「其理——」

【幽明】イウメイ ○くらきと、あかるきと。無形と有形と。幽は天地の道、明は萬物の理。易、繫辭「仰以觀二於天文一、俯以察二於地理一、是故知二——之故一」○幽は鬼神、明は人。冥土と現世と。禮、祭義「別二——一以制二上下一」○暗愚にして成績惡しきと賢明にして成績良きと。書、舜典「三考黜二陟——一」

【幽冥】イウメイ かすかにしてくらし。おくぶかくして微妙なり。漢書、劉歆傳「——而莫レ知二其原一」

【幽茂】イウモ 草木が深くしげる。吳都賦「珊瑚——而玲瓏」＝鬱茂・幽蔚。

【幽門】イウモン 胃の腑の下の方のくち、胃より腸に通ずる口。

【幽厄】イウヤク おしこめられてゐるくるしみ、幽閉のわざはひ。

【幽約】イウヤク 世俗を離れたる閑雅なる約束。陳高詩「我性亦愛レ山、方期

結二一一一

【幽蘭】おくぶかき谷に生ずる蘭。離騷「時曖曖其將レ罷兮、結二一一一以延佇一」

【幽爛】しづかに、ものうし。暢當、重答二江州應物一詩「煩君瓊玖贈、一一百無レ成」

【幽林】しげりておくぶがきはやし。王建詩「移レ石入二一一一」

【幽囹】くらきひとや。韓維詩「煩憂怨以去、曠如レ出二一一一」＝幽圄。

【幽厲】周の幽王と厲王と。亡國の君の義に用ふ。孟、告子「一一興、則民好レ暴」

【幽靈】○死者のたましひ。謝惠連、祭二古冢一文「一一髣髴、歆二我犧樽一」○國死者が形をあらはして人に見えるといふ幻影。

九 畫

【幾】㊀キ ㊁キ 微 尾

㊀きざし（徵）「一微」易、繫辭「知レ一其神乎」○ほとんど（殆）ちかし（近）將に及ばんとするの辭。史記「一敗二乃公事一」○あやふし（危・殆）○こひねがふ（尙）＝覬。庶一とも連用す。○みる（察）○とき、時期。詩、小雅「如レ一如レ式」○時をきめる、期する。○かなめ（主要）○附く、纏ふ。㊁いく、いくばく「一何」物の數を料り問ふ語。

同訓異義 ホトンド 幾・殆の別は殆（歹部五畫）の條を見よ。

【幾運】をり、めぐりあはせ、幾は機に通ず、時機をいふ。後漢書、劉玄傳論「亦一一之會也」＝機運。

【見レ幾】事のきざしを見る、幾は機。易、繫辭「君子一レ一而作、不レ俟レ終レ日」

【幾何】○いくばく、いかほど、いくら。＝若干。○幾何學の略。

【幾何學】物の形、大さ、位置等を研究する科學。＝俗形學。

【幾諫】怒にふれざるやうに、すこしづついさめる。論、里仁「子曰、事二父母一一一、見二志不レ從、又敬不レ違、勞而不レ怨」

【幾希】殆どなし、まづなし。孟、離婁「不二相泣一者一一矣」＝無レ幾。

【幾及】ほとんどおひつく。五代史、和凝傳「一騎、追レ環一一」

【幾許】いくばく。古詩「河漢淸且淺、相去復一一」＝幾何・若干。

【幾事不レ密則害レ成】幾徵の事は、愼密にせざれば漏泄して、禍を致し、事の成就を妨ぐる。易、繫辭「子曰、亂之所レ生也、則言語以爲レ階、君不レ密則失レ臣、臣不レ密則失レ身、——、是以君子愼密而不レ出也」

【幾殆】ほとんどあやふし。漢書、樊噲傳「沛公一一」

【幾那】藥の名。規那樹の皮より製するもの、規那とも書く。

【幾敗】ほとんどやぶれる。史記「豎儒一一二乃公事一」

【幾亡】ほとんどほろぶ。左傳「不レ從レ晉、國一一」

【幾望】望に近し、陰暦十四日の月。易、小畜「月一一」

【幾微】かすかなるきざし。けはひ（先兆）易、繫辭「幾者、動之微、吉之先見者也」韓愈、送二殷員外一序「無三一一出二於言面一」

【幾個】いくつ、どれほど。

【幾重】いくへにもかさなる。杜甫詩「烟霞障一一」

【幾般】いくたび、般は數を數へるにいふ語。戎昱詩「愁至關心事一一」

十一畫

【𢆶𢆶】絕（糸部五畫）の古字。

【𢇁】繼（糸部十四畫）の本字。

广部

【广】ゲン 琰

○屋の一邊の斜に下がれる形。○むなぎ（棟頭）○國漢字の構造を示す用語、麻の字の頭の垂れの義。

二 畫

【庀】ヒ 紙

○そなふ（具）左、襄九「官一其司一」○をさむ（治）左、襄二一五「楚子木使一一賦一」○おほふ。＝庇。

三 畫

【庄】ハウ 陽 國音シャウ

○たひらか（平）○國音シャウ 莊（艸部七畫）の字と同義に用ふ。蓋し莊の草體より譌りしもの。

【庄屋】國なぬし、德川時代の村長、むらをさ。＝里正・莊屋・村甲。

四 畫

【庋】キ 紙

○ぜんだな、とだな（食器棚）○おく（置）收藏する。

【庋閣】○とだな、ぜんだな。集韻「一一藏二食物一」○轉じて總べて棚の義に用ふ。

【床】牀（爿部四畫）の俗字。

○ゆか。國○ねや。○疊のしん。○一の間。○一屋は理髮店。

【床擦】國長病人の體のねどこに觸れる局部に出來るかさ。＝蓐瘡。

【床離】國朝起きてねどこを離れ出る。

【序】ジョ 語

○かき（牆）家の東西に在りて内外を界するかき。○まなびや、殷代の學校「庠一」「校一」○ついで孟、滕文公「殷曰一」○ついで（順次）「順一」「次一」孟、滕文公「長幼有一」○ついでる、次第する。詩、大雅「一賓以レ賢」○のぶ（敍）陳述。○はし、いとぐち（端緒）○はしがき、書物の巻頭に置く文體。＝敍。○はしがきを書く、一する。○送別又は壽を祝するに用ふる文體「送一」「壽一」○國其のをり、便宜「歸國の一に立ち寄る」

【序讚】文體の名。冊府元龜「後魏李仲俻、少以二文學一知レ名、二十著二前漢功臣一一一」

【序次】○ついで。次第。國語「陰陽一一、風雨時至」○ついでる、次第する。

【序齒】年齡の長幼を以て席次を定める。中庸「燕毛所二以一レ一也」

【序庠】鄕里にある學校。漢書「一置二孝經師一人一」＝庠序。

【序端】東西の廊下のはし。儀禮、鄕飮酒禮「主人坐、奠二爵于一一一」爵はさかづき。

【序傳】著作者が自ら著作の旨趣を述ぶるをいふ。＝敍傳。

【序跋】書物のはしがきと、おくがきと。＝題跋。

【序文】はしがき。＝敍文・緖言・弁言。

【序幕】國芝居の初のまく。轉じてすべて物事のはじまり。

【序列】順をたててならぶ。史、伯夷傳「孔子一二一古之仁聖賢人一」

【序論】本論の前置として總體につきて論ずる文。＝緖論。

【庇】ヒ 寘

○ひさし（廡）○かばふ、おほふ（蔽）○よる（寄）○おかげ「一蔭」護りおほふ。禮、表記「有二一民之大德一」

【庇蔭】おかげ、かばふ、ひさしや、木かげが雨露をふせぎて物をかばふ如く護り助ける。左、文九「公族公室之枝葉也、若去レ之則本根無レ所二一一一矣」

【庇護】かばふ。たすけまもる。五代史、王建立傳「明宗爲一二一之一以免一」＝庇保。

【庇保】庇護に同じ。

五 畫

【庚】カウ 庚

○かのえ、十干の第七位。＝上章。○西の方位。○よはひ（齡）癸辛雜識「同一者數十」同一は同齡。○かはる、さらに、更（曰部三畫）に通じ用ふ。○つぐなふ（償）檀弓「請一之」○みち（道）○倉一はうぐひす。○長一はよひの明星。＝商庚。

【庚癸】○かのえと、みづのとと。○軍中にて、飮食を求むるに用ふる隱語。左、哀十三「吳申叔儀乞二糧于公孫有山氏一（中略）對曰、粱則無矣、麤則有レ之、若登二首山一以呼曰二一一一乎、則諾」注「庚西方主レ穀、癸北方主レ水」俗に乞貸を呼レ庚呼レ癸といふは此に本づく。

【庚申待】國かのえさるの日に夜を守りて寐ねざる行事、此日三尸蟲が人の油斷をねらひて惡事を天帝に密告すると說き、道家にては三尸蟲の神を祭り、佛家にては帝釋天と靑面金剛とを祭る。＝庚申會。

【底】テイ 薺

○そこ、した、物の下部「水一」「花一」○やまにをる（山居）○器のしり（器臀）「囊一」○くだる（下）○まつ（待）○とどまる（止）とどこほる（滯）○いたる（至）いたす。孟、離婁「瞽瞍一豫」○と、といし。孟、萬章「周道如レ一」＝砥。○したがき（文稿）春明退朝錄「公家文書藁、中書謂二之草、樞密院謂二之一一」○なんぞ（何）疑ふ詞。○助字、こと、又は者の意。小學外篇「天下無二不是一父母一」＝的。

【底蘊】おくそこ。唐書、魏徵傳「展二盡一一一無レ所レ隱」＝蘊奧。

【底下人】俗しもべ、はしたもの、奴婢、底下は卑劣の義。＝小底。

【底極】をはり、きはまり。後漢書「瀇滉瀾流、無レ所二一一一」＝終極。

【底冊】底本に同じ。會典、吏部「査二對一一一明白照レ例」

【底止】とどまる。詩、小雅「靡レ所二一一一」

【底本】したがき、ひかへぼん、草稿［宋敏求、春明退朝錄］＝底冊・稿本。

【底厲】といし、底はきめのこまか

きといし、厲はあらと。轉じて、とぎみがく。漢書、枚乘傳「磨礱――」＝底礪・砥厲。

【底意】國しんそこの考へ。＝心底。

【底意地】國しんそこの根性「――が惡い」

【底事】なぜ、いかなれば。唐人の詩に多く用ふ。＝何事。

【店】テン 韻

○みせ、たな、貨物を陳ね置きて賣る處。宋史、趙普傳「營新―規利」○はたごや（旅舍）杜甫詩「野―引山泉」○國家の義「明き―」「―子」

【店員】みせの使用人、商店の雇人。

【店肆】みせ。隋書、裴矩傳「帝命三市―肆皆設帷帳盛列酒食」

【店主】みせのあるじ、商店の主人。麗情集「――扣門覗之」

【店店】みせなみ。陸游詩「筆歌―賣新醪」

【店頭】みせさき、みせのほとり。

【店鋪】○いへ、へや。舊唐書、食貨志「別有宅舍――等所貯錢」○俗にみせや（商店）の義に用ふ。

【店請】國借家人の保證をする。又、其の人。

【店子】國借家に住む人、借家人。

【店立】國借家より、追ひたてる、借家を立ち退かされる。

【店賃】國家賃＝借家料。

【店仕舞】國みせをやめる、商賣をやめる。＝廢業・閉店。

【店開】國みせびらき、開業する。＝開店。

【庖】ハウ 肴

○くりや（廚）だいどころ、炊事場。○料理、割烹「珍―」又、料理人「良―」

【庖犧氏】太昊――は、太古三皇の世の初に出でし皇帝、犧牲を養ひて庖廚に充つることを敎ふ。＝伏犧氏・炮犧氏。

【庖屋】くりや、料理べや。張耒詩「肥兎與奔鶉日夕懸――」

【庖宰】料理をつかさどる人。韓詩外傳「身執鼎俎爲――」＝膳宰。

【庖人】○周代、膳羞の事を掌る官名。○轉じて料理人の義とす。莊、逍遙遊「許由曰、――雖不治庖、尸祝不越樽俎而代之」

【庖正】食膳の事をつかさどる官。左、哀、元「爲之――以除其害」

【庖廚】くりや、だいどころ。孟、梁惠王「是以君子遠――也」

【庖丁】○古、名高きれうりにん。莊、養生主「――爲文惠君解牛」轉じて廣く料理人。＝庖人。○國料理用の刃物。＝庖刀。

【府】フ 麌

○くら、朝廷の文書、又は財貨を藏するくら「―庫」「祕―」○財幣を掌る官吏「玉―」「泉―」○やくしょ（官廳）百官の居る所「官―」「公―」「政―」○みやこ「都―」○あつまる（聚）人又は物の聚る所。○唐代の制、州の大いなるもの。○人の邸宅の稱「―第」○はらわた「六―」＝腑。○―君は唐の代、太守の稱。○國縣と共に地方自治團體の最上級、郡及市より成り立つ「東京―」

【府尹】府の政を司る長官、府知事。唐書、百官志「――各一人、掌宣德化」

【府學】國昔、太宰府に置かれし學校。

【府君】○漢代、太守の尊稱。後漢書「廣陵太守陳登、患胸中煩懣、華佗脈之曰、――胃中有蟲」○尊者の稱。搜神記「胡母班嘗至泰山側、爲泰山――所召」○亡き父の敬稱。朱子語類「無爵曰――夫人、漢人碑已有、只是尊神之辭、――如官府之君」

【府會】國府の行政事務を議決する機關。

【府庫】貨財器物等を入るるくら。禮、月令「季春之月、開――出幣帛」

【府史】役所の書記。儀禮、士冠禮、注「周禮三百六十官之下、皆有――胥徒」

【府寺】やくしょ。後漢書、劉毅傳「――寬敞」＝官署・府署。

【府人】くらやくにん。

【府生】國古の六衞府の屬官、供奉隨身をつとめ、又衞府の記錄を掌る。

【府署】やくしょ。後漢書、宦者傳序「――第館、棊列於都鄙」

【府帑】政府のかねぐら。後漢書「轉運之費、空竭――」

【府廳】國府の行政事務を執る役所。

【府中】朝廷の政を行ふおもてむきのやくしょのうち。おくむきを宮中といふの對。諸葛亮、前出師表「宮中――、倶爲一體」

【府兵】宮廷を守護する兵隊、近衞兵。後漢書、竇武傳「――漸盛」

【府吏】役所のやくにん。淮南子「――守法、君子制義」

六畫

【庙】

廟（广部十二畫）の俗字。

【庥】キウ 尤

○おほふ（庇）かげ（蔭）○いこふ、木の蔭にやすむ、休に通ず。

【庠】シャウ 陽

○やしなふ（養）老人を養ふ。又其の處、古、長幼の序を敎ふる爲めに學校にて養老の典を行ふ。禮、王制「有虞氏養國老于上―、養庶老于下―」○まなびや、郷校「―序」孟、滕文公「夏曰校、殷曰序、周曰―」

【庠斅】庠序に同じ。梁武帝詔「宜大啓――博延胄子」

【庠序】鄕里の學校。孟、梁惠王「謹――之敎、申之以孝弟之義」

【度】㊀ト・ド 遇 ㊁タク 藥

㊀のり（法制・規則）「制―」「法―」「常―」「矩―」○ものさし、物の長短を計る器「―量衡」○どあひ、ほど「程―」○とき（時・年代）○たび（回數）○天球・地球の周圍を三百六十分せしきざみ。○やゥす、人がら、風采「態―」○はらまへ（器量）「―量」「局―」「器―」「識―」「襟―」漢書、高帝紀「有大―」○のっとる（則）○わたる。漢書、西域傳「谿谷不通、以繩相引而―」＝渡。○國すくふ（救）佛の道に入らしむ「濟―」○僧となる「得―」○初―は人の初めて生れし年時をいふ。○用―は用費。漢書、武帝紀「用―不足」㊁はかる（謀）みつもる「測―」○國字音を借りて希望を表はすに用ふ「被下―」

同訓異義 はかる 度・計・謀・圖・量・稱・測・料等の別は計（言部二畫）の條を見よ。

【度越】人にこえてまさる。漢書、揚雄傳贊「必―諸子矣」

【度航】船にて水を渡る。梁書、王茂傳「衆號二十萬、――請戰」＝渡航。

【度胸】國物事に恐れざる心。

【度曲】○歌曲をつくる。漢書、元帝紀「自―、被歌聲」○歌曲を按じて歌ふ。張衡賦「――未終、雲飛雪起」

【度矩】のり、きそく。魏文帝銘「百寮師師、楷―」

【度外】のけもの、法度の外、除外例「――視」後漢書、隗囂傳「當置此二子於――耳」

【度數】○めもりのかず、溫度・角度などのきざみ目のかず。周禮、天官「日月星辰之――天道備焉」○たびかず。＝回數。○しな、定りたる制度。莊子「禮法――刑名」

【度脫】衆生を濟度して、煩惱の苦を脫せしむ。南史「――衆生」

【度牒】古、人を僧尼にする時、官より渡したる免許證。唐會要「天寶六載、制僧尼道士令祠部給牒度之」

【度量】○ものさしと、ますと。周禮「壹其――」○はらまへ、人の器局。韓愈文「――不敢窺涯涘」

【度量衡】ものさしと、ますと、はかりと〔書、舜典〕

【度揆】○はかる。＝揆度。○のり。蔡襄詩「乾綱不息、章明――」

【度計】はかる。韓非子「人主所與――也」

【度支】會計をつかさどる官。唐書、百官志「――掌天下賦租物產豐約之宜、水陸道途之利、歲計所出、而支調之」

【度支部】○清朝の末、戶部を改め稱す、民國となりて財政部と改む。○國朝鮮總督府に屬する一局部にて、租稅及會計事務を司る。

【度地】土地をはかる。禮、王制「司空執度、―居民」

【度料】はかる。大戴禮「決之以卒而――」

七畫

【庫】コ・ク 遇

○くら（藏）兵車を入れおく所「武―」「兵―」○轉じて廣く樂器・祭器文書等のくら「倉―」「府―」「齋―」「寶―」○天―は星の名。

【庫錢】政府のくらのぜに。晉書、陶侃傳「盜用――父死不奔喪」

【庫緞】品質最良の緞子、杭縣・江寧等に產す、淸朝の時の貢物にして戶部の緞疋庫に入るが故。

【庫平銀】銀塊の一種、淸國政府の標準銀。

【庫吏】くらばんの役人。魏志、鄧哀王沖傳「太祖馬鞍在庫、而爲鼠所齧、――懼必死」

【庫樓】武庫の樓。後漢書、楊由傳「時有大雀夜集――上」

【庫裏】寺の臺所、寺の廚。＝庫裡。

【座】ザ 箇

○せき（席）ゐどころ（席次）すわるところ、ざしき「四―」「滿―」「御―」「高―」「末―」「虛―」○しきもの。○星のやどり「星―」○國芝居小屋「歌舞伎―」○位の義「高御―」

【座右銘】座右におきて身の戒とする格言。李至文「崔子玉爲ニ―――一、白樂天亦爲ニ―――一」
【傾レ座】一座の衆人の心を引きつける。杜甫詩「一見能―レ―」
【座客】同じ席の人、其の席に在る客。
【座興】其の場のなぐさみ。
【座次】すわりばしょの順序、席順。＝席次。
【座敷】國○客をとほすへや。＝客間。○へや。＝室。
【座上】座のうへ、せきじゃう。後漢書、孔融傳「――客恒滿、罇中酒不レ空」
【座主】○唐代に、試驗を主る官吏の稱。因話錄「及第人就ニ中書一見ニ――一」○國比叡山延曆寺の貫主の稱、卽ち天台宗の管長。
【座禪】禪家にて靜坐して悟道を求むる行。
【座禪豆】國黑大豆を砂糖醬油にて煮つめたるもの。
【座談】○すわりばなし、對座してするはなし。○其の場かぎりの談話。
【座長】集會の席などにて、推されて、其の會の長となるもの。
【座中】ざしきのなか、其の席にゐる人人。鄭谷詩「――亦有ニ江南客一」
【座頭】國○芝居などの一組のかしら、一座の長。○盲目の琵琶法師の首席の者の稱。○轉じてめくら。＝盲人。
【座頭鯨】國鯨の一種、眼甚だ細く、殆ど盲の如し、紀伊・土佐・肥前等の海に產す。

【庭】㊀テイ ㊁テイ 青 徑

㊀には、堂の階の前、門内の地。○朝廷、宮中「後―」「宮―」「禁―」○役所「法―」○なほし(直)○いへ、家のなか「家―」「―訓」㊁逕―は隔りて遠き貌。莊、逍遙遊「大有ニ逕―一」
【庭闈】○親の居るへや。束皙、補亡詩「眷ニ戀――一、心不レ遑レ安」
【庭園】には、その。＝園庭。
【分レ庭伉禮】同じ庭の内にて、席を分ち同等の禮を爲す。莊、漁父「萬乘之王、千乘之君、見ニ夫子一未ニ嘗不ニ―――一」
【庭柯】にはにある木のえだ。陶潛、歸去來辭「眄ニ――一以怡レ顏」
【庭階】にはのきざはし。晉書、謝玄傳「譬如ニ芝蘭玉樹一欲レ使ニ其生ニ於――一耳」
【庭訓】家庭のをしへ。孔子の子鯉が趨りて庭を過ぎし時、孔子が呼びとめて詩禮の學ぶべきことを敎へたる故事〔論、季氏〕に本づく。晉書、孫盛傳「雖ニ子孫班白一、而――愈峻」
【庭敎】庭のをしへ。戰國策「先生不レ遠ニ千里一、而―ニ―之一」＝庭訓。
【庭戸】にはのと。杜甫詩「林木在ニ――一、密幹叠ニ蒼翠一」
【庭爭】朝廷の上にて君主と爭ひ諫める。漢書、公孫弘傳「面折――」＝廷爭。
【庭實】には一ぱいに陳列せしみつぎ物。左、莊、二二「――旅百、奉レ之以ニ玉帛一、天地之美具焉」
【庭牆】にはのかき。左傳「申包胥如レ秦乞レ師(中略)立依ニ於――一、而哭、日夜不レ絕レ聲」
【庭樹】庭のうゑ木。宋書、樂志「和鳴棲ニ――一、徘徊雲日間」＝庭木。
【庭前】にはさき、前栽。傅咸、神泉賦「余所レ居――有ニ湧泉一」
【庭除】には、除は門と塀との間。岑參詩「雨氣潤ニ衣鉢一、香煙泛ニ――一」
【庭燎】古、君主のにはにて焚きしかがりび、にはび。夜中參內の諸臣を照らしたるもの。詩、小雅、庭燎「夜未レ央、――之光」

【庬】バウ 江 尨に同じ 龐に通ず

○ゆたか(豐)「豐―」○あつし(厚)「敦―」○大いなり。○まじはる、まじる(雜)書、周官「不レ和政―」
【庬洪】あつくしてゆたか。漢書、司馬相如傳「湛恩――」

八畫

【庵】アン 覃

○いほり、いほ、くさや(小草舍)草ぶきの圓き屋「草―」「茅―」「蓬―」「結レ―」＝菴。○僧尼などの佛に奉ずる舍。

【康】カウ 陽

○やすし、やすんず(安)「安―」「永―」「艾―」「寧―」「太―」○たのし、たのしむ(樂)「歡―」「樂―」○やはらぐ(和)○五方に達する大路、轉じて、往來繁き大路。○大いなり。○むなし(空)

同訓異義 康・安・寧・泰・綏等の別は安(宀部三畫)の條を見よ。

【康乂】やすらかに治まる、乂は治。書經「若レ保ニ赤子一、惟民其――」
【康逵】五達のみちと九達のみちと。周邦彥、汴都賦「舉ニ天下於――一」
【康熙字典】四十二卷、淸の聖祖康熙年間、張玉書等、勅を奉じて撰す、字書中の最も正確なるもの。

【康彊】すこやか、ぢゃうぶ。書經「身其――」＝康强・康健。
【康衢】往來の繁きちまた、四達を衢といひ、五達を康といふ。列、仲尼「堯治ニ天下一、五十年(中略)微服游ニ――一、聞ニ童兒謠一」＝康莊・康逵。
【康健】安康にして壯健なり。金史、張行信傳「父暐以ニ御史大夫一致仕、猶――」＝健康・康彊。
【康瓠】瓦にて造れるつぼ、瓠はつまらぬ品物をいふ。史、賈生傳「寶ニ――一兮」注「――、瓦盆底也」＝甈。
【康濟】民を安んじ助ける。書、蔡仲之命「蕃ニ王室一以和ニ兄弟一、――ニ小民一」
【康莊】往來繁き街路。康は五達、莊は六達の道〔史、孟子荀卿傳〕
【康爵】からのさかづき。一說、大杯。詩、小雅「酌ニ彼――一」
【康勝】すこやか。徐陵文「體中何如、願聞ニ――一」＝康健・康寧。
【康寧】病なくしてすこやか。書、洪範「五福、一曰壽、二曰富、三曰――、四曰攸レ好德、五曰考終レ命」＝寧康。
【康復】病氣がなほる、本復する。＝康愈。
【康平】世治りてやすらか。漢書、宣帝紀「上下和洽、海內――」＝康泰・平康。
【康樂】安んじてたのしむ。漢書、禮樂志「闡諧嫚易之音作、而民――」＝安樂。

【庶】㊀ショ ㊁ショ 御 語

㊀たみくさ(衆民)「黎―」○もろもろ、おほし(衆多)「―物」「衆―」○ぶんけ、支族。○めかけばら、妾腹の子「―子」○ちかし(近)論、先進「回也其―乎」○こひねがふ「―幾」○こゆ(肥)ゆたか(豐)㊁はらふ、毒蟲を驅除す。

同訓異義 庶・庶幾・希・冀・倘・幸 ○庶は冀也と註す、幾と同義なり、庶幾と連用しても、一字づつ別ち用ひても同じ。又、庶乎とも連用す。○庶幾は、こひねがはくはとも、ちかしとも訓む、遠きものは及び難き故、望を絕つも、近きは及ぶべし、されば願辭、又は近辭と註すれども、意は一なり。孟子「王庶幾無ニ疾病一」○希は、まれといふ字なり、故にまれなることの、出來るやうに願ふなり。○冀は欲也、望也と註す、覬と音通ず、伺ひ望む意あり。○倘は庶幾也と註す「黎民倘亦有レ利哉」の如し、倘の字、たゞとぶといふ義あり、たゞとび願ふ意なり。○幸は非レ分而得曰レ幸と註す、幸訓ニ護太子一の如し。

【庶尹】もろもろの官人の長。書經「――允諧」
【庶幾】○こひねがふ。詩經「――夙夜、以永終レ譽」○ちかし。易、繫辭「顏氏之子、其殆――乎」
【庶揆】もろもろのつかさ。江淹文「包ニ括――一、總ニ納儀刑一」＝庶官・庶僚。
【庶吉士】明以後、翰林院の官名、進士の試驗に及第せし文學優等又善書の者を以て之に任ず。
【庶官】もろもろの官吏。書、皐陶謨「無レ曠ニ――一」＝百僚・庶僚。
【庶兄】妾腹のあに。史記「紂之――」
【庶孼】めかけばら、妾腹の子。類書纂要「――子、衆庶竝庶出之子、非ニ嫡長一也」史、商君傳「商君者、衞之――公子也」
【庶乎】ちかし。論、先進「回也其――」＝庶幾。
【庶子】○めかけばらの子、庶出の子。○官名、東宮職。漢に「太子――」あり、魏に「太子中――」あり。
【庶羞】神に供へすすめる諸のうまき物。禮、王制「――不レ踰レ牲」注「祭以レ羊、則不下以ニ牛肉一爲中羞上」
【庶人】もろもろのたみ。＝庶民。
【庶神】もろもろのかみ。國語「以約ニ誓於上下――一」
【庶出】妾腹に生れる。又、其の子。
【庶政】もろもろのまつりごと。易、賁卦、象傳「君子以明ニ――一」
【庶績】もろもろのいさを。衆多の功業。書、舜典「允釐ニ百工一、――咸熙」
【庶族】○平民のやから。北史、魏孝明帝紀「詔ニ――子弟一」○ぶんけ(分家)＝支族。
【庶男】妾腹の男の子。史記「高祖長――」
【庶徵】多くのしるし、多くのきざし。書、洪範「八、――、曰雨、曰暘、曰燠、曰寒、曰風、曰時」
【庶品】いろいろのもの。多くの階級の官人。陸倕文「銓ニ衡――一、歷ニ選賓寮一」
【庶物】いろいろのもの。易林「坤厚地德、――蕃息」＝諸物・萬物。
【庶母】父の妾たる己の生母〔爾雅、釋親〕
【庶民】もろもろのたみ。詩、大雅、靈臺「經始勿レ亟、――子來」＝衆庶・百姓。
【庶務】いろいろのつとめ、各種の事務。南史「雖レ未レ經ニ――一、而雅得ニ人心一」
【庶老】庶士より以下庶民の年とりたるもの。國老の對。禮、王制「養ニ――於下庠一」
【庶類】もろもろのたぐひ、多くの物。魏志「東作方興、――萌動」＝萬物・庶彙。

【庶務】ショム もろもろのたみ。詩「雖曰予一一」＝衆庶・庶民。

【庶僚】ショリョウ もろもろの役人。春官書「滅動・殺俗、僕刑一一」＝庶官。

【庫】ヨ　㊀㊁ ヒ　支麻

㊀ひくきいへ（伏舍）屋根見えず。左、襄三「宮室卑一」㊁ひひくし（下・卑）○みじかし（短）○周禮、地官「其民豐肉而一」○たすく。＝庇。

【庸】ヨウ　㊀

○もちふる（用）「登一」「徵一」○いさを、てがら（功）「功一」「勳一」○つねゝ（常）なみ、おろか（愚）「凡一」○かはらぬ、變動せず。中庸「不易之謂一」○いたはる（勞）○やはらぐ（和）○あに（豈）左、莊十四「一非貳乎」○なに、なんぞ（何）一何・一一乎」○も、って（以）書、說命「王一作書以誥」○こと（事）は名、丁年以上の男子、一年に二十日（閏年は二十二日）の公役に應じ難きときは、一日に絹二尺つつを代納する法「租一調」

【庸調】ヨウチョウ 庸・常・恒・雅・每等の別は常（巾部八畫）の條を見よ。

【庸蠢】ヨウシュン 庸・常・恒・雅・每等の別は何（人部五畫）の條を見よ。

【庸庶】ヨウショ おろか。＝庶愚・昏愚・闇愚。

【庸醫】ヨウイ やぶいし、平凡なる醫師。醫游詩「一一司二性命、俗子鑿二文章」

【庸行】ヨウコウ 平凡。易、文言「庸言之信、一一之德」

【庸器】ヨウキ ○銅で人の功績を銘するに用ふる器。周禮「掌諸侯之一一」○凡庸なる才。＝庸才。

【庸愚】ヨウグ 愚かなる君、凡庸の君主。

【庸君】ヨウクン 愚かなる君、凡庸の君主。

【庸言】ヨウゲン つねのことば、平常の言ふ所。庸行を見よ。

【庸作】ヨウサク 賞錢を受けて働く。漢書、匡衡傳「家貧一一、以供妻用」＝傭作。

【庸人】ヨウジン つねなみの者、尋常の人。＝凡人。

【庸弱】ヨウジャク 劣りてよわし。唐書、韋代一一」

【庸績】ヨウセキ 冠。手本いきもてがら。書、威略「朝、一一書三手主府」＝功績。

【庸淺】ヨウセン おろかにしてあさかなり。梁昭明太子、疑「愚見一一」

【庸租】ヨウソ えだちと、みつぎと、夫役

【庸調】ヨウチョウ 同上。

【庸蠢】ヨウシュン 庸・常・恒・雅・每等の別は常（巾部八畫）の條を見よ。

【庸庶】ヨウショ おろかにして氣が弱し。＝庸怯。

【庸怯】ヨウキョウ つねなみ、おろか。南史、梁邵陵王綸傳「性頗一一」＝庸劣・庸愚。

【庸中佐佐】ヨウチュウササ なみなみの中にて、やや勝れたる者。後漢書、劉盆子傳、光武帝目「卿所謂一一者也」卿は徐宣。

【庸德】ヨウトク 平常の德。中庸「一一之行、庸言之謹」＝庸行。

【庸懇】ヨウコン 平凡なるやから、愚かなるともがら。宋史、劉敞傳「不樂與一一接」

【庸保】ヨウホ やとはれびと、保は保證を立ててやとはれる。史、列子傳「高漸離變二名姓、爲人一一」＝傭保。

【庸庸】ヨウヨウ ○平凡なる錢。左、襄「過二百王之一一」＝平平。○微小なる錢（漢書、梅福傳）

【庸劣】ヨウレツ おろかにしておとる。沈約文「脩弔嘉賦、寡薄一一」

【庸何】ヨウカ 火條に同じ。

【庸詎】ヨウキョ なんぞ、なんすれぞ。詎も何・莊・齊物「一一知吾所謂知之非不知乎」

【庚】ヨウ　㊀ 虫九　重

寅（宀部九畫）に同じ。

【廁】シ　㊀㊁ シ　圓

㊀かはや、べんじょ（圓・溷）「圊一」「溷一」史、項羽紀「沛公起如一」○賤人の幾側。漢書、汲黯傳「上常詬一一之」○きよし（清）○おじる（閒・雜）「雜一」樂毅、上燕惠王書「一之童客」之中」○ういつ（次）○高岸、水を夾む水のほとり（水涯）漢書、劉向傳「北臨一」㊁そば「一足」

【廁見】シケン 雪隱の時、「西廂雜想」＝廁神。

【廁溷】シコン べんじょ。廁田鍾「蠅一一間、絕寂寥」＝廁糞・溷圊。

【廁籍】シセキ かはや、べんじょ。英雄記＝廁糞。

【廁臨】シリン おかは、おきる。史、高石君傳「取二親中藏一一、身自浣滌」＝虎子。

【廁糞】シフン かはや、便所。＝雪隱・廁籍・溷廁・圊廁。

【廂】ショウ　㊀

○ひさし、正殿の東西にある庇「一間一」○わたどの（廊）

【廂軍】ショウグン 宋代、諸州の鎮兵、主の本城に駐屯するを以て廂比と名づく（文獻通考、兵考）＝廂比兵。

【廂兵】ショウヘイ 前條に同じ。

【廂廊】ショウロウ ひさし、わたどの。陶弘景文「一一側室、可二以安身」

【廂軍】ショウグン 國牛車の一、本上皇又親王等の乘用に供するもの。

【庫】コ

廟（广部十二畫）の古字。

【庾】ユ　㊀

○こめぐら（米倉）屋根の無き倉。一說、邑に在るを倉といひ、野に在るを一といふ「倉一」「嗇一」○米をくらに積み貯へる。○ゆ、ゆたか（裕）○米のますの名、支那の十六斗を入る。又、其のますほどの米。論語「雍也」與諸一」

【庾公樓】ユコウロウ 江西省九江縣治に在り、庾亮武昌に鎮たりし時、建つる所、庾亮を見よ。＝庾樓。

【庾積】ユセキ 屋根を設けざる倉に米穀を積み貯へる。周語「野一一」

【庾廩】ユリン こめぐらの金史「平陽歲丹錢、兵、人月散亡、一一無二兩月食」＝困廩・庾。

【庾亮】ユリョウ 字は元規、晉の鄧陵の人、風格峻整、動くに禮節、成帝に重用せられて武昌を鎮せしとき、諸佐吏殷浩の徒、秋夜に乘じて南樓に登る、亮目くも老子この夜に於て忽ち至る、諸人起ちて之を避けんとす、亮曰く、老子この夜に於て興復遠からずと、便ち胡牀に據り、此浩等と談咲竟夕す、其の坦懷類ねの如し（晉書、庾亮傳）

【庾嶺】ユレイ 梅庭芸「東嶺縣即大一、屬二韶州一一名梅嶺、白沙大一一上梅、險峻、通ノ嶺北花間、間見近鏡「一一英ノ嶺仰視青天、如二一線一、然」

十畫

【廈】カ　㊀ 冒

○いへ（屋）一說に大いなる家「廣一」「大一高樓」○ひさし（門之屋）○一門モンは福建省に屬する島の名、清の光緒十三年に夏に伸に通ずるは非ず、開きて商埠と爲す。

【廈】ソウ　㊀ 有元

○かくす、かくる（匿）論、爲政「人爲一哉」○もとむ（求）さがす（尋）

【廈詞】ソウシ 次條に同じ。

【廈鑑】ソウシン 謎。隱語。隱伏諷諫の言。晉語「有二秦客一一於朝」

【廌】チ　㊀ 獬

○○のりの（法）○解一は鹿に似て一角の獸、人君刑罰中るを得ば、朝廷に生ずといふ。漢代法冠の名。又、豸に通ず。＝解豸。

【廊】ラウ　㊀

○ひさし、堂の下の東西に立てたらくや、東西の序。○堂下の周屋、わたどの「廂一」「修一」「長一」「步一」「畫一」

【廊廡】ラウブ わたどの、廊折せる處。杜牧、阿房宮賦「一一縈迴簷牙高啄」

【廊下】ラウカ はそとの、わたどの、迴廊。唐書、嚴綬傳「始說一一食、在二百官上一」

【廊廟】ラウビョウ わたどの、ろうてなど。漢陽國銘貴志「俾平降趨二朔一一之下、威容可觀」

【廊廡】ラウブ おもて御殿の下に回へて設けたるひさし。漢書、竇嬰傳「賜金陳一一下」

【廊廟】ラウビョウ ひさしのあるおもてこんの。政事を執る所をいふ。朝廷の義。史、食貨傳「賢人深謀於一一、論二議朝廷」

【廊廟之器】ラウビョウノキ 朝政を執る宰相たる才能。蜀志、許靖傳「大峽有二一一」＝廊廟材。

【廊廟材】ラウビョウザイ 朝政を執る大臣となるに足る才能。杜甫詩「方今一一、拂、塵忘忘云」＝廊廟才。

【廊廟之忘】ラウビョウノボウ 大臣宰相となりて政を執る忘。文中子「山林有二一一」

【廊廟才】ラウビョウザイ 廊廟材に同じ。唐書、張行成傳「行成體局方正、一一也」

【廟】ビョウ　㊀

○なかには（中庭）○中一は室の中央、一に嚴に作る。

【廉】レン　㊀

○いさぎよし（潔）慾がない「清一」「貞一」「方一」○かど（側隅、稜角）○つゝましやか（儉）○ねさむし（檢數）○明かにしらべる「一察」○とし（利）○かたはら（側邊）○祭少き義より、轉じて直やすし。春秋紀「就一直取二此馬」以代步」○一纖は細かき鏡。國○かど。簡牒。又、簡所「訊問の一」○ひときは、又、格別の義「一一の學者」

【廉叢】レンソウ 明かにとりしらべる。唐書、郎餘令傳「發二新自奏、試一一、果得二玉紆」＝廉察。

【廉儉】レンケン いさぎよき德をそなふ。孟、離婁「可二以取、可二以無一取、取一一」

【廉直】レンチョク やすれ、安直。＝廉直。

【廉格】レンカク 心潔くしてつつしむ。後漢書、公方一一」＝廉謹。

【廉悍】レンカン かどだちてつよし。韓愈、柳子厚墓誌銘「儁傑一一」

【廉愧】廉恥に同じ。

【廉毅】心いさぎよくつよし。柳宗元文「和恆直方、――信讓」

【廉謹】欲すくなくつつしみぶかし。律義なもの。「史、申屠嘉傳」＝廉愼。

【廉隅】物のかど。又、かどだちたる行。禮、儒行「砥礪――」

【廉勁】心清廉にして剛直なり、いさぎよくしてつよし。後漢書、袁敞傳「――不阿權貴」

【廉絜】いさぎよし。人物志「清介――」＝廉潔。廉白。

【廉潔】前條に同じ。南史、郭祖深傳「――者、自進無途、貪苛者、取人多徑」

【廉察】あきらかにしらべる。後漢書、第五種傳「――災害」＝查察。

【廉士】欲少く心清き士、清廉の士。孟、滕文公「陳仲子豈不誠――乎」

【廉而不劌】君子の徳の玉のかどだつも破れざる如く堅固にしてやぶれざるをいふ。老子「是以聖人方而不割、――」

【廉愼】廉謹に同じ。

【廉讓】○欲少なく、能く人にゆづる。潛夫論「世人之論也、靡不貴――而賤財利焉、及其行也、多釋廉而甘利」○廉泉讓水の略語。

【廉稱】清廉なりといふほまれ。宋史、馬亮傳「亮有智略、敏於政事、然其所至無――」

【廉清】いさぎよし。「史、秦始皇紀」＝廉潔・清廉。

【廉纖】○微雨の貌。顧瑛詩「西風陣陣――雨」○細き貌。錢霍、西湖竹枝「北高峯上――月、西子湖頭一寸眉」

【廉泉讓水】地名。南史、胡諧之傳「范柏年、見宋明帝、帝言次及廣州貪泉、因問柏年、卿州復有此水不、對曰、梁州惟有文川武鄉、――、又問卿宅在何處、曰、臣所居廉讓之閒、帝嗟其善答」＝廉讓。

【廉恥】心清くして恥を知る。詩經、序「白華廢則――缺矣」舊唐書、楊綰傳「從政者皆知――」＝廉愧。

【廉直】○いさぎよくただし。漢書、申屠嘉傳「爲人――、門不受私謁」○價やすし。字解參看。＝廉價・廉值。

【廉頗】戰國時代の趙の名將、齊を伐ちて上卿に拜せらる、藺相如と刎頸の交をなす。

【廉訪】官名、元代、肅政――司を置き、各路を巡察せしむ、明改めて提刑按察使司と爲す、故に按察使を稱して――といふ。

【廉白】心いさぎよし。後漢書、桓帝紀「令――守道者得信其操」＝廉清・廉潔。

【廉夫】心のいさぎよき男。唐書、后妃傳「盜泉飛溢、――不飲」＝廉士。

【廉問】とひただす、吟味する。史、秦紀「吾使人――」

【廉平】欲すくなくして公平。史、吳起傳「――盡能得士心」

【廉吏】いさぎよく、欲すくなき役人。漢書「――、民之表也」

【廉利】かどだちてするどし。＝銳利。

十一畫

【廕】イン　オン　〔沁〕　一に蔭に作る

○おほふ、おほひ（庇）○かけ、こかげ（樹蔭）○おかげ。又、父祖の功勞ありしおかげによりて子孫が官位につくをいふ「―補」

【廕敍】父祖の功勞によりて、子孫を官に敍する。元史「選用不限――」＝廕補・蔭補。

【廕生】父祖の功勞によりて出身を得る者。又、國子監生となる者の稱。

【廕除】父祖のおかげにて官位を授けられる。除は任命。＝廕補・廕敍。

【廕調】父祖のおかげにて官に任ぜられる。調は徵。

【廕庇】○おほふ。おほはれる。戰國策「庶隴畝而――桑陰」○かばひ助ける。保護する。又、おかげ。

【廕補】廕敍に同じ、補は補任。

【廏】キウ　〔宥〕　廐は俗字

うまや（馬舍）「外―」

【廏閑】うまや（馬舍）閑はをり。魏書、常季賢傳」＝廏舍。

【廏人】馬を掌る人。韓詩外傳「顏淵退、俄而――以東野畢馬敗聞」

【廏置】うまつなぎば。馬を置きて驛を傳ふる義。漢書、田橫傳「田橫與其客二人乘傳詣洛陽、未至三十里、至尸鄉――」

【廏馬】うまやの馬。漢書、貢禹傳「――食粟將萬匹」

【廏吏】馬匹の飼養を掌る役人。漢書「長安――乘駟馬車、來迎買臣」＝廏人。

【廐】廏（前條）の俗字。

【廑】キン　〔文〕

○小さきいへ（小屋）○わづかに（纔）＝僅。○おとる（劣）○つとむ。＝勤。

【廓】クワク　〔藥〕

○大いなり「宏―」吳志、周瑜傳「性度恢―」○ひらく（開）廣げる、小を張りて大いならしむる。班固、答賓戲「―帝紘」○むなし（空）漢書、東方朔傳「―然獨居」○くるわ、俗に郭に通ず。○國 一區域又は遊里の義。

【廓開】ひろげて大きくする。西京賦「――九市」

【廓廓】空虛なる貌。唐書、李密傳「天下――無事矣」

【廓如】からりと開けて大いなる貌。又、空しき貌。法言「楊墨塞路、孟子闢之――也」＝廓然。

【廓清】世のみだれをさっぱりとはらひきよめる。後漢書、陳蕃傳「――天下」＝肅清。

【廓然】心むなしく、わだかまりなき貌。漢書、東方朔傳「魁然無徒、――獨居」

【廓大】○ひらけて大いなり。柳宗元文「廟舍峻展、階序――」○廣げて大いにする「――圖」

【廓澄】からりと、きよくすむ。張仲素、山呼萬歲賦「文物芬郁、寰瀛――」

【廓土】地をひろめる。又其の地。後漢書、朱浮傳「六國之時其勢各盛、――數千里、勝兵將百萬」

【廓寧】ひろめやすんずる。魏書「革靜荒隅、――宇內」

【廓落】○心ひろく大いなり。落は磊落。晉書、姚長載記「少聰哲、――任率、不修行業」○志を失ふ貌。落は零落。宋玉、九辯「――兮、羇旅、而無友生」

【廓寥】ひろき大空。皇甫湜賦「志在――、跡依泥塗」＝寥廓。

【廖】レウ　〔蕭〕

姓。又、人の名。

【廔】ロウ　〔尤〕

○うしろ、せ（脊）屋脊。○麗しく明か。○俗に樓の借字とす。

十二畫

【廞】㊀キン　㊁ギン　〔侵〕〔寢〕

㊀つらぬ（陳）輿服を庭に陳ねる。○おこす（興）㊁ふさがる（淤塞）○いかる（怒）

【廣】㊀クワウ　㊁クワウ　〔養〕〔漾〕

㊀ひろさ、ひろし（闊）「平―」「弘―」○ひろむ、ひろくする（擴大）「增―」○大いなり。○ゆたか（寬）心がのびのびして安し。大學「心―體胖」○州名、三國の時吳にて置く、今の―東・―西地方。㊁よこ（橫）東西を廣と爲し、南北を輪と爲す。○むなし。＝曠。ゆたか（泰）○兵車、十五乘を一廣と爲す。左、宣十二「分爲二―」

同訓異義 ひろし　廣・博・闊・弘・汎・寬　○廣は狹の反、限り無く廣きこと。中庸「廣大配天地」○博は廣也、大也、幅廣き義、博聞・博愛と用ふ。論語「博學於文、約之以禮」○闊は疏也・遠也・廣也、兩方に限りありて、其の閒のはば廣き意、濶は俗字なり。○弘は大なり、廣に近し、ひろむるとも訓む、德業心術等に用ふ、寬弘・恢弘の如し、形狀の上には用ひず。論語「人能弘道、非道弘人」○汎は泛と同じ、うかぶとも訓む、深入りをせず、ぱっとしてひろきなり。論語「汎愛衆而親仁」○寬は博に近し、ゆったりと餘裕ありて廣きなり、窄の反にて、容るるところある義、寬仁大度の類。

【廣運】○ひろくゆきわたる。書、大禹謨「帝德――、乃聖乃神、乃武乃文」○ひろさ。東西を廣、南北を運といふ。國語「――百里」＝廣輪。

【廣益】ひろく益をなす。諸葛亮文「務補闕漏、有所――」

【廣衍】○ひろくたひらか。西京賦「彌乃――、沃野、厥田上上」＝曠衍。○ひろくはびこる。晉書、裴頠傳「虛無之言、日以――」

【廣演】ひろめのべる。謝靈運文「――慈悲、饒益衆生」

【廣廈】ひろきいへ。漢書「――之下、細旃之上」＝大屋。

【廣寒府】月のみやこ、月宮殿。龍城錄「上皇與申天師道士鴻都客、八月望日夜、因天師作術、三人同遊月中、見一大宮府、榜曰廣寒淸虛之府」胡宿詩「御疑身在廣寒宮」

【廣軌】鐵道の軌道の閒の、四尺八寸以上あるもの。狹軌の對。

【廣義】○意味をひろめる。禮記、疏「此更爲神、設尊號、亦廣其義也」○ひろき意味。狹義の對。

【廣求】ひろくもとめる。漢書「猶博取而――」

【廣居】ひろきゐどころ、仁に喩へていふ。孟、滕文公「居天下之――」

【廣虛】廣大なる大ぞら。曾鞏詩「長軒憑――」＝虛空。

【廣衢】ひろきみち。梅堯臣詩「開池臨――」

【廣狹】ひろさと、せまさと。論衡「日照天下、遠近――、難得量也」

【廣言】おほぐちをきく。無遠慮にいふ。＝大言。

【廣告】新聞雜誌に記載し、又は其他の方法にて廣く衆人に告げ知らす。
【廣坐】大勢のすわれる場所。戰國策「衆人ーー之中」＝廣座。
【廣濟】ひろくすくふ。唐太宗文「神州陰祀、洪恩ーー」
【廣顙】ひろきひたひ。易經「巽爲人也、爲寡髮、爲ーー」唐書、楊收傳「收ーー深頤、疏眉目、寡言笑」＝博顙・闊顙・廣額。
【廣肆】ひろきみせ。高道素賦「通衢ーー、大邑都城」
【廣榭】ひろやかなるうてな。水經、注「連廡ーー、炎暑之日、常以避暑」
【廣敞】ひろくほがらか。杜牧、雪中書懷詩「明庭開ーー」
【廣成子】古の仙人の名。莊、在宥「黃帝聞ーーー在崆峒之上、往見之、問曰、聞吾子達於至道、敢問治身、奈何以得長久」
【廣饒】土地ひろくして物產がゆたか。詩經、箋「齊地ーー」
【廣宵大暮】死者はとこしなへに曉る期なし、故に喩ふ。陸機詩「廣宵何寥廓、大暮安可晨」
【廣斥】ひろき干潟。斥は鹽濱。廣闊なる斥鹵。書、禹貢「海濱ーー」
【廣磧】ひろきすなはら。諸葛亮文「長山ーー、足以自衞」
【廣大】ひろく大いなり。史、孔子世家「博辨ーー」
【廣宅】ひろきいへ。後漢書、許武傳「肥田ーー」
【廣長舌】ひろく長きした。辯舌のすぐれたるにいふ。華嚴經「菩薩以ーーー、一音中現無量音」蘇軾詩「溪聲便是ーーー、山色寧非清淨身」
【廣兆穹碑】廣き墓地と高き墓石と。
【廣簟】ひろきたかむしろ。許渾詩「河漢秋歸ーー涼」
【廣塗】幅のひろきみち。蜀都賦「畫方軌之ーー」＝廣途。
【廣莫】廣漠に同じ、莫は漠。莊、逍遙遊「ーー之野」
【廣莫風】北方のかぜ。淮南子「天有八風、一曰ーーー」
【廣漠】限りなくひろし。書、禹貢、注「ーー而斥鹵」＝廣莫。
【廣眉】ひろきまゆ。漢書、馬廖傳「城中好ーー、四方且半額」
【廣被】あまねくいづこまでもおほふ。東京賦「惠風ーー」
【廣廡】ひろきひさし。西京雜記「客館皆ーー高軒、屏風幃褥甚麗」
【廣平賦】宋廣平の作りし梅花の賦。錦字箋「宋璟字廣平、貞操勁質、其鐵腸石心、疑不能吐婉媚辭、乃作梅花賦、則淸便豔麗也、其警句云、鶯語猶澀、蜂房未喧、獨步早春、自全其天」
【廣袤】ひろさ、東西を廣といひ、南北を袤といふ。史、楚世家「ーー六里」＝廣輪・縱橫。
【廣目天】佛四天王の一、帝釋の外臣、西方を護る。
【廣野】ひろきのはら。史、天官書「海旁蜃氣象樓臺、ーー氣成宮闕」
【廣裕】ひろくゆるやか。＝寬裕。
【廣覽】ひろく見る。晉書、郭璞傳「陛下玄鑒ーー、欲知其情狀」＝博覽。
【廣柳車】喪に用ふるくるま。喪車。史、季布傳「置ーーー中」
【廣輪】ひろさ。東西を廣といひ、南北を輪といふ。周禮「大司徒周知九州之地域、ーー之數」＝廣袤・廣運。
【廣遼】ひろくはるか。雲笈七籤「雲起大虛、風生ーー」
【廣閒】國玄關の次にある廣き座敷。
【廣前】國神社。又、宮殿の前庭。＝大前。

【廝】シ　支　一に斯に作る

○めしつかひ、こもの（賤役者）○薪をとり又は馬を養ふもの。
【廝役】奴僕などの賤しきつとめ。又、其の者。漢書「其賓客ーー、皆天下俊桀」
【廝下】下賤の者。世說「出自ーー、不顧名器」
【廝徒】まかなひなどするめしつかひ。史、蘇秦張儀傳「ーー十萬」
【廝養】薪を取り、馬を養ふしもべ。史、張耳陳餘傳「有ーー卒」＝廝徒。

【廠】シヤウ　養

○壁なき家（露舍）○うまや（馬屋）○今は多人數の工商などの聚る所の稱「工ー」「粥ー」「菜ー」
【廠獄】明代勅命によりて捕へられし罪人を收容せし牢屋。廠は明代の官署の名、東廠・西廠あり、恒に內監を以て之を司らしめ、專ら詔獄を緝捕するの事を主る。＝詔獄。

【廚】チュ　虞　廚・厨は俗字

○くりや（庖屋・炊事場）「天ー」「御ー」「軍ー」「庖ー」孟、梁惠王「君子遠庖ー」○ぬし（主）○ひつ（櫃）はこ（箱）「書ー」「衣ー」○行ーはわりご、べんたう（辨當）
【廚下】だいどころ。晉書、衞恒傳「還經ーー」
【廚竈】だいどころのかまど。李白詩「ーー無靑烟」

【廚人】料理人、いたまへ。南史、梁安成王秀傳「ーー進食」＝廚夫・庖人。
【廚房】くりや、だいどころ、炊事場。＝庖廚。
【廚庖】料理。又くりや。長孫佐輔詩「客來羞ーー」＝庖廚。
【廚婢】料理する召使女、めしたき女。膳夫錄「ーー數百人」＝廚娘。
【廚費】くりやの入費。魏書、甄琛傳「詔給ーー」
【廚夫】料理人。
【廚子】國○調度書畫などを入れる箱。○神佛の像を安置する箱。＝佛龕

【廛】テン　先　又鄽に作る

○やしき（市邸）「市ー」「邑ー」「郊ー」一夫の宅地。○みせ、物を賣る店（店鋪）「肆ー」○商店より稅を取る。禮、王制「市ー而不稅」店の稅のみを取りて、商品には稅を課せず。
【廛市】みせ、まちや。
【廛肆】みせ。宋書、謝莊傳「貴戚競利、興貨ーー者、悉皆禁制」
【廛鋪】みせ。＝廛肆。

【廢】ハイ　隊

○いへかたぶく（屋傾）「頹ー」○すつ、すたる（舍）不用になる「久ー」「曠ー」「棄ー」○かたは（不具）又、不治の病。古、癈に通ず。○やめる（止・罷）とどまる。○はなちおく（放置）○ゆるぶ（弛）「弛ー」禮、學記「敎之所由ー也」○大いなり。○おとす、おつ（墮）左、定三「ー於爐炭」○ふす（伏）史、淮陰侯傳「千人皆ー」
【廢案】廢止となりて行はれざる議案。又は其の考案。
【廢營】すたれたるぢんや。李商隱詩「荒村倚ーー」
【廢苑】あれすたれしその、荒廢せし園。迺賢詩「ーー鶯花盡、荒臺燕麥生」＝廢園。
【廢屋】住人なきあばらや。＝破屋・廢宅。
【廢家】○家督を相續する人なくして、ちすぢが絕える。＝絕家。○戶主が他家に入りしため其の家をつぶす。
【廢學】學問することをやめる。列女傳「ーー如斷機」
【廢格沮誹】天子の文法を廢止し、上の行爲を沮み誹るをいふ〔史、平準書〕
【廢刊】新聞雜誌等の刊行をやめる。
【廢棄】すてる、やめる。
【廢居】廢棄すべき物と、貯藏し置く可き物とを分ち、機を見て利を得る義。漢書、食貨志「ーー居邑」＝廢著。
【廢渠】すたれたるみぞ。王建詩「雨水洗荒竹、溪沙塡ーー」
【廢墟】城又は家・市街などのほろびしあと。韓維詩「寒花亂ーー」＝廢址。
【廢擧】商人が物價低ければ之を廢置して出ださず、高ければ之を擧げ出だす義。史、仲尼弟子傳「子貢好ーー、與時轉貨貲」＝廢居。
【廢官】○廢止せし官職。○官職をやめる。
【廢缺】すたれかく。班昭、女誡「夫不御婦、則威儀ーー」
【廢業】しごとをやめる。後漢書「其輕黠游蕩、ーー爲患者」
【廢語】國現在通用せざることば。＝死語。
【廢錮】終身仕進の路を塞ぐ義。漢書、息夫躬傳「躬同族親屬、素所厚者、皆免ーー」
【廢后】皇后の位を奪ひ取る。又、其の處分を受けたる皇后。
【廢興】すたると、おこると。陳子昂詩「太極生天地、三元更ーー」＝興亡・興廢。
【廢止】やめる。＝廢罷。
【廢址】城・家などのすたれたるあと。陳孚詩「我偶過此訪ーー」＝廢墟。
【廢弛】すたれゆるぶ、敗壞する。吳融詩「田畯不勝荒、農功皆ーー」
【廢紙】不用になりたるかみ、ほご（反故）唐書、李絳傳「從吏求ーー」
【廢失】すたりうせる。すておきて心にとめぬ。後漢書、明帝紀「不知稼穡之艱難、懼有ーー」
【廢疾】不具のやまひ〔禮、禮運〕＝癈疾。
【廢瑟】やぶれたること。鮑溶詩「ーー難爲絃」
【廢娼】娼妓の公許をやめる。＝廢倡。
【廢書】感ずる所ありて讀みかけし書物を掩ひて讀まず。史、孟軻傳「未嘗不ーー而歎也」
【廢職】職務を怠る。又、すたれたるつかさ。張說、喜雨賦「屛嚚慚其ーー、祝融悔其遷怒」
【廢絕】すたれたえる。劉歆文「不思ーーー之闕」
【廢退】官職をやめ、又はしりぞく〔論衡〕＝黜退。
【廢刀】國士人の帶刀を止むる「ーー令」
【廢宅】住む人なきあばらや。＝廢屋。
【廢置】やむると、其のままおくと、廢止と、存置と。周禮、太宰「ー

一以取二其更」

【廢議】ハイギ 官職を廢止する。

【廢嫡】ハイテキ 長子の相續者たるべきことを廢止する處分。

【廢黜】ハイチツ 官職をとりあげ、しりぞける。「晉書」「一二功臣」＝免黜。

【廢除】ハイジヨ やめのぞく。

【廢帝】ハイテイ 天皇の位をうばはれたる人。「文」其の處分を受けしし皇帝。

【廢朝】ハイチヨウ 天子の因事又は其の他の事故によりて朝政を廢したまはざること。「晉書」「咸寧二年正月以疾廢一一」＝輟朝。

【廢典】ハイテン ○すたれたる儀式。○儀式をやめる。「後漢書」「華人國之紀也、制作國之典也、誠ノ紀ノ一、其能久乎」

【廢屠】ハイト 世にすてられて居者なれる者。「戰國策」「太公望齊之逐夫、朝歌之一一」

【廢棚】ハイホウ すてやむ。「宋書、周朗傳」＝廢止。

【廢忘】ハイボウ 捨てわすれる。「韓法決疑錄」「一一經業」

【廢藩置縣】ハイハンチケン 明治四年十一月、諸藩を廢し、改めて全國を三府七十二縣に分ち、郡縣の制を定めしし事をいふ。

【廢物】ハイブツ ○やくにたたぬもの、不用の物。「一一利用」「史越春秋」「華喬」「一一」

【廢疾】ハイシツ ○すたれゆくやむ。「漢書」「今一一」

【廟】ビヨウ 國

○おたまや、祖先の神靈をまつる殿堂（靈屋）「宗一」「祖一」「高一」「家一」「靈一」「古今注」「一、也鏡也」所以彷彿先人之形容祭也」○やしろ、鬼神、聖賢を祭れる堂舍。史、封禪書「作一渭陽五帝一」○王宮の前殿、政を行ふ所「一堂」「郎一」○東西に廂のあるやく「寢一」

【廟宇】ビヨウウ おたまや、やしろ。「宋書、禮志」「一一之制」

【廟諱】ビヨウキ 先帝のいみな。「唐書、百官志」「國忌一一、卜筮醫藥」

【廟議】ビヨウギ 朝廷の上の評議。「唐書、朱子奢傳」「歷代一一」＝朝議。

【廟犧】ビヨウギ 祭にそなへるいけにへ。「晉書」「一一烏得ノ貪二亦豚」＝廟牲。

【廟見】ビヨウケン 婦人が嫁して始めて夫家の廟に參詣するをいふ。「儀禮、婦三月而一一」

【廟算】ビヨウサン 朝廷のはかりごと。「古孫子、知計「兵未戰而一一勝者、得ノ算多也」＝廟謀。

【廟廊】ビヨウロウ おたまや、やしろ。「水經、注」「岸上幹有二一一、洞前有二石碑三所」

【廟室】ビヨウシツ おたまや、祖先の靈をまつる所。「晉書」「前史一一一復設」

【廟寢】ビヨウシン おたまや、前に在るを廟、後に在るを寢といふ。「晉書、賈逵傳」「別立一一」

【廟社】ビヨウシヤ やしろ、宗廟と、社稷と。「韓愈文」「來告兩下、以告一一」＝宗社。

【廟祝】ビヨウシユク 廟社内にて香火の事を司る者。はふり。

【廟堂】ビヨウドウ 廟堂に坐して勝つ。「戰國策」「孫子」「不戰而屈人之兵、一一之術也」「漢書、趙充國傳」「非三策定一一之冊」「朝は筵。」

【廟堂】ビヨウドウ 祖先のおたまや、やしろ。「宋書、禮志」「一一之制」

【廟諱】ビヨウキ 先帝のいみな。「唐書、百官志」「國忌一一、卜筮醫藥」

【廟謨】ビヨウボ 朝廷の上の評議。「唐書、朱子奢傳」「歷代一一」＝朝議。

【廟犧】ビヨウギ 祭にそなへるいけにへ。「晉書」「一一烏得ノ貪二亦豚」＝廟牲。

【廟見】ビヨウケン 婦人が嫁して始めて夫家の廟に參詣するをいふ。「儀禮、婦三月而一一」

【廟算】ビヨウサン 朝廷のはかりごと。「古孫子、知計「兵未戰而一一勝者、得ノ算多也」＝廟謀。

【廟廊】ビヨウロウ おたまや、やしろ。「水經、注」「岸上幹有二一一、洞前有二石碑三所」

【廟室】ビヨウシツ おたまや、祖先の靈をまつる所。「晉書」「前史一一一復設」

【廟寢】ビヨウシン おたまや、前に在るを廟、後に在るを寢といふ。「晉書、賈逵傳」「別立一一」

【廟社】ビヨウシヤ やしろ、宗廟と、社稷と。「韓愈文」「來告兩下、以告一一」＝宗社。

【廟祝】ビヨウシユク 廟社内にて香火の事を司る者。はふり。

【廟堂】ビヨウドウ 廟堂に坐して勝つ。「戰國策」「孫子」「不戰而屈人之兵、一一之術也」「漢書、趙充國傳」「非三策定一一之冊」「朝は筵。」

【廟貌】ビヨウボウ 廟社の容貌を見る。「後漢書、劉寵傳」「一一不ノ侵」

【廟謨】ビヨウボ 朝廷のはかりごと。「杜甫詩」「一一之上、鑾谷在ノ陰、儀容在西」○古、政を議し事を行ふには、宗廟に於て、之を祖先の靈に告げしが故に、轉じて朝廷の議に用ふ。「呂覽、類聚」「夫參二之於一一之上、而折衝乎千里外」

【廟堂】ビヨウドウ 佛像を安置する所。「唐書、蘇瓌傳」「武后鑾亭展、立二一一」

【廟廷】ビヨウテイ おたまやの庭。「戰國策、齊王芳紀」「太祖一一」＝廟庭・廟堂。

【廟庭】ビヨウテイ 前條に同じ。

【廟兆】ビヨウチヨウ おたまや、兆は墓地。

【廟號】ビヨウゴウ おたまや。號は上尊なり、七世以上の遠祖の廟は之を遷す、之を遷廟といふ。「周禮、春官」＝號廟。

【廟貌】ビヨウボウ おたまや、彷彿として死者の容貌を見る。「後漢書、馮魴傳」「大丈夫、吾世、生當二一一」

【廟食】ビヨウシヨク おたまやに祭られる。「後漢書、梁冀傳」「大丈夫、吾世、生當二一一」

【廟堂】ビヨウドウ ○宗廟の堂。「禮、禮運」「一一之上、鑾谷在ノ陰、儀容在西」○古、政を議し事を行ふには、宗廟に於て、之を祖先の靈に告げしが故に、轉じて朝廷の議に用ふ。「呂覽、類聚」「夫參二之於一一之上、而折衝乎千里外」

【廟塔】ビヨウトウ 佛像を安置する所。「唐書、蘇瓌傳」「武后鑾亭展、立二一一」

【廟廷】ビヨウテイ おたまやの庭。「戰國策、齊王芳紀」「太祖一一」＝廟庭・廟堂。

【廟庭】ビヨウテイ 前條に同じ。

【廟兆】ビヨウチヨウ おたまや、兆は墓地。

【廟號】ビヨウゴウ おたまや。號は上尊なり、七世以上の遠祖の廟は之を遷す、之を遷廟といふ。「周禮、春官」＝號廟。

【廟貌】ビヨウボウ

廿三畫

【廳】チョウ　平

○「一」・「邪一」・「邑一」・古、廳に作る。官六朝以來广を加ふ。○いへや（室）洛陽名園記「涼園（屋）へや（室）洛陽名園記「涼園記」

【廳事】ヂチョウ　おもてざしき。宋史、李沆傳「一一前簾卷旋焉」

廴部

【廴】イン　平

○ひく（延）＝引。○長く行く。

四畫

【延】エン　先

○○ひく（引）しきのぶる（鋪陳）○のべひろげる。○すすむ（進）○ひろまる（廣）○ながし（長）○とほし（遠）○ひろさ（廣）○しりぞく（卻退）○とどこほる、のびのびになる（淹）「遷一」○およぶ（及）○とどまる（停）○書、大禹謨「賞一手世」○いる（納）招き呼ぶ「招一」漢書、公孫弘傳「開東閣以招賢人」

同音　延・廷・蜒・宣・展・申・伸・神・

○廴部　（四一六畫）　延・廷・廷・建　五九九

○廴部　廴（四畫）延・廷・廷　五九八

の別は廷（走部五畫）の條を見よ。○廷・莖・引・挽・曳等の別は韋（手部七畫）の條を見よ。

【延引】エンイン　ひきのばす。又、ながびく、おくれる、遲延する。通鑑、唐德宗紀「一一歲月、戰勢益張」

【延閣】エンカク　ながいくつらなりたる高どの。拾遺記「有ㇾ善ニ退文ニ者ㇾ過ニ于層樓一一之上ニ以望ニ氣象ㇾ」

【延眺】エンチョウ　遠くながめる。遊浚詩「慶樂得ニ一一」

【延企】エンキ　首をのべ足をつまだてて遠くを望む。曹植詩「登ニ高丘ニ以一一」

【延期】エンキ　ひのべ、定めたる期限をのばす。＝展期。

【延喜式】エンギシキ　國五十卷。醍醐帝の朝、藤原忠平等、命を受けて撰す、樂中の年中儀式、百官職掌の作法、諸國の恒式を記す。

【延頸】エンケイ　首をのばして待つ、待ち遠く思ふ。漢書、張騫傳「思漢之主一一望」＝翹望・翹首・翹首・延企。

【延見】エンケン　客を延きて面會する。漢書「數臨正殿、一一羣臣」＝引見・接見。

【延袤】エンボウ　ひきつけてすすめる。宋史、文苑傳「立如一一」

【延壽】エンジュ　ながいきの。又、いのちをのばす。王延壽、管靈公殿賦「保一一而益ニ子孫ニ」＝延命。

【延壽草】エンジュソウ　菊の異名。仙書。

【延壽】エンジュ　遠くながめる。遊浚詩「慶樂得ニ一一」

【延望】エンボウ　首をのべ足をつまだてて遠くを望む。曹植詩「登ニ高丘ニ以一一」

【延期】エンキ　ひのべ、定めたる期限をのばす。＝展期。

【延喜式】エンギシキ　國五十卷。醍醐帝の朝、藤原忠平等、命を受けて撰す、樂中の年中儀式、百官職掌の作法、諸國の恒式を記す。

【延頸】エンケイ　首をのばして待つ、待ち遠く思ふ。漢書、張騫傳「思漢之主一一望」＝翹望・翹首・翹首・延企。

【延見】エンケン　客を延きて面會する。漢書「數臨正殿、一一羣臣」＝引見・接見。

【延袤】エンボウ　ひきつけてすすめる。宋史、文苑傳「立如一一」

【延壽】エンジュ　ながいきの。又、いのちをのばす。王延壽、管靈公殿賦「保一一而益ニ子孫ニ」＝延命。

【延壽草】エンジュソウ　菊の異名。仙書。

【建言】ケン上に意見を申し上げる。‖建白。

【建功】コウ　いさををたてる。陳機文「立レ建之業有レ常、而一レ之路不レ一」

【建國】コク　國家のもとゐをたてる。周禮、天官「惟王一レ、體レ國經レ野」‖肇國・開國。

【建造】ゾウ　○つくりたてる。王子先賦「特申一一之始」○建物をたてる。

【建造物】ブツ　家屋・倉庫などのたてものの。‖建築物。

【建策】サク　揚雄「掉三寸之舌、建二不拔之策」

【建旌】セイ　はたをたてる。徐幹文「夫登レ高而一レ、則其所レ履者廣矣」

【建設】セツ　たてまうける。漢書「一一滿屏以強二守圉」

【建置】チ　たておく。晉國文「樹猶」親成、土猶二土民一一不レ久、則輕レ下慢レ上」

【建築】チク　家倉等をたてる。‖建立。

【建仁寺垣】ケンニンジ　圓劉竹をならべ、竹をも四・五段に編びつけし垣。京都禁廣の建仁寺にて作りしに始まる。

【建白】ケン　上に意見を申し上げる。唐書、宦者傳「每一一必回邑借和」‖建言。

【建明】メイ　政事をおこしあきらかにする。楊惲文「不レ能レ以二此時一有ヨ所二一一」

【建國】コク　隔建谷に差する間の一種、漢の上部に數花を開く淡黃綠色にして香氣幽雅なり。

【建立】リツ　○たつ。魏志、注「好作二政教一、以一一名譽一」○圓寺院などをたてる。

【建瓴】レイ　建は甕、瓴は瓶、瓶の水を屋上よりこぼす。晉書、勞の强きに喩ふ。史、高帝紀「猶二居高屋之上一一水一也」

【建具】グ　圓戸・障子の類。

【建坪】ボウ　圓たてものの坪數。一坪は六尺四方の面積。

【廼】迺（辵部六畫）の誤字。

廾部

【廾】キョウ　圓　一　畫

手をこまぬく（拱手）

【廿】ジュウ　圓　二　畫

はたち、二十を幷せたる字。

【廿日草】ジツカソウ　圓牡丹の異名。白居易詩「花開花落二十日、一城之人皆如レ狂」とあるに本づく。

【廻】廻（廴部六畫）の誤字。

廾部（一—四畫）

廿・廾・弁・弄

【弁】ベン　㊀㊁㊂㊃　㊄　㊅　㊆　㊇　㊈　㊉　㊊　㊋　㊌　㊍　㊎　㊏　㊐　㊑　㊒　㊓　㊔　㊕　㊖　㊗　㊘　㊙　㊚　㊛　㊜　㊝　㊞　㊟　㊠　㊡　㊢　㊣　㊤　㊥　㊦　㊧　㊨　㊩　㊪　㊫　㊬　㊭　㊮　㊯　㊰　㊱　㊲　㊳　㊴　㊵　㊶　㊷　㊸　㊹　㊺　㊻　㊼　㊽　㊾　㊿　圓　三　畫

○かんむり（冕）特に武官用のもの「武一」○をののく（戰）おそれる（慄）戰慄・懼すること。漢書、嚴延傳「吏皆股一」○いそぐ（急）はやし（疾）○てうちにする（手手搏）○赤一丈人の異名。㊁たのし、たのしむ（樂）詩、小雅「一彼鶴斯」‖殺。○圓辨の略字とするは非。

【弁慾】ベンヨク　古の國の名、今の朝鮮の東南部にして、慶尙道の大部分を擁有す。‖弁辰。

【弁言】ベンゲン　書物のはしがき、書物のかんむりの義、弁を辨に作るは誤。‖序言。

【弁髦】ベンボウ　弁は元服の時に一度被る綱布冠、髦は童子の垂髮、元服の禮は、始に綱布冠を加へて垂髮を斂め括り、次に皮弁を加へ、次に爵弁を加へ、三加の後、始冠の弁と垂髮とを棄て去りて、復用ひず、よりて無用の物に喩ふ。左、昭九「文武成康之德、周弟也、以親二周、赤其陵除」‖遺物也、豈如二一一而因以敗之」

【弁笑】ベンショウ　圓下級の武官。‖弁目・武弁。

【弁目】モクベン　弁笑に同じ。

【弁】ベン　㊀㊁㊂㊃　㊄　㊅　㊆　㊇　㊈　㊉　㊊　㊋　㊌　㊍　㊎　㊏　㊐　㊑　㊒　㊓　㊔　㊕　㊖　㊗　㊘　㊙　㊚　㊛　㊜　㊝　㊞　㊟　㊠　㊡　㊢　㊣　㊤　㊥　㊦　㊧　㊨　㊩　㊪　㊫　㊬　㊭　㊮　㊯　㊰　㊱　㊲　㊳　㊴　㊵　㊶　㊷　㊸　㊹　㊺　㊻　㊼　㊽　㊾　㊿　圓　四　畫

○しりぞく（退）○やむ（已）○なげく（歎）㊁異に通ず。

【弁】ベン　㊀㊁㊂㊃　圓　五　畫

○もてあそぶ、手に持ちて慰むむ（玩）おもちゃ。「玩一」○あなどり。「嗚一」「惡一」○たはむる。たはむれ（戲）左、僖九「炎吾弱不レ「妬一」○音樂の「清一」樂を奏する。

【弄】ロウ　圓

○もてあそぶ、手に持ちて慰むむ（玩）おもちゃ。「玩一」○あなどり。「嗚一」「惡一」○たはむる。たはむれ（戲）左、僖九「炎吾弱不レ「妬一」○音樂の「清一」樂を奏する。

圓同部四畫）の條を見よ。

【弄獻】ケン　あそびたはむる。國語、晉語「吾之少也、不レ好一一」

【弄巧】コウ　巧を用ひすぎる。小刀細工。黃庭堅、拙軒頌「一一成レ拙、爲レ拙爲レ巧」

【弄鉈】ダ　島の轉ずるをいふ。弄一に時に作る。鉈はのこぎり（鋸）左、思、蜀都賦「雲飛水宿、一一清渠」

【弄物】ブツ　笑をもてあそびて書畫をかく。宣和畫譜「周一一遊戲」

【弄玉】ギョクロウ　周代の秦の穆公の女、鳳史に適けり、弄玉、簫を吹き鳳鳴

をなせば、鳳來りて其の屋に止まる。公爲めに鳳臺を作る。

【弄丸】ガン　弄ぶ。玩ぶ。丸は紈

【弄璋】ショウ　詩、小雅、斯干「乃生二男子一、載寢之床、載衣之裼、載弄之璋」璋は玉、總を

【弄花】カ　○はなをもてあそぶこと。

沈佺期詩「啼鳥一一疎」○圓花合

【弄丸】ガン　弄ぶ。玩ぶ。丸は紈

【弄月】ゲツ　月をながめ樂む。宋史、周

子傳「程顥日、自二再見一周茂叔、後、吟風一一以歸、有二吾與點也之意」

【弄權】ケン　私に政權をもてあそぶ。貫

師奈樂詩「縣官出巡防、小吏爭一一」

【弄姿】シ　燈を作す。後漢書、李固傳「胡紫飾鉤

【弄鉤】ボウ　頭一一」

【弄臣】シン　こどもをしらべる。

【弄璋】ショウ　人君のなぐさみものとなる小臣、佞玩の臣。史、閎相加傳「以一一」

【弄璋】ショウ　男子を生むをいふ。詩、小雅、斯干「乃生二男子一、載寢之床、載衣之裳、載弄之璋」璋は玉、總を

玉に比せんことを欲す。

【弄晴】セイ　晴天に乘じて遊び樂む。蘇

軾詩「且看鴉鵲弄一晴」

【弄雨】ウ　一一雨收、江頭迎レ逐魚龍怒」陳陶詩「巫

【弄舌】ゼツ　しゃべる。歐陽修賦「蟬聽

蟬兮、轉レ喉一一」

【弄法】ホウ　をもてあそぶ、法律をまげる。史記「吏士舞文一一、

【弄筆】ヒツ　圓書畫をまげて巧に筆を

まはして書く。晉書「汝輩一一當

レ屋、吾何地」‖舞文。

弋部

【弋】ヨク　圓　五　畫

をさむ（藏）「藏」又、通じて

去に作る。漢書、陳遵傳「性善

客、與人尺牘、皆藏去以爲榮」

【弈】ヤク　圓　六　畫

は混雜に非用にすると

る（圍碁）ばくち「博一」

【弇】㊀㊁　カエン　圓國

○おほふ（蓋）○口小に中寬

き帶の稱。○せまきみち（狹道）

○隘路（左、襄二五「行及二中一」

內に向く。㊁おほふ。

【弊】ヘイ　圓　七　畫

○やぶる（敗壞）やぶれる

る「垢一」○つかれる（罷疲）つれ

く左、襄二一七「以二諂道一一諸侯」

「宿一」「時一」「積一」○一一は心

力をつからして經營する。

たふる、たふす（仆）「踣一」○

さだむ、きめる（斷）○己の物

事を謙して言ふ「國一」「庄一」

同部四畫）の條を見よ。

別は藏（石部五畫）の條を見よ。

【弊】ヘイ　圓國家の疲弊せる條を引き繼ぐ。魏志、文帝紀、注「六國力

敝、以兼一一」‖承一一敝。

【弊屋】ヘイオク　己の家の謙稱。‖弊宅。

【弊事】ヘイジ　あしきつひえ、あしきこと。

【弊國】ヘイコク　己の國の謙稱。‖弊邦。

【弊因】ヘイイン　つかれ苦しむ。蘇軾、上文「忘力一一、未レ見レ可レ所」‖因弊・

【弊憊】ヘイ　弊憊。

【弊帝】ヘイテイ　やぶれたる帝。を千金の

價ありとす、身の程を知らざる過失に喩ふ。魏文帝文「里諺曰、家有二一一、字二之千金、所不二自見之惡也」

【弊習】ヘイシュウ　よからぬくせ。‖弊風。

【弊林】ヘイリン　ふるびたるところ。宋史、舒

璘傳「一一疏放、過是住題、都沐風

雨、反爲美談」

【弊衣】ヘイイ　ふるきわた。世說、注、師今

日知レ著一一在一所、捕鼠中と

【弊政】ヘイセイ　あしきまつりごと。‖悪政・惡政。

【弊害】ヘイガイ　弊害の存する點。害は矢。

【弊邦】ヘイホウ　己の國の謙稱。‖弊國。

【弊風】ヘイフウ　あしきならはし。‖弊習・弊俗。

【弊俗】ヘイゾク　骨折りて經營する貌。詩、

遵道遵一一、終只二天下一爲一弊」

ヤ部

【ヤ】ヨク　圓

○いくるる、繩を矢につなぎて飛鳥を射る法（繳射）○論、述而「不射宿」○遠いくるるみにて取る。轉じて一とと

る（取）○うかぶ、水に浮きおよぐ。○くひ（杙）○くろ（黑色）「一紲」

【ヤ獲】ヨクカク　いくるみにてとる。詩經「如二彼飛鳥、時亦一一」‖射得。

【ヤ射】ヨクシャ　いくるみにて鳥を取る。

宋史、風俗秀傳「盤游一一之候、禽獸狗馬之玩、有一二手絃者足一害一レ敬」

【弋繳】ジャクキョウ いぐるみ。敵拓帙「弋繳一手一一」＝繳射。弋矯。

【弋取】ジャクシュ いぐるみにて射取る。

【弋增】ジャクゾウ いぐるみ。雷淵詩「一一何芒繳二矣淵」＝弋繳。

【弋綈】ジャクテイ 黑色のつむぎ。漢書、文帝紀贊「身衣二一一」＝皂綈。

【弋釣】ジャクチョウ いぐるみにて鳥をとらへ、つりをたれて魚をとらふる。晉書、惟只二一一一翼事」

【弋譙】ジャクショウ いぐるみと、あみと。白居易詩「尚喜三餘遇此一一一」

【弋獲】ジャクカク いぐるみにて鳥を取る。漢書、賈山傳「鵰鶚一一之候」＝弋射。

一 畫

【弋】一(部首一畫)の古字。

二 畫

【式】二(部首二畫)の古字。

三 畫

【弍】三(一部二畫)の古字。

【式】シキ 調 ○のり、おきて、法則禮法制度模範「法一」「揩一」「範一」「程一」○のっとる(法)法則として従ふ。詩、大雅「古訓是一」○車の前の横木、敬禮する時に伏してよりかかる。＝軾。又、其の敬禮をする。論「鄉黨」「負版者一」○典禮「儀一」「追悼一」「問業一」○はかる(度)もちふる。もつて(用)○かた(樣)○それ、微一微一」○運算の順序方法等を數字及符號にてあらはしたるもの「算一」

【式外】シキガイ 圖式内を見よ。

【式三番】シキサンバン 圖三人にて舞ふ三番叟

【式事】シキジ 圖しきたりの禮儀、儀式上の行事。

【式日】シキジツ 圖式事を行ふ日。

【式遇】シキグウ 圖あいさつ、おじぎする。＝會釋

【式案】シキアン 圖支那の前にある板じき。

【式内】シキナイ 圖延喜式の神名帳に載れる神社。其の以外を式外といふ。

【式微】シキビ 王室の衰微する義、式、ただは發語の辭。詩、邶風「一一一一、胡不歸」

【式部官】シキブカン 圖宮内省式部職に屬する官。官中の儀式・交際上の事務を掌る。

【式部省】シキブショウ 圖古の八省の一。禮儀・賞罰・考課及六位以下の文官の叙任を掌る。其の長官を式部卿といふ。

【式微】シキビ 詩「式微式微、胡不歸」＝式式。

【式敬】シキケイ たがひにうやまふ。周禮、考工記「註」馮依而一一」

【式穀】シキコク 式は用、穀は善。善き教を用ひて子をして善に向はしめる。詩經「教誨爾子、一一一似之」

【式圍】シキイ 里門を過ぐる時、車の横木によりて禮する。賈、武威「式三過閭閻」

九 畫

【弑】シ 圓 シイ

しいする。このす(殺)下(臣又子)の上(君又親)を殺すにいふ。弑は同なり、其のすることを同じて殺す義。易、文言「臣一」其君、子一其父、非一朝一夕之故、其所一由來者漸矣」

【弑逆】シギャク 弑逆に同じ。歐陽修、春秋論「一一大惡也」

【弑虐】シギャク 臣子が君父を殺す大惡也。

【弑殺】シサツ 弑虐に同じ。類篇「弑殺、自レ外曰レ戕、自レ内曰レ弑」

弓部

【弓】キュウ 圓 ○ゆみ。「勁一」「彤一」「蒲、解獬」「確作一」、浮游作矢」○土地を測量するに六尺を一と爲す。＝步。時代によりて四尺又は五尺、八尺を一と爲す。○天一は虹の異名。

【弓韋】キュウイ 圓支那婦人纏足用の靴。

【弓衣】キュウイ 一ゆみぶくろ、ゆみぶくろ。詩小雅、疏「櫜者一一也」

【弓腰】キュウヨウ ゆみの如くにまがれる腰。酉陽雜俎「鮮紬一一渾忘卻」

【弓裝】キュウソウ ゆみづりのわざ。高適、上三陳左相」詩「相門運二月曜一、卿族開二一一一」＝弦裝。

【弓弦】キュウゲン ゆみづる、ゆづる。弓には弦を繰。越絕書「種、廣以爲二一一」＝弓絃。

【弓魚】キュウギョ ゆみぶくろ。詩經「彙部魚服」疏「其皮以爲二一一矢服一」＝弓衣。

【弓矢】キュウシ ゆみや。詩、大雅「一一斯張、干戈戚揚」

【弓師】キュウシ ゆみし。大法句經「一一調ノ角、水人調ノ船」＝弓人。

【弓人】キュウジン ゆみをつくる人。孟、公孫丑「一一一而恥ノ爲ノ弓」＝弓師。弓工。

【弓射】キュウシャ いぐるみ。孟、告子「思ノ發二一一而射ノ之」＝弋繳。

【弓手】キュウシュ ○弓を射り、盜賊を防ぐ有手。元史、兵志「鄂昌設二一一以防ノ盜也」○弓射る人。○圓弓を持つ方の手。側ち左手。弓手に對して右手。弓を持つ手。

【弓師】キュウシ ゆみのひきかた。＝射法。

【弓參】キュウサン ○弓の形。白居易詩「一一月初三」○圓弓が矢をとばす力。＝弓力。

【弓進召】キュウシンセキ 高官に採用せらるる義。李元武文「臣素微、謹藝之術、謹奈二弓進之召」

【弓箭】キュウセン 箭一番ヤ弓未ダ一なり。庾信詩「明月動二一一」

【弓節】キュウセツ 弓矢に同じ。杜甫詩「車轔轔馬蕭蕭、行人一一各在レ腰」

【弓刀】キュウトウ ゆみとかたなと。居業、吐蕃傳「喜二學唐法一、習二兜鍪、多佩二一一」＝弓劍。

【弓箭】キュウセン ゆみと、いしゆみとの周禮、夏官、弓矢「中春厭二一一、中秋厭二矢鏃」

【弓馬】キュウバ ○弓術と馬術との後漢書、陳龜傳「便二習一一、兼涉北州二音書、王濟傳「好一一、勇力絕レ人」＝射藝・弓藝。○轉じて武藝、又、武術の義とす。

【弓馬家】キュウバケ 圓武士の家、武家。

【弓力】キュウリキ 弓を射るちから。宋書、ト天與傳「善射一一絕」

【弓折箭盡】キュウセツセンジン 力盡きて奈何ともレ打羅山樂一一」＝矢竭弦絕。

【弓取】キュウシュ 圓をとこ。＝武士・武家。

【弓張月】キュウチョウゲツ 圓弓のつるを張りし如き形の月、上弦又、下弦の月。＝弦月・彎月。

【弓矢立番】キュウシタテバン 圓昔の武士が約束にちかふことなどをする時に神にちかふことば。

一 畫

【引】イン ○ひく、はる(張)弓を開く、ひっぱる。○のぶ(演)ひきのばす、ひろげる「一伸」○ながびく「延一」○みちびく(導)「一導」さそひだす誘一」○しりぞく(卻)○すすめる(薦)「徵一」「辟一」○ひきうける、負ふ。「一責」○長十丈のものさし。○衙門の名、小一は二百斤、大一は六百斤。○ひさし(詞曲)○はしがき、音樂のふし(詞曲)○はしがき、唐以後に始まり「唐以後始有の文體。此體、大略如序而稍爲短篇(手形)○導一はあんない。○てがた「一票」「一鹽」「一錢」「鈔一」「弓一」「弔」於葬者必執一」

圓引・牽・挽・拽・曳・延等の別は牽(牛部七畫)の條を見よ。

【引接】インセツ ひっぱる。ひきあげる。

【引笹】インサツ ○とがめをわが身にひきうける。吳志、孫權傳「權一レ責レ躬」

【引強】インキョウ 强弓を引く。史、樂侯周勃世家「勃以レ絳侯誅呂氏、引強力」

【引繩】インジョウ 墨書の文を繩墨として引くこと。高適詩「匡衡多一レ」

【引決】インケツ 責を引きて自殺する。司馬遷、報二任安一書「蹈鑊斧質、由能一一」

【引見】インケン 天子がひきよせて面會する。又、ひろく人に面見する義。陳書、虞寄傳「及レ至即日一一」

【引接】インセツ ひく。緣會詩「日捷不レ能レ眠起坐相一一」

【引愆】インケン 引咎に同じ。愆は責。蜀志「一一レ深自貶抑」

【引業】インギョウ 圓前世に爲したる善惡の所業の報が現世に來りて苦樂を受ける義。宿世の因緣(舟舍會)

【引伸】インシン ひきのばす、ひろく應用する、本義をうつして他義に及ぶ。易、繫辭「引而伸レ之、觸類而長レ之、天下之能事畢矣」より出づ。

【引商】インショウ 鹽を商する者、其の稅を以て一引とするに由る。

【引纏】インテン いぐるみをひく。潘岳獄「收レ吾譴レ獄、一レ一一雖レ致」

「收レ吾譴レ獄、一レ一一雖レ致」

【引證】インショウ 他人よりの證據を引く。閱見錄「學者手レ文用二一一、適二說事之用二一一也」＝引例。

【引接】インセツ ○引きいれて面會する。晉書、陶侃傳「一一一疏遠、門無二停客一」＝引見。○ひろく圓朝陀如來が來迎して極樂へ引き導く。彌陀經「如來一一之語」

【引棒】インボウ 人をひきゐる。＝引帥。

【引退】インタイ 身を引きしりぞく。致仕する。北周書「謙將軍一一」

【引導】インドウ ○みちびく。案內する。南史「有二軍魚一國レ水飛空、一一」○圓衆生を引き導きて淨道に入らしむ。法華經「無數方便、以二一一衆生」」又、死者を淨土に導くため葬式に僧侶の行ふ式。智度論「大愛道比丘尼涅槃、佛自在レ前、擎二香鑪一一」

【引薦】インセン 仲間をつくる。圓語「一一レ以封レ己」

【引說】インセツ 他人よりの說據を引く。閱見錄「學者手レ文用二一一、適二說事之用二一一也」＝引例。

【引接】インセツ ○引きいれて面會する。晉書、陶侃傳「一一一疏遠、門無二停客一」＝引見。○ひろく圓朝陀如來が來迎して極樂へ引き導く。彌陀經「如來一一之語」

【引棒】インボウ 人をひきゐる。＝引帥。

【引退】インタイ 身を引きしりぞく。致仕する。北周書「謙將軍一一」

【引導】インドウ ○みちびく。案內する。南史「有二軍魚一國レ水飛空、一一」○圓衆生を引き導きて淨道に入らしむ。法華經「無數方便、以二一一衆生」」又、死者を淨土に導くため葬式に僧侶の行ふ式。智度論「大愛道比丘尼涅槃、佛自在レ前、擎二香鑪一一」

【引薦】インセン 仲間をつくる。圓語「一一レ以封レ己」

【引說】インセツ 他人よりの說據を引く。閱見錄「學者手レ文用二一一、適二說事之用二一一也」＝引例。

【引接】インセツ ○引きいれて面會する。晉書、陶侃傳「一一一疏遠、門無二停客一」＝引見。○ひろく圓朝陀如來が來迎して極樂へ引き導く。彌陀經「如來一一之語」

【引帥】インスイ 圓人をひきゐる。周書「以一一左右」圓語「數事」。○ひきたてる。拘引する。

【引重】インジュウ ○五に重んじ合ひて推薦する。史、魏其武安傳「兩人相爲一一」○重きものをひき行く。易經「利二天下一、資益二語說」

【引申】インシン 引きあげて用ふる。北齊書「張華之遂被二一一」

【引入】インニュウ 圖ひきいれる。法華經「一一一於佛慧」

【引年】インネン ○ながいきする。韓愈文「雪齋師以言問一一ョー」＝延年。○圖年老いて致仕する。

【引棺】インカン 棺をひくつなをひきゆく。日覽「一ノ者、右左賈人、以行ノ之」

【引滿】インマン ○一ぱいに弓をひきしぼる。通鑑、宋眞帝紀「震ノ廣貧ノ尚、自ノ一ノ將、外弟之」○なみなみと酒を極る。陶潛詩「提ノ壺挿ノ一貧宿、一ノ更歡酬」

【引力】インリョク 物理學にて物質の相ひきつける力をいふ。＝磁力。

【引例】インレイ 前例を引く。揮麈錄「一ノ一爲ノ祭」＝引證。

【引領】インレイ くびをひきのばして望む、切に希望する義。孟、梁惠王「天下之民、皆一ノ一而望ノ之矣」

【引路】インロ みちあんないする。北夢瑣言「有ノ人一一、煙、免、竈、」

【引附衆】インフシュウ 圖鎌倉・室町時代の職名、評定衆をたすけ、訴訟及び庶務をとりあつかふ役。

【引而不ノ發】インジフハツ 人に教ふるには、たゞ之を學ぶの法を授け、學ぶ者をして之を自得せしむるをいふ。孟、盡心「君子一一、躍如也、中道而立、能者從ノ之」

【引出物】ヒキデモノ 圖祝儀其他の宴會の時、來客におくる品物、ひきもの。

【引人】インジン 圖ひきいれる。法華經「一一一於佛慧」

【引年】インネン ○ながいきする。韓愈文「雪齋師以言問一一ョー」＝延年。○圖年老いて致仕する。

【引棺】インカン 棺をひくつなをひきゆく。日覽「一ノ者、右左賈人、以行ノ之」

【引滿】インマン ○一ぱいに弓をひきしぼる。通鑑、宋眞帝紀「震ノ廣貧ノ尚、自ノ一ノ將、外弟之」○なみなみと酒を極る。陶潛詩「提ノ壺挿ノ一貧宿、一ノ更歡酬」

【引力】インリョク 物理學にて物質の相ひきつける力をいふ。＝磁力。

【引例】インレイ 前例を引く。揮麈錄「一ノ一爲ノ祭」＝引證。

【引領】インレイ くびをひきのばして望む、切に希望する義。孟、梁惠王「天下之民、皆一ノ一而望ノ之矣」

【引路】インロ 圖案內。北夢瑣言「有ノ人一一、煙、免、竈、」

【引附衆】インフシュウ 圖鎌倉・室町時代の職名、評定衆をたすけ、訴訟及び庶務をとりあつかふ役。

【引而不ノ發】インジフハツ 人に教ふるには、たゞ之を學ぶの法を授け、學ぶ者をして之を自得せしむるをいふ。孟、盡心「君子一一、躍如也、中道而立、能者從ノ之」

【引出物】ヒキデモノ 圖祝儀其他の宴會の時、來客におくる品物、ひきもの。

【引廻】ヒキマワシ 圖○圓形を切りぬくに用ふる小さきのこぎり。○德川時代に死罪以上の罪人を馬に乘せ、見懲のため町內を引きまはす處刑。

【弔】

㊀㊁ チョウ　魏　俗吊は㊀の俗字

㊀とぶらふ、とぶらひ、生をー〇いたむ(傷)〇あはれむ(憐)〇鰐魚の類。〇圖つる、つるす、釣と音通。〇圖ヂョウ 葬式。㊁いたる(至)

詩、大雅「訓之ー矣」

【弔意】チョウイ 悲みとぶらふ心、哀悼の心。

【弔慰】チョウイ 喪中の人をとぶらひ慰める。樂書、孝孫傳「劉昭祖伯龍、岳二公、愛二以ノ孝文孫傳、宋武帝數二臺太子請王、並往ー」

【弔賀】チョウガ とぶらひと、いはひと。左傳「諸侯相ー」＝慶弔。

【弔客】チョウキャク とぶらひに來る客。吳志、注「生無ノ可二貴一、死以二弔ー、還爲二ー」＝弔者。

【弔旅】チョウリョ 弔意を表する爲に牛の牛ばの所にかかぐるはた。＝牛旅。

【弔風】チョウフウ 楚の屈原をとぶらふ、屈原五月五日汨羅(今の洞南省長沙府湘陰縣)に投じて死す、後人毎歲此の日に於て之を弔ふ「荊楚歲時記」

【弔古】チョウコ 往事に感じてとぶらふ。來熙詩「一一鄉忘ノ恨」

【弔祭】チョウサイ とぶらひまつる。後漢書「使者一一、賻贈甚厚」

【弔詞】チョウシ くやみのことば。人の死を悼み悲しむ意をのべることば。

【弔辭】チョウジ 前條に同じ。

【弔客】チョウキャク くやみに來たる客。＝弔客。

【弔慰】チョウイ あはれむ、又、とぶらふ。＝弔慰。

【弔問】チョウモン 圖つりあがりし眼。水滸傳、楔子「一一白額」

【弔電】チョウデン とぶらひをいふ電信、電報の弔詞。

【弔詞】チョウシ

【弔幡】チョウバン 圖つるべ、釣瓶。

【弔祠】チョウシ 國家に殊功ありし人の葬式の時、とぶらひの意を表して、はなつつ幟。

【弔慰】チョウイ あはれみてとぶらふ。詩經、疏「由ノ一一其民、故不二久留ー」

【弔魂】チョウコン 死者をとぶらひて食品をおくる。＝魂祭・祭祀料。

【弔文】チョウブン 死者を弔ふ文。文體明辯「大抵一一之體、琴瑟遊觀」＝弔辭・弔詞。

【弔問】チョウモン とぶらひなぐさめる。李洞詩「一一難知ノ主」

【弔魂】チョウコン 死者を哭する。周禮「凡內

【弘】

クコウ　圖

○ひろし、ひろむ、ひろまる「恢一」○大いなり、大いにする。

同屬 廣 宏 弘・廣・博・岡・汎・寬の別は廣(广部十二畫)の條を見よ。

【弘願】グワングワン 圖弘く大いなる願。

【弘誓】グワンセイ 圖佛が弘く衆生を濟度せんとする弘大なる誓願を、船の人を乘せて彼岸に渡すに譬ふ。

【弘誓船】グワンセイセン 圖佛の衆生を濟はんとする弘大なる誓願を、船の人を乘せて彼岸に渡すに譬ふ。

【弘通】グワンツウ 圖佛法がひろまる。

【弘法】グワンポウ ○圖佛法の道をひろめる。○圖弘法大師は伊勢高野の開創。

【弘樹】コウジュ ひろく遠し。晉書、陳騫傳「騫有二高操、忠信著聞、重一一」

【弘慈】コウジ 心廣くして煩惱なさる慈。宋書、柳元景傳「風度一一、體同深淵」

【弘基】コウキ 大いなるもとゐ。晉書、斯維熙之至美、王者之一一也」

【弘毅】コウキ 心ひろく志つよし。論、泰伯「士不ノ可二以不一一一」

【弘徽殿】コキデン 圖古の清涼殿の右、登廊殿の左に在りし御殿、后妃、女御などの居。

【弘化】グワンクワ ひろく德をしく。稽瀚、夏疏「一一能德即作元貢」

【弘敎】グワンケウ ひろきをしへ。禮記文帝文「明二度彼之一一」

【弘侈】コウシ ○大いなる義。國語、「乱欲一一、則德義鮮少」○弘一に侈に作る。○廣書、字文愷傳「性通而希心在三市朝、奚、寄二梅壯麗、帝大悅ノ之」

【弘深】コウシン ひろくふかし。樂毅文「器量一一、樂度廣大」

【弘敞】コウチャウ ひろくほがらかにして高し。晉書、地理志「是象麗ノ天、山河記ノ地、論接裁一一其一一、晴圃明二其都邑」＝廣敞。

【弘潤】コウジュン ひろくうるほふ。沈約文「少而英明、長而一一」

【弘濟】グワンサイ ひろくすくふ。唐太宗文「一一一萬品、典二御十方」

【弘宣】コウセン ひろくのべ、あきらかにする。晉書、禮志「禮經三百、威儀三千、皆所ノ以一一天意、醴酒菊人、人理」＝廣宣。

【弘大】グワンタイ ひろく大いなり。樂毅文「王德元功、器量一一」

【弘道】グワンダウ 道德をひろめる。論、衛靈公「人能一ノ一、非二道弘ノ人」

【弘著】グワンチョ ひろくあらはれる。晉書「訓二傅東宮、徽猷一一」

【弘播】グワンハ ひろくしく。陸雲詩「惠音

弘化」「一一能德即作元貢」

【弘敎】グワンケウ ひろきをしへ。禮記文帝文「明二度彼之一一」

【弘侈】コウシ ○大いなる義。國語、「乱欲一一、則德義鮮少」○弘一に侈に作る。○廣書、字文愷傳「性通而希心在三市朝、奚、寄二梅壯麗、帝大悅ノ之」

【弘深】コウシン ひろくふかし。樂毅文「器量一一、樂度廣大」

【弘敞】コウチャウ ひろくほがらかにして高し。晉書、地理志「是象麗ノ天、山河記ノ地、論接裁一一其一一、晴圃明二其都邑」＝廣敞。

【弘潤】コウジュン ひろくうるほふ。沈約文「少而英明、長而一一」

【弘濟】グワンサイ ひろくすくふ。唐太宗文「一一一萬品、典二御十方」

【弘宣】コウセン ひろくのべ、あきらかにする。晉書、禮志「禮經三百、威儀三千、皆所ノ以一一天意、醴酒菊人、人理」＝廣宣。

【弘大】グワンタイ ひろく大いなり。樂毅文「王德元功、器量一一」

【弘道】グワンダウ 道德をひろめる。論、衛靈公「人能一ノ一、非二道弘ノ人」

【弘著】グワンチョ ひろくあらはれる。晉書「訓二傅東宮、徽猷一一」

【弘播】グワンハ ひろくしく。陸雲詩「惠音

【弘文】コウブン 文學をひろめる。

【弘璧】コウヘキ ーー玉たまの名。書經「赤刀大訓、一一、琬琰在二西序」

【弘偉】コウイ 博大なる偉論。飛國策「天下駿雄一一之士也」

【弘巻】グワンケン 大いにさかんなり。宋書、江夏王義恭傳「繼維一一」＝弘覽。

【弘英】コウエイ ひろくさかんなり。晉書「佐ノ命翼ノ世、勳業一一」

【弘麗】コウレイ ひろくしてうるはし。漢書「一一一溫雅」

【弗】

フツ　勁

○ず、あらず、しからず(不)不は輕く一は重し。いな(否)打消の詞。○はらふ(祓)さる(去)○ただしからず(不正)たふ(違)○一義は淡綠黃色の氣體の元素。○圖フツ 米國國の貨幣單位名のあて字、一一は我が二圓位。

【弗鬱】フツウツ られへて樂まざる鬱。易林「杜ノ口結ノ舌、心中一一」

【弗手】フツシュ 否といふ義。孔子世家「子曰、一一、一一、君子義ノ沒ノ世而名不ノ稱焉」

【弗詎之歸】フツキョノカエリ 衆にはからざるはかりごと。書經「無稽之言勿ノ聽、一一、流言飛語」

【弗羅鄭依酒賦】知己感激之一一也」

【弗文】フツブン 文學をひろめる。

【弗璧】フツヘキ ーー玉たまの名。書經「赤刀大訓、一一、琬琰在二西序」

【弗偉】フツイ 博大なる偉論。飛國策「天下駿雄一一之士也」

【弗變】フツヘン 大いにさかんなり。宋書、江夏王義恭傳「繼維一一」＝弘覽。

【弗英】フツエイ ひろくさかんなり。晉書「佐ノ命翼ノ世、勳業一一」

【弗麗】フツレイ ひろくしてうるはし。漢書「一一一溫雅」

【弗】

フツ　勁

○ず、あらず、しからず(不)不は輕く一は重し。いな(否)打消の詞。○はらふ(祓)さる(去)○ただしからず(不正)たふ(違)○一義は淡綠黃色の氣體の元素。○圖フツ 米國國の貨幣單位名のあて字、一一は我が二圓位。

【弗鬱】フツウツ

ふる柔順の道「友一」＝朋。○やすし（易）「豈一」○師に就きて業を受くるもの「師一」○おとるもの、劣等。○己を謙して いふ「小一」○次第の第と通ず。

【弟兄】ティケイ　おとうとと、あにと。＝弟昆。

【弟昆】ティコン　おとうとと、あにと。杜甫詩「永結────」＝昆弟・兄弟・弟兄。

【弟子】ティシ　○年わかきもの、幼年者。論「学而──入則孝、出則弟」○でし、をしへこ。師を父兄に比して いふ。論「雍也「哀公問、──孰爲好学」＝門人。

【弛】ヽ　囲

ゆづか。弓の中央部の手に執る處。

五　畫

【弦】ゲン　先

○つる、弓づる、ゆづる。○ゆみはりづき（半圓形の月）「上弦」陰暦の七八日頃の半月。○「下弦」といひ、二十二三日の半月。○病人の脈頃ののを いふ。○直角三角形の の勾股に對する長き一邊。○形容 すし（易）「豈一」○師に就きて業を受くるもの「師一」○おとるもの、劣等。○己を謙して いふ「小一」○次第の第と通ず。

【弟兄】ティケイ　おとうとと、あにと。＝弟昆。

【弟昆】ティコン　おとうとと、あにと。杜甫詩「永結──────」＝昆弟・兄弟・弟兄。

【弟子】ティシ　○年わかきもの、幼年者。論「学而──入則孝、出則弟」○でし、をしへこ。師を父兄に比して いふ。論「雍也「哀公問、──孰爲好学」＝門人。

【弛】ヽ　囲

ゆづか。弓の中央部の手に執る處。

五　畫

【弦】ゲン　先

○つる、弓づる、ゆづる。○ゆみはりづき（半圓形の月）「上弦」陰暦の七八日頃の半月。○「下弦」といひ、二十二三日の半月。○病人の脈頃のを いふ。○直角三角形の の勾股に對する長き一邊。○形容 を下一といひ、二十二三日の半月。○病人の脈頃のを いふ。○直角三角形の の勾股に對する長き一邊。○形容 の急なるを いふ。○ゆづる、弓づる、ゆづる。○ゆみはりづき（半圓形の月）「上弦」＝牛月。

【弦誦】ゲンショウ　琴をひくと詩歌を誦すること。禮、文王世子「琴誦夏籥」注「琴誦、謂歌詩」。晉書「東方朔傳」「朔西陽人、年十四、聞──」

【應弦而倒】オウゲンニシテタフル　弓のつる音に つられてたふれる。弓勢強くして且つ巧なるにいふ。史、李將軍傳「度其不中不────」

【弦歌】ゲンカ　琴をひくと詩歌を誦すること。禮、文王世子「琴誦夏籥」注「琴誦、謂歌詩」。晉書「東方朔傳」「朔西陽人、年十四、聞──」

【弦月】ゲンゲツ　ゆみはりづき。釋名「弦、牛張弓────」＝牛月。

【弦管】ゲンカン　ことと、ふえと。杜甫詩「翠華──────奏──雲欲──」

【弦歌】ゲンカ　ことをひきてうたふ。論語「子之武城、聞────之聲」＝絃歌。

【弦管】ゲンカン　ことと、ふえと。杜甫詩「翠華────────奏──雲欲──」

【弦月】ゲンゲツ　ゆみはりづき。釋名「弦、牛張弓────」＝牛月。

【弦誦】ゲンショウ　琴をひくと詩歌を誦すること。禮、文王世子「琴誦夏籥」注「琴誦、謂歌詩」。晉書「東方朔傳」「朔西陽人、年十四、聞──」

【應弦而倒】オウゲンニシテタフル　弓のつる音に つられてたふれる。弓勢強くして且つ巧なるにいふ。史、李將軍傳「度其不中不────」

【弦歌】ゲンカ　琴をひくと詩歌を誦すること。禮、文王世子「琴誦夏籥」注「琴誦、謂歌詩」。晉書「東方朔傳」「朔西陽人、年十四、聞

す「一一罪」

【強情】キョウジョウ　圖心がすなほならず。‖剛愎情。

【強訴】ソウ　無理に氣づよくうったへる。又、なかまを組みて訴へる。

【強盜】ダウ　圖暴又は暴力を以て人をもとし、金品を強奪するぬすびと。竊盜の對。

【強暴】ボウ　しひてうばひとる。史、晉相如傳「秦王度之、終不可ニ一一」

【強談】ダン　圖つよくかけあふ。きびしき談判。

【強振】シン　つとめてくさぎる。淮南子「暴以一一、秋以收斂」

【抑ル強扶ル弱】ヨクキョウフジャク　つよき者を壓へて、よわき者を助ける。後漢書「跋絕爲ニ東勝太守、一一」

【挫ル強】ザキョウ　つよきものをくじく。戰國策「不ニ爲ル人一一一」

【強梁】リャウ　つよくもとる。梁はふさがる。又、其の者。淮南、原道「動ニ其一一」‖剛梗・強鯁。

【強鯁】コウ　つよくいひはる。剛直にして屈せず、鯁は魚骨、喉にささはる義より梗と同じく用ふ。又、其の者。居易、白居易傳「居易戇論一一」

【強行軍】キョウ　軍隊が普通の行程（一日六里內外）以上をしひて進軍する義。

【強行冒險】ボウケン　公然と危險を冒し

て敵狀をうかがひ探る義。

【強諫】カン　つよくいさめる。爭ひて忠告する。左傳「懼而不ル能ニ一一」‖固諫・切諫。

【強顏】ガン　あつかましい。つらの皮あつし。戴聞考「不ル知ニ羞慙、目一一」劉向新序「此天下之一一女子也」‖厚顏・鐵面皮。

【強記】キ　物おぼえよし。「博聞一一」‖強識。

【強毅】キ　つよし。周書「在ル政一一、百姓畏ル之」

【強弓】キウ　強力の弓。史、蘇秦傳「一一勁弩」

【強圉】ギョ　○十干の丁の異名。「閼逢」○力多し。遺稿「流身被服一一兮」

【強禦】ギョ　つよくして善をふせぐ。又、其の者。漢書、錢條「昔吾一一、指克爲ル雄」‖彊禦。

【強暴】ボウ　ゆりの異名。名醫別錄「百合、一名一一」

【強鞠】キク　つよくあらあらし。晉書、楊佺期傳「一一粗豪」‖剛豪。

【強項】コウ　つよくかたくなな又、其の者。晉書、音樂詩「明心慷一一」

【強堅】ケン　つよくしてかたし。‖強固。

【強健】ケン　すこやか。歐陽修詩「乞身當ル及ニ一一時」

【強項】コウ　項はうなじの骨のつよきもの。容易に頭を下げざる、剛直の士をいふ。後漢書、馮魴傳「馮魴剛直、強項不ル屈」

【強頸】ケイ　つよくいさめる。爭ひて忠告する。左傳「懼而不ル能ニ一一」‖固諫・切諫。

【強顏】ガン　あつかましい。つらの皮あつし。戴聞考「不ル知ニ羞慙、目一一」劉向新序「此天下之一一女子也」‖厚顏・鐵面皮。

【強記】キ　物おぼえよし。「博聞一一」‖強識。

【強毅】キ　つよし。周書「在ル政一一、百姓畏ル之」

【強弓】キウ　強力の弓。史、蘇秦傳「一一勁弩」

【強圉】ギョ　○十干の丁の異名。「閼逢」○力多し。遺稿「流身被服一一兮」

【強禦】ギョ　つよくして善をふせぐ。又、其の者。漢書、錢條「昔吾一一、指克爲ル雄」‖彊禦。

【強暴】ボウ　ゆりの異名。名醫別錄「百合、一名一一」

【強鞠】キク　つよくあらあらし。晉書、楊佺期傳「一一粗豪」‖剛豪。

【強項】コウ　つよくかたくなな又、其の者。晉書、音樂詩「明心慷一一」

【強堅】ケン　つよくしてかたし。‖強固。

【強健】ケン　すこやか。歐陽修詩「乞身當ル及ニ一一時」

【強項】キョウ　項はうなじの骨のつよきもの。容易に頭を下げざる、剛直の士をいふ。後漢書、馮魴傳「馮魴剛直、強項不ル屈」

【強頸令】キョウ　剛直にして屈せざる縣令。後漢書、董宣傳「上（光武帝）令ニ小黃門趙惠之使ニ叩頭謝ル主、宣兩手據ル地終不ル肯、上敕ニ一一出」

【強梁】リャウ　しひてなく。左傳「一一者鮮ル克不ル亮」

【強壯】ソウ　つよくさかんなこと。力つよし、血氣がさかんなり。‖強健。

【強壯劑】ザイ　身體をつよくするくすり。‖補藥。

【強弔】ケウ　おしうり（押賣）‖強市。

【強仕】シ　四十歲に至りて始めて仕官する義。曾子「四十歲の時、謂ル曰「四十目ル一一」

【強死】シ　病なくして死する、非命の死、卽ち殺される。左、文十「三君皆將ニ一一」

【強忍】ニン　つよくもとりもこなす。宋史「王安石性一一」

【強恕】ジョ　勞つよくしてほしいままなり。晉書「是時桓溫一一、構制朝廷」

【強寇】キョウ　馬がつよくあらし。

【強襲】シュウ　敵の防禦を目してつよく攻める。‖強行襲擊。

【強臣】シン　權力のさかんなるけらい。

【強進】シン　つとめてすすむ。管子「一一則銳士進」

【強震】シン　つよくふるひし、地文學にて流體がこぼれ、時計の振子が止まる程度の地震。

【強將下無ニ弱兵一】ショウカノモトニヨワキヘイナシ　強き大將の下には、弱き兵卒なし。孟軻、題ニ連公壁ニ「倍蓰云、——、眞可ル信」‖勇將手下無ニ弱兵。

【強記】キ　つよきと、よわきと。

【強取】シュ　威力にて、しひてうばひ取る。左、襄三「可ニ一一也」‖強奪。

【強食】シ　○つとめて飲食を加へ、「一一愼ル疾」‖強設。○強き者の食じき「弱肉一一」

【強制】セイ　つけ。○勢をたのみて人をおし意志行爲を束縛する處分。

【強制執行】シッコウ　裁判の結果により、執達吏が債務者を強制して、其の義務を行はしむる手續。

【強盛】セイ　つよくさかんなり。北史「淺武十馬一一、肆三志於遠略」

【強勢】セイ　つよきいきほひ。

【強請】セイ　○しひてこひねがふ。○むりに實ふ。又ゆすり。

【強奚】ケイ　しひてわらふ。つくりわらひ。遺史「一一目、何感之虐也」

【強宗】ソウ　勢力あるいへがら。漢書、郭伋傳「一一右族」

【強貢】コウ　つよくしてむさぼる。戰國策、燕策「同見ニ遺王曰、今有ニ一一國策、燕策「同見ニ遺王曰、今有ニ一一

之國、臨三王之墓、案三王之地、吾以ル理、則不ル可、說以ル義、則不ル聽、王以非ニ義國守固之具、其何以當ル之」

【強嚴】ゲン　つよきてきびし。史子「三軍服ル威、士卒用ル命、戰無ニ一一、攻無ニ堅陣ニ」‖勁嚴。

【強弩之末力不ル能ル入ニ魯縞一】キョウドノスエノチカラアタハズイルニロノヲ　つよき大ゆみにて發射せし矢、石も其の力の盡きたる末は魯國の薄絹を貫く程の力も無し、英雄も衰へては何事も成し得ざる義。強一に頭に作る。漢書、賈誼傳「盛衰之極、安國傳「盛衰之極、何國之末力、不ル能ル漂ニ鴻毛一」

【強蔡】ベツ　むつき。史記「成王少在ニ一一之中一」‖襁褓。

【強暴】バク　つよくあらし。又、其の者。史、三王世家「內襲有德、外討ニ一一」

【強迫】ハク　しひてせまる、人をおどしつけける。‖脅迫。

【強牛】ギウ　なかばすぎ。蘇軾詩「贏得見童指看好、一年一一在城中」‖過半。

【強飯】ハン　○しひてくらひて身を大切にする。史記「行矣、一一勉ル之」‖強食。○圖おこは、赤飯。

【強風】フウ　つよく吹くかぜ。氣象學にて一秒時間に十米突以上の強力の風。

【強弓】キウ　○つよきへいたい。「富國

【張】チャウ　㊀㊁　漢麻

㊀は、弓に弦を施す。○ひらく（開）の、べひらけける「開一」○夫いなり。○羽族、設ニ供具ニ、以武武帝紀「一一羽族」○まうける（陳設）「一」變」○ら祀神君」○まうける（陳設）「一」變」○ねに用ふ。ちやう「幕九一」「強弩一」○兵をつよくする。

【張勉】チャウ　しひつとめる。蕭仲舒文「非在ニ一一而已矣」‖張勉・勉強。

【張辯】チャウ　しひて言ひはる辯論。北史「諸儒傳、盡其一一」

【張皇】ワウ　しひてちからを左傳「迫ニ孔悝於廟一一之」

【張勇】ユウ　つよくいさまし。

【張眞】シン　つとめてひろくみる。宋史、劉諱傳「博學一一、立志峻潔」‖博覽。

【張梁】リャウ　多力なり。又、氣力のさかんなるにいふ。梁は穀粱を負ふもの。又、橋をいふ。支ふる力の強きに取る。老子「一一者、不ル得ニ其死」

【張力】リキ　○つよきちから。又、其の者。論衡「長巨之物、一一之人、乃能舉ル之」○圖大力あり。登山の乃察內ずる者。

【彌】ビ　㊀㊁　漢麻

○弓強き貌。○みつ、みたす。○彌諦一は、あざむく（詐）○の一。○諦一は足を以て弩を一る。○乖一は相戾る。㊁はこころ○侈大○ふくれる、脹に通ず。○とばり「供一」‖帳。

【張帟】ヒ　とばりを引きはしてさかもりをする。史、高帝紀「復留止一一三日」

【張拳】ケン　こぶしのいとをはる。韓詩外傳「治ル國者、譬若ニ手一一然」‖張毬。

【張旭】キョク　字は伯高、唐の蘇州の人、草書を潛くし、草聖と稱す、酒を嗜み大醉すれば、毎に頭に墨を滿して書す、世に張顛と稱す。

【張皇】ワウ　張りて大いにする、皇は大。書、康王之誥「一一六師」‖張大。

【張三李四】サンシリシ　張氏の三男李氏の四男、俗語、八兵衛といふが如く、平凡なる人をさしていふ。傳燈錄「欲ル會ニ佛法、但問取ニ一一」

【張翅】シ　つばさをはる。易林「旋ル枝一一」

【張巡】ジュン　唐の忠臣、安祿山の亂に許遠と共に睢陽城を守り、力盡きて城の陷るに殺される。

【張大】チャウ　はりて大いにする。韓愈文「太史氏又能一一其事爲ル傳」

【張本】ホン　はりの本。書、微子「一一」○兵を用ふ。

【張弧】コ　弧を張る。書、仲虺之誥「一一而已矣」‖張弛・弛張。

【張論】ロン　しひつとめる。

【張辯】ベン　しひて言ひはる辯論。北史「諸儒傳、盡其一一」

【張皇】ワウ　しひてちからを左傳「迫ニ孔悝於廟一一之」

【張勇】ユウ　つよくいさまし。

【張眞】シン　つとめてひろくみる。宋史、劉諱傳「博學一一、立志峻潔」‖博覽。

【張梁】リャウ　多力なり。又、氣力のさかんなるにいふ。梁は穀粱を負ふもの。又、橋をいふ。支ふる力の強きに取る。老子「一一者、不ル得ニ其死」

【張力】リキ　○つよきちから。又、其の者。論衡「長巨之物、一一之人、乃能舉ル之」○圖大力あり。登山の乃察內ずる者。

【張】チャウ　㊀㊁　漢麻

㊀は、弓に弦を施す。○ひらく（開）の、べひらけける「開一」○夫いなり。○羽族、設ニ供具ニ、以武武帝紀「一一羽族」○まうける（陳設）「一」變」○ら祀神君」○まうける（陳設）「一」變」○ねに用ふ。ちやう「幕九一」「強弩一」○兵をつよくする。

【張勉】チャウ　しひつとめる。蕭仲舒文「非在ニ一一而已矣」‖張勉・勉強

【彈】㊀㊁ケツ　勇敢

ゆがけ（射決）＝韘。

【彈】ヒツ　圓

○たすく「匡―」「保―」たすけ（輔佐）「良―」「輔―」○もとる（戾）＝拂。○ゆみだあ（正）弓之制（器）○ただし（正）○かさぬ（重）○ただかし（高）○國古の官制にて「彈正臺」の次官、大―と少―とに分つ。

【弼匡】キヨウ　道にそむけるを正したすける。「弼子「匡」過―」

【弼匡】キヨウ　たすけ正す。梁昭明太子、文選序「蓋興於輔國、成出於―」

【弼成】ヒツ　助けて成す。書經「――五服」

【弼導】ヒツ　たすけみちびく。晉書、荀顗傳「貴有―佐命―之勳」

【弼輔】ヒツ　輔けてやすらかにす。晉書「龍―晉室、輔子一人」

【弼】弼（前條）に同じ。

十　畫

【彀】コウ　密

○はる（張弓）弓を引きしぼる。○やこら、矢を射るねらひ。孟、告子「羿之教人射、必志于―」羿は古の弓の名人。○圖滿足の義。

【彀中】コウチウ　弓を引きしぼりたる矢ごろのうち。轉じて、人を籠絡する術中の義とす。「漢書、文帝紀贊」「文皇帝幸霸陵、見北來者、曰、此―中、新豐也」「文皇帝紀」「文皇帝は唐の太宗。

【入彀中】　わが術中に入る。彀は弓を引きしぼる義。前條參看。

【彀率】ケツリツ　矢ごろの程度、弓を引きしぼりて的にあてる標準。孟、盡心「羿不爲―而射、羿―」

十　一　畫

【彄】コウ　侯

○ゆはず（弓端）○彀の屬。

【彄環】クワンクワン　たまき。西京雜記「戚夫人以三寸金鐶、爲―、照見指骨」

【彈】ヒツ　圓

○いる（射）○ゆみづる（弦）

十　二　畫

【彈】①ダン　②タン　㊀㊁圓

①はじき弓。○はじきだま「―丸」㊁はじく。○はじき丸ダマを志手―」羿は古の弓の名人。○圖滿足の義。

【彈中】タンチウ　弓を引きしぼりたる矢ごろのうち。轉じて、人を籠絡する術中の義とす。「漢書、文皇帝幸霸陵、見北來者、曰、此―中、新豐也」「文皇帝紀」「文皇帝は唐の太宗。

【入彈中】　わが術中に入る。彀は弓を引きしぼる義。前條參看。

【彈筆】タンヒツ　矢ごろの程度、弓を引きしぼりて的にあてる標準。孟、盡心「羿不爲―而射、羿―」

十　一　畫

【彌】コウ　无

○ゆはず（弓端）○彀の屬。

【彌環】クワンクワン　たまき。西京雜記「戚夫人以三寸金鐶、爲―、照見指骨」

【彈】ヒツ　圓

○いる（射）○ゆみづる（弦）

十　二　畫

【彈】①ダン　②タン　㊀㊁圓

①はじき弓。○はじきだま「―丸」㊁はじく。○はじき丸ダマを「―」「彈」○ただす、罪をただす（刻）「奏―」「糾―」○ふるふ（揮）○つまはじきする。「屈原、流放辭「新沐者必―冠」○はねかくす、反撥する。○ひく、かきならす「琴―」「快―」

【彈醍】タンダイ　ただしおさめる。「唐書、柳中庸傳「彈雘之下、――爲、夷、都邑之治、並愛爲、水」＝制服。

【彈雨】タンウ　雨の如く箭を來る鐵砲だま「砲煙―」

【彈劾】タンガイ　官吏の罪をしらべて、上に告げる。北史、魏收傳「兩蕃將、加二―」

【彈機】タンキ　はじきかね、ばね。

【彈糾】タンキウ　惡事をただす。後漢書、史弼傳「州司不―敢―」

【彈琴】タンキン　ことをひく。王維詩「獨坐幽篁裏、―復長嘯」

【彈冠】タンクワンクヮン　○冠の塵を彈き落める。史、屈原傳「新沐者必―、新浴者必振、衣」○轉じて出仕の準備をする義とす。「漢書、王吉傳」「王吉感、王貢兩、友、時帝王陽在、位、貢公―、貢公は貢禹。

【彈丸】タンクワン　○はじきだま。鳥銃などを「―」つつはじき丸。○轉じて極めて小さきものに喩ふ。史、感興傳「―之地」○鐵砲のたま。

【彈丸黑子】タンクワンコクシ　はじき玉と、ほくろ。○つつ（筆）ただく「―」「彈」○ただす、罪をただす（刻）「奏―」「糾―」○ふるふ（揮）○つまはじきする。屈原、流放辭「新沐者必―冠」○はねかくす、反撥する。○ひく、かきならす「琴―」「快―」

【彈醍】タンダイ　ただしおさめる。「唐書、柳中庸傳「彈雘之下、――爲、夷、都邑之治、並愛爲、水」＝制服。

【彈雨】タンウ　雨の如く箭を來る鐵砲だま「砲煙―」

【彈劾】タンガイ　官吏の罪をしらべて、上に告げる。北史、魏收傳「兩蕃將、加二―」

【彈機】タンキ　はじきかね、ばね。

【彈糾】タンキウ　惡事をただす。後漢書、史弼傳「州司不―敢―」

【彈琴】タンキン　ことをひく。王維詩「獨坐幽篁裏、―復長嘯」

【彈冠】タンクワンクヮン　○冠の塵を彈き落める。史、屈原傳「新沐者必振、衣」○轉じて出仕の準備をする義とす。「漢書、王吉傳」「王吉感、王貢兩、友、時帝王陽在、位、貢公―、貢公は貢禹。

【彈丸】タンクワン　○はじきだま。鳥銃などを「―」つつはじき丸。○轉じて極めて小さきものに喩ふ。史、感興傳「―之地」○鐵砲のたま。

【彈丸黑子】タンクワンコクシ　はじき玉と、ほくろ。○つつ（筆）ただく「―」「彈」○ただす、罪をただす（刻）「奏―」「糾―」○ふるふ（揮）○つまはじきする。「

【彌日】ビジ　ひをわたる。目がすを經る。老漢、音塞吏「衆一一而消ノ愛」

【彌旬】ビジュン　十日間にわたる。杜甫詩「迅速不ノ覺ノ晚、漁曲動一ノ一」

【彌縫】ビイ　いよいよさかんなり。北史「伯國之後、久而一一」

【彌天】ビテンテン　そらに滿ちる。陰符經「參ノ之巖、手心、隱ニ手神、施ノ之彌ニ手天ニ給ニ手地」

【彌望】ビボウ　見わたすかぎり。潘岳、西征賦「沃野一一」

【彌漫】ビビ　少しづつ。漢書、韋賢傳「一一其矣」＝稍稍。

【彌縫】ビホウ　○ぬひ繕ふ。闕を補ふ。左、僖二六「一一其闕」、而匡ニ救其失ニ」、昭二二「漢盈ニ也」○間闕矢をおほひつて、疑惑を免るる樣に用ふ「一時を一一」「寸」

【彌波】ビハ　わたりひろがる。宋書、符瑞志「一一林谷、年年轉盛」＝彌漫。

【彌留】ビリウ　病の久しく身に留りて危篤なる樣。書、顧命「嗚呼、病大漸、惟危幾、病日篤、既一一」

【彌縫】ビホウ　つくろひをさめる。彌は彌縫、縫は縫綸。易、繫辭「易與ニ天地ニ準、故能一一天地之道」

【彌陀】ビダ　國阿彌陀如來の略。佛典、庚申講式「錄逝成聞、空中唱ニ上行先生、已生一一淨域ニ矣」

【彌勒】ビロク　國菩薩の一。譯して慈氏といふ。釋迦入滅後五十六億七千萬年を經て出現し、衆生を濟くといふ佛。＝彌勒佛。

【彌生】ビセイ　國陰曆三月の異名。

十五畫

【廣】クワク　藥

はる。寒をひきしはる。＝廣。

【廣武】　唐代の宿衛の騎兵「唐書、兵志」

十九畫

【彎】ワン　弼

○ひく（引）はる（張）弓を引きしぼる。○まがる、弓なりにまがる「一彎」

【彎曲】ワンキヨク　ゆみなりにまがる。

【彎載】ワンサイ　圓ゆみなりにまがる。き形。李遠詩「惟餘坡上一一月」

【彎月】ワンゲツ　ゆみはりづき。白玉蟾詩「天際一鉤明月彎」

【彎入】ワンニフ　海水などがゆみなりに陸地に入り込む。

二十畫

【彏】クワク　藥

きびしくひきしぼる（弓念張）

彐部（ヨ）

【彐】ケイ　霽

○はりねずみのかしら（彙頭）○圓ケイ　漢字の部首の名稱。

【彑】ヨ（前條）に同じ。

六畫

【彖】ヌン　圓

○ゐのこがはしる（家走）○うらなかたのことば、易の一卦の意義を總べて論ずることばの稱「一辭」「彖一」

八畫

【彗】スヰ　廣圓

○はは（帚）「帚一」は、○はきべさ（王帚）○はきぼし、妖星（孛）＝掃星、長星、妖彗、孛彗。

【彗星】スヰセイ　はきぼし。九歌「登ニ九天ニ撫ニ一一」

九畫

【彘】チイ　圓

豚。ゐのこ（家豬）孟、梁惠王「雖無ニ失期、時七十者可ニ以食肉」

十畫

【彙】キ　圓

○はりねずみ（蝟）毫毛に似て小なり。○たぐひ（類）「品一」「類一」○あつめる、類集する。

【彙纂】キサン　類を分ちて種種の事を集め記する「注令一一」

【彙選】キセン　類を以て朝廷に選む。歐陽修詩「朝廷清明天子聖、陽德一一豪陰剛」

【彙進】キシン　類によりてとりあつめたる種種の報知。

【彙報】キホウ　同じたぐひ。

十三畫

【彝】ヰ　（彝）の俗字。

十五畫

【彝】ヰ　圓

○宗廟に供ぐおく常用の器、鑑、鼎の類「鼎一」○さかだる（酒樽）○つねに（常）いつもかはらぬ五常の道。詩、大雅「民之秉一、好是懿德」、又、夷に作る。○のり（法）「國一」「皇一」

【彝倫】イリン　人たる常道を守りて違行す、人道をとり守る。字解參看。

【彝器】イキ　常に宗廟に供へおく祀儀用のうつわは。左、襄十九「取ニ其所ニ得、以作ニ一一」

【彝憲】イケン　つねののり、憲は法。書、周命「永弼乃后於一一」＝常法。

【彝倫】イリン　さかだる。書、洪範「我不ノ知ニ其一一攸ニ敘」

十五畫

【彝】イ　圓

書、洪範「我不ノ知ニ其一一攸ニ敘」

十四畫

【彞】イ　人の常に守るべきみち。

【彞器】イキ　常に宗廟に供へおく祀儀用のうつわは。左、襄十九「取ニ其所ニ得、以作ニ一一」

【彞憲】イケン　つねののり、憲は法。書、周命「永弼乃后於一一」＝常法。

【彞倫】イリン　さかだる。書、洪範「我不ノ知ニ其一一攸ニ敘」＝彝倫。

彡部（サン）

【彡】サン　國

○けのかざり（毛飾）○毛なが。○國サンサン　漢字の部首の名稱。

【形】ギヤウ　青

○かたち、かたち「常一」「龍一」○かたちづくる、一を成す。○かたどる（象）○似せてつくりしかもの「人一」○さま、すがた（容姿）「貌一」「儀一」○からだ（身體）「裸一」「躬一」○あらさま（狀勢）「地一」○あらはる（現）大學「此謂誠於中」於外」あらはす。○あらはれて骨があらはれる。曲禮「居喪之禮、毀瘠不一一」○土製の食器。史、秦本紀「啜ニ土一一」＝鉶。

同訓異讀　形・見・現・顯・表・現・露は見部、首七畫の條を見よ。

【形影相間】ケイエイ　影の形に從ふ如く、心の善惡は行にあらはれる。列子「列子顧而觀ノ影、形枉則影曲、形直則影正」、管子「影不貪ニ曲物ニ直ニ」

【形影相弔】ケイエイ　己の形體とかげとが互に相とぶらふ。ひとり身のたよりなき樣。李密、陳情表「煢煢孑立、一一」＝形影相弔。

【形役】ケイエキ　心を肉體の爲めに使役する。陶潛、歸去來辭「既自以心爲ニ一一」

【形容】ケイヨウ　おし固めて庚の形に作り祭に供へるしほ「周禮、天官、籩人」

【形解】ケイカイ　仙人などの化去する樣。書、注「服虔曰、一一、尸解」

【形體】ケイタイ　身、からだ（肉體）疏、德充符「王ニ木形體ニ」外貌を土木の如くにしてかざらず。晉書、嵇康傳「有ニ風儀、而一一、不ニ自飾ニ」

【形錢之外】ケイセンノガイ　人の肉體のほか。

【形殘】ケイザン　疵、繕兜符「今子與ノ我、並ニ形殘之內、而子棄ニ我一一、不ニ亦過ニ乎」

【形軀】ケイク　からだ。齊書「虎一一甚殺」＝形體。

【形教】ケイキヤウ　形にあらはれたるをしへ。禮記、疏「一一謂ニ尊卑大小拜伏ニ也」

【形語】ケイゴ　口言ふことは、手眞似をもつて言語に表べる。佩文韻府「謝惠連石作、海外有ニ一一之國、口不ノ能ノ言、相喻以ノ形」

【形似】ケイジ　形が似る。形貌相似る。圓覺經「譬ニ如一一、而不ノ矣ニ視ニ者、謂ニ之能品」

【形而下】ケイジカ　有形のもの。器物をいふ。易、繫辭「一一者、謂ニ之器」

【形而下學】ケイジカガク　形而上學を見よ。

【形式】ケイシキ　かた、一定のきまり。

【形而上】ケイジジヤウ　無形の義、道をいふ。易、繫辭「一一者、謂ニ之道」

【形而上學】ケイジジヤウガク　哲學。倫理學など。有形即ち物質上の科學たる物理學、博物學等を形而下學といふの對。

【形質】ケイシツ　かたち、からだ、形狀性質。南史「一一陋小、若ノ不ノ勝ノ衣」

【形狀】ケイジヤウ　○なりかたち。南史「一一眇小、而俊辯善ニ言論」○ありさま、狀態。

【形象文字】ケイシヤウモジ　事物の形を本とした構成せし文字。＝象形文字。

【形聲】ケイセイ　○なりかたち。漢書「俱辭巧說、咸ニ聽一一」

【形貫】ケイクワン　ひとりみ。韓愈、祭十二郎文「兩世一身、一一孤孑」

【形兆】ケイチヤウ　かたちざしの意。息夫躬「醜圖ニ未形ニ」、注「圖、謀也、未ノ有ニ一一而謀ノ之」

【形象】ケイシヤウ　なりかたち。書、洪範「人君、以ニ一一ノ接ニ下ノ」

【形勢】ケイセイ　ありさま、やうす。管子「一一不ノ得ノ貧ノ非」

【形聲】ケイセイ　漢字六書の一、字は意義を表はす。江は工の聲にて水は其の意義をあらはす類。說文序「一一者、以ノ字寄ノ名、取ノ譬相成、江河是也」＝諧聲。

【形跡】ケイセキ　あとかた、痕跡。

【形塵】ケイジン　かたち。ありさま。歷代名畫記「馮紹正華蓋、蔚蔚雜、塵、其一一」＝形狀。

【形體】ケイタイ　なりかたち。漢書「俱辭巧說、咸ニ聽一一」

【形貫】ケイクワン　ひとりみ。韓愈、祭十二郎文「兩世一身、一一孤孑」

【形兆】ケイチヤウ　かたちざしの意。息夫躬「醜圖ニ未形ニ」、注「圖、謀也、未ノ有ニ一一而謀ノ之」

【形貌】ケイバウ　なりかたち。世說「一一既偉、雅懷有ノ素」＝貌形、容貌。

【形容】ケイヨウ　から。書記「一一發於地」

【形便】ケイベン　地勢がすぐれて便利なり。

形聽にして便利。戰國策「著穀饒多、地勢一一」

【形穀】ケイ　やうす、ありさま。老學菴筆記「作一穀字、目惡一一」

【形容】ケイヨウ　○人のかほかたち、すがた。‖狀容貌。○やうす、ありさま。‖狀態・形態。○狀態を目ひあらはす一一一詞」

【形容枯槁】ケイヨウコカウ　かほかたちがやせおとろへる風。流風父辭「顏色憔悴、一一」

【形容詞】ケイヨウシ　文法にて事物のありさま・性質等をあらはすことば。‖形狀言。

【忘形】ボウケイ　我が肉體の精神・修養法を一。莊、繕性「形有ノ所ノ忘」

【形格勢禁】ケイカクセイキン　行動の自由なら ざる義、格は拒ぎ止む也。孫臏傳「批ノ元譯ノ處、一一」

【彤】トウ　圏

○あか（赤・丹・朱）「丹一」「朱一」○あかきかざり（丹飾・朱塗）

【彤雲】トウウン　あかいろのくも。李益詩「雲接綠蘿邊、一一」

【彤霞】トウカ　日没のあか色の雲氣。劉琦詩「一一通三綺窗」

【彤管】トウクワン　あかくぬりたるさを。王昌之文「一一綠筒」

【彤弓】トウキウ　有功の諸侯に賜るもの。書、文侯之命「一一一、彤矢百」

【彤管】トウクワン　赤き管の筆、女史が事を記するに用ふる。詩、邶風「靜女其孌、貽ノ我一一」左、定九「靜女之三章取一一」

【彤管貽】トウクワンイ　衛風の詩句に本づき、女子の文を贈りて戀慕の情を通ずるをいふ。

【彤弧】トウコ　あかくぬりたるゆみ。瑾固文「一一黃鉞之威」‖赤弓。

【彤矢】トウシ　あかくぬりたるや。彤弓參看。

【彤史】トウシ　明の女官の名、尚衣局に屬し、后妃紀纂姜の天子に御すること天を掌り、其の月日を書す「時之想、天啓宮詞」註、彤管參看。

【彥】ゲン　麻

○ひこ、男子の美稱。姬八の對稱。○才德のすぐれたるひと（美士）詩、鄭風「邦之一兮」「俊一」「英一」「時一」「諸一」

【彥聖】ゲンセイ　すぐれてかしこし。書、秦誓「人之一一、其心好ノ之」

【彧】チキク　屋

○あや（文）かざり。○一は戊

【彩】サイ　圏

○いろどり、あや（文章・色采）「詞一」○かざり。○やうす（風度）「神一」○ひかり（光）許渾詩「輪一漸移金殿外、輪一は日光。○つや（光澤）「光一」「芒一」

【彩霞】サイカ　美くしき雲氣。李白詩「沈吟一一沒、愁緒暮芳巒」

【彩雲】サイウン　いろどりたる美くしきもの。許渾詩「一一浮雲週、綺窗明月深」

【彩旗】サイキ　いろどりしたる旗。

【彩繪】サイカイ　いろどり。王勃、乾元殿頌「一一詳雲、夾三朱旗二而曳ノ彩」

【彩彩】サイサイ　美くしき錦。詩經「一一衣服」

【彩色】サイシキ　いろどる、いろどり。‖采色。

【彩飾】サイショク　いろどりかざる。‖采飾。

【彩毅】サイキ　孔雀の羽などの美くしく光るみどり色。湘山野錄「一一奉ノ目」

【彩蝶】サイテウ　美くしきいろどりの蝶。盛鐵詩「一一戲芳圃」

【彩票】サイヘウ　圏色紙に帝號を記せしみくじの札。

【彫】チウ　圏　一に作る雕

○ほる、きざむ（刻）ふる（琢）文）ちりばむ（鏤）「一刻」「一鏤」○かざる（飾）文飾する。○忍がく（畫文）○モこなふ（殘）いたむ（傷）物事が衰へよわる「一瘵」「一劇」滄詩「別來人事幾一一殘」○しほむ（零落）‖凋。論、子罕「歲寒然後、知松柏之後一也」○一胡はまこものみ、食ふべし。‖菰米。

【彫弓】チウキウ　ほりものしてかざりしゆみ。唐、大峰「天子一一」

【彫玉】チウギヨク　ちりばめかざりたるたま。子虛賦「象一一之質」

【彫俎】チウソ　盛物の實、食用とす。‖彫胡米・菰米。

【彫刻】チウコク　ほりきざむ、ほりものする。莊子「覆ノ載天地、一一一衆形而不ノ窮ノ巧」‖彫飾。

【彫瘁】チウスイ　おとろへくるしむ、意氣が衰へ羽ふる。杜甫詩「忍ノ使二膽顏氣一一」蘇軾詩「豈惟二老大、漸覺二一一」

【彫像】チウゾウ　物の形を刻む。又、其の刻みし形。羅氏哀辭「崔陀廷王一一」

【彫殘】チウザン　○そこなひいたむ。杜甫詩「秋蘇攤二霜露、歲晚惜二一一」○兵亂の後、民力がよわりくるしむ。三國志、蘇則傳、注「內撫二一一、外慰二國忠」蘇則傳、注「內撫二一一、外慰二

【彫】テウ　圏　一に作る雕

○ほる、きざむ（刻）ふる（琢）文）ちりばむ（鏤）「一刻」「一鏤」○かざる（飾）文飾する。○忍がく（畫文）○モこなふ（殘）いたむ（傷）物事が衰へよわる「一瘵」「一劇」滄詩「別來人事幾一一殘」○しほむ（零落）‖凋。論、子罕「歲寒然後、知松柏之後一也」○一胡はまこものみ、食ふべし。‖菰米。

【彫弓】チウキウ　ほりものしてかざりしゆみ。唐、大峰「天子一一」

【彫玉】チウギヨク　ちりばめかざりたるたま。子虛賦「象一一之質」

【彫俎】チウソ　盛物の實、食用とす。‖彫胡米・菰米。

【彫刻】チウコク　ほりきざむ、ほりものする。莊子「覆ノ載天地、一一一衆形而不ノ窮ノ巧」‖彫飾。

【彫瘁】チウスイ　おとろへくるしむ、意氣が衰へ羽ふる。杜甫詩「忍ノ使二膽顏氣一一」蘇軾詩「豈惟二老大、漸覺二一一」

【彫像】チウゾウ　物の形を刻む。又、其の刻みし形。羅氏哀辭「崔陀廷王一一」

【彫殘】チウザン　○そこなひいたむ。杜甫詩「秋蘇攤二霜露、歲晚惜二一一」○兵亂の後、民力がよわりくるしむ。三國志、蘇則傳、注「內撫二一一、外慰二國忠」蘇則傳、注「內撫二一一、外慰二

雕散」

【彫蓋】チウシン　しぼみつく。よわりはる。左傳「宮室崇侈、民力一一」

【彫櫛】チウシツ　美くしくほりかざりたるかき、宮室の美を極むるにいふる。書、五子之歌「峻宇一一」

【彫飾】チウショク　ほりものしてかざる。漢書、張衡傳「器以二一一一爲貴」

【彫題】チウヒ　ひたひにいれずみする。禮記「文身一一」‖雕題。

【彫琢】チウタク　ほるとみがくこと。‖彫刻琢磨。

【彫頌】チウシヨウ　ほりきざむ、頌はけづる。北史、周武帝紀「一一之物、並賜二貧人」‖彫刻。

【彫蟲篆刻】チウチユウテンコク　文を作るに、餘りに字句を綺飾するをいふ。小刀細工。彫一に雕に作る。法言「或問、吾子少而好賦、曰然、童子一一、俄而曰、壯夫不ノ爲也」

【彫蓼】チウリウ　すたれみだる。唐書、殷盈孫傳「昭宗時、制度一一」

【彫胸】チウキヨウ　次條に同じ。史、禮書「防二其淫泆一、欲二其一一」

【彫弊】チウヘイ　つかれおとろふ。魏志、明帝紀「百姓一一」‖彫敝・彫殘。

【彫落】チウラク　○草木がしぼむ。詩經「如二松柏之茂一」疏「如二松柏之葉、新故相承、代代無二一一」‖彫殘・零落。○おちぶれる。

【彫籠】チウロウ　ほりきざむ。子虛賦、注「師古曰、以ノ玉飾ノ爽而一一之」

【彭】ホウ　圏

○つづみのおと（鼓聲）○古の國名、後に一城といふ、今の江蘇銅山縣。○一蠡は江西省に在る湖名。‖鄱陽湖。㊁一一は多き貌。詩、齊風「汶水湯湯、行人一一」又、行く貌。詩、小雅「四牡一一」又、壯んなる貌。詩、大雅「駟騵一一」又、衆くの車の聲。‖蹌蹌。○一亭は驕滿の貌。韓愈、城南聯句「苦鬧腹一亭」○八百歲まで長命せしといふ仙人一祖の名に本づきて、長壽、長壽者の義とす。沈炯詩「一一無異舞、夷跖可同朝」

【彭咸】ホウカン　殷の賢臣、其の君を諫めず、水に投じて死す「離騷」注」

【彭壽】ホウジユ　長命なると短命なると。彭は彭祖、壽はわかじに。王羲之、蘭亭序「固知一一死生、爲二虛誕一、齊二一一一爲妄作」‖壽夭。

【彭祖之壽】ホウソノジユ　人の長命なるをいふ。列仙傳「彭祖、殷末、帝顓頊之玄孫、名籙、堯時、歷二夏、殷、而不ノ衰、少好二道術一、惟以二一一一ノ神、治ノ生ノ爲ノ事」

【彭湃】ホウハイ　波の相觸れて反る貌。司馬相如、子虛賦「沸乎一一、奔突、洶涌一一」‖澎湃。

【彭】ホウ　圏

○つづみのおと（鼓聲）○古の國名、後に一城といふ、今の江蘇銅山縣。○一蠡は江西省に在る湖名。‖鄱陽湖。㊁一一は多き貌。詩、齊風「汶水湯湯、行人一一」又、行く貌。詩、小雅「四牡一一」又、壯んなる貌。詩、大雅「駟騵一一」又、衆くの車の聲。‖蹌蹌。○一亭は驕滿の貌。韓愈、城南聯句「苦鬧腹一亭」○八百歲まで長命せしといふ仙人一祖の名に本づきて、長壽、長壽者の義とす。沈炯詩「一一無異舞、夷跖可同朝」

【彭咸】ホウカン　殷の賢臣、其の君を諫めず、水に投じて死す「離騷」注」

【彭壽】ホウジユ　長命なると短命なると。彭は彭祖、壽はわかじに。王羲之、蘭亭序「固知一一死生、爲二虛誕一、齊二一一一爲妄作」‖壽夭。

【彭祖之壽】ホウソノジユ　人の長命なるをいふ。列仙傳「彭祖、殷末、帝顓頊之玄孫、名籙、堯時、歷二夏、殷、而不ノ衰、少好二道術一、惟以二一一一ノ神、治ノ生ノ爲ノ事」

【彭湃】ホウハイ　波の相觸れて反る貌。司馬相如、子虛賦「沸乎一一、奔突、洶涌一一」‖澎湃。

【彭】ホウ　圏

○ささら、虎の皮の斑文。○小ささき虎。○あや（文・文飾）注、言「彭中而一外」

【彭蔚】ホウウツ　虎の皮のあやもやのきかんにうつくしき貌。文心雕龍「洛美以連二圭、才一一以文二圭、蔚、靈慮記之分也」

【彭彭】ホウホウ　きらびやか。梁昭明太子、七契「一一雘雘」

【彭彭】ホウホウ　あきらかにかがやく。梁昭明太子賦「日照二綠蘿、一一炳蟻」‖炳彪。

【彬】ヒン　㊀㊁　圏

㊀そなはりとととのふ（文質備）○さかんなり。㊁あきらか（文采明）

【彬蔚】ヒンウツ　文采の盛んなる貌。晉書、文苑傳序「文宗轡起、一一之美、顧、文苑帝年」

【彬彬】ヒンピン　文質兼ね備はる。論、雍也「文質一一、然後君子」

【彭】ホウ　㊀㊁　圏

㊀つづみのおと（鼓聲）○古の國名、後に一城といふ、今の江蘇銅山縣。○一蠡は江西省に在る湖名。‖鄱陽湖。㊁一一は多き貌。詩、齊風「汶水湯湯、行人一一」又、行く貌。詩、小雅「四牡一一」又、壯んなる貌。詩、大雅「駟騵一一」又、衆くの車の聲。‖蹌蹌。○一亭は驕滿の貌。韓愈、城南聯句「苦鬧腹一亭」○八百歲まで長命せしといふ仙人一祖の名に本づきて、長壽、長壽者の義とす。沈炯詩「一一無異舞、夷跖可同朝」

【彭咸】ホウカン　殷の賢臣、其の君を諫めず、水に投じて死す「離騷」注」

【彭壽】ホウジユ　長命なると短命なると。彭は彭祖、壽はわかじに。王羲之、蘭亭序「固知一一死生、爲二虛誕一、齊二一一一爲妄作」‖壽夭。

【彭祖之壽】ホウソノジユ　人の長命なるをいふ。列仙傳「彭祖、殷末、帝顓頊之玄孫、名籙、堯時、歷二夏、殷、而不ノ衰、少好二道術一、惟以二一一一ノ神、治ノ生ノ爲ノ事」

【彭湃】ホウハイ　波の相觸れて反る貌。司馬相如、子虛賦「沸乎一一、奔突、洶涌一一」‖澎湃。

【彭】ホウ　圏

○ささら、虎の皮の斑文。○小ささき虎。○あや（文・文飾）注、言「彭中而一外」

【彭蔚】ホウウツ　虎の皮のあやもやのきかんにうつくしき貌。文心雕龍「洛美以連二圭、才一一以文二圭、蔚、靈慮記之分也」

【彭彭】ホウホウ　きらびやか。梁昭明太子、七契「一一雘雘」

【彭彭】ホウホウ　あきらかにかがやく。梁昭明太子賦「日照二綠蘿、一一炳蟻」‖炳彪。

【彬】ヒン　㊀㊁　圏

㊀そなはりとととのふ（文質備）○さかんなり。㊁あきらか（文采明）

【彬蔚】ヒンウツ　文采の盛んなる貌。晉書、文苑傳序「文宗轡起、一一之美、顧、文苑帝年」

【彬彬】ヒンピン　文質兼ね備はる。論、雍也「文質一一、然後君子」

【彩】サイ　圏

○いろどり、あや（文章・色采）「詞一」○かざり。○やうす（風度）「神一」○ひかり（光）許渾詩「輪一漸移金殿外、輪一は日光。○つや（光澤）「光一」「芒一」

【彩霞】サイカ　美くしき雲氣。李白詩「沈吟一一沒、愁緒暮芳巒」

【彩雲】サイウン　いろどりたる美くしきもの。許渾詩「一一浮雲週、綺窗明月深」

【彩旗】サイキ　いろどりしたる旗。

【彩繪】サイカイ　いろどり。王勃、乾元殿頌「一一詳雲、夾三朱旗二而曳ノ彩」

【彩彩】サイサイ　美くしき錦。詩經「一一衣服」

【彩色】サイシキ　いろどる、いろどり。‖采色。

【彩飾】サイショク　いろどりかざる。‖采飾。

【彩毅】サイキ　孔雀の羽などの美くしく光るみどり色。湘山野錄「一一奉ノ目」

【彩蝶】サイテウ　美くしきいろどりの蝶。盛鐵詩「一一戲芳圃」

【彩票】サイヘウ　圏色紙に帝號を記せしみくじの札。

八畫

【彩】サイ　圏　通采ずた

○いろどり、あや（文章・色采）「詞一」○かざり。○やうす（風度）「神一」○ひかり（光）許渾詩「輪一漸移金殿外、輪一は日光。○つや（光澤）「光一」「芒一」

【彩霞】サイカ　美くしき雲氣。李白詩「沈吟一一沒、愁緒暮芳巒」

【彩繪】サイカイ　いろどりたる美くしきもの。許渾詩「一一浮雲週、綺窗明月深」

【彩旗】サイキ　いろどりしたる旗。

【彩繪】サイカイ　いろどり。王勃、乾元殿頌「一一詳雲、夾三朱旗二而曳ノ彩」

【彩彩】サイサイ　美くしき錦。詩經「一一衣服」

【彩色】サイシキ　いろどる、いろどり。‖采色。

【彩飾】サイショク　いろどりかざる。‖采飾。

【彩毅】サイキ　孔雀の羽などの美くしく光るみどり色。湘山野錄「一一奉ノ目」

【彩蝶】サイテウ　美くしきいろどりの蝶。盛鐵詩「一一戲芳圃」

【彩票】サイヘウ　圏色紙に帝號を記せしみくじの札。

【彰】シヤウ　圏

○あきらか（明）「一一」○あらはる（著）「顯一」「煥一」書、伊訓「嘉言孔一」○あらはす（著）著明になる「表一」書、皋陶謨「一厥有常」○あや（文章）章に通ず、かざり（飾）○一德は府の名、河南省に屬す、今の安陽縣自ら其の治、清の光緒三十四年、自ら開きて商埠と爲す。

同調調韻　彩・見・現・顯・著・形・暴・露・表・旌の則は見（部首七畫）の條を見よ。

【彰義隊】シヤウギタイ　圏明治元年戊辰に、德川幕府の旗下の臣が江戸上野の寛永寺に據り官軍に敵對せし團隊の稱。

【彰顯】シヤウケン　いちじるし。明かにあらはす。後漢書、王符傳「乃隱居著書、三十篇、以譏當時失得、不ノ欲ノ一一其名、故號曰二潛夫論一」‖顯彰。

【彰平】シヤウヘイ　明かなる貌。

【彰勸】シヤウカン　功をあらはす。

【彰示】シヤウシ　あきらかにしめす。晉楚文「一一來世」‖明示。

【彰彰】シヤウシヤウ　あきらかなる貌。蘇軾指論「眼二綠蘿、以三炎炎、顯二可的一、以一一一」‖顯著。

【彰旌】シヤウセイ　人の美德をあらはす。旌

は旗に記して掲げあらはす。‖表旌。

【彰著】チョウあきらかにいちじるし。晉書、賈逵傳「威」震内外、幾惡一一」

【彰德】トクあらはす　○德をあらはす。○河南の府名。字解參看。

【彰炳】ヘイあきらか。‖彰明。

十三畫

【影】エイ　庚

○かげ（物之陰形）「清一」「獨一」「斜一」○ひかげ（日晷）以上古、眼に作る。○すがた（形容）おもかげ。○圖像「神一」○國本物。又、本式。又、表向にあらざるもの「一武者」「一祭」

【影響】キョウ影を見て驚き、響を聞きて震ふ。驚懼の甚だしき形容。疏、管蠡篇「使一見之者影響、聞之者響震」

【影向】コウ圖佛が此の世に其の身をあらはすをいふ。

【影響】キョウ　さしひびき、形のかげに於ける如く、響のひびきに於ける如く、本の利害は必ず末に及ぶ義。書、大禹謨「惟一一」、滋は順、迪は道。

【影國】コク　屬國。影の形に從ふ。鬻林役山「後梁爲三北魏一一、一一猶之目二附庸一」

【影前】ゼン　祖先の圖像、位牌などの前。

【影堂】ドウ　先人の遺像を奉祀する所。古今注「廟貌也、所二以彷彿先人容貌一也、庶人則立二一一」

【影單】タン　ひとりみ。貫至詩「凍雪封二墻令一、微燈照二一一」

【影殿】デン　廟寺中、神佛に供奉する所。宋之問詩「一一臨二丹壑一、香臺隱二翠微一」

【影燈】トウ　周リ壁龕。柔巷微聲「有五色鳥飛著蓮葉者、若二沙彌一一、入物皆起轉如二飛一」‖走馬燈。

【影底】テイ　かばふ、おかげ、影は陰。册府元龜「我二名於夢寐一、以求一一」

【影本】ホン　石ずり本。北史「周文帝令二趙文深至江陵一、影寫寺碑」‖摹本。

【影繪】エ　圖うつしえ、幻燈。‖影戲・影燈。

【影燈】トウ　影燈。

【影響】キョウ　かげぼうしをつかまへる義、取リ止めが無き響。谷永、論二神僊一「求之溢數、如二影一風一一」、終不可得」

【陰影慶】ケイ　表面に立ちては弱きものが、かげにてのみ、强きふりする義。

十九畫

【髣髴】チ　支

世家「非龍非一、非虎非羆、齊ゑつち、龍に似て黄色。史、齊

所獲霸王之輔」‖蜻・地蟢。

彳部

【彳】チキ　陌

○ああゆむ（歩）少しく歩む。○たたずむ。○圖漢字の部首の名稱。‖行人扁。

【彳亍】チキ　行く貌。左歩を彳と爲し、右歩を亍と爲す、合すれば行字となる。潘岳、射雉賦「一一中驛」一說に小歩して止まる貌。

三畫

【彷】シャ　麻

○いつぽんぼうし、まるさぼし。○蘇軾詩「略一橫一秋水」‖獨木橋。獨梁・孤彷・渙彷。

四畫

【役】ヤク　陌

○國境をまもる（戍邊）又、其の守備「遠一」「戍一」○いくさ（戰爭）軍旅の事をいふ。○えだち、政府の土木事業などにつかはれる、ぶやく「賦一」「公一」「錄一」○つかふ。孟、離婁「使一」つかはれ人。「小德一大德」「使一」「役者」「役人」「役夫」「役人」「役使」「役人」「役者」「役人」「役者」「役人」「役者

「含ノ使動ニ一一」

【征旅】セイリョ　征伐に往ふ軍隊。曹植詩「藹ニ我一一」

【征路】セイロ　たびのみち。鮑照詩「鳴雞戒ニ一一一、羈旅落日分」＝征途。

【征矢】セイシ　國戰陣に用ふる矢。

【徂】ソ　遽

○ゆく（往）詩、豳風「我一東山」○ゆく（死）史記「可吁嗟ニ人令、命之衰矣」＝殂。○ねらふ、狙に通ず。漢書、張良傳「良與客一擊秦皇帝」○はじめ（始）

同訓異義　徂・往・之・如・逝・行・征・

徂・往・之・如・逝・行・征・

[illegible]

【徂謬】ソビュウ　ねらひうつ。又、ねらひうちもの。＝狙謬。

【徂歲】ソサイ　すぎ去りしとし。詩、鬱逝文「晩ニ一一一鬱經」＝徂年。

【徂謝】ソシャ　人の死をいふ。長くこの世をすぎ去る意。類風卿詩「懷貫久一一」

【徂暑】ソショ　ゆくあつさ、去る暑季、じて陰曆六月の異名。詩、小雅「四月維夏、六月徂暑」

【徂征】ソセイ　汝ゆきて伐つ。書經「維時有苗弗ノ率、汝一一」

【徂年】ソネン　すぎゆくとし。後漢書「一一已流、壯情方勇」

【徂落】ソラク　○死。＝往來・徂來。○ゆきゆき。＝往來・徂來。

【徂逝】ソセイ　天子の死。＝崩御・殂落。

【徂送】ソソウ　遣み行く軍隊。

【低】テイ　齊

一徊は、たちもとほる。＝徘徊。

低徊。

【彼】ヒ　紙

○かれ、あれ、あ。此・我・己の對。孫子「凡戰知一知一、知己、百戰百勝」○かし。○かの、あの。事物物物を指していふ。○人をしりぞけいやしめる辭。言ふに足らず、之を外にする辭。論、憲問「一哉一哉」○助辭の如く殆ど無意味に用ふ。詩、王風「其之子、不一與我皮甲」

【彼我】ヒガ　かれとわれと。漢書、人道不ノ殊ニ一一」

【彼岸】ヒガン　國○對岸の義、煩惱の苦海を距して涅槃名ニ一一一」○春分と秋分との日を中日といひ、其の前後各三日、合せて七日間に行ふ佛事を一一會といふ、轉じて其の季節の一種。春の彼岸

【彼岸櫻】ヒガンザクラ　國櫻の一種。山の名。今の山東省泰安縣の東南に在り。宋史「石介字守道、耕一一山下、以易教授於家」○一一先生は宋の石介の號、一一集は其の文集。

【徂落】ソラク　天子の死。＝崩御・殂落。

【徂送】ソソウ　遣み行く軍隊。

【低】テイ　齊

一徊は、たちもとほる。＝徘徊。

低徊。

【彼】ヒ　紙

○かれ、あれ、あ。此・我・己の對。孫子「凡戰知一知一、知己、百戰百勝」○かし。○かの、あの。事物物物を指していふ。○人をしりぞけいやしめる辭。言ふに足らず、之を外にする辭。論、憲問「一哉一哉」○助辭の如く殆ど無意味に用ふ。詩、王風「其之子、不一與我皮甲」

【彼我】ヒガ　かれとわれと。漢書、人道不ノ殊ニ一一」

【彼岸】ヒガン　國○對岸の義、煩惱の苦海を距して涅槃名ニ一一一」○春分と秋分との日を中日といひ、其の前後各三日、合せて七日間に行ふ佛事を一一會といふ、轉じて其の季節の一種。春の彼岸

【彼岸櫻】ヒガンザクラ　國櫻の一種。前後に開花し淡紅色の花を著く。

【彼己】ヒキ　彼と己と。人を指す辭。己は助辭の顏令「對ノ物而言、目ニ一一」

【彼蒼】ヒソウ　そら（天）。詩、黍離「一一者天」、轉じて天に祈ぶるにいふ。禮、祭千二耶文「一一者天、曷其有極」

【彼此】ヒシ　かれとこれと。左昭元「疆埸之邑、一一彼一此」、何帝之有」

【知ノ彼知ノ己百戰不ノ殆】シレヒチシレヒヒヤクセンフタイ　彼我の情勢に通ずれば、百たびの戰ふも危からず。孫子「謀攻「一一、不ノ知ノ彼而知ノ己、一勝一負、不ノ知ノ彼不ノ知ノ己、每ノ戰必敗」

【彼或彼載】ヒヒヤクヒヤク　人をしりぞけいやしめる辭。平解參看。

【彼一時此一時】ヒヒトキシヒトキ　かの時はこの時、この時はこの時、各其の時に應じて行ひしことにて、決して矛盾にあらず「孟、公孫丑」

【彼等】ヒラ　○かの人たち。○人を蔑めていふ、あいつら。史、酷吏傳「如ニ一一者、無足與計ニ天下事」

【彿】フツ　物

髣（髣部五畫）に同じ。彷一は、さもにたり。＝髣髴。

【往】ワウ　㊀㊁　養　俗作辛は

㊀①ゆく、いぬ（行・之）「孤一」、霞去り而一」、さる（去）來の對。○いにしへ（古）むかし（昔）過去。「既一」「古一」「往年」「往時」「往日」「往事」「往者」「往歲」「往月」「往年」「往時」「往日」「往事」「往者」「往歲」「往月」「往年」「往時」「往日」「往事」「往者」「往歲」「往月

【後】ゴウ　のちのくるしみ。詩經「無ソ有ニ一一一」＝後難。

【後患】ゴカン　後日のわざはひ。戰國策「公今言ニ最趨太易ニ恐有ニ一一一」

【後宮】ゴキウ　天子のおくとてん。轉じて、后妃の稱。史、周紀「入ニ王一一一」＝後庭。

【後距】ゴキヨ　○あとぞなへのゑんぜい。漢書、西域傳「爲ニ貳師一一一」距は一に、拒に作る。＝後軍。○うしろのけづめ。進甫子「前爪一一一」

【後起】ゴキ　後の世のてほん。北史、惟遵而相王ニ臨ニ厥一一一」

【後族】ゴゾク　あとでくやむ。漢書、疏廣傳「宜成名立、如ソ此不ニ去、恒有ニ一一一」

【後世】ゴセイ　後日のうれひ。孟、離婁「言ニ人之不善ニ當ソ如ニ一一一何」

【後勁】ゴケイ　あとぞなへの精兵。左、宣十二「ニ中軍一一一」

【後凉】ゴリヤウ　○うしろの方のけしき。○舞踏の後壁に書きし凉色。＝背凉。

【後纘】ゴサン　○あとよりつづく。○つづめ。晉書、凉帝紀「率ニ諸將一以爲ニ一一一」○あとつぎ。唐書、凉公曌傳「耳巢一一」

【後言】ゴゲン　かげぐち。かげでそしる。書、益稷「汝無ニ面從退有ニ一一一」

【後見】ゴケン　國うしろみ。禁治產者又は親權者なき未成年者を監督するやめ。

【後顧】ゴコ　うしろをかへりみる。あとの心配。魏書、李冲傳「無ニ一一之憂」

【後見】ゴケン　のちのよ。見も後。子孫。書、仲虺之誥「以ソ懷ソ衆、以ソ禮制ソ心、垂ニ裕一一一」＝見後。

【後事】ゴジ　○わが死後の事ども。書、司馬紹傳「後三國以ニ一一一」○後來の事。寄書、圖繪傳「前事不ニ忘、一一之戒」

【後嗣】ゴシ　あとつぎ。書經「伊、師于ニ一一一」

【後室】ゴシツ　國貴人のやもめ。＝未亡人。

【後身】ゴシン　うまれがはりのからだ。來世の身。鄭谷詩「一一一唯願似ニ師身」

【後進】ゴシン　あとより進み來る。又、其の人。論、先進「一一於禮樂、君子也」＝後輩・後學。

【後進領袖】ゴシンリヤウシウ　後生少年者の中に頭となるもの。晉書、裴秀傳「秀字季彥、少好ソ學、有ニ風望ニ、八歲能屬ニ文、時人爲ニ之語ニ曰、一一、有ニ裴秀ニ」

【後主】ゴシユ　○前の主のあとより行くくるまを。後漢書、賈誼傳「前事覆、一一一誡」○そへぐるまを。孟、滕文公「一一一數十乘、從者數百人」＝副主。

【後生】ゴセイ　○あとより生れて來る子孫。詩、商頌「烈ニ我一一一」＝後裔。○我より後れて生るる者。少年。後進。○「一一可ソ畏」＝後輩・少年・後進。○王商傳「一一之事、皆受ニ命皇太子ニ」＝後宮。

【後世】ゴセイ　○のちの世。＝後代。○のちの子孫。史、管蔡世家「其一一」

【後先】ゴセン　あとと、さきと。おくれさきだつ。詩、賦「鴛鴦監兔爰、雉一一」＝前後・先後。

【後素】ゴソ　繪畫をいふ。素は白粉の類。古の繪畫は先づ彩采を布き、最後に素を以て其の間に分布す。論、八佾「子曰、繪事ソ後ニ一ソ」

【後代】ゴダイ　のちのよ。漢書、王莽傳「爲ニ一一一法」＝後世・後裔。

【後代嘲】ゴダイチヤウ　のちの世に殘るはぢ。晉書「將ソ爲ニ後代所ニ嘲」義不ニ敢拜ニ也」

【後知】ゴチ　人よりあとにさとり知る者。孟、萬章「使ニ先知覺ニ一一一」＝後覺・後進。

【後塵】ゴジン　後方のちり。人のあとにつく。蘇、赤壁賦「羽化而登ニ仙、駕ニ一一一」以遨」＝其塵。

【後生可ソ畏】ゴセイカイイ　後輩は後に如何になるか人物になるかも知れず、敬ふべしとの意。論、子罕「子曰、一一一、焉知ニ來者之不ニ如今也」

【後世】ゴセイ　○のちの世。＝後代。○のちの子孫。史、管蔡世家「其一一」

【後先】ゴセン　あとと、さきと。おくれさきだつ。詩、賦「鴛鴦監兔爰、雉一一」＝前後・先後。

【後素】ゴソ　繪畫をいふ。素は白粉の類。古の繪畫は先づ彩采を布き、最後に素を以て其の間に分布す。論、八佾「子曰、繪事ソ後ニ一ソ」

【後代】ゴダイ　のちのよ。漢書、王莽傳「爲ニ一一一法」＝後世・後裔。

【後代嘲】ゴダイチヤウ　のちの世に殘るはぢ。晉書「將ソ爲ニ後代所ニ嘲」義不ニ敢拜ニ也」

【後知】ゴチ　人よりあとにさとり知る者。孟、萬章「使ニ先知覺ニ一一一」＝後覺・後進。

【後塵】ゴジン　後方のちり。人のあとにつく。蘇、赤壁賦「羽化而登ニ仙、駕ニ一一一」以遨」＝後

待つ義。漏はみづとけい。「物紀原」「唐元和中、方盛一一一於朝門外、以含雪百官朝」風俗通」

【待令】ダイレイ　國人又は役目などをまちあはせる。又、其の室。「一一室」「一一廳」じて藝者を招きて遊興する所。

【待女郎】ダイジョロウ　國婚禮のとき新郎に伴ひつつき添ひてせわをする女。＝伴女。

【待春】ダイシュン　國○人の來るをまつ夜。○陰曆十四日の夜の稱。十五日の宵月をまつ夜の義。

【徘】ヤ　圓

彷―はたちもとほる、さまよふ。「楚辭」招魂「彷―無所倚」＝方羊・徜徉・翔徘。

【律】リツ　チツ　圓

○てゝし、笛にて定めたる音樂の調子。音調を陰陽に分ち、陽六を六律、陰六を六呂と云ふ。合せて十二律。之を陰曆のい、變化を察す。卽ち六律は黃鍾(子)・大呂(丑)・太簇(寅)・姑洗(辰)・蕤賓(巳)・夷則(午)・無射(未)・應鍾(酉)の陽六を六呂とす。漢書、律曆志「一一有十二月」に配して時候のしるしとす。漢書、律曆志「一一有十二月」に配して時候のしるしとす。陽六爲一、陰六爲呂、黃鍾(子)・林鍾(巳)・南呂(未)・應鍾(亥)の陰六を六呂とす。漢書、律曆志「一一有十二月」に配して時候のしるしとす。

【待令】ダイレイ　國人又は役目などをまちあはせる。又、其の室。「一一室」「一一廳」じて藝者を招きて遊興する所。

【待女郎】ダイジョロウ　國婚禮のとき新郎に伴ひつつき添ひてせわをする女。＝伴女。

【待春】ダイシュン　國○人の來るをまつ夜。○陰曆十四日の夜の稱。十五日の宵月をまつ夜の義。

【徘】ヤ　圓

彷―はたちもとほる、さまよふ。「楚辭」招魂「彷―無所倚」＝方羊・徜徉・翔徘。

【律】リツ　チツ　圓

○てゝし、笛にて定めたる音樂の調子。音調を陰陽に分ち、陽六を六律、陰六を六呂と云ふ。合せて十二律。之を陰曆のい、變化を察す。卽ち六律は黃鍾(子)・大呂(丑)・太簇(寅)・姑洗(辰)・蕤賓(巳)・夷則(午)・無射(未)・應鍾(酉)の陽六を六呂とす。漢書、律曆志「一一有十二月」に配して時候のしるしとす。陽六爲一、陰六爲呂、黃鍾(子)・林鍾(巳)・南呂(未)・應鍾(亥)の陰六を六呂とす。漢書、律曆志「一一有十二月」に配して時候のしるしとす。

帝之所作也」○のり「格―」「戒―」「記―」「倍―」○おきて「法―」「新―」「刑―」(軍法・刑書)○つねゝ(常法)○○ぶん(遵)中庸「上―」天時」○○くのし、けづる(理)髮○○廢令の等級。○法を以て正す。○一韻八句よりなる詩。○○佛法上のいましめ。身と口と意とにより生ずる邪念を斷つ修行。佛國記「至天竺」又佛教の宗派、戒―「尋求戒―」を守るを主とする宗派「―宗」戒―宗」○不―は律。○一―は一概の義「千篇一―」

【律紀】リツキ　おきて、のり。「蘇軾詩」老將轅ノ兵精―一―」＝紀律。

【律儀】リツギ　○のり、模範。王褒文「永―」四教、示毒聞之―一―」○リツギ　國堅く戒法を持し威儀を慎み守り、一切の惡を禁ずるをいふ。「雜阿含經」＝律儀斷。○國リツギ　實直、義理が堅い。

【律師】リツシ　○國十法を備へたる僧の稱。寶藏經「具足十法、名―一―」○國リツシ　僧官、僧都の次位、正・權の二に分つ、五位に準ず。

【律詩】リツシ　八句よりなる詩の一體。五言と七言の別あり、共に二句を起聯、三四の句を前聯、五六の句を後聯(頸聯)、七八の句を尾聯といふ。前聯と後聯とは對句を用ふ。「五律」「七律」

【律宗】リツシュウ　國佛教の一派。唐の僧鑑眞に始まる。戒律を守るを主とす。我邦にては僧良辨之を傳ふ。

【律書】リツショ　法律書。史・太史公自序「作―一―第三」

【律律】リツリツ　山のけはしく高大なる貌。詩、小雅「南山―一―、彊瓜弗弗」＝律律。

【律呂】リツリョ　六律六呂。音樂の調子。國語「―一―不易、無妄物、也」字解參看。

【律令】リツレイ　○國家のおきて。大綱を律、條分せるを令といふ。史、酷吏「主所ノ是、前主所ノ是、著爲律、後主所ノ是、疏爲令」○國リツレイ　令は其の刑すに示す法令。令を犯すものを刑する制を律といふ。「―一―格式」式は臨落を時に從ひて改訂するもの。

【律曆】リツレキ　こよみ、一年十二箇月の陰陽季節に關する法則。史、歷書「一―天所三以通二五行八正之氣」

【律歷】リツレキ　前條に同じ。曆・歷通ず。

【徑】ケイ　ケイ　圓

○①事を通ぜず、たゞ人及牛馬

七　圓

○①事を通ぜず、たゞ人及牛馬に或作は逕

のあゆむのみち(步道)○こみち(小路)ほそみち(細路)「小―」「山―」「荒―」「石―」「蘿―」「山―」「樵―」「斜―」「旁―」「邪―」「山―」「澤―」「中―」○つひに。史、滑稽傳「不過二一斗一醉矣」＝竟。

同訓異義　徑・直・徑の別は唯「口部八畫」の條を見よ。

【徑行】ケイコウ　少しも遠慮することなくまつすぐにおこなふ。禮、檀弓「有二直情而―一者」

【徑診】ケイシン　田四のあぜみち。詩經、魏「此漢上卽有二―一以通二天水」

【徑寸】ケイスン　一寸のさしわたし。史、齊世家「尙有一一之璣、照二車前後十二乘一者十枚」

【徑庭】ケイテイ　大いに隔りある義。徑は狹く庭は廣し、故に比す。莊、逍遙遊「大有二―一、不レ近二人情一」徑一本逕に作る、同じ。

【徑畔】ケイハン　こみちのほとり。邪律斐材詩「花滿―一、春泉響」

【徑輪】ケイリン　徑はさしわたし、輪は周囲。酉陽雜俎「直二―一、者二磨裂」

【徑路】ケイロ　○こみち、ちかみち。易經「艮爲山、爲二―一、爲二小石一」＝小路。○國ケイロ　茶りしすぢみち。＝經路。

【徐】ジョ　風

○しづか、おもむろ、しづかに、おもむろに「安―」「酥軾、赤壁賦「清風―來、水波不レ興」○やすらかに行く(安行)のり(緩)○やすく(安徐)○―はやすく(緩)おそし(遲)○ゆるし、ゆるやかやか(緩)おそし(遲)○のびやかに(舒)○やゝ。○禹貢の九州の一、今の山東・安徽・江蘇諸省の一部に跨る。○古の國名、其の今の安徽省泗縣の西北に在り。故城址あり。

【徐行】ジョコウ　しづかにゆく。孟、告子「―後進者」「謂二之弟一」＝徐歩。

【徐看】ジョカン　詩「選日―一卿纖華」しづかにながめる。

【徐靡】ジョビ　ゆるやか。又、ゆつくりすぎる。纖惡、鄭文傳「大舉之後、將士士氣不レ可二使用一、且―一之」＝安穩。

【徐賦】ジョフ　南唐の鍾陵の人、著く花竹木草草桑の類を畫く、花果尤も佳なり、宋の太宗嘗て目く、花果の佳妙、吾獨り壓あるを知るとの。

【徐進】ジョシン　○ゆるやかに進む貌。朱存理詩「松林過雨步―一」＝遲遲。○

【徐來】ジョライ　○ゆるやかに來る。「水波不興」

【徐徐】ジョジョ　○しづか、おもむろ、しづかに、おもむろに「安―」「酥軾、赤壁賦「清風―來、水波不レ興」○やすらかに行く(安行)のり(緩)○やすく(安徐)○―はやすく(緩)おそし(遲)○ゆるし、ゆるやかやか(緩)おそし(遲)○のびやかに(舒)○やゝ。○禹貢の九州の一、今の山東・安徽・江蘇諸省の一部に跨る。○古の國名、其の今の安徽省泗縣の西北に在り。故城址あり。

【徐行】ジョコウ　しづかにゆく。孟、告子「―後進者」「謂二之弟一」＝徐歩。

【徐看】ジョカン　詩「選日―一卿纖華」しづかにながめる。

【徐靡】ジョビ　ゆるやか。又、ゆつくりすぎる。纖惡、鄭文傳「大舉之後、將士士氣不レ可二使用一、且―一之」＝安穩。

【徐賦】ジョフ　南唐の鍾陵の人、著く花竹木草草桑の類を畫く、花果尤も佳なり、宋の太宗嘗て目く、花果の佳妙、吾獨り壓あるを知るとの。

【徐進】ジョシン　○ゆるやかに進む貌。朱存理詩「松林過雨步―一」＝遲遲。○

「來―一、困二手金罍一」○安穩ジョオン　其の感。「其感―一、其覺―

子が婦人を寵愛する。○おんな、妻妾〕〔妻一〕妾一〕〔女一〕〔嬖一〕〔女一〕○天子の妻。○おんな、つかひ、そばめ〔近侍・女官・侍女〕〔用〕○つかさ〔官吏〕○〔主〕○もちふる〔侍〕○つかさどる〔主〕○〔動・進〕○はべる。○〔統〕〔統〕〔過〕奏論「振長笏」而一。字書「內一」○すすむ〔動・進〕○はべる。○〔馬丁・馭者〕「一者」「僕一」○すぶ、すべて「一」「駕一」○つたう

明。

【從吏】ショウリ　長官に從屬する小役人。史、袁安傳「昔有二一一一、並愛金帛兒」

【從死】ショウシ　おひばらを切る。殉ひて死する。漢書、匡衡傳「樂穆貴信而士多一一」

【從姊】ショウシ　年長の女のいとこ。

【從事】ジュウジ　事にしたがひ治める。詩、小雅「聞勉一一、不敢告勞」

又、其の役目の人。「青州一一」

【從祀】ショウシ　○解けて祭る。後世の儒者の孔子の廟に配享せられるる。論語「子路、從而後者」○天子の祭に從ひ行くの。孟子、萬章「從而後者」○「甘泉一一」＝陪祭。

【從心】ジュウシン　七十歳の異稱。論語、爲政「七十而一一所欲、不ノ踰ノ矩」に本づく。

【從者】ジュウシャ　主君のともびと。論語、八佾「一一見之」＝僕從。

【從容】ジュウヨウ　たてまと。よこと。顏氏家訓「圖藏一一、常不二窘迫一」

【從順】ジュウジュン　すなはちしたがふ。書堯典「風雨時順、無ノ不一一一」＝柔順。

【從政】ショウセイ　○政事に與り聞く。論語「子路、於ノ一一一手何有」○官吏に服する。＝服官。

【從前】ジュウゼン　まへかたから、以前より。

【從嫂】ジュウソウ　從兄の妻。晉書「王彪之曰、今上年出二十歳、乘二通冠一、反今三一一臨ノ朝示二人君幼弱一」

【從卒】ジュウソツ　ともの兵卒。

【從弟】ジュウテイ　年下のいとこ。從兄參看。

【從犯】ジュウハン　罪を犯す。正犯者を助けて罪を犯すの又、其の者。

【從諫】ジュウカン　天子の事につき從ふ。詩書心詩「一一一度二紛紜一」＝諫諍。

【從父】ジュウフ　○をじ、伯父・叔父。爾雅、釋親「○父之命にしたがふ。儀禮、喪服「姪人有三二從之義、無二專用之道一故歸二于夫一夫死從子」

【從父兄弟】ジュウフケイテイ　同祖の兄弟。爾雅「兄之子、弟之子、相謂爲二從父昆弟一」弟とは兄。

【從服】ジュウフク　したがふ。張衡、七命「一一九國、横二制八式一」＝服從。

【從母】ジュウボ　母方のをば。爾雅、釋親「母之姊妹爲二一一一」

【從妹】ジュウマイ　年下の女のいとこ。

【從來】ジュウライ　由りて來るところ。史、四面戎狄傳「見二蜀布邛竹杖一、使、問二所一一一」

【從量稅】ジュウリョウゼイ　輸出入品の數量を標準として課する關稅。

【從橫】ジュウオウ　○たて（南北）と、よこ（東西）と。遠編詩「岐路自一一」○戰國の時の蘇秦の合從說と、張儀の連衡說と。衡は橫に通ずず。漢書、藝文志「一一家者流、蓋出二于行人之官一」○攻守和戰の計略。漢微詩「一一計不ノ減」○意のままに自由になる。

【從容】ショウヨウ　○ゆったりとしたさま。論語、述而「君子坦蕩蕩、小人長戚戚」＝從容。○人と心の合ふを相一といふ。○一一は一意の貌。○まつけ「利一」

【得意】トクイ　○意の如くなりて滿足する。失意の對。司馬法、天子一一則悅歌。圖○自己の眞もなれ熟したのること。得手。○商家にて買ひつけの御得客。花客・顧客。

【得意天】トクイテン　人の心に滿足する天氣。書、堯典「花客・顧客。

【得意雨】トクイウ　○もやう。碧巖詩「千枝紅雨一一」

【得業】トクギョウ　學業を修め得たる者。釋氏要覽「一一、祿識勤苦者之美稱也」＝卒業・畢業。

【得業士】トクギョウシ　國語學寺門學校などの卒業生にあたる稱號。

【得罪】トクザイ　つみをうる。虞綽詩「一一既不ノ測」

【得度】トクド　○ならると、うしなふと。成功と失敗と。韓詩外傳「諸侯不ノ言二一一一」＝得失。

【得策】トクサク　利益あるはかりごと。＝上利。

【得計】トクケイ　○。

【得志】トクシ　志をうる。孟子「一一與民由之」

【得失】トクシツ　○うると、うしなふと。後漢書、和帝紀「帝引二見公卿一、問二一一一」＝得喪・成敗。

【得心】トクシン　國よく心にわかる。ふとこころする。＝合點・納得。

【得所】トクショ　適當の處置を得る。易經「交易而退、各得二其所一」

【得色】トクショク　學記「過則有而不ノ一一一」

【得髓】トクズイ　國道の奧義をさとり得る。髓は骨の中に在るもの。傳燈錄「師曰、汝得二吾髓一」

【得道】トクドウ　○正しき道を得る。孟公孫丑「一一一多助」○國佛の道をさとる。

【得度】トクド　國煩惱を脫して佛來を得る。法華經「一一一三界苦惱之患」＝得道。

【得度】トクド　國○佛門に入りて濟度を得る。法華經科註「俱從二善提心一、故云二一一一也」○官よりの度牒を受けて僧尼となる。

【得得】トクトク　○得意なる貌。王維詩「親故應二須一一來」○能人の方言、こころとさら、わざわざ。眞誥「手水手一山一一來」＝特地。

【得民】トクミン　たみの信頼をうける。人民の心を得する所となる。易經「以ノ貴下ノ賤、大ノ一也」

【得手】トクシュ　國得意のわざ。＝上手・所長・長所。

【徘】ハイ　國

さまよふ。たちもとほる。＝徘徊。

【徘徊】ハイカイ　たちもとほる。さまよひあるく。漢書、高后紀「一一往來」

【徠】（人部六畫）の古字。

【徂】ソ　は山名、徂（彳部五畫）の條參看。＝往來。

九畫

【徑】ケイ　國　通俗ナ・直に

彷徨は、たちもとほる。＝徘徊。徑は、ゆきすぎる（往來）

【循】ジュン　國

○したがふ（順）○よる（依）よりそふ。左、昭二三「一一山而南」○めぐる（巡・旋・繞）○なでる（撫・摩）○やすんず（安）なで安んず。○よし（善）すなほ。論、子罕「夫子一一然善誘人」○のぶ（述）○因一は、づづづして決定せざる貌。

同副副顯　循・順・從・隨・徘・徨・遵・徇の則は順（頁部三畫）の條を見よ。○ジュン　循・繞・環・巡・周・廻・回等の則は繞（糸部十二畫）の條を見よ。

【循行】ジュンコウ　巡りあるく。漢書、宣帝紀「遣二使者一一一郡國」

【循環】ジュンカン　○めぐるたまき。漢、兵參「寄正相生、如一一之無端」○繼ぎ續く。韓、孟「反復して窮ならざるに臨ぶ。史、高祖紀贊「三王之道、若一一終而復始」

【循然】ジュンゼン　衣序ある貌。宇解參看。

【循吏】ジュンリ　順良にして法にしたがひて善く民を治むる役人。史記に一傳あり。

【循理】ジュンリ　道理にしたがふ。史、循吏傳、注「謂二本ノ法一ノ一之吏」

【循貫】ジュンカン　成法を遵守して貫く民を治める。元史、成遵傳「察二守令貫否一、得二一一者九人一」

【復】フク　宿屋

㊀㊁㊂㊃

㊀かへる。もどる（反・返・還）往の對「往一」○かへす（返）もどす。○もやす（自）つけ（告）○かへし、ごと（反命）命を受けて爲したる事を上申する「一命」○くりかへす。論、先進「南容三一一白圭」○むくゆ（報）「一仇」○こたへる（答）「敬一」○たまよび（招魂）○かさなる（重）複に通ず「一道」かへす（反覆）○易の卦の名。「復上」○のべる（除）漢書、高帝紀「民「吾一一其身」○くつがへし「お」ほふ（覆）○平一。㊁また（又）ふたたび（再）夫雅、大明序「文王有二天德一故天一命武王一也」

同副顯　復・餘・還・反・返・回・旋の則は歸（止部十四畫）の條を見よ。

○ フク　復・又・赤・還・有・也の則は又（部首二畫）の條を見よ。

【復員】フクイン　軍用語、戰時動員令により召集せし在鄕軍人の服役を解き、軍隊を平時の編制に復するをいふ。「一一令」

【復位】フクイ　もとの位にかへる。左傳「日二入復二其位一、日二一一一」

【復仇】フクキュウ　かたきうち。＝復讐。

【復讐】フクシュウ　もとにかへす。もとどほりになる。宋書、武帝紀「書減一牛者、可二悉一一」

【復活】フクカツ　○いきかへる。晉書、頴含傳「服藥太多、價三五藥耳、今當二一一一」＝蘇生。○國一日遲へ亡びし事が再び興る。＝復興。

【復活日】フクカツジツ　耶蘇死者がよみがへり復活せしといふ日。陽曆三月二十一日後に來る滿月の日より數へて第一の日曜日。

【復官】フクカン　もとのやくにかへる。＝復職。

【復權】フクケン　法律により公權を停止せられし者が其の失ひし權利をとりもどす。

【復古】フクコ　古にかへす。一旦廢せし事をもとにもどす。又、古にかへる。詩經、小序「王政、宣王一一也」

【復興】フク　再びおこる。後漢書「廢而一一、絕而復續者也」

【復讐】フク　かたきうち。孟、滕文公「爲二匹夫匹婦一一ノ一也」＝復仇。

【復習】フク　さらへる、くりかへし習ふ。＝温習。

【復初】フク　初の本性にたちかへる。莊子「繕二性於俗一、學以求ノ復二其初一、滑二欲於俗一、思以求ノ致二其明一、謂二之之民一」

【復飾】フク　僧侶の還俗する義。出家するを落飾といふの對。

【復職】フク　再びもとの職務に就く。

【復生】フク　よみがへる。晉書「死人一一不ノ娠、生人不ノ愧貞也」＝蘇生。

【復性】フク　心の惑欲を除き去りて其の本體の靈性にたちもどる、性の初に復る。宋儒の唱道せし說、孟子の性善、莊子の繕性等の說に本づく。

【復性書】フク　三篇、唐の韓愈の門人李翺、手は習之の撰。

【復聖】フク　元の文宗、顏子を封じて兗國一一公と爲す、明の嘉靖の時、封侯爵を罷めてただ一一と稱す。

【復職】フク　一旦移動せし月俸を再び酒にかへす。

【復租】フク　租稅を納めることを免除する。北史、魏太宗紀「問二人疾苦、一一一年」

【復道】フク　上下二重の道。二重の廊下。史、秦始皇紀「爲二一一、自二阿房一渡ノ渭、屬二之咸陽一」＝複道。

【復答】フク　かへりごとをする。

【復除】フク　其の徭役を免除する。漢書、宣帝紀「並受二一一一、或加以二金帛一」

【復土】フク　葬式に棺を下したる上を土にて掩ふ。ほりたる土をもとに復する義。「周禮、少司徒、疏」

【復文】フク　漢文を假名交り文に譯したるものを更に漢文にかへす。

【復閣】フク　屋根の上にまた屋根のある構造のたまや。

【復辟】フク　辟は君、再び天子の位に即く。書、咸有一德「伊尹既復二政厥一一」

【復命】フク　命を受けて行ひたる事の次第を申し上げる。論、鄉黨「賓退必一一曰、賓不ノ顧矣」＝反命。

【復用】フク　二度もちふる。禮記「儒二一一之府庫一而弗一一」

【復奏】フク　すでに天命にまかせたれば、また何を疑はんや。陶潛、辭去來辭「樂二夫天命一一」

【徧】ヘン　國　一作に遍

あまねし（市・周）あまねくす、廣くす。淮南、主術「則天下一爲二徧覆矣」

【徧】ヘン　國　同音の偏・周・普・浩・浹の別は周（口部五畫）の條を見よ。

【徧至】ヘン　あまねく至る。史記「瑞應

一一」

【徧服】ヘン　すべての人にあまねくたまふ。左傳「一一二天矢」

【徧周】ヘン　あまねし。杜甫詩「寒類難二一一一」「語譯紗二流離」

【徧覽】ヘン　あまねくさがしもとめる。李紳詩「遣騎亦一一」

【徧身】ヘン　全身に同じ。無名氏、蠶婦詩「一一綺羅者、不二是業一蠶人」＝遍身。

【徧觀】ヘン　天子のあまねく侯伯を引見する義。周禮「三識一一」

【徧讀】ヘン　あまねくよむ、博く書を讀む。杜甫詩「閉ノ戶一一案讀書」

【徧報】ヘン　あまねくむくいかへす。史記「一一諸所二嘗見一德者」

【徧歷】ヘン　あまねく經めぐる。南史「一二名山、訪二尋仙藥一」＝遍歷・周遊。

十畫

【徒】ヨ　國　通騎・僦に

えだち、えたつ（役）國家の土木工事などに使役せられる、其の力役の人。

【徒役】ヨ　えだち。官の工事などに義務として使はれる。＝徒役。

【徒戍】ヨ　邊境を守る兵卒。李華、弔二古戰場一文「煮鹽一一、折骨召募」

【徠稅】ライ　義務にて公役に服するとき、年貢を納めるとき。陸贄、食貨志「轉徙者既二一一一」

【徠】ケイ　平聲　國

○まつ（待）孟、滕文公「書曰一一、我后」○こひねがふ。＝來。

【徠福】ライ　こひねがふ。禮、月令「謹二關梁一、無二一一」

【徬】ベウ　陽聲

○よりつく（依附）傍と通ず。○彷に通ず、一徨はさまよふ。

【徬徨】ベウ　陽聲

○かすか（幽）ほのか、くらし、○明やかならず。○ひそかに、しのびやかに、隱れ行く、かくす（匿）左、哀十六「其徒一之」○ほそ（細）ちいさし（小）「細一」「至一」孟、公孫丑「具體而一一」○たく（精妙）「一妙」○おとろへる（衰）「衰一」○いやし（卑）「一賤」孟、離婁「子思臣也一也」○うかがふ（伺察）○おほふ（蔽）○なし、ふかりせば（無）論、憲問「一一者仲、吾其被髮左衽矣」○すくなし（少）○かさ（胡麻）○かく（飼）○古の國名、今の山東省東平縣の西、一子の封土。

同訓異字 微・無・天・罔・亡・莫等の別は無（火部八畫）の條を見よ。

【微醺】ビ　わづかなる酒。酣燕文「乃知郎君賢一一、昔二酒蠻觴一一」蘇軾詩「一一坐二緘口一、酒則饗矣」＝輕醺・微醉・醺醺。

【微圓】ビ　すこしくらし、うすぐらし。北史「室中一一」

【微意】ビ　いさささかのこころざし。己が志の謙稱。魏武帝文「今奉二雞舌香五片一、以表二一一一」＝微志・微事・微誠。

【微陰】ビ　かすかにくもる。文、陰陽氣始生、故曰二一一一」

【微婉】ビ　文辭言語の微妙にしてあてやかなる義。婉は婉曲。史記、宋世家「左氏之一一」

【微雨】ビ　こまめ。陶潛詩「一一從東來、好風與之俱」＝小雨・細雨。

【微】ビ　力弱きものを引き立てる。詩、敬文「輔弱一ノ一」

【以ノ微知ノ明】ビ　得難き些細の點に流きて大なる事實を發見する。荀、非相「以近知ノ遠、以一知ノ萬、一一」

【微温】ビ　なまぬるし。陸游詩「金鴨

一一香纖纖」

【微衰】ビ　ほのめかして減ずる。五代史、李圓昭傳「初亭時ノ酒、太祖嘗一一ノ之、遂終身不飲」

【微行】ビ　○しのびあるき。史、秦始皇紀「一一咸陽」○こみち。詩、豳風「遵二彼一一一」＝小徑。

【微香】ビ　かすかなるにほひ。羅鄴詩「一一暗惹遊人步」＝微芳。

【微笑】ビ　すこしのさむさ。黃清老詩「落月帶二一一一」＝輕寒・薄寒。

【微感】ビ　すこしく心をうごかす。蘇軾詩「人情難二强回一、天性可二一一一」

【微吟】ビ　こゑにて詩をうたふ。魏文帝、燕歌行「短歌一一不ノ能ノ長」

【微響】ビ　すこしのひびき。

【微明】ビ　かすかなる日のあたたかさ。閑孤及詩「寢雪初二一一」

【微臣】ビ　いやしきみ。己の身の謙稱。杜甫詩「一一此外更何求」

【微醺】ビ　ほろよひ。宋史、邵雍傳「嘗時酌ノ酒三四盞、一一即止」＝微醉。

【微官】ビ　地位の卑き官。岑參詩「自嘲無二萬策、不ノ敢動二一一」

【微言】ビ　○微妙なることば。漢書、藝文志「仲尼沒而一一絕」○なぞ、謎。列、說符「人可二與一一一乎」

【微證】ビ　すこしばかりのつみ、いさささかの證責。「晉書、楊賞紀傳」

【微悅】ビ　すこしのうらみ。周必大詩「一一抱二一一」

【微歌】ビ　ほのめかして歌ふ。李白、月下獨酌「初亭時ノ酒、太祖嘗一一ノ之、遂終身不飲」

【微細】ビ　○ささやか、こまか。＝微小。○こまかにくだくだし。漢書、刑法志「一一之法」

【微非】ビ　わづかのつみ。

【微子】ビ　殷の紂王の庶兄、名は啓、紂淫亂なりしかば、數諫むれども聽かれず、遂に之を去る。周公武王を誅し、一一に命じ、殷の後に代りて宋に國せしむ。

【微志】ビ　○わづかばかりのこころざし。韓愈詩「孤雁奉弱翅、一一」○己が志の謙稱。＝微意・微衷。

【微旨】ビ　おくふかくたくなる旨意。後漢書、徐防傳「孔聖既沒、一一將絕」

【微時】ビ　貧賤なりし時。漢書、外戚傳「宣帝詔求二一一故劍」

【微辭】ビ　むきだしに其の失をいはず、婉にほのめかし言ふことば。公羊傳「定元多二一一」

【微震】ビ　わづかの震動。感じ難きほどの輕き地震。

【微者】ビ　いやしきもの。

【微傷】ビ　かすりきず。＝輕傷。

【微睡】ビ　まどろむ、すこしねむる。

【微酔】ビ　ほろよひ。李商隱詩「小亭閒眠一一酒」

【微生高】ビ　微生は姓、高は名。魯國の人、正直を以て名あり。論、公冶長「子曰、孰謂二一一直、或乞ノ醯焉、乞ノ諸其隣、而與之」

【微小】ビ　ちひさし。わづか。荀、非相「一一短番」＝微細。

【微笑】ビ　すこしくわらふ、ほほゑむ。莊子、好色賦「含ノ喜一一、嬌靨流盼」

【微絃】ビ　うすきぬ。潘尼詩「凱風揚二一一一」

【微積】ビ　無限小數を研究する微分學と、無限大數を研究する積分學と。＝微分積分。

【微蹟】ビ　すこしのいさを。杜牧、樂遊「郡子雄鳴咽流涕目、老臣衆輩、不ノ堪二王事一、顧二陛下之鑾一、以成二一一一」＝微功。

【微賤】ビ　いやし。＝卑賤。

【微纖】ビ　かすかにこまか。韓愈詩「不ノ知二己一一」

【微塵】ビ　かすかなるいき。纖り少き塵埃に喩ふ。

【微中】ビ　それとなくあてこすりて諷する。史、滑稽傳「談言一一、亦可二以解一紛」＝微諷。

【微衷】ビ　わづかなるまごころ、衷は中心。＝微志。

【微睡】ビ　ほそく目をあけて見る。

【微燈】ビ　かすかなるともしび。蘇軾詩「一一照二寂寥一、古夕正迢迢」

【微芳】ビ　すこしのにほひ。院籍詩「風ノ風來二一一一」＝微香。

【微注】ビ　かすかにはるかなる說。蘇

柔欲詩「晚色一一主」‖樓閣。

【微白】びはく　ほのじろし。高適詩「一一銅天外月、淡青數點海邊山」

【微班】びはん　ひくき位。杜甫詩「通三蕃一一恭」

【微微】びび　かすかなる貌。張衡、南都賦「清顯細以一一」

【微風】びふう　そよそよと吹くかぜ。杜甫詩「一一燕子斜」

【微諷】びふう　ほのめかす、そもそもなくあてつける。顧錄詩「譏笑雜三一一」‖微中

【微眼】びがん　眼鏡をかけて、人目に觸れざるやうにする。孟、高詩「一一而過、宋」

【微分學】びぶんがく　吾人の想像することの能はざるほどの細小量につきて研究する數學。

【微瑕】びか　すこしのみどり。寇準詩「圭璋琴鏡三一一」‖寸碧。

【微眇】びべう　かすかにちひさし。史、孝文帝紀「以三一一之身、託三于兆民上」‖區區。

【微步】びほ　しのびあるき。南史、王晏傳「一一詣、諸議」‖微行。

【微選】びせん　かすかにをぐらし。晉古、蘭「蘭風受三素柯、白日漸一一」

【微妙】びみょう　「古之善爲、士者、一一玄通、深不可識」‖玄妙。

【微恙】びよう　すこしの病。樂毅詩「一一不足論」‖微病。

【微爽】びそう　細故。未節の義。禮、檀弓「晉子曰、一一其嘗也可去其滯也可食」

【微潤】びじゅん　さざなみ。沈約、歌「蹙三弱水之一一」‖微波。

【微利】びり　些細なるまうけ。范成大詩「不レ爭三一一、即爭レ名」

【微涼】びりょう　すこしすずし。杜甫詩「仲夏苦夜短、開レ軒納三一一」

【微力】びりょく　すこしのちから。己の力の謙稱。准融詩「愚臣何以料、倚レ馬申一一」

【微總】びそう　ほそきいとすぢ。陳子昂詩「高堂愛三金玉、一一懸手鈎」

【微逮】びたい　さざなみ。‖細逮。

【微諫】びかん　わづかばかりのふち。高適詩「遠行今若レ此、一一果能勞」‖溝渠。

【微蹟】びせき　こまかきちり。極めて細き者に喩ふ。法華經「三千大千世界、事、全在三一一中、時有智人、彼法說」

十一畫

【徹】

徹（前條）に同じ。

十二畫

【徵】

㊀㊁　チョウ　紙蒸

㊀（召）君主、又は官府より召し出し。○めす「一兵」「一役」「禮」○あ

召し出し。○あきらか、あきらかにす（明）○しるし、きざし、あかし（兆候・效驗・證據）證排を立てて明かにする。論、八佾「宋不レ足一也」○なす（成）○（問）○とふ（問）左、僖四「寡人是一」○もとめる（求）○をさむ（斂）租稅を取り收める。○むなし（虛）○こらす、懲に通ず。㊁さいはひ（祉）○五音の一「宮・商・角・一・羽」胸より出る音、齒を合せ脣を閉きて發する烈しき音、五行に配しては火、時候にては夏に配す。禮、月令「孟夏之月、其音一」

同音異義　徵・求・索・干・需・須・要・冕の別は求（未部二畫）の條を見よ。

【徵役】ちょうえき　めし出してつかふ。周禮、春官、典祀「一一手司隸、而役之」

【徵歌】ちょうか　命じて歌はしめる。孝首、洞宮中行樂詞「選妓隨三雛鶴、一一出三洞房」

【徵募】ちょうぼ　めし出して任用する。後漢書、劉愷傳「性篤古實、每レ有三一一、必先敬欠」‖徵用。

【徵議】ちょうぎ　しるし、より所となる。聽讓にする。張公輔、夏邑門樓記「旌旗之說、無復一一」

【徵君】ちょうくん　めされても仕官せざる賢士の美稱。後漢書、黃憲傳「天下

【徵士】ちょうし　○學識たかくして官より召さるるも出仕せざる人。尊び稱す。「徵君」ともいふ。後漢書、周燮傳「一一、聖之宗也」○國朝治の初年、諸薦召し出されし人。

【徵收】ちょうしゅう　官が人民より財を取立てる。

【徵集】ちょうしゅう　人をつのりあつめる。又、物を取り立てあつめる。

【徵祥】ちょうしょう　めでたきしるし。詩經、疏「無三三灰之災、而有三一一之彰」‖吉兆。

【徵招】ちょうしょう　ともしびを呼びもとめる。呂覽、春秋、恒公樂「之一一」

【徵也】ちょうやく　かぼいうるにあらちはれる。孟、告子「徵、美也、發二美聲」

【徵璫】ちょうとう　めでたきしるし。晉書「一一表、詳、災變至、異」‖嘉瑞。詳璫。

【徵稅】ちょうぜい　租稅を取りたてる。周禮、地「徵三民之稅」

【徵招】ちょうしょう　○めしまねく。官より召し出して任用する。韓愈、詩「動君招招、待三一一」○齊の惠公の作招は韶の武、湯、惠王「蓋一一角招是也」

【徵租】ちょうそ　租稅を取りたてる。北齊書、蕭愨傳「州計レ月一一」

【徵召】ちょうしょう　招きたり、招かれたり、五

諫目三一一」

【徵驗】ちょうけん　しるし、あかし。管子「親三國之强弱、貧富、有三一一」‖徵證。

【徵候】ちょうこう　しるし、きざし。‖兆候。

【徵士】ちょうし　○學識たかくして官より召さるるも出仕せざる人。尊び稱す。周禮「一一賢之宗也」○國朝治の初年、諸薦

【徵收】ちょうしゅう　官が人民より財を取立てる。

【徵集】ちょうしゅう　人をつのりあつめる。又、物を取り立てあつめる。

【徵祥】ちょうしょう　めでたきしるし。詩經、疏「無三三灰之災、而有三一一之彰」‖吉兆。

【徵璫】ちょうとう　ともしびを呼びもとめる。呂覽、春秋、恒公樂「之一一」

【徵也】ちょうやく　かぼいうるにあらちはれる。孟、告子「徵、美也、發二美聲」

【徵璫】ちょうとう　めでたきしるし。晉書「一一表、詳、災變至、異」‖嘉瑞。詳璫。

【徵稅】ちょうぜい　租稅を取りたてる。周禮、地「徵三民之稅」

【徵招】ちょうしょう　○めしまねく。官より召し出して任用する。韓愈、詩「動君招招、待三一一」○齊の惠公の作招は韶の武、湯、惠王「蓋一一角招是也」

【徵租】ちょうそ　租稅を取りたてる。北齊書、蕭愨傳「州計レ月一一」

【徵逐】ちょうちく　招きたり、招かれたり、五

に往來する。韓愈、柳子厚墓誌銘「酒食遊戲、相一一」

【徵兆】ちょうちょう　きざし。漢書、李尋傳「一一國之先見」

【徵發】ちょうはつ　人夫を召し出し、又は需品などをとりたてる。北史「不レ得三積有三一一」

【徵兵】ちょうへい　○兵を召しあつめる。○法律によりて一一適齡者をめし出して兵役につかしめる。

【徵兵忌避】ちょうへいきひ　兵役を免れるためにわざと身體をきずつけ、又は逃げ隱れる。

【徵聘】ちょうへい　天子が禮を以てまねく。左傳「王使來一一」‖徵招。

【徵辟】ちょうへき　任用せんとて天子より召すを徵、州府などより招くを辟といふ。晉書、王裝傳「三徵九辟、皆不レ就」

【徵發】ちょうはつ　兵士などをめしつのる。

【徵用】ちょうよう　めし出して用ふる。史、儒林傳「孝文時、頗一一」‖徵庸。徵募。

【徵庸】ちょうよう　前條に同じ。庸は用。書經「采生三十一一」

【徹】

テツ　屑

○とほる、とほす（通）「通一」「貫一」○突きとほす「透一」左、成十六「射レ之一二七札焉」○（命）とどける。達する。左、昭二「一一命于執事」○あきらか（明）「明

○（召）を受け（除去）‖撤。○はぎとる（剝取）詩、豳風「一一彼桑土」○こぼつ（毀）詩、小雅「一我牆屋」○ならす（刈）「一侯」○周の稅法、井田の法は、百畝の私田を受け、耕し、其の收穫を官に納る。卽十分の一の稅、徹は通、天下の通法たる義。論、顏淵「盍一乎」○をさむ（治）○さる、すつ（除去）‖撤。○はぎとる（剝取）詩、豳風「一一彼桑土」○こぼつ（毀）詩、小雅「一我牆屋」○ならす（刈）「一侯」○周の稅法、井田の法は、百畝の私田を受け、耕し、其の收穫を官に納る。卽十分の一の稅、徹は通、天下の通法たる義。論、顏淵「盍一乎」

【徹曉】てっぎょう　夜をあかして翌朝になる。

【徹夜】てっや　語大名をいふ。徹は通、其の功績王室に通ずるをいふ。漢の武帝の詔を建て、史記には侯と、漢書には通侯とす。一解に徹は列侯。漢書、百官表「諸徹二十一一金印紫綬」‖列侯。

【徹底】てってい　よくあきらかにする。魏志、常林傳「叶呼放一一」‖徹骨、徹夜。

【徹骨】てっこつ　よくほとほし。錢鎮詩「與來何惜一一看」‖通骨、徹夜、徹底。

【徹膳】てっぜん　食膳を取りさげる。詩經、箋「膳夫一一」

【徹饌】てっせん　神佛に供へたる食物をとりさげる。‖撤饌。

【徹旦】てったん　よをあかす。陳游詩「夜坐三銅蠟一一吟」‖徹宵、徹曉。

【徹底】てっしょう　いちにち、ひねもす。張籍詩「一一風何急、漂行陵樹旁」‖終日。

【徹底】てってい　そこまでとほる。北史、宋世良傳「府君非三唯善政、清苦一一」

【徹頭徹尾】てってのはじまりおわる　はじまりより終まで、一から終始、猶、始言「一一」、朱子語類「敬字是一一工夫」

【徹法】てっぽう　周時代の租稅法。孟、滕文公「夏后氏五十而貢、殷人七十而助、周人百畝而徹、其實皆什一也、徹者徹也、助者藉也」、手解參看。

【徹夜】てっや　よとほし。朱熹詩「青燈一一課三農書」‖徹宵、通宵。

【德】

トク　職

○道を行ひて心に得るある義。善行・善道・正義・道義などの人の品行の總稱「德一」「令一」「道一」「王一」「謙一」「盛一」○賢者、君子、人、善人。○すべて人の行爲。韓愈、原道「一有凶有吉」○めぐむ、めぐみ（恩惠）「一澤」「恩一」恩に感ずる、一一とする。○善きをしへ（教化）「一一化」○さいはひ（福）禮、哀公問「百姓之一也」○ゑさを（餌）○利得。○四時の旺氣。禮、月令「其日立春、盛一在木」○國名、獨逸「一國」

【有レ德者必有レ言】とくあるものはかならずいふことあり　ある者は、よく言ふことある義。論、憲問「子曰、一一一有レ言者、不二必有レ德」

【德友】とくゆう　德を以て交る友。史、德光傳「亦與三孔丘一非二君臣一也、一一而已矣」

【德育】とくいく　德義心を養成する教育。

【德音】とくおん　○天子のおことば。漢書、董仲舒傳「陛下發二一一、下二明詔」○善言の義。詩、大雅、皇矣「帝度二其心、貊其一一」○善ききこえ、名聲。詩、豳風「一一不忘」‖德聲。

【德ノ德】とくのとく　德惠を施し行ふ。書、大禹謨「予陶邁一レ一、德乃底、黎民懷レ之」

【恃レ德者自】たのむとくのものはみづから　道德をたのみにする者は、益樂えず。史、商君傳「一一、恃レ力者亡」

【度レ德量力】はかりとくをはかりちからをはかる。左、隱十一「度レ德以處レ之、量力而行之」

【以レ德報怨】とくをもつてうらみにむくふ　ある者に德ずるに恩惠を以て怨に報ずる。論、憲問「

【累レ德】るいとく　人の道德にきづを附ける。書、說命「不レ治二德行一終三大德」

【德行】とくこう　正道にかなへるおこなひ。學經「非二先王之一一、不二敢行」

【德器】とくき　德行識量。行の成るを器といふ。漢書、杜周傳「一一自邇、爵位」、呂氏春秋「一一成就」

【德義】キク 人の行ふべき正しき義理。左傳「一一、利之本也」

【德禽】キン 雞の異名。成語考「雞有二五德一、被冠ノ之日二一一一」五德參看。

【德化】カ 德を以て民を善にみちびくこと。德教を以て感化する。漢書「謹牧二良民一、而鳳二一一一」

【德惠】ケイ いつくしみ。めぐみ。北史「務行二一一一」＝仁惠。

【德懿】イ きさとき德。孟、盡心「人之有二一一一術智者、恆存二于疾疾一」

【德教】キウ 道德のをしへ。孟、離婁「沛然一一、溢二于四海一」

【德業】ゲフ 道德と事業と。後漢書「大詩一一相續」

【德不孤】ドクフコ 德あるものは孤立することなく、必ず類ありて之に應ずる。論、里仁「子曰、一一、必有ノ隣」

【德操】ソウ 道德心の堅固にして變らざるみさを。荀子「學也者、固學一ノ之也、生乎由ノ之、死乎由ノ之、夫是之謂二一一一」

【德帝】ドウテ 道德のきこえ。後漢書「一一日盛」＝德譽。

【德色】ショク 人に恩を施したるをほこるかほ色。漢書、賈誼傳「帝二父鑢組一、慮有二一一一」

【德性】セイ 人の固有する德義の性。善を善とし惡を惡とする本性。

【德政】セイ ○めぐみある政治。後漢書、桓帝紀「先盡一一可ノ不ノ務乎」

＝仁政。○國足利時代に民しつけたる錢穀などに對して權權行使共に無效消滅ならしむる義。德川時代には棄捐といふ。

【德政碑】ヒ 官吏の德政をほめたたへたる石ぶみ。水經、濟水注「昌邑有二成人疾篤、聚碑、建和年、從事黎圃等刊ノ石、頌二德政一碑也」

【德星】セイ ○めでたきほし。道德ある人に喩ふ。漢書「陳定字仲弓、荀淑字季和、定與二子紐、湛、淑父子、討論ノ于、每一一聚、太史奏言、五百里內、有賢人聚」＝聚星。○歲星を云ふ。歲星の在る所に福ある故。史記「唐下建二漢家一封禪、天非報二一一一云」○木星の異名。

【德腔】ヒウ 仁德あるほまれ。曹植詩「君子在二朱位一、不ノ能ノ歐二一一一」

【德音】ヒウ きいはひ。鶴壽、王朗像「陛下一一、狹被二聖仁」

【德宗】ソウ 國鑑倉時代、北條家の總領の知行所「一一一領」

【德譽】ヨウ めぐみ。史、三皇紀「聖人、一一賢大」＝恩澤・恩惠。

【飽ノ德】ホウ 十分酒食に飽く義。德は惠ノ多く人に、招かれたる時の謝辭に用ふ。詩、大雅、既醉「既一一平也、醉酒一ノ、人有二士君子之行一、焉」

【在ノ德不在ノ險】ケンニ 國を治むるは德義に在りて、山川の險阻にあらず。史、吳起傳「魏武侯浮二西河一、而下、中流顧謂二吳起一曰、美哉山河之固、此魏國之寶也、起對曰、一一」

【有ノ疾德】ヤ 德の古人に及ばざるを云ふ。書、仲虺之誥「成湯放二于桀宥一、惟一一」

【德輪如ノ毛】ジ 輪は輕、德の人にあること毛の如く輕し、故に之を擧げ行ふこと極めて易し。詩、大雅、烝民「人亦有一一、民鮮二克舉一之」

【德望】ボウ 德行ありて、人より尊び望まる。北史、楊時傳「一一日重」

【德目】モク 國語、道德の細目。

【德壽】ジュ 德のすぐれたるほまれ。鏡、王朗像「朗子中、溝最有二一一一」

【德利】リ 國酒・醬油などを入れるつぼの類。とっくり。

【德無ノ鄰】ドクムリン 己に德さくあれば眞俗のいやしき所に居ても、德を以てこれを感化するが故に、みにくきことなし。荀子、榮辱「非ノ道訓ノ俗、惟一一、惟人無ノ遠」

十三畫

【徼】キョウ 蕭・嘯

①くにざかひ、とりで（邊塞）②木柵を立てて禦夷の界とする。東北なるを塞、西南なるを徼。史、李斯傳「中國以一一、而制二四海一」

【徼外】ガイ ○國境の外。漢書、西域傳「一一、以二一一一、以二一一一」

【徼巡】ジュン 夫條に同じ。＝行巡。

【徼循】ジュン 地方を見まはる。巡察する。字解參看。＝徼巡。

【徼幸】コウ きいはひをもとめる。左傳「寡君有二一一一於周公・魯公一」

【徼名】メイ よき名を得んことをもとめる。漢書、不佞傳贊「以一一干

「中尉奏言、『秦』『循京師』」○こゝでは（小道）○たゞ（妙・微・妙）㊁もとむ（要求）中庸「小人行險以一幸」○かすむ（抄）○同じ。察する。論、陽貨「惡二以一一爲知者」㊂さぐる（邏）＝邏。

同音　徼・求・柔・干・需・須・要・遵・寇等の別は求（水部二畫）の條を見よ。

【徼要】ヨウ もとめのモム。

【徼巡】ジュン うらみをもとめる。左傳「一一、我周不德」＝於楚」○「秦書」咸宮傳「少爲二秦亭長游一」

【徼幸】コウ まぐれさいはひをもとめる。中庸「小人行ノ險、以一ノ一」韓詩外傳「一一者、代性之弊也」＝僥倖。

【徼倖】コウ 前條に同じ。韓愈、交「一一萬一」

【徼求】キウ しひてもとめねがふ。宋史、劉安世傳「武夫一一不實之之龍」

【徼巡】ジュン 次條に同じ。＝行巡。

【徼循】ジュン 地方を見まはる。巡察する。字解參看。＝徼巡。

【徼謁】ケツ きいはひをもとめる。左傳「寡君有二一一於周公・魯公一」

【徼名】メイ よき名を得んことをもとめる。漢書、不佞傳贊「以一一干

當世」

十四畫

【徽】キ 微

○よし（善）「鴻一」うつくし（美）よくす、善美ならしむ。○おほはな（大索）○つよりなは（三糾繩）○はたじるし（族章）徽に通ず。轉じて廣く物のしるしにも用ふ。○むかばき、きはん（裹幅）○琴の絃の下にもの施して絃を支へ張るに用ふるもの（琴節）○琴をかきならす。○にはひぶくろ、樟に通ず。＝香囊。○州の名、今の安徽省一州府の地。

【徽猷】ユウ よきはかりごと。詩、緝「君子有二一一、小人與屬」

【徽音】オン 淵き音、よきことば、よきほまれ。詩、大雅、思齊「太姒嗣二一一」

【徽纆】ボク 旗じるし。嘯、大傳「聖人南面而治二天下一、必改三正朔一、殊二一一一」＝旗章。

【徽徽】キ うつくしき貌。文賦「文一一以淫目、音冷冷而盈耳」

【徽音】オン よきことば。管、立政「嗚呼我旦已受二人之一一、咸告二孺子王一、美」＝善言。

【徽幟】シ しるしをつけたるはた。又、旗幟。

＝仁政。○國足利時代に民しつけたる錢穀などに對して權權行使共に無效消滅ならしむる義。德川時代には棄捐といふ。

【徽政碑】ヒ 官吏の德政をほめたたへたる石ぶみ。水經、濟水注「昌邑有二成人疾篤、聚碑、建和年、從事黎圃等刊ノ石、頌二德政一碑也」

【德星】セイ ○めでたきほし。道德ある人に喩ふ。漢書「陳定字仲弓、荀淑字季和、定與二子紐、湛、淑父子、討論ノ于、每一一聚、太史奏言、五百里內、有賢人聚」＝聚星。○歲星を云ふ。歲星の在る所に福ある故。史記「唐下建二漢家一封禪、天非報二一一一云」○木星の異名。

【德腔】ヒウ 仁德あるほまれ。曹植詩「君子在二朱位一、不ノ能ノ歐二一一一」

【德音】ヒウ きいはひ。鶴壽、王朗像「陛下一一、狹被二聖仁」

【德宗】ソウ 國鑑倉時代、北條家の總領の知行所「一一一領」

【德譽】ヨウ めぐみ。史、三皇紀「聖人、一一賢大」＝恩澤・恩惠。

【飽ノ德】ホウ 十分酒食に飽く義。德は惠ノ多く人に、招かれたる時の謝辭に用ふ。詩、大雅、既醉「既一一平也、醉酒一ノ、人有二士君子之行一、焉」

【在ノ德不在ノ險】ケンニ 國を治むるは德義に在りて、山川の險阻にあらず。史、吳起傳「魏武侯浮二西河一、而下、中流顧謂二吳起一曰、美哉山河之固、此魏國之寶也、起對曰、一一」

【有ノ疾德】ヤ 德の古人に及ばざるを云ふ。書、仲虺之誥「成湯放二于桀宥一、惟一一」

【德輪如ノ毛】ジ 輪は輕、德の人にあること毛の如く輕し、故に之を擧げ行ふこと極めて易し。詩、大雅、烝民「人亦有一一、民鮮二克舉一之」

【德望】ボウ 德行ありて、人より尊び望まる。北史、楊時傳「一一日重」

【德目】モク 國語、道德の細目。

【德壽】ジュ 德のすぐれたるほまれ。鏡、王朗像「朗子中、溝最有二一一一」

【德利】リ 國酒・醬油などを入れるつぼの類。とっくり。

【德無ノ鄰】ドクムリン 己に德さくあれば眞俗のいやしき所に居ても、德を以てこれを感化するが故に、みにくきことなし。荀子、榮辱「非ノ道訓ノ俗、惟一一、惟人無ノ遠」

十三畫

【徼】キョウ 蕭・嘯

①くにざかひ、とりで（邊塞）②木柵を立てて禦夷の界とする。東北なるを塞、西南なるを徼。史、李斯傳「中國以一一、而制二四海一」

【徼外】ガイ ○國境の外。漢書、西域傳「一一、以二一一一、以二一一一」

【徼巡】ジュン 次條に同じ。＝行巡。

【徼循】ジュン 地方を見まはる。巡察する。字解參看。＝徼巡。

【徼謁】ケツ きいはひをもとめる。左傳「寡君有二一一於周公・魯公一」

【徼名】メイ よき名を得んことをもとめる。漢書、不佞傳贊「以一一干

心部（小）

【心】シン 侵

○こゝろ（精神）人の肉體を支配し活動の根本となるもの「良一」「道一」「虛一」「善一」○かんがへ、おもひ（思・志・望）左、襄三「一人不同、如其面焉」○しんのぞう、五臟の一。左、右兩肺の間に在りて動物の血行の中樞たる機關。＝心臟。○もと（本）○物のまんなか、し○こゝろ（中央）「中一」「水一」「天一」○むね（胸）史、殷紀「聖人之一一有二七竅」○なかご、星の名、二十八宿の一。＝大火・商星。

【心胃】シン しんの臟と、その胃と、腹の中。蘇軾詩「參朔自醫漱、冷冽清二一一一」

【心意】シン こゝろばせ。史、李斯傳「一一、說二耳目一者」

【心印】シン ○國さとりの道、佛教の奧義、佛心の印證する所の義。傳燈錄「遊居士少秉宗、而歸九年、不言文字、以二澄淡一授、聽可、曰內傳二一一、以契二證心一、外傳二靈談一、以定二宗旨一」○心のあと。靈氣。辨才詩「業與二達公一一一合」

【心慾】シン 心の慾のくるひやすきに喩へていふ。趙州錄、遺表「一一迴ノ鵝、意馬休ノ韁」

【心香】シン 國中心の誠をいふ。香を爇き佛に供する如きに喩ふ。樂箇文帝文「個個一一、至誠一一」

【心學】シン ○心を修むるがくもん。孟、郊詩「誰言損二朋老一、猶自將一一」○心の本體を認あて、身を修むる學。謝象山・王陽明等の唱ふるところ。○國書・儒・佛の三教をまじへて、不易なる說法を爲して俗人に實踐道德を勸むる教義。石田梅巖・手島堵庵・中澤道二等之を唱ふ。

【心肝】シン ○心臟と肝臟と。○轉じて＝丹心・赤心・誠意。

【披二心肝一】シンカン 我が心の誠を披きて人に示す義。漢書、蒯通傳「臣願一一」

【心眼】シン よく物を鑒識する心のはたらき。肉眼の對。書纂「元章一一高妙、而立論有二適一、中處」

【心氣】キ こゝろ、きぶん。氣、月令「仲夏之月、節二嗜欲一、定二一一一」

【心學】ガク どうぎ、むなさわぎ、心臟の鼓動「一一元進」

【心即】ソク 心中に深くちぎり望む。楊公筆錄「客與二子遊一一一久矣」

【心機】キ 心の動くはずみ。こゝろのはたらき。任昉詩「行一無二轍跡一、理絕二一一一」

【心曲】キョク 心のくまぐま、心中。詩、樂風、小戎「言念君子、溫其如玉、在二其板屋一、亂我一一」

【心事】ジ 心をいふ。心は一身の主たるが故。陸游詩「有ノ事一一傷」

【心火】シン ○火の如くはげしく激したる心。怒る心の勢、嘗悲のほむら。○星の名。晉書「一一伺修、衰亂可ノ必」＝心宿・大火。

【心花】シン 心を花に喩へていふ。蘇軾文潛文「一一成樹、共轉二六塵一」李白詩「登龍門、一一即一陟雲」

【心畫】シン 書をいふ。書は書く人の精神を畫き出す故にいふ。法言、寡見篇「一一也、聲畫形、君子小人見矣」

【心灰】シン こゝろがひややか。欲望なく心の冷靜なるにいふ。白居易詩「一一不ノ似二遷中火一、暮雪迴二於禪下雁一」

【心外】ガイ ○心のほか。楞迦經「一一無二別法一」○意外、もつてのほか。

【心情】シンジョウ　こころもち。こころはせ。李中詩「寒松肌骨瘦一一」

【心愛】シンアイ　こころに愛らけてさとる。參同契、注「口像一一、聲以意形之」千寒樣一也」

【心術】シンジュツ　こころのだて。荀、非相「形相惡而一一美、無ノ害ノ爲二君子一也」

【心緒】シンショ　こころの動くこゝろ。杜甫詩「王蠟期ノ詩一一亂」＝情緒。

【心醉】シンスイ　深く心を傾けて感嘆すること、酒に醉くるが如し、みとれてうっとりする。莊應浴王「列子見ノ之一一」

【心臓】シンゾウ　まんなかにあるず心。轉じて、心又肝臓の義とす。白居易詩「寫ノ之在ノ手曲、聽者醉一一」

【心性】シンセイ　こころのさが。蘇東元詩「青山一一白雲身」＝本心。

【心進】シンセン　心の定まらざるを進旗の揺動するに喩へていふ。王安石詩「殺ノ老一一一片旌」心搖搖如二懸旌一を見よ。

【心奪】シンダツ　心を奪にあらはしたるもの、言語をいふ。心意參考。

【心法】シンポウ　〇心と行事との社甫詩「一一意二雙清」〇夢ゆ心のあとの稱。＝存心。

【心戰】シンセン　〇忍れてこころをのべる。史、魏書「一一未能自決」〇心智をたたかはす。智慧の鬼爭。荀悉、眞傳、注「一一爲ノ上、兵戰爲ノ下」

【心素】シンソ　心のまこと。李白詩「空語二心素」

【心情】シンジョウ　こころもち、こころはせ。李中詩「寒松肌骨瘦一一」

【心愛】シンエン　こころにらけてさとる。參同契、注「口像一一、聲以意形之」千寒樣一也」

【心術】シンジュツ　こころのだて。荀、非相「形相惡而一一美、無ノ害ノ爲二君子一也」

【心緒】シンショ　こころの動くこゝろ。杜甫詩「王蠟期ノ詩一一亂」＝情緒。

【心醉】シンスイ　深く心を傾けて感嘆すること、酒に醉くるが如し、みとれてうっとりする。莊應浴王「列子見ノ之一一」

【心臓】シンゾウ　まんなかにあるず心。轉じて、心又肝臓の義とす。白居易詩「寫ノ之在ノ手曲、聽者醉一一」

【心性】シンセイ　こころのさが。蘇東元詩「青山一一白雲身」＝本心。

【心進】シンセン　心の定まらざるを進旗の揺動するに喩へていふ。王安石詩「殺ノ老一一一片旌」心搖搖如二懸旌一を見よ。

【心奪】シンダツ　心を奪にあらはしたるもの、言語をいふ。心意參考。

【心法】シンポウ　〇心と行事との社甫詩「一一意二雙清」〇夢ゆ心のあとの稱。＝存心。

【心戰】シンセン　〇忍れてこころをのべる。史、魏書「一一未能自決」〇心智をたたかはす。智慧の鬼爭。荀悉、眞傳、注「一一爲ノ上、兵戰爲ノ下」

【心素】シンソ　心のまこと。李白詩「空語二心素」

【心地】シンチ　〇圓こころ。精氏要覽「一一者、佛言、三界之中以心爲ノ主、衆生之心猶天地、一、五穀五果、從二大地一生、如是心法生二世出世善惡五趣三乘、以是因緣三界唯心、根本者一一」〇圓ものもの、氣分。

【心智】シンチ　ちゑ。南史「一一清穆」＝神智。

【心體】シンタイ　身は此に在るも、心は既に彼に隨ひ少く離。實積文「無側夏顧、而心已隨子矣會矣」＝神體・神魂。

【心應】シンオウ　こころのけがれ。陳昭明太子詩「因ノ惡圓、意衆、徐ノ使一一伏」＝情慾。

【心勝】シンショウ　はらわた。心のうち。鮑照詩「對鳳吹、三章未ノ遂子一一斷」

【心中】シンチュウ　〇こころのうち。＝意中・心裏。〇圓男女合意の上相共に自殺すること。＝情死。

【心中有ノ心】シンチュウユウシン　心を以て心を制する義。管子「治ノ之者心也、安ノ之者心也、心以殺ノ心」又「心之中又有ノ心焉」

【心中人】シンチュウジン　あがおもひと。徐幹詩「安得二減翼羽一、親二此一一一」＝意中人。

【心潮】シンチョウ　心にがってんする。心に情ずる。

【心情】シンジョウ　〇圓こころ。精氏要覽「一一者、佛言、三界之中以心爲ノ主、衆生之心猶天地、一、五穀五果、從二大地一生、如是心法生二世出世善惡五趣三乘、以是因緣三界唯心、根本者一一」〇圓ものもの、氣分。

【心智】シンチ　ちゑ。南史「一一清穆」＝神智。

【心體】シンタイ　身は此に在るも、心は既に彼に隨ひ少く離。實積文「無側夏顧、而心已隨子矣會矣」＝神體・神魂。

【心應】シンオウ　こころのけがれ。陳昭明太子詩「因ノ惡圓、意衆、徐ノ使一一伏」＝情慾。

【心勝】シンショウ　はらわた。心のうち。鮑照詩「對鳳吹、三章未ノ遂子一一斷」

【心中】シンチュウ　〇こころのうち。＝意中・心裏。〇圓男女合意の上相共に自殺すること。＝情死。

【心中有ノ心】シンチュウユウシン　心を以て心を制する義。管子「治ノ之者心也、安ノ之者心也、心以殺ノ心」又「心之中又有ノ心焉」

【心中人】シンチュウジン　あがおもひと。徐幹詩「安得二減翼羽一、親二此一一一」＝意中人。

【心潮】シンチョウ　心にがってんする。心に情ずる。

【心情】シンジョウ　〇圓こころ。精氏要覽「一一者、佛言、三界之中以心爲ノ主、衆生之心猶天地、一、五穀五果、從二大地一生、如是心法生二世出世善惡五趣三乘、以是因緣三界唯心、根本者一一」〇圓ものもの、氣分。

【心智】シンチ　ちゑ。南史「一一清穆」＝神智。

【心體】シンタイ　身は此に在るも、心は既に彼に隨ひ少く離。實積文「無側夏顧、而心已隨子矣會矣」＝神體・神魂。

【心應】シンオウ　こころのけがれ。陳昭明太子詩「因ノ惡圓、意衆、徐ノ使一一伏」＝情慾。

【心勝】シンショウ　はらわた。心のうち。鮑照詩「對鳳吹、三章未ノ遂子一一斷」

【心中】シンチュウ　〇こころのうち。＝意中・心裏。〇圓男女合意の上相共に自殺すること。＝情死。

【心中有ノ心】シンチュウユウシン　心を以て心を制する義。管子「治ノ之者心也、安ノ之者心也、心以殺ノ心」又「心之中又有ノ心焉」

【心中人】シンチュウジン　あがおもひと。徐幹詩「安得二減翼羽一、親二此一一一」＝意中人。

【心潮】シンチョウ　心にがってんする。心に情ずる。

【心情】シンジョウ　〇圓こころ。精氏要覽「一一者、佛言、三界之中以心爲ノ主、衆生之心猶天地、一、五穀五果、從二大地一生、如是心法生二世出世善惡五趣三乘、以是因緣三界唯心、根本者一一」〇圓ものもの、氣分。

【心智】シンチ　ちゑ。南史「一一清穆」＝神智。

【心體】シンタイ　身は此に在るも、心は既に彼に隨ひ少く離。實積文「無側夏顧、而心已隨子矣會矣」＝神體・神魂。

【心應】シンオウ　こころのけがれ。陳昭明太子詩「因ノ惡圓、意衆、徐ノ使一一伏」＝情慾。

【心勝】シンショウ　はらわた。心のうち。鮑照詩「對鳳吹、三章未ノ遂子一一斷」

【心中】シンチュウ　〇こころのうち。＝意中・心裏。〇圓男女合意の上相共に自殺すること。＝情死。

【心中有ノ心】シンチュウユウシン　心を以て心を制する義。管子「治ノ之者心也、安ノ之者心也、心以殺ノ心」又「心之中又有ノ心焉」

【心中人】シンチュウジン　あがおもひと。徐幹詩「安得二減翼羽一、親二此一一一」＝意中人。

【心潮】シンチョウ　心にがってんする。心に情ずる。

【心情】シンジョウ　〇圓こころ。精氏要覽「一一者、佛言、三界之中以心爲ノ主、衆生之心猶天地、一、五穀五果、從二大地一生、如是心法生二世出世善惡五趣三乘、以是因緣三界唯心、根本者一一」〇圓ものもの、氣分。

【心智】シンチ　ちゑ。南史「一一清穆」＝神智。

【心體】シンタイ　身は此に在るも、心は既に彼に隨ひ少く離。實積文「無側夏顧、而心已隨子矣會矣」＝神體・神魂。

【心應】シンオウ　こころのけがれ。陳昭明太子詩「因ノ惡圓、意衆、徐ノ使一一伏」＝情慾。

【心勝】シンショウ　はらわた。心のうち。鮑照詩「對鳳吹、三章未ノ遂子一一斷」

【心中】シンチュウ　〇こころのうち。＝意中・心裏。〇圓男女合意の上相共に自殺すること。＝情死。

【心中有ノ心】シンチュウユウシン　心を以て心を制する義。管子「治ノ之者心也、安ノ之者心也、心以殺ノ心」又「心之中又有ノ心焉」

【心中人】シンチュウジン　あがおもひと。徐幹詩「安得二減翼羽一、親二此一一一」＝意中人。

【心潮】シンチョウ　心にがってんする。心に情ずる。

【心情】シンジョウ　〇圓こころ。精氏要覽「一一者、佛言、三界之中以心爲ノ主、衆生之心猶天地、一、五穀五果、從二大地一生、如是心法生二世出世善惡五趣三乘、以是因緣三界唯心、根本者一一」〇圓ものもの、氣分。

【心智】シンチ　ちゑ。南史「一一清穆」＝神智。

【心體】シンタイ　身は此に在るも、心は既に彼に隨ひ少く離。實積文「無側夏顧、而心已隨子矣會矣」＝神體・神魂。

【心應】シンオウ　こころのけがれ。陳昭明太子詩「因ノ惡圓、意衆、徐ノ使一一伏」＝情慾。

【心勝】シンショウ　はらわた。心のうち。鮑照詩「對鳳吹、三章未ノ遂子一一斷」

【心中】シンチュウ　〇こころのうち。＝意中・心裏。〇圓男女合意の上相共に自殺すること。＝情死。

【心中有ノ心】シンチュウユウシン　心を以て心を制する義。管子「治ノ之者心也、安ノ之者心也、心以殺ノ心」又「心之中又有ノ心焉」

【心中人】シンチュウジン　あがおもひと。徐幹詩「安得二減翼羽一、親二此一一一」＝意中人。

【心潮】シンチョウ　心にがってんする。心に情ずる。

【心潮】シンチョウ　心にがってんする。心に情ずる。

【心髓】シンズイ　心がその物にひきつけられてふたまり、身體がとらけること。〔柳宗元、西山宴遊記〕

【心正則筆正】シンセイソクヒッセイ　心は本なり、筆は末に心正しければ筆跡もまた正し。書法正傳、唐懷素問柳公權筆法、書目「用ノ筆在ノ心、一一」

【新ノ心鏡ノ骨】シンシンキョウノコツ　恩を受けたる恩心骨にきざみて忘れざるを心骨に書目故事、「沼林貳云、貴ノ心鏡ノ骨、李義山云、刻二鏡心骨一」

【心廣體胖】シンクワンタイハン　心は廣大寛平にして、體は舒泰なり。大學、富潤ノ屋、德潤ノ身、一一、故君子必誠二其意一」

【心如ノ水】シンジョノスイ　心清く淡泊なるをいふ。漢書、龐涓傳「臣門如ノ市、臣一一」

【心如ノ結】シンジョノケツ　心むすぼれて散じぞず、孫心「意なる義。詩、曹風、鳲鳩「淑人君子、其儀一兮、其儀一兮、一一兮」

【心】

〇圓心（面參）に同じ、字畫の一つ少く。

【必】

〇かならず、きっと、確かに定まる。論語、顏淵「一也使無訟乎」

【必】

〇心（面參）に同じ、字畫の一つ少く。

【必】

〇かならず、きっと、確かに定まる。論語、顏淵「一也使無訟乎」

【必】

〇心（面參）に同じ、字畫の一つ少く。

【必】

〇かならず、きっと、確かに定まる。論語、顏淵「一也使無訟乎」

【必】

〇心（面參）に同じ、字畫の一つ少く。

【必】

〇かならず、きっと、確かに定まる。論語、顏淵「一也使無訟乎」

【必】

〇心（面參）に同じ、字畫の一つ少く。

【必】

〇かならず、きっと、確かに定まる。論語、顏淵「一也使無訟乎」

【必】

〇心（面參）に同じ、字畫の一つ少く。

【必】

〇かならず、きっと、確かに定まる。論語、顏淵「一也使無訟乎」

【必】

〇心（面參）に同じ、字畫の一つ少く。

【必】

〇かならず、きっと、確かに定まる。論語、顏淵「一也使無訟乎」

【必】

〇心（面參）に同じ、字畫の一つ少く。

【必】

〇かならず、きっと、確かに定まる。論語、顏淵「一也使無訟乎」

【必】

〇心（面參）に同じ、字畫の一つ少く。

【必】

〇かならず、きっと、確かに定まる。論語、顏淵「一也使無訟乎」

【必】

〇心（面參）に同じ、字畫の一つ少く。

【必】

〇かならず、きっと、確かに定まる。論語、顏淵「一也使無訟乎」

【必】

〇心（面參）に同じ、字畫の一つ少く。

【必】

〇かならず、きっと、確かに定まる。論語、顏淵「一也使無訟乎」

【必】

〇心（面參）に同じ、字畫の一つ少く。

【必】

〇かならず、きっと、確かに定まる。論語、顏淵「一也使無訟乎」

【必】

〇心（面參）に同じ、字畫の一つ少く。

【必】

〇かならず、きっと、確かに定まる。論語、顏淵「一也使無訟乎」

【必】

〇心（面參）に同じ、字畫の一つ少く。

【必】

〇かならず、きっと、確かに定まる。論語、顏淵「一也使無訟乎」

【必】

〇心（面參）に同じ、字畫の一つ少く。

【必】

〇かならず、きっと、確かに定まる。論語、顏淵「一也使無訟乎」

【必】

〇心（面參）に同じ、字畫の一つ少く。

【必】

〇かならず、きっと、確かに定まる。論語、顏淵「一也使無訟乎」

【必】

〇心（面參）に同じ、字畫の一つ少く。

【必】

〇かならず、きっと、確かに定まる。論語、顏淵「一也使無訟乎」

【必】

〇心（面參）に同じ、字畫の一つ少く。

【必】

〇かならず、きっと、確かに定まる。論語、顏淵「一也使無訟乎」

【必】

〇心（面參）に同じ、字畫の一つ少く。

【必】

〇かならず、きっと、確かに定まる。論語、顏淵「一也使無訟乎」

【必】

〇心（面參）に同じ、字畫の一つ少く。

【必】

〇かならず、きっと、確かに定まる。論語、顏淵「一也使無訟乎」

【必】

〇心（面參）に同じ、字畫の一つ少く。

【必】

〇かならず、きっと、確かに定まる。論語、顏淵「一也使無訟乎」

【必】

〇心（面參）に同じ、字畫の一つ少く。

【必】

〇かならず、きっと、確かに定まる。論語、顏淵「一也使無訟乎」

【必】

〇心（面參）に同じ、字畫の一つ少く。

【必】

〇かならず、きっと、確かに定まる。論語、顏淵「一也使無訟乎」

【必】

〇心（面參）に同じ、字畫の一つ少く。

【必】

〇かならず、きっと、確かに定まる。論語、顏淵「一也使無訟乎」

【必】

〇心（面參）に同じ、字畫の一つ少く。

【必】

〇かならず、きっと、確かに定まる。論語、顏淵「一也使無訟乎」

【必】

〇心（面參）に同じ、字畫の一つ少く。

【必】

〇かならず、きっと、確かに定まる。論語、顏淵「一也使無訟乎」

【必】

〇心（面參）に同じ、字畫の一つ少く。

【必】

〇かならず、きっと、確かに定まる。論語、顏淵「一也使無訟乎」

【必】

〇心（面參）に同じ、字畫の一つ少く。

【必】

〇かならず、きっと、確かに定まる。論語、顏淵「一也使無訟乎」

【必】

〇心（面參）に同じ、字畫の一つ少く。

【必】

〇かならず、きっと、確かに定まる。論語、顏淵「一也使無訟乎」

【必】

〇心（面參）に同じ、字畫の一つ少く。

【必】

〇かならず、きっと、確かに定まる。論語、顏淵「一也使無訟乎」

【必】

〇心（面參）に同じ、字畫の一つ少く。

【必】

〇かならず、きっと、確かに定まる。論語、顏淵「一也使無訟乎」

【必】

〇心（面參）に同じ、字畫の一つ少く。

【必】

〇かならず、きっと、確かに定まる。論語、顏淵「一也使無訟乎」

【必】

〇心（面參）に同じ、字畫の一つ少く。

【必】

〇かならず、きっと、確かに定まる。論語、顏淵「一也使無訟乎」

【必】

〇心（面參）に同じ、字畫の一つ少く。

【必】

〇かならず、きっと、確かに定まる。論語、顏淵「一也使無訟乎」

乎」○きっと果たす。かたくあて に する。○つまびらかにする。○もっぱら（專）○不又は何の下に置く時はかならずしも と讀み て打消しの意となる。論「賜貨」何一公山氏之之也」

【必要】ヒツヨウ　きっとなくてならず、缺くべからざるもの。＝必用。

【必攜】ヒツケイ　かならずたづさへる。是非とも携へざるべからず。

【必至】ヒツシ　きっと其の事が到來する。必然其のやうになる。

【必死】ヒツシ　死を決する、しにものぐるひ。漢書、朱博傳「且寄且懼、對曰一一」

【必需】ヒツジュ　かならずもちふる。＝必用。

【必勝】ヒツショウ　きっとかつ。

【必衰】ヒツスイ　國　かならずおとろへる。仁王經「盛者一一」

【不ノ必】ヒツ　きっと屬行すること を爲さず、たしかに斷行せず。韓非、內儲說「刑罰一ノ一則禁不ノ行」

【必修】ヒツシュウ　必ずかくなるべき。きっと。漢書「任賢必治、任不肖必亂、一一」

【必定】ヒツテイ　必ずかならず、たしかにかくなる。佛法決疑經「一一得ノ近ニ涅槃ニ」

【必傳】ヒツデン　かならず後世に傳はる。

【必圖】ヒツト　かならずよまねばならぬ。

【必稽】ヒツケイ　かならずつみに行ふ。漢書、五帝紀「季五之治、信賞一一」

【必無】ヒツム　きっとなし、必有ること なし。

【必滅】ヒツメツ　國　かならず亡びる。生者一一」

【必用】ヒツヨウ　きっとなくてはならず。＝必要、必需。

二畫

【忉】トウ　平

心に憂ふる貌。

【忉忉】トウトウ　心に憂ふる貌。詩、齊風、市田「勞心一一」

【忉怛】トウタツ　かなしむ。李陵、答蘇武書「感今三人悲辛一一耳」＝悲痛。

【忉利天】トウリテン　佛教界六天の第二にして、三十三天と譯す。須彌山の頂に在りて、帝釋此に居る。喜見城といふ。又合四象壞「一一」、後語忉利、修ニ此言ニ三十三往世三十三人、同生ニ此天」

三畫

【忤】ゴ　去

○みだる（擾）○さはる（極）○あつかる（預）

【忌】キ　去

○いむ、いみ（諱）「畏一」○にくむ（憎惡）きらふ（嫌）「嫌一」ましむ（妒）おそれる（畏）「一憚」○はばかる（憚）「猜一」○うらむ（怨）「一怨」○いましむ（戒）○うらむ（怨）「一怨」○いましむ（戒）○親の死せし日に相當する年年の日。親せし命日「一日」○喪に中に家に在りて禍事をつつしむ一定の期間「一中」○陰陽家の說にて いみさける物事。○無意味の助辭。詩、鄭風「叔善射一」

同副類類　忌・諱○忌は畏れ嫌ふ。いやがる。嫌忌・忌憚と用ふ。小學「如ニ讒人病而忌醫也」○諱は忌みていはぬなり。諱の義にて知るべし。忌諱と用ふ。

【忌諱】キキ　○いみきらふ。人の氣にさわる。漢書、鄒陽傳「臨人不ノ知ニ一一」○畏れ避ける。老子「天下多ニ一一」

【忌月】キゲツ　○喪を爲すにいみさくべき月。陰曆九月の稱。晉書「穆帝紀」孝義、一一、三月不聽音樂」

【忌樂】キガク　いみきらふ。

【忌克】キコク　他人の才能をいみて、それに勝たんとする。克は剋に同じ。左傳「今其言多ニ一一」雜說」＝忌剋。

【忌刻】キコク　人の能あるをきらひて、むましむ（憎惡）きらふ（嫌）「嫌一」○はばかる（憚）おそれる（畏）「一憚」○いましむ（妒）○うらむ（怨）「一怨」○小人一而不ノ忌」○うやまふ（敬）○親の死せし日に相當する年年の日。親せし命日「一日」○喪に中に家に在りて禍事をつつしむ一定の期間「一中」○陰陽家の說にて いみさける物事。○無意味の助辭。詩、鄭風「叔善射一」

【忌日】キジツ　おやの命日。禮、祭義「君子有ニ終身之喪ニ一之謂也」＝忌辰。

【忌辰】キシン　忌日に同じ。辰は日。

【忌憎】キゾウ　きらひにくむ。王今詩「好于ニ此士ニ貪ニ一一」

【忌憚】キタン　こころばかる。遠慮する。中庸「小人而無ニ一一也」

【忌中】キチュウ　いみにこもり居る期間。

【忌避】キヒ　こころみられたむ。宋書「一一者飛語」＝忌嫌。

【忌諱】キキ　○いみ避ける。魏書、高車傳「讒佞衆讒無ニ所一一」○法律上の用語、訴訟關係人が判事、又は書記などの言動に不公平の事ありと認めし時は其の係り官の裁判を變くることを拒絕する申立。

【忌服】キフク　喪に居る期間。忌は家に籠りて出でず、服は出でて事を執れども、命はいみ慎む間をいふ。血緣の親疎によりて長短あり。

【忌明】キメイ　國　忌服の期が終る。＝除服。

【忘】ボウ　平

○わする、わすれる。○うしなふ。○すてる。○おこたる。○あきらめる。○まよふ。○ほろぼす。○ほろびる。○なくす。○ほうける。○ほうける。○ほうける。○ほうける。○ほうける

【忍涕】ニンテイ 涙を含む、泣くこと。宋史「上ーレー太息」

【忍土】ニンド 圖 この土、娑婆世界。

【忍冬】ニントウ すひかづら、蔓草の一、夏圓形、春夏の交、甘く芳しき小花を生じ、豊は紫色を帯び、葉は冬凋ませず。本草別錄「一一金銀花」

【忍辱】ニンジョク ○圖外界のはづかしめを忍びて想まず。法界次第「内心能安忍、外所辱境、故名ニ一一」○はづかしめをしのぶ。陵守譯「安英手ーー」

【忍辱之衣】ニンジョクノコロモ 圖袈裟の異名。江幾文「墜ニ一一、入安禪之室」＝忍辱鎧。

【忍辱鎧】ニンジョクガイ 忍之一字衆妙之門 ニンジノイチジシュミョウノモン 何事も忍耐の力によりて成し得べしとの意。呂本中、官箴「一一、當レ合處レ事、凡是先游、若能清慎勤之外、更行ニ一忍、何事不レ辦」

【忍想】ニンソウ こらへつとめる。鮑照詩「忍士諾ニ千刀、一一自樂治」

【忍返】カエシ 圖鋸などの上に尖りし竹・木・釘などを列ねて盜賊の入るを防ぐもの。＝逆鬼。

【忍線指】モンシンシ 圖しのぶずり、忍草の葉の形を織物に摺りつけしもの。奥州信夫郡より出づ。

【忖】ソン 圖

○はかる(度)おもひはかる。○おもふ(思)○同訓に通ず。

同訓異義 村・計・謀・圖・量・度・料等の訓は計(言部二畫)の條を見よ。

【忖度】ソンタク 他人の心をおしはかる。詩「小雅「他人有レ心、予ーニ之」

【忘】トク 圖

○たがふ、ふ、ちがふ(差)「差ー」「謬ー」詩、大雅「昊天不ー」○うたがふ(疑)詩、豳風「其儀不ー」○かはる(變更)詩、魯頌「不ー」「亨祀不ー」○圖はなはだ(太)「已甚」「一殺」殺は助字。

【忘】① ② ③ バウ・マウ 圖 漢

①わすれる「一恩」「善ー」○ゆるがせにする(忽)心に かけぬ。○記憶せず、善ーはよくわすれる病。②わすれる、心にかけず、棄てる、おとす、とりおとす、「遺ー」「昏ー」

同義 心に从ひ亡に从ふ會意文字。

【忘憂】ボウユウ 書、論語「發、憤忘レ食、樂以ーレー」

【忘憂物】ボウユウブツ 酒をいふ。陶潛詩「汎ニ此ーニ、遠ニ我遺世情」

【忘我】ボウガ 己の身をわすれる。後漢書「陣下ーレー耶」

【忘暇】ボウカ くるしみをわすれる。蘇軾詩「公レ壇何足レ辯、貢米可レー」

【忘却】ボウキャク 夫條に同じ、却は部の俗字。趙善璙詩「寵辱都ーー、功名盡日揚」

【忘部】ボウブ わすれる。部は俗語の動詞。鮮雄「鮮雄自雪源ーー、顯錄綺繡度九秋編」

【忘物】ボウブツ 身のつかれをわすれるの。飛倶「老來息レ交忘ニ簡事、貧ソ子ーレー酸身多」＝忘勞。

【忘形】ボウケイ 己のからだをわすれる。「物我の境を超越する義。莊子「故變、忘者ーレー」杜甫詩「ーー到ニ親淚」＝遺形。

【忘形交】ボウケイコウ 己の形體をも忘れて心を以て親密にまじはる。唐書、王叔傳「郊性介少ニ處合、嘗會一見ニ一一」

【忘言】ボウゲン 己の身をわすれる。蘇軾詩「嘗惟主忘レ客、今我亦ーレー」

【忘想】ボウソウ みだりなるおもひ、正しからざる想念。

【忘失】ボウシツ ○わすれる。○人のものをわすれる。後漢書、李膺傳「立レ跡之處、記功ーレー」

【忘足】ボウソク 履がよく足に適するをいふ。莊子「ーレー履之適也、忘レ要帶之適也。忘ニ足非ニ心之適也」＝要は腰。

【忘機】ボウキ うるさき事をわすれる。機は心の機械作用。李白詩「我醉君ーレー」

【忘却】ボウキャク 夫條に同じ、却は部の俗字。趙善璙詩「寵辱都ーー、功名盡日揚」

【忘部】ボウブ わすれる。部は俗語の動詞。鮮雄「鮮雄自雪源ーー、顯錄綺繡度九秋編」

【忘物】ボウブツ 身のつかれをわすれる。飛倶「老來息レ交忘ニ簡事、貧ソ子ーレー酸身多」＝忘勞。

【忘人】ボウジン ○遊里に遊ぶ者の稱、孝弟忠信禮義廉恥の八をわすれる義。一配に王八といふ惡人の名の轉訛。「該餘義孝」幼學須知「言人入ニ手花柳之中、其心已忘ニ孝弟忠信禮義廉恥八字、故名ニ一一」＝亡八。○圖魯の異名。○圖くるわ(遊郭)又、遊女屋の又、遊女屋の主人。

【忘筌】ボウセン 史記「圖ニ未編寄ニ三復ーレー」

【忘食】ボウショク 身のまづしきをわすれる。文子「樂レ道而忘レ貧、安レ樂而忘レ憂ーレー也」

【忘病】ボウビョウ 書、論語「誨レ倦、道他ーレー」

【忘勞】ボウロウ 身のつかれをわすれる。後漢書「國家有ニ災ニ、忘レ身、時年六十、而盧已五十、食ニ一一」南史、何遜傳「范雲見ニ其新詩、大相稱賞、因結ニ一一」

【忘年】ボウネン ○年をわすれる。莊子「ーレー忘レ義、義ニ公無愛」○圖年末に其の年を送るにいふ「一一會」

【忘年友】ボウネンユウ 年の長幼にかかはらずして交はる友。陳書、江總傳「總、時年少有レ名、續等雅相推重、賞ニ一一」

【忘年交】ボウネンコウ 年の長少を忘れて交るの。後漢書「國家有ニ災ニ、忘レ身、時年六十、而盧已五十、食ニ一一」南史、何遜傳「范雲見ニ其新詩、大相稱賞、因結ニ一一」

【忘人】ボウジン ○遊里に遊ぶ者の稱、孝弟忠信禮義廉恥の八をわすれる義。一配に王八といふ惡人の名の轉訛。「該餘義孝」幼學須知「言人入ニ手花柳之中、其心已忘ニ孝弟忠信禮義廉恥八字、故名ニ一一」＝亡八。○圖魯の異名。○圖くるわ(遊郭)又、遊女屋の又、遊女屋の主人。

【忘筌】ボウセン 史記「圖ニ未編寄ニ三復ーレー」

【忘食】ボウショク 身のまづしきをわすれる。文子「樂レ道而忘レ貧、安レ樂而忘レ憂ーレー也」

【忘病】ボウビョウ 書、論語「誨レ倦、道他ーレー」

【忘勞】ボウロウ 身のつかれをわすれる。後漢書「國家有ニ災ニ、忘レ身、時年六十、而盧已五十、食ニ一一」

【忘物】ボウブツ 身のつかれをわすれる。飛倶「老來息レ交忘ニ簡事、貧ソ子ーレー酸身多」＝忘勞。

【忘部】ボウブ わすれる。部は俗語の動詞。鮮雄「鮮雄自雪源ーー、顯錄綺繡度九秋編」

【忘却】ボウキャク 夫條に同じ、却は部の俗字。趙善璙詩「寵辱都ーー、功名盡日揚」

【忘機】ボウキ うるさき事をわすれる。機は心の機械作用。李白詩「我醉君ーレー」

【忘形】ボウケイ 己の形體をも忘れて心を以て親密にまじはる。唐書、王叔傳「郊性介少ニ處合、嘗會一見ニ一一」

【忘言】ボウゲン 己の身をわすれる。蘇軾詩「嘗惟主忘レ客、今我亦ーレー」

【忘想】ボウソウ みだりなるおもひ、正しからざる想念。

【忘失】ボウシツ ○わすれる。○人のものをわすれる。後漢書、李膺傳「立レ跡之處、記功ーレー」

【忘足】ボウソク 履がよく足に適するをいふ。莊子「ーレー履之適也、忘レ要帶之適也。忘ニ足非ニ心之適也」＝要は腰。

【忙】ボウ 圖

いそがしい、いそがはし、せはし、心迫る、事繁し「忽ー」「繁ー」「奔ー」

同訓異義 忙・閑・急・迫○忙は閑の反なり、多用にてひまなきなり、急忙と連用す。○閑はにぎやかなり、閑然と連用す、市人のこみ合ひにぎやかなる義、忙に似て多用の義はなし。○急は匆に同じ、せはしく、さらさらしき意。○迫はせはしき義、緩の反なり、求貧急・古事急の如し。○迫は火急にあわてていそがしきなり。小學「雖レ在ニ倉卒、未レ嘗レ迫レ色」迫色はあわてたる顏色なり。

【忙殺】ボウサツ 水條に同じ。

【忙碌】ボウロク 甚だいそがはし、碌は助字。「一一」「碌碌」

【忙事】ボウジ いそがはしきこと。范成大詩「姑蘇相呼有ニ一一」

【忙忙】ボウボウ いそがはしき貌。高駢詩「浮世一一蟻子窠、英ノ雄頭上奇紛紛」

【忙裏偷閑】ボウリトウカン いそがはしき間にも、ひまを求めてあそぶ。江湖長翁詩「苦覓可ノ閑一一、苦中作ニ樂、逢ニ人字ニ喜ノ顏、作ニ詩八音ニ」

【忘】忘(前條)の古字。

【忙】ボウ 圖

○なけく(慨)意氣激して不平なり。＝慷。○いたむ(感傷)○誠を竭す。○もとる(很戾)

【忙慨】ボウガイ なげきいきどほる。魏書「志節一一」

【忙修】ボウシュウ ○心激し焦りてなげき傷む。史項羽紀「項王、乃悲歌一一」○誠を竭す貌。漢書、鄭崇傳「一一不ニ苟合ニ」＝慷慨。

【忻】キン 圖

○よろこぶ(喜)＝欣。○たのしむ(樂)

同訓異義 忻・欣・喜・悅・歡・怡・愉等の訓は喜(口部九畫)の條を見よ。

【忻懼】キンク よろこび樂む。莊子「忻懼之惑、一一之喜、不ニ益ニ於心ニ」＝歡樂。

【忻然】キンゼン よろこぶ貌。史、周紀「姜源見ニ豆人跡、心一一說、欲レ履レ之」

【忻願】キンガン よろこびたのしむ。魏志「多レ所ニ看減、良以一一」

【忻樂】キンラク 喜びたのしむ。晉書、潘岳傳「悄悄一一ニ乎手作ニ、今」＝忻懼。

【忻】 圖

忻(心部六畫)に同じ。

【快】カイ 圖

○こころよし、さわやか「爽ー」「痛ー」「奇ー」「爽ー」こころよし、さっぱりする。○よろこぶ(喜)よろこばし、おもしろし。○はやし(急疾)「一車」すること(銳利)○ほしいまま(縱逸)

【快意】カイイ こころよし。蘇軾詩「一一非風雅士」

【快飲】カイイン こころよく酒をのむ。

【快博】カイハク こころよきあり、早の時の用などにいふ。魏志、管輅傳「風雲並起、意氣一一」

【快行】カイコウ とくはしる。唐書、朱敬則傳「一一無ニ好步ニ」＝快走・急行。

【快感】カイカン こころよきかんじ。

【快樂】カイラク こころよきしわざ。

【快果】カイカ 梨の異名。本草「梨、一名一一」

【快活】カイカツ いきいきしてこころよし。五代史、劉昫傳「歡呼自レ身、此我曹一一矣」

【快闊】カイカツ こころよくひろ開かる。

【快悔】カイカイ 心に稱ひてこころよし。蘇軾詩「一一聊自況」

【快哉】カイサイ こころよくさわやか。宋玉、風賦「一一此風」

【快志】カイシ 志をほしいままに樂ましむ。史、莊周傳「終身不ニ仕、以快ニ吾志ニ」

【快事】カイジ こころよきこと。

【快談】カイダン とくはしる。＝快走。

【快心】カイシン こころよし。新論「夢ノ人不レ知ニ其義、則同ニ者不レ能ニ手心ニ」

【快車】カイシャ 急行車に同じ。便車の對。

【快晴】カイセイ 氣にいりたる夏きむこ。魏書、劉昶傳「欲レ覓ニ快女婿」

【快晴】カイセイ こころよくはれわたる。陳與義詩「雨餘溯ニ明月、瓜松立ニ一一」

【快速】カイソク すばやし。＝敏速。

【快箭】カイセン 極めてはやき矢。陸龜蒙詩「安得三雪月、而ニ可ニ月、一一拂下西飛圃」

【快勇】カイユウ 勇ましく戰ふ。心地よき戰。史、項羽紀「願爲ニ諸君ー一」

【快走】カイソウ はやくはしる。＝快騎。

【快走船】カイソウセン はやく走る小船。帆又は漕ぎ櫓の力にて疾走するものに使用す。ヨット。

【快速】カイソク すみやか、はやし。

【快刀】カイトウ 善く切れる刀物。居家必用「取ニ蘇業、用ニ一一一切裁縫」

【快諾】カイダク こころよく承知する。

【快晴】カイセイ こころよくくらぶ。蘇軾詩「夫人一一敢爭ニ才」

【快感】カイカン おもしろきはなし、面白く話す。

【快漂】カイヒョウ 面白く絃をひく。白居易、琵琶行序「遂命ニ酒使ニ一一數曲」

【快轉】カイテン こころよくのびのびす

る。

【快髭】クワイ　はやきこぶね。

【快遊】クワイユウ　こころよくかなふ。楊慎文「引ノ酒澆ノ醉夜臥平尾、殊愛ニ一一」

【快讀】クワイドク　こころよくよむ。陳逆詩「一一一清齋一稍加ノ掃」

【不ノ快】フワイフクス　○心よからず。戰國策策「紫澤入掛ニ匱侯、匱侯一ノ一」○稍あり。後漢書、華陀傳「體有ニ一一」

【快馬】クワイバ　はやくはしるうま。南史、曹武宗傳「我昔在ニ鄉里ニ騎ニ一一如ノ龍」

【快方】クワイハウ　圖病がなほりかかる。快き方に向ふ。

【快報】クワイハウ　○ここちよきしらせ。○○急速のしらせ。‖急報。

【快差】クワイサ　よくきれる。するどきもの。王令、謝ニ李常伯一詩「蹶承夫子言、一一加元毅」

【快錯】クワイサク　さわやかによどみなき辯舌。‖能辯。

【快奔】クワイホン　はやくはしる。‖快走。

【快疾】クワイシツ　こころよし。

【快眠】クワイミン　こころよくねむる。朱慶詩「陪奉一一知ニ聲好一」‖佳眠。

【快意】クワイイ　やまひいゆ、なほる。愈は癒に同じ。‖快癒。

【快樂】クワイラク　こころよくたのしむ。易「貞疾恐勿藥有喜」、一一無ノ己」‖愉快。

【快樂說】クワイラクセツ　人生の目的は快樂にあり、といふ倫理說。‖快樂主義。

【忨】グワン　圖　通玩に

むさぼる（貪）をしむ（愛）を、昭元「一一歲而惕日」生を愛惜して歲月を貪る。

【忨惕】グワンテキ　徒に歲月を貪る。貪すこと。

【忤】ゴ　圖　通牾・逆に

さからふ、さからふ（逆）もとる（違反）「乖一」「舛一」「很一」

同訓異義　忤・逆は逆に作るも同じ。心の互にたがひさかふなり、乖逆・違逆と用ふ。○逆は順の反なり、眞正面にさからふなり、轉じてせかふるとも訓む。逆鱗の類。常綱「有ニ言言逆ニ于汝心ニ必求諸道」

【忤逆】ゴギヤク　さからふ。陳書「何得見ニ佛說ニ而信圓、在ニ我語ニ而一一」と

【忤恨】ゴコン　さからひうらむ。魏書「一一者調冤」

【忤旨】ゴシ　ミヤカル　樂官はみみに逆ひて快からず。韓非雖言「至言忤ニ于耳、而倒ニ于心、非ニ賢聖一則莫ニ能聽」‖逆耳。

【忤說】ゴセツ　さからひみる。史、荊軻傳「入不ニ敢一一」

【忽】コツ　圖　月

在りといふ倫理說。‖快樂主義。

【忨】グワン　圖　通玩に

むさぼる（貪）をしむ（愛）を、昭元「一一歲而惕日」生を愛惜して歲月を貪る。

【忨惕】グワンテキ　徒に歲月を貪る。貪すこと。

【忤】ゴ　圖　通牾・逆に

さからふ、さからふ（逆）もとる（違反）「乖一」「舛一」「很一」

同訓異義　忤・逆は逆に作るも同じ。心の互にたがひさかふなり、乖逆・違逆と用ふ。○逆は順の反なり、眞正面にさからふなり、轉じてせかふるとも訓む。逆鱗の類。常綱「有ニ言言逆ニ于汝心ニ必求諸道」

【忤逆】ゴギヤク　さからふ。陳書「何得見ニ佛說ニ而信圓、在ニ我語ニ而一一」と

【忤恨】ゴコン　さからひうらむ。魏書「一一者調冤」

【忤旨】ゴシ　樂官はみみに逆ひて快からず。韓非雖言「至言忤ニ于耳、而倒ニ于心、非ニ賢聖一則莫ニ能聽」‖逆耳。

【忤說】ゴセツ　さからひみる。史、荊軻傳「入不ニ敢一一」

【忽】コツ　圖　月

○たちまち（倏）にはか、すみやか、一然」「一地」「一候」「一叔」○ゆるかせにす、おろそかにす「輕一」○わすれる（忘）「忘一」○ほうぶ（放）つく（遠）詩、大雅「是絕是一」○かるし（輕）そむかなし。○あなどる（慢）○むなし。○一一はひとすぢのきぬいと。一蠶の口より出る稀。又、蜘蛛網。○極めて小数の名目、絲の十分の一。白居易詩「無秒一之失」

同訓異義　忽・怠・倏・欻○忽は疑義。見記の高祖紀に「人乃以ノ羸貧不ノ識、欲ノ貸ノ之、嫗因忽不ノ見」とあるを如し。○怠は、ものうくとと譯す、不定にして、必ずしも繼ずるの意あり、詩の句に「怠零雨喪花信晚」淮南子に「霞將滅而怠明」とある如し。○倏は大走貌也と註す、ちよいとと譯す。○欻は「有ノ所ニ吹起ニ也」と註す、倏・欻二字共に忽に同じ。

【忽然】たちまちに、ふと、すみやかなる貌。莊子十一「紛紛ノ人、其亡也一一」

【忽運】にはか、にはかに。南史、實禽一一」‖卒連。

【忽忽】ぼんやりとしてとりとめなし。忽は怳に通ず。潘岳賦「驚鄰一一」

【忽美】空漠なる貌、廣くしてとりとめなし。實証、眼鳥賦「寄鄰一兮、與ノ世殊期」‖荒唐・怳惚。

【忽忽】○うつとりする、衆心の省みざる貌。漢書、謝建傳「陵始降時、一一如ノ狂」○失意の貌。司馬遷、史記「居則一一若ノ有ノ所ノ亡」○まよふ貌。文選、高唐賦「悠悠一一」○逼に去る貌。劉向、九歎「年一一而日度」‖倏忽。

【忽然】たちまち、たちまちに。‖忽然・忽地。

【忽語】○誠しらる貌。忽は消滅、語は助字。左、文五「卒陶庭堅、不ノ記一一」○圖談用してなほざりの。又、ゆるかせにする義とす。

【忽然】たちまちに。‖忽焉・忽爾。

【忽卒】にはか、にはかに。

【忽如ノ烏過ノ目】人生の須臾なるを嘆ふ。張協詩「人生一瞬間、內一一」

【忽地】たちまち、地は助字。王建詩「楊柳宮前一一來」

【忽怳】きはめてかすかに髣髴、律書忠「皆以ニ正孝慮、無有ニ一一」

【忽滅】そそつかしい、たちまち。杜甫詩「一一相逢是別筵」‖卒爾。

【忽略】おろそかにして詳かならず、なほざりにする。書經「忽忽荒政、怠惰一一、必重ニ主政」

【忽諸】たちまち、たちまちに。‖忽然・忽地。

【忽語】○誠しらる貌。忽は消滅、語は助字。左、文五「卒陶庭堅、不ノ記一一」○圖談用してなほざりの。又、ゆるかせにする義とす。

【忽然】たちまちに。‖忽焉・忽爾。

【忽卒】にはか、にはかに。

【忽如ノ烏過ノ目】人生の須臾なるを嘆ふ。張協詩「人生一瞬間、內一一」

【忽地】たちまち、地は助字。王建詩「楊柳宮前一一來」

【忽怳】きはめてかすかに髣髴、律書忠「皆以ニ正孝慮、無有ニ一一」

【忽滅】そそつかしい、たちまち。杜甫詩「一一相逢是別筵」‖卒爾。

【忽略】おろそかにして詳かならず、なほざりにする。書經「忽忽荒政、怠惰一一、必重ニ主政」

【忽諸】たちまち、たちまちに。‖忽然・忽地。

【忽】コツ　圖　月

起也と註し、侯・欻・欻○忽は疑義。見記の高祖紀に「人乃以ノ羸貧不ノ識、欲ノ貸ノ之、嫗因忽不ノ見」とあるを如し。○怠は、ものうくとと譯す、不定にして、必ずしも繼ずるの意あり、詩の句に「怠零雨喪花信晚」淮南子に「霞將滅而怠明」とある如し。○倏は大走貌也と註す、ちよいとと譯す。○欻は「有ノ所ニ吹起ニ也」と註す、倏・欻二字共に忽に同じ。

【忽然】たちまちに、ふと、すみやかなる貌。莊子十一「紛紛ノ人、其亡也一一」

【忽運】にはか、にはかに。南史、實禽一一」‖卒連。

【忽怳】ぼんやりとしてとりとめなし。怳は恍に通ず。潘岳賦「驚鄰一一」

【忽美】空漠なる貌、廣くしてとりとめなし。實証、眼鳥賦「寄鄰一兮、與ノ世殊期」‖荒唐・怳惚。

【忽忽】○うつとりする、衆心の省みざる貌。漢書、謝建傳「陵始降時、一一如ノ狂」○失意の貌。司馬遷、史記「居則一一若ノ有ノ所ノ亡」○まよふ貌。文選、高唐賦「悠悠一一」○逼に去る貌。劉向、九歎「年一一而日度」‖倏忽。

【忽諸】たちまち、たちまちに。‖忽然・忽地。

【忽語】○誠しらる貌。忽は消滅、語は助字。左、文五「卒陶庭堅、不ノ記一一」○圖談用してなほざりの。又、ゆるかせにする義とす。

【忽然】たちまちに。‖忽焉・忽爾。

【忽卒】にはか、にはかに。

【忽如ノ烏過ノ目】人生の須臾なるを嘆ふ。張協詩「人生一瞬間、內一一」

【忽地】たちまち、地は助字。王建詩「楊柳宮前一一來」

【忽怳】きはめてかすかに髣髴、律書忠「皆以ニ正孝慮、無有ニ一一」

【忽滅】そそつかしい、たちまち。杜甫詩「一一相逢是別筵」‖卒爾。

【忽略】おろそかにして詳かならず、なほざりにする。書經「忽忽荒政、怠惰一一、必重ニ主政」

【忽】コツ　圖　月

起し、宋を滅し、中國を一統し、秦・漢に部す。

【怯】キヨ　圖

○こころなし、ぶやぶる（害）詩、邶風「不一一不求」ねたむ（嫉妬）○ものとる（狠）「忿一」さからふ（逆）、莊、天下「不一」於衆」

【怯求】キヨキウ　人をねたみそこなひ、又貪りて得んことを望む。字解參看。

【怯心】シン　人を忌みにくむ心。莊子「雖有ニ一一者不ノ忍ニ鑑式」

【忱】シン　圖

まこと（信誠）「下一」「悃一」‖誠・懇。

【怯】シヨウ　圖

○○あわつ、あわてる（惶遽）四子講德論「秦時百姓怔一」○おどろく（驚）○むなさわぎする。（心動不定）

【怯】セツ　圖　屑

ならす、ならす（習性）「狃一」

【怯】タイ　圖　泰

おごる（侈者驕）張衡、西京賦「有忌盛公子者、心奢靡一」‖怯。

【怯侈】タイシ　おごる。左、昭五「楚王一一已甚」‖奢侈。

【狃】ジウ　㊀㊁　チク　有屋

㊀はつ、はぶらふ（慣）‖惡。㊁なるならす（習）‖狃。

同訓異義　狃・耽・侮・愧・怒・怍等の別は耽（心部六畫）の條を見よ。

【狃慣】ジウクワン　はつ。書、五子之歌、顏序「有一一」

【忠】チユウ　圖

○まめ、まめやか「一實」「朴一」○まごころ、まことの誠實（己）のまごころを盡す。○君につかへて二心なし「一君」「孤一」○ものいはしし（正直）○わたくしなきこと。○うやまふ（敬）書、伊訓「爲ニ下克一」○あつし（厚）○○國語、古、彈正臺の第三等官「彈正少一」

【忠愛】チユウアイ　まことをつくしていつくしむ。禮記「致ニ其一一」

【忠允】チユウイン　まめやかにしてまこと。書、書「溫恭一一」‖忠誠。

【忠誠】チユウセイ　まことこころを盡して世の益になる。諸葛亮、文「一一者、英大子遺之」

【忠孝】チユウカウ　忠は善く君に事ふるをいひ、孝は善く親に事ふるをいふ。忠義と孝行と。漢書「孝ニ安君父、一一之至也」

【忠孝兩全】チユウカウリヤウゼン　忠と孝との兩道を兼ね全くする。李商山集「貴ニ忠孝之兩全ニ、則忠可ノ參、孝、正ニ文武之二道ニ、則武可ノ師ノ文」

【忠誠】チユウセイ　まことこころあり。剛直なり、忠直にして諫言する。北史「排履貴盛、立言一一」

【忠恪】チユウカク　まめやかにしてつつしみぶかし。後漢書、鄧后紀「詔曰、公卿百官、其奬勵一一、以輔ニ朝廷」

【忠肝】チユウカン　君に盡すまことこころ。宋史、文天祥傳「古誼若ニ蘊藏、一一若ニ霞石」‖忠義・忠魂。

【忠好】チユウカウ　忠義と好惡と。‖忠邪。

【忠懇】チユウコン　前條に同じ。

【忠謙】チユウケン　まことこころを盡していさむ。後漢書、李武傳帝紀「一一」

【忠規】チユウキ　まめやかなるはかりごと。陸機、辨亡論「一一武節未ノ有ニ加ノ此其至者一也」‖忠謀。

【忠義】チユウギ　臣のまことこころを君國につくすをいふ。魏志、黃王紀「所ニ以表ニ揚一一」

【忠款】チユウクワン　まことこころあり。つよし。唐書、李嗣業傳「一一愛ノ國」

【忠勤】チユウキン　まめやかにつとめる。忠を盡して職務に勤勞する。書、「石碏在ノ位、帶ニ一一、治每委任焉」

【忠實】チユウジツ　まめやかにして、つつしむ。五代史、牛存節傳「爲ノ人木訥一一」

【忠經】チユウケイ　一卷、漢の馬融撰と傳ふ。孝經に擬し、十八章に分ち、君に事へて忠を盡すべきことを說く。

【忠君】チユウクン　きみにまごころを致す。戰國策「忠ニ其君ニ天下皆稱ニ以貧」ノ臣」

【忠動】チユウドウ　君につくせるいさを。

【忠果】チユウクワ　○忠義にして果斷。後漢書、夏恭傳「嘉其一一、手節中一」○殷機ノ一名。本草「殷機一名一一」‖有果・謙果。

【忠款】チユウクワン　まごころ。北史、齊神武帝紀「自明一一」‖忠誠。

【忠敬】チユウケイ　君に事へてまごころあり、つつしみうやまふ。謝靈運、樂府「淮夙夜在ノ公、誠ニ其一一」

【忠實】チユウジツ　まごころあり、かしこし。漢書、元帝紀「明王在ノ上、一一布ノ政、則寒生和樂、方外襲ノ澤」

【忠言】チユウゲン　忠誠にして直言する。晉書、陳元達、在ノ位一一、屢進ニ讜言」‖忠諫。

【忠言逆ノ耳】ちゅうげんみみにさからう　忠直なるまごころを以て諫めらるる言は聞くに快からず。家語、六本、孔子曰、良藥苦ニ於口ニ而利ニ於病ニ、忠言逆ニ於耳ニ而利ニ於行ニ」

【忠厚】チユウコウ　まめやかにしてあつし。忠信にして篤厚。詩、大雅、行葦、序

「行善一一也、周家一一、仁及二草木」

【忠告】チウコク　まごころを以て告げさとす。論語顔淵「子貢問レ友、子曰、一一而善道之」

【忠悃】チウコン　まめやかにして誠なり。＝忠誠。

【忠魂】チウコン　○忠義の肝に同じ、魂は精神。○忠義の爲めに死せし人のたましひ。

【忠氣】チウキ　忠まめやかにして、まこと。唐書「忠直言、則諂諛者進、而一一之語不レ聞矣」

【忠臣】チウシン　まごころをつくすけらい。老子「六親不レ和、有レ孝慈、國家昏亂、有レ一一」史、樂毅傳「臣聞、古之君子交絶、不レ出二惡聲一、一一去レ國、不レ潔二其名一」

【忠臣孝子出二於孝子之門一】チウシンコウシシ君に忠なる人は必ず親に孝なるをいふ。漢書、韋彪傳「家二忠臣一、必子二孝子之門一」に本づく。

【忠臣不レ事二一君一】チウシンフジ忠義の臣は二人の君に事へず。史、田單傳「王曰、一一、貞女不レ更二二夫一、吾與二其生而無義、固不レ如レ死」

【忠臣不レ先レ身後レ君】チウシンフセンシンゴクン忠臣は其の身を後にして先づ君の爲めに盡す。史、魯仲連傳「智者不二妄動一、勇者不二怯レ死而滅レ名、一一」

【忠信】チウシン　まごころを盡して言にいつはりなし。論語、學而「主一一、無レ友二不レ如レ己者一」

【忠信篤敬】チウシントクケイ　言語をまことにし行事をあつくつつしむ。論語衛靈公「子張問レ行、子曰、言忠信、行篤敬、雖二蠻貊之邦一、行矣」

【忠藎】チウジン　藎は盡なり。忠義の心盡くして忠を國家に盡す義。蜀志、蔣琬和傳、注「初清貧、言語敦亮、主簿、有一一之效」

【忠邪】チウジャ　まごころある者と、よこしまなる者と。漢唐書「一一既辨」

【忠情】チウジョウ　まごころ。蜀志「致二命明主、一一效レ臆」

【忠懇】チウコン　まごころありてつつしみ深し。晉書「一一在レ公、慮不レ及レ私」＝忠敬。

【忠淳】チウジュン　まごころありて、てあつし。〔宋朝會要〕

【忠誠】チウセイ　まごころありて、まじりけなし。諸葛亮、出師表「宮中府中、俱爲二一體一、陟罰臧否、不宜異二其人一、以昭二陛下一」

【忠篤】チウトク　まめやかにしてすなほ。禮記「孝弟一一之行立」

【忠恕】チウジョ　まごころをつくすと、もひやりあると。忠實にして同情心に富むこと。論語、里仁「夫子之道、一一而已矣」

【忠正】チウセイ　まめやかにしてただし。蜀諸葛亮「人臣者以二一一一爲レ本」

【忠淳】チウジュン　まごころありて心淳し。晉書「一一高潔、不レ容二塵滓一」

【忠清】チウセイ　朝鮮の地名。京畿道の南、全羅道の北に在りて、南北に分つ。北道の首邑は忠州、南道の首邑は公州。

【忠誓】チウセイ　まごころある誓。書「古案君子、皆謂二周公一一」

【忠誠】チウセイ　まごころ。後漢、劉勳傳「元帝喪、一一貫、感二日月一、孝感動二遠邊一」＝忠實。

【忠切】チウセツ　忠實にしてねんごろの意。「以二言レ事一一、義二奇桀一」

【忠節】チウセツ　君に事ふるまめやかなるみさを。漢書、師丹傳「載二一一」

【忠善】チウゼン　まごころありてよし。左傳、子產「聞、一一以損レ怨」

【忠膽】チウタン　君に盡す忠義の心。＝忠肝。

【忠直】チウチク　まごころありて、ただし。北史、伊婁謙傳「謙性一一、善詳令」

【忠貞】チウテイ　まめやかにして、ただし。忠實にして貞正。書、君牙「乃祖乃父、世篤二一一、服二於王家一」

【忠方】チウハウ　まめやかにて方正なり。魏志「秉義履忠、志行一一」＝忠正。

【忠孝】チウカウ　まごころと、孝とは信。孝未詳。文「携行淸介、一一信格」

【忠節】チウセツ　君に忠義を盡さんと慎激する。北史「蔚旨剛直」、文義一一」

【忠諫】チウカン　忠實なるはかりごと。漢書、夏侯勝傳「讒言一一、世謂是嘉」

【忠朴】チウボク　まめやかにして、かざらず。漢鑑文「國是丹誠抱一一」

【忠勇】チウユウ　まめやかにしていさましし。晉書「英略奇姿、一一絕レ世」

【忠勇義烈】チウユウギレツ　忠義にして勇氣がすぐれてゐる。

【忠貞】チウテイ　まごころありて、潔貞。書、國侍「小大之臣、咸懷一一」＝忠正。

【忠烈】チウレツ　まめやかにして功が大いなり。唐書、杜黃裳傳「一一巍然」

【仲】チュウ　圏

うれ（憂）詩、邶風「憂心有レ一」

【仲忉】チウトウ　うれくいたむ。沈約文「一一在レ念」

【仲度】チウタク　うれくいたむ。史、華陽傳「臣不レ勝一一之情」

【仲仲】チウチウ　心のうれふる貌。詩、召南「未レ見二君子一、憂心一一」＝忡忡。

【僧僧】ソウソウ

【忝】テン　圏　作古・忘に

○○はづかしむ、けがす（辱）詩、小雅「無一一爾所生」所生は父母。○かたじけなし、かたじけなくす。己の身に受けたる物事を辱かしめる義にて、分に過ぎたる意をあらはす。謙遜の言ことば「確一」「僭一」書、堯典「天心に從ふ、會意文字、天を以て心に求め、每に自ら惕慄寬恕する義。

【忳】トン　元　眞　圏

①②③トン　①もだ（默）ゆ（悶）○うれ（憂）ふ（亂）②ねんごろ。＝諄。③おろか。

【忳忳】トントン　○おろかなる貌。老子「我愚人之心也哉一一兮」○ねんごろ。人ををしへて倦まざる貌。＝諄諄。

【念】ネン　圏

○おもふ。常に思ふ。「志一」書、大禹謨「一茲在茲」おもひ「思一」「憂一」「俗一」「世一」「寢一」○記憶する。論語、公冶長「不レ一舊惡」○となへる、誦する、讀む「一書」「一經」○廿の字の俗音と混同して廿の字に代へ用ふる。韓愈に後一九日復上宰相書あり。○園極めて短時時間。仁王經「一一中有二九十刹那一」○圓いきをつける、注意して確あり「一の爲め」

圓心に從ひ今の聲。俗に、念に作るは非なり。

同類 念・思・憶・懷・意・想・惟・慮・顧の別は思（次畫）の條を見よ。

【念慕】ネンボ　あやまちを無からんことを思ふ。後漢書「思過レ、務消二禍愆一」

【念書】ネンショ　悟為くして故落を忘れず、己貧賤となりても、貧賤の交を忘れず。史記、萬石傳「常用一一之言一」

【念願】ネンガン　おもひねがふ。

【念慾】ネンヨク　己のおやまちを思ひて改める。後漢書、光武紀「詔曰、今方一一、庶消二厥咎一」

【念日】ネンジツ　廿日をいふ。

【念射】ネンシャ　人の意思は光線の如く人體より發散して、寫眞の種板に感ずるといふ作用。

【念呪】ネンジュ　心にいのる。呪文を念ずる〔西園雜記〕

【念珠】ネンジュ　にゆず（數珠）念誦に用ふる佛具。酒店書、朱國楨傳「說事之暇、手持一一」

【念誦】ネンジュ　佛名をとなへ經文をよむ。念佛讀經する。雙峯止觀「一一云、存二念三寶一」

【念書】ネンショ　書物を讀む。雙峯雜書「韓忠定、邊二冬笑、命二小孫一溫レ尺、數二其一一」

【念書人】ネンショジン　佛僧者、又學者をいふ。＝讀書人。

【念誦】ネンジュ　せんぞの名を汚さじとおもふ。詩、大雅、文王「無レ念二爾祖一、聿二修厥德一」

【念願】ネンガン　こころ。おもひ。＝心願。

【念念】ネンネン　常におもひつづける。又、時時刻刻に。謝朓詩「生レ世未暫寓、此身一一非」

【念念刻刻】ネンネンコクコク　ときのま、時時刻刻。

【念念相續】ネンネンサウゾク　佛所の心と後の念との間に善念を交へずして相つづく。

【念念生滅】ネンネンセイメツ　佛世界のすべての事物は時時刻刻生じたり滅したりして少しも止むことなき義。＝生滅滅滅輪。

【念佛】ネンブツ　佛事心佛を念じて、南無阿彌陀佛の六字の名號を唱ふる。法華經「以二深心一一レ一、修二神通力一」

【念力】ネンリキ　一心に思ひこゝろし力。遺教經「一一堅强、難レ入二五欲一、中、不レ爲レ惑所レ害」

【念慮】ネンリョ　おもんぱかる。おもひ。漢書「一一萬方、不レ忘二元元一」

【忞】ビン　圏

○つとむ（勉强）○くらし。

【忞忞】ビンビン　心に了ぜざる所ある貌。法言「傳千里之一一者、莫レ如レ書」

【忿】フン　阿

○いかる（怒）立腹する。「激一」「爭一」○いきどほる、憤り、通ず、うらむ（恨・怨）○いかり、いきどほり「小一」「積一」論、顏淵「一朝之一、忘二其身一」

同類 憤・憾・憾・怨・怒・憤・恚・嗔・瞋・怠・怒・怨・怒・憤・憫・憾・恚の別は怒（次畫）の條を見よ。

【忿恚】フンイ　いかる。南史、家人未レ見二其有一一一」＝嗔恚・嗔恚・怒怒・怒恨。

【忿怨】フンエン　いかりうらむ。蘇賈詩「一一終易生、風波常レ時起」＝怒恨・怒懟。

【忿怙】フンコ　いかりを忍ぶこと。怙はさる義。戰國策、秦「一一含レ怒之日久矣」

【忿怒愛憎】フンドアイゾウ　忿怒と私愛とは修羅の上に著あり、故に之をこらしふさぎて、心に生ぜざらしむ〔易、損卦〕

【忿鬪】フントウ　いかりて、なかたがひする。船書「厚相結納、一一得レ解」

【忿鬪】フントウ　いかりせめぐ。韓愈、李冲傳「冲兄弟六人、四母所レ出、頗相一一」

【忿言】フンゲン　いかりていふことば。愛をふくむことば。禮記「一一不レ及二子身一」＝怒言。

【忿恨】フンコン　いかりうらむ。漢書「一一相報」＝怒恨。

【忿爭】フンソウ　いかりあらそふ。韓愈詩「初嘗賣一一、中鋒難二明鏡一」＝怒爭。

【忿詈】フンリ　いかりあらそふ。蘇軾「復

致ニ一一」＝怒爭。

【怒嗔】ドウシン いきどほリさわぎておおつかず。宋史「修古奏、殊一一無ニ大臣體」

【怒怯】ドウキョウ いかリて著する。劉克莊文「君子無ニ纖毫之過、而小人一一、必致ニ之死」

【怒疾】ドウシツ いかリにくむ。南史「遠近美、不ニ一一ニ」＝怒嫉。

【怒嫉】ドウシツ いかリにくむ。南史「邵陵王綸傳「貶徙一一」＝怒疾。

【怒然】ドウジン いかリてやかならざる貌。

【怒霆】ドウテイ いかリて霹靂をおこす。憤も怒と同義。大學「身有ノ所ニ一一、則不ノ得ニ其正」

【怒懟】ドウタイ いかリうらむ。懟は怨。宋書「文五王傳「一一有ニ怨言」、讀ノ爲ノ音朝ノ酋ノ壬」

【怒濤】ドウトウ いきどほる。隨游詩「一一緣ニ向舟爭」、說呼可ニ去聲」＝憤怒。

【怒罵】ドウバ いきどほリのしる。南史「一一形ニ于辭色」＝怒詈。

【怒怒】ドウド いかる貌。阮瑀尚書「晉公與ニ孫權書「使ニ二君纖然自絕」、以ノ忘一一」

【怒憤】ドウフン いかる。王朝、三國論「甘一一而忘ノ食」＝憤怒・怒怒。

【怒矢】ドウシ 心に激していきどほりさわぐ兵隊。漢書「不ノ忍ニ憤怒者、調ニ之一一」

【怒懣】ドウマン いかりもだえる。懣は憤悶。司馬遷文「不ノ得ニ舒ニ一一」＝憤

遮。

【怒言】ドウゲン いきどほりのしる。宋書「一一形ニ于辭色」」

【怖】ベン 慶

よろこぶ（喜）たのしむ（樂）「欣一」「歡一」

【怖懼】クヒン 色喜ぶ。白居易詩「脅裏見ノ鏡同惘惘、身健準ノ冰且一一」

【怖躍】クヤク よろこびをどる。符載文「仰ノ天一一、跼ノ地號慟」

【悖】ハイ

悖（心部八畫）の俗字。

圖 悖（人部八畫）の誤用。

五畫

【怡】イ 支 迅古、台に通ず

○よろこぶ（悅）「一一」「嬉一」よろこばす。禮、內則「下ノ氣一ノ色」○やはらぐ（和）○たのしむ（樂）

同訓異語 怡・喜・悅・說・欣・忻・許・歡・懽・驩・懌・怜・恰・愜・賞・讌の別は喜（口部九畫）の條を見よ。

【怡怡】イイ やはらぎよろこぶ貌。次條。

【怡怡】イイ 喜看。＝怡然。

【怡怡如】イイジョ やはらぎよろこぶ貌。論、鄉黨「出降ニ一等、逞ニ顏色」、「一一也」、論、子路「朋友切切偲偲、兄弟

【怡悅】イエツ 心によろこび樂む。李百藥、笙賦「凝ニ靜氣之盈溢、容ニ容光ニ而一一」

【怡懌】イエキ よろこびよろこび。戾公銘、琴賦「心一一而鬱開兮」＝怡悅。

【怡悅】イエツ よろこぶ。陶弘景詩「凝上多ニ白髮、只可ニ自一一」＝怡懌。

【怡好】イコウ よろこびたのしむ。好は游衍。宋孝武帝詩「束髮好ニ一一」

【怡顏】イガン 顏色を和げよろこばす。陶潛、答ニ丘淵之ノ書「昔來辭ニ庭柯ニ以ノ一ノ」

【怡和】イワ よろこびやはらぐ。任昉文「神虛氣懌、無ノ待ニ一一」＝和悅。

【怡情】イジョウ 心情をよろこばす。中論「學也者、所ニ以一ノ理ニ一ノ性」、聖人之上務也」

【怡色】イシキ よろこばしき顏いろ。又、顏色をやはらげよろこばしくする。禮、內則「下ノ氣一ノ、柔ノ聲以諫」

【怡然】イゼン ○よろこび樂む貌。陶潛、桃花源記「黃髮垂髫、並一一自樂」＝怡怡。○物の道理のすらすらと順ひ解ける貌。老莊、天地「左彼右此、若江海之浸、若雲雨之過、漠然水釋、一一理順」、然後萬物ノ得也」

【怡穆】イボク よろこびやはらぐ。北史、盧度世傳「容華一一、豐儀同ノ之」

【怡愉】イユ よろこぶ。蔡書、柳宗元傳「海內皆欣一一」＝欣愉。

【怡豫】イヨ よろこびたのしむ。史志

【怨】① エン・ヲン ② エン・ヲン 元 圓

①うらむ、うらみ（恨）「憤一」「嫌一」「宿一」「閨一」「構一」「孟、高章、父母惡之、勞而不ノ一」○いかる（恚）○あだ（讎）②あだかたき（仇讎）禮、儒行「外寡不ノ遊」「一」

同訓異語 怨・恨・憾・懟の別は恨（心部九畫）の條を見よ。

【怨女】エンジョ ○もとめ妻なしに、年ノ長ノ而未ノ嫁者、曲禮、疏「男三十、女二十」○夫なき女を怨女といふ。孟子「伯夷、思ノ其ノ妻、曰、我ノ之不ノ合ノ時、而怨ノ曠ノ旅ノ」、「有ニ上官之變、以身蹈ノ此、何怨一一邪」

【怨】① エン・ヲン ② エン・ヲン 元 圓

○うらむ、うらみ（恨）「憤一」「嫌一」「宿一」「閨一」「構一」「孟、高章、父母惡之、勞而不ノ一」○いかる（恚）○あだ（讎）○あだかたき（仇讎）禮、儒行「外寡不ノ遊」「一」

同訓異語 怨・恨・憾・懟・懟の別は恨（心部九畫）の條を見よ。

【怨怒】エンド うらむ。論、憲問「以ノ德報ノ怨、何以報ノ德」

【怨恨】エンコン うらみにくむ。＝怨憎。

【怨惡】エンオ うらむにくむ。＝怨憎。

【怨氣】エンキ うらみ怒ること。史記「諸侯無ニ異心、百姓無ニ一一」

【怨咎】エンキュウ うらみとがめ、又、あやまち。戰國策、齊ニ一一、歌ノ酒爽」

【怨懟】エンタイ うらみくやむ。後漢書、卓茂傳「一一以ノ主恥」＝怨恨。

【怨嘶】エンセイ 怨女嘶夫の略。嘶は空しく悲みうらむ。武帝紀「家室一一、百姓流離」怨女多有。

【怨嫉】エンシツ うらみて仲惡し。紫義文「情惡一一、卽成ニ一一」

【怨言】エンゲン うらみごとば。漢書、因ノ醉或有ニ一一、不ノ能ニ自保」

【怨讟】エントク うらみにくむ。後漢書、馮衍傳「欲下免ニ讒口滿一一、豈不ノ難哉」

【怨恨】エンコン うらむ。周語「英ノ不ニ一一」

【怨嗟】エンサ うらみなげく。何遜詩「臨ノ風自一一」＝怨咨。

【怨望】エンボウ うらみそねむ。高啓詩「翠羽鸞啼英ニ一一」

【怨刺】エンシ 人をうらみて、とはましにそしる。漢書、禮樂志「周道缺、詩一一之詩起」

【怨咨】エンシ うらみなげく。書、君牙「夏暑雨小民惟日一一」

【怨恩】エンオン うらみおもふ。うらむ心。班固、兩都賦、序「四土雲老、咸懷ニ一一」

【怨讟】エントク うらみて、あだとする。うらみのあるかたき。左傳「我有ニ三怨、一一已多、將何以歸」、宋史、孫永傳「與ノ人交、終身無ニ一一」

【怨懟】エンタイ うらむ。こころ。羅九淵詩「纖指傳ニ新意、繁絃起ニ一一」

【怨詬】エンコウ うらみうらつたふ。鉛陵文「非ノ欲ノ令ニ君作ニ此一一」

【怨怪】エンカイ うらみにくむ。船康文「性不ノ傷ノ物、頗致ニ一一」

【怨恣】エンシ うらみにくむ。管雲詩「蜩響疑知ノ敵、切切如ニ一一」

【怨忌】エンキ うらむ。漢書、王商傳「商私ニ一一、案恩文「怨不ニ一一、喜不ニ驕盈」

【怨歎】エンタン うらみなげく。晉書、郭璞傳「刑獄冤濫、一一之氣、所ノ致」＝怨嗟。

【怨女】エンジョ ○もとめ妻なしに、年ノ長ノ而未ノ嫁者、曲禮、疏「男三十、女二十」○夫なき女。白居易詩「七月鳳凰臺、一一三千放出ノ宮、死囚四百來獄獄」

【怨鳥】エンチョウ 子規の異名。「禽經」

【怨笛】エンテキ うらみをふくむふえの音。梅萬里、子規詩「一一哀聲遠不ノ如」

【怨怒】エンド うらみいかる。元史「或小過失、必盡言勸止、不ノ許ニ其一一」

【怨毒】エンドク 甚だしきうらみ。又、うらみ惡む。史、酷吏傳「一一之於ノ人甚矣哉」

【怨慝】エントク うらみて惡しき事をなす。易林「國人利貞、蔡無ニ一一」

【怨讟】エントク うらみそしる。讟はそしる。怨恨して毀謗する。左傳「民不ニ寢安、君無ニ一一」＝怨謗。

【怨望】エンボウ うらみて不平を抱く。史、淮陰侯傳「由ノ此日一一、居常鞅鞅」

【怨謗】エンボウ うらみそしる。漢書、五行志「一一之氣、發ニ于歌謠」＝怨誹。

【怨畔】エンハン うらみそむく。畔は叛。

【怨誹】エンヒ うらみそしる。史、屈原傳「國風好ノ色而不ノ淫、小雅一一而不ノ亂、若離騷者、可ノ謂兼ニ之矣」＝怨謗。

【怨府】エンフ うらみのあつまるところ。衆人の怨の集中する所。左昭十二「吾不ノ爲ニ一一」

【怨怨】エンエン 怨女に同じ。吳少微詩「城南有ニ一一、含ノ情傍ノ芳叢」

【怨憤】エンフン うらみいきどほる。後漢書、趙壹傳「作ニ刺世疾邪賦、以舒ニ其一一」

【怨懣】エンマン 君父などの無情をうらみなげかふ。左昭十二「虞、裏拳「何爲其號泣也、孟子曰、一一也」

【怨言】エンゲン うらみののしる。書經「小人怨ノ汝言ノ汝」

【怨紅】エンコウ うらみしたく。宥怨、蔡論「猛獸橫作、一一繁多」

【怨歎】エンタン うらみのあるかたき、あだ。

【怨讐】エンシュウ うらみて死せし者のたましひ。

【怨入骨髓】エンニコツズイ うらむ心の甚だ深きをいふ。漢書、吳王濞傳「或不ニ洗沐ニ十餘年、一一」

【念】キン 豳

○いそぐ、とし、はやし（疾）緩慢の對「迅一」「火一」○せまる（福）「猖一」○きみじか「千一」○せまる（迫切）いそがはし、あわただし「蹀一」「迫一」「可立待」○およぶ（及）○たしなむ（窓）とほし（乏）こまる、困難。禮、王制「無ニ六年之蓄ニ、曰ニ一一」○さしせまりし事「一務」

同訓異語 念・忙・閑・急・速の別は忙（心部三畫）の條を見よ。

【念丽】ネンリ にはかあめ。杜甫詩「一一捐溪足、斜暉轉樹腰」＝驟雨。

【念行】ネンギョウ 念に行く、いそぎゆく「一一列兵」

【念行無ニ常步ニ】ネンギョウムジョウホニ 急きて念に歩行すれば常き歩調なし、急きて念に歩したることには常き事なき喻。論衡「一一、促柱少ニ和聲」＝念趨無ニ常跡」、「書唐書」

【念蹟】ネンセキ はやうち、はやうま。

【念念如律令】ネンネンジョリツレイ 漢代の公文書に用ひ後に道家者流が惡魔をはらふ爲めの呪文となる。「靈寶度鈔」

【念誦】ネンジュ いそぎあわてる。歐陽修文「一一之至、先以三運香」」

【念火】ネンカ 近く迫りし火事。＝急火。

【念快】ネンカイ 甚だはやし。＝急速。

【念繦】ケン　せまるとゆるやかなること。李元交「繦衝在手、一一必時」

【念衆】ケン　光陰の速かなるをいふ。樓鑰詩「正恐一一不留住」

【念圃】ケン　にはかにはげし。

【念波】ケン　にはかにはげし。

【念擊】ケン　にはかにうつ。史、秦始皇紀「可羽一一秦軍」＝挑擊。

【念刺】ケン　きびし。唐書「酌、歌能者名在三一一」＝厲刺・峻刺・苛刺。

【念突】ケン　にはかにしたくする。漢書、趙充國傳「將軍一一、因三天時」誅三不義」

【念數】ケン　いそがしくして、しばしばする。晉書、雜記「甚一一」＝頻數。

【念使】ケン　いそぎのつかひ。

【念突】ケン　○はやし。業問「其氣一一駭勁」○にはかのやまひ。＝念病。

【念遏】ケン　いそぎすすむ。漢書「言不一矢一正、往不三一一」

【念遏蘇】ケン　政治其の他の風俗習慣などの現狀にあきたらずして、念に新しき方にうつりかはらんとする主義のなかま。保守黨の反對。

【念手】ケン　手をいそがしくつかふ。陳師道詩「一一奚口如鬪盆」

【念所】ケン　國かなめなる場處。身體や死命に關する大切なる部分。

【念杵】ケン　しげくつくきぬたの音。史、師道詩「誰家一一搗寒衣」

【念斫】ケン　せまれるとゆるやかなること。宋玉賦「響一一于寒模」＝念緩。

【念須】ケン　○酒の燗をする小さき鍋。三倉「餐雅「炙人呼一暖酒器爲三一一、一一者以三主感念而用之也」須は用。○國茶を煎に出す小さき土瓶、きびしょ。

【念水】ケン　せのはやきみづ。杜甫詩「流弗上三一一、獵火著三高林」＝念湍・念流。

【念性】ケン　念に起る病のたち。慢性の對。

【念切】ケン　いそぎせまる。後漢書、崔寔傳、注「骨髓母之一一、而蓋三所以固之事」則非三淡母之要」

【念擊】ケン　にはかにふるゆき。陸游詩「一一打レ窗心共涼」

【念節】ケン　○はやき矢。唐太宗詩「啼猿悲三一一」○矢よりもはやし。孔雀珠玉文「飛浪衝レ雲、奔湍一レ一」

【念蔽】ケン　にはかに降るあられ。阿嵐明詩「急一一駭城雲駭、叢灘一一催」

【念足】ケン　いそぎあし、はやあし。轉じて、速かなる進みかた。

【念速】ケン　いそぐ、きはやし。晉書、辛詢傳「吳俗一一、不レ能三待久、唯水陸喪迅其所便」＝疾速・迅速。

【念瀾】ケン　はやせ。吳均文「一一莫窺、猛浪若レ奔」杜甫詩「片片輕鷗下三一一」＝急灘。

【念瀨】ケン　はやせ。崔道融詩「卻放三輕舟下三一一」＝念湍。

【念竹篆絃】ケン　香樂の琴のやかましき調、篆縛なる絲竹。翁卷詩「一一互傳遍」

【念電】ケン　いそぎの電報。

【念轉】ケン　にはかに方向がかはる「一一直下」

【念雷】ケン　せはしくさくづる。蘇廷詩「黃鵠一一來風雷」

【念波】ケン　いそぎわたる。史、項羽紀「願大王一一」

【念施】ケン　さしせまりたる難儀。詩、小雅「脊令在レ原、兄弟一一」

【念迫】ケン　國さしせまれる場合。

【念聯】ケン　いそぎのしらせ。蘇東元詩「一一傳來夕不レ眠、門前看騎笑雇頻」

【念拍】ケン　樂器の一、うちならす板の急なるもの。李郢詩「一一繁絃辭三霜堂」＝快板。

【念迫】ケン　にはかにさしせまる。

【念讎】ケン　○にはかの出來事。漢書、章帝紀「以三一一一間」○病などのにはかにかはるにもいふ。

【念務】ケン　最も先づ爲すべきつとめ。漢書「反三衰世之陵寒、繼三周氏之絕業、天下之一一也」＝先務。

【念瀨】ケン　はやせ。黃滔詩「層雲抱三幽峯、一一洩三玦竇」＝急湍・急灘。

【念灘】ケン　はやせ。馬祖常詩「解レ航下三一一、百天不レ能レ留」＝急瀨・急湍。

【念流】ケン　はやきながれ、はやせ。高適詩「湍上一一碧若レ筒」

【念流勇退】ケン　斷然官位を辭し去る。に喩ふ。名臣言行錄「一信謂三錢若水一曰、公一一人也」蘇復古詩「一一有三何難」

【念轉】ケン　いそがはしく轉ぶ。舟のうゝ、鄉は槍・黃黃大詩「一一潮裏出」

【恍】

㊀㊁ クワウ・カウ　漢陽

㊀くるふ（狂）きぬけしてぼんやりする。㊁うつとりする。恍に通ず。

【恍兮】クワウ　○物事の判然せざる貌。老子「一一忽兮、其中有レ物」○一一洸洋」

【恍惚】クワウ　とりとめなく、うつとりする貌。老子「道之爲レ物、惟恍惟忽」とり出づ。＝恍惚。

【恍惚】クワウ　うつとりとしたる貌。宋玉賦「晡夕之後、精神一一」＝恍惚・恍忽。

【恍然】クワウ　うつとりとして自失する貌。＝恍惚。

【怪】

ケ　去　漢陽

○あやし（異）く、あやしむ、不思議に思ふ。○まどふ（惑）淮南、說林「智者不一」○あやしきもの、ばけもの、へんけ「妖一」「山一」

【怪異】クワイ　ふしぎ。又、其の事。七發「是天下一一、龍鬼也」＝怪誕・怪奇。

【怪偉】クワイ　すぐれて華麗なり。侯詩「公」にして雄壯なる鶴。王庭珪詩「況公文章華三敍夢、大字一一宣逸鑾」

【怪迂】クワイ　あやしく正しからず。史、武帝紀「海上燕齊一一之方士」

【怪羽】クワイ　ふしぎなる鳥。唐書「以三此時、神奇怪一一」＝怪鳥。

【怪訝】クワイ　あやしみ、いぶかる、不思議に思ふ。＝怪疑。

【怪愕】クワイ　あやしみおどろく。朝野僉載「一一良久」

【怪奇】クワイ　あやしくめづらし。＝奇怪・怪異。

【怪氣】クワイ　あやしき雲氣。王勃文「消三一一于沉霧」

【怪鬼】クワイ　ばけもの。唐書、方技傳「能厭三勉一一」

【怪詭】クワイ　あやしくめづらし。段成己詩「雲日五花蔽、百鬼呈三一一」＝怪異・怪奇。

【怪譎】クワイ　あやしくうたがはし。＝怪疑。

【怪禽】クワイ　怪鳥に同じ。

【怪獸】クワイ　あやしきけもの。

【怪火】クワイ　因りて起りし原因のわからぬ火。又其の火事。

【怪怪】クワイ　極めてあやし。韓愈文「不レ能三一一、一一奇奇」

【怪傑】クワイ　あやしくすぐれたる人物、怪偉なる人傑。

【怪譎】クワイ　あやしくして正しからず。山海經「有レ人獸體其狀正一一」

【怪言】クワイ　あやしきことば。曹植文「酵糞糞、實頗有三一一」

【怪錯】クワイ　色色と入りまじる。江賦「水物一一」

【怪事】クワイ　あやしき事柄。晉書、殷浩傳「作三咄咄一一四字一而已」

【怪鵲】クワイ　鳥の異名。「古今注」＝角鵲。

【怪辭】クワイ　あやしきことば。韓愈詩「一一驚レ衆、辯不レ已」＝怪言。

【怪厭】クワイ　ふしぎにあやしきけもの。晉書、又妻弱首一一于紅首、以禮三江神一」＝怪獸。

【怪崇】クワイ　あやしきもののたたり。易林「噬嗑不レ逆、家多三一一」

【怪笑】クワイ　あやしみてわらふ。唐書、陳子昂傳「子昂記武后興三明堂太學、其言甚高、殊可三一一」

【怪石】クワイ　○あやしき形のいし。方干詩「川花酒醒雖含レ笑、一一無情更不レ言」＝奇石。○玉に似たる石。漢書、注「一一石之次レ玉美好者也」

【怪配】クワイ　あやしき話。荀子「治三一一、玩三奇辭、以相挽洛」

【怪鉅】クワイ　あやしきくひ。庾信、孫敬敬墓誌「知レ理三一一」

【怪誕】クワイ　あやしきそらごと。韓愈詩「邪信讒仙非三一一」

【怪譎不經】クワイ　とりとめなき大言を吐きて正しき道にそむく。漢書、王莽傳贊「一一、好爲三大言」

【怪談】クワイ　ばけものばなし。＝妖怪談。

【怪竹】クワイ　めづらしき竹。唐書「高宗苑時、宣者、宋三一一江南、時、時一上苑」

【怪鐵】クワイ　あやしきせし。山海經「衆余之山、其中多三怪鐵一一」

【怪鳥】クワイ　あやしきとり。神仙傳「有一一止屋上者」＝怪禽。

【怪帶】クワイ　あやしくして他とことなり。冷怪錄怪。柳宗元、始得三西山宴游記「未知知三西山之一一」

【怪物】クワイ　ばけもの。○祕、祭法「山林川谷丘陵、能出レ雲爲三風雨一、見三一一、皆曰レ神」

【怪異】クワイ　あやしきうはさ。

【怪木】クワイ　ふしぎなる木。山海經「鍾翼之山、其中多三怪鉅一一」＝奇木。

【怪嗟】クワイ　めづらしきあちはひ。又其の物。唐書「子一一人之所レ美」

【怪力亂神】クワイ　怪はあやしきもの、力はすぐれて大いなる腕力、亂は道をみだる怪異の事、神は鬼神。論、述而「子不レ語二一一」

【怪我】クワイ　○あやまち、＝過失。○あやまちて生じたるきず。思はざる負傷。

【怪】

○おそれ、おそる（多畏）勇の反對「一一」○よわし（懦・弱）氣おくれする、おそれ易し「恠雋」史、淮陰侯傳「若雖長大好帶劍刺刺、中情一耳」

同 畏 恐 懼 怯 怒 惡 怒 怖 怕 怪 慄 懼 懼 怯 怒 怖 怕 怪 の別は恐項を見よ。

【怪似狐】クワイ　おそるゝこと狐に似たり。莊子「臥、草陸知レ冗聽レ冰一一」

【怪恠】クワイ　おそれてよわし。＝怪怖。

【怪言】クワイ　おちおそれることは。夏侯湛文「居レ位者以三一一斷、爲實以三一一爲レ信」

【怪弱】クワイ　よわし。論衡、注「沈沒一一、自守而已」

【怪懦】クワイ　おそれる。陸龜蒙詩「一一不三敢前」

【怪懷】クワイ　おくびょう。懷一に懦に作る、怪なり。弱なり。韓非子「時レ非レ懷、愈則自一一而不レ盡」北史、魏宗室元澤傳「楊素粗疎、甚威一一」

【怪惟】クワイ　おそれおゝたる。宋史、李綱傳「事或久慢、士氣一一」

【怪懼】クワイ　おくびょう。唐書、傳師道傳＝怪懷。

【怪怕】クワイ　おちおそれる。舒元輿文「非衆夕動、常一一人者也」＝怪怖。

【性勇壓元】おくびょうものは奮して勇者となり、やぶれし城は修復して完全になる。「歐陽修、范文正公神」

【性夫】おくびょうな男。史記「酒三盃貪之則二一一」＝懦夫。

【性怯】おそれてよわし。＝怯恬。

【怍劣】よわくしておとる。晉書、劉波傳「貪于者謂二之清勁、慎于者謂二之一一」＝恬劣。

【恬】テン　㊥

○たのむ、たのみ（恃賴）たよる「依一」○父。詩、小雅「無父何一、無母何恃」とあるによりて恬を父、恃を母の義とす。又轉じて兩親（父母）の義にも用ふ。

同副詞類　怙・賴・憑の別は負（貝部二畫）の條を見よ。

【恬然】己の勇氣を恃む。漢書「形容魁健、負ノ力一一」＝恃氣。

【恬險】憂害をたのむ。晉書、嵇康傳「遇敵起、一一鬪張」＝恃險・憑險。

【恬恃】○たのみとする。左傳「一一芟衆」＝憑恃。○父母の稱。詩、小雅「無父何恃、無母何恃」

【恬絕】恬は恃むも、恃む所あり。罪を犯す者、終には再び犯す者。一說、惡をたのみて身を終へんとす

【怍】サク　㊥

○はづ（慚）きまりわるく思ふ「慚一」「羞一」論語「憲問」「其言之不一、則爲之也難」○はぢ（恥）ては顏色がかはる。曲禮「容毋怍」

同副詞類　怍・恥・辱・愆・羞・愧等の別は恥（心部六畫）の條を見よ。

【思】シ　㊥　㊥

㊀㊁サイ　㊥

㊀おもふ（念）かんがへる「近一」「迫一」「沈一」「靜一」「熟一」曲禮「儼若一」○おもんぱかる（慮）○ねがふ（願）○かなしむ（悲）○ここに、語頭に置く無意味の助字。詩、魯頌「一樂泮水」。語尾に置く無意味の助字。詩、大雅「神之格一、不可一度一」㊁㊂おもひ、かんがへ「慮」○かなしみ（悲）こころ、おもひ「詩一」「秋一」「谷一」「旅一」「意一」㊂手思サイは鬚多き鍋。左、宣二「手一手一、棄甲復來」

同副詞類　思・想・惟・慮・憶・懷・意・念・想・惟・思の如し、又したひおもふ義、思慕と用ふ、相思とは互に慕ふなり。○憶は思ひ出すなり、憶昔、憶往の如し。○懷は ふところ、いだくと訓む、心にこめて思ふなり。懷・懷抱と連用す。論語「君子懷刑、小人懷惠」○意はこころばせと譯す、おもはくをつける義、志之發也也帶ぶ。○念は思字よりも輕し、いつも念頭にかけて忘れぬなり、又讀書を念書とも いふ、口に唱ふる義、念佛・念經とも連用す。○想は心に思ふ義、想像と連用する

受けし運命、貴賤夭壽の類。易、乾卦「乾道變化、各正二其一一」○いのち。論語、顏淵「死生有命、富貴在二天一」＝生命。

【性慾】セイヨク　男女の肉慾。

【性理】セイリ　性命卽ち天理及氣質との略。宋儒の理唱ふる學說。＝性理學。

【性理學】セイリガク　性命理氣を說きし儒教哲學。宋の周濂溪・張橫渠・程明道・程伊川・朱先生等の唱へし學說。＝道學・宋學・理學。

【性理大全】セイリタイゼン　七十卷、明の永樂十三年、胡廣等勅を奉じて撰す。宋の道學者一百二十家の說を集む。

【性靈】セイレイ　○こころ、たましひ。袁宏詩「出レ水蓮花比二一一一」＝精性。○こんぜき。精氣。陶弘景文「任二一一一而直往」

【怔】シセイ　庚

○おそる（懼）○あわつ（遑）

【怔營】セイエイ　あわてて自ら安んぜざる貌。後漢書、耶頡傳「一一惶怖」＝正營・怔營。

【怔忪】セイショウ　おそれる貌。四子講德論「秦時百姓一一、無レ所レ措二其手足一」

【忽】　忽（心部七畫）に同じ。

【怳忙】ハクボウ　いそがはし。陶潛詩「三晨雖レ除亦一一」

【怠】タイ　灰

○おこたり、おこたる、なまける（懈）「荒一」「倦一」「懈一」○あなどる（慢）氣がゆるむ。かろんずる。

同音異義　怠・解・懈・惰・慢○怠は心のたるむことなり、怠慢と連用す、敬の反なり。○解は勤の反、緩を出さぬなり、又じだらくなり。詩經「風後雨、解以事二人一」○懈は解に同じ。○惰は懈に同じ。心のたるむ義。曲禮「國家不レ惰」○慢は緩ゆるみて、なまける義。說苑「偏緩解怠多二暮日一」

【怠解】タイカイ　おこたる。解は懈に同じ。賈誼新書「體一一、志謠慢堕樂也」＝解怠。

【怠緩】タイカン　おこたりおごる。孟、公孫丑「今國家閒暇、及二是時一般樂一一」＝惰傲。一說、敖は遊なり、或は遊に作る。

【怠驚】タイケイ　おこたりておどろく。敬して敬ませず。後漢書、竇憲傳「諸公稍自引而一一」

【怠慢】タイマン　おこたりてなげやりにする。國語「吾聞晉之於二災備一也、其手所二一一者多矣」＝惰緩。

【怠荒】タイコウ　おこたりすさむ。なまけてなげやりにする。曲禮「勿二一一」＝荒怠・怠慢。

【怠隙】タイゲキ　おこたりて防備をすきまを。蜀志「伺二其一一、憑二精銳、出擊、大破之」

【怠傲】タイゴウ　なまけうむ。後漢書、日夜學論「未二嘗一一」＝傲怠。

【怠忽】タイコツ　おこたりてなほざりにする。書、周官「一一荒政、政不レ學無レ成」＝怠慢・怠惰慢易。

【怠狀】タイジョウ　圖　おびゆ。あやまり謹文。

【怠息】タイソク　やすむ。後漢書、子定國傳「君相二敎勑一、不二敢一一一」＝休息。

【怠惰】タイダ　おこたる。管語「況有二一一、其何以濟邦」＝懈惰・懶惰・惰怠。

【怠墮】タイダ　おこたりなまける。史記「不二敢一一」

【怠否】タイヒ　なまけゆるむ。唐書「驚驚一一」

【怠報】タイホウ　官にをさむべき租稅等を おこたり期日を過す。

【怠慢】タイマン　おこたりてなげやりにする。管蠡文「防二其一一、纖レ久之情」＝怠惰。

【怠放】タイホウ　おこたりてほしいまま。後漢書「有司不レ舉、一一日甚」

【怠遽】タイキョ　おこたる。遽は慢。後漢書「後世一一說家說」＝怠慢。

【怠慢】タイマン　おこたりてなほざりにする。左、僖三「牲成而卜、郊、上一一也」＝惰慢・怠忽。

【怒】ド　遇　慶

○いかり、いかる（恚）腹を立てる「忿一」「怨一」「赫一」「震一」「怒一」「怒一」「怒

ン任矣」＝書椿。

【怒吻】フン 吻をむきだす。張耒詩「目光烱雙射、一一呀欲吻爰」

【怒法】フン はげしく飛びちるしぶき。文徵明詩「一一濺ン空雖雨急」

【怒浪】フン さかまくあらなみ。圖畫見聞誌「蓉禽、濺濤一一」＝怒濤。

【怒言】フン いかりのしるし。呉志、徐詳傳「一一就及其矢操」＝怒罵。

【不ン勝ン怒】フカ ショウ ドウ 甲に向ひていかりしことを、乙にうつさず。〔論語〕雍也〕

【不ン敢ン怒】フカ ヨウ 怒りたる心をいつまでも胸中に包藏せざる義。孟、萬章「仁人於ン弟也、一一焉、不ン藏ン怒、不ン宿ン怨、愛而已矣」

【怕】ハ 遇

○おそる（懼）「懼一」「畏一」「驚一」○おそらくは、おほかた。伯浩淡詩「江湖一有ニ侶花蕚」

同副類語 怕・恐・懼・畏・怖等の別は恐（次項）の條を見よ。

【怕懼】ハク おそる。薛能詩「驚巢翠鐵無ニ一一、掛ニ入頭上一任ニ風吹」

【怕好樹】ハコウ ジュ 百日紅の異名。

【怦】ヒヤウ 庚

○こころがせく（心急）○ただし（直）

【怦怦】ヒヤウ 忠直なる貌。楚辭、九辯「心ン忠直なる貌。楚辭、九辯「心

一一兮誤直」

【怫】フツ 物 ハイ 未 ヘキ フツ 月 ヲ 沃 ツ 屋

㊀いかる、むつとする。○心安からず。㊁ふさぐ（鬱）氣がむすぼれる。㊂もとる、たがふ。（悖）㊃みだる（亂）＝詩。

【怫然】ハイ いかる。唐書「天后方一一」

【怫鬱】ウツイ もとりたがふ。「佛は亂る。史、天史公自序「五家之言一一」

【怫鬱】ウツ 心がふさぐ。鬱。氣がむすぼれる。＝鬱滯、佛鬱・沸鬱。

【怫悅】ウツ 出でがたき鬱。陸機文「沈辭一一、若潛魚衝ン網、而出ニ重淵之深ニ」

【怫然】ゼツ 怒る貌。莊、天地「一一作ン色」＝艴然。

【怫戾】レツ もとる。唐書、韋事傳「嘘謾行ニ手寮格ニ、則一一著化」＝悖戾。

【怭】ヒツ 質

あなどる（侵）みだら。

【怭怭】ヒツ あなどり亂るる貌。詩、小雅「目匪醉止、威儀一一」＝媟媟。

【怖】フ 遇

○おそる、おそれ（懼）「畏一」「恐一」「驚一」○をのく。○おどす、おどかす（嚇）恐嚇する。後漢書、第五倫傳「詐ニ愚民」

同副類語 怖・恐・懼・畏等の別は恐（次項）の條を見よ。

【怖畏】フイ おそれる。庾信、賦「顯者同ン心惰一一」＝畏怖。

【怖駭】フカイ おそれおどろく。司馬相如、喻巴蜀檄「單于一一」

【怖慄】フリツ 驚き戦ぶは、ゑ。漢前文帝文「一一還安、窮煮未幾、佛慄の鳥魚に及ぶをいふ。

【怖慄】フリツ おそれてむなさわぎする。後漢書「征蜀一一、肝膽塗ン地」

【怖懼】フク おそれをののく。魏志「一一氣索、足栗ン地不ン能ン起」

【怖懼】フク おそれる。李强、與怖表「臣不ン勝ン一一夫馬一一之情」＝怖畏、懼怯。

【怖怯】フキ おそれる。後漢文「遠敵欧、蕭寅一一」＝怖懼・怖慄。

【怖伏】フク おそれてひれふす。

【怖懼】フク おそれてひっくりかへる。宋玉、神女賦「神心一一」

【怖慄】フリツ おそれおののく。後漢書「一一」

【怲】ヘイ 庚 敬

うれふ（憂）

【怲怲】ヘイ うれふる貌。詩、小雅「未

見君子、憂心一一」

【怏】アウ 陽 ヤウ 漾 國 薬通じて作る

○うらむ（恨）情が滿足せず、心に服せず。○おさまらず。

【怏怏】アウ 心滿足せず、たのしまざる貌。史、淮陰侯傳「居常一一、漢書には鞅鞅に作る。通ず。

【怏怏】アウ 心たのしまず。心に不平をいだく。杜甫詩「江湖稍蹤跡、風景閑一一」

【怏怏】アウ 心むすぼれて、うらめしからず。＝鬱怏。

【怜】レイ 先 ① レン ② 先 國

①さとし、かしこし、あきらか（心了解）②あはれむ。＝憐。

【怜悧】リ かしこきうまれつき。

【怜閑】リ さとし、聰慧なり。宋祁詩「知知一一不ン如ン愚」＝怜利・靈利・聰敏。

【怵】〔國字〕こらく 罪惡をかさねて人のくんくんする。○怵ぶ

【恚】ケイ 霽 イ 國 の音は書音

○いかる、いかり（怒）○うらむ、うらみ（恨）「嗔一」「瞋一」

【恚憤】ケイ フン 怒り。張說、文「陛一一手繳」

【恚憤】ケイ フン 怒りがたきかきつけ。張說文「陛一一手繳」

【恚怒】ケイ ド 怒り。「恚憤」

【恚怒】ケイ ド 怒り。「恚憤」

【恚怨】ケイ エン 怒りうらむ。

【恚恨】ケイ コン 怒りうらむ。＝怒恨。

【恚怒】ケイ ド 怒りうらみいかる。晉書、孫登傳「性無ニ一一、人或於ン諸水中、欲ン觀ン其怒、登既出、便大笑」

【恚望】ボウ 怒りうらむ望は怨望。後漢書、馮魴傳「震大臣、不ン服、興、懷ニ一一」＝恚恨・怨望。

【恚參】シン いかる。魏書、崔光傳「鈇日怡怡、未ニ嘗一一」＝恚怒。

【恚憤】フン 甚だしくいきどほる。應瑒文「嘶ン目一一、翼局傾貫」

【恚亂】ラン いかりて心が狂ふ。

【悌】ティ 霽

○よろこぶ（悅）通じて夷に作る。○たのしむ（樂）

【悅】ヱツ

悅（心部七畫）の俗字。

【恩】オン 元

○めぐみ（惠）「天一」「君一」「皇一」「主一」「厚一」「洪一」「鴻一」「報一」「報一」孟、梁惠王「今一足ニ以及禽獸」○めぐむ、いつくしむ。詩、豳風「一一斯動斯」

○いつくしみ（愛）うるほひ（澤）○いたむ（憐）

【恩愛】オン アイ いつくしみ。漢書、禮樂志「一一淫溺」

【恩意】イ あつきめぐみのこころ。唐書「皇帝天子一一、遐近性服」

【恩顧】ギン めぐみ、ゑくわうと「一一並行」

【恩慰】イ なさけをかけてなぐさめる。後漢書「因數召見加ニ一一」

【恩勝】ショウ なさけを以ていざなふ。後漢書、桓譚傳「既無ニ重賞以相一一」

【恩引】イン おまねぎ、御招待、仙より招かれたる敬語。貝信文「昨蒙ニ一一、曲賜ニ絲布」＝寵招。

【恩榮】エイ ○なさけ。おかげ。徐陵文「加ニ雲如雨、天下蒙ニ其一一」○君のめぐみが子孫にまで及ぶにいふ。

【恩榮】エイ なさけをかけられし光榮。李白詩「願拿青霜、時、時勤報ニ一一」

【恩怨】エン なさけと、あだと。陳琳詩「百年當賞誰能免、鉛鏡形庭需ニ一一」＝恩讐。

【恩遇】オン 君のたまはるめぐみのさかもりの處。周書、蘇綽傳「一一」

【市ン恩】シ 己の貪めにする所ありて人に恩を施す。恩をきせる。唐書、裴潛傳「我知ニ其不ン一一」

【推ン恩】オン いつくしみの心を廣く

おし及ぼす。漢書、主父偃傳「願陛下令諸侯得ニ以ン一ン分子弟ニ以ン地侯之」

【謝ン恩】シヤ オン 恩惠を受けたるを謝する。通典「官已受ン爵、皆殿庭一一」

【結ニ恩百姓】ケツ オン ヒヤクセイ 人民に仁德を施して其の心をひきよせる。孔叢子「一一、能ニ禮給國」

【恩罪】オン ザイ 恩惠がひろくゆきわたる。罪は及ばず。謝莊、赤帝歌「恩物垂感殷阜、一一四海、殺ニ九有」

【恩偃】ヤン ありがたく勝ひしやすみ、假は暇。宋書、謝靈運傳「家ン閑一一、寧遠ニ榮名」＝恩暇。

【恩聽】チン 前條に同じ。

【恩好】コウ いつくしみ、よしみ。周禮、注「體而遺ン之、所ニ以結ニ一一也」＝厚情。

【恩倖】コウ ひいき、いつくしみめぐむ、倖は幸。唐書、蕭至忠傳「一一敎惠也」＝寵愛・恩顧。

【恩義】ギ なさけある義理。五に愛情を以て相結ぶをいふ。晉書、郗鑒傳「素有ニ恩義其一一者」

【恩拚ン義】オンヘンギ 一家内のことは恩愛を主とし、義に義を從ひかくす。禮、喪服四制「門内之治一一、門外之治、義斷ン恩」

【恩誼】ギ 恩義に同じ。

【恩仇】キウ 恩讐に同じ。

【恩眷】ケン ふるきよしみ。後漢書、孔

融傳「高明祖父、皆與ン度有ニ一一手」

【恩給】キウ ○めぐみて物を與ふ。○多年勤續して職を辭したる官吏に、終身政府より給與する金。

【恩贈】ゾウ あたたかきめぐみ。蘇軾詩「令霞山石烈、一一春色浮」＝恩光。

【恩潤】ジン ありがたきあしらひ。張說詩「不ン伴ニ遼城將、誰知ニ一一深」

【恩顧】コ なさけをかけ。後漢書、鄧騭傳「迫ニ感天后一一」

【恩化】カ 仁德をもて民をみちびく。なさけを加へて民をなづける。後漢書、朱均傳「更良思ニ均一一」

【恩光】コウ ○春木が春のめぐみを受くる。黃庭堅詩「桃李終不ン言ン勤露、當ニ一一」○君のめぐみ、君恩。王輝詩「百年漢語閑ニ手費、一日一一顯ニ王祿」

【恩惠】ケイ めぐむ、めぐみ。南史、王志傳「潛謹有ニ一一」＝仁惠。

【恩巷】コウ あつく目をかける、巷は題。北史、李彪傳「司ニ空夷觀、國ニ鑒一一」＝恩顧・恩倖。

【恩顧】コ めぐみて目をかける。韓愈詩「感懷ニ一一重、勇ン命守ニ幾年」＝恩巷。

【恩礼】レイ ありがたきかきつけ。張說文「陛ニ一一手繳」

【恩師】シ 恩を受けし先生。

【恩賜】シ ありがたきたまもの。唐

書、李虞傳「每二至衆一一使者、相二
叙於道」＝恩遇。
【恩醴】オンレイ　なさけ。あだと。白居易詩「一酒指頃報一一」
【恩讎分明】オンシウブンメイ　恩を受けし者には恩を報い、あだには仇を以て報いることをはきはきとするは小人の心なり。呂氏春秋「一一、此四字、非二有道者之言一也」
【恩人】オンジン　恩になりし人、己が恩澤をうけし人。
【恩赦】オンシヤ　めぐみて罪をゆるす。韓愈詩「前日遇一一、私心喜過愛」
【恩情】オンジヤウ　いつくしみ深き心、れんごうなる愛情。吳少微詩「長夜泣二一一」
【恩寵】オンチウ　めぐみてとりもつ。五代史、馮玉傳「願得侍二持香玉輦一、庶二契丹一以寵一一」
【恩賞】オンシヤウ　褒美としてたまはる。後漢書、彭寵傳「俱有二重功一而一一並薄」
【恩借】オンシヤク　なさけによりてかる、人より物をかるをいふ。＝拜借。
【恩鍋】オンクワ　恩賞。＝恩澤。
【恩厚】オンコウ　めぐむ。めぐみ。周書、宇文護傳「願二皇齊一一、差安家業」
【恩詔】オンセウ　あるりがたきみことのり。張籍詩「特承二一一新二門戟」
【恩澤】オンタク　めぐみ。澤はうるほひ。史記、李斯傳「一一加二海內」＝恩寵。
【恩地】オンチ　助詩。韓愛「一一、之則有負」＝恩寵。○めぐみ。地は無意味○國語、晉語「言之則有負」＝恩寵。
【恩顧】オンコ　なさけ。目を以て報ず。
【恩賞】オンシヤウ　恩を受けし者に恩を報い、あだには仇を以て報ずるこ

ちおそるなり。○怕は懼なり、俗語に用ふ。○怪はおそれあわつる姓怪種種」○怪は慮病なること。後漢書「百漢書「見二小敵一怪」○悟・醒の二字同じ、恐懼・恐怖と川ふ。後漢書「百府中悟眼眼、英気起」○瞑はおそれて、そつとする義、瞑縮也と註す、戰慄と用ふ。詩經「瞑二其穴一、惴惴其瞑」○心悸は心動くなり、むなさぎすする義。後漢書「心中動悸」○慴はおそれて氣を失ふなり。文選「鍔狐失レ木、豺狼逼慴」

【恐怪】コウカイ　かしこみあやぶこと。己がよろこばしきをいふ謙辭。

【恐嚇】キョウカク　おどかしかる。＝恐喝。

【恐喝】キョウカツ　おどかす、威力を以て脅かす。喝一に竭に作る。史、蘇秦傳「日夜游以三秦説韓一」＝一語侯」＝恫嚇。

【恐怯】キョウキョウ　おそれて心がをのく。

【恐懼】クキョウ　おそれる。史、樂書「懼懼一、善守善戒哉」＝怖懼・恐怖。

【恐怪】クキョウ　○おそれる。史、越策秋「諸侯怖懼」＝恐怪。○書箇の結尾に用ひて敬意を表する語「一一謹言」

【恐慌】キョウコウ　しんぱいしてあわてる。商業上の失敗などにいふ語。

【恐脅】キョウキョウ　おどしおびやかす。梁武帝文「更相一一、以求二自防一」＝威脅。

【恢】カイ　灰

○大いなり、忘大いなり、ひろし（宏）○おほいにす。ひろく脅。

【恐察】キョウサツ　他人の事を推量するにふ敬語。

【恐懼】キョウク　おそれつつしむ。晏子「晏子一一、而不レ敢言」

【恐縮】キョウシュク　おそれいる。

【恐蹴】キョウシュク　おそれる。温庭筠「咒詛塹一一、林水矢彈鋒」＝怪懼。

【恐水病】キョウスイビョウ　狂犬に有する一種の病毒、之に嚙まるる者、水を見れば必ず恐るる、故に名づく。

【恐怖】キョウフ　おそれをのく。蘭子夏啓「無レ物安樂、自無一一」＝畏怖。

【恐迫】キョウハク　おどしせまる、おびやかす。＝脅迫。

【恐懼】キョウク　おそれてへつらふ。漢書、鼂錯傳「矜番自貴、豪臣一一」

【恐懼】キョウク　おそれる。張衡詩「一一若レ探レ湯」

【恐慞】キョウク　おそれまどふ。史記「長一一」

【恂】キュン　圖　別に作る恂

おそる（懼）韓愈會合聯句「語夢意猶一」

【恂恂】キュンキュン　おそれさわぐ貌。＝洵洵・恂恂。

【恢】カイ　灰

○大いなり、忘大いなり、ひろし（宏）○おほいにす。ひろく

【恢】カイ　肥えて大いなり。北史、魏宗室傳「樂王鬱度一一」＝豐偉。

【恢邁】カイマイ　ひろくとほし。北史、刁雍傳「才識一一」＝廣遠。

【恢宏】カイコウ　ひろし、ひろめる。謝朓詩「胸中幾雲夢、餘地多一一一」＝恢弘。

【恢弩】カイド　大いにしてあづらし。韓奇龔詩「勢到三秦佛、尤一一」＝恢偉・韓奇龔。

【恢龍】カイリュウ　大いにしてあづらし。史、雎一一語怪自晦者、悉以名宋閒」＝恢諧。

【恢恢】カイカイ　○大いにして餘を容るる貌。老子「天網一一、疎而不レ失」○ゆったりしてゐる貌。莊、養生主「一一乎其於二遊刃一必有二餘地一矣」＝緩緩。

【恢郭】カイカク　ひろく大いなり。又、ひろく大いにする。公羊傳「郭者何一一也」＝恢廓。

【恢廓】カイカク　○ひろく、おほいにする。漢書、五丘壽王傳「陛下一一祖業、功德愈盛」○心がひろく大いなり。史忘、周瑜傳「性度一一」

【恢闊】カイカツ　ひろし、ひろある。＝恢廣。

【恢弘】カイコウ　ひろし、ひろある。書經序「一一五道、示二人主一以軌範」＝恢宏。

【恢諧】カイカイ　心の廣やかなる貌。北周書、李遠傳「幼有二器局一、志度一一」

【恢闡】カイセン　大いにひろめ明かにする。闡は明なり、開なり。史、晏子「夏家」夏家は夏の王室。

【恢大】カイダイ　ひろく、大いなり。唐書、惟良傳「忘爺一一」

【恢拓】カイタク　ひろめひらく。後漢書「一一一業宇」

【恢卓】カイタク　おほいにしてすぐれる。程子「其政一一、可二以爲一卿相」

【恢達】カイタツ　心が大きくひろやか。北史「鑒字仲晉性一一」＝豪達。

【恢麗】カイレイ　おほいにしていつはる、其の言容大にして實なし。王粗之、廢莊論「其言詭譎、其義一一、莊子之利二天下一也少、害二天下一也多」

【恢張】カイチョウ　ひろめて大いにする。諸葛一一めて之を大いにする。宋史「立一一二魏舞道一以益明主、不レ應二以利窶」之色」

【恢復】カイフク　○衰へたる者をもとのとほりにかへす。王褒詩「嚴遵不レ使一一、而一一可二立見一」○失たるものを取りかへす。五代史、南唐世家「而所世家「有不レ能一一一內地」」

【恢文】カイブン　衰へたる文學を盛んにする。宋史、齊家體「嫉、軀、武一一」

【恠】カイ　怪（心部五畫）の俗字。

【恍】ケツ　圖　恍・恍に同じ

㊀㊁ うっとりとする、昏ぼし、定まらず。○微妙にして測り知り難し。㊂たけし（式）

【恍惚】コウコツ　○微妙にしてはかられざる貌。又、うっとりとしたる貌。老子「道之爲物、惟恍惟惚、惚兮恍兮、其中有レ象」○ぼんやりとして自失する貌。＝惚恍。

【恍然】コウゼン　うっとりとしたる貌。史、船錢「發二帝州一、江、親戚故舊來相送者、陸二續於道一、一一如二隔世一焉」＝恍惚。

【恍】コウ　心部十畫に同じ、惚とは別字。

【恆】コウ　㊀㊁　恒　俗恒字は

㊀つね（常）ひさし（久）永久に變らず。論、子路「人而無レ一、不可以作二巫醫一」○つねにする。易、恆卦「不一其德一」○易の卦の名、巽下震上。㊂ゆみはりつき（弦月）詩、小雅「如二月之一一」

同 部首八畫の條を見よ。

【恆言】コウゲン　尋常の言葉。論衡「微病一一若巧、常翻而成乃良」

【恆時】コウジ　時を定めてふるまひ。

【恆格】コウカク　つねのきまり。唐書、高祖紀「詔曰、度官夏禮豈自一一同科、殷卦周文、固無二一一一」

【恆河沙】コウガシャ　圖數の極めて多きに喩ふ。恆河は印度の「ガンジス」河。同頌「陀羅尼經」「恆沙とも」いふ。張陽詩「深心大海水、虞願一一」

【恆儀】コウギ　きだまりたる儀式。＝常儀。

【恆久】コウキュウ　いつもかはらずひさし。易經「天地之道、一一而不レ已也」

【恆言】コウゲン　人のつねに口にすること。孟、離婁「人有二一一一、天下國家」

【恆歆】コウキン　永くかはらぬのり。蘭光殿詩「道家有一一、齋祭崇明祀」

【恆擇】コウタク　つねにかはらぬみさを。漢書、馮參傳「參好二流俠一、終不レ改二其一一」＝心擇。

【恆山】コウザン　五嶽の一、北方即ち山西省大同府の東北に在り。周禮「幷州之鎮曰一一一、白虎通「北方曰一一一、何也、陰終陽始、其道常久、故曰一一一」＝北嶽・常山。

【恆產】コウサン　一定の產業。孟子「無二恆產一者無二恆心一」

【無二恆產一者無二恆心一】コウサンナキモノハコウシンナシ　まれる產なければ定まれる心なし。恆は常、產は生業。孟、梁惠王「無二恆產一而有二恆心一者、惟士爲レ能、若二民則無二恆產一因無二恆心一」

【恆士】コウシ　通常の人。戰國策「甘茂貧一一、非一一一也」＝常人。

【恆時】コウジ　つねのとき。韓愈文「頌色異一一一」＝平生。

【恆式】コウシキ　つねののり（舊唐書）＝定式。

【恆心】コウシン　人のつねにとり守りて變ぜざる善心。孟、梁惠王「無二恆產一者、無一一一」

【恆常】コウジョウ　つねに變らず。柳宗元文「進止威儀、動有一一一」

【恆準】コウジュン　一定してかはらざるきまり。荀史「守容儀、整有一一一」

【恆星】コウセイ　○二十八宿の星の一。○地上より常に一定の位置にありと見ゆる星、太陽も其の一。惑星の對。左傳「一一不レ見、夜明也」

【恆德】コウトク　人の有する一定して永久變ぜざる德。易、恆卦「不レ恆二其德一、或承二之羞一、貞吉」

【恆風】コウフウ　常に一定の方向に吹く風。地球の自轉の爲めに北半球にては東北風、南半球にては東南風の吹く類。＝貿易風。

【恆例】コウレイ　いつもかはらぬしきたり。＝常例・定例。

【恒】コウ　恆（前條）の俗字。

【恨】コン　圖

○うらみ、うらむ、怨よりも意强し「仇一」「遺一」「怨一」「冤一」「怪一」「怪一」「怪

【恣】シ　㊀㊁　支

㊀ほしいまま（縱）わがまま「放一」「專一」「擅一」「驕一」「暴一」ほしいままにす。㊁一睢は自得の貌。又、意をほしいままにして怒り視る貌。

同副類類 恣・縱・横・放・肆・擅の別は縱（糸部十一畫）の條を見よ。

【恣意】ほしいままな。北史「不ノ復顧二家慶一、便二我意一」

【恣行】わがままのおこなひ。

【恣睢】意をほしいままにして怒り視る貌。史、伯嚭傳「暴戾一一」

【恣志】志をほしいままにする。國語「君若一ノ、以用二重耳一、四方諸侯、誰不三稽顙以從二君命一」

【恣肆】○ほしいまま「唐書、張巡傳」＝放肆・放縱。○文の氣勢の盛なるをいふ。

【恣縱】ほしいまま。元稹詩「詠公一一顛狂樂、觸處閑行酔二自由一」＝恣肆。

【恣雎】ほしいまま。華陽國志「大將軍維意二酷之一一」

【恣放】ほしいままなり。高誘、淮「驚「自二王之鎖一」

【恣睡】ほしいままにして怒りる。宋史「皮辛一一不法、夜或禁二民合二膏ノ盜」＝肆恣。

【恣欲】むさぼることを思ふまま

【恃】チジ　㊀

○たのむ「一險」「矜一」たのみ（賴）たよる（依）○はは（母）詩、小雅「無父何怙、無母何一」に本づく。

同副類類 恃・負・怙・賴・憑の別は負（貝部二畫）の條を見よ。

【恃愛】人の我を愛して信用するをたのみとする。漢武帝紀「一ノ如ノ欲ノ進、舍人蘇禾言前」

【恃氣】勇氣をたのむ。莊子「方ノ一一如ノ欲ノ進、舍人蘇禾言前」＝怙氣。

【恃虐】虐恃。

【恃敬】すくひをたのみにする。魏志、注「一ノ不二力戒一」

【恃險】けはしき要害をたのむ。杜甫詩「公孫初ノ一、醜ノ馬の意何長」

【恃恣】たのみよる。王仁裕詩「孫劉亦一一」

【恃賴】たのみよる。後漢書、袁安傳「自二天子一及二大臣皆一一之」＝依賴。

【恁】ニジン　㊀

○おもふ（思念）○かくのごとし。如此の俗語「一地」にする。後漢書、王常傳「負ノ頑恃ノ一一」＝凝然。

【恁爲】ほしいままにたのしむ。易林、解語歌「一一愛ノ蘭」

【恁】ジン　㊀

○頁、閑

【恁兒】次條に同じ。

【恁地】此の如く、このとほり。朱子語錄「所二以弄得一一」

【恁麼】如何に、どうして。

【恁樣人】此の如き人。＝如ノ此人。

【恤】ジュツ　㊀　に一作に卸る

○あはれむ、あはれみ（憐）あぐむ「憂一」「憫一」「憂一」○相愛すること、いつくしむ。周禮、地官「六行、孝友睦婣任一」○うれへ、うれひ（憂）○をさむ（收）○にぎはす（賑）すくふ（救）貧者老人などを救ひ賑はす「救一」「存一」

同副類類 恤・憐・哀・憫・矜の別は憐（心部十二畫）の條を見よ。

【恤匪】まづしきものをあはれむ。國語、修刑不一一一＝恤貧。

【恤救】あはれみすくふ。＝救恤。

【恤孤】みなしごをあはれむ。大學「上一一而民不二偷一」

【恤恤】うれへる貌「左、昭十二」

【恤生】民をあはれむ。＝恤民。

【恤然】おどろきおそれる貌。七發「一一是以歌二笑」

【恤波】やぶれたるをあはれむ。魏志「存ノ亡一一、自ノ古通典」

【恤貧】まづしき者をあはれみあぐむ。周禮、大司徒「四目一一」

【恤兵】戈兵士をいたはりめぐむために金品を贈る。其の事務を取扱ふ所をも一一部といふ。

【恤病】病人をあはれむ。魏志、蔣濟傳「勾踐養二胆以待ノ用、昭王一一以警ノ吳」

【恤民】たみをあはれむ。國語「在ノ位者一一之恣是以國家無二逸一」

【恂】ジュン　㊀㊁　眞　通香

㊀㊁おもねると（信）○たのしむ（樂）○おそる（懼）○一一はおごそかにつつしむ貌（嚴謹）又、うやうやしくおだやか（溫粹）なる貌。論語、鄉黨「孔子於二鄉黨一一如也」又、信實なる貌。後漢書、召馭傳「德行一一召伯奉」柳宗元、捕蛇者說「一一起而視二其吾一」㊁にはかに（遽）○おもたく（醫）

【恂然】にはかに、疾、徐元鬼「一一棄而走」

【恂目】またたく。列子、黃帝「今汝慌然有二一一之志一」＝瞬目。

【恂慄】おそれつつしむ。畏懼する。大戴「聶參傳「今者一一也」

【恕】ジョ　㊀

○おもひやる。又、其の心、己の心を推して物に及ぼす同情「心忠一」「明一」「仁一」論語、里仁「其一乎、己所不欲、勿施二於人一」○あはれむ。又、其の心。○○いつくしむ。又、其の心。○○はかる（忖）○ゆるす「寬一」「容一」「宥一」

【恕宥】過失をゆるす。後漢詩「勃然思二奔裂、羅網難一一」

【恕而行之】心を以て事を行ふ。左、襄十一「一一、德之則也」

【悃】サモイ　㊀

なやむ（惱）

【悃愊】物詩「一一戎蠻下」わづらひなやむ貌。韋應

【息】ソク　㊀

○いき（呼吸）轉じて極めて短き時間に、いふ「瞬一」史、張耳傳「一一間不容一」○いきをする、いきつく。論語、鄉黨「屏氣似不二息者一」○いきながらへる（生存）「生一」○あへぐ（喘）○やすむ（止）○そだつ（生長）孟、告子「其日夜之所一」ふえる、ふやす（繁育）○こどもの「子一」「暖一」○いこふ（憩）やすむ（休）「休一」「安一」「退一」○ねぎらふ（慰勞）○ふさぐ（塞）○やすし（安）○金の利子「利一」○大一はたあいき。又大壁に歎く。

同副類類 息・休・憩の別は休（人部四畫）の條を見よ。

○息・已・輟・止・歇等の別は已（己部）の條を見よ。

【息憂】憂は安、いこひやすんず。西都賦「棄置步輦、惟所一一」

【息偃】やすみふす。詩、小雅「或一一在ノ牀、或不ノ已二于行一」

【息壤】やすらふ貌。嘯、賦「一一游壤」

【息壤】○果にいこふつぼね。詩「一一餘情靜、飛花落院回」○工記、梓人「則王以一一」＝安息。

【受ノ息】利息を受ける。周禮、注「王莽時、民賣以治二產業一者、ノ一一」

【息交】世人と交ることをやめる。陶潛、歸去來辭「歸去來今、請ノ一一以絕ノ遊」

【息耗】○物のふえると、へると。漢書、管仲舒傳「論二貳事之得失一、察二天下之一一」＝消長。○消息の義。おとづれ。唐書、與二韋中一一相慰」轉じて後世は耗の一字にて香信の義とす「音耗」

【息壤】一一一計ノ之」＝息壤。

【息燭】もりそく。蔡襄、「忤二每年一一一計ノ之」＝息壤。

【息燭】わざはひをやむ。漢書、「天下賢聖、其勢固不ノ能ノ息二天下之禍一」＝息災。

【息管】軍のいましめを解く。北史、蠕蠕傳「孝莊詔目、陰山一一、弱水無ノ塵」

【息肩】荷をおろして肩をやすめる。左、襄二「請ノ一一于齊」

【息災】佛の力にて一切のわざはひを止める。轉じて、身に病災なき義。

【息止】やみておこらず。北史、江悅之傳「部中饑饉、奸劫一一、或貸二雍州諸郡之最一」

【息壤】樂の武王が讒言を信ぜざることを甘茂と誓ひし樂の地名、今の湖北江陵縣の南。轉じてかたきちかひの義に用ふ「戰國策、秦」

【息嘯】「一一侍二茂松、清飈拂二零露一」詩

【息餞】もりそくのぜに。史、孟嘗君傳「得一一千萬」＝息壤・子金。

【息男】己の生ある男子。むすこ。曹植、文「封二臣一一爵、貸二商鞅鄭公一」＝子息。

【息女】息は生、己の生める女子、むすめ。史、高祖紀「臣有二一一、願貢二季其奉箕一」李は高祖の字。

【息停】とどまり休む。南史、蕭穎傳「或入二茶今、便得二一一」＝休息。

【息勝】もりを止める。文中子「何以一一」＝止勝。

【息壤】子の、よめ。＝媳婦・子婦。

【息兵】戰をやめる。戰國策「甘茂欲ノ一一」

【息民】たみを安息せしむ。左傳「賈侯說ノ所二以一一」

【息利】利子。唐書「倍二稱一一」＝息壤。

【息曹】やすみとまる。劉向新序「鴻鵠翼二遊乎江湖、一一一乎大沼」

【恠】ヵ　㊀

一條は心失た定まらず。又、志を失ふ貌。

【恥】チ　㊀　俗羞は

○はぢ、はづ（慚）不正の意思行爲に對する良心のとがめ「愧一」「慚一」「深一」孟、盡心「一之於人大矣」○はづかしむ。左、昭五「一匹夫不可以無一」論語

羞・恥・愧・慚・媿・惭・恥・羞・作・恥・慙・慚・媿・愧・恥・羞・恥・恥・羞・恥・恥・羞・恥

は、はづかしめなり、樂の反惡しきをいふ、轉じて貧賤應酬の間外の合の義なり、拜二命之辱一とは、貴人の「孝子不レ登レ危、懼レ辱レ親也」○曲禮「孝子不レ登レ高、臨レ深、履レ薄、履レ冰、恥レ親也」○孟子「生亦我所レ欲也、義亦我所レ欲也、二者不レ可レ兼、捨レ生而取レ義者也」○恥は己の見苦しきを、人に對し、○愧は己の見苦しきを、人に對し、恥は、はづるなり、醜の字の氣味あり、愧は、はづるなり、同じ。韓文「仰不レ愧レ天、俯不レ愧レ人、內不レ愧レ心」○愆は愆と通用す、愧と同じ、はづると訓む、はづとは訓まず。孟子「言語愆二於孟子一」○怍は人にはづして心を動かし、色を變ずるなり。禮記「容毋怍」○怍は人にはづして、まばゆく、顏の合せ方たきなり、婦女子などの、はづかしげにするなどに多く用ふ。○忸・怩・慙の三字、共に羞づる貌。○慙は大辱なり、さらしもの、にしなるなり。○恥話は惡口せられて赤面するなり。言に從ひ、情の省に從ふ。

【恥恢】ティ　はぢてなげく。南史、王籍傳「籍不レ自二量一、從二所一親曾懷一一一」＝慙慨。

【恥骨】ティコツ　骨盤の前下部を構成する一體二骨の一支のほね。

【恥辱】ジョク　はぢ、はづかしめ。論、學而「恭近二于禮一、遠二于恥一也」

【有レ恥且格】ウチシカツカクス　はぢを知りて正しき道に至る、格は正、論、爲政

【惡】ヲ　固

はづる（惡）一然ははづる貌。

【惡業】ゲフ　はづる貌。淺書「昨夜一一」＝慙然。

【惡縮】シュク　はぢてちぢまる。唐書、李石傳「士良等一一不得對」

【恍】チョウ　速　佛迦に作てる翼。

○うつし（倫清）○かるし（輕）

【恬】テン　圓

○しづか（靜）莊、雜性「以一養二志一」○やすし、やすらか（安）「安一」「文一武備」平氣である。

【同部關聯】恬・閑・閑・靜・寂等の別は閑（門部四畫）の條を見よ。

【恬安】アン　しづかにやすし。淺書「心氣既和平、其性一一」＝靜安。

【恬適】テキ　安靜にしてすらかにしてたのしむ、安靜にして逸樂する。國語「今夫天老、而又不二自安一一」

【恬淡】タン　心しづかにしてくだくだしからず。陳書「性一一善談書」

【恬熙】キ　世がやすらか、太平無事の世。王逸詩「一一鵬翼朝」

【恬雅】ガ　しづかにして心むなし。范蠡、琴賦「一一樂、古、奏、爭遊、ノ、身」＝虛恬。

【恬曠】クワウ　しづかにして大いなり。

【惘】ボウ　速　佛迦に作てる翼。

○うつし（倫清）○かるし（輕）

【恍】チョウ　圓

「安一」「文一武備」平氣である。

【同部關聯】恍・朗・閑・靜・寂等の別は朗（門部四畫）の條を見よ。

【恍安】アン　しづかにやすし。淺書「心既和平、其性一一」＝靜安。

【恍逸】イツ　安靜にしてすらかにしてたのしむ、安靜にして逸樂する。國語「今夫天老、而又不二自安一一」

【恍惚】コツ　心しづかにしてくだくだしからず。陳書「性一一善談書」

【恍照】セウ　世がやすらか、太平無事の世。王逸詩「一一鵬翼朝」

【恍惚】コツ　しづかにして心むなし。范蠡、琴賦「一一樂、古、奏、爭遊、ノ、身」＝虛恍。

【恍曠】クワウ　しづかにして大いなり。

【惘】ボウ　速　佛迦に作てる翼。

○うつし（倫清）○かるし（輕）

【惘然】ゼン　はぢてちぢまる。唐書、李石傳「士良等一一不得對」

【惘縮】シュク　はぢてちぢまる。唐書、李石傳「士良等一一不得對」

【悟】ゴ　圓

○さとる（覺）○さとし（明）○さとす（教）○さとり（覺）○さとり（覺）○さとり（覺）

【悟入】ニフ　佛教の語。眼耳鼻舌身意の六根を以て、外の六塵を受入して、心に覺知する。

【悟道】ダウ　佛教の語。眼耳鼻舌身意の六根を以て、外の六塵を受入して、心に覺知する。

【悟性】セイ　佛教の語。眼耳鼻舌身意の六根を以て、外の六塵を受入して、心に覺知する。

【悟解】カイ　佛教の語。眼耳鼻舌身意の六根を以て、外の六塵を受入して、心に覺知する。

詩「夏、宜遷、悍者、六亟成一一」

【悅喜】ヨウキ　よろこぶ。又、よろこび。＝喜悅・悅懌。

【悅欣】キンヨウ　よろこぶ。唐員詩「孝土感序、人有一一」＝欣悅・悅懌。

【悅玩】ガンシュウ　よろこびもてあそぶ。晉書「三都賦成、公卒張載、清南劉逵、咸皆一一、貪之而詣」

【悅色】シキヨウ　顏色をよろこばして氣に入るやうにする。晉書「承顏一一、謂愛日匿」

【悅服】フクヨウ　心からよろこびしたがふ。晉書「武成、商姦一一」

【悅慕】ボヨウ　よろこびしたふ。宋史、三佛齊國傳「一一皇化」＝欣慕・歡慕。

【悅目】モクヨウ　めをよろこばす。韓詩外傳「衣服容貌者、所以一一也」

【悅懌】エキヨウ　よろこびたのしむ。後漢書、何敞傳「恩澤下博、衆庶一一」

【悅樂】ラクヨウ　よろこびたのしむ。諸葛亮文「三軍一一、士卒長懼」＝悅豫。

【悄】ショウ　㊀㊁ケン　豪・篠　俗悄字は

㊀うれ、うれひ（憂）「煩一」○いかる、いかり（怒）怒を含む、「命一」㊁いらだつ（躁念）「輕一」＝躁。

【悄恚】ショウイ　いかる。

【悄憂】ショウユウ　いかりうれる。

【悄邑】ショウユウ　後漢書、邊讓傳「恩窮一一」に倦に作る。

【悅】ヨウ　㊀㊁ケン　豪・篠　俗悄字は

㊀あらし、氣があらあらしたけし（笑）「嬉一」○つよし（强）いさましし（勇）「勇一」「彊一」「强一」すばるるどし（銳）「精一」「傑一」○さばやし、せまし。㊁きびし、氣ばやし（性急）○つよくもとる（强狠）

【悍銳】エイカン　たけくする。唐書、吳少誠傳「甲寒地少、馬、乘、驅以戰、誠、驅騎子弟、元一一」

【悍樓】カンロウ　あらくしてもとる。宋史、曹利用傳「性一一」

【悍驁】カンガク　あらくわるつよし。魏志、烏丸傳、「袁紹、承其亂、放牧、畜少、略老、其性一一」

【悍忌】カンキ　氣づよくして妬む。後漢書「一一不得、當二臣姿」

【悍念】カンネン　心あらく氣せわし、性急なり。

【悍緩】カンカン　あらくしておそい。漢賦文「吁鬼哭世一一」

【悍酷】カンコク　わるつよき酷吏。宋史

【悔】カイ　㊀㊁ケ　灰

㊀くゆ、くやむ、前非を悟りてくやしく思ふ。後一、「追一」○うらむ。㊁くい（咎）しくじり、とがめ（咎）論、爲政、「言寡、尤、行寡、一」○易の外卦。內卦を貞と云ふの對。○國、死を弔ふ。

【悔吝】カイリン　あやまちをくゆ。魏歌文「容二其一一、寡二其環纓」

【悔咎】カイキュウ　○くいうらむ。易繫「一一者憂虞之象也」＝悔慎。○少しのあやまち。注言、修身、一一不至＝小疵。

【悔戾】カイレイ　とがあ。北史、張華華傳「自恥一一、沈湎國政」

又、其の贈物。

【悔尤】カイユウ　くいあやまち。韓愈詩「歲遭二一一」論、貪欲「言寡、尤、行寡、悔」に本づく。

【悔吝】カイリン　くいあやまち。白居易詩「壯歲不二歡樂、長年常二一一」

【悔恨】カイコン　くいうらむ。神仙傳「忽焉不、知二所在、帝甚一一」

【悔心】カイシン　前非をくゆる心。中論「四風、衆惡、悲來、其一一之事乎」

【悔謝】カイシャ　前非をくいてわびる。魏書、魏諷傳及馬氏傳「須其一一乃全」

【悔優】カイユウ　くいあるためる。

【悔恥】カイチ　くいはづ。漢氏家訓「縱然一一」

【悔非】カイヒ　あやまちをくゆ。魏歌文「容二其一一、寡二其環纓」

【悔者】カイシャ　○くいうらむ。易繫「一一者憂虞之象也」＝悔慎。○少しのあやまち。注言、修身、一一不至＝小疵。

【悔戾】カイレイ　とがあ。北史、張華華傳「自恥一一、沈湎國政」

【悇】ケン　㊀㊁ケン　豪・篠

㊀うれ、うれひ（憂）「煩一」○いかる、いかり（怒）怒を含む、「命一」㊁いらだつ（躁念）「輕一」＝躁。

【悇恚】ケンイ　いかる。

【悇憂】ケンユウ　いかりうれる。

【悇邑】ケンユウ　後漢書、邊讓傳「恩窮一一」に倦に作る。

【悔】カイ　㊀㊁ケ　灰

㊀くゆ、くやむ、前非を悟りて「追一」○うらむ。㊁くい（咎）しくじり、とがめ（咎）論、爲政、「言寡、尤、行寡、一」○易の外卦。內卦を貞と云ふの對。○國、死を弔ふ。

【悔吝】カイリン　あやまちをくゆ。韓愈文「容二其一一、寡二其環纓」

【悔者】カイシャ　○くいうらむ。易繫「一一者憂虞之象也」＝悔慎。○少しのあやまち。注言、修身、一一不至＝小疵。

【悔戾】カイレイ　とがあ。北史、張華華傳「自恥一一、沈湎國政」

又、其の贈物。

【悔尤】カイユウ　くいあやまち。韓愈詩「歲遭二一一」論、貪欲「言寡、尤、行寡、悔」に本づく。

【悔天】カイテン　くいあやまる。杜甫詩「一一無二訟」

【悔怨】カイエン　あやまちくいる。唐史、李藩傳「一一無二訟」

【悔悟】カイゴ　くいさとる。白居易詩「壯歲不二歡樂、長年常二一一」

【悔恨】カイコン　くいうらむ。神仙傳「忽焉不、知二所在、帝甚一一」

【悔心】カイシン　前非をくゆる心。中論「四風、衆惡、悲來、其一一之事乎」

【悔謝】カイシャ　前非をくいてわびる。魏書、魏諷傳及馬氏傳「須其一一乃全」

【悔優】カイユウ　くいあるためる。

【悔恥】カイチ　くいはづ。漢氏家訓「縱然一一」

【悔非】カイヒ　あやまちをくゆ。韓愈文「容二其一一、寡二其環纓」

【悔者】カイシャ　○くいうらむ。易繫「一一者憂虞之象也」＝悔慎。○少しのあやまち。注言、修身、一一不至＝小疵。

【悔戾】カイレイ　とがあ。北史、張華華傳「自恥一一、沈湎國政」

【悇】ケン　㊀㊁ケン　豪・篠

㊀うれ、うれひ（憂）「煩一」○いかる、いかり（怒）怒を含む、「命一」㊁いらだつ（躁念）「輕一」＝躁。

【悇恚】ケンイ　いかる。

【悇憂】ケンユウ　いかりうれる。

【悇邑】ケンユウ　後漢書、邊讓傳「恩窮一一」に倦に作る。

【悝】リ　㊀㊁クイ　紙・尾　俗悝字は

㊀うれ、うれひ（憂）「煩一」○いかる、いかり（怒）怒を含む、「命一」㊁いらだつ（躁念）「輕一」＝躁。

【悝恚】リイ　いかる。

【悝憂】リユウ　いかりうれる。

【悝邑】リユウ　後漢書、邊讓傳「恩窮一一」に倦に作る。

【患】カン　㊀㊁ケン　諫・諫

○うれ、うれひ（憂）「憂一」「後一」○やむ、やまひ（疾病）「疾一」○わざはひ（禍）「禍一」「凶一」「水一」○わづらひ。○くるしみ（苦）○あし（害惡）

同訓異語　患・愁・憂・恤・痾等の別は愁（心部九畫）の條を見よ。

【患憂】カンユウ　うれひ「內憂外患」＝憂患。

【患害】カンガイ　わざはひ。阮籍詩「多財爲二一一」

【患眼】カンガン　目を病む。北史、韋孝寬傳「末年一一」

【患忘】カンボウ　うれひいむ。魏志、將士鈔掠、紹一一之」

【患苦】カンク　とがあ。道德指歸論、物類託之、無二有一一」

【患苦】カンク　くるしみ。晉書、涼武昭王傳「寡勿、憂勿、容、親、耳目人間、知二外一一」＝疾苦。

【患難】カンナン　わざはひ。＝難患。

【患害】カンガイ　うれへくゆる易林「日月之塗、所行必到、無二有一一」

【患者】カンシャ　病人。

【患苦】カンク　うれへくいたむ。南史、蕭惠語傳「降由英、不一一之」

【患難】カンナン　うれひ。なやみ。禮、儒行「一一相死也」

【患貧】カンヒン　くるしきにくるしむ。樂論篇「始悟進人志、患名非一一」

【患部】カンブ　身體中の病のある所。

【患累】カンルイ　わざはひ。漢武帝駕「一一已除、薩薩亦淨」

【悟】ゴ　遇　に通じて寤

○すつかりさとる（會得）さとり（覺）惑が解ける。「覺一」「頓一」「解一」○さとす、さとらせる。○さとし、のみこみが早い。「穎一」「英一」

同訓異語　悟・寤・寤・寤・了の別は覺（見部十三畫）の條を見よ。

【悟悅】ゴエツ　心にさとりよろこぶ。柳宗元詩「一一心自足」

【悟覺】ゴカク　さとる。元稹詩「一一瞥不、惑、永抱、浩仙居」＝覺悟。

【悟空】ゴクウ　虛無の理をさとる。沈佺期詩「沈思始一一」

【悟悔】ゴカイ　さとりくやむ。後漢書、崔駰傳「蓋惡之一一、今」

【悟性】ゴセイ　○さとりよきたる。趙飛燕文「能文章一一、前是遺休身」○智

孚にて事物を直觀によりて理解し、又、理解を結び合はする心の作用。

【悟藏】ゴゾウ　「華宥仙郎早一一」

【悟道】ゴドウ　佛道の眞理をさとる。又、其のをしへ。

【悟徹】ゴテツ　すつかりさとる。＝悟了。

【悟得】ゴトク　さとりをひらく。

【悟入】ゴニュウ　さとりをひらく。

【悟了】ゴリョウ　すつかりさとる。

【悞】ゴ　遇

○あざむく（欺）○あやまる（謬）＝誤。○まどふ（惑）○うたがふ（疑）

【悃】コン　阮

まこと（誠）まごころ、一すぢに思ふ誠の心（忠純一）「愚一」「誠一」

【悃愚】コング　王りてまことにしておろか。ばか正直、愚直。

【悃悃】コンコン　ねんごろに誠なる貌。又、忠の純一なる貌。楚辭、卜居「一一款款、朴以忠乎」

【悃懇】コンコン　まことこころありてねんごろ。吳漢詩「一一問二安否」＝誠懇・懇

ろ。款は忠誠、悃悃參看。＝悃愊。

【悃誠】コンセイ　まことこころ。劉向、九歎「思二忠正之一一、今、招貞良與二明智」＝悃愊・懇誠。

【悃望】コンボウ　ひたすらのぞむ。＝願望。

【悃愊】コンヒツ　まことこころ。王誠なり。漢書、劉向傳「竭誠一一、信有二愛國之心」＝悃款・悃誠。

【悉】シツ　質

○ことごとく、みな（皆）のこらず、つぶさに。○つまびらかに、つくす（詳盡）「詳一」○そなへしる（熟知）「審一」

同訓異語　悉・盡・盡・尽・事○悉は遠二に、又、ありたけと譯し、詳記「乃悉貢二其美物」と註す、盡の字より重し。「周禮調」○盡は竭也と註す、のこらずと譯す。「周禮盡盡在」管」の如し。○盡は盡也と註す、盡の字と同じくして俗重し、古文に尽に作る同字なり、之を盡也と註す、そのひとしく至る義。○事は竭也と註す、そのひとしく至る義。「同軌事至」の如し。○悉は盡（皿部九畫）の條を見よ。

【悉皆】シツカイ　すべて、みなのこらず。正法念經「一一百味、與二天同等」

【悉若】シツジャク　ことごとくはかり問ふ。書

一に酷に作る。語幕宛「事無二大小一、悉以咨之」

【悉心】シンコウ　十分に心をつくす。典令子「不二一レ見レ性、不レ進成レ名」

【悉密】シツミツ　みな、のこらず。＝盡悉。

【悉達】シツタツ　釋迦如來の幼名、頌吉と譯す「元章悉達記」＝悉達多。

【悉曇】シツタン　成就の義。梵語の母音。轉じて、梵語、梵語又音韻。唐庶書、天竺國傳「其人皆稟二一一章一」

【悉知】チツチ　ことごとくしる。

【悉力】チンリキ　全力を盡す。漢書、東方朔傳「一レ盡二心、以事二聖帝一」

【悚】ショウ　圏　雙通に作る。

おそる（懼）べきこと。「震一」「懼一」「惶一」おそれあはてる（惶遽）

【悚慄】ショウリツ　おそれてむなしくわなきすること。注書要錄「一一無レ歸」＝慄悚。

【悚懼】ショウク　おそれる。書、大禹謨「一一一、賽注戰栗」

【悚怍】ショウサク　おそれはづる。王褒文「一一之情、夙嘗嘉惠」＝慙怍。

【悚慙】ショウザン　おそれはづる。雅行先生內「悚然不レ知二所レ措」

【悚悚】ショウショウ　おそれる貌。管蠡光賦「魂一一其驚靡」＝悚然。

【悚然】ショウゼン　おそれてぞっとする貌。＝悚悚。

【悚惕】ショウテキ　おそれる。北夢瑣言「誤益一一」＝畏懼。

【悚慄】ショウリツ　おそれふるふる。晉書、王濟傳「況臣脆弱、不二敢一一一」

【悄】セウ　①　セツ　㊁　囑願

①うれふ（憂）②さびしく靜か。白居易、琵琶行「東船西舫一無言」㊁きびし、はげし（急）

同訓異義　悄・悉・憂・悉・恤等の別は悉（心部九畫）の條を見よ。

【悄今】セツキン　憂ふる貌。今は助辭。詩、陳風「勞心一一」

【悄手】セツシュ　はげしくきびしき貌。つんとして親まざる貌。韓愈、與二陳給事書一「一一其言、若不レ樂二其情一」

【悄然】セツゼン　かなしみいたむ。江淹賦「一一虞變、悶然自憐」＝慘悄・悲悄。

【悄悄】セツセツ　○しほしほと憂ふる貌。詩、靜女「彤管有レ煒、說二懌女一美」＝悄然。○靜かなる貌。晉庾詩「蒙蒙悲雨花」

【悄切】セツセツ　うれふる心のしきりなる。嵇康、琴賦「說厥一一、又何磬折」＝悲切。

【悄然】セツゼン　憂ふる貌＝悄悄。

【悛】シュン　圏　兗

○あらためむ。前非を悔い改む。○やめる（止）○つぐ（次）○まこと（信）＝恂（心部六畫）○一一は謹厚の貌。史、李將軍傳「一一如二鄙人一」

同訓異義　悛・改・革・更の別は改（攴部三畫）の條を見よ。

【悛改】シュンカイ　ここころをあらためる。北史、張彝傳「猶無二一一一」＝改悛。

【悛悔】シュンクワイ　悛改に同じ。蘇軾、說讀傳「數年之中、一一非レ一」

【悛心】シュンシン　心を悔い改める。書、泰誓「惟受罔レ有二一一一」

【悛容】シュンヨウ　過を悔いたる意態。韓非子「孫子無レ能、亦無二一一一」

【悠】ユウ　圏　匀別は悉に作る。

はか（遠）いさま、ゆたかなあてる。

【悠選】ユウセン　あわてる。南史、王延期士傳「事實二一一一」＝倉卒。

【悠悠】ユウユウ　○あわてる（急遽）貌。晉書、王彪之傳「無レ故一一、先自猖獗」○あきらか（明）呂覽「一一乎其心之蟲固也」

【悠卒】ユウソツ　いそがしい。歐陽修、文「卽欲一一書以貢、多事一一、未レ能也」

【悖】ハイ　①　テイ　㊁　㊁

①兄弟の仲よし（漢書、兄弟）「友一」「不孝不一」○善く兄長に順ひつつかへる、弟が兄を敬愛する「孝一」㊁和すること。「憶一」

【悖友】ハイユウ　兄弟なか、又は長幼間の情あつくむつまじい。韓愈、元和聖德詩「一一」＝弟友・篤友。

【悖】ボツ　圏

○おそる（怖）○忙に同じ。

【悖然】ボツゼン　おそれる貌。列傳朱「子產一一無二以應」

【悅】ヨウ　①　ボツ　ベン・モン　㊁　㊁

①もとふ（惑）㊁わすれる（慶忘）一說、匹ヨウなき貌。莊、大宗師「一一乎忘其言」

【悖】ハイ　①　ボツ　㊁　㊁　㊁　ハツ　イ　㊁　ハイ

①もとる、うらむ（亂）さかふ（逆）道理に背き逆ふ「狂一」○盛んに興る貌。勃に通ず。㊁もとる「凶一」

同訓異義　悖・戾・拂・狠○悖は道亂也、つよくさからふ義。詩に作る、同じ。○戾は和の反、戾氣は、和氣の反なり、いましめなり。○ソウ惡・詩・安は詩（火部七畫）の條を見よ。

○惡・憎・疾・痢・嫌○惡は好の反、甚しくいやがるなり。大學「如レ惡二惡臭一、如二好好色一」○憎は愛の反、小づらにくきなり。歐陽修に憎者・愛卿あり。○疾は嫉と通ず、ねたむなり。史記「士無二賢不肖一、入朝見レ嫉」○痢・嫌の二字は、嫉と同じ、ねたむと訓む、リんきする「痢卿、夫目レ痢、夫痢レ嫉目レ嫉」と註す「害レ賢目レ嫉、害也目レ痢」と註す。いずれとも、三字互に通用す。

○ソウ惡・醜・醜○惡は美の反、醜なり。史記「滑稽傳」狀貌並惡○醜は下品なる義。莊書「盜跖篇」面心險○醜は貌の惡、形貌醜惡」

【惡醜】アクシュウ　けがれの。禮記「又水受二一一一、故有二汚穢之氣」

【惡意】アクイ　○あしきかんがへ。○あしきき力の具かた「一一に解釋する」

【惡丈惡食】アクジョウアクショク　そまつなるきもの。論、里仁「士志於道、而恥二一一者一、未レ足二與議一也」

【惡業】ゴウ　○あしきまはりあはせ。漢書、昌邑哀王傳「婚二一一一過二亂原一」○圓惡事を爲すに都合よき運命「一一風し」

【惡疫】エキ　あしきはやり病。流行病。

○惡

【惡業】ゴウ　○圖あしき夫婦の緣。又、雙方に不利と知りつゝ思ひ切られぬ緣。○圖惡業を助けて惡果を招かしめるもの。緣は救助する義。

【惡行】ゴウ　惡業をおこなひ。詩、節義、桑中、傳、言言世族在位有二惡一一一。

【惡客】アクカク　酒を飲まざる人、下戶。嘗じて大酒家にもいふ。家語「元相以二不レ飲者一爲二一一、後以二術飲者一爲二一一」

【惡惡】ジュウ　あしきこゝろもち。

【惡業】ジュウ　わるもの、あしきをとこ。遊は男。韓詩錄「今人謂二賤夫一爲二遊子一」＝無賴漢。

【惡鬼】キ　たたりをなす惡しき鬼。史、始皇紀「以群二一一一」＝惡魔。

【惡獸】ケモノ　いたづら、わるふざけ。

【惡金】ジュウ　質のあしき金屬。養語「一一以鑄二銅鉛一爲二石絹一」

【惡想】ソウ　○心あしく道にさかふ。漢書、鄧丹傳「一一暴著」○古の刑の名。八逆の一、君主にあだする罪。○唐刑律十惡罪の一、父母を毆打し又は謀殺せし罪。

【惡貫】ケツ　貫の和惡なる貫。

【惡語】ゴ　しゃべりてかまびすし。王安石詩「吾兒亦一一、製レ力事二業相一」

【惡月】ゲツ　陰曆五月の稱。荊楚歲時記「五月俗稱二一一一一多禁」＝惡月。

【惡業】ゴウ　○あしき わざ、不正なる所業。史、貨殖傳「伸縮一一也」○圖

佛道に背きし過去の惡事。又、其の惡事のむくい。大藏法數「一切衆生過去作一一一」＝惡刼。

【惡言】ゲン　わるくち、罵詈のことば。史、仲尼弟子傳「孔子曰、自二吾得一レ由、一一不レ聞二手耳一」＝惡口。

【惡語】ゴ　わるくち。謠獻詩「門前一一誰傳去、醉後狂歌自不レ知」＝惡言。

【惡口】ゴウ　○わるくち。漢書、王莽傳「一一不信」○圖十惡の一、わる口を言ひて他を惡罵せしむる。

【惡樹】ジュウ　圖わるもの。＝惡漢。

【惡歲】サイ　ききんの年。唐庚詩「現田無二一一一」＝凶年・荒年。

【惡相】ソウ　みにくきにんさう。惡しき人相。

【惡菜】ゲツ　あしきこきもの。西陽雜俎「主浩治一一一」

【惡草】ゲツ　野菜はかり用ひたる粗末なる料理。史、陳丞相世家「以二一一遇二惡使一」

【惡狀】ゲツ　あしきはかりごと。＝惡計。

【惡札】ゲツ　みにくきかきもの、己の手簡を謙して いふ。益公題跋「以上一一、皆子華惡也」

【惡子】シ　惡事をなす少年。漢書、賈誼傳「雜二惡少年一一一」＝惡少年。

【惡詩】シ　南遊・崔叔清詩百篇、遠宗曰「此一一佛道に背きし過去の惡事。又、其の惡事のむくい。大藏法數「一切衆生過去作一一一」＝惡刼。

【惡言】ゲン　わるくち、罵詈のことば。史、仲尼弟子傳「孔子曰、自二吾得一レ由、一一不レ聞二手耳一」＝惡口。

【惡語】ゴ　わるくち。謠獻詩「門前一一誰傳去、醉後狂歌自不レ知」＝惡言。

【惡口】ゴウ　○わるくち。漢書、王莽傳「一一不信」○圖十惡の一、わる口を言ひて他を惡罵せしむる。

【惡樹】ジュウ　圖わるもの。＝惡漢。

【惡歲】サイ　ききんの年。唐庚詩「現田無二一一一」＝凶年・荒年。

【惡相】ソウ　みにくきにんさう。惡しき人相。

【惡菜】ゲツ　あしきこきもの。西陽雜俎「主浩治一一一」

【惡草】ゲツ　野菜はかり用ひたる粗末なる料理。史、陳丞相世家「以二一一遇二惡使一」

【惡狀】ゲツ　あしきはかりごと。＝惡計。

【惡札】ゲツ　みにくきかきもの、己の手簡を謙して いふ。益公題跋「以上一一、皆子華惡也」

【惡子】シ　惡事をなす少年。漢書、賈誼傳「雜二惡少年一一一」＝惡少年。

【惡詩】シ　南遊・崔叔清詩百篇、遠宗曰「此一一

【惡】アク　○心のあしき人、わる者。○頭のみにくき人。五、離婁「雖二惡人一レ齋二上帝一」

【惡念】アク　惡心に同じ。

【惡馬】バク　たちのあしきうま。北史「醫有二一一一」神武不レ加二驊紹一」

【惡樂】バク　心あしきばば。

【惡罵】バク　口あしくのしる。蘇子瞻文「一一無二復苛卑一」

【惡筆】ヒツ　文字がまづし、拙き文字。

【惡病】ビヤウ　たちのあしきやまひ。＝惡疾。

【惡風】フウ　あしきならはし。＝惡習。

【惡癖】ヘキ　あしきくせ。＝惡習。

【惡木】ボク　あしき維木。管子、小匡「夫士國二一一之心一、不レ蔭二一一之枝一」

【惡魔】マ　人にわざはひをなす鬼。法苑珠林「一一波旬將二八十億衆一、欲レ來襲レ佛」

【惡夢】ム　あしきゆめ。吉夢の反對。

【惡報】ホウ　報應。論語「遇二三友一有二一一一」

【惡名】メイ　よからぬうはさ。左、文十八「聖浩二其凶一、謂二其一一一」＝惡聲。

【惡辣】ラツ　わるく手あらし、辣はびりびりと辛き義。

【惡戾】レイ　心あしくして道にそむく。史、齊悼惠王世家「劉鈞一一、虐而冠者也」

【惡寒】カン　病氣の時、ぞくぞくと感ずるさむけ。「惡寒一一」

【惡辱】ジョク　恥を受くるをにくむ。孟子「今一レ一而居二不仁一」

【惡】アク　○心のあしき人、わる者。○頭のみにくき人。五、離婁「雖二惡人一レ齋二上帝一」

【惡念】アク　惡心に同じ。

【惡馬】バク　たちのあしきうま。北史「醫有二一一一」神武不レ加二驊紹一」

【惡樂】バク　心あしきばば。

【惡罵】バク　口あしくのしる。蘇子瞻文「一一無二復苛卑一」

【惡筆】ヒツ　文字がまづし、拙き文字。

【惡病】ビヤウ　たちのあしきやまひ。＝惡疾。

【惡風】フウ　あしきならはし。＝惡習。

【惡癖】ヘキ　あしきくせ。＝惡習。

【惡木】ボク　あしき維木。管子、小匡「夫士國二一一之心一、不レ蔭二一一之枝一」

【惡魔】マ　人にわざはひをなす鬼。法苑珠林「一一波旬將二八十億衆一、欲レ來襲レ佛」

【惡夢】ム　あしきゆめ。吉夢の反對。

【惡報】ホウ　報應。論語「遇二三友一有二一一一」

【惡名】メイ　よからぬうはさ。左、文十八「聖浩二其凶一、謂二其一一一」＝惡聲。

【惡辣】ラツ　わるく手あらし、辣はびりびりと辛き義。

【惡戾】レイ　心あしくして道にそむく。史、齊悼惠王世家「劉鈞一一、虐而冠者也」

【惡寒】カン　病氣の時、ぞくぞくと感ずるさむけ。「惡寒一一」

【惡辱】ジョク　恥を受くるをにくむ。孟子「今一レ一而居二不仁一」

【惡】アク　○圖あしき夫婦の緣。又、雙方に不利と知りつゝ思ひ切られぬ緣。○圖惡業を助けて惡果を招かしめるもの。緣は救助する義。

【惡行】ゴウ　惡業をおこなひ。詩、節義、桑中、傳、言言世族在位有二惡一一一。

【惡客】アクカク　酒を飲まざる人、下戶。嘗じて大酒家にもいふ。家語「元相以二不レ飲者一爲二一一、後以二術飲者一爲二一一」

【惡惡】ジュウ　あしきこゝろもち。

【惡業】ジュウ　わるもの、あしきをとこ。遊は男。韓詩錄「今人謂二賤夫一爲二遊子一」＝無賴漢。

【惡鬼】キ　たたりをなす惡しき鬼。史、始皇紀「以群二一一一」＝惡魔。

【惡獸】ケモノ　いたづら、わるふざけ。

【惡金】ジュウ　質のあしき金屬。養語「一一以鑄二銅鉛一爲二石絹一」

【惡想】ソウ　○心あしく道にさかふ。漢書、鄧丹傳「一一暴著」○古の刑の名。八逆の一、君主にあだする罪。○唐刑律十惡罪の一、父母を毆打し又は謀殺せし罪。

【惡貫】ケツ　貫の和惡なる貫。

【惡語】ゴ　しゃべりてかまびすし。王安石詩「吾兒亦一一、製レ力事二業相一」

【惡月】ゲツ　陰曆五月の稱。荊楚歲時記「五月俗稱二一一一一多禁」＝惡月。

【惡業】ゴウ　○あしき わざ、不正なる所業。史、貨殖傳「伸縮一一也」○圖

【惡】アク　○心のあしき人、わる者。○頭のみにくき人。五、離婁「雖二惡人一レ齋二上帝一」

【惡念】アク　惡心に同じ。

【惡馬】バク　たちのあしきうま。北史「醫有二一一一」神武不レ加二驊紹一」

【惡樂】バク　心あしきばば。

【惡罵】バク　口あしくのしる。蘇子瞻文「一一無二復苛卑一」

【惡筆】ヒツ　文字がまづし、拙き文字。

【惡病】ビヤウ　たちのあしきやまひ。＝惡疾。

【惡風】フウ　あしきならはし。＝惡習。

【惡癖】ヘキ　あしきくせ。＝惡習。

【惡木】ボク　あしき維木。管子、小匡「夫士國二一一之心一、不レ蔭二一一之枝一」

【惡魔】マ　人にわざはひをなす鬼。法苑珠林「一一波旬將二八十億衆一、欲レ來襲レ佛」

【惡夢】ム　あしきゆめ。吉夢の反對。

【惡報】ホウ　報應。論語「遇二三友一有二一一一」

【惡名】メイ　よからぬうはさ。左、文十八「聖浩二其凶一、謂二其一一一」＝惡聲。

【惡辣】ラツ　わるく手あらし、辣はびりびりと辛き義。

【惡戾】レイ　心あしくして道にそむく。史、齊悼惠王世家「劉鈞一一、虐而冠者也」

【惡寒】カン　病氣の時、ぞくぞくと感ずるさむけ。「惡寒一一」

【惡辱】ジョク　恥を受くるをにくむ。孟子「今一レ一而居二不仁一」

【惡】アク　○圖あしき夫婦の緣。又、雙方に不利と知りつゝ思ひ切られぬ緣。○圖惡業を助けて惡果を招かしめるもの。緣は救助する義。

【惡行】ゴウ　惡業をおこなひ。詩、節義、桑中、傳、言言世族在位有二惡一一一。

【惡客】アクカク　酒を飲まざる人、下戶。嘗じて大酒家にもいふ。家語「元相以二不レ飲者一爲二一一、後以二術飲者一爲二一一」

【惡惡】ジュウ　あしきこゝろもち。

【惡業】ジュウ　わるもの、あしきをとこ。遊は男。韓詩錄「今人謂二賤夫一爲二遊子一」＝無賴漢。

【惡鬼】キ　たたりをなす惡しき鬼。史、始皇紀「以群二一一一」＝惡魔。

【惡獸】ケモノ　いたづら、わるふざけ。

【惡金】ジュウ　質のあしき金屬。養語「一一以鑄二銅鉛一爲二石絹一」

【惡想】ソウ　○心あしく道にさかふ。漢書、鄧丹傳「一一暴著」○古の刑の名。八逆の一、君主にあだする罪。○唐刑律十惡罪の一、父母を毆打し又は謀殺せし罪。

【惡貫】ケツ　貫の和惡なる貫。

【惡語】ゴ　しゃべりてかまびすし。王安石詩「吾兒亦一一、製レ力事二業相一」

【惡月】ゲツ　陰曆五月の稱。荊楚歲時記「五月俗稱二一一一一多禁」＝惡月。

【惡業】ゴウ　○あしき わざ、不正なる所業。史、貨殖傳「伸縮一一也」○圖

【惡】アク　○圖あしき夫婦の緣。又、雙方に不利と知りつゝ思ひ切られぬ緣。○圖惡業を助けて惡果を招かしめるもの。緣は救助する義。

【惡行】ゴウ　惡業をおこなひ。詩、節義、桑中、傳、言言世族在位有二惡一一一。

【惡客】アクカク　酒を飲まざる人、下戶。嘗じて大酒家にもいふ。家語「元相以二不レ飲者一爲二一一、後以二術飲者一爲二一一」

【惡惡】ジュウ　あしきこゝろもち。

【惡業】ジュウ　わるもの、あしきをとこ。遊は男。韓詩錄「今人謂二賤夫一爲二遊子一」＝無賴漢。

【惡鬼】キ　たたりをなす惡しき鬼。史、始皇紀「以群二一一一」＝惡魔。

【惡獸】ケモノ　いたづら、わるふざけ。

【惡金】ジュウ　質のあしき金屬。養語「一一以鑄二銅鉛一爲二石絹一」

【惡想】ソウ　○心あしく道にさかふ。漢書、鄧丹傳「一一暴著」○古の刑の名。八逆の一、君主にあだする罪。○唐刑律十惡罪の一、父母を毆打し又は謀殺せし罪。

【惡貫】ケツ　貫の和惡なる貫。

【惡語】ゴ　しゃべりてかまびすし。王安石詩「吾兒亦一一、製レ力事二業相一」

【惡月】ゲツ　陰曆五月の稱。荊楚歲時記「五月俗稱二一一一一多禁」＝惡月。

【惡業】ゴウ　○あしき わざ、不正なる所業。史、貨殖傳「伸縮一一也」○圖

【惡】アク　○圖あしき夫婦の緣。又、雙方に不利と知りつゝ思ひ切られぬ緣。○圖惡業を助けて惡果を招かしめるもの。緣は救助する義。

【惡行】ゴウ　惡業をおこなひ。詩、節義、桑中、傳、言言世族在位有二惡一一一。

【惡客】アクカク　酒を飲まざる人、下戶。嘗じて大酒家にもいふ。家語「元相以二不レ飲者一爲二一一、後以二術飲者一爲二一一」

【惡惡】ジュウ　あしきこゝろもち。

【惡業】ジュウ　わるもの、あしきをとこ。遊は男。韓詩錄「今人謂二賤夫一爲二遊子一」＝無賴漢。

【惡鬼】キ　たたりをなす惡しき鬼。史、始皇紀「以群二一一一」＝惡魔。

【惡獸】ケモノ　いたづら、わるふざけ。

【惡金】ジュウ　質のあしき金屬。養語「一一以鑄二銅鉛一爲二石絹一」

【惡想】ソウ　○心あしく道にさかふ。漢書、鄧丹傳「一一暴著」○古の刑の名。八逆の一、君主にあだする罪。○唐刑律十惡罪の一、父母を毆打し又は謀殺せし罪。

【惡貫】ケツ　貫の和惡なる貫。

【惡語】ゴ　しゃべりてかまびすし。王安石詩「吾兒亦一一、製レ力事二業相一」

【惡月】ゲツ　陰曆五月の稱。荊楚歲時記「五月俗稱二一一一一多禁」＝惡月。

【惡業】ゴウ　○あしき わざ、不正なる所業。史、貨殖傳「伸縮一一也」○圖

【惡】アク　○圖あしき夫婦の緣。又、雙方に不利と知りつゝ思ひ切られぬ緣。○圖惡業を助けて惡果を招かしめるもの。緣は救助する義。

【惡行】ゴウ　惡業をおこなひ。詩、節義、桑中、傳、言言世族在位有二惡一一一。

【惡客】アクカク　酒を飲まざる人、下戶。嘗じて大酒家にもいふ。家語「元相以二不レ飲者一爲二一一、後以二術飲者一爲二一一」

【惡惡】ジュウ　あしきこゝろもち。

【惡業】ジュウ　わるもの、あしきをとこ。遊は男。韓詩錄「今人謂二賤夫一爲二遊子一」＝無賴漢。

【惡鬼】キ　たたりをなす惡しき鬼。史、始皇紀「以群二一一一」＝惡魔。

【惡獸】ケモノ　いたづら、わるふざけ。

【惡金】ジュウ　質のあしき金屬。養語「一一以鑄二銅鉛一爲二石絹一」

【惡想】ソウ　○心あしく道にさかふ。漢書、鄧丹傳「一一暴著」○古の刑の名。八逆の一、君主にあだする罪。○唐刑律十惡罪の一、父母を毆打し又は謀殺せし罪。

【惡貫】ケツ　貫の和惡なる貫。

【惡語】ゴ　しゃべりてかまびすし。王安石詩「吾兒亦一一、製レ力事二業相一」

【惡月】ゲツ　陰曆五月の稱。荊楚歲時記「五月俗稱二一一一一多禁」＝惡月。

【惡業】ゴウ　○あしき わざ、不正なる所業。史、貨殖傳「伸縮一一也」○圖

【惡】アク　○圖あしき夫婦の緣。又、雙方に不利と知りつゝ思ひ切られぬ緣。○圖惡業を助けて惡果を招かしめるもの。緣は救助する義。

【惡行】ゴウ　惡業をおこなひ。詩、節義、桑中、傳、言言世族在位有二惡一一一。

【惡客】アクカク　酒を飲まざる人、下戶。嘗じて大酒家にもいふ。家語「元相以二不レ飲者一爲二一一、後以二術飲者一爲二一一」

【惡惡】ジュウ　あしきこゝろもち。

【惡業】ジュウ　わるもの、あしきをとこ。遊は男。韓詩錄「今人謂二賤夫一爲二遊子一」＝無賴漢。

【惡鬼】キ　たたりをなす惡しき鬼。史、始皇紀「以群二一一一」＝惡魔。

【惡獸】ケモノ　いたづら、わるふざけ。

【惡金】ジュウ　質のあしき金屬。養語「一一以鑄二銅鉛一爲二石絹一」

【惡想】ソウ　○心あしく道にさかふ。漢書、鄧丹傳「一一暴著」○古の刑の名。八逆の一、君主にあだする罪。○唐刑律十惡罪の一、父母を毆打し又は謀殺せし罪。

【惡貫】ケツ　貫の和惡なる貫。

【惡語】ゴ　しゃべりてかまびすし。王安石詩「吾兒亦一一、製レ力事二業相一」

【惡月】ゲツ　陰曆五月の稱。荊楚歲時記「五月俗稱二一一一一多禁」＝惡月。

【惡業】ゴウ　○あしき わざ、不正なる所業。史、貨殖傳「伸縮一一也」○圖

【惟】キ　支

○これ（維）書、再貢「濟河一一兗州」＝伊・是。○ただ、ひとり（唯・獨）それのみ。○おもんみる（思）おもんばかる（謀）

同訓異義　惟・思・慮・懷・意・念・想等の別は思（心部五畫）の條を見よ。

○惟・之・此・是・斯・伊等の別は之（ノ部三畫）の條を見よ。

○惟・唯・只・止・但・徒・弟・啻等の別は唯（口部八畫）の條を見よ。

【惟惟】キキ　諾諾する貌。又、諾すること。「荀、大略「一一而亡者、諫也」」＝唯唯。

【惟一】イツ　ただこれ一つ。書、大禹謨「惟精一一、允執厥中」。李慈銘「遇二一一之感、皆二吹萬之性」」＝專一。

【惟酒可以忘憂】ウレヒヲワスルベシ　ただ酒を飲めば胸中の憂悶を忘るゝことを得る。晉書、顧榮傳「厄縱酒酣暢、謂友人張翰曰、一一、但無レ如二作レ酒耳」

【惟命是聽】ジ　何事もただ仰せのまゝに從はん。左、成二「實賴人致二晉師一曰、若其不幸、敢不二一一一」

【惟利是視】ジ　義理の有無を問はず、只利害如何を是れ視るのみ。左、成十三「桑與レ楚盟曰、余雖貪レ晉出人、余一一」

【悴】カツ　困

○一一はもとより いかる（很怒）。孟、公孫丑「一一然見レ於其面」○通じて 婢（女部八畫）に作る。

【悴直】ツウ　心せまく人にきからひて正直なり。悴一に婢に作る。風俗、離騷「一一以忘身」

【悸】キ　圓

○をのゝく、おどろきおそる（驚懼）「怪」「恐」「驚」「憂」「心」「動」○むなさわぎ、心臓の鼓動る。○貌。詩、衛風「揮二帶一兮」

同訓異義　悸・恐・懼・畏・怖・慄等の別は恐（心部六畫）の條を見よ。

【悸悸】キキ　おそれてむなさわぎする貌。社甫、筑川「外則一一終求レ夏知レ不レ及」

【悸病】ビヤウ　むなさわぎするやまひ。南史、何慶傳「慶不二自安一、遂發二一一一（中略）備加二醫藥一、乃得レ差」

【悸慄】リツ　わななきおそれる。後漢臣詩「王敦可二一一一」＝恐懼。

【悉】キ　圓

○そこなふ（毒害）○いむ（忌）左、哀二七「趙襄子由是一一智伯」○をしふ（教）左、宣十二「楚人一一之脫冠」

【悉四】シ　そこなひくだく。左、定四「寧蘇啓レ商、一一王室」

【悚】ショウ　図　所溫にして作る。

【悚】ショウ　ようこぶ、ようこび（喜）

【惧】ク　懼（心部十八畫）の略字。

【惠】エケイ　圓

○めぐむ、いつくしむ、恩を施す、めぐみ（仁愛）「仁」「慈」「愛」「嘉」○なさけ（恩）「恩」「德」「德」論、里人「小人懷」「惠」○したがふ（順）晉語「一一於父母」○たぶ。又、たもつ（賜）○ざる（飾）○つゝめほこ（三略）＝鑿。○さとし、慧に通ず「智」

【惠愛】アイ　めぐみ。はゆがる。社甫詩「一一南翁愍、餘波及老身」

【惠澤】タク　あつきめぐみ。酒岳賦「承二慶愛之光寵、今、荀君子之一一」

【惠眷】ケン　めぐみをたてる。後漢書、左雄傳「非レ所二以崇德明レ賞」一一

一元也」

【惠雨】ケイ　よきうるほひの雨。又、君のめぐみのあまねきに喩ふ。

【惠音】ケイ　めぐみのおとづれ、他人の手紙を敬ひていふ。臨機詩「惠書」

【惠顧】ケイ　惠然を見よ。人を招請する。

【惠然】ケイ　めぐみてやすんずる。書、文侯之命「來ノ遜能ノ遜、一一小民」

【惠訓】ケイ　めぐみをしへる。又、いつくしみある教。左傳「一一不ノ倦者、規向在焉」＝恩訓。

【惠化】ケイ　めぐみを施して民を教化する。恩惠教化。晉書「修二德政一、布二一一一」＝德化。

【惠和】ケイ　〇したがひやはらぐ。國語「國之弗興、其君寡明哉王、將深一一」〇やはらぎあたたか。范成大詩「春風一一如二主人」

【惠顧】ケイ　めぐみをかけてかへりみる。奕忘「君既一一、何以佐之」＝眷顧。

【惠施】ケイ　〇めぐみにどこす。〇戰國時代の學者の名、莊周と友たり。莊、天下「一一多方、其書五車」

【惠聖】ケイ　めぐみたまふる。陳子昂文「一一二流物、遜二超典章」

【惠慈】ケイ　いつくしみ。又、いつくしむ。國語「敦二友二親一、而一一二二紫」

【惠愷】ケイ　めぐみあはれむ。後漢書、祭祀志「恭二肅神祇一、一一一耆老」

【惠潤】ケイ　なさけにうるほふ。郭璞、蹤「惠音飄潤、光望二一一」

【惠撫】ケイ　めぐみて安撫する。張元晏文「一一一衆品」

【惠政】ケイ　なさけあるまつりごと。北史「士人感二其一一一」＝仁政。

【惠慶】ケイ　めぐみふかきほまれ。秦承慶文「一一遜二手遜近」＝仁慶。

【惠然】ケイ　したがふ貌。詩、邶風「一一肯來」人の好意を以て來訪するを「惠音」又「惠來」といふは此に本づく。

【惠澤】ケイ　めぐみ。汝南先賢傳「應劭、貴戚郭太生、一一一治著」＝恩惠・恩澤。

【惠帝】ケイ　めぐみとぶらふ。又、人よりとぶらはれしを謝する敬語。國語「一一一七臣」

【惠投】ケイ　めぐみ與ふ。又、人よりの贈物を敬ひていふ。＝惠與。

【惠念】ケイ　めぐみのこころ。儲光羲詩「一一及二清淺一」＝惠念。

【惠風】ケイ　〇めぐみのあるはるかぜ。王羲之、蘭亭集序「天朗氣清、一一和暢」〇めぐみのかぜ、君のめぐみに喩ふ。張衡、東京賦「一一光被」

【惠澤】ケイ　めぐみあたふ。＝惠投・惠賜。

【惠來】ケイ　惠然を見よ。

【惠蒙】ケイ　めぐみたまふ。宋書「光被彌二著生一、家月滋一一一」＝惠賜。

【惠然】ケイ　人名。姓は酈、族兄綝・惠の爲に稱賞せらる。故に嘱じて愛・惠の義とす。李白文「緊季後秀、皆惠・一一」

【惠方】ケイ　國曆法にて歲德神の在る方角の稱。此の方角に向ひて事を爲せば吉なりといひ傳ふ。あきのかた。

【惠比須】ケイ　國七福神の一。多く漁家にて祭る福の神。＝蛭子神・衣比須

【惟】ケン　囮

〇つつしむ（謹）〇ねんごろ（懇）しんせつ。〇倦（人部八畫）に通ず。

【惟惟】ケン　つつしみねんごろなる貌。

誓なりの漢書、劉向傳「一一之義也」

【惋】ワン　㊀㊁ コ　ワン　電更

㊀まことと（誠・懇）〇一一はおろか（無知）なる貌。論、秦伯「一一而不信」㊁一惋は志を得ざる貌。

【惋歎】ワン　まことと（誠）任呟文「實有二惋歎一、不ノ任二一一一」

【惑】ワク　圖

〇まどふ（迷）まどひ、まどふ

に通じて或る

「迷一」「昏一」「愛一」「眩一」〇まどはす、まどはす。〇みだる（亂）「狂一」「たがふ（疑）「疑一」論、爲政「四十而不一」（此語に本づきて四十歲を不惑といふ）〇衆一は星の名。

【惑志】ワク　心をまどはせる。又、まどはされし心、まどひ。論、憲問「夫子固有一一一於公伯寮」＝衆心。

【惑術】ワク　人をまどはす わざ。韓非子「恍惚之言、惑淡之惑、天下之一一也」＝妖術。

【惑星】ワク　一定に定住せずして常に位置を變ふる星。恆星の對＝遊星・行星。

【惑溺】ワク　まどひおぼれる。迷ひて惑道に陷る。此處に一一篇あり。

【惑亂】ワク　まどはしみだる。史、始皇紀「今諸生不ノ師ノ今而學ノ古、以非二當世一、一一一亂首一」

【惑惑】ワク　うたがひまどふ貌。漢書、翼奉傳「衆人一一、好惡變意」

【惚】コツ　月

〇思ひこんで心がうつとりする、ぼれる、ぼける「恍一」〇かすか、ぼのか、奥深くして測られず、微妙極致。韓非、忠孝「恍一無法之言也」

【惚惚】コツ　うつとりする貌。法言「神心一一」＝曾恍・恍惚・恍惚。

【惜】セキ　囮

〇心の物に感じて動くはたらき、性は心の本體、情は心の作用「性一」「心一」「高一」禮、禮運「何謂二人一、喜怒哀懼愛惡欲、七者弗學而能」なさけ、心理學にては知・意と立つ「恩一」「多一」「薄一」「無一」「交一」〇人欲、欲望、利欲「私一」〇まことと（實）まごころ「眞一」論、子路「上好信、則民莫敢不用一」〇〇事の實際「一報」〇ことわり（條理）〇〇ありさま（狀態）〇あぢはひ、おもむき（趣味）「風一」「一致」〇俗に男女の愛を いふ「一人」「一書」「春一」「繻一」〇まことに（信・實）多く詩に用ふる助辭。〇春一は衰期を終ろうとして未だ許さざる義。北史、李德林傳「春一一起役」

【惜愛】セキ　なさけをかけていつくしむ。宋書、何尚之傳「與二袁彥伯一、一一逆厚」

【惜費力屈】セキ　惜實あらはれて勢力屈なき、計の施す所なき義。典、淮陰侯傳「願二足下熟一一」

【惜衆】セキ　衆に見に作る。

【惜意】セキ　〇こころ。人情意氣。吳均詩「君之一一與、我雖」〇心理學にて感情と意志との義。

【惜別】セキ　心あつくきかんなり。造唐書「零深別一一、撫劍」

【惜慢】セキ　こころいかる。宋書、蔡廓「或一一而頓怡」

【惜惨】セキ　男女關係のゆかり、男女のちぎり。

【惜歌】セキ　男女の戀愛の情を述べし うた。戀歌・情詩。

【惜笑】セキ　〇親情を以て笑る。笑心 雖傳「一一而淫者與、參」〇色情の上の笑。

【惜別】セキ　よしみ。對志、諸葛亮傳「一一日密」

【惜感】セキ　情が物に感じてうごく。唐書、張公謹傳「一一手內、安有ノ所ノ遺」

【惜認】セキ　よしみ、相互の好意。

【惜惜】セキ　惜と、いつはりとの易識「聖人立ノ教以盡ノ意、設ノ卦以盡二一一」

【惜況】セキ　ありさま。＝狀況。

【惜火】セキ　感情のはげしきを火に喩へていふ。＝情焰。

【惜懷】セキ　こころもち。杜甫詩「老夫一一惡」＝意懷。

【惜惜】セキ　淩曙明、與太子文「功曹在、清廟、與二淵明一一一」

【惜顧】セキ　まごころからのねがひ。顧廷之庭誥「施二其一一、尼二其衣食」

【惜衆】セキ　〇けしき、ありさま。〇感情と實事と。

【惜語】セキ　なさけのこもれることば。游魂臣詩「一一匪不ノ通、豈止勝九廟」

【惜戀】セキ　國心の狂ひ易く定まらざるを戀に譬へていふ「法苑珠林」＝煩惱島・心戀。

【惜別】セキ　交帝詩「妙工屬見ノ匠、無ノ由二一一通」

【惜想】セキ　おもひ。楊嚴詩「一一均等、不ノ飛不ノ墜」

【惜情】セキ　情を以て惜・憐・愛・惜・惜・惜

【情操】ジョウソウ　〇みさを、正しき心がけ。〇心理學にて思考・推理等に伴ひて起る最も複雜なる感情、道德的・知的・美的の三種に分る。

【情史】ジョウシ　人情に關する事を敍したる書物、人情本。

【情死】ジョウシ　圓男女が合意の上相共に自殺すること。しんぢゅう。

【情至】ジョウシ　交情の至り極る義。揚方詩「一一斷二金石一、膠漆未レ爲レ堅」

【情事】ジョウジ　いろごと、男女間の愛情に關する事。

【情思】ジョウシ　〇こころもち、おもひ。〇愛情のおもひ。

【情嗜】ジョウシ　物をほしがるこころ。傾廷之文「感嗜積起、一一不レ衆」

【情實】ジョウジツ　〇ありのままの事實。史記不拿傳「案王下レ吏治、具得二一一一」〇圓人情のかかはり合ひ、親しき間柄の義理。

【情人】ジョウジン　〇ともだち、眞情を以て交はる人。〇互に思ひ合ひし人、こひびと。

【情深】ジョウシン　なさけふかし。詩「旅游知二世淳一、貧別意二一一」

【情狀】ジョウジョウ　〇情は心の內に動く者、狀は其の外に著る者。易經「精氣爲レ物、游魂爲レ變、是故知二鬼神之情狀一」〇あり樣。宋史理宗紀「安南一一亘、涸」〇心理學に「決レ事情の生ぜし起「夫物」一一酌量」＝情實。

【情趣】ジョウシュ　おもむき。續靈臨「綺羅斥

蹟、所レ圖頗有二一一一」＝情致。

【情恕】ジョウジョ　書「人有レ不レ及、可二以一一」

【情緒】ジョウショ　〇心の動くこゝろ、感情の發作。江淹賦「因敍以思、一一留連」〇心理學にてやや複雜なる感情、喜・怒・哀・樂・同情・嫉妬などの類。

【情性】ジョウセイ　こころ。情は心の作用、性は心の本體。漢書禮樂志「立二人倫一、正二一一一」

【情勢】ジョウセイ　ありさま、事の情狀及趨勢。五代史「決レ勝料レ勢、決レ戰料レ情、一一既得、斷在レ不レ疑」＝情況。

【情素】ジョウソ　心の底の誠、まごころ。史、鄭陽傳「投二腹心一、見二一一」＝本心。

【情誠】ジョウセイ　こゝろがおろそか。禮記「一一而强親」

【情態】ジョウタイ　ありさま、こゝろざま。列子「備知二萬物一一」＝情形。

【情知】ジョウチ　明かに知る。方言漢「張旭詩、一一海上三年別、不レ答雲中一雁書」

【情致】ジョウチ　おもむき。致は趣。世說「船上有レ詠レ詩、謝安甚有二一一一」＝情趣。

【情天】ジョウテン　人の情愛の心。李賀詩「天若有レ情天亦老」に本づく。

【情田】ジョウデン　人情をいふ。情慾を生ずるを田地に喩へていふ。禮記「人情

情夫。

【情理】ジョウリ　人情と天理と。唐書「又有レ事率二衆外一、一一動二於內一」

【情況】ジョウキョウ　人情のためにひかされる。情懷を事の曉。陳書、謝貞傳「嘗見年前六歲、名曰二宇依一、一一所レ不レ能レ忘、敢以貧レ記耳」＝情緒。

【情話】ジョウワ　人情のこもれる物語。陶潛、歸去來辭「悅二親戚之一一一」

【悽】セイ　圓

〇いたむ（痛）「慘一」〇かなしむ（悲）「一惋」

同畫異讀　悽・悼・傷・痛・慘等の別は悼（本讀）の條を見よ。

【悽苦】セイク　かなしみいたむ。也記「張騫酒後、拊歌悲一一」

【悽愴】セイソウ　かなしみおそれる。漢武帝賦「顧二霜露一、霜露滋一而一一」

【悽愴】セイソウ　かなしみいたむ。悽は悲、愴は傷。禮、祭義「秋霜露既降、君子履之、必有二一一之心一、非二其寒之謂一也」＝悄惻・悲愴・悲感。

【悽慘】セイサン　かなしみいたむ。武元衡詩「一一別魂銷」＝悵慘・慘悽。

【悽傷】セイショウ　かなしみいたむ。陸機文「感二故文一而一一」

【悽如】セイジョ　いたましき貌。陸機詩「我思雖綿邈、感時悼一一」＝悲然。

【悽悽】セイセイ　〇悲しむ貌。詩經「哀哀一一、懷ノ報ノ德也」〇ら（慢病）貌。後漢書、周黃徐姜申屠傳「悽

【悽處】セイショ　いたみうれふ。淮靈運詩「感物方一一」

【悽然】セイゼン　かなしむ貌。＝悽慘・悽如。

【悽愴】セイソウ　かなしみいたむ。北紀文「永言一一、發憤經營」＝悲悼・哀悼。

【悽斷】セイダン　かなしみて絕えなんとする。嵇子昂詩「送レ君一宵別、一一故鄉情」

【悽惋】セイワン　かなしみなげく。蘇軾詩「四夏送、落日、滿斂今一一」

【悽惘】セイボウ　かなしみてうつとりする。世說「既自一一、歎曰、江山遠邈」

【悽鬱】セイウツ　かなしみいたむ。沈炯文「鬱二仰壓慶、伏增二一一一」＝悲鬱。

【悽愴】セイソウ　かなしみいたむ。唐書、王播詩「同情一一、當世稱レ之」

【惜】シャク　圓

〇をしむ（愛・吝）しゐたれ、をしゐ「愛一」「吝一」〇いたむ（痛）「惋一」「痛一」「悼一」論「子罕篇「子謂二顏淵一、曰、惜乎」〇あはれむ（憐）〇むさぼる（貪）後漢書、光武紀「諸將貪二財貨一」

同畫異讀　惜・吝・慳・愛・嗇の別は吝（口部四畫）の條を見よ。

【惜陰】セキイン　時間ををしむ。晉書、陶侃傳「大禹聖者、乃惜二寸陰一、至二于衆

人一、當惜二分陰一」

【惜花】セキカ　はなのちるをしむ。心靈詩「伴レ月水流愁、一一一風起頃」

【惜別】セキベツ　惜離に同じ。王僧孺祭、西廟文「輕一壁一、既若二遠履一」

【惜歲】セキサイ　年の暮れるをしむ。金唐詩話「一一歲今盡、少年應不レ知」

【惜指失拳】セキシシツケン　小ををしみて大を失ふ。惜（手部六畫）の條參看。

【惜春御史】セキシュンギョシ　唐代の官名、花を保護する事を掌る。王建樂「穩宗宮中花開、以二黃頂幟一、標一一、宮號曰二惜春一、春一に花に作る。

【惜愍】セキビン　をしみかなしむ。＝惜閔。

【惜閔】セキビン　をしみかなしむ。漢書、劉歆傳「此乃有識者之所二一一一、士君子之所二嗟痛一也」

【惜費】セキヒ　費用をしみて過分のことを爲さざる義。宋史「汝生長富貴、當レ念レ一一」

【惜別】セキベツ　わかれをしむ。離別をなごりをしく思ふ。

【惜春】セキシュン　日の暮れゆくをしむ。謝令曦賦「遂レ一一而悲叫、鳥鵑春而不レ鳴」

【惜墨如レ金】セキボクジョキン　輕く筆を下さざる義。古今名畫記「李成作レ畫、一一」

【惜命】セキメイ　いのちをしむ。後漢書「惜二乘輿盡之命一」

【惜別】セキベツ　をしむ。史、趙世家「輕去レ之、非レ無二一一一」＝蹈辱。

【惊】ソウ　圓

〇ものしむ、ものしみ（樂）「歡一」謝朓詩「成咸苦無一」〇おもひ（情緒）「積一」

【惣】ソウ　圓

〇いそがはし（倥偬）〇圓そうじて。すべて總と同じく用ふ。

【悼】タウ　圓

〇いたむ（傷）かなしみて心動く「傷一」「嗟一」「哀一」「痛一」「驚一」「震一」「愍一」は天子のおなげき）詩「邶風「中心是一」〇あはれむ（憐惜）〇おそる（懼）〇幼者の稱。曲禮「七年曰一、雖有罪、不加刑」其の知なきを憐む義。

同畫異讀　悼・傷・痛・慘・悽・愴・悲・惻・性・哀・恤・哭〇悼は哀悼・傷悼・悲悼などと連用す、人の死をかなしむなり、傷の字に、傷愛の意を含ませぬ。〇傷は心をやぶり傷ふ如く、つよく、いたみ哀むなり。司馬遷、報任安書「悲夫、痛二任安書一、悲夫、痛二手傷一、心」〇痛は痛疾の義、身に痛ある如く、哀を感ずることの切なるなり。〇心のそこより

見て居られぬ程に痛むなり。〇悽・愴の二字は共に心に悲しく、感じいたむなり。禮記「君子履之、必有二悽愴之心一」〇慘は哀むと、痛む なり。秦誓「弔吉戰場、文「傷心慘ノ目有ノ如ノ是耶」〇戚は憂れひ、いたむ義、憂戚・哀戚と用ふ。〇惻は懇念に思ひてなげきいたむ、惻隱・惻然・惻恨と用ふ。〇性・恤の二字は、氣の華に思ひていたむ、恤性と連用す、性は驚く意を兼ぬ。〇哭は痛に同じ、いたみの終始やまざる義。

【悼歌】タウカ　〇死亡せし人を惜み悲むうたふ歌。＝挽歌。

【悼懼】タウク　いたみおそる。韓非子「宣問書、發二故而一一者貴民也」

【悼衆】タウシュウ　人の死をいたむ。左傳「小人恥失二其君一、而一一一其親」

【悼心】タウシン　心をいたましめる。左傳「孤與二其二三臣一、一一一失レ國」心の義。

【悼惜】タウセキ　いたみをしむ。人の死をかなしむ。＝悼惜。

【悼慄】タウリツ　いたみおそれる。東方朔、七諫「心一一而驚慮」

【悼痛】タウツウ　かなしみいたむ。漢書、賈誼傳「爲二賈生一、所レ悼痛」

【悼亡】タウボウ　妻の死せしをいたみかなしむ。晉の潘岳、妻死す、一一詩三

首あり、世の傷悼する所と爲る。故に妻を哀ふを一一といふ。

【悼懼】いたみおそれる。漢書、王莽傳「風波一一、常恐ッ于二命聖朝一」

【惔】㊀㊁ エン　圓覃

㊀やく（燒）心に憂ひてやける。㊁如き形容。詩、小雅「憂心如一一」。㊂安し「恬一」

【悃】チョウ　宿

○かなしむ（悲）。うらみかなしむ。○一恨は忘を失ひなげく貌。楚辭、九辯「一恨而自悲」‖悲哀。

【悃惚】かなしみいたむ。方干詩「傳非傷一更一一」

【悃然】うらみなげく貌。荀、禮論「一一不ッ嗛」不嗛は不足。‖憂然。

【悃悵】かなしみうらむ。白居易詩「一一春餘留不得、紫藤花下漸黃昏」

【悵】チョウ　漾

○かなしむ（空室恨）。楚辭、九辯「悃一兮而私自憐」失意にしてなげく。○いたむ（痛）。うれふ。

圓 悃・悼・傷・痛・慼・感等の別は惟（不部）の條を見よ。

【惟】ヨウ　宥

○うれへ（憂）「憂一」○おそる（懼）「恍一」「惑一」○うやまふ、つつしむ（敬）。おそれつつしむ「一一若」

【惕然】おそれて泣きさけぶ。易經「一一夷後、有ッ戒勿ッ恤」

【惟怒】いたみうらむ。史、酷吏世「家「一一久之目、有常貴無二相忘一」

【惟想】なげきおもふ。高適、送侯詩「幾番黃昏夢、一一、幾宵皓月遠」

【惟如】夫條に同じ。參度詩「頻繁結ッ好、心滯一一」

【惟然】なげく貌。李白詩「停ッ棹一一憶二遠人一」

【惟惟】いたむ貌。矢意にしてなげく貌。晉書、荀勗傳「反、爲二尚書令一、黃門侍郎一一」‖惟惟。

【惟罔】ッ なげきのぞむ。離騷、詩「停ッ餘駕乎一一、驟ッ椒丘焉止」

【惟變】いつかなしみいたむ。宋詩「一一不ッ能」不能は不足。‖憂然。

【惟悲】かなしみうらむ。白居易詩「一一春餘留不得、紫藤花下漸黃昏」

【惟如】夫條に同じ。參度詩「

【悲調】ヒチョウ　かなしげなる音曲。謝靈運、山居賦「遠望國之一一、慨二谷會之哀響」‖悲曲・悲響。

【悲田】ヒデン　圖悲は慈悲、貧困者を憐む義、八福田の一。田とは其の救護を收むるを田の收穫あるに比して云ふ。通俗編「釋典以下供二父母一曰二福田一、俗稱二敬田一、施二貧窮一曰二福田一、後世謂二業濟能一、曰二福田一、取二此」

【悲怨】ヒエン　かなしみいかる。陸游詩「赤知此老質未下、高鼓爭辯世一一」‖悲憤。

【悲報】ヒホウ　かなしむべきしらせ。‖凶報。

【悲風】ヒフウ　○ものさびしげに吹くかぜ。李陵、答蘇武書「但聞二一一蕭蕭條之聲一」○秋の風。高適詩「寂寞向二秋草一、一一千里來」

【悲貧】ヒヒン　かなしみいきどほる。後漢書、蔡邕傳「迫懷一一、作二詩二篇」

【悲嘆】ヒタン　かなしみなげく、かなしげなるなきごゑ。李陵、答蘇武書「胡笳五動、牧馬一一」

【悲憐】ヒレン　かなしみもだゆ。唐書、魏徵傳「帝一一、消之流涕」‖悲悼。

【悲樂】ヒラク　かなしみと、たのしみと。淮南子「一一者、樂之邪也」

【悲劇】ヒゲキ　樂器・音樂の名。王芝、笛談曰「一一、幕末、出二於胡中」其聲悲切、人吹以驚、馬、一名笳笳、以下聲遠聞、首、居葉、笳、竹貫、舌、居葉、笳、竹貫、舌、居葉、笳、竹貫、舌

【意向】イコウ　こころざし。心のむかふところ。南史「要是一一加之」＝志向。

【意幹】イカン　心のはたらき。宋書、謝靈運傳「謹賞有二一一」＝意幹。

【意忌】イキ　人をうたがひきらふこと。史、陳季相傳「項王負之、人一一猜之」

【意氣】イキ　こころもち、いきごみ。漢書、後漢書、江表傳「一以二一一書二知己、死亡不二相負一」

【意氣自如】イキジニョ　平氣にして驚かず。自如は自若に同じ。史、李將軍傳「吏士皆無二人色一、而廣一一益治二軍事一」

【意氣揚揚】イキヨウヨウ　大いに得意なる貌。史、張儀傳「擅二天權一、意氣揚揚、甚自得也」

【意義】イギ　わけ。前漢、揚雄傳「嘗レ讀レ之、喟然曰、大哉、聖人之作レ書也、……」＝意味。

【意外】イガイ　おもひのほか。＝意表。

【意見】イケン　○かんがへ。心に思ふこと。晉書、高宗紀「天后上二一一十二條」○圖人を諫める義。「親の一一」

【意想】イソウ　おもひ、かんがへ。＝思想。

【意而】イジ　燕の樂名。「樂記」

【意志】イシ　○おもひ、かんがへ。○心理學にて思慮・憶持・決行などをする心のはたらき。

【意思】イシ　おもひ、かんがへ。近思錄「與二自家一一一一綴」

【意指】イシ　こころ。指旨通ず。史記「乃斷二司馬遷一一一」＝意旨。

【意識】イシキ　心理學にて心の覺醒して知覺ある狀態。即ち知覺・情意等すべての心意作用の總稱。

【意匠】イショウ　○心のたくみ。くふう。杜甫詩「一一慘澹經營中」○工藝・藝術品等の考案。

【意匠登錄】イショウトウロク　圖意匠の案出者、又は其の繼承人の請願により、特許局長が原簿に記入して其の享用權を保護せしむる法。

【意趣】イシュ　○おもはく。こころせ、意思の趨行するところ。南史「其一一不レ希如レ是」○圖うらみ（恨）「一一がくし」

【意緒】イショ　心のいとぐち、思の糸口。蘇軾詩「進人一一多」

【意匠】イショウ　ゼにうち、あないふ、ゼに意を投げて遊ぶ一種の遊技。後漢書、梁冀傳「鬻鞠一一之戲」＝蹴鞠。

【意遲】イチ　こころさま。孔平仲詩「閒レ花又鬧レ子、一一何規矩」＝悠遲。

【意地】イチ　○こころ、地は心の在る場所。佛名會願釋「一一有レ罪有レ愛」○圖我がかんがへを通さんとする心「一一惡し」

【意識】イシキ　心のそこ、心のうち。＝意中。

【意中人】イチウジン　○わが心におもふ人。離騷詩「令二我一一一」○ことひびと。＝情人。

【意適】イテキ　こころにかなふ。適正香は蘇軾詩「一一忽忘返、路窮乃餘休」

【意中人】イチウジン　人の心にかなふ。漢書、江充傳「所レ言一一」

【不レ介レ意】フカイイ　心にかけず、介はさむ。＝不レ爲レ意。

【掛レ意】カイイ　心にかけて忘れず、氣にとめる。唐書、同昌公主傳「今主薨、上日夕傷レ心一一」

【先レ意】センイ　人の心をあらかじめ迎へ知る。禮記、學記「善一一者反レ之」

【適レ意】テキイ　氣に入るやうにする。心にかなふ。晉書、張翰傳「張翰曰、人生貴得レ意」

【不レ如レ意】フジョイ　わが思ふやうにならず。ままならぬ。晉書、善詔傳「天下——者恆十居二七八」

【意望】イボウ　れがひのぞみ。後漢書、王允傳「自詣代、匿失二一一」

【意馬心猿】イバシンエン　心情の制しがたきに喩ふ。宏樂集、諸凡夫心知品「馬識相、猿猴、鈍六塵、何會停心」

【意必固我】イヒコガ　意は私意、必は己の意見を必ず通さんとすること、固は既往のことにつきて執念ぶかきこと、我は我意のつよきこと。宇解參看。

【意表】イヒョウ　思の外、豫想外。宋史、英宗紀「每レ有二議決一、皆出二聖臣一一一」＝意外。

【意味】イミ　ことばのわけ。「一一深長」杜牧詩「始覺至門一一長」＝意義。

【意味深長】イミシンチョウ　詩文などの意味の極めて深き義。論語、序說「意二一一」

【意譯】イヤク　外國文を其の大體の意味をとりて飜譯する義。直譯の對。

【意樂】イラク　得んとおもふ心。

【意樂】イラク　おもひはかる。＝期度。

【不レ意】フイ　思ひがけずして、將らざりき。辛延年詩「一一金吾子、總爲過二我廬一」

【愔】

㊀ ㊁ アイン・オン　原医

㊀ ㊁ アン・オン

㊀ ㊁ ―は聲の安らかにやはらぐ貌。左、昭十二「祈招之一一、式昭二德音一」祈招は音曲の名。又、深くしづかなる貌。晉、康、琴賦「一一琴德」㊁たまる（默）唐書、杜護能傳「朕不能一一度二日」

【慍】

㊀ ㊁ ウン・ヲン　圖

㊀ ㊁ ウン・ヲン　圖　本慍字は（恚）心の中にむ、とする、怒氣を含むこと。「僖」論、學而「人不レ知而不レ一、不亦君子乎」○うらむ（怨恨）㊁むすぼる（鬱積）

【愠】

㊀ ㊁ ウン・ヲン　圖

㊀ ㊁ ウン・ヲン　圖　本慍字は（心部六畫）の條を見よ。

【愠怒】ウンド　怒を含むこと。「一一」

【愠色】ウンシキ　怒を含む顏色。論語、公冶長「三已レ之、無二一一」

【愠惱】ウンノウ　いきどほる。後漢書、馮魴傳「三年不二一一而無二怨色一」

【愠憤】ウンフン　いきどほる。柳宗元、弔屈原文「獨一一而增レ傷」

【愠容】ウンヨウ　いかれるやうす。列子、黃帝「丘聞命無二一一」

【愼】

ウン　圖

○あつし（重厚）○はかる（謀）○人名。愼一は漢人。

【愼潛子】ウンセンシ　晉の武進の人、名は統、字を以て行はる、自ら宋國章安生と號し、又白雲外史と號す。唐の南田老人と稱す。古文詞に工にして畫は元の趙孟頫、初め山水を畫き、後て畫は元の趙孟頫、初め山水を畫き、後て花卉を畫き、沒骨花の一派を創む、自ら題識を爲りて之を寶ず、世に南田三絕と稱す。

【愼南田】ウンナンデン　前條を見よ。

【惲】

カク　圖

○かざる（飾）○つつしむ（謹）かふ（變更）

【惲變】カクヘン　變革。「其有レ衆生墮二一一一者、必敗二正道一」

【惲革】カクカク　革新すること。「以革新進取爲主義。利己主義の對。＝利他主義。

【愛著】アイチャク　圖物をいつくしむ心の執著して離れざる義。淨住子「種種一一、隨二逐於我一」＝愛執。

【愛重】アイジュウ　かはゆがる。漢書、杜欽傳「好倍之心一生、則一一篤二于一人一」＝愛幸。

【愛敬】アイケイ　好みてよむ「一一書」＝愛誦。

【愛念】アイネン　いつくしみの心。＝愛心。

【愛惜】アイセキ　梅の花を愛する。王冕詩「平生一一一顧成癖、踏雪行尋一一雙屐」

【愛憐】アイレン　いつくしみあはれむ。＝愛憐。

【愛憎】アイゾウ　かはゆがる心が厭くゆきわかたる。韓愈、與二陳給事一書「一一而情不レ喜」

【愛撫】アイブ　いつくしみなでる。宋史、范仲淹傳「嚴令明白、一一士卒二」

【愛別離苦】アイベツリク　圖人苦の一、親しき者と別るるかなしみ。佛支記「常所二親愛一之人、非遇離散、不レ得二共處一、怨憎一一」

【愛著】アイチャク　いつくしみしたふ。後漢書、章茂傳「故吾輩二行能與茂不レ同、而相一一欣欣焉」＝愛慕。

【愛網】アイモウ　愛情の貪あまに衆縛せらるる義。出曜經「其有レ衆生墮二一一一者、必敗二正道一」

【愛羨】アイセン　ほめてやしなふ。老子「一一高物、而不レ爲レ主」＝愛育。

【愛欲】アイヨク　愛情と慾心と。又、戀愛を逆げんとする欲。瑞應經「感養世間淡、泉一一之海」

【愛惜】アイセキ　をしむ。梁昭明太子文「徒深二一一情」＝愛著。

【愛樂】アイラク　いつくしみかはゆがる。史、趙世家「太后日、丈夫亦一一少子乎」＝憐愛。

【愛戀】アイレン　こひしたふ。又、こひ。植、學鶴賦「沈吟有二一一」＝戀愛。

【愛蓮說】アイレンセツ　宋の周惇頤の作りし文。蓮を以て君子に比す。明一統志「南康府治後、宋守周敦頤築レ池種二蓮其中一」

【意】

㊀ ㊁ イ　圖

①こころ、こころばせ（心之發動也）「心一」「一志」「意一」「眞一」大學、欲正其心先誠其一」○おもふ（思念）はかる（度）おもはく、かんがへ。○おもふに、度るに、己の考へるには。柳宗元、桐葉封弟辨「吾一不然」者とも連用す。○そもそも。古、狩に通用す。○わたくしの、こころ、私情・私慾。論、子罕「子絕四、毋一、毋レ必、毋レ固、毋我」○うたがふ（疑）○のぞみ、かんがへ。○おもむき、いきほひ「筆一」○一大利は歐南部の王國、即ち古の大秦。＝州。伊太利。㊁ああ、感歎の辭。＝噫。

同部異讀　意・思・憶・懷・念・想・惟・慮の別は思（心部五畫）の條を見よ。

【意到筆隨】イトウヒツズイ　詩文などが我が思のままにすらすらと出來る。晉書、淸紀「問「東坡曰、吾生平作文、意之所到、則筆力曲折隨レ之」

【候レ意】コウイ　人の心をうかがひ迎へる。＝迎レ意・承レ意。

【承レ意】ショウイ　人の心を察して氣に入るやうにする、迎合する。＝迎レ意。

【寓レ意】グイ　心を寄せる、他の物ごとにかこつけて思ひをほのめかす。

【屬レ意】ゾクイ　心を寄せる、のぞみを屬する。史、夏紀「天下一レ一焉」

【留レ意】リュウイ　氣をつける、注意する。史、樂毅傳「敢獻書以聞、惟君王一一焉」

【執レ意】シツイ　己の意見を堅く執りて屈せず。魏書、崔浩傳「一レ一抗レ言」

【防レ意如レ城】ボウイジョジョウ　私欲をふせぐことの堅きに喩ふ。奏年雜記「富鄭公有二守レ口如レ瓶、一一之語一」

【守レ意】シイ　志を堅くまもる。晉書「雖レ受二法放、一レ一不レ移」

【意】

㊀ ㊁ イ　圖

①こころ、こころばせ（心之發動也）「心一」「一志」「意一」「眞一」大學、欲正其心先誠其一」○おもふ（思念）はかる（度）おもはく、かんがへ。○おもふに、度るに、己の考へるには。柳宗元、桐葉封弟辨「吾一不然」者とも連用す。○そもそも。古、狩に通用す。○わたくしの、こころ、私情・私慾。論、子罕「子絕四、毋一、毋レ必、毋レ固、毋我」

【意義】イギ　めでやしなふ。老子「一一高物、而不レ爲レ主」＝愛育。

【愛欲】アイヨク　愛情と慾心と。又、戀愛を逆げんとする欲。瑞應經「感養世間淡、泉一一之海」

【愛惜】アイセキ　をしむ。梁昭明太子文「徒深二一一情」＝愛著。

【愛樂】アイラク　いつくしみかはゆがる。史、趙世家「太后日、丈夫亦一一少子乎」＝憐愛。

【愛戀】アイレン　こひしたふ。又、こひ。植、學鶴賦「沈吟有二一一」＝戀愛。

【愛蓮說】アイレンセツ　宋の周惇頤の作りし文。蓮を以て君子に比す。明一統志「南康府治後、宋守周敦頤築レ池種二蓮其中一」

【悸慮】キク　感動して客色を變へる。
宋、禮論「一一唱嘆」

【悸】ゴガタ　速案

○あわてる（遽）○あわておどろく（慌遽）「錯一」「驚一」

【悸戚】ガク　驚きて相視る。李華「一一沈沈」

【悸然】シカン　おどろく貌。史、留侯世家「蹕子下車、履、良一一然、愛人之」

【悸怕】ヤク　おどろき視る貌。班固「答賓戲」「雖三輔迅風、而猋然、猶一一而不能、陷文選には悸を跨に作る。

【感】①カン ②カンソン　動國

①うごく、うごかす（動・搖）心が動く「一動」「百一」「孝一」○いたら（格）書、大禹謨「至誠一則神」○ふる（觸）文選、七發「夏、雷雷震霹靂之所一也」○ことばくひびく。○になふ、思に感ずる「一恩」②うらむ（恨）憾と通ず。

【感慟】ドウ　心に感じてむせびなきす。任昉、王僧孺序「因便一一、若不三自勝」

【感悅】ケツ　心に感じてよろこぶ。儀禮、聘矢「得一其和、則懷然一一」

【感慨】ガイ　○物にふれて心にひびきこたへる。後漢書、班彪傳「奏談自消、和氣一一」○有心の誠が他人に通ずる、感通する。○感體が磁石・發電體等に接近して電氣又は磁氣を感じ起す。

【感荷】カン　めぐみをありがたくかんずる。後漢、馮緄傳「惟言、千一一、萬一一」

【感荷】カン　めぐみにかんじてありがたく思ふ、感激する。韓愈詩「一一一君子德」

【感慨】ガイ　心にかんじなげく。史、季布傳「敵家婦人、一一而自殺」李白詩「知音不易得、撫劍空一一」＝感慎

【感慨悲歌之士】ヒカシ　國を憂ひ世を思ふのあまり、悲しき歌を詠じて轟轟接せる變をもらす士。韓愈、送三高閑師序「蘇超古稀、多一一」

【感激】ゲキ　感情に觸れ、一時に感氣に感じて節能を立つる義。＝感奮

【感佩】カイ　感銘してかなしみむせぶ。高青丘、梁谿紀「令、玆在玆、與言一一」

【感愛】カイ　心にうごきておどろく。人物志「徴見二手外、一一以明」

【感覺】カク　外界の刺戟を心に感受する。

【感覺中樞】チウスウ　感覺を主とする神經の本幹、大腦・延髓・脊髓の總稱。

【感怪】カイ　他の感に感じて己の及ばざるを怪とする。晉書、郭璞傳「一一」

【感觸】カン　○物にふれて心にひびきこたへる。後漢書、張綱傳「奏談自消、和氣一一」○有心の誠が他人に通ずる、感通する。○感體が磁石・發電體等に接近して電氣又は磁氣を感じ起す。

【感荷】カン　めぐみをありがたくかんずる。後漢、馮緄傳「惟言、千一一、萬一一」

【感荷】カン　めぐみにかんじてありがたく思ふ、感激する。韓愈詩「一一一君子德」

【感慨】ガイ　心にかんじなげく。史、季布傳「敵家婦人、一一而自殺」李白詩「知音不易得、撫劍空一一」＝感慎

【感慨悲歌之士】ヒカシ　國を憂ひ世を思ふのあまり、悲しき歌を詠じて轟轟接せる變をもらす士。韓愈、送三高閑師序「蘇超古稀、多一一」

【感戴】カン　感恩に觀ず、一時に感氣に感じて節能を立つる義。＝感奮

【感泣】カン　感動してかなしみむせぶ。高青丘、梁谿紀「令、玆在玆、與言一一」

【感愛】カイ　心にうごきておどろく。人物志「徴見二手外、一一以明」

【感覺】カク　外界の刺戟を心に感受する。

【感覺中樞】チウスウ　感覺を主とする神經の本幹、大腦・延髓・脊髓の總稱。

【感怪】カイ　他の感に感じて己の及ばざるを怪とする。晉書、郭璞傳「一一」

【感荷】カン　めぐみをありがたくかんずる。後漢、馮緄傳「惟言、千一一、萬一一」

【感荷】カン　めぐみにかんじてありがたく思ふ、感激する。韓愈詩「一一一君子德」

【感慨】ガイ　心にかんじなげく。史、季布傳「敵家婦人、一一而自殺」李白詩「知音不易得、撫劍空一一」＝感慎

【感慨悲歌之士】ヒカシ　國を憂ひ世を思ふのあまり、悲しき歌を詠じて轟轟接せる變をもらす士。韓愈、送三高閑師序「蘇超古稀、多一一」

【感戴】カン　感恩に觀ず、一時に感氣に感じて節能を立つる義。＝感奮

【感泣】カン　深く心にかんじしんしてなく。宋史、謝絳傳「宜仁后與二幸宗一、赤泣、左右皆一一」

【感吟】カン　國感歎してよむに足る傑作の詩歌、佳詩など。

【感興】カン　おもしろみ、興味。劉孟詩「一一詩成動自論、忘、憂花好酒、誰問」

【感化】カク　○感じて善に從る。荀庾序「美二其一一、則功・華滋二爲、貴」○俗には惑しき方に化するにもいふ。

【感化事業】ジギヤウ　不良少年などを感化して善人たらしめるしごと、それ等の人を收容する所を感化院といふ。

【感慨】カイ　心に感じてくやむ。唐書、陳子昂傳「他日入二鄉校一、一、卽痛修節」

【感激】カイ　心にかんじおもふかんずるおもひ。杜牧詩「聊書二一一韻」

【感官】カン　外界の刺戟を受けて腦に傳ふる機關、耳・目・舌・鼻・皮膚の類。＝感覺器官。

【感激】カキ　深く心にかんじて氣が奮ふ。諸葛亮、出師表「由、是一一、遂許二先帝以驅馳」

【感銘】カク　心に感じてきざる。史記

「夫子既以一一而釐、我」

【感悔】コカン　心をうごかしらむ。漢書「內無二一一之願、外無二從傅之憂」

【感想】カン　心にかんじおもふ。晉書、賈充傳「大一一發、手筆無」

【感奮】ヒン　「王」若自不暇食、遂一一」

【感心】カン　心にしみこみて深く感ずる。＝感服。

【感謝】シカン　ありがたくかんじてれいをいふ。韓愈詩「一一情至、爭」

【感狀】カン　國戰功を賞して主將より與ふる書附。＝勳狀。

【感性】カン　○かんじて心をうごかす。劉伶文「不、意二美・惡之切、肌、利、狀之一一」○心理學にて苦・樂・美・醜等を感ずる心のはたらき。

【感傷】カン　心をうごかしいためる。感傷して心を傷める。阮籍詩「悅懌未二爰接二、時賞用一一」

【感賞】カン　○感心してほめる。○善行をほめて賜はる褒賞。

【感受】カン　心理學にて外界の刺戟を感覺神經によりて知得する心のはたらき。

【感觸】カン　外物に觸れて心にかんずる。宋史、醫氣之所二一一」

【感染】セン　他の物の性が深くしみてうつる。感習又傳染がうつる。

【感戴】カン　ありがたくおしいただく。白居易文「孫思邈特樂、非衣醫選、一一驚怪、眼感無、地」＝欽感。

【感恩】ヒン　おもひ出して心にかんずる。後漢書「弟人懷一一之哀」＝念謝。

【感泣】キフ　深く心にかんしんしてなく。宋史、謝絳傳「宜仁后與二幸宗一、赤泣、左右皆一一」

【感吟】キン　國感歎してよむに足る傑作の詩歌、佳詩など。

【感興】キン　おもしろみ、興味。劉孟詩「一一詩成動自論、忘、憂花好酒、誰問」

【感化】クワ　○感じて善に從る。荀庾序「美二其一一、則功・華滋二爲、貴」○俗には惑しき方に化するにもいふ。

【感化事業】ジギヤウ　不良少年などを感化して善人たらしめるしごと、それ等の人を收容する所を感化院といふ。

【感慨】カイ　心に感じてくやむ。唐書、陳子昂傳「他日入二鄉校一、一、卽痛修節」

【感激】カイ　心にかんじおもふかんずるおもひ。杜牧詩「聊書二一一韻」

【感官】カン　外界の刺戟を受けて腦に傳ふる機關、耳・目・舌・鼻・皮膚の類。＝感覺器官。

【感激】カキ　深く心にかんじて氣が奮ふ。諸葛亮、出師表「由、是一一、遂許二先帝以驅馳」

【感情】カン　心に感じてきざる。史記

「夫子既以一一而釐、我」

【感悔】コカン　心をうごかしらむ。漢書「內無二一一之願、外無二從傅之憂」

【感想】カン　心にかんじおもふ。晉書、賈充傳「大一一發、手筆無」

【感奮】ヒン　「王」若自不暇食、遂一一」

【感心】カン　心にしみこみて深く感ずる。＝感服。

【感謝】シカン　ありがたくかんじてれいをいふ。韓愈詩「一一情至、爭」

【感狀】カン　國戰功を賞して主將より與ふる書附。＝勳狀。

【感性】カン　○かんじて心をうごかす。劉伶文「不、意二美・惡之切、肌、利、狀之一一」○心理學にて苦・樂・美・醜等を感ずる心のはたらき。

【感傷】カン　心をうごかしいためる。感傷して心を傷める。阮籍詩「悅懌未二爰接二、時賞用一一」

【感賞】カン　○感心してほめる。○善行をほめて賜はる褒賞。

【感受】カン　心理學にて外界の刺戟を感覺神經によりて知得する心のはたらき。

【感觸】カン　外物に觸れて心にかんずる。宋史、醫氣之所二一一」

【感染】セン　他の物の性が深くしみてうつる。感習又傳染がうつる。

【感戴】カン　ありがたくおしいただく。白居易文「孫思邈特樂、非衣醫選、一一驚怪、眼感無、地」＝欽感。

【感恩】ヒン　おもひ出して心にかんずる。後漢書「弟人懷一一之哀」＝念謝。

【感泣】キフ　深く心にかんしんしてなく。宋史、謝絳傳「宜仁后與二幸宗一、赤泣、左右皆一一」

【感吟】キン　國感歎してよむに足る傑作の詩歌、佳詩など。

【感興】キン　おもしろみ、興味。劉孟詩「一一詩成動自論、忘、憂花好酒、誰問」

【感化】クワ　○感じて善に從る。荀庾序「美二其一一、則功・華滋二爲、貴」○俗には惑しき方に化するにもいふ。

【感化事業】ジギヤウ　不良少年などを感化して善人たらしめるしごと、それ等の人を收容する所を感化院といふ。

【感慨】カイ　心に感じてくやむ。唐書、陳子昂傳「他日入二鄉校一、一、卽痛修節」

【感激】カイ　心にかんじおもふかんずるおもひ。杜牧詩「聊書二一一韻」

【感官】カン　外界の刺戟を受けて腦に傳ふる機關、耳・目・舌・鼻・皮膚の類。＝感覺器官。

【感激】カキ　深く心にかんじて氣が奮ふ。諸葛亮、出師表「由、是一一、遂許二先帝以驅馳」

【感情】カン　心に感じてきざる。史記

【感愛】カン　深く心にかんじてたのしきをつく。張九齡詩「同悲多一一、清泉晉空隱」

【感歎詞】タンシ　文法にて喜怒哀樂等の感情をあらはす語「嗚呼」「吁」などの類。＝感動詞・感嘆詞。

【感通】カン　心にかんじて知る。韓愈詩「豈非二正直能一一」＝感應・感觸。

【感動】カン　心に感動してなんの。范曄書、李慶傳「宮闈咸觀、并舞一一」

【感銘】メイ　まことの心が他人に感じ通ずる。後漢書、諸葛傳「敢、服黃、已、爲、兵所、誅、精誠感到、未、有三一一」＝感通。

【感銘】メイ　心に銘じて忘れず、筆文にて刻する義。＝感銘・銘感。

【感動】カン　ふかく心にしみて感ずる。後漢書、江革傳「辭氣感淡、有、足三一一人者」

【感動】カン　深くかんじなげく。漢書「眼卿卿嚶、險、每冒輒一一」＝哀歎。

【感得】カン　神佛にまことの通じてさとり得るおつげをうける。

【感佩】カイ　深く心にかんじて忘れず、佩は身に帶びる。＝感銘・感服。

【感冒】カン　寒氣に觸れてかぜをひく。水滸傳「小人於、道一一風寒、未曾經、症可」＝風邪。

【感附】カン　めぐみに感動して感ひつく。庾亭、故炎夏一一」

【感服】カン　深くかんしんしてしたがふ。漢觀文「王者所、以一一天下」

【感愛】カン　深く心にかんじてたのしきをつく。張九齡詩「同悲多一一、清泉晉空隱」

【感歎詞】タンシ　文法にて喜怒哀樂等の感情をあらはす語「嗚呼」「吁」などの類。＝感動詞・感嘆詞。

【感通】カン　心にかんじて知る。韓愈詩「豈非二正直能一一」＝感應・感觸。

【感動】カン　心に感動してなんの。范曄書、李慶傳「宮闈咸觀、并舞一一」

【感銘】メイ　まことの心が他人に感じ通ずる。後漢書、諸葛傳「敢、服黃、已、爲、兵所、誅、精誠感到、未、有三一一」＝感通。

【感案】カン　心に銘じて忘れず、筆文にて刻する義。＝感銘・銘感。

【感動】カン　ふかく心にしみて感ずる。後漢書、江革傳「辭氣感淡、有、足三一一人者」

【感動】カン　深くかんじなげく。漢書「眼卿卿嚶、險、每冒輒一一」＝哀歎。

【感得】カン　神佛にまことの通じてさとり得るおつげをうける。

【感佩】カイ　深く心にかんじて忘れず、佩は身に帶びる。＝感銘・感服。

【感冒】カン　寒氣に觸れてかぜをひく。水滸傳「小人於、道一一風寒、未曾經、症可」＝風邪。

【感附】カン　めぐみに感動して感ひつく。庾亭、故炎夏一一」

【感服】カン　深くかんしんしてしたがふ。漢觀文「王者所、以一一天下」

【感愛】カン　深く心にかんじてたのしきをつく。張九齡詩「同悲多一一、清泉晉空隱」

【感歎詞】タンシ　文法にて喜怒哀樂等の感情をあらはす語「嗚呼」「吁」などの類。＝感動詞・感嘆詞。

【感通】カン　心にかんじて知る。韓愈詩「豈非二正直能一一」＝感應・感觸。

【感動】カン　心に感動してなんの。范曄書、李慶傳「宮闈咸觀、并舞一一」

【感銘】メイ　まことの心が他人に感じ通ずる。後漢書、諸葛傳「敢、服黃、已、爲、兵所、誅、精誠感到、未、有三一一」＝感通。

【感案】カン　心に銘じて忘れず、筆文にて刻する義。＝感銘・銘感。

【感動】カン　ふかく心にしみて感ずる。後漢書、江革傳「辭氣感淡、有、足三一一人者」

【感動】カン　深くかんじなげく。漢書「眼卿卿嚶、險、每冒輒一一」＝哀歎。

【感得】カン　神佛にまことの通じてさとり得るおつげをうける。

【感佩】カイ　深く心にかんじて忘れず、佩は身に帶びる。＝感銘・感服。

【感冒】カン　寒氣に觸れてかぜをひく。水滸傳「小人於、道一一風寒、未曾經、症可」＝風邪。

【感附】カン　めぐみに感動して感ひつく。庾亭、故炎夏一一」

【感服】カン　深くかんしんしてしたがふ。漢觀文「王者所、以一一天下」

【感慨】カイ　心にかんじなげく。史、季布傳「敵家婦人、一一而自殺」李白詩「知音不易得、撫劍空一一」＝感慎

【感慨悲歌之士】ヒカシ　國を憂ひ世を思ふのあまり、悲しき歌を詠じて轟轟接せる變をもらす士。韓愈、送三高閑師序「蘇超古稀、多一一」

【感戴】カン　感恩に觀ず、一時に感氣に感じて節能を立つる義。＝感奮

【感泣】キフ　深く心にかんしんしてなく。宋史、謝絳傳「宜仁后與二幸宗一、赤泣、左右皆一一」

【感吟】キン　國感歎してよむに足る傑作の詩歌、佳詩など。

【感興】キン　おもしろみ、興味。劉孟詩「一一詩成動自論、忘、憂花好酒、誰問」

【感化】クワ　○感じて善に從る。荀庾序「美二其一一、則功・華滋二爲、貴」○俗には惑しき方に化するにもいふ。

【感化事業】ジギヤウ　不良少年などを感化して善人たらしめるしごと、それ等の人を收容する所を感化院といふ。

【感慨】カイ　心に感じてくやむ。唐書、陳子昂傳「他日入二鄉校一、一、卽痛修節」

【感激】カイ　心にかんじおもふかんずるおもひ。杜牧詩「聊書二一一韻」

【感官】カン　外界の刺戟を受けて腦に傳ふる機關、耳・目・舌・鼻・皮膚の類。＝感覺器官。

【感激】カキ　深く心にかんじて氣が奮ふ。諸葛亮、出師表「由、是一一、遂許二先帝以驅馳」

【感情】カン　心に感じてきざる。史記

者、蓋與ノ感也」

【感奮】カン　心にかんじてふるひ起る。唐書、朱忠亮傳「問者爽、不二一一」＝感激。

【感憤】カン　心にかんじて振ひ起る。後漢書、雍丘之圍、威洪之一一壯矣」＝感奮。

【感懷】カン　心にかんじてこひしたふ。陶書、獨孤皇后傳「后早失二親、常懷二一一」

【感銘】メイ　心にかんじてわすれず。心に銘刻して忘れず。陸倕碑文「書問見ノ貽、一一斯切」＝銘感。

【感愁】カン　心にかんじてもだえる。王褒、僕奴「到見一一、紓ノ書而讀、至繼」

【感淚】カン　深く心にかんじて出づる涙、うれしなみだ。＝感激。

【愚】グ　國

○おろか（愚）ばか、才智のはたらき純ナし「蠢一」「迂一」「下一」又、其の人。○くらし（昧・闇）「闇一」○馬鹿正直。論、先進、柴也「一一」○ばかにする、あなどる「一弄」○かたし（難）○おほふ（蔽・蒙）○自己の謙稱「一拔」○自己に關する事物に添へて謙遜の意をあらはす「一見」「一倅」「一弟」

【愚案】グ　己のかんがへをいふ謙稱。＝愚考。

【愚公移ノ山】ヒウグヤウ　他のて己れの家の前に塞ってる山を他に移さんとて、其の土を運ぶ、河曲の智叟、其の愚を笑ひて、之を止めけるに、愚公われ死すとも子子孫孫、駄りて絶らずんば、何ぞ山の移らざることあらんやとて聞かず、上帝其の誠心に感じ、夸蛾氏の二子をして二山を負ひて他に移さしむ。〔列、湯問〕

【愚鈍】ヒン　おろかなるまどこころ。范成大詩「一一無事、敢自數」

【愚相】ソウ　○おろかなる宰相。史記、夫以三聖主賢二一一、君受、福不久矣」○己の推量の謙稱。

【愚案】アン　己の推量の謙稱。

【愚志】シ　おろかなるこころざし。己の志の謙稱。劉向文「故使二使者陳二一一」

【愚人】ジン　おろかなる人。老子「我一一之心也哉」＝愚考。

【愚者千慮必有二一得」】ヒトツエ　おろかなる者も、たまには良き考を出すをいふ。史、淮陰侯傳「廣武君曰、臣聞知者千慮必有二一失、一一」

【愚生】セイ　自己の謙稱。

【愚魂】コン　おろかにして智あさし。漢書、賈誼傳「臣一一小才、竊二庶幾」

【愚蒙】モウ　おろかにしてかよわし。司馬遷、報二任少卿書「一一」

【愚公移ノ山】ヒウグヤウ　他のて己れの家の前に塞ってる山を他に移さんとて、其の土を運ぶ、河曲の智叟、其の愚を笑ひて、之を止めけるに、愚公われ死すとも子子孫孫、駄りて絶らずんば、何ぞ山の移らざることあらんやとて聞かず、上帝其の誠心に感じ、夸蛾氏の二子をして二山を負ひて他に移さしむ。〔列、湯問〕

【愚鈍】ヒン　おろかなるまどこころ。范成大詩「一一無事、敢自數」

【愚相】ソウ　○おろかなる宰相。史記、夫以三聖主賢二一一、君受、福不久矣」○己の推量の謙稱。

【愚案】アン　己の推量の謙稱。

【愚志】シ　おろかなるこころざし。己の志の謙稱。劉向文「故使二使者陳二一一」

【愚人】ジン　おろかなる人。老子「我一一之心也哉」＝愚考。

【愚者千慮必有二一得」】ヒトツエ　おろかなる者も、たまには良き考を出すをいふ。史、淮陰侯傳「廣武君曰、臣聞知者千慮必有二一失、一一」

【愚生】セイ　自己の謙稱。

【愚魂】コン　おろかにして智あさし。漢書、賈誼傳「臣一一小才、竊二庶幾」

【愚蒙】モウ　おろかにしてかよわし。司馬遷、報二任少卿書「一一」

馬光詩「山林有二一一」

【愚叟】ソウ　○おろかなるおやじ。又、老人の自身の謙稱。○愚公に同じ。李密陳情表「臣一一之復生、焉能移二其心一」愚公移山参看。

【愚智】ソウ　愚の自身の謙稱。＝野朔。

【愚息】ソク　己のせがれをいふ謙稱。＝賢息。

【愚短】ソウ　おろかにしておとる。向秀天文「誠非二一一所一能究言」

【愚痴】ソウ　○天性に同じ。○圓己の不平を訴へる、なきごと。

【愚襲】ソウ　おろか。襲は痴、不慧。岡耘「一一耶見」＝愚痴・愚昏・愚鈍。

【愚忠】ソウ　おろかにして忠誠の心。又、己の忠誠の謙稱。漢書、張湯傳「臣固一一、若言張湯一乃詐忠」

【效愚忠】ソウ　己がまごころをつくしいたす、との謙辭。枚乘文「臣願二效一愚心一而一一」

【愚衷】ソウ　おろかなるまごころ。又、己の心の謙稱。洛陽伽藍記「乞衆二成旨一以允二一一」

【愚直】ソウ　おろかにして直し。己の正直なることの謙稱。宋史、李綱傳「惟陛下敢責二一一、而取二其衆參之一忠」

【愚弗】ソウ　おろかにしてかろがろし。

【愚弗文】「一一短略、輕進易退」

【愚鳥】ソウ　おろかにぶし、鳥は鈍。後漢書、魯恭傳「明詔不レ以二臣一一、令使軍」＝愚鈍。

【愚鈍】ソウ　おろかにしてにぶし。元結詩「韓居業二一一」＝愚魯。

【愚頑】ソウ　にぶし、頑は鈍。蔡邕文「泣曰、臣一一理極再見無レ期」＝愚鈍・愚魯。

【愚戇】ソウ　おろかにして剛すうし。楊雄文「以二臣一一、累拳而愚樂」

【愚益愚】ソウ　おろかなるものはますますおろかとなる。韓愈、師說「今之衆人、其下二聖人一也亦遠矣、而恥學於師、是故聖益聖、愚一一」

【愚鄙】ヒ　おろかにしていやしく、己の才能の謙稱。居易「備二位保傅、愛得レ效二一一」＝愚陋・愚劣。

【愚謬】ビウ　おろかにして事を誤る。典論「古今一一、豈惟一人哉」

【愚夫愚婦】ソウ　おろかなる男女。書、五子之歌「予視二天下一一一、二能勝レ予」

【愚物】ブツ　おろかなる人、ばかもの。＝愚人・愚者。

【愚蔽】ヘイ　おろかにしてくらし、蔽は事理に昧し。二十四章經「使二人一一者、愛欲レ欲也」＝愚昧・愚襲。

【愚拳】ケン　おろかにして才智くらし。麴眞、昭文「實非二一一所レ宜二漸踐」＝愚襲・愚昧。

【愚襲】シウ　おろかにしてくらし。島汝諫詩「直道苦二一一」＝愚蔽。

【愚樸】ボク　おろかにして飾なし、樸は朴。張籍詩「況我一一姿、頗趨二利祿一」

名動」

【愚昧】マイ　おろかにして事理に暗し。漢居延書、貢說傳「臣雖二一一、風管二面論、累蒙二永視一」

【愚蒙】モウ　おろかにしてくらし、蒙は無知。杜甫詩「此語亦足レ貴二一一」＝愚昧。

【愚老】ロウ　老人自身の謙稱。

【愚慮】リヨ　己のおもんばかりの謙稱。漢書、梅福傳「願二平生之一一」

【愚劣】レツ　おろかにして才にぶし。漢書、谷永傳「永愚一一」

【愚常】ジヤウ　おろか。常は鈍。蘇軾詩「真力書生多二一一」＝愚騃・愚蒙。

【愚弄】ロウ　おなどりてばかにする。左、襄四「施二賂于外、一一二其民」＝愚弄。

【愚陋】ロウ　おろかにしていやし。韓愈、潮州謝表「臣愛レ性一一」＝愚鄙・愚劣・陋愚。

【愚惑】ワク　おろかにしてまどふ。史記、日者傳「夫一一之人、豈能與二言一而知レ之哉」

【愕】ガク　圓

○おそれ（恐）おそれ「恐一」「慴一」「慄一」「懼一」○あわてる（遽）「驚一」「駭一」

同訓異語　愕・惶・恐・懼・畏・怖・悸等の別は恐（心部六畫）の條を見よ。

【愕駭】ガイ　おそれおどろく。居易、議行會像「嘩驚漢天而鬨、斥使一一」＝駭愕・怖駭。

【愕汗】カン　おそれてあせを流す。廣異記「一一久之」

【愕眙】チ　おそれて心をのべ。王逸、九思「一一今失氣」＝恐悸。

【愕然】ゼン　おそれあわてる。＝愕然。

【愕然】ゼン　おそれてあわただし。宋史「聞レ有レ變、一一而歸」

【愕恐】キヨウ　おそれる。漢書、朱博傳「對曰一一」＝恐懼。

【愕然懼】ゼンク　地名。江西宮頭江中の島。高安縣の名。高安縣江中地に在り。＝島恐灘。

【愕懼】ク　おそれる。周書「軍至一一」＝愕恐・懷懼・震懼。

【愕眙】ガイ　おそれる。鮑照「北史、王慶傳「臣聽一一無二夜佛地一」＝驚愕。

【愕然】ゼン　おそれる。鮑照文「執レ啓、涕縱、伏道一一」

【愕然】ゼン　おそれみだれる。後漢書、杜詩傳「兵士驚惶、民間百姓一一」＝惶駭。

【愕然】ゼン　おそれていたみかなしむ。晉書、劉琨傳「奉二表二臣、征前、伏聞感歌、五情一一」

【愕然】ゼン　おそれうむ。柳宗元、陳情啓「下情至、今猶增二一一」

【愕然】ゼン　おそれをのべ。後漢書「吉一一寒心」＝愕恐。

【愕然】ゼン　おそれまどふ。後漢書、光武帝紀「一一不レ知所レ之」＝恐惑。

【愕然】ゼン　おそれ。

【愕然】ゼン　おそれてあせを流す。

【愕然】ゼン　おそれてあわてる。

【愕然】ゼン　おそれてあわただしい。

【愕然】ゼン　おそれてあわてる。

【愕然】ゼン　おそれてあわてる。

【愕然】ゼン　おそれてあわてる

【悲感】ヒカン　うれひ、もだえる。王逸、招魂章句「一一山深」。

【悲愴】ヒソウ　悲哀に同じ。

【悲嘶】ヒセイ　うれへてなかめる。太平御覽「箏要目、久雨目、苦雨、目三一一、朱案詩「浮袋藏中天、一一隔水腐」＝苦雨。

【悲涼】ヒリヤウ　うれへのなんだ。常建詩「一一變、疲竹、蟬眉裏、湘川」。

【悱】ヒ　囡

○まごつく（誠）＝誹。○辭一はたゆたふ（躊躇）。

【悲】ヒ　①　⑪　⑫　囡

①ひく（引者）羅鄴詩「微香暗一遊人步」○ひたる（亂）⑪ひく（筆）

【悲記】ヒキ　ひきおこす。感情を引き起す。

【悉】シツ　夢　に通じて識

○おろか（愚）1說に意の誤用「惡一」○ひたる（亂）動き接れる。

【悉悉】シツシツ　うこきみだれる。論。左、昭二四「今王室實一一焉、吾小國懼矣」。

【悉窮】チツキウ　愚にして識ぜず。皮日休、悼賈文「惡書師之一一今」。

【悲感】ヒカン　うれひ、もだえる。王逸、招魂章句「一一山深」。

【悲愴】ヒソウ　悲哀に同じ。

【悲嘶】ヒセイ　うれへてなかめる。太平御覽「箏要目、久雨目、苦雨、目三一一、朱案詩「浮袋藏中天、一一隔水腐」＝苦雨。

【悲涼】ヒリヤウ　うれへのなんだ。常建詩「一一變、疲竹、蟬眉裏、湘川」。

【悱】ヒ　囡

○まごつく（誠）＝誹。○辭一はたゆたふ（躊躇）。

【悲】ヒ　①　⑪　⑫　囡

①ひく（引者）羅鄴詩「微香暗一遊人步」○ひたる（亂）⑪ひく（筆）

【悲記】ヒキ　ひきおこす。感情を引き起す。

【悉】シツ　夢　に通じて識

○おろか（愚）1說に意の誤用「惡一」○ひたる（亂）動き接れる。

【悉悉】シツシツ　うこきみだれる。論。左、昭二四「今王室實一一焉、吾小國懼矣」。

【悉窮】チツキウ　愚にして識ぜず。皮日休、悼賈文「惡書師之一一今」。

【悲感】ヒカン　かなしみいたむ。楚辭「意荒忽而流涕兮、心一一而摯悲」。

【悲聲】ヒセイ　かなしきこゑ。＝哀聲。

【悲哀】ヒアイ　うれへてうつたへる。楊萬里詩「江山一一鳳凰泣」。

【悲慟】ヒドウ　うれへなげく。唐書、荀叟傳「民去三一一而流涕安之」。

【悲鬱】ヒウツ　心をうれへしむ。又、うれふる心。劉禹錫詩「一一正遇斷猿時」。

【悲痛】ヒツウ　うれへいたむ。左傳「夫人一一、不ノ知ノ所ノ庇」＝悲傷。

【悲啼】ヒテイ　うれへてなく。傅休奕詩「青雲徘徊、我一一」＝悲啼。

【悲傷】ヒシヤウ　うれひおそれる。韋應物詩「收ノ此愁、我家、將ノ遊復一一」。

【悲壽】ヒジユ　うれへいたむ。後漢書、楊秉傳「四方一一」。

【悲眉】ヒビ　うれへてひそむるまゆ。しんばいげな顏つき。漢書「樊噲傳、噲一一啼姙」。劉禹錫詩「颯颯三綠柳、一一」。

【悲惰】ヒダ　うれへおそれる。鮑照詩「如待忘ノ憂消」。

【悲憤】ヒフン　うれへいきどほる。蘇舜欽詩「一一徒滿胷」。

【悲眠】ヒミン　うれひねむる。張籍詩「江風流火酌一一」。

【悲夢】ヒム　しんばいのあまりに見る夢。高適詩「邊城夜夜多一一」。

【悲悶】ヒモン　かなしみもだえゆ。姚合詩「一宵無眠日、一一欲三向如」。

【悲怪】ヒクワイ　かなしみいたむ。楚辭「意荒忽而流涕兮、心一一而摯悲」。

【悲聲】ヒセイ　かなしきこゑ。＝哀聲。

【悲哀】ヒアイ　うれへてうつたへる。楊萬里詩「江山一一鳳凰泣」。

【悲慟】ヒドウ　うれへなげく。唐書、荀叟傳「民去三一一而流涕安之」。

【悲鬱】ヒウツ　心をうれへしむ。又、うれふる心。劉禹錫詩「一一正遇斷猿時」。

【悲痛】ヒツウ　うれへいたむ。左傳「夫人一一、不ノ知ノ所ノ庇」＝悲傷。

【悲啼】ヒテイ　うれへてなく。傅休奕詩「青雲徘徊、我一一」＝悲啼。

【悲傷】ヒシヤウ　うれひおそれる。韋應物詩「收ノ此愁、我家、將ノ遊復一一」。

【悲壽】ヒジユ　うれへいたむ。後漢書、楊秉傳「四方一一」。

【悲眉】ヒビ　うれへてひそむるまゆ。しんばいげな顏つき。漢書「樊噲傳、噲一一啼姙」。劉禹錫詩「颯颯三綠柳、一一」。

【悲惰】ヒダ　うれへおそれる。鮑照詩「如待忘ノ憂消」。

【悲憤】ヒフン　うれへいきどほる。蘇舜欽詩「一一徒滿胷」。

【悲眠】ヒミン　うれひねむる。張籍詩「江風流火酌一一」。

【悲夢】ヒム　しんばいのあまりに見る夢。高適詩「邊城夜夜多一一」。

【悲悶】ヒモン　かなしみもだえゆ。姚合詩「一宵無眠日、一一欲三向如」。

【悲怪】ヒクワイ　かなしみいたむ。楚辭「意荒忽而流涕兮、心一一而摯悲」。

【悲聲】ヒセイ　かなしきこゑ。＝哀聲。

【悲哀】ヒアイ　うれへてうつたへる。楊萬里詩「江山一一鳳凰泣」。

【悲慟】ヒドウ　うれへなげく。唐書、荀叟傳「民去三一一而流涕安之」。

【悲鬱】ヒウツ　心をうれへしむ。又、うれふる心。劉禹錫詩「一一正遇斷猿時」。

【悲痛】ヒツウ　うれへいたむ。左傳「夫人一一、不ノ知ノ所ノ庇」＝悲傷。

【悲啼】ヒテイ　うれへてなく。傅休奕詩「青雲徘徊、我一一」＝悲啼。

【悲傷】ヒシヤウ　うれひおそれる。韋應物詩「收ノ此愁、我家、將ノ遊復一一」。

【悲壽】ヒジユ　うれへいたむ。後漢書、楊秉傳「四方一一」。

【悲眉】ヒビ　うれへてひそむるまゆ。しんばいげな顏つき。漢書「樊噲傳、噲一一啼姙」。劉禹錫詩「颯颯三綠柳、一一」。

【悲惰】ヒダ　うれへおそれる。鮑照詩「如待忘ノ憂消」。

【悲憤】ヒフン　うれへいきどほる。蘇舜欽詩「一一徒滿胷」。

【悲眠】ヒミン　うれひねむる。張籍詩「江風流火酌一一」。

【悲夢】ヒム　しんばいのあまりに見る夢。高適詩「邊城夜夜多一一」。

【悲悶】ヒモン　かなしみもだえゆ。姚合詩「一宵無眠日、一一欲三向如」。

義、恤と略ス同ジ。○相は変なり、さびしく変ふる義。詩、邶風「変心悄悄」○病は苦にして変ふる義。禮記「病ノ不ノ得ニ其養一也」。

【悲意】ヒイ　うれへふるこころ。温庭筠詩「平明花木有一一」。

【悲他】ヒタ　うれへて心ふさがる。書、疏「一一不ノ寐、目睫髑髏然」。

【悲音】ヒイン　かなしきこゑ。高適詩「耿耿尊酒前、轟轟聚一一」。

【悲慟】ヒドウ　うれへうらむ。後漢書、明帝紀「百姓一一、怨無三告訴一」。

【悲鳴】ヒメイ　うれへの表だしまを海に喰へいふ。遥郊詩「醒時不ノ可ノ過、一一浩無ノ涯」。耶律楚材詩「高里西行悲似ノ傳、千山東望望遥如ノ天」。

【悲看】ヒカン　うれへてみる。杜甫、見三養火一詩「滄江自奏一一波」。

【悲願】ヒガン　うれへがほ。吳萊詩「洞府茫茫多一一」。

【悲歎】ヒタン　うれふる心。陸龜蒙詩「我有三一一一無ノ可ノ那」。

【悲苦】ヒク　うれへくるしむ。孝慈、答三蘇武一書「身之窮因、獨坐一一」＝悲困。

【悲辛】ヒシン　かなしみつらし。杜甫詩「紫宸殿寂寥、相遇益一一」。

【悲嘆】ヒタン　悲へ苦しむ。嘆通。張籍詩「一退三一一高里陸」。

【悲傷】ヒシヤウ　うれへいたむ。＝悲痛・哀傷・悲憂。

【悲緒】ヒシヨ　うれふる心。緒は緒の動く端緒。元浩然詩「送ノ君不ノ相見、日暮一一」＝憂思。

【悲巳】ヒイ　うれふるやうす。＝憂色。

【悲涙】ヒルイ　涙流離圍外、一一孤城落日遥」。

【悲困】ヒコン　うれへくるしむ。後漢書、公孫述傳「百姓一一、不ノ堪三上命一」。

【悲悅】ヒエツ　うれへうらむ。杜甫詩「當夫知三一一、垂ノ頭侍ノ我邪一」＝悲想。

【悲霜】ヒサウ　しんばいのあまり白髮となりしを霜に喩ふ。白居易、朱陳村詩「悲火燒三心曲一、一一使三驚狼」。

【悲殺】ヒサツ　うれふ、殺は助字。元浩然詩「江風白浪起、一一波頭人」。

【悲思】ヒシ　うれふるおもひ。長門賦「愛ノ長夜兮一以鬱悒、号、素一一之不ノ可ノ忘」＝憂思・悲心。

【悲愁】ヒシウ　うれふる愁。楚辭「心一一而思ノ荒ノ邦」。

【悲笑】ヒシヤウ　うれへにくむ。北史、王孝籍傳「一一甚三于厲鬼」。

【悲人】ヒジン　心にうれへある人。戴叔倫詩「沉湘日夜東流去、不ノ盡一一佳少時」。

【悲心】ヒシン　うれふる心。＝悲思・悲酌

心部（九三）　惕・怵・悄・怒・恬・悛・悄・怒・悠・悠・怒・悠・悠・怒・悠・悠

【愧色】ショク　はづるかほいろ。後漢書、郭泰傳「無三一一一」＝慙色。

【愧矢】ヤ　はぢあらふ。後漢書、明帝紀「令二人一一」

【愧赧】ダン　はぢて顔を赤らむ。曹植文「五情一一」＝赧愧。

【愧耻】チ　はづ。はぢ。書經「其心一一、若二雉・雉一手市一」＝愧羞。

【愧畏】イ　恥・恥・恥・

書、丹丹國傳「一一一著生」＝惹惘。

【惹惘】ジャクボウ いつくしみあはれむ。張衡「之天人感自天祿、一一元元」

【惹父】ジャクフ いつくしみあるちち。北史、蔡絳傳「愛人如一一一」

【惹無】ジャクム めぐみやすんずる。宋史「民所二安樂一惟日一一」

【惹鈞】ジャクキン いつくしみて、目をかける。晉書、石勒載記「一一如子也」＝恩鈞。

【惹母】ジャクボ ○いつくしみあるはは。趙岐、孟子序「幼稚一一三遷之教」○一一如ノ母。

【惹母有二成子一】ジャクボイウセイシ 慈愛に過ぎた子が出來る。史、李新傳「一一、蔡家無二裕饒一」

【惹護】ジャクゴ いつくしみむつぶ。禮記「教以一一一而民貴ノ有ノ親」

【惹敦能勇】ジャクトンノウユウ 慈愛の心厚し、故に自然に勇氣を生ず。老子「一一、儉故能廣」

【惹隘】ジャクアイ あはれみの心を以て下にのぞむ。齊書、虞玩之傳「玩之以二久宦寒素一、上表者ノ退目、伏願一一、賜二臣餐骨一」

【惹力】ジャクリキ 圓なさけぶかき力量。楞嚴經「與ノ佛如來一同一一一」

【惹憐】ジャクレン なさけあるなみだ。白居易詩「一一回ノ身送悲騰選ノ物寄」

【惹憐】ジャクレン いつくしみあはれむ。晉書、

【惹和】ジャクワ ○君はよく臣をいつくしみ、臣はよく君に順ふ。左傳「上下一一、一一而後能安二靖其國家一」○なさけぶかくやさしく、慈愛親和。辨亡論「一一以結二士民之愛一」

【愼】シン 圓

○つつしむ、つつしみ（謹）「敬一」「貞一」「明一」「謹一」「戒一」「清一」書、金縢「一乃在位」○「まことと（誠）誠にする。詩、小雅「一一爾言也」○しづか（謹靜）○おもふ（思）○つつしみて、禁戒の詩。史、吳王濞傳「上謂ノ濞曰、一無二反一」

同訓異義 愼・謹・敬・恭・愨・恪の別は謹（言部十一畫）の條を見よ。

【愼戒】シンカイ つつしみいましむ。大戴禮「一一必恭、恭則壽」＝戒愼。

【愼機】シンキ 事のきざしをつつしむ。雅詩、外戚篇「愚生二不德一、禍有二一一一」

【愼靈】シンレイ つつしむ。呂覽「浮浮乎一一」＝謹愼・敬愼。

【愼刑】シンケイ 刑を行ふことをつつしみて輕輕にせざる譬。隋書、書樂志、自帝嚳「爲ノ兵詩ノ樂、敗法ノ、明神祠降ノ場、國步惟寧」＝慎罰。

【愼言】シンゲン 言を謹みてみだりにいはず。家語、觀周「有二金人一焉、三三緘文「戒愼二一一一、更加愼選」

【愙】ゲキ 圓

【愙愙】ゲキゲキ 愼・懼・恐・畏・懼・怖・悄等の別は恐（心部六畫）の條を見よ。

【愙然】ゲキゼン 愙愙に同じ。

【愙愙】ゲキゲキ ○おそれる貌。をのの く貌。書、湯誥「一一危懼、若ノ將ノ墜二于深淵一」＝畏懼。○甚ださむき貌。＝栗栗・慄然。

【愙栗】ゲキリツ さむさ甚だしき貌。＝栗烈・慄慄。

十一畫

【愆】キ 圓

○なやまし む、心を安んじ情を樂まし む。「安一」「恩一」なやまし む、玩弄する。○人をなやまし む、玩弄する、もてあそぶ。

【愆安】キアン なやましめやすんずる。漢書、魏相傳「一一元元、便二利百姓一」

【愆憂】キユウ なやまし めうれへ。後漢書、順帝紀「一一日甞勞蠻」

【愆勤】キキン 勞苦をなやまし める。漢書、成帝詩「終ノ靡二我愆一、我勤ノ酒愆、我勤ノ」＝愆勞。

【愆詩】キシ なやましめいましむ。魏志、甄后傳、注「無二愆者一一之」

【愆懷】キカイ 心をなやまし める。陶潛詩「何以慰二愆懷一、賴此多二古賢一」

【愆懷】キカイ なやましめさとす。＝愆諭。

【愆精】キセイ なやまし め助ける。後漢書、鴻臺傳「所二以一一之二真厚一」

【愆恒】キコウ なやましめめぐむ。魏志、注「誠二心一一、効二力行陣一」

【愆釋】キシャク 心をなやまし め憂を解ノ、齋戒ノ、手足鍵脚、以自一一」

【愆答】キトウ いたはりて報ゆ。管書、石勒載記「臣是二以一一存ノ亡申ノ孤之心也」

【愆惑】キワク 惑め戮れむ。風俗通、喪主篇「孝敬、一一一契闊、貧二之矣後」

【愆滯】キチ やすんじなでる。宋史、克明傳「一一出二衣服一遣ノ之」＝慰撫。

【愆撫】キブ いたはりなでる。漢書「上賜以二詔書一一一不ノ能」

【愆問】キモン なやまし めみまふ。後漢書、宋均傳「帝使二中黃門一一」＝存問。

【愆問使】キモンシ 京師などをなやまし めたはる使あに天子の遣はされるつかひ。

【愆諭】キユ なやましめさとす。元史、世祖紀「詔一一軍民」

【愆勞】キロウ なやましめはきらふ。書、孝特載記「持ノ節一一」

【愆闕】キケツ なやましめはげます。魏志、趙儀傳「靈帝一所、從人、擒以成敗、一一節切」

【憂】イウ 圓

○うれへ、うれへ（愁患）心配する。「憂一」「近一」「先一後樂」「內一外患」論、子罕「仁者不一」○おそれる（懼）呂覽、知分「余何一於龍逢」○うれへおもふ（愁患）かなしみ。○やまひ（疾）曲禮「未有貧薪之一」○疾病して わづらふ。つはる。晉語「文王在胎、母不一」○はづかし む（辱）○おもんぱかり（慮）○喪に居る。書、說命「王一宅一」、父母の喪に居るを一一といふ。

同訓異義 憂・愁・患・恤・悶・憐等の別は愁（心部九畫）の條を見よ。

【憂患】イウカン 憂・愁・患・恤・悶・憐等の別は愁（心部九畫）の條を見よ。

【憂悲】イウヒ うれへいかる。魏志、匈奴傳「一一而死」

【憂衷】ユウチウ うれへおそれる。隋書、昭明太子文「豈能感感、勞手一一」

【憂悒】イウユウ うれへて心ふさがる。書、「憂ノ風俗三浦中ノ累日一一」

【憂鬱】ユウウツ 氣ふさがる。管子「一一生

【慣】カン 圓

○ならす。「習一」「慣一」「慣一」「慣

【憮】ブ　國　通じて撫に作る

○なけく、なげき（歎）歎息する。「歎一」いきどほる（憤激）「感一」「忼一」「憤一」○かなしむ（悲）うれふ（憂）なげきうれふ、いたむ（痛）

【憮然】ブゼン　深くうれへかなしむ貌。＝憮然。

【憮慨】ブガイ　なげきおもふ。漢朝文帝文「分別已來、常常一一」＝憮想。

【憮懼】ブク　なげく貌。劉向「怨懼、悔一一而求復今」

【憮懼】ブク　なげく。或賦詩「帝厚幸＝蠱、愛二氣侠存一一」＝懼憮・忼憮。

【憮恨】ブコン　なげきうらむ。書、殷仲堪「永昏二長朔之實、而怨爲二荊楚之珍、所以一一」

【憮想】ブソウ　なげきおもふ。鮑長庚賦「覆二江山一、以一一」

【憮悲】ブヒ　世を なげきうれふ。

【憮然】ブゼン　○ 〇甚だしくうれひかなしむ貌。「憮」は撫の俗字。「憮然」は「憮然」の誤。「憮然」は「憮然」の誤。「憮然」は「憮然」の誤

【慶】キョウ　圏

○よろこぶ。よろこび。賀。祝。「慶賀」「慶弔」「慶事」「慶祝」「慶雲」「慶福」「慶幸」「慶賜」「慶賞」「慶吊」「慶弔」「慶祝」「慶賀

○うれふ、うれひ（憂）「憂一」○いたむ（痛）

【慽】感（前條）に同じ。

【慴】ショウ・チョウ　圓　寒

○おそれる（懼・怯）ふるへおそれる「震一」「怖一」○おどす。○ひれふす（伏）

同部同韻　慴・怕・怨・慢・喪・怖・怪等の別は恐（心部六畫）の條を見よ。

【慴伏】おそれて心をのべず。後漢書、劉瑜論傳「慢二以關件、征震一一」

【慴慄】ふるへおそれる。杜牧詩「地田數十萬、隨防常一一」

【慴懼】おそれはばかる。宋書、恩倖傳「慴懼之徒、一二一宗威」

【慴伏】威勢におそれて屈伏する。史、項羽紀「一府中皆一一、莫三敢起」

【慴服】おそれてしたがふ。＝震服・讋服。

【滯】タイ　圓

○とどこほり（刺梗）心に滯る所あり。＝滯然・怠たらざるにいふ。＝滯怠・怠惰。

【慙芥】小さきとげ、心にすこしのさはりある譬。司馬相如、上林賦「皆不二一一一」＝滯芥・慙刺。

【慙疏】前條に同じ。史記、翻叔一一兮、何足三以疑」

【慙怖】慙（前條）に同じ。

【慙怜】心安からざる貌。

【慤】ショウ　圓　寒　同懲に

○おうか（恩）○くらし（殘）「驗一」にぶし。

【慤惑】ショウ　おうか。禮、表公問「寢人一一頑笑」

【慵】モン　先・寒

○うれふ（憂）

【慵慵】うられへつかれる貌。憂勞。詩、伯風「勞心一一兮」

【慟】トウ　圓　送・董

○かなしみ、かなしむ。哀がが度に過ぎる「一哭」「哀一」論、先進「子哭之一」○なげき、なげく。

【慟泣】甚だしくなげきてなく。前史、國藏傳「歌早孤、讀、詩至三哀哀父母兮、鞠我一一」

【慟哭】甚だしくかなしみ、大聲をあげてなく。李白詩「蹈來慟三金鈴、日暮還一一」＝慟泣。

【慝】①トク　②チク　屋・職

①あし（惡）者、畢命「性別淑一一兮、何足三以疑」

②わるもの。○惡の心に隱るる者（隱惡）「隱一」○けがれ、けがら（穢）「穢一」禮、樂記「惟亂則禮一而樂淫」○よこしまな（邪）禮一詩、齊風「之死矢靡一一」矢は誓。○わざはひを爲す惡しき氣、陰氣。左、昭十七「一一示作」○わざはひ（災害）「妖一」○なまり（訛言）③いつはる、いつはり（隱情飾非）

同部同韻　慝・慮・慮・慮・凶の別は惡（心部九畫）の條を見よ。

【慝惡】よこしまな。＝慝邪。

【慝邪】よこしまな。

【慝穢】あしくけがれたること。禮、樂記「淫樂一一、不二接三心術一」

【慣】カン　寒

○なれる。＝慣習・慣熟。

【慣熟】なれる。＝慣習。

【慣習】なれる。

【慣】ヘン　霰

○ならす「馴一」「習一」「慣一」「敬一」「狎一」「親一」「慕一」「愛一」「恭一」「仰一」○其の人品を愛して手本として習ふ。史、司馬相如傳「一一蘭相如之爲人、更名相如」○おもふ（思）○なつかしく思ふ、繼ひて忘れず「思一」「懷一」「孟、萬章「大孝終身一一父母」又、特に男女相一一ふにもいふ「戀一」

【慣性】したがひよろこぶ。韓愈、柳宗元墓誌銘「平居里巷相一一」

【慣效】慣をしたひて之にならふ。後漢書、武帝紀「吏民一一、競以成一一帝」＝慕傚。

【慣慣】正しき正道をしたふ。後漢書、田儋傳贊「實帝一一、猶不一一能二自立、豈非一天乎」

【慣化】慣をしたひて教化に從ふ。書、說、傳「四夷一一、實天方助」

【慣心】したふこころ。關尹子「有三一一、則慮慮慄慄然」

【慣慨】したひならふ。晉書、後秦姚一一一」＝慣效。

【慣習】大人物をしたふ。韓、後漢書、馬援傳「一一相如」

【慢】マン　寒　諫或には漫・謾

○おこたる、なまける（惰）「怠一」「惰一」○ゆるし、おそし（遲）詩、鄭風「叔馬一忌」叔は人名、忌は助字。○わがまま、

ほしいまま（放肆）○あなどる（易）「侮一」「輕一」○うすし（薄）おろそか（粗略）○ほこる、おごる（倨）「驕一」「傲一」

史、淮陰侯傳「王美一而無一禮」○ゆるし（緩）「緩一」

同部同韻　慢・侮・易の別は侮（人部七畫）の條を見よ。

○慢・怠・懈・惰の別は怠（心部五畫）の條を見よ。

【慢易】あなどりかろんず、易は侮。史、張耳傳「高祖箕倨罵、甚二一之」＝慢侮・輕易。

【慢尤】とがあ。後漢、臣詩「尊君長無二一一」

【慢逆】きままにあそぶ。慢は放縱。書、說「惟一一是好」

【慢緩】ゆるゆる遲むふね。緩は對。蜀、諸詩「一一不知、移」

【慢弱】あなどりなれる。後漢、鄧騭「人不知二其使者一也、或一一之」

【慢業】あなどりすてる。左、僖「實二漢兆一一」

【慢言】たはぶりあなどることば。＝謾言。

【慢藏】くらの戶じまりをおこたる。易、繫辭「一一誨盜、治容誨一淫」

【慢心】おごりたかぶる心。詩、蕩「記一一、自高陵、彼」

【慢世】世におごりてつつしまず。

【慢慢】ほしいまま（放肆）○あなどる（易）「侮一」「輕一」○うすし（薄）おろそか（粗略）○ほこる、おごる（倨）「驕一」「傲一」

史、淮陰侯傳「王美一而無一禮」○ゆるし（緩）「緩一」

同部同韻　慢・侮・易の別は侮（人部七畫）の條を見よ。

○慢・怠・懈・惰の別は怠（心部五畫）の條を見よ。

【慢易】あなどりかろんず、易は侮。史、張耳傳「高祖箕倨罵、甚二一之」＝慢侮・輕易。

【慢尤】とがあ。後漢、臣詩「尊君長無二一一」

【慢逆】きままにあそぶ。慢は放縱。書、說「惟一一是好」

【慢緩】ゆるゆる遲むふね。緩は對。蜀、諸詩「一一不知、移」

【慢弱】あなどりなれる。後漢、鄧騭「人不知二其使者一也、或一一之」

【慢業】あなどりすてる。左、僖「實二漢兆一一」

【慢言】たはぶりあなどることば。＝謾言。

【慢藏】くらの戶じまりをおこたる。易、繫辭「一一誨盜、治容誨一淫」

【慢心】おごりたかぶる心。詩、蕩「記一一、自高陵、彼」

【慢世】世におごりてつつしまず。

【慢慢】ほしいまま（放肆）○あなどる（易）「侮一」「輕一」○うすし（薄）おろそか（粗略）○ほこる、おごる（倨）「驕一」「傲一」

史、淮陰侯傳「王美一而無一禮」○ゆるし（緩）「緩一」

同部同韻　慢・侮・易の別は侮（人部七畫）の條を見よ。

○慢・怠・懈・惰の別は怠（心部五畫）の條を見よ。

【慢易】あなどりかろんず、易は侮。史、張耳傳「高祖箕倨罵、甚二一之」＝慢侮・輕易。

【慢尤】とがあ。後漢、臣詩「尊君長無二一一」

【慢逆】きままにあそぶ。慢は放縱。書、說「惟一一是好」

【慢緩】ゆるゆる遲むふね。緩は對。蜀、諸詩「一一不知、移」

【慢弱】あなどりなれる。後漢、鄧騭「人不知二其使者一也、或一一之」

【慢業】あなどりすてる。左、僖「實二漢兆一一」

【慢言】たはぶりあなどることば。＝謾言。

【慢藏】くらの戶じまりをおこたる。易、繫辭「一一誨盜、治容誨一淫」

【慢心】おごりたかぶる心。詩、蕩「記一一、自高陵、彼」

【慢世】世におごりてつつしまず。

【慢】マン　寒　諫或には漫・謾

○おこたる、なまける（惰）「怠一」「惰一」○ゆるし、おそし（遲）詩、鄭風「叔馬一忌」叔は人名、忌は助字。○わがまま、

心部（十二畫）憮・憲・憑・憤・憧・憬・憭・憮・憩・憊・憐・憫・憔・

【憑】ヒョウ　圜　○頁に通じて馮に作る。憑は俗字。○よる（依）よりかかる。書「顧命「一二玉几」」○たのむ（託）○たたよる、よりたのむ（賴）○たたる（祟）はかす、のりうつる。「狐一」陸游詩「俄若有物一」○ふつ（憑）○きかんなり（盛）○おほいなり（大）○あかし、よりどころ（證據）「文一」「一照」○今は官府のかきつけ（官牒）

同副異義　憑・負・恃・賴の別は負（貝部二畫）の條を見よ。○馮・寄・凭・賴・據・仗・恃・依・藉の別は寄（宀部八畫）の條を見よ。

【憑依】イヒョウ　○よりたすく、よりかかる。○のりうつる。左傳「神所一一、將ノ在ル巫矣」

【憑据】キヒョウ　かかりつけてあやしきことを記す。王令詩「一一階蓮相樹立」

【憑倚】キヒョウ　多大の義、憑は滂、倚は大・なり。漢書郊祀相禪「倚憑一一」

【憑河】ヒョウ　かちにて河をわたる。詩經「下二泉一一」＝馮河。

【憑高】ヒョウ　高き處に臨む。杜莊詩「由來多盛美、一一」＝臨高。

【憑據】キヒョウ　正義にしたがひよる。後漢書、寇榮傳「假ノ仁以効ノ己、一ノ以濟ノ功」

【憑藉】ヒョウ　よりどころ。歐陽修詩「文章自古無一一」＝憑賴。

【憑肩】ヒョウ　互に親みてかたによりかかる。范成大詩「空記一一語」

【憑陵】ヒョウ　要害をたのみて據る。南史「一ノ作ノ守、兵食寡衆」

【憑恃】ヒョウ　よりたのむ。金史、蕭肆傳「一一恩澤、陵二藩同列」

【憑信】シン　たよりて信ずる。憑據し て信用する譏。宋史「以二蕃國譎詭、負可一一」

【憑賜】ヒョウ　よりどころ、賜はてらし合せて證する。＝憑據。

【憑證】ヒョウ　圜　使證狀。又、證書、單はかきつけ。

【憑弔】ヒョウ　古跡などに立ちよりて弔ふ。

【憑眺】ヒョウ　高き地に據りて遠方をながめる。張九齡詩「一一越賓ノ美」

【憑怒】ヒョウ　大いにいかる。左傳「今君喬、震雷一一」＝馮怒。

【憑憑】ヒョウ　盛んなる貌。李白詩「雲一一欲ノ向ノ怒」＝馮馮。

【憑欄】ヒョウ　てすりによりかかる。陳詩「憑ノ高何日一一」＝凭欄・倚欄。

【憑陵】ヒョウ　盛んなる勢をたのみて人に迫る。左襄二五「今二侍楚衆、以一一我敝邑」＝馮陵。

【憮】ブ　慶　○いつくしむ（愛）○なつく（愛撫）○失意の貌、ぼんやりとする貌。○あやしみおどろく（怪愕）

【憮然】ブ　○失意の貌。孟子「一一爲間曰、命ノ之矣」○驚く貌。論、敎子「夫子一一」

【憤】フン　○いかる、いきどほる、はらたつ、もだゆ（悶）自ら心をたてる、はげましてもだえる「感一」「激一」論、述而「不一不啓」○いきどほり「憤一」「發一」「公一」「忠一」「私一」○つむ（積）心むすぼれ積む氣充つ。

同副異義　憤・怒・忿・瞋・誌等の別は怒（心部五畫）の條を見よ。

【憤毒】フン　いきどほりいかる。後漢書「每ノ讀二張宋傳、未嘗不一一」

【憤懣】フン　いきどほりて心もだえる。詩「如何阻二行止、一一結二心胸」

【憤惋】エン　いきどほりうらむ。後漢書「書側ノ目一一」＝怨惋。

【發ノ憤忘ノ食】フンスルヲワスレテ　憤を發して食事から忘れる。論語、述而「子曰、其爲ノ人也、一一、樂以忘ノ憂、不ノ知二老之將一至一云爾」

【憤懣】フン　いきどほりなげく。晉書「不二術嘆一一交一懣」＝憤悶。

【憤悶】フン　いきどほりとなげきと。

【憤慨】フン　いきどほりて氣がはげしく立つ。後漢書、傅燮傳「一一思ノ常、未ノ失ノ人臣之節」

【憤厥】フン　のぼせるやまひ。列子「已二一一之矣」

【憤懣】フン　いきどほりふさぐ。五代史「軍臣一一、英京衆出ノ氣」＝憤滿。

【憤沮】フン　いきどほりはばむ。五代史、任圖傳「圖益一一」

【不ノ憤不ノ啓】フンセズンバ　いきどほりの心を發せざればひらき教へず、憤發の精神なき者には之を導きひらくことをせず。孔傳、述而。

【憤然】フン　いきどほる貌。

【憤滯】フン　たけりたつ怒。韓愈詩「一一氣俗盛、慢行消空廚」＝怒滯。

【憤激】フン　いきどほりなげく。吳志「士民一一、手下」

【憤怒】フン　いきどほりいかる。＝怒怒。

【憤發】フン　いきどほりいかる。＝憤怒。

【憤氣】フン　氣をふるひおこす。＝奮發・發憤。

【憤悱】ヒ　心の結ぼれて解けざる貌。禮、學記「心慎慎、口悱悱、然後啓ノ之」論語の解釋に見はるる義。論語、述而、朱注「憤者、心求未得之意、悱者、口欲ノ言而未ノ能之貌」述而「不ノ憤不ノ啓」

【憤惋】エン　いきどほりうらむ

者、――交定」

【應電】オウデン　し受けんをうける。（受驗）

【應酬】オウシウ　むくゆ、むくい。過應する。陳涉詩「老來高事盡――」＝應答酬酢。

【應身】オウシン　圖如來三身（法身・報身・――）の一、佛が衆生を濟度する爲め、物に應ひて種種の形を現じて法を說く。大乘法數「――者應二周萬物一化二治衆生一、圓二其心量一、現二種種身一」

【應眞】オウシン　圖阿羅漢をいふ。〔道山清話〕

【應鐘】オウシウ　十二律の一、陰曆十月に配す。禮、月令「孟冬之月、律中――」＝應鐘。

【應鳥】オウテウ　鳳凰の異名。〔裕物論〕

【應世】オウセイ　○世に應じて移り變ずる。公羊傳、注「――ノ――臨功新多」○世とともに周旋する義。

【應制】オウセイ　天子の命により詩文を作る。唐詩に其の例あり。＝應詔。

【應召】オウセウ　めしにしたがふ。元稹詩「――走二涌泉一、陪ノ游值二鹿輦一」

【應詔】オウセウ　天子のみことのりに應ずる。後漢文「論二詔於白虎之殿一、應二詔公卿之門一」

【應接】オウセツ　人をあひしらふ。面會してうけこたへすること。世說、言語「從二山陰道上一行、山川自相映發、使二人――」

【應話】オウワ　○應答話。

【應鐘】オウシウ　十二律の一、陰曆十月に配す。禮、月令「孟冬之月、律中――」＝應鐘。

【應鳥】オウテウ　鳳凰の異名。〔裕物論〕

【應世】オウセイ　○世に應じて移り變ずる。公羊傳、注「――ノ――臨功新多」○世とともに周旋する義。

【應制】オウセイ　天子の命により詩文を作る。唐詩に其の例あり。＝應詔。

【應召】オウセウ　めしにしたがふ。元稹詩「――走二涌泉一、陪ノ游值二鹿輦一」

【應詔】オウセウ　天子のみことのりに應ずる。後漢文「論二詔於白虎之殿一、應二詔公卿之門一」

【應接】オウセツ　人をあひしらふ。面會してうけこたへすること。世說、言語「從二山陰道上一行、山川自相映發、使二人――」

【應話】オウワ　○應答話。

【應答】オウタフ　うけこたへ。謝靈運詩「――如ノ響」

【應報】オウハウ　圖行の善惡に應じて來るむくい。「因果――」

【應符之祀】オウフノマツリ　天子となるべきしるし。後漢書、藺寬傳「大運漸除之祥、聖帝――也」

【應分】オウブン　身分に相應する。

【應聘】オウヘイ　めしに應じて官吏となる。劉孝綽詩「――思濟世」

【應變】オウヘン　物の變化に應ずる。管書、孫臏傳「臨機――」

【應瑞】オウヅイ　上のつのりに應ずる。漢書「張騫以ノ郎ノ――使月氏」

【應命】オウメイ　おほせにしたがふ。南史、虞寄傳「不ノ得ノ――」

【應門】オウモン　○宮城の正門。詩、大雅「迺立――――將將」○門番に應ずる。漢、來俊の取次をする者。李商隱、陳情表「內無――五尺之僮」

【應不ノ暇】オウヒマナシ　――應接するひまがない。山水の景色のすぐれて變化多き形容。前條參看。

【應聚】オウシウ　敬より集まれてたたかふ。

【應訴】オウソ　法律上、原告の提起したる訴訟に對して被告となる。

【應對】オウタイ　言語のうけこたへ。史記「出則接二賓客等、――――諸侯」＝應答・酬答。

【應諾】オウダク　うけがふ。＝應唯・承諾。

【應答】オウタフ　うけこたへ。謝靈運「商歌――――如ノ響」

【應報】オウハウ　圖行の善惡に應じて來るむくい。「因果――」

【應符之祀】オウフノマツリ　天子となるべきしるし。後漢書、藺寬傳「大運漸除之祥、聖帝――也」

【應分】オウブン　身分に相應する。

【應聘】オウヘイ　めしに應じて官吏となる。劉孝綽詩「――思濟世」

【應變】オウヘン　物の變化に應ずる。管書、孫臏傳「臨機――」

【應瑞】オウヅイ　上のつのりに應ずる。漢書「張騫以ノ郎ノ――使月氏」

【應命】オウメイ　おほせにしたがふ。南史、虞寄傳「不ノ得ノ――」

【應門】オウモン　○宮城の正門。詩、大雅「迺立――――將將」○門番に應ずる。漢、來俊の取次をする者。李商隱、陳情表「內無――五尺之僮」

【應用】オウヨウ　學理を實地にあてはめて用ふる。「――化學」

【應龍】オウリウ　翼あるたつ。〔廣雅〕王褒文「泥蟠而天飛者、――之前也」

【應和】オウワ　互にこたへあふ。白玉蟾詩「琴聲一奏、衆――後――」

【憶】オク　圖

○おもふ、おもひ（念・思）「追――」○おぼえる（記）「記――」

同訓異義　憶・思・懷・慕・念・想・惟・願の別は思（心部五畫）の條を見よ。

【憶鄉】オクキヤウ　曹鄴詩「遠水猶傳、――征人各――」＝懷鄉。

【憶想】オクサウ　おもふ、おもひ。唐庾詩「――田園日再徙、――年津只去年」

【懈】カイ　圖　作弛、解に作る。

○おこたる、なまける。○おこたり（怠）「怠――」

同訓異義　懈・怠・惰・慢の別は怠（心部五畫）の條を見よ。

【懈意】カイイ　なまけ。「未嘗以詩爲二自高一、而有――――惰容一也」

【懈怠】カイタイ　おこたり。むる。南史、宋彭城王傳「無ノ有――」

【懈惰】カイダ　おこたりて心ゆるぶ。于邵文「勤ノ身而不ノ怠、未嘗有――」

【懈】カイ　おこたる。法華經「汝等勤作、勿ノ得――」＝怠惰・解怠。

【懈怠】カイタイ　おこたり。「――――」＝怠惰・解怠。

【懈惰】カイダ　「災國風後、庶不――」

【懈慢】カイマン　おこたる。後漢書、楊震傳「――――」＝怠慢・惰慢。

【懈解】カイカイ　なまけ。李紹「風夜――」＝閒解。

【憾】カン　圖

○うらむ、うらみ（恨）「私――」「宿――」○ものたらず思ふ。中庸「人猶有ノ所ノ――」

同訓異義　憾・恨・恨・怨の別は怨（心部五畫）の條を見よ。

【憾恨】カンコン　うらみかこつ。「――――、深相留辭」

【憾怨】カンエン　うらむ。新論「天無ノ情二于生死一、則不ノ可二以ノ情而――――」

【憾惟】カンイ　うらみくやむ。管國語「義之所ノ在、身雖ノ死無二――――」＝恨惟。

【憾恨】カンコン　うらむ。＝怨恨。

【憾毒】カンドク　うらめしき毒。あやまちあり。＝恨毒。

【懃】キン　圖　も作る。勤

ねんごろ、丁寧、深切「慇――」

同訓異義　懃・慇・殷・丁寧・款・苦の別は慇（糸部）の條を見よ。

【懃懃】キンキン　ねんごろなる。「――――」

【懃切】キンセツ　ねんごろ。深切丁寧。鑑誡、高眞總公紀「忠意――」＝切實。

【懃親】キンシン　親切にしてあはれむ。宋書、詩「同ノ作其――、懷ノ賢增ノ謙柢」

【懃待】キンタイ　ねんごろなるもてなし。人のもてなしの敬稱。＝懃遇。

【懃到】キンタウ　ねんごろに十分行きとどく。唐書、陸贄傳「――深切」

【懃渡】キンタ　ねんごろにうちとけてはなす。＝懃話。

【懃篤】キントク　ねんごろにして手あつし。

【懃望】キンボウ　切なるのぞみ。＝切望・懃願。

【懃命】キンメイ　ねんごろなるおほせ。人より命ぜられし敬稱。

【懃篤】キントク　ねんごろなるさとし。＝懃敎。

【懃語】キンゴ　ねんごろなるはなし。＝懃談。

【懃】キン　圖　も作る。勤

ねんごろ、丁寧、深切「慇――」

同訓異義　懃・慇・殷・丁寧・款・苦の別は慇（糸部）の條を見よ。

【懃懃】キンキン　ねんごろなる。「――――」

【懃切】キンセツ　ねんごろ。深切丁寧。鑑誡、高眞總公紀「忠意――」＝切實。

【懃親】キンシン　親切にしてあはれむ。宋書、詩「同ノ作其――、懷ノ賢增ノ謙柢」

【懃待】キンタイ　ねんごろなるもてなし。人のもてなしの敬稱。＝懃遇。

【懃到】キンタウ　ねんごろに十分行きとどく。唐書、陸贄傳「――深切」

【懃渡】キンタ　ねんごろにうちとけてはなす。＝懃話。

【懃篤】キントク　ねんごろにして手あつし。

【懃望】キンボウ　切なるのぞみ。＝切望・懃願。

【懃命】キンメイ　ねんごろなるおほせ。人より命ぜられし敬稱。

【懃敎】キンケウ

心部（十四―十六畫）　懆・懼・懷・懾・懺・懼・懼・懼

【懿】懿（心部十八畫）に同じ。

【懷】ワイ　圍

○おもひ、おもふ（念思）論、里仁「君子一一德」○なつく、なつき、きたす（來）なつき歸す。書、大禹謨「黎民一之」○いだく（抱）ふところにす。○をさむ、かくす（藏）論、陽貨「一其寶而迷其邦」○いたむ（傷）○ふくさむ（慰）○いたる（至）○ふところ（止）○ふところ。論、陽貨「子生三年、然後免於父母之一」○かぬ、つつむ（包）書、堯典「一山襄陵」○こころ（心）むね（胸）「一胸」「孤一」「中一」韓愈文「導能無介于一乎」

同音 懷・懷・懷・

【懸鶉】ケンジュン　やぶれ衣。荷、大略「子夏貧、衣若ニ懸鶉一」＝懸鶉・懸衣。

【懸旌】ケンイン　かけたる旗、心の動きて定まらざるに喩ふ。戰國策「心搖搖如ニ懸一旌一、而無所ニ終薄一」

【懸絕】ケンゼツ　懸水が遠くだたる。易繫、注「重僅一、故水流至也」＝懸隔・絕異。

【懸泉】ケンセン　たき。柳宗元、詩「一一懸成ル練」＝懸泉・飛泉・瀑布。

【懸瀑】ケンバク　たき、瀑は水流の音あるもの。沈約、詩「百丈注ニ一一」

【懸瀉】ケンシャ　つり下げたることしかけ。容を敬ひて待遇する義。庾信、詩「倒ル屣迎ニ一一、俟ル琴聲一解顏」

【懸瀑】ケンバク　たき。水瀑、注「一一瀑注、崩浪裂ル山」＝懸瀑。

【懸眉】ケンビ　郭人、魯の魯公の兒を魚門に懸けて時かしめたる故事によりて敵を辱かしむるにいふ。左傳「非陳之罪、郭人懸ニ公眉一」懸・論語魚門「」

【懸注】ケンチュウ　水が高き所より流れおつ。水經、注「石泉一一」

【懸梯】ケンテイ　はしご。南史「張綱修ニ攻具一、或ニ設ニ飛樓一一、木幔板屋」

【懸瀑】ケンバク　かかりたるふぢ。宋之問、文「落花覆ル沼、一一帶ル砌」＝垂藤。

【懸旌】ケンセイ　○垂れさがりし旗。○轉じて、心のうつとまりて定らざるに喩ふ。杜牧、詩「我心一一正搖搖」懸・旌・參看。

【懸沿】ケンエン　注だしくかけはなれて多き。張説、詩「知知魯衛間、便覺相懸沿」

【懸鶉】ケンジュン　やぶれ衣。荷、大略「子夏貧、衣若ニ懸鶉一」＝懸鶉・懸衣。

【懸注】ケンチュウ

「悚」

【戀】レン　霰

こひ。こふ。愛―。思―。―した。ふ。（豪）後漢書、姜肱傳「兄弟相―」

【戀愛】ファン　男女のこひ。相思。＝愛戀。

【戀慕】シン　めぐみに心をひかされる。

【戀泣】ラン　したひなく。北史「冠州人、迫隨――者數百里」

【戀闕】ケン　宮闕をこひ慕ふ。君を忘れざる義。韓愈詩「朝陽雨去倍長沙、―ノ―那輝更憐ノ家」

【戀情】ジョウ　こひしたふこころ。王粲詩「誰能無―――」

【戀沈】シン　風して起きるにものうき義。曉菱浩詩「―――慶多夢」

【戀著】チャク　こひ慕ふ心が執著する。深くこひこがれる。河欲經「女色者世間之輔樓、凡夫――、不ノ能ニ自捨」

【戀惑】ワク　男女がこひしたふ。王維詩「園中空―――」

【戀戀】レン　心にしたひ慕ふ貌。依リ戀ひて見捨てざる義。史、范雎傳「綿綿―――有ニ故人之意ニ」

【戀歌】カ　國　戀愛の情を述べし和歌。

【懼】ク　麌　十二畫

〇おどろく（驚）〇あわてふる（連視）

【懼然】ゼン　驚きあわてる貌。史、晏嬰傳「晏子―――攝ニ衣冠ニ謝」＝懼然。

【戀】レン　霰　十四畫

戀（次條）の俗字。

【戇】ダウ　江　十四畫

同戇に

〇おろか（愚）ばかし。うぶき（愚直）「―愚」〇いつこく（剛直）史、汲黯傳「丞相汲黯之―也」

【戇狂】キャウ　おろかにしてくるふ。韓愈文「余戇而狂」

【戇愚】グ　ばか正直。韓愈、潮州刺史謝上表「臣以ニ狂愚―、不ノ識ニ禮度ニ」

【戇直】チク　ばかしもうちき。漢書、汲黯傳「汲黯爲ノ人、―――好直諫」

【戇朴】ボク　おろかにしてかざりなし。

【戇愚】グ　「―――子小子―――、必不ノ能ノ濟」

【戇笑】ショウ　おろか。呂晦文「―――、所賦忠朴」＝戇愚。

戈部

【戈】クワ　歌

〇ほこ（戟）古の兵器、枝の旁に出せる兩刃の劍を長き柄の先につけたるもの。單枝ならざるを戟と爲し、雙枝なるを戟と爲す。後漢書「任城何休好ニ公羊學ニ、著ニ公羊墨守・左氏膏肓・穀梁廢疾・康成乃發ニ墨守ニ、誠齊肓」曰、康成入ニ吾室ニ、操ニ吾矛ニ―以伐ニ吾乎ニ」〇いくさ、たたかひ（戰）「干―」「兵―」「樞―」「解―」「吳志「止―興ノ仁」

【倒戈】タウ　味方にやいばを向ける。うらぎりする。書、武成「前徒―ノ―、攻ニ于後ニ以北」

【止戈】シ　兵亂を治め止めるの字を分てば戈・止となる。故に戈を止めるを武の本義とす。左、宣十二「楚子曰、―ノ―爲ニ武」

【戈戈】コク　ほこ。劉琨詩「五載橫ニ―――」

【戈甲】コウ　ほこと、たてと。詩經、詩「我兵、―――ヲ敝之頻」＝甲戈。

【戈殺】サツ　ほこと、をのと。西陽雜俎「拜ニ―――而舞不ノ止」

【戈船】セン　樓船などの名をふせぐ爲めに船の底の下面にほこを施せる船。一解に戈を載せし船をいふ。漢書、孝武紀「―――將軍」

【戈矢】シ　武器。易經「爲ノ日、爲ノ電、爲ニ中女、爲ニ甲胄、爲ニ―――」

【戈矛】ボウ　ほこ、矛は枝のなきほこ。詩經「修ニ我―――、與ノ子同仇」

【戈殺】サツ　ほこさき。陳月書「―ノ矢―ニ殺盡、駐ノ日沼ニ―――」

【歷戈】レキカ　ほこをふすの義。戰をやめる義。陳彭年、大業頌「不ノ解ニ手位、倍乃―ノ―」＝歷矛・歷甲・歷武。

【戈壁】ヒ　蒙古にて沙漠の稱。

【戉】ヲツ　月　一畫

今作は鉞に

まさかり。儀仗に用ふる大いなる斧。

【戊】モボ　宥　一畫

〇つちのえ、十干の第五位。方角にては中央、五行にては土に屬す。＝著雍。〇しけりさかんなり。茂盛。

【戍】ジュ　國　三畫

〇まもる。まもり（守）干戈を持ちて國境を守る。又、其の守備兵。征―。「屯―」〇とどむ（遏）〇守備兵を屯せしむる兵卒。

〇おどろく（驚）〇あわてふる（連視）

【戍然】ゼン　驚きあわてる貌。史、晏嬰傳「晏子―――攝ニ衣冠ニ謝」＝戍然。

甘　一畫

【甚】ジン　寢　四畫

甚（次條）の俗字。

【甚】ジン　寢　四畫

〇はなはだ。こと。甚だ。甚だしき。〇ほこと。

【甚大】ダイ　ほこと。

【甚甚】ジン　ほこと。

【甚甚】ジン　ほこと。

【甚甚】ジン

執」

同【我慢】ガマン 我に愛著する心。四煩惱の一。他愛の對。

【我意】ガイ 己のかんがへ、わがまま。＝私意。

【我見】ケン 圖七見の一、自分勝手のかんがへ、己の私見に執著する謬見。

【我執】ガシフ 圖かたいじ、我意を張る。

【我的】ガテキ 圖私のの。

【我田引水】ガデンインスイ わが田に水をひき入れる、自分勝手のことをする。

【我慢】ガマン 自己をいふ。他人を指して渾慢といふのみ。宋陸詩「一一日溯到嚴慢」己邑州」

【我慢】ガマン 〇圖七慢の一、自らを特みて他人をしのぐ。四十二章經「除滅一一種」＝自慢。〇轉じて、我意を張るにいふ。かたいじ。

＝我執。〇圖こゝらしのぶ。

【我們】ガモン 圖わたくしども。＝我輩・我等。

【我聞】ガモン 圖我はきゝたり「如是一」

【我欲】ガヨク よくばり。＝我利。

【我利】ガリ 自分ばかりの利益。＝我欲。

【我流】ガリウ 圖自分がつてに定めたる流儀。＝自己流。

【我所思兮】ドコロモヒカネ 我が心に思ふところ、兮は助辭。張衡四愁詩「一一在二太山一」

【我后】我后衆其蘇】ガコウシウキソ 民が仁者の君の來るを喜ぶ能。孟、梁惠王「誅二其君一而弔二其民一、若二時雨一降、民大悅、書曰、「一一」、徯二我后一、后來其蘇」

【我心匪石不可轉】ワシンヒセキフカテン 石は轉ずべきも、我が心は堅確にして動かすべからず。詩、邶風、柏舟「一一也、我心匪席、不可卷也」

【我心】我心自行】ワシンジコウ 他人の爲したる言行が自分の意思と符合して喜ばしく思ふ。詩、邶風「我思二古人一、實一一」

【我心如秤】ワシンジヨシ 心公平無私なるをいふ。梅堯臣集「謝孔明詩云、「一一、不二能三爲一人作二秤昂一」」＝秤心。

【我曹】ワソウ わがともがら。後漢詩「一一遠迷沽世客」＝我輩。

【我輩】ワハイ われら。陸游詩「少舒一一胸中氣、一二絳霄見分外愁」＝我曹。

【我武惟揚】ガブイヨウ 我が國の武威が盛んになる。書、泰誓「一一、侵二于之疆」

【我儘】ワガマヽ 圖かつて、きまま。＝放肆。

【我見猶憐】ケンユウレン なほ愛すべき心地する。世說「晉桓溫納二秦勢女一爲妾、其妻徐三往殺、見二女發鬼髻、乃寧愛、見之及、至、見二女發鬼髻一、乃寧愛、之日、「一一、何況老奴」」

【自ノ我作ノ古】ジガサクコ 古諺に掘らず、自ら被害となるべき禍を作り出す。宋史、禮志「奉宗欲ノ不ノ用二易月之制一、目、「一一何害」」

【自ノ我得ノ之自ノ我失ノ之】ジガトクシジガシツ 己の得たるものを己が失ふなれば、恨む所なし（史、魏其武安侯傳）

【我忘吾】ワボウゴ 心がうつとりとして、己の存在に氣附かず。嵇康詩「「遊惟主忘吾、今我亦忘吾」」

【戒】カイ 圖

〇いましめ「古一」「法一」「明一」「遺一」〇いましむ、氣をつける（警）「警一」「勸一」「誡一」「儆一」〇つゝ（告）いひつける（命）孟、梁惠王「大一二於國」〇つつしむ（慎）「慎一」〇禁止する「五一」「一酒」「一殺」〇そなふ、そふ

〇いましめ。おきて。周禮「掌二其政教與二其一一」〇圖一切の惡を戒めて制止する。

【戒行】カイギヤウ 圖僧尼が戒律を守る修行

【戒案】カイアン 〇いましめ。おきて。周禮「掌二其政教與二其一一」〇圖一切の惡を戒めて制止する。

【戒行】カイギヤウ 圖僧尼が戒律を守る修行

【戒法】カイホウ 圖戒法を授くる式場。釋門事物紀原「漢魏之僧雖二剃染一、而戒法未ノ備、唯受二三歸、嘉平正元中既立二一一之始也」

【戒衣】カイエ 圖山伏などの持つる。＝鍋袈裟。

【戒定慧】カイヂヤウエ 圖戒律・禪定・智慧の略稱。法華經「得二是戒・禪・智・慧、如ノ是一一陀羅尼三昧四禪諸考、即是也」

【戒勅】カイチヨク いましめる、氣をつけさせる。北史、薛綽傳「每ノ至二識首一、必二一一部人一」＝戒飭。

【戒飭】カイチヨク いましめとのふ。宋史、典禮「一一將士、固守二封疆一」

【戒牒】カイテフ 僧尼が戒を受けし證牒。＝度牒。

【戒名】カイミヤウ 〇圖戒法を受けたる後につくる名。＝法號。〇死後につくる名。＝法名。

【戒文】カイモン 圖戒律の條文。

【戒力】カイリキ 圖戒律を持して得たる功德力。

【戒律】カイリツ 圖戒と律と。僧尼の守るべき規則。「翻譯名義集」「以二魏嘉平・三至隋開皇・立二唐長受法一、中夏一一始也」

【成】セイ ジヤウ 庚

〇ふる、なす（說）「作一」「落一」〇をはる（畢）功を卒り業成る。に

へ（具備）患を防ぐ。〇もものいふ（爲）「諫一」もの、いふすゝる。〇ものもる（守）〇文體の名。蔵の類。文體明辯「挾、字書云、「一者、警敕之辭、字本作、誡」「戒」「一」〇ものさかひ。「書、天文志」「江河爲二南北一一」＝界。〇圖佛法上のいましめ「五一」「一律」

同【戒・誡・警・敕・儆・敕】 〇戒は誡と音義通ず、但し戒は、此の言を忘るなく、此の禍を去るなと、何か目當ありて、きつとこれをかくせよと命ずるなり。論語「戒之在ノ色」〇誡は警敕之辭、曰ノ誡と註す、必ずしも目當の有無を問はず、用ノ心をさするに用ふ。易經「小慎而大誡、此小人之福也」〇警は目をさましし驚かす意、警ノ夜は、とまはりして人ノ人に氣をつけさす。歐文「自ノ敕ノ誡而復警」〇儆は警と通ず。〇儆は戒飭なり。玉篇に「儆者謹齊之意」若二儆之狼一、狼、故名ノ儆」とあり、新にて禍をなほす如く、意度人を いましめ、惡しきを正すなり、意言・意識と熟す。〇敕は管・戒の意を兼ね、物また知に作る、飭と通用す。

【成案】セイアン 圖一切の惡を戒め制止する。

【成行】セイギヤウ 圖僧尼が戒律を守る修行

【成就】ジヤウシユ 圖事物紀原「漢魏之僧雖二剃染一、而戒法未ノ備、唯受二三歸、嘉平正元中既立二一一之始也」

【成佛】ジヤウブツ 〇圖衆生が發心修行して

樂の一終する、を一一といふ。書、益稷「簫韶九一」〇たひら（平）和解す、和睦する。左、文七「惠伯一之」〇たひらぎ、和睦。詩、大雅「虞芮質二厥成一」〇よし（善）〇かならず（必）呉語「勝未可一」〇あはす（併）〇かさぬ（重）〇さかんなり（盛）呂覽、先己「松柏一而塗之人已蔭矣」〇なる、爲るに同じ。劉希夷詩「更聞桑田變一海」〇の（品式）〇十の數に充つる。又、計數にて十分のヒを七一、十分の八を八一といふ。圖の七の制、八割の制に當る。〇方十里の地。左傳「田有二一一」

同【成・爲・就・濟・作】 成・爲・就・濟・作の別は爲（爪部八畫）の條を見よ。

【成劫】ジヤウコフ 圖四劫の一、世界が出來あがりて人類の生殖する時代。

【成實宗】ジヤウジツシユウ 圖佛教の一派、訶梨跋摩の成實論に本づきて立つ、我國にては南都の倶舍・昭に始まる。

【成就】ジヤウシユウ 出來あがる、なしとげる。史、呂后紀「五年六年一一」

【成道】ジヤウダウ 圖さとりをひらく、佛道を會得する。成佛得道。

【成佛】ジヤウブツ 〇圖衆生が發心修行して

さとりを開き佛果を成就する。〇

【成佛】ジヤウブツ 圖死ぬ、往生する。

【成業】ジヤウゲフ 業行の出來るやうに立てたるみち。又、出來あがりしみつもり。

【成衣】ジヤウイ 圖衣服を仕立てる。淮南子「夫纖而後ノ織、不ノ可二以一一一」に本づく。＝裁衣。

【成胥】ジヤウシヨ そだてて大きくする。王褒、四子講德論「胎卵得二以一一、草木榮二主等夜一」＝成長・育成。

【成戒】ジヤウカイ 動かすべからざるいましめ。魏志、荀彧傳「武、古有二一一」

【成就】ジヤウシユウ 事物の功業を見る譬。

【成規】ジヤウキ 〇きまりを成す規定。莊、田子方「書之見ノ我者、遣遣一一ノ一一成ノ規」〇正圖のかたちをなす。周禮「天子之見、令ノ九而一一」

【成器】ジヤウキ よきうつは。禮、王制「錦文珠玉一一、不ノ鬻二於市一」＝業器。

【成均】ジヤウキン 成就してよくとゝのくる。轉じて古の大學の名。周禮、春官「大司樂、掌二一一之法、以治二建國之學政一」

【成句】ジヤウク 出來あがりたる句、前人のつくりおきたる句。

【成蹊】ジヤウケイ 美くしき桃李の下には、人來りて自らこゝみちが出來る、德ある人は沈默して居ても、人自ら之に歸する。史、李廣傳「諺曰、「桃李不ノ言、下自ノ一一」、此言雖ノ小、可二以喻一大也」

【成業】先王の法績。書、説命「監二于先王一、其永無レ愆」

【成績】仕事をなしとげる。史、貨殖傳「邯鄲郭縱以二鐵冶一、致レ千」

【成語】完全にまとまりしことば。＝熟語。

【成功】○事業を成し遂げること。「きがり。論、秦伯「繼過手其有二一一也」○秋の穀。左傳「三務レ一レ」＝成敗。

【成功之下不レ可二以久處一】功成りて退かざれば、怨を受け禍を招くに至る。史、蔡澤傳「書曰、――」

【成國】大國。左傳「――不レ過レ千二天子之氣一」

【成婚】男女の緣組をいう。＝成昏〔左傳〕

【成就】○事を成就せしむるはかりごと。○己に成立せしはかりごと。

【成算】なし遂ぐるみこみ。王建詩「經二略江淮一有二――一」

【成事】○事をしとげる。史、酷吏紀「鉤考固多二大言一、少二――一」○已に出來上りたる事。論、八佾「――不レ諫」

【成周】三代の時の周の美稱。又、其の都なる洛邑の稱。賈誼「以二一一之衆一、命二魯公一」

【成人】○人德の完き人。論、憲問「子路問二――一」＝全人。○二十歲以上の人、一人前になる。若謙、絕交書「男子八歲、未レ及二――一」

【成章】あやをなす、文理の成就する義。論、公冶長「狂而不直、侗而不――」

【成熟】○十分にみのる。方岳詩「江鄉十月稻――」○學識などが十分に出來あがる。

【成遂】なしとげる。文子「不レ能不レ愛、不レ能二――一」

【成績】いきを、できばえ。績は功。書經「萬邦咸――、惟王有二――一」

【成竹】事を爲すに當りて先づ其の計畫を立てる。蘇軾、復盛谷龍竹記「靈レ竹、必先得二――一于胸中一、執レ筆然後、乃見二其欲レ畫者一、急起從之、環レ筆筆直逝、以追二其所見一、少縱則逝矣」

【成長】おひたち。＝成育。

【成蟲】見蟲が仔蟲より變遷して親蟲と同じ形になりしもの。幼蟲の對。

【成丁】二十歲以上の壯者。北史、齊文帝紀「人以二十一レ成」＝成人。

【成都】四川省の首邑、三國の蜀漢の都、唐李宗蜀に幸し、建てて西京と爲す。

【成童】十五歲以上の少年。禮、內則「――舞レ象、學二射御一」

【成德】德を成就す。又、成就せしとく。易經「君子以――、――爲レ行」

【成年】二十歲以上の齡、成人となりし年齡。

【成敗】○なること、やぶれること。勝つと負けること。史、高祖紀「天下匈匈數歲者、――未レ可レ知」○國政をとり行ふ。又、しおき。處罰。「嗤嘲――」

【成否】事の成ると成らざると。書經、說命「三年一問天道成、人亦可二以成一、故以三年考二其功之――」＝成敗。

【成美】人をほめ、勸めて美德を成さしむ。論、顏淵「子曰、君子成二人之美一、不レ成二人之惡一、小人反レ之」

【成鳳】人に詩文の添削を乞ふこと。北史、徐無鬼傳「郢人運二斤成風一、聽而斲之、盡レ堊而鼻不レ傷、郢人立不レ失レ容」とあるに本づく。＝郢斧・郢正。

【成分】物體を組織する原質。

【成文】書きあらはして文を成す。

【成文法律】すでに法文となれる法律規則。不文律の對。＝成文法。

【成名】名譽をなしとげる。易經「善不レ積、名不二足一以――」

【成立】○なりたつ、なりたち。柳氏家訓「――之業、如升天、覆漏之易如決レ水」○成就する。後漢書、鄧禹傳「雖レ建二灌郫之功一、猶恐無所――」

【成就】みちる、つづきあひ。又、成里に同じ。劉禹錫詩「軍容漸――」

【成層】帝紀「宗室――、國之枝葉」＝成族。

【成夫人】漢の高祖の寵妾、趙王如意を生む。後に呂后の爲めに殺さる、其の耳目手足を去り、名つけて人彘といふ。

【成錯】をのと、まさかりと。詩、大雅「干戈――、爰方啓行」＝斧鉞。

【成里】天子の母方の親戚の居る所。轉じて外戚の謙とす。史、高石君傳「使二其家長安中――、以三姻爲二美人一也」

【成促】せまりて急なり、度量が狹く小なり。李白詩「蟲聲空迫、雪計何――」

【成速】せまりてはやし。＝急速・成促。

八畫

【戛】戛（前畫）の俗字。

【戟】ゲキ　俗字は戟

兩旁に枝の出たるほこ。「劍――」「矛――」。事物紀原「呂氏春秋云、蚩尤造五兵、――其一也」

【戟架】ほこをかくる具。唐書、柳渾仲郢傳「烏巢、弄平第、庭畑――皆滿五日乃敢」

【戟叉】さすまた。後漢書、馮魴傳「施頭叉以――」

【戟楯】次條に同じ。宋史、奚擧志

【戟槊】ほこ。韓愈詩「衛門羅――」＝矛槊。

【戟手】怒罵する時、兩手をほこの如くに張る。一解ににぎりこぶしを打ちふる。左、哀二五「禧卿出、公孫載其手、忘斷而足」、蘇軾、式――而膏、人則人怒」

【戟盾】ほこと、たてと、盾は楯。漢書、李陵傳「前行持――、後行持弓弩」

【戟蹠】ほこのきっさき。談度文「霧劍鋒、――霧」

九畫

【戡】○○　チカン　俗字は堪

○かつ（勝・克）敵に勝ち亂をしづめる。○こらす（殺）○さす（刺）○とる（取）○すこしくきる（小斬）

同畫異讀　戡・勝・克・捷・籠の別は勝（力部十畫）の條を見よ。

【戡夷】たひらげしづめる、夷は平。賈誼、武帝謚「蠻――、猝三民于下」＝平定。

【戡難】國家の危難をたひらげさだめる。後漢書「氣志――――」

【戡定】亂に勝ちて亂を定める。

【戔戔】セン　淺小なる貌。易、賁卦「束帛――、賁于丘園」

戕　ショウ　俗字は戕

○こころす（殺）○そこなふ（殘）「――害」「――摧」

【戕害】こころす。＝殺害・戕賊。

【戕虐】そこなひしへたげる。唐書、史思明傳「――似二思明一」＝殘害。

【戕殺】こころす。金史、完顏伯嘉傳「――――無辜」

【戕賊】そこなひこころす。孟、告子「將下――――人一以爲上仁義上與」＝戕害・殘賊。

【戕害】こころす。＝殺戮。

【戕戮】こころす。＝殺戮。

七畫

戛　カツ　俗字は戛

○ほこ（戟）ながさほこ（長矛）○うつ（擊）樂器を輕くうつ。○する（擬）「解――」すりてなす。○――は、くびちがふ（劃頸）○のり（常禮）書、康誥「不率大――」○わら。秸稈に通ず。

【戛戛】○こしたしむ貌。韓愈、答二李翊一書「――乎其難哉」○相擊つこゑの形容。

【戛擊】音をさせて輕くうつ。賈――、賁于丘園」

【戛然】金石のうち合ふこゑの形容。

戚　ソク　俗字は戚

○○をの（斧）まさかり。孟、梁惠王「干戈――揚」○したしむ、うちし（親）○うち（親類）外戚「――」「親――」（六――は父母・兄・弟・妻・子）○いたむ（傷）かなしむ（哀）「――」「悲――」論、八佾「喪與其易也寧――」○うれへ（憂）いきどほる（憤）○とし（疾）せまる（促）＝蹙。

同訓異義　戚・悼・傷・痛・慼・悽等の別は悼（心部八畫）の條を見よ。

【戚碗】戚里に同じ。碗は田里。宋書、李延壽傳「幸――――之賞」

【戚施】○戚は蹙、施は彎、身を伸ばして仰ぎ見ること能はざる病。詩、鄘風、新臺「――不レ可レ使レ仰」＝佝僂。○轉じて醜惡の譬。詩、邶風、新臺「燕婉之求、得二此――――」

【戚戚】○したしむ貌。詩、大雅「――――兄弟」○うれひおそれる貌。論、述而「小人長――」○心の動く貌。孟、梁惠王「於二我心一有二――――焉」

【戛擊】「――――」鳴球二搏拊琴瑟一以詠」

【戛然】きっぱりとすること。江淹賦「――――」

【戛然】金石のうち合ふこゑの形容。

戴　タイ　俗字は戴

○いただく。易經「君子以――――爲レ行」

書、康王之誥「一一厥功」

【殺珍】サツチン　敵をほろぼしつくす。珍は絶。書書、惑眾聳聽記「乃是一一之要」＝殺絶。

【殘】ザン　夷

○ほこのたぐひ（戟屬）書、顧命「一人冕執銳」○孔子の子孫後三十八世、孔公誌銘「孔子之一」

【戟】シヤク　屬

○をさむ（藏）兵器を藏めら詩、周頌「載一干戈」○をさめる（斂）詩、小雅「鴛鴦在梁、戢其左翼」○あつむ、あつまる（聚）○とどむ、とどまる、やめる（止）左、隱四「兵猶火也、弗戢、將自焚也」戰を止めざれば卻りて自滅する。○かくれる（隱）

【戟羽】ウ　鳥がはねを收めて飛ばず。陶潛、歸鳥詩「翼翼歸鳥、一一寒林」＝戟翼。

【戟性】ショウ　をとめる。陶潛詩「飢寒一我心、一一守窮潮」

【戟藏】ゾウ　もさめつつむ、武器を藏して復た用ひず、戰爭をやめる義。詩、周頌「載戢干戈、載櫜弓矢」より出づ。

【戟兵】ヘイ　たたかひをやめる。左、隱四「兵猶火也、不戢將自焚」＝戟戈。

【戟翼】ヨク　鳥が羽ををさめて飛ばず、致仕して隱棲する。に喩ふ。郭璞詩「一一棲衡蓬」＝斂羽、戟翅。

【戟鑿潛鱗】シンリン　志を抱きて時を待つ。魚鳥の靜止するに喩ふ。晉書「一一、思屬風雲」

十　畫

【截】セツ　屑

○たつ（斷）「根一」「斷一」＝絕。○きる（切）○一然は物事の區別のはっきりとする鋭。○一一は結結ケツケツの鋭。書、秦誓「惟一一善論言」

同 副 截 截 截・斬・斫・剪・翦・切・伐の別は斬（斤部七畫）の條を見よ。○截・斷・絕・截・製・截の別條は斷（斤部十四畫）の條を見よ。

【截匣】ケツ　はきをきる。

【截記】「一一一部心、節ノ腎句孕」

【截斷】ダン　きりたつ。徐晃詩「流來天際水、一一世間塵」

【截肉】ニク　きりみ。又、にくをきる。後漢書「母常一一」

【截破】ハ　きりやぶる。謝宗可、雁陣詩「風脆一一湘烟闊」

【截髮】ハツ　かみをたちきる。＝斷髮。

十　畫

【戩】セン　霰

○つくす、つくす。詩、小雅「俾爾一一穀」天の福祿を受け盡さしむる。○轉じて一穀の二字に「戩亦香薦福祥也」○ことごとく（盡）○ほろぶ、ほろぼす（滅）書。

十　二　畫

【戭】エン　匿

○ながきやり（長槍）○人名。左、文十八「高陽氏有才子八人、蒼舒・隤敳・檮戭・大臨・尨降・庭堅・仲容・叔達」

【戮】リク　匿　に作に僇

○こらす（殺）罪人を刑し殺す。「刑一」書經「不用命、一於社」○さらしものにする（陳尸）かばねをさらしもの。「一其死者」○つつしむ（刑罰）論、公冶長「邦無道免於刑一」○おろかなり（癡行）○はづかしむ（辱）「一辱」○力をあはす。＝勠。○かりしめ、はぢ。＝僇

【戮辱】ジヨク　はづかしめ。

【戮笑】ショウ　はづかしめ笑はれる。戰國策、齊策「天下一一」

【戮穢】ワイ　こうすとむちうつ。懲戒「一一所施、必加於有罪」

【戮力】リキ　ちからをあはす。書、湯誥「聿求元聖、與ノ之一一」＝併力、勠力。

十　二　畫

【戲】ギ　戲（戈部十三畫）の俗字。

【戰】セン　霰

○たたかふ、たたかひ（鬬）「征一」「會一」「累一」「速一」「苦一」○凡一を勝負を較する者。背一と言ふ「酒一」「酒一」「筆一」「若一」○をののく（慄）法言、吾子「見之一」「動而一」おそれる（懼）「心一」○ふるふ「寒一」○ことよぐ。ゆれうごく。白居易詩「怯敵蒼茫一一」

同 鬬 鬩 鬨 戰・鬬・格・鬨○戰はたたかふ義。起記「漢王與項一」○鬬は勝をあらそふ義、帝國・格鬬などと用ふ。○格は鬩方よりつき合ふ義。周語の「穀洛二水鬩」の注に「二水格也」○鬨はときの聲をあげて戰爭に出でし同隊のなかま。

【戰友】ユウ　戰爭に出でし同隊のなかま。

【戰雲】ウン　○戰爭の始まらんとするくもゆき。又、戰爭のはげしきあり様、殺伐の氣の形容。

【戰役】エキ　戰のつとめ、戰爭。

【戰汗】カン　をののきてひやあせが出る。國手錄「戰慄一一淡ノ體」

【戰慄】リツ　もきめつつむ、武器を藏して復た用ひず、戰爭をやめる義。詩、周頌「載戢干戈、載櫜弓矢」より出づ。

【戰國】コク　○支那戰中のくに。史、蘇秦傳「凡天下一一七」○周の顯王よりの秦始皇の天下を統一せしまでの二百四年間の稱。○國足利氏の末、應仁・文明の亂より德川氏の初期に至る百餘年間の稱。

【戰國策】サク　三十三卷、撰者未詳。周の安王の世より秦の始皇に至るまでの事を國別に記す。

【戰國七雄】ユウ　韓・趙・魏・秦・燕・齊・楚。

【戰爭】ソウ　たたかふ、たたかひ。事物紀原「爲一一起ノ實際也」

【戰象】ゾウ　戰に用ふる象。海唐書、盧宗紀「獲一一兵械」＝鬬象。

【戰慄】リツ　いくさぶね。吳兼詩、東都書事「一一一」＝戰艦。

【戰士】シ　いくさびと、軍人。史、秦紀「招一一一、叫一功賞」＝鬬士・兵卒。

【戰史】シ　いくさの事實を記せし書。＝戰紀・戰記。

【戰死】シ　一一之責調」＝陣沒・戰沒・戰亡。

【戰時禁制品】セイ　公法上又は條約上、戰時に當りて交戰國に輸入を禁ずることを禁ずる物品。

【戰術】ジツ　戰爭の仕方、作戰の術策。＝戰法・用兵術。

【戰慄】ジツ　ふるひおそれる。晉書、羊祜傳「夙夜一一、以ノ衆爲ノ愛」＝震

【戰慄】ジツ　をのきおそれてすくむ。＝戰慄。

【戰勝】ショウ　戰法に同じ。

【戰色】シキ　をのきおそれる顏色。論語、鄉黨「勃如一一」

【戰慄】ジツ　たたかひてかつ。朝忠、詩「蒐苑傳「蒐在三南中、所在一一」＝戰慄。

【戰慄】ジツ　をのきおそれる。晉書、桓溫傳「當時聲有二威望一者、咸一一失ノ色」＝震慄・戰慄。

【戰船】セン　いくさぶね。晉書「作二一一、通二水道」

【戰線】セン　戰爭の行はれる區域。＝戰鬬線。

【戰慄】ジツ　おそれる貌。書、仲虺之誥「小大一一」

【戰戰兢兢】セン　戰慄はおそれる、兢兢は謹む。詩、小雅、小旻「一一、如ノ履二薄冰一」＝戰慄。

【戰慄慄慄】ジツ　ふるひおそれる。淮南子、人間訓、義淵「一一、日貧二日、人笑ノ之」於山頭、於埋」＝戰慄・戰戰慄慄。

【戰線】セン　たたかひのはじめ。戰爭の端緒。＝開戰。

【戰地】チ　たたかひの場所。孫子「先處一一一而待ノ敵者佚」＝戰場。

【戰智】チ　「張國賓、兵鑑國一ノ」

【戰陣】ジン　いくさのぢんだて。博奏論「求三之于一一、則非二孫吳之倫一也」＝戰陣。

【戰陣無ノ勇非ノ孝也】ムユウヒノコウナリ　戰爭に勇なければ名を損ず、故に不孝となる。晉書の語「論、崇義」

【戰慄】ジツ　いくさ場にたつもちりほこり、戰爭のさわぎに喩ふ。

【戰場】ジヨウ　たたかひの起れるばしよ。晉書、李雄傳「著ノ甲三古一一一文」＝戰地。

【戰鬪】トウ　たたかふ、たたかひ。品字篇「持ノ戈相向爲ノ戰、戰ノ鬪而前目ノ鬪、鬪ノ二字公羊、三手公羊、而佳二手私鬪」左昭「寡有二施舍一、怨有二一一」史、始皇紀「天下苦二一一不休」＝戰爭。

【戰鬪線】セン　いくさぶね、軍艦の中、最も有力にして海軍の主力となるもの。

【戰鬪力】リキ　戰爭に堪ゆる力。攻擊の實力。

【戰敗】ハイ　いくさ、いくさにまける。「一一國」

【戰亡】ボウ　たたかひにすること。「將士一一ノ衆」＝戰死・戰沒。

【戰袍】ホウ　古の陣羽織の類。又、戰場に著る衣服。本事詩「一一一提ノ手作、知落誰家」＝戰衣。

【戰慄】ジツ　とりどり、おんなや。謝靈運、城外「一一一」＝震慄。

【戰報】ホウ　戰のしらせ、戰況の報知。

【戰伐】バツ　たたかひうつ。史、趙奏秋「子若有力于一一、死二于議論」

【戰法】ホウ　たたかひの方法、兵士の坐

作遣退などのしかた〔周禮、注〕＝戰術。

【戰備】ビン　戰爭のそなへ、用意。淡書「行必備二―一、止必廢二營壁一」

【戰筆】ヒツ　ふでをふるはし。卿かして書く。俗書、隋の孫智子始めて此體を創むむ。

【戰怖】フシ　ふるひおそれる。魏志、管寧傳「不能二自申一、無レ地二自厝一。陛下思二愛之誼一、夙有二一一、無レ地二自厝一」＝戰慄。

【戰鋒】ホウ　たたかひのほこさき。淡書、淮陰侯傳「淡兵遂鬪、窮寇―一不レ可レ當也」＝軍鋒。

【戰役】ヒツ　水滸に同じ。

【戰死】シ　ちちじに。北史、竇泰傳「泰父兄―一」＝戰沒・戰死・陣亡。

【戰亂】ラン　いくさのみだれ。＝兵亂。

【戰栗】リツ　をののきおそれる。論、八佾「周人以レ栗曰、使二民―一―一」＝戰慄・戰慄。

【戰慄】リツ　をのきおそれる。＝戰栗。

【戰利】リ　ぶんどり品。戰に勝ちて分捕せし品物。＝鹵獲品。

【戰略】リヤク　いくさのはかりごと、作戰計畫。鄭敬文「習二起翻之兵書一、作用二圖謀之―一」

【戰役】ヤク　役より轉に戰を求める。左、立十二「趙旃請レ―レ―弗レ許」

【好戰】ヨウ　戰爭をすき好むこと。孟子、梁惠王「孟子對曰、王―レ―、請以レ戰喻」

【戰場】ジヤウ　戰の場。淡書、項籍傳「―一、無レ地二自厝一」＝戰場。

【戰鬪】トウ　たたかひ。淡書、淮陰侯傳「淡兵遂鬪、窮寇―一不レ可レ當也」＝軍鋒。

【戰役】ヒツ　水滸に同じ。

【戰死】シ　うちじに。北史、竇泰傳「泰父兄―一」＝戰沒・戰死・陣亡。

【戰亂】ラン　いくさのみだれ。＝兵亂。

【戰栗】リツ　をののきおそれる。論、八佾「周人以レ栗曰、使二民―一―一」＝戰慄・戰慄。

【戰慄】リツ　をのきおそれる。＝戰栗。

【戰利】リ　ぶんどり品。戰に勝ちて分捕せし品物。＝鹵獲品。

【戰略】リヤク　いくさのはかりごと、作戰計畫。鄭敬文「習二起翻之兵書一、作用二圖謀之―一」

【戰役】ヤク　役より轉に戰を求める。左、立十二「趙旃請レ―レ―弗レ許」

【好戰】ヨウ　戰爭をすき好むこと。孟子、梁惠王「孟子對曰、王―レ―、請以レ戰喻」

【戰慄】リツ　をのきおそれる。＝戰栗。

【戰利】リ　ぶんどり品。戰に勝ちて分捕せし品物。＝鹵獲品。

【戰略】リヤク　いくさのはかりごと、作戰計畫。鄭敬文「習二起翻之兵書一、作用二圖謀之―一」

【戰役】ヤク　役より轉に戰を求める。左、立十二「趙旃請レ―レ―弗レ許」

【戰鬪】トウ　たたかひ。淡書、淮陰侯傳「淡兵遂鬪、窮寇―一不レ可レ當也」＝軍鋒。

【戰役】ヒツ　水滸に同じ。

【戰死】シ　うちじに。北史、竇泰傳「泰父兄―一」＝戰沒・戰死・陣亡。

【戰亂】ラン　いくさのみだれ。＝兵亂。

【戰栗】リツ　をのきおそれる。論、八佾「周人以レ栗曰、使二民―一―一」＝戰慄・戰慄。

【戰慄】リツ　をのきおそれる。＝戰栗。

【戰利】リ　ぶんどり品。戰に勝ちて分捕せし品物。＝鹵獲品。

【戰略】リヤク　いくさのはかりごと、作戰計畫。鄭敬文「習二起翻之兵書一、作用二圖謀之―一」

【戰役】ヤク　役より轉に戰を求める。左、立十二「趙旃請レ―レ―弗レ許」

【好戰】ヨウ　戰爭をすき好むこと。孟子、梁惠王「孟子對曰、王―レ―、請以レ戰喻」

【戰場】ジヤウ　戰の場。淡書、項籍傳「―一、無レ地二自厝一」

【戰鬪】トウ　たたかひ。淡書、淮陰侯傳「淡兵遂鬪、窮寇―一不レ可レ當也」

【外戶而不出】トザシテ天下太平の象なり。禮、禮運「是故謀閉而不興、盜竊亂賊而不作、故戶而不閉、是謂天同」

【戶】戶（前條）の譌字。

一　畫

【厄】ヤク　圓　厄に厄通に厄ずれば、○ふやむ、なやみ（困）○困―困―史、季布傳「兩賢豈相厄哉」○わざはひ、災「―ともん」○せまる（迫）○くるしむ（困）

（小門）

四　畫

【戽】コ　圓　くむ（汲）

【戽斗】トコ　井中にて水を溜へる器（廣韻）

【所】ショ　圓　○ところ（處、攸）「住―」「屯―」「沿―」「行在―」○るる、らる、受身の詞。史、高祖紀「―殺蛇白帝子、殺者赤帝子」又、爲―所―と爲るるとも讀む。又、―連用す。史、項羽紀「爲―所―」

見と連用す。韓愈、潮州謝表「實―見推許」「動詞形容詞の上に添へて語勢を強むる助詞。論、八佾「君子無―爭」○誓の辭。論、雍也「予―否者」○ほど、ばかり（汗・程）漢書、張良傳「父去里―復還」

【所】ショ　圓　所・被・見の別は被（衣部五畫）の條を見よ。

【所以】ショイ　なすところ、ゆゑ、ゆゑん。中庸「博厚―載物也」

【所貪】ショタン　なすところ、しわざ。莊、盜

【所謂】ショイ　いふところ、いはゆる。大學「―誠―其意者、毋―自欺也」

【所由】ショユウ　○よるところ。○もとより。「子曰、視其所以、觀其―、察其所安、人焉廋哉、人焉廋哉」○居代、官物の出納を掌る官（通鑑、唐穆宗紀、注）

【所有】ショユウ　○持ちてある。○ありとある、有る限りの。

【所有權】ショユウケン　法律の範圍内に於て、自由に其の物の使用收益及處分をなすを得る權利。

【所要】ショヨウ　いりよう。又、いるだけの「―の金」

【所樂】ショラク　其の常樂するところ。樂は

【所在】ショザイ　○ところどころ。至る。後漢書、陳蕃傳「致今―赤子爲主者。＝所客。

【所感】ショカン　禮、儒行「――炬必讀」

【所期】ショキ　めあて、目的。南史、蔡約傳「今州―期待。

【所欲】ショヨク　○心に欲ひ望むところ。李嶠詩「丘壑信多美、櫻霞得―」○欲ひ敬ふ所の人。陸機詩「抗惟爲―」

【所行】ショコウ　おこなふところ、しわざ、ふるまひ。法苑珠林「―惡事」

【所懷】ショカイ　心に思ふところ。王令詩「南來日日訪―人、始得清詩副―」

【所管】ショカン　管理するところ、すべあつかふところ。

【所感】ショカン　己のなじみの人、私に感ずる人。古樂府「風吹竹震動、疑是―來」

【所化】ショケ　○佛法に感化せし者。法華經「如―是等大士輩光佛―」

【所樂】ショラク　○しわざ。＝所爲・所作。○樂ぶとするところ。陶潛詩「―在桑田」

【所見】ショケン　其の見るところ、みこみ。

【所作】ショサ　○しわざ。＝所爲。○圓かたちだのこなし、身ぶり「―」

【所在】ショザイ　○ところどころ、至る。後漢書、陳蕃傳「致今―赤子爲主者」

【所思】ショシ　おもふところ、おもひ。＝所懷。

【所信】ショシン　自分が心にたしかなりと思ふところ。

【所親】ショシン　したしき人。又、親切の人。杜甫詩「――鶴髮老夫妻、苦辛歲暮來」

【所所】ショショ　ところどころ。＝所在。

【所生】ショセイ　父母の義。詩、大雅、文王「貽――來」、無、柔爾―」、柔は孝。

【所謂】ショイ　つまるところ、解するところ。法苑珠林「所說法者、―義也、名句字者、能詮義也」

【所屬】ショゾク　其の從屬するところ。

【所存】ショゾン　○心に存するところ、即ちかんがへ、みこみ。

【所帶】ショタイ　○身におびるところのもの、即ち財產。○一家のくらし、生計。又、―家「―持」

【所持】ショジ　携へもつ所有すること。

【所天】ショテン　人の仰ぎ賴むもの、故に婦人、臣は君を指していふ。後漢書、

見と連用す。韓愈、潮州謝表「實―見推許」「動詞形容詞の上に添へて語勢を強むる助詞。論、八佾「君子無―爭」○誓の辭。論、雍也「予―否者」○ほど、ばかり（汗・程）漢書、張良傳「父去里―復還」

【所】ショ　圓　所・被・見の別は被（衣部五畫）の條を見よ。

【所以】ショイ　なすところ、ゆゑ、ゆゑん。中庸「博厚―載物也」

【所貪】ショタン　欠「世俗之―也」＝所作。

【所謂】ショイ　いふところ、いはゆる。大學「―誠―其意者、毋―自欺也」

【所由】ショユウ　○よるところ。○もとより。「子曰、視其所以、觀其―、察其所安、人焉廋哉、人焉廋哉」○居代、官物の出納を掌る官（通鑑、唐穆宗紀、注）

【所有】ショユウ　○持ちてある。○ありとある、有る限りの。

【所有權】ショユウケン　法律の範圍内に於て、自由に其の物の使用收益及處分をなすを得る權利。

【所要】ショヨウ　いりよう。又、いるだけの「―の金」

【所樂】ショラク　其の常樂するところ。樂は

【所在】ショザイ　○ところどころ。至る。後漢書、陳蕃傳「致今―赤子爲主者」

【所見】ショケン　其の見るところ、みこみ。

【所作】ショサ　○しわざ。＝所爲。○圓かたちだのこなし、身ぶり「―」

【所在】ショザイ　○ところどころ、至る。後漢書、陳蕃傳「致今―赤子爲主者」

【所感】ショカン　禮、儒行「―炬必讀」

【所期】ショキ　めあて、目的。南史、蔡約傳「今州―期待。

【所欲】ショヨク　○心に欲ひ望むところ。李嶠詩「丘壑信多美、櫻霞得―」○欲ひ敬ふ所の人。陸機詩「抗惟爲―」

【所行】ショコウ　おこなふところ、しわざ、ふるまひ。法苑珠林「―惡事」

【所懷】ショカイ　心に思ふところ。王令詩「南來日日訪―人、始得清詩副―」

【所管】ショカン　管理するところ、すべあつかふところ。

【所感】ショカン　己のなじみの人、私に感ずる人。古樂府「風吹竹震動、疑是―來」

【所化】ショケ　○佛法に感化せし者。法華經「如―是等大士輩光佛―」

【所樂】ショラク　○しわざ。＝所爲・所作。○樂ぶとするところ。陶潛詩「―在桑田

宇「一額」俗に匾に作る。○ひくし（弗）○ひらたし（平）厚みが少くして幅が廣い「一平」又圓き物をつぶした形「一圓」㊀ひらひさし（小）○こぶね「一舟」

扁部 扁は署なり、戸冊に从ふ。

【扁額】ヘンガク 門戸に掲げたる額。程史「吳山有二伍員祠一、廟宇頗壯、扁曰二都人敬一、金沿事之、有二盜民一、捐資爲二一一、金沿甚侈」

【扁倉】ヘンソウ 扁鵲と倉公と。共に春秋戰國時代の名醫。＝倉扁。

【扁舟】ヘンシュウ 一つぶね。史、貨殖傳「乃乘二一一、浮二于江湖一」

【扁鵲】ヘンジャク 春秋戰國時代の名醫、史記「一一倉公傳」あり。醫鑑論「一一不能肉白骨、微笑不能救二亡國一、微笑は、殷の微子、箕子。

【扁桃】ヘントウ からくるもの異名、李の一種。一名、あめんどう「酉陽雜俎」

【扁桃腺】ヘントウセン 口腔の奥の左右に一つ宛ある扁桃の形せし淋巴腺「一一炎」

【扁豆】ヘントウ 豆の一種、ふちまめの類。＝藊豆。

【扁柏】ヘンパク 檜の異名。

【扁平】ヘンペイ ひらたし。＝匾平。

【扁裹】ヘンカ 書、禹貢「民法式、者、沿一一事門、以嘱二委行」

【扁蘇】ヘンソ 蜆の異名。酉陽雜俎、劉蘇傳

「舒陝、域、以三文詩興、因呼之蜆爲二一一」

戸部

【戸】コ 戸 極 國

○絳を質となし、斧の形をぬひとりにせしついたて（屏風）高さ八尺、東西の戸扉の間に置く、古、天子の諸侯に對するも而の時、後方に立てて、南面せしも。禮、明堂位「天子斧一一南鄉而立」通じて依に作る。曲禮「天子當二依而立一」

【扉】ヒ 戸

扉は、とさし（戸扃）とびらの開くを止める鎖前。

【扇】セン 戸 國

○とびら（扉）「門一」「戸一」○うちは（簾）「涼一」「團一」「紈一」「羽一」古今注「舜作五明一」○あふぐ、あふりて風を吹き起こす。東觀漢記「黃香至孝、暑月則一枕、寒則身温二枕席一」＝婦。○國あふぎ、せんす。

【扇眼】センガン 國あふぎのかなめ。

【扇雪】センセツ 國あふぎのかなめ。うちは。揮麈後錄「令下人一一」

戸部

【扈】コ 戸 極 國

○絳を質となし、斧の形をぬひとりにせしついたて（屏風）高さ八尺、東西の戸扉の間に置く、古、天子の諸侯に對する時、後方に立てて、南面せしも。禮、明堂位「天子斧一一南鄉而立」通じて依に作る。曲禮「天子當二依而立一」

【扈】コ 戸

扈は、とさし（戸扃）とびらの開くを止める鎖前。

【扇】セン 戸 極

○とびら（扉）「門一」「戸一」○うちは（簾）「涼一」「團一」「紈一」「羽一」古今注「舜作五明一」○あふぐ、あふりて風を吹き起こす。東觀漢記「黃香至孝、暑月則一枕、寒則身温二枕席一」＝婦。○國あふぎ、せんす。

【扇眼】センガン 國あふぎのかなめ。

【扇雪】センセツ 國あふぎのかなめ。うちは。揮麈後錄「令下人一一」

手部

【手】シュ 手 有 ヌ一 音

○て、人體の上肢、臂、肘、腕、腕、掌、指の總稱。○たなごころ、「一束」のひら「唾一」「拍一」「拱一」○てづから、自分の手ですること「一植」「一書」○てに持つ。公羊、莊十二「一劍而從之」○てを加ふ、一にて擊つ。漢書、司馬相如傳「一一熊羆」○技藝に長ずる者の稱「名一」「武一」「老一」○或事をつとめる者の稱「能一」「技一」○笙の跡。漢書、郊祀志「天子識其一」「跡」國○て、とりて、器の柄「把一」○組合、仲間「新一」「軍勢」○てだて、術「奥の一」「角力の一」

【手押】シュオウ ○つめ印、拇印。○かきはん。＝華押。

【手下】シュカ てし、部下の兵。史、忘、大史、遷傳「先君一一兵數千餘人」

【手鏈】シュレン てかせ、罪人の手にはめて自由を束縛する具。＝手枷・梏。

【手絞】シュコウ てからの頸くくる。儲非子「束載而問之、則一一其夫二者也」

【手格】シュカク てうちにする。史、司馬「乃使三韓諸之倫一一此獸」

【手顧】シュコ 敬ひ仰ぐ。宋史、司馬光傳「衛士望見以手加額目、司馬相公也」＝額手。

【手筋】シュキン てがみ。老學菴筆記「浮梁

「東一」○てづから「唾一」「拍一」「拱一」「束一」のひら「唾一」「拍一」「拱一」○てづから、自分の手ですること「一植」「一書」○てに持つ。公羊、莊十二「一劍而從之」○てを加ふ、一にて擊つ。漢書、司馬相如傳「一一熊羆」○技藝に長ずる者の稱「名一」「武一」「老一」○或事をつとめる者の稱「能一」「技一」○笙の跡。漢書、郊祀志「天子識其一」「跡」國○て、とりて、器の柄「把一」○組合、仲間「新一」「軍勢」○てだて、術「奥の一」「角力の一」

【手押】シュオウ ○つめ印、拇印。○かきはん。＝華押。

【手下】シュカ てし、部下の兵。史、忘、大史、遷傳「先君一一兵數千餘人」

【手鏈】シュレン てかせ、罪人の手にはめて自由を束縛する具。＝手枷・梏。

【手絞】シュコウ てからの頸くくる。儲非子「束載而問之、則一一其夫二者也」

【手格】シュカク てうちにする。史、司馬「乃使三韓諸之倫一一此獸」

【手顧】シュコ 敬ひ仰ぐ。宋史、司馬光傳「衛士望見以手加額目、司馬相公也」＝額手。

【手筋】シュキン てがみ。老學菴筆記「浮梁

相來、朝廷以三小紙高四五寸、闊尺餘、謂二之一一一」＝手翰・書牘。

【手翰】シュカン てがみ。幹愈、再與二鄂州柳中丞一書「一一證答、錯增二忻慄」＝手簡・手札。

【手技】シュギ てにてする わざ。史、張安世傳「家童七百人、皆有一一一、作世業」＝手工・手藝。

【手記】シュキ ○てづからしるす。宋、蘇文「閩二人之善、必一一」＝手書。○ゆびわ。

【手巾】シュキン ○てぬぐひ。世說、排調「桓公見二左右一、取二一一一」○はんけち。＝手帕。

【手藝】シュゲイ ○てづから植ゑる。唐書「見弟廣慶、試一一、以相」藝一に藝に作る。＝手技・手術。○てわざの柳宗元、梓人傳「合二其一一、弟二其心智」＝手工。

【手劍】シュケン つるぎをにする。公羊傳「莊公覓、塤、曹子、一一而從之」

【手藝】シュゲイ まれにてはなしをする。唐朱揆叙小忘「生詔二一品、問二其姦、與之一一」＝手語。

【手工】シュコウ てにてする わざ。士工・金工・木工・朔鑪など。＝手藝・手技。

【手箱】シュハコ てばこ、てまはりの物を入れる小ばこ。手文庫。會典「漕金一一、驗乘手內一」

【手札】シュサツ てがみ。白居易詩「一一八行詩一篇」＝手翰。

【手冊】シュサツ 持ちあるきて事を筆記す

掌、指の總稱。○たなごころ、「束一」のひら「唾一」「拍一」「拱一」○てづから、自分の手ですること「一植」「一書」○てに持つ。公羊、莊十二「一劍而從之」○てを加ふ、一にて擊つ。漢書、司馬相如傳「一一熊羆」○技藝に長ずる者の稱「名一」「武一」「老一」○或事をつとめる者の稱「能一」「技一」○笙の跡。漢書、郊祀志「天子識其一」「跡」國○て、とりて、器の柄「把一」○組合、仲間「新一」「軍勢」○てだて、術「奥の一」「角力の一」

【手押】シュオウ ○つめ印、拇印。○かきはん。＝華押。

【手下】シュカ てし、部下の兵。史、忘、大史、遷傳「先君一一兵數千餘人」

【手鏈】シュレン てかせ、罪人の手にはめて自由を束縛する具。＝手枷・梏。

【手絞】シュコウ てからの頸くくる。儲非子「束載而問之、則一一其夫二者也」

【手格】シュカク てうちにする。史、司馬「乃使三韓諸之倫一一此獸」

【手顧】シュコ 敬ひ仰ぐ。宋史、司馬光傳「衛士望見以手加額目、司馬相公也」＝額手。

【手筋】シュキン てがみ。老學菴筆記「浮梁

相來、朝廷以三小紙高四五寸、闊尺餘、謂二之一一一」＝手翰・書牘。

【手翰】シュカン てがみ。幹愈、再與二鄂州柳中丞一書「一一證答、錯增二忻慄」＝手簡・手札。

【手技】シュギ てにてする わざ。史、張安世傳「家童七百人、皆有一一一、作世業」＝手工・手藝。

【手記】シュキ ○てづからしるす。宋、蘇文「閩二人之善、必一一」＝手書。○ゆびわ。

【手巾】シュキン ○てぬぐひ。世說、排調「桓公見二左右一、取二一一一」○はんけち。＝手帕。

【手藝】シュゲイ ○てづから植ゑる。唐書「見弟廣慶、試一一、以相」藝一に藝に作る。＝手技・手術。○てわざの柳宗元、梓人傳「合二其一一、弟二其心智」＝手工。

【手劍】シュケン つるぎをにする。公羊傳「莊公覓、塤、曹子、一一而從之」

【手藝】シュゲイ まれにてはなしをする。唐朱揆叙小忘「生詔二一品、問二其姦、與之一一」＝手語。

【手工】シュコウ てにてする わざ。士工・金工・木工・朔鑪など。＝手藝・手技。

【手箱】シュハコ てばこ、てまはりの物を入れる小ばこ。手文庫。會典「漕金一一、驗乘手內一」

【手札】シュサツ てがみ。白居易詩「一一八行詩一篇」＝手翰。

【手冊】シュサツ 持ちあるきて事を筆記す

【手流】シュリュウ 自ら筆を執りて筆跡する。史、項羽本紀「久未之一一一、漢之」

【手足】シュソク てあし。兄弟に喩ふ。李華、弔古戰場文「悲無二兄弟一、知之足如之手」

【手所】シュショ 指三手足一ショクソクあぶなく して身を置くの地なき意。國、手路「利刃不中、則民一一」

【皆三手足一】シュソクの身體を殷傷して孝道にそむくことなきを示す。曾子「吾子有之、啓伯「曾子有之、啓三手足一」

【手足異處】シュソクイショ 腰から二つに斬ちれる。史、孔子世家「有司加法焉」

【手足之愛】シュソクの 兄弟のいつくしみ。禮記「骨肉之恩、一一」、後漢書、蔡邕傳「兄弟者左右手也」

【若三手足之指二頭目一】ジュクソクシノ 民下の心を盛くして君をまもるに喩ふ。後書、刑法志「仁人在上、爲三下所仰、猶三手指之衛二頭目一」荀子には足を脣に作る。

【手套】シュトウ 國てぶくろ、手袋。

【手漬】シュシ てのうらはひてあか。禮、玉藻「父沒而不作、謂二父之書一、一存焉爾」

【手漬米】シュシ 生前愛讀せし書。

【手答】シュトウ てづから書きて答へる。晉書、陶侃傳「遠書疏、英不一一、筆翰加法」

【手段】ダン　てだて、しかた。てだん。事を處理する方法。史記「酒客心情難一酒兵、案借一一使」茶山に

【手談】ダン　碁をかこむ。書言故事「對坐無言、以手奕棊、故曰一一」

【手技】ギ　世說、巧藝「支道林以圍棊爲一一」

【手中】チュウ　てのうち、其の手。漢書、酷吏傳「戒手一一」

【手拜】ハイ　手、地に至り、頭其の上に在る。儀禮、士喪記「不一一一膝拜」

【手筋】スジ　てづから書きしかきつけ。元史、良吏傳「林興祖以一一一論」

【手帕】ハク　はんけちの類。後漢、何先達傳「袋囊縫」＝手巾。

【手掬】キク　○てづかみにする。孔叢子「常膳肉羹、一一一盃飲」＝手搏。○手にてづかみ合ふ、今の柔道。拳闘の類。正字通「一一兩人交拳、角勝負也」

【手板】ハン　笏をいふ。位階ある人の束帶の時に持つ板。文獻通考「笏、晉宋以來、謂之一一」、晉書、溫嶠傳「嶠因倚醉、以一一擊三風幘」＝手版。

【手寨】サイ　手遊に同じ。後漢書、趙壹傳

【手摩】マ　手を撫でる。周禮、注「人樂者一一」

【手朴】ボク　てをうつ。袁宏「一一目駭兮、載驚載歌於大澤」

【手鋏】キョウ　ことをてにする。幕客。「一一衣食三十年」

【手民】ミン　○大工をいふ。酒爽錄「木匠鋸鑿三通斤之法、又目一一一」○轉じて彫刻師・活版職工などをいふ。

【手容】ヨウ　手の作法。禮記「一一」

【手掬】キク　てのひらのすぢ。韓非子、龍傳「卜筮視一一一」＝手文。

【手裏劍】ダン　手に持ちて敵になげつはして殺す武器＝劍。

【手力】リキ　自分の手のはたらき。魏志、常林傳、注「少單貧、自一一一、不以最之子人」

【手令】レイ　てづから書きし命令。南史、沈攸之傳「得三太后一一、曰、國家之事、一以委公」

【手腕】ワン　○うで、かひな。晉書、浮宇傳「知乃以來書一一一」○俗に「うでまくり」、伐柄のあの義。

【手水】スイ　國○手をあらふみづ。○轉じて小便＝小水。

【手弄】ロウ　手遊に同じ。後漢書、趙壹傳

【手摩片頭】マヘンタウ　下の者の上を撫でるに喩ふ。荷子「下之事上也、若子之事父、弟之事兄、若下手摩之拊頭目、而覆之胸腹也」

【手形】ケイ　國○文書に押して後日のあかしとするかたち、おして、印。もと掌に墨を塗りて押したるが故の轉じて其の文書。＝券。○一定額を支拂ふべき有價證券、爲替等一一・約束一一・小切手の三種に分つ。＝商業票。

【手紙】シ　國ふみ。＝信書・書狀・書簡。

【手筒】ヅツ　○手を筒にして物を入れ、ものを入れて、手を抜くもの。

【手不釋卷】ケンクワン　學を勤めて倦まざるをいふ。華陽博議「司馬光童稚不釋卷、燕居暇亂雖不釋卷」

【手代】ダイ　國○徳川時代の商賈の召使。○商店の中間の者。○注律にて商業使用人の一、委任せられし事件につきて一切の權能を有する者。

【手附】ツケ　國買賣の契約を證ずる擔保として別手に交附する金。

【手摸汗】ボカン　はづかしくあやぶみ、おそれるにいふ。後漢書「元史、憲宗、召趙璧一問目、天下何如而治、對曰、誡先聖、立儲元不美者、憲宗不悅、璧退、世祖目秀才汝潛身都堂廳耶、衆亦爲汝捏一兩把汗」也」

【入手】ニウシュ　己の有に歸するをいふ。白居易詩「白髮生、頭邊、書卷一一一迎」

【陶手匕】トウシュヒ　卽時にはづかしがる。史、淮陰侯傳「亞令日死、公亦——」

【顔手】ガンシュ　手顔を見よ。

【反手】ハンシュ　事の極めて易きをいふ。孟、公孫丑「以齊王由一一一也」

【恨手】コンシュ　人の手をかる。晉、伊訓「天一一一手我」

【下手】ゲシュ　手を著ける。傳燈錄「懸藏翁一馬祖一日、若教汝甲自分、直是無一一一處」＝著手。

【拱手】キョウシュ　○兩手をこまぬく、人を敬ふ儀。曲禮「證三先生于道、趨而進、正立一一一」○何事もなさず、無爲なる形容。後漢書「天水龐四一一一自服」

【垂手過膝】ヒザ　兩手の長きをいふ。蜀志、常林傳、注「先主身長七尺五寸、垂一手下、膝、回顧自見其耳」

【束手】ソクシュ　手をつかねて用ひず、てだしをせぬ、轉じて抵抗せず。又、歸順する。晉書、杜預傳「所一一適城邑、莫不一一一」

【著手】チャクシュ　同じ。晉書、杜預傳「無夜一一一處也」＝下手。

【揮手】キシュ　別れを示すために、手を振る。史、滑稽傳「一一一問、游一目不一、美史能頷問相如傳「素王私樂、臣手一目、願結友」

【翻手作雲覆手雨】ヒラガヘシテクモトナシ　「人情の輕薄なる喩。杜甫、貧交行「一一紛紛輕薄爲何須數、君不見管鮑貧時交、此道今人棄如土」

【手形】ケイ　國○文書に押して後日のあかしとするかたち、おして、印。もと掌に墨を塗りて押したるが故の轉じて其の文書。＝券。○一定額を支拂ふべき有價證券、爲替等一一・約束一一・小切手の三種に分つ。＝商業票。

【手紙】シ　國ふみ。＝信書・書狀・書簡。

【手筒】ヅツ　○手を筒にして物を入れ、ものを入れて、手を抜くもの。

【手不釋卷】ケンクワン　學を勤めて倦まざるをいふ。華陽博議「司馬光童稚不釋卷、燕居暇亂雖不釋卷」

【手代】ダイ　國○徳川時代の商賈の召使。○商店の中間の者。○注律にて商業使用人の一、委任せられし事件につきて一切の權能を有する者。

【手附】ツケ　國買賣の契約を證ずる擔保として別手に交附する金。

【手摸汗】ボカン　はづかしくあやぶみ、おそれるにいふ。後漢書「元史、憲宗、召趙璧一問目、天下何如而治、對曰、誡先聖、立儲元不美者、憲宗不悅、璧退、世祖目秀才汝潛身都堂廳耶、衆亦爲汝捏一兩把汗」也」

【入手】ニウシュ　己の有に歸するをいふ。白居易詩「白髮生、頭邊、書卷一一一迎」

【陶手匕】トウシュヒ　卽時にはづかしがる。史、淮陰侯傳「亞令日死、公亦——」

【手段】ダン　てだて、しかた。てだん。事を處理する方法。史、梁詩「酒客心情難一酒兵、案借一一使」茶山に

【手談】ダン　碁をかこむ。書言故事「對坐無言、以手奕棊、故曰一一一」

【手技】ギ　世說、巧藝「支道林以圍棊爲一一」

【手中】チュウ　てのうち、其の手。漢書、酷吏傳「戒手一一」

【手拜】ハイ　手、地に至り、頭其の上に在る。儀禮、士喪記「不一一一膝拜」

【手筋】スジ　てづから書きしかきつけ。元史、良吏傳「林興祖以一一一論」

【手帕】ハク　はんけちの類。後漢、何先達傳「袋囊縫」＝手巾。

【手搏】ハク　○てうちにする。孔叢子「常膳肉羹、一一一盃飲」＝手格。○手にてうち合ふ、今の柔道・拳闘の類。正字通「一一兩人交拳、角勝負也」

【手板】ハン　笏をいふ。位階ある人の束帶の時に持つ板。文獻通考「笏、晉宋以來、謂之一一一」、晉書、溫嶠傳「嶠因倚醉、以一一擊三風幘」＝手版。

【手寨】サイ　手遊に同じ。後漢書、趙壹傳

【手摩】マ　てを撫でる。周禮、注「人樂者一一」

【手朴】ボク　てをうつ。袁宏「一一目駭兮、載驚載歌於大澤」

【手鋏】キョウ　ことをてにする。幕客。「一一衣食三十年」

【手民】ミン　○大工をいふ。酒爽錄「木匠鋸鑿三通斤之法、又目一一一」○轉じて彫刻師・活版職工などをいふ。

【手容】ヨウ　手の作法。禮記「一一」

【手裏劍】ダン　手のひらのすぢ。韓非子、龍傳「卜筮視一一一」＝手文。

【手裏劍】ダン　手に持ちて敵になげつはして殺す武器＝劍。

【手力】リキ　自分の手のはたらき。魏志、常林傳、注「少單貧、自一一一、不以最之子人」

【手令】レイ　てづから書きし命令。南史、沈攸之傳「得三太后一一、曰、國家之事、一以委公」

【手腕】ワン　○うで、かひな。晉書、浮宇傳「知乃以來書一一一」○俗に「うでまくり」、伐柄のあの義。

【手水】スイ　國○手をあらふみづ。○轉じて小便＝小水。

【手弄】ロウ　手遊に同じ。後漢書、趙壹傳

【手摩片頭】マヘンタウ　下の者の上を撫でるに喩ふ。荷子「下之事上也、若子之事父、弟之事兄、若下手摩之拊頭目、而覆之胸腹也」

【手形】ケイ　國○文書に押して後日のあかしとするかたち、おして、印。もと掌に墨を塗りて押したるが故の轉じて其の文書。＝券。○一定額を支拂ふべき有價證券、爲替等一一・約束一一・小切手の三種に分つ。＝商業票。

【手紙】シ　國ふみ。＝信書・書狀・書簡。

【手筒】ヅツ　○手を筒にして物を入れ、ものを入れて、手を抜くもの。

【手不釋卷】ケンクワン　學を勤めて倦まざるをいふ。華陽博議「司馬光童稚不釋卷、燕居暇亂雖不釋卷」

【手代】ダイ　國○徳川時代の商賈の召使。○商店の中間の者。○注律にて商業使用人の一、委任せられし事件につきて一切の權能を有する者。

【手附】ツケ　國買賣の契約を證ずる擔保として別手に交附する金。

【手摸汗】ボカン　はづかしくあやぶみ、おそれるにいふ。後漢書「元史、憲宗、召趙璧一問目、天下何如而治、對曰、誡先聖、立儲元不美者、憲宗不悅、璧退、世祖目秀才汝潛身都堂廳耶、衆亦爲汝捏一兩把汗」也」

【入手】ニウシュ　己の有に歸するをいふ。白居易詩「白髮生、頭邊、書卷一一一迎」

【陶手匕】トウシュヒ　卽時にはづかしがる。史、淮陰侯傳「亞令日死、公亦——」

【手】シュ　手（前條）に同じ。

字の偏になる時の形。國てへん（手偏）

【才】サイ　國　通古、材に通ず。

【手】シュ　手（前條）に同じ。

字の偏になる時の形。國てへん（手偏）

【才】サイ　國　通古、材に通ず。

【手】シュ　手（前條）に同じ。

字の偏になる時の形。國てへん（手偏）

【才】サイ　國　通古、材に通ず。

【手】シュ　手（前條）に同じ。

字の偏になる時の形。國てへん（手偏）

【才】サイ　國　通古、材に通ず。

【唾手】ダシュ　重き物など持ち上げる時、掌に唾をつける。轉じて、勇氣を起して。唾を易に事を爲すにいふ。後漢書、公孫瓚傳、注「始天下兵起、我謂一一可一決」

【手鞭而鈞而後多力】ムチウチテシカルノチタガヒテタリ　「忠難に處して勇氣のあらはるるをいふ。新論「一一、處難踐、忠、而後貴男出焉」

【信手】シンシュ　手の動くままにまかせる。信は任。白居易、琵琶行「低眉一一彈續續彈」

【手握王爵、口含天憲】ヲニギリテハクヲクチニフクミテ　寡權なる臣下の天子を左右して、國政を壟にし官吏の黜陟を爲すをいふ。後漢書、宦者傳」

【手自煎】ミヅカラ　自分で茶を煮る。蘇軾、荊茶歌「君不見昔時李生好客一一一」

【手拭】テフキ　國てふき。＝手巾。

【不知手之舞足之蹈】シラズシテテノマヒアシノフム　非常に歡ばしきにいふ。禮、樂記「嗟嗟乎、之蹈之不足、故不知手之舞之、足之蹈之手之舞之」

【寸】スン　手（前條）に同じ。

字の偏になる時の形。國てへん（手偏）

【才】サイ　國　通古、材に通ず。

【手】シュ　手（前條）に同じ。

字の偏になる時の形。國てへん（手偏）

【才】サイ　國　通古、材に通ず。

【手】シュ　手（前條）に同じ。

字の偏になる時の形。國てへん（手偏）

【才】サイ　國　通古、材に通ず。

【手】シュ　手（前條）に同じ。

字の偏になる時の形。國てへん（手偏）

【才】サイ　國　通古、材に通ず。

【唾手】ダシュ　重き物など持ち上げる時、掌に唾をつける。轉じて、勇氣を起して。唾を易に事を爲すにいふ。後漢書、公孫瓚傳、注「始天下兵起、我謂一一可一決」

【手鞭而鈞而後多力】ムチウチテシカルノチタガヒテタリ　「忠難に處して勇氣のあらはるるをいふ。新論「一一、處難踐、忠、而後貴男出焉」

【信手】シンシュ　手の動くままにまかせる。信は任。白居易、琵琶行「低眉一一彈續續彈」

【手握王爵、口含天憲】ヲニギリテハクヲクチニフクミテ　寡權なる臣下の天子を左右して、國政を壟にし官吏の黜陟を爲すをいふ。後漢書、宦者傳」

【手自煎】ミヅカラ　自分で茶を煮る。蘇軾、荊茶歌「君不見昔時李生好客一一一」

【手拭】テフキ　國てふき。＝手巾。

【不知手之舞足之蹈】シラズシテテノマヒアシノフム　非常に歡ばしきにいふ。禮、樂記「嗟嗟乎、之蹈之不足、故不知手之舞之、足之蹈之手之舞之」

【寸】スン　手（前條）に同じ。

字の偏になる時の形。國てへん（手偏）

【才】サイ　國　通古、材に通ず。

○手　部　手・才・才　七三三

○○さえ、はたらき（能力・技能）「英一」「口一」「天一」論「子罕」「既賢鳴吾」「一」○はたらきある人、賢人、智者「英一」「秀一」○はたらき（資性）義膺。孟、告子「非天之降一一殊也」○はじめ（始）晉書、夏侯湛傳「一生魄」○わづかに（纔）晉書、謝混傳「一小富貴、便謝人家事」＝財。○はかる、はかり定める、裁に通ず。○勻の十分の一。○材木の長さ又は容積の單位。○年齢の歳の略字として用ふる。

【才】サイ　國　通古、材に通ず。

【才】サイ　國　通古、材に通ず。

【才】サイ　國　通古、材に通ず

王蔡傳「清操過人、自貧二一高華、恬淡有幸輔之望」。

【才智】サイチ　才氣と、ちゑと。漢書、匡衡傳「一一有ノ能」。

【才調】サイチウ　才のすぐれたるおもむき。晉書、王接傳「一一秀出、見ノ賞二知音」。＝才氣。

【才哲】サイテツ　ちゑありて事理に明か。白居易詩「内鳴ノ非二一一」。

【才童】サイドウ　才智のすぐれたる童子。三輔決錄「拱風朱物、年十二、時號二一一」。

【才錢】サイセン　才智と錢行と。

【才取】サイシュ　圖賣買の周旋をなして口錢を取る。又、其の人。＝牙儈・牙保。

【才能】サイノウ　ちゑとはたらきと。史、佞幸傳「非ノ有二一一、從以媚ノ人」。

【才望】サイボウ　はたらきと、ほまれと。晉書、鄧攸傳「負二其一一、忘ノ匡二世羅一」。

【才髦】サイバウ　才の秀でたる者。白帖、李季卿在ノ朝、薦二進一一一」。

【才鋒】サイホウ　才能と容貌と。梁邕則傳「張衡死日、梁邕母始懷孕、二人一一其類、人云、邕是衡後身」。

【才華】サイクワ　才のすぐれたる文章。北史「延儁涉二經史、頗有二一一」。

【才分】サイブン　うまれつき。魏志、楊俊傳「始論文帝臨菑侯一一所長」。

【才辯】サイベン　才氣と、たくみなる辯口と。後漢書、蘭陵傳「少有二一一、而氣節剛傲、好輕ノ時慢物」。

【才名】サイメイ　すぐれたるいふはまれ。晉書、薛逵傳「一一益顯」。杜牧詩「一一四十年、坐客樂無ノ匹」。

【才藝】サイゲイ　才智と技藝と。晉書、羊恭傳「少有二一一、一一過ノ人」。

【才略】サイリャク　ちゑと、はかりごとと。晉書、明帝紀「性至孝有二文武一一」。

【才力】サイリク　ちゑはたらき。晉書、長沙王乂傳「一一絕ノ人、虛心下ノ士」。

【札】サツ　黠

○ぬく(抜)抜き取る。＝掘。○圖書札の札、包紮の紮に通用す。

【打】ダ　梗

㊀テイ・チョウ

○うつ(擊)たたく(扣)「亂一」。○まりをけるる(蹴鞠)。○俗「撲一」。○俗語にては種種の義に用ふ。「一那」は「向ふ」の義。「一一」の又、動詞の上に添へる無意味の助字。「一睡」「一聽」「一算」。○國「一一」。

船糧」「一魚」は「取る」の義。「一車」は舟車を作る義。

【打糧】ダリャウ　船に糧を積む。

【打魚】ダギョ　あみにて魚を取る。汪元量詩「一一鐵鞭」。

【打巷】ダカウ　まりうちの處。南楚歲時記「樂金一一」＝蹴鞠。

【打壞】ダクワイ　ちこはす。酉史「春取一一、赤復不ノ怪」。

【打擊】ダゲキ　うつ。蕭洪、登涉符籙「君無ノ故自墜流、一一祭人、無ノ故自殺」。

【打碎】ダサイ　くだく。晉書、謝石傳「童謠云、誰謂二爾堅石一一」。

【打算】ダサン　けいさんかんおもう。打は助字。錢塘遺事「買似道忠吾一時任ノ事、關臣行二一一法一以汙ノ之」。

【打診】ダシン　醫師が指頭又は打診器にて胸腹部をたたき、其の音にて病を診察する術。

【打酒】ダシュ　圖酒を買ふ。

【打水】ダスイ　圖水を汲む(餘田錄)＝汲水。

【打睡】ダスイ　ねむる。打は助字。

【打尖】ダジン　圖旅行の途中にて食事する。又、中途にて休息する。

【打英】ダエイ　英語の音譯、十二箇一ごろひの稱。

同訓異義　打・征・伐・討・擊・撲・拍・拂・拘等の別は征(彳部五畫)の條を見よ。

【打矢鵠】ダシヤコク　棒除をいふ。清嘯錄「鹿將ノ幾、即ち年末の大蕩書在ノ御、令宇二日、主二庭月壓鹿、或有在二三十三日、二十四日及二十七日一者、俗呼二一一」。

【打毬】ダキウ　「樂金一一」＝蹴鞠。

【打魚】ダギョ　詩「半頃遠邊一有二一一」。

【打壞】ダクワイ　ちこはす。酉史「春取一一、赤復不ノ怪」。

【打擊】ダゲキ　うつ。蕭洪、登涉符籙「君無ノ故自墜流、一一祭人、無ノ故自殺」。

【打碎】ダサイ　くだく。晉書、謝石傳「童謠云、誰謂二爾堅石一一」。

【打算】ダサン　けいさんかんおもう。打は助字。錢塘遺事「買似道忠吾一時任ノ事、關臣行二一一法一以汙ノ之」。

【打診】ダシン　醫師が指頭又は打診器にて胸腹部をたたき、其の音にて病を診察する術。

【打酒】ダシュ　圖酒を買ふ。

【打水】ダスイ　圖水を汲む(餘田錄)＝汲水。

【打睡】ダスイ　ねむる。打は助字。

【打尖】ダジン　圖旅行の途中にて食事する。又、中途にて休息する。

【打秋】ダシウ　いれをうつ。離騷詩「一一家奏繚亮唱」。

【打仗】ダヂャウ　圖戰爭。

【打電】ダデン　圖電報を發する。

【打頭】ダトウ　○かしらをうつ。蘇軾詩「常時低ノ頭調、謫史、無然欠伸聽一一」。○ていしもち(雞鴨)＝石首魚。

【打風】ダフウ　逆風をいふ。元稹詩「船悄一一」。

【打硬】ダカウ　行圖信の三衣・大衣・七條・五條の袈裟を入れたるふろしき包。又、其の包を負ひたる僧。離騷詩「一一信趁三寺樓鐘」。

【打飯】ダハン　飯の支度をする。餘田錄「役夫餉飯目二一一、來作ノ役」。

【打疊】ダデフ　詩文を石ずりにする。張文潛詩「時有二遊人一ノ裏」。

【打扮】ダバン　いでたちを、裝飾して形容を變ゝる。正字通「今俗以二裝飾一爲二一一、演劇者飾二其面、謂二之扮戲」。

【打撲傷】ダボクシヤウ　うちきず。

【打量】ダリャウ　はかりしらべる。打は助字。宋史「有二爭訟從旨之處、并行二一一」。

【打娜】ダナ　人をうちたたく。白嚕謹

【打步】ダホ　圖○金銀貨と紙幣との間に生ずる價格上の差。○銀行の送金證券の手數料。

【扎】サツ　黠

○ぬく(抜)抜き取る。＝掘。○圖書札の札、包紮の紮に通用す。

【打】ダ　梗

㊀テイ・チョウ

○うつ(擊)たたく(扣)「亂一」。○まりをけるる(蹴鞠)。○俗「撲一」。○國「一一」。

俗語にては種種の義に用ふ。「一那」は「向ふ」の義。「一一」の又、動詞の上に添へる無意味の助字。「一睡」「一聽」「一算」。

【打糧】ダリャウ　船に糧を積む。

【打魚】ダギョ　あみにて魚を取る。汪元量詩「一一鐵鞭」。

【打壞】ダクワイ　ちこはす。酉史「春取一一、赤復不ノ怪」。

【打擊】ダゲキ　うつ。蕭洪、登涉符籙「君無ノ故自墜流、一一祭人、無ノ故自殺」。

【打碎】ダサイ　くだく。晉書、謝石傳「童謠云、誰謂二爾堅石一一」。

【打算】ダサン　けいさんかんおもう。打は助字。錢塘遺事「買似道忠吾一時任ノ事、關臣行二一一法一以汙ノ之」。

【打診】ダシン　醫師が指頭又は打診器にて胸腹部をたたき、其の音にて病を診察する術。

【打酒】ダシュ　圖酒を買ふ。

【打水】ダスイ　圖水を汲む(餘田錄)＝汲水。

【打睡】ダスイ　ねむる。打は助字。

【打尖】ダジン　圖旅行の途中にて食事する。又、中途にて休息する。

同訓異義　打・征・伐・討・擊・撲・拍・拂・拘等の別は征(彳部五畫)の條を見よ。

【打矢鵠】ダシヤコク　棒除をいふ。清嘯錄「鹿將ノ幾、即ち年末の大蕩書在ノ御、令宇二日、主二庭月壓鹿、或有在二三十三日、二十四日及二十七日一者、俗呼二一一」。

【打毬】ダキウ　「樂金一一」＝蹴鞠。

【打魚】ダギョ　詩「半頃遠邊一有二一一」。

【打壞】ダクワイ　ちこはす。酉史「春取一一、赤復不ノ怪」。

【打擊】ダゲキ　うつ。蕭洪、登涉符籙「君無ノ故自墜流、一一祭人、無ノ故自殺」。

【打碎】ダサイ　くだく。晉書、謝石傳「童謠云、誰謂二爾堅石一一」。

【打算】ダサン　けいさんかんおもう。打は助字。錢塘遺事「買似道忠吾一時任ノ事、關臣行二一一法一以汙ノ之」。

【打診】ダシン　醫師が指頭又は打診器にて胸腹部をたたき、其の音にて病を診察する術。

【打酒】ダシュ　圖酒を買ふ。

【打水】ダスイ　圖水を汲む(餘田錄)＝汲水。

【打睡】ダスイ　ねむる。打は助字。

【打尖】ダジン　圖旅行の途中にて食事する。又、中途にて休息する。

同訓異義　打・征・伐・討・擊・撲・拍・拂・拘等の別は征(彳部五畫)の條を見よ。

【打矢鵠】ダシヤコク　棒除をいふ。清嘯錄「鹿將ノ幾、即ち年末の大蕩書在ノ御、令宇二日、主二庭月壓鹿、或有在二三十三日、二十四日及二十七日一者、俗呼二一一」。

【打毬】ダキウ　「樂金一一」＝蹴鞠。

【打魚】ダギョ　詩「半頃遠邊一有二一一」。

【打壞】ダクワイ　ちこはす。酉史「春取一一、赤復不ノ怪」。

【打擊】ダゲキ　うつ。蕭洪、登涉符籙「君無ノ故自墜流、一一祭人、無ノ故自殺」。

【打碎】ダサイ　くだく。晉書、謝石傳「童謠云、誰謂二爾堅石一一」。

【打算】ダサン　けいさんかんおもう。打は助字。錢塘遺事「買似道忠吾一時任ノ事、關臣行二一一法一以汙ノ之」。

【打診】ダシン　醫師が指頭又は打診器にて胸腹部をたたき、其の音にて病を診察する術。

【打酒】ダシュ　圖酒を買ふ。

【打水】ダスイ　圖水を汲む(餘田錄)＝汲水。

【打睡】ダスイ　ねむる。打は助字。

【打尖】ダジン　圖旅行の途中にて食事する。又、中途にて休息する。

同訓異義　打・征・伐・討・擊・撲・拍・拂・拘等の別は征(彳部五畫)の條を見よ。

【打矢鵠】ダシヤコク　棒除をいふ。清嘯錄「鹿將ノ幾、即ち年末の大蕩書在ノ御、令宇二日、主二庭月壓鹿、或有在二三十三日、二十四日及二十七日一者、俗呼二一一」。

【打毬】ダキウ　「樂金一一」＝蹴鞠。

【打魚】ダギョ　詩「半頃遠邊一有二一一」。

【打壞】ダクワイ　ちこはす。酉史「春取一一、赤復不ノ怪」。

【打擊】ダゲキ　うつ。蕭洪、登涉符籙「君無ノ故自墜流、一一祭人、無ノ故自殺」。

【打碎】ダサイ　くだく。晉書、謝石傳「童謠云、誰謂二爾堅石一一」。

【打算】ダサン　けいさんかんおもう。打は助字。錢塘遺事「買似道忠吾一時任ノ事、關臣行二一一法一以汙ノ之」。

【打診】ダシン　醫師が指頭又は打診器にて胸腹部をたたき、其の音にて病を診察する術。

【打酒】ダシュ　圖酒を買ふ。

【打水】ダスイ　圖水を汲む(餘田錄)＝汲水。

【打睡】ダスイ　ねむる。打は助字。

【打尖】ダジン　圖旅行の途中にて食事する。又、中途にて休息する。

同訓異義　打・征・伐・討・擊・撲・拍・拂・拘等の別は征(彳部五畫)の條を見よ。

【打矢鵠】ダシヤコク　棒除をいふ。清嘯錄「鹿將ノ幾、即ち年末の大蕩書在ノ御、令宇二日、主二庭月壓鹿、或有在二三十三日、二十四日及二十七日一者、俗呼二一一」。

【打毬】ダキウ　「樂金一一」＝蹴鞠。

【打魚】ダギョ　詩「半頃遠邊一有二一一」。

【打壞】ダクワイ　ちこはす。酉史「春取一一、赤復不ノ怪」。

【打擊】ダゲキ　うつ。蕭洪、登涉符籙「君無ノ故自墜流、一一祭人、無ノ故自殺」。

【打碎】ダサイ　くだく。晉書、謝石傳「童謠云、誰謂二爾堅石一一」。

【打算】ダサン　けいさんかんおもう。打は助字。錢塘遺事「買似道忠吾一時任ノ事、關臣行二一一法一以汙ノ之」。

【打診】ダシン　醫師が指頭又は打診器にて胸腹部をたたき、其の音にて病を診察する術。

【打酒】ダシュ　圖酒を買ふ。

【打水】ダスイ　圖水を汲む(餘田錄)＝汲水。

【打睡】ダスイ　ねむる。打は助字。

【打尖】ダジン　圖旅行の途中にて食事する。又、中途にて休息する。

同訓異義　打・征・伐・討・擊・撲・拍・拂・拘等の別は征(彳部五畫)の條を見よ。

【打矢鵠】ダシヤコク　棒除をいふ。清嘯錄「鹿將ノ幾、即ち年末の大蕩書在ノ御、令宇二日、主二庭月壓鹿、或有在二三十三日、二十四日及二十七日一者、俗呼二一一」。

【打毬】ダキウ　「樂金一一」＝蹴鞠。

【打魚】ダギョ　詩「半頃遠邊一有二一一」。

【打壞】ダクワイ　ちこはす。酉史「春取一一、赤復不ノ怪」。

【打擊】ダゲキ　うつ。蕭洪、登涉符籙「君無ノ故自墜流、一一祭人、無ノ故自殺」。

【打碎】ダサイ　くだく。晉書、謝石傳「童謠云、誰謂二爾堅石一一」。

【打算】ダサン　けいさんかんおもう。打は助字。錢塘遺事「買似道忠吾一時任ノ事、關臣行二一一法一以汙ノ之」。

【打診】ダシン　醫師が指頭又は打診器にて胸腹部をたたき、其の音にて病を診察する術。

【打酒】ダシュ　圖酒を買ふ。

【打水】ダスイ　圖水を汲む(餘田錄)＝汲水。

【打睡】ダスイ　ねむる。打は助字。

【打尖】ダジン　圖旅行の途中にて食事する。又、中途にて休息する。

【扒】ハ　麌

○ほりあばく、發掘。○ぬく(拔)

【扒手】ハシウ　圖ぬすびと、竊盜。

【扑】ボク　屋

○うつ(打)史、刺客傳「秦皇帝不中中」。すこしうつ。○秦皇帝不中中」。すこしうつ。○小擊。○たたく(扣)。○うつふる。○扶(扶)古、教育に用ふるしもと。○師が弟子をうちて戒めるむち。書、舜典「作二教刑一」＝榎楚。

【扑】ハイ　麌

○ほりあばく、發掘。○ぬく(拔)

【扑手】ハシウ　圖ぬすびと、竊盜。

【扑】ボク　屋

○うつ(打)史、刺客傳「秦皇帝不中中」。すこしうつ。○秦皇帝不中中」。すこしうつ。○小擊。○たたく(扣)。○うつふる。○扶(扶)古、教育に用ふるしもと。○師が弟子をうちて戒めるむち。書、舜典「作二教刑一」＝榎楚。

同訓異義　扑・征・伐・討・擊・撲・拍・拂・拘等の別は征(彳部五畫)の條を見よ。

【扑鍵】ボクケン　むちうつ。後漢書、王龔傳「一一而出」。＝鞭撻・笞撻。

【扑殺】ボクサツ　うつ。史、酷吏傳「以一一手中庭一而已」。

【扔】ヒ　麌

○ほりる(風・沒字)はめる(嵌)○し

【扒】ハ　麌

○あぐ(舉)兩手にてもちあげる。○俗に兩人共にさげる。○俗に一物を舉ぐるにいふ。

同訓異義　扛・鼎・抬・擡・昇・抗等の別は舉(臼部十一畫)の條を見よ。

【扛舉】コウキョ　もちあげる。きしあげる。

【扛鼎】コウテイ　○みなへをもちあげる。力の極めて强きをいふ。史、項羽紀「籌策、八尺餘、力能一一」。○籌策、鼎二張鼎。

【扛夫】コウフ　寫籠を舁く人夫。拍案驚奇「一一幾箇一一、抬出去殯葬了」。

【扞】カン　圖

○ふせぐ(拒)とどむ(止)ふせぎまもる「一衛」「一禦」まもり(衛)○もとる(伎)○物に突きあたる。ふれる(觸)(抵)史、游俠傳「時一一當世之文學」。○ここで(臂衣)○いしづき(矛鋒)＝錏。○一格は堅くしてい入るべからざる貌。禮、學記「發然後禁、則一一格而不勝」。

同訓異義　扞・防・禦・掛・拒・閑の別は防(阜部四畫)の條を見よ。

【扞衛】カンエイ　ふせぎまもる。後漢書、袁紹傳「身自一一」＝捍衛。

【扞格】カンカク　さはりさまたげふ。堅くして入る可からざる貌。禮、學記「發然後禁、則一一而不勝」。

【扞拒】カンキョ　ふせぐ。漢書、丙吉傳「吉

【扛】コウ　麌

○あぐ(舉)兩手にてもちあげる。○俗に兩人共にさげる。○俗に一物を舉ぐるにいふ。

同訓異義　扛・鼎・抬・擡・昇・抗等の別は舉(臼部十一畫)の條を見よ。

【扛舉】コウキョ　もちあげる。きしあげる。

【扛鼎】コウテイ　○みなへをもちあげる。力の極めて强きをいふ。史、項羽紀「籌策、八尺餘、力能一一」。○籌策、鼎二張鼎。

【扛夫】コウフ　寫籠を舁く人夫。拍案驚奇「一一幾箇一一、抬出去殯葬了」。

【扞】カン　圖

○ふせぐ(拒)とどむ(止)ふせぎまもる「一衛」「一禦」まもり(衛)○もとる(伎)○物に突きあたる。ふれる(觸)(抵)史、游俠傳「時一一當世之文學」。○ここで(臂衣)○いしづき(矛鋒)＝錏。○一格は堅くしてい入るべからざる貌。禮、學記「發然後禁、則一一格而不勝」。

同訓異義　扞・防・禦・掛・拒・閑の別は防(阜部四畫)の條を見よ。

【扞衛】カンエイ　ふせぎまもる。後漢書、袁紹傳「身自一一」＝捍衛。

【扞格】カンカク　さはりさまたげふ。堅くして入る可からざる貌。禮、學記「發然後禁、則一一而不勝」。

【扞拒】カンキョ　ふせぐ。漢書、丙吉傳「吉一一大臣、不ノ遷二嚴刑峻法一」＝捍禦・抵拒。

【扞禦】カンギョ　ふせぐ。列子「人弗爪牙不ノ足二以供一守衛、肌膚不ノ足二以自一一」＝扞拒。

【扞御】カンギョ　「江漢有ノ滸、以一一泛濫」。

【扞蔽】カンヘイ　ふせぎおほふ。史、田敬仲完世家「趙之於二齊一一也」＝藩屏。

【扣】コウ　宥

○うつ(擊)たたく。孟子「抽ノ矢一一輪」。去其金」＝叩。○ひかふ、ひく(牽)馬を牽くひきとめる。○物を盡く與へざる義「剋一」「折一」。○圖ほたん(鈕釦)。又、ほたんをかける。○國ひかへ、ひかふ(控)「一帳」。

同訓異義　扣・敲・叩・款の別は敲(攵部十畫)の條を見よ。

【扣殺】コウサツ　ふなばたをたたく。又、其の音。李參詩「夜深聞二一一」。

【扣剖】コウボウ　ひきとめる。おさへとどめる。＝剖剖。

【扣持】コウヂ　ひかへもつ。

【扣除】コウヂヨ　ひきさる。控引く。

【扣問】コウモン　たづね問ふ。「一吾鄉嬸君爲二問嬸曆一、以質二諸師一、自是恥二于一一者、躬ノ學之要、後生初學、咨然亦可二以

【抓】ダ　麌

○、うごく、うごかす(動搖)詩、小雅「天之一一我、如不及、我克」。○あやふし、安からず。

【抓與袈裟】ダヨケサ　狐狸は安からず、書、秦誓「邦之抓隍、曰由二一人、邦之袈裟、亦尚一人之慶」＝安危。

【扠】サ　麌

○はさみとる(挾取)○やす、水中の魚鼈を刺して捕ふる漁具。韓愈詩「獲一飽活費」。○國發語の詞。＝偖。

【托】タク　藥

○ひらく、おす。＝拓。○掌を以て物を擧げる。轉じて物をのせる臺「一盤」「宋子」。○不一は韓愈に通ず。五代史、李茂貞傳「一日食不一」＝湯餅。○

少警一美」＝叩問・質問。

【抗】コウ　宕

㊀㊁キョウ

㊀する(應)㊁高ひ、よろこぶ(喜)莊、讓王「子貢、既一然執干而舞」。

圖託に通じ用ふ。委託を俗に委ーと書く。

【托葉】タク　葉間即ち葉柄と葉枝と連接する處に生ずる小さき葉片。

【托子】タク　ちゃたく。茶盞。黄眼鏈「裂

【托身】タクシンエン　己の身をよせ置く、棲止する隣。孔平仲詩「屹坤是處一一安」

【托出】タクシュツ　物をのせて出す。水滸傳三回「行童一一茶來」

【托處】タクショ　身をよせおく。漢書、賈山傳「曾不ン得ン托ン衆處而一一焉」

【托鉢】タクハツ　僧侶のゆくゆく俗家より食を乞ふ。僧惟則詩「一一鉢籠裏有餘」

四畫

【扼】アク　陌

○おさふ。とりひしぐ。‖捉。以捷。○くびき。莊馬蹄「加ン之衡一」‖軛。

【扼腕】エンワン　おさえどむ。陳遵詩「宿雲忽拔壓、戴馭奥一一」‖抑制。

【抑壓】ヨクアツ　おさへつける。唐書、李溫傳「吞與一一、以退二仲尼之徒一、有ン是乎」

【抑按】ヨクアン　おさへる。鶴崎、琴賦「或徘徊蹊、抑沮して恐れつつしむ。書經「維我大王王季、自一一」

【抑夏】ヨクカ　抑沮して恐れつつしむ。書而搖二其心一」揚淡詩「一一兵易守」

【抑腕】ヨクワン　いきどほりてうでをにぎりつめる。蘇舜欽、觀蹴鞠賦「一一挾拳」‖捻腕。

【抑】イ　ヨク　陌　ヨ通音

○おさふ。（按）壓へつける。○をさむ（治）孟、滕文公「昔者禹一一洪水」○ふさぐ（塞）○せまる（迫）○へらす（減）○くだる（屈下）「一損」○かがまる。かがむ（屈）「屈一」○とどめる（止、遏）○やむ（遏）○うつくし（美）○しりぞく（退）○けなす。おとす（損、貶）○一一はつつしむ（慎、密）○そも、そもそも、發語の辭。左、昭十三「一一齊人不ン出」○興反語の辭。孟、梁惠王「一一王」○興甲兵」○轉換の辭。亦然の辭。論、學而「求ン之與、一與之與」

【抑遏】ヨクアツ　おさへとどむ。陳遵詩「宿雲忽拔壓、戴馭奥一一」‖抑制。

【抑壓】ヨクアツ　おさへつける。唐書、李溫傳「吞與一一、以退二仲尼之徒一、有ン是乎」

【抑按】ヨクアン　おさへる。鶴崎、琴賦「或徘徊蹊、抑沮して恐れつつしむ。書經「維我大王王季、自一一」

【抑遏】ヨクアツ　いきどほりてうでをにぎりつめる。蘇舜欽、觀蹴鞠賦「一一兵易守」‖抑壓。

【抑鬱】ヨクウツ　いきどほりてうでをにぎりつめる。蘇舜欽、觀蹴鞠賦「一一兵易守」‖抑壓。

【抑強】ヨクキョウ　強くわがままなる者をおさへつける。鶴志「一一扶ン弱、扶弱は弱き者をたすけるの意。

【抑屈】ヨククツ　おさへてかがむ。

【抑詘】ヨククツ　おさへしりぞける。荀悅文「黨仲舒排、張孔氏、一一一百家」

【抑挫】ヨクザ　おさへくじく。魏志、倉慈傳「一一權右、撫二直貧羸」

【抑止】ヨクシ　おさへとどめる。‖抑制。

【抑惜】ヨクセキ　惡惜をおさへ制する。漢生論「一一ン惡、欲ン劉ン棄樂顯」

【抑首】ヨクシュ　首を屈してさげる。漢書、叔孫通傳「諸侍ン坐設上、皆俯一一」

【抑制】ヨクセイ　おさへつけとめる。‖抑遏。

【抑絕】ヨクゼツ　おさへたつ。潘淘文「韓子之文、如二長江大河、魚鼈鼉鼉蛟龍、萬怪惶怒、而一一藏焉、不ン使二自露一」

【抑塞】ヨクソク　○おさへてふさぎとめる。元稹詩「一一周遮恐二君見一」○おさへられて心むすぼる。沈佺期、問。杜甫詩「我花拔二兩一一、磊落奇才一」

【抑損】ヨクソン　おとる心をおさへてへりくだる。史、晏嬰傳「其後夫自一一」

【抑退】ヨクタイ　○おさへてしりぞかしむ。唐書、李明傳「漢明德馬皇后、不ン花一一外戚、令二非當朝貴盛一」○抑損に同じ。魏志、武帝紀

【抑黜】ヨクチツ　おさへしりぞく。北史「遠二朝野、祿一一動人」

【抑磨】ヨクマ　にて米を賣る。政府の力にてむりに低價ひ上げる。宋史、食貨志

【抑留】ヨクリュウ　おさへとどめる。漢書、張敞傳「敞上書、以二長安令一一、敞抑留不ン遣、令二敞當朝貴盛」○抑損

【抑鬱】ヨクウツ　おさへられてふさぎ。鶴志「一一扶ン弱、扶弱は弱き者をたすけるの意。

【抑屈】ヨククツ　おさへてかがむ。

【抑詘】ヨククツ　おさへしりぞける。荀悅文「黨仲舒排、張孔氏、一一一百家」

【抑挫】ヨクザ　おさへくじく。魏志、倉慈傳「一一權右、撫二直貧羸」

【抑止】ヨクシ　おさへとどめる。‖抑制。

【抑惜】ヨクセキ　惡惜をおさへ制する。漢生論「一一ン惡、欲ン劉ン棄樂顯」

【抑首】ヨクシュ　首を屈してさげる。漢書、叔孫通傳「諸侍ン坐設上、皆俯一一」

【抑制】ヨクセイ　おさへつけとめる。‖抑遏。

【抑絕】ヨクゼツ　おさへたつ。潘淘文「韓子之文、如二長江大河、魚鼈鼉鼉蛟龍、萬怪惶怒、而一一藏焉、不ン使二自露一」

【抑塞】ヨクソク　○おさへてふさぎとめる。元稹詩「一一周遮恐二君見一」○おさへられて心むすぼる。沈佺期、問。杜甫詩「我花拔二兩一一、磊落奇才一」

【抑損】ヨクソン　おとる心をおさへてへりくだる。史、晏嬰傳「其後夫自一一」

【抑退】ヨクタイ　○おさへてしりぞかしむ。唐書、李明傳「漢明德馬皇后、不ン花一一外戚、令二非當朝貴盛一」○抑損に同じ。魏志、武帝紀

【抑黜】ヨクチツ　おさへしりぞく。北史「遠二朝野、祿一一動人一」

【抑磨】ヨクマ　にて米を賣る。政府の力にてむりに低價ひ上げる。宋史、食貨志

【抑留】ヨクリュウ　おさへとどめる。漢書、張敞傳「敞上書、以二長安令一一、敞抑留不ン遣、令二敞當朝貴盛一」○抑損

【抑鬱】ヨクウツ　おさへられてふさぎ。

○さをさす、ふねをすすむ。‖
も判。○足らざるを補ふ。○尋ね
もとめる（尋覓）

【玩】㊀㊁ グワン 圜

㊀くじく（挫）漢書、司馬相
傳「一二土卒之精」「一らす（耗）
史、平準書「百姓一敝以巧法」
㊁もてあそぶ。‖玩・翫。○法も
づる（圓倒）‖囮。○まるくけ
む、さする（按摩）○まるくけ

【拐】グワイ 冠見

○くじく、をる（折）○うこか
す（動）晉語「故不可一也」

【拘】拘（手部五畫）の俗字。

【拗】㊀㊁ ヨウ 月月 ㊁拗は
本字

○物を奉きて動かし轉ずる。
○うかつ（穿）あばく。○さくら
る、あばく。‖滑。㊁ほ
る（剔）○みたる（亂）‖掘。

【抓】サウ 丙

○かく（搔）「一頭」○つま
（爪）爪を以て物を取る。○圖む
ねる。

【抄】セウ 困 本妙字は

○さじにてすくひとる（又取）
○かすめとる（略取）「侵一」後
漢書、郭伋傳「匈奴數一邊界」
○文書をうつす（謄寫）「手一」
○かきぬく、ぬきがき「一錄」
「詩一」○量の名、十圭を一と爲
し、十一を撮と爲す。○すくく
（漉）紙をすきて造る。

【抄】セウ 困

○すこし（些少）の分量。新論
「鈞石雖一、不一能一無一一之較」

【抄紙】かみをすく。天工開物「一
一搏」

【抄集】かきぬきて集める。又其
の集めたるもの。魏志、武帝紀「注
「太祖博一奇異聚書、特好一兵法、一一
講家兵法、名曰接要」

【抄襲】○敵の備へなきに乘じて
ひそかに攻め入る。○古人の文詩
を剽竊して己の作とする。

【抄寫】ぬきがきす。書文類聚「梁
霊曜一一日課五十紙」‖鈔寫。抄錄。

【抄書】○書物をぬきがきする。南
史、王筠傳「好一一、偶見管觀、皆自
錄、新輯記、未嘗借人、倦手、並躬自
抄」○ぬきがき
書物。

【抄掠】ぬきがきすつしとる、ぬきがきす
る。掠は拾ひ取る。「唐書、潘孝傳」‖
抄。

【抄没】ぬきがきする。明律
「依一律一」

【抄本書】ぬきがきぼん。慶樓幽
事「一一、如三古帖一不一必全帙、皆是
斷簡殘墨」

【抄掠】「敵無一輜重、抄以一一資資」

【抄略】かすめとる。魏志、太祖
紀、注「一一諸軍」

【抄錄】ぬきがきする。王筠文「紗
白一一、大小百餘卷」

【扱】㊀㊁ サフ 屋圓

㊀をさむ（收）塵などをはら
取る。曲禮「以箕自鄉一之」鄉
は向。○う（獲）○ひく（引）○
あぐ（舉）○とる（取）○いたる
（至）手をつく、拜して手、地に
至る。儀禮、士昏禮「壻拜一地」
○はさむ（挿）衣服の裾をあげ
て帶にはさみこむ。詩、周南、
傳「一衽日一極」㊁をさむ。○
取る。○う（獲）○をさめとる（斂）
取圓○あつかふ。又、あつかひ
、待遇する「取一」○こく、し
ごく「稻を一く」

【抵】㊀㊁ シ テイ 寒極

【扱】㊀㊁ キフ 屋圓

㊀つつ、側から擊つ。揚雄、解
嘲「一一穰侯、而代之」○やぶる
（毀）㊁㊂ロ、抵に通じ用ふ。

【扯】搖手部十二畫）の俗字。
ひきさく（裂開）

【承】ショウ 蒸

○うく（受）うけ頂く。禮、禮運
「一一天之祜」「うけたまはる。○
うけつぐ（繼續）「一一統」さささ
ぐ、捧持する。詩、小雅「一一筐是
將」○とどむ（止）詩、魯頌「則
莫我敢一」○たすく、たすけ
（佐）‖丞。○すくふ、古、摂に
通ず。列、黃帝「並流而一之」
○ついで（次第順序）左、哀十
三「子產爭一」註「貢賦之次
也」○圓ウケタマハル 聞くの敬語。

周圓 承・受・享・寧の別は受（又
部六六畫）の條を見よ。

【承意】ウケタマハリ 人の氣に入るやう
條をとる。史、孟荀傳「一一親色」
‖迎合。

【承引】ウケタマハリ うけひく、承知する。魏
書、刑罰志「或拷不一一、依一證而
科」

【承恩】ウケタマハリ 君の恩惠を受ける。杜
甫詩「明光之中常引見、一一數上
南漢殿」

【承家】ウケタマハリ 家をうけつぐ。易經「開
一一國一一」

【承顏】ウケタマハリ ○他人のかほ色を見て
さからはぬやうにする。晉書、孝友
傳「夫色一一、怡怡愛一樂」○接
見を得る。漢書「今乃一一接
一一」

【承句】ウケタマハリ 絕句の結の第二句、第一
句即ち起句の意をうけて敷衍する
句の義。

【承諾】ウケタマハリ をしへをうく。孔叢子「爭
今一一」

【承歡】ウケタマハリ 君主又は父母のよろ
こびの心をうけたすける。白居易
詩「一一侍宴無二閒暇」

【承繼】ウケタマハリ うけつぐ。白虎通「天子一
一、當一知二其數」‖繼承・承襲。

【承教】ウケタマハリ をしへを受ける。孟子「宴
人願安一一」

【承據】ウケタマハリ はし文をうく。晉書、衆
以一一一書、義、推一功於讓」

【承業】ウケタマハリ 任事をうけつぐ。

【承候】ウケタマハリ めうへの人のときげん
をうかがふ。魏書、楊播傳「一一安
否」

【承旨】ウケタマハリ 仰せをうけたまはる。

【承志】ウケタマハリ ○他人の氣に入るやうに
うけ迎ふ。書經「先一意一一」‖承
意。○他人の志をうけつぐ。書經
「大統未一、朕、予小子其承二厥志」

【承襲】ウケタマハリ うけつぐ。襲は繼。‖承
繼。

【承順】ウケタマハリ うけしたがふ。命令に從
ひ服する。史、始皇紀「宇縣之內、
一一一聖志」

【承緒】ウケタマハリ 事業のつづきを受け
ぐ。晉書、安平獻王孚傳「陛下一
一、遜人奉貴」‖承繼。

【承承】ウケタマハリ 子孫がつぎつぎにうけつ
たへる。韓愈文「聖子神孫、繼繼一
一」

【承接】ウケタマハリ 前をうけてつづく。潘隱
詩「雁影相一一、龍圖共始終」

【承前】ウケタマハリ 前からうけつづく。

【承禪】ウケタマハリ ゆづりをうける、帝位を
讓られてうけ繼ぐ。陸贄、貞懷章刺
史崔夏府君表」

【承諾】ウケタマハリ うべなふ。‖承知。

【承知】ウケタマハリ ○うけたまはりて知る。
罰志、震詩傳「一一消息、慨然永
歎」○知遇を受ける。蘇易簡詩「小
子最一一回鑾、尋改一親」○圓うべ
なふ、承諾する。

【承塵】ウケタマハリ ○ごみの落ちざるやうに
座所の上に設くるもの、ちりよけ。
三輔決錄「有馬從一一上、飛下三
几前」○圓なげし（垂押）曝居ノ
上に椽にわたす木。

【承寵】君の寵幸を受ける。王
昌齡詩「平陽歌舞新一一、漢外秦
樂賜二錦袍」‖承恩。

【承傳】うけつたへる、前者の爲
したる通りにうけつたへる。宋史、
禮志「典儀曰再拜、贊者一一皆再
拜」

【承統】世をうけつぐ。帝位を
つぐ。漢書、公孫卜兒傳「孝宣一
一、繼孝武洪業」

【承認】承知して認許する、みと
めゆるす。論史「認斷二止獄、宜乎其
不二一一一也」‖認可。

【承乏】人員のとぼしきをうけ
て補ふ、皆に任ずといふ謙辭。左、
成二「一一敢告不敏、敢一告一一」

【承襲】命令をうける。後漢書、吳
漢傳「將相將建璋、不二相一一」躬
は謝絕。

【承風】上の教化を受ける。家
語「雖之爲君也、其政好一生而惡
一一、殺、是以四海一一」

【承服】罪人が其の罪に服從す
る、服罪する。論史「不二一一」

【承平】太平の世を永く受けつ
ぐ。漢書、食貨志「今累世一一、蓄富
衆貴、鬻數鉅萬」

【承敝】次條に同じ。史、高祖紀
「漢興一一」

【承繫】國家の統繫の條を受けつ
ぐ（繼志、文帝紀、注）‖承襲。

【承奉】人の意をうけて氣に入る
やうに事へる。晉書、容超載記「入る
則盡敬一一、出則領一身下一士」

【承命】命令をうけたまはる。左
傳「荀列定矣、敢不一一」

【承襲爵】漢の武帝が趙幸宮に趙
てたる鉤盤、甘露を受ける爲めに
設く（漢書、郊祀志）

【承】ショウ 蒸

○あぐ（上奉）○ぬく（拔）○た
與すくふ（助）すくふ（救）財を人に
ふ。‖拯。

【折】セツ 屑

○をる、をり取る「一枝」「探一」
○くじく（挫）「挫一」「摧一」「摧一」一
のりひしぐ、おさへつける。○人
を、わかつらきめる。論語、顏淵「片言
可以一獄者其由也與」○わかつ
言可以一獄者其由也與」○まげる（曲）意志
かつ「一中」○まげる（曲）意志
をまげ屈する。漢書、伍被傳「
「一節下士」○かがむ（屈）○
とどむ（止）○やぶる（毀敗）
破毀する。漢書、高帝紀「一」券
裏債、借金の證文をやぶりすす
て。○わかじに「短一」「夭一」
○損損をして賣る。○前引する、
七一は七掛に割引する。○草、
木枯れそこなふ。○土をもり
上げたる祭場。○木を方形に
連ねて牀の如く作りたる雜
具を加ふるもの。圓○をり、
城に横たへ亘して上に席
時

期・機會。○をり、莫子精の類。○「折を」、切に、ひたすら「一人ッ」て願むし」

同 【折簡】セツカン 折・挫の別は挫（手部七畫）の條を見よ。

【折頸】セツケイ おとがひをきく。眼國策「利ノ敗ー一レ」

【折鋭】セツエイ ○氣くじけ氣をくじく。劉向「文ー一レ一挫ノ名」

【折腰】セツヨウ ○こしを折る。腰を屈して人を拜する。晉書、謝鯤傳「陶潛歎曰、吾不ノ能下爲二五斗米一ー一事ー一鄉里小兒上」

【折閱】セツエツ 損をして賣る。折は損、閱は免にて賣なり。荀子「修身」「良農不下爲二水旱一不ル耕、賈不ノ爲二ー一ー不ル市」

【折膠】セツカウ 膠が堅くなり、折れ易くなる。秋の期節、即ち、秋は膠が固まりて弓が強くなる故、戰爭の好時節とす。匈奴等に此の時を以て軍を始出す。漢書、龍錯傳「欲ノ立ノ威者、ー一ー」

【折角】セツカク ○頭巾のつのをもる。後漢書、郭泰傳「嘗行遇ノ雨、巾一角墮、時人乃效折二巾一角一、以爲二泰宗巾一」○馬鹿慢の鼻をくじく。漢書、五鹿充宗傳「五鹿嶽嶽、朱雲折二其角一」朱雲が五鹿と易を論じて五鹿の鬥力を屈し、めしし故、時人が朱雲の鬥に本づく。○圓骨を折る、れたるむだ骨に本づく。○圓骨を折るとしゃれたる骨の角を折るとしゃれたる骨を拜する。又、論語「ー一御大切切」

【折簡】セツカン 全紙を二つ切りにして認めたる手紙。短き手紙。簡は竹の札、古、紙に代用す、故にいふ。晉書、宣帝紀「王淩面縛迎ノ帝、目、淩若有ノ罪、公當ー一召ー一送、何若自來耶」

【折膠】セツカウ ○强く諫むる。漢書、朱雲傳「願賜ー一尚方斬馬劍一一斷二佞臣一一人、上問誰、對曰張禹、上怒、御史將ノ雲下、雲攀二殿檻一、檻折、呼曰、得下從二龍逢比干一遊、手地下上足矣」○圓きびしく叱責する。

【折脚鍋】セツキヤククワ 脚のまがりたるかなべ。蘇軾詩「ー一邊破、淡粥」

【折樋】セツトウ 水を方形につくらねて林の如く作りたる排水。儀禮「ー一圓レ之」

【折桂】セツケイ 桂の枝を折る、科挙に登るをいふ。晉の郗詵が己の及第を桂林一枝、崑山片玉に比せし故事。温庭筠詩「猶喜故人先ー一レ、自憐羈客尚飄蓬」

【折蔑】セツベツ をれたるほこ。杜牧詩「ー一沈沙鐵半銷」

【折衆】セツシウ 借用證書をやぶりて返濟を責め求めず。史、高祖紀「兩家ー一、衆ノ責、責ハ債。」

【折衝】セツシヤウ 非常の勤苦を重ねる。左、定十三「三ー一ー知ノ爲二良醫一」

【折獄】セツゴク うったへをさばく。論、顏淵「片言可二以一ー一者一者其由也歟」＝折獄。

【折角】セツカク 足を折る。易經「鼎ー一覆二公餗一」鼎の足を折るときは脚設。

【折骨】セツコツ 骨ををりて身體を勞す。荀子「ー一ノ絕筋」

【折挫】セツザ ○くじく。後漢書、竇融傳「外則ー一ー羌胡、內則百姓勞弊、輒「挫」＝揮挫・挫折。

【折枝】セツシ あんま、枝は肢、一說に「孟子、梁惠王「爲二長者一ー一レ」

【折辭】セツジ 人のことばをくじく。大戴禮「不ノ唱二流言一、不ノ一ー一」

【折獄】セツゴク うったへを判決する。北史、趙煦傳「ー一公正」＝折獄。

【折衝】セツシヤウ ○敵の衝き來るをくじく。晏子春秋「孔子曰、不ノ出二樽俎之間一而ー一千里之外、夏子之謂也」○敵と對抗してひけを取らず。蘇洵、愈二石昌言一引「ー一ー一手口舌之間」

【折辱】セツジヨク くじけ屈する、くじきはづかしむ、輕蔑する義。史、項羽紀「ー一ー秦吏卒」＝摧辱・挫辱。

【折節】セツセツ ○己の節を持する意。風俗通「戰國策、以秦之强、一レ而下二與國一、臣恐二其害一、秦東周」○圓をりふし、ちゃうど其の時、をりかち。＝折柳。○時季、季節。

【折證】セツシヤウ かどだちて折れめ、證は從と別ノ。の意、玉篇「周證中ノ、從ー一中ノ相」＝折衝。

【折足】セツソク 足を折る。易經「鼎ー一覆二公餗一」鼎の足を折るときは

鼎實を覆へす、小人を大臣に任ずれば、重任に堪へずして、國家を覆すに喩ふ。

【折損】セツソン くじき損する。張籍詩「補綴直教安排得、古陸多因ー一ー來」

【折挽】セツバン をれたわむ、又、くじけよわる。＝風挽・枉挽。

【折遁】セツトン くじけ敗れる。後漢書、段熲傳「匡奏、熲見ー一ー」＝敗遁。

【折枝法】セツシホウ 枝は肢、從來の枝數を縮減する法律。「宋史」

【折中】セツチウ 衣服に同じ。漢書、賈誼傳「發二孔子之言一、以ー一所ー一」

【折衷】セツチウ 衷は中、事を取捨折斷して其の中を定める。史、孔子世家「中國言二六藝一者、ー一於夫子一、可レ謂二至聖一矣」＝折中。

【折皮】セツピ くじきやぶる、くじけ破れる。

【折半】セツハン 半分にわかつ。大戴禮傳「折二其半一授二使者一」

【折旋】セツセン 舞ふ。論語「鄉黨、趨二西京之ー一」

【折衣】セツイ ○敵をくじきしたがはせる。○フルヤカ 圓佛說を說き導入を折き快せる。講愛の釣。＝破邪。

【折談】セツダン 談がくじける、解釋が行はれずの意。蘇軾傳「淡醇雅、知ノ非南貧ノ之ー一」＝挫謀。

【折北】セツホク やぶれてにげる、北は敗の意。史記「ー一不ノ敢」＝敗北。

【折本】セツホン ○元金を損する。○圓タ

リ墨みて作りし書畫。

【折楊柳】セツヤウリウ 笛を怨りて、水邊に至り、楊柳を折りて、別を寫す時の情景を綴したる詩、古樂府に「ー一曲あり。

【折曲】セツキヨク ○樂曲の名。李白詩「此夜曲中聞ー一、何人不ノ起二故園情一」＝折楊柳。○旅人を見送る時、柳を折りて別れし故事。三輔黃圖「灞橋在二長安東一、跨水作レ橋、漢人送ノ客、至二此橋一、折ー一別」

【折紙】セツシ 圓○奉書又は鳥の手紙等を二つ折りにせしもの、造物の目錄又刀劍などの鑑定をかきしるすに用ふ。○轉じて刀劍・古書畫・骨董品などの鑑定書。

【折柄】セツヘイ 圓ちゃうど其の時。＝折節。

【折句】セツク 圓和歌の一體、題の假名を毎句の首又は尾に詠みこむもの。

【折介】セツカイ 圓武家の最も卑しき奉公人。

【扭】チウ 有

○まろばす、手にて轉ずる。○おさふ（拗）○つかぬ、だばぬ。

【抒】ショ 圓 ヂ 遇ヨ 書

○のぶ（舒・陳）心に思ふことを「ー一情素」○くむ（挹）○とり出す、剔出。○もらす（泄）漢書、劉向傳「ー一惡意」○とく（解）○のぞく（除）左、文六「雉必ー一矣」

【抒情詩】ジヨジヤウシ 以抒幽鬱滯之情。

【抒情詩】ジヨジヤウシ 感情をのべたる詩。敍景詩・敍事詩の對。

【投】トウ 有 支

○なげ、なげうつ（擲）「ー一石」○すてる（棄）やめる、さしおく。雜徵詩「ー一筆事戎軒」○いる（納）○おくる（贈）「恵ー一」詩、衛風「ー一我以木瓜」○たよる（託）たちよる、身をおちつける。後漢書、張儉傳「望門ー一止」○かぶる（適）あふ（合）「ー一機」「ー一合」○おほふ（掩）○はらふ（振）「ー一袂」○ことまる（止）杜甫詩「遲ー一鄧江波」＝逗遛。○文の讀みきり、句讀の逗に通ず「句ー一」○酒を再びする。「ー一酒」＝酸。

【投網】トウモウ 圓あみをなげ入れて魚を捕へる。又、其の網。

【投影】トウエイ ○物體のかげ。○物體を或點より見たる形の平面圖「ー一畫法」

【投降】トウカウ 來りて敵にくだる。降參する。

【投稿】トウカウ 新聞・雜誌などに原稿を送りやる。＝寄稿・投書。

【投壺】トウコ 客をねんごろに留むるにいふ。壺は酒のくきび、輪をはめて轉頭に插すもの。漢書、陳遵傳「遵嗜酒、每二大飲賓客一、投二其中一、雖レ有ノ急、終不ノ得ー一去」

【投合】トウガフ 兩方の心が相あふ。「意氣ー一」

【投竿】トウカン きをなげる。笞陵文「放ノ權ー一ノ、優游樂ノ歲」

【投函】トウカン 郵便函に手紙を入れる。又、手紙をさし出す。

【投機】トウキ なやみを與へる。書經「ー一ー于民身」

【投鞭】トウベン 鞭をなげおく。劉禹錄「ー一長歎息、絕塵不ノ可ノ忘」

【投閒置散】トウカンチサン 身を閒散の地位に置く義。要職に居らざるをいふ。韓愈文「ー一、乃分之宜」

【投帝】トウテイ おくる、おくりよせる。元史、律詩以相ー一」

【投藥】トウヤク なげすてる。沈佺期文「手ー一南裔、水、惡北蒲」

【投機】トウキ ○機會につけこむ。萬一を掘發米穀などの相場を利用して取引をする。ー一業」

【投金】トウキン 金をなげすてる。史、越奉秋「乃ー一ー水中一而去」

【投戈】トウクワ 戰をやめる。後漢書「ー一ノ講ノ、息ノ馬論ノ道」＝休兵・偃武。

【投定】トウテイ 遠く流謫せらるる。柳宗元詩「一身去ノ國六千里、萬死ー一レ十二年」

【投瓜得瓊】トウクワトクケイ 少しの物を贈りて、厚き返禮を得る。詩、衛風「投ノ我以二木瓜一報之以瓊琚」

【投繯】トウクワン くびくくりの品字塗「繯、環也、以繩爲、繯、而自縊、謂之ー一」

【投壺】トウコ 古、宴飲の際、才藝を講論する禮、矢を投り壺中に投ずる勝負ごと。禮「投壺、ー一之禮、主人奉ノ矢、司射奉ノ中、使二人執ノ壺、主人請曰、某有二枉矢哨壺、請以樂ノ賓」

【投劾】トウガイ しきくじをなげすてる、官をやめる。後漢書「ー一逸節丹鳳岡」＝投任・挂冠。

【投子】トウシ 博奕に用ふるさい。＝投・投子。

【投正】トウセイ 立ちよりて足を止める。

【投刺】トウシ ○名刺をさし出して面會を求める。漢書、朱雲傳「ー一郭舜」○名刺をなげすてる、世と交渉を絕つ義。漢武帝文「ノ解ノ鞍、以遨二陂路」

【投資】トウシ もとでをおろす事業のために資本を投ずる。

【投身】トウシン 身なげ。＝入水。

【投轅】シウ　官を棄てる義。轅は冠の動かざるやうに固めるもの。左思、招隱詩「卿欲投二吾轅一」山堂肆考「梁陶宏景、一ノ一高邁」

【投射】シヤ　物理學にて音・光などの波動が、一の物質内を通過し、他の物質との境界面に到著する義。

【投宿】シユク　とまる。劉向、九歎、平明「夕宿石城」

【投書】シヨ　○文書をなげ、こむ。魏志「太祖時有二一一誹謗者一」○新聞・雜誌などへ寄稿を送る。又、其の寄稿。‖投稿。

【投誠】セイ　誠心を以て歸服する義。「文」敵に降服するにもいふ。

【投石】セキ　○いしをなげる。史、王莽傳「一ノ一超距」○いしになげつける。漢書、刑法志「以ノ柴詈以投ノ蟲、若二卵一ノ一」

【投杼之疑】チヨ　杼をなげすてる、讒慣の人も讒言に及べば、他の疑ひを招くに至ることを喩。又、君主がたび重なれば遂に讒言を信ずるに至ることに喩ふ。史、甘茂傳「昔曾參之處費、魯人有二曾參之同名者一殺ノ人、人告二其母一、頃之、一人又告ノ之曰、曾參殺ノ人、其母織自若也、頃之、一人又告ノ之曰、曾參殺ノ人、其母投ノ杼下ノ、踰ノ墻而走」

【投擲】テキ　なげうつ。韓愈詩「中堂逢二投壺一、一一傾二聞雷一」‖拋擲。

【投報】ホウ　男女互に相思の情を通ずるにいふ。詩、衛風「匪ノ報ノ之以投ノ桃」注「投、以二木瓜一投ノ之以投ノ桃」に本づく。

【投射】シヤ　「中原逐ノ鹿、一ノ一毒二戎軒一」‖射擊。

【投袂】ベイ　たもとをふるふ、奮起する貌。左、宣十四「楚子聞ノ之、一ノ一而起」‖奮袂。

【投票】ヒヨウ　選擧又は投決などに、選擧人又は己の意思を記したる札を箱になげ入れる、いれふだ、入札。

【投鬮】ケウ　いかりを下し、ふなどまりする。

【投命】メイ　いのちをすてる。晉書「誓念一ノ一以報ノ所ノ受」‖授命。

【投老】ロウ　老年に至る義。後漢書「耶守ノ、婆娑ノ孤、苦ノ身一ノ」

【投輪】リン　つりいとを下す。列子「一ノ一沈鉤、手無二輕重一」

【投擲】テキ　つぶてをなげる。蘇軾詩「須ノ防二廚童子一、一ノ一犯二清治一」

【抖】トウ　有

○一擻　ソウ　は振ひ奉げる貌。又、さっぱりとはらひつくす。王僧孺詩「一擻胸中三斗塵」○ソウの圖

【投擲】テキ　なげうつ。韓愈詩「中堂逢二投壺一、一一傾二聞雷一」‖拋擲。

【投報】ホウ　男女互に相思の情を通ずるにいふ。詩、衛風「匪ノ報ノ之以投ノ桃」注「投、以二木瓜一投ノ之以投ノ桃」に本づく。

【投筆】ヒツ　「中原逐ノ鹿、一ノ一毒二戎軒一」‖擲筆。

【投袂】ベイ　たもとをふるふ、奮起する貌。左、宣十四「楚子聞ノ之、一ノ一而起」‖奮袂。

【投票】ヒヨウ　選擧又は投決などに、選擧人又は己の意思を記したる札を箱になげ入れる、いれふだ、入札。

【投鬮】ケウ　いかりを下し、ふなどまりする。

【投命】メイ　いのちをすてる。晉書「誓念一ノ一以報ノ所ノ受」‖授命。

【投老】ロウ　老年に至る義。後漢書「耶守ノ、婆娑ノ孤、苦ノ身一ノ」

【投輪】リン　つりいとを下す。列子「一ノ一沈鉤、手無二輕重一」

【投擲】テキ　つぶてをなげる。蘇軾詩「須ノ防二廚童子一、一ノ一犯二清治一」

【把】ハ　麻　㊀㊁㊂㊃㊄㊅

㊀にぎる(握)にぎり(握)又、之握る程の大さ。孟、告子「拱一ノ一其拳」○左手一其袖」○もつ(持)○器物の柄、として「刀一」「劍一」○たば(束)「一一」「束一」○圈まもる(守)「一門」㊁かく(掠)爬に通ず。○ひく(引)○批一ノ一琵琶。㊂つか(掃)把に通ず。

同訓異義　把・取・執・秉・操・操等の別は取(又部六畫)の條を見よ。

【把握】アク　○にぎる。又、ひとにぎり程の量。漢書「其爲物輕微易ノ藏在手一一」○人の操守をいふ。子「其平居一一」

【把火】カ　「中書一ノ一行人發」

【把玩】ガン　手にとりてもてあそぶ。陳琳文「讀ノ之掌笑、一一無厭」‖把弄。

【把弄】ロウ　把玩に同じ。‖把玩。

【把盞】サン　把酒に同じ。‖把杯。

【把子】シ　矢の尚ト「李廣芳射羽」‖隋靶子。

【把柄】ヘイ　手把。其柄、右手持、其胸」

【把手】シユ　器物のとって、斧などの柄。

【把酒】シユ　「一ノ一詩三樂麻」‖把杯、把盞。

【把捉】ソク　○とらへる。韓愈文「硬二直機鋒、嚴加二一一、知有二涌失敬、釋奪、立準ノ條」○心を堅く定めて放逸せざる義。呉澄、敬箴「一二一手中、精神心術、檢二束於外、形骸肌骨」

【把持】ジ　手に物をとりもつ、「暴ら一手に觸り持つ義。白虎通「嗣、迫也、把也、迫脅諸侯、一一其政」

【把住】ジユウ　心理學にて己に經驗せし事を永く意識の中にたもち、隨時に再現し得る心の作用。

【盈把之木】ハエイ　一ノ一にぎりの小木。韓詩外傳「一一、無二合抱之基一」

【把臂】ヒ　ひぢをとる。五に親しみあふ義。後漢書、呂布傳「臨ノ別一一言曹操、屯記に「一一入ノ林」とあるは同じく臨るるをいふ。

【把握】ヘイ　そでをとる。五に親しく相接見する義。漢元帝文「何時一ノ一共扳二心腹一」‖攜手。

【把弄】ロウ　てにとりてもてあそぶ。陸游詩「明年即入十、日月羅一一一」

【扳】ハン　刪

○ひく(挽・援・引)○よづ。‖攀。

【扶】フ　㊀㊁　麻

㊀たすける。相助ける。論語、季氏「顓臾不一一力を加へる。荀、勸學「遂生蓬中、不一一而直」又、助け、護る。○まもる(護)○支へて保護する。○よる(緣)○助小なる貌。○かたはら(旁)○一一蘂は荷の美に通ず。○一一葵は水の名。○大風。‖颱。○手の四指を竝べたる長さ。‖膚。㊁はらば「一一伏而擊之」‖匍。○ちかよる(附)

同訓異義　扶・助・輔・弼・佐等の別は助(力部五畫)の條を見よ。

【扶胥】ショ　たすけをだてる。「一一料」

【扶桑】ソウ　○神木の名。莊、在有「桑將東遊過二一一之枝一、而適遭二淳風一」○暴風。一一の二字を反切すれば、鳳、即ち暴風となる。莊、逍遙遊「摶二一一一羊角而上者、九萬里」‖扶搖。○夔。○夔よくらどきおこる義。淮南子「一一而登レ之」

【扶起】キ　たすけおこす。「一一綠荷一、水二早蟬」

【扶翼】ヨク　漢書「不レ如ノ更遣二長者一一一ノ一而西上」‖扶義。

【扶救】キウ　たすけ。たすけ。魏書、禮志「則ノ人、其母投ノ杼、踰ノ墻而走」

【扶掖】エキ　「起以齊宣留二一一之仁」

【扶筋】キン　藥草の名。本草「狗脊、一名強脊、一名一一」

【扶臥】ガ　たすけて寢ねしむ。漢書、游俠傳「因留宿食、令幹一一」

【扶傾】ケイ　かたぶきたるをたすけおこす。韓偓詩「一手扶一ノ一」

【扶擕】ケイ　たすけたづさふ。蘇軾詩「一一數百人、夜宿二荒山頂」

【扶掌】ショウ　たすけもつ。蘇軾詩「一一老幼一相遊戲」

【扶挾】キヨウ　たすけて世話をする、扶助方。からはさみすける。後漢書、祭祀志、註「兩從者一一」

【扶桑】ソウ　○東海の中にありといふ大いなる神木。山海經「湯谷之上、有二一一一、十日所レ浴」‖扶木。○轡記「一一在二扶桑海之中一、地多二林木一、葉皆如桑、又有二建樹、樹兩兩同レ根、偶生、夫、大二十餘圍、樹兩兩同レ根、偶生更相依倚、是以名焉二一一一」○支那人、日本を指していふ。王維、送二異花花の名、粵中(支那の南方の地)に詩「鄉國一一外、主人孤島中」○花の名。粵中(支那の南方の地)に產す、葉は桑に似て稍小、大紅・淺紅・黃の三色あり、大なる者は竹葉桑の如し、佛桑花と相似たり(嶺南雜記)

【扶桑拾葉集】ショウ　圖三十卷、德川光圀の撰、我國古今の假名文三百十三篇を集む。

【扶蘇】ソ　○小木の名。詩、鄭風「山有二一一一、隰有二荷華一」‖扶胥。○桑の始意の美子の名。淮謙を好む。

【扶持】ジ　たすけて介抱する。孟、離文公「守望相助、疾病相一一」‖扶護。○圖幻雲、米にて給與せし土大夫の嶺。

【扶竹】ジク　節高くして中の實てる竹。山海經「龜山多二一一一」

【扶枝】シ　つゑにたよる。漢書、賈山傳「一ノ一而往聽ノ之」

【扶風】フウ　はやて。淮南子「爽鳳目二一一」

【扶桑】ソウ　はらばふ。字解を見よ。‖一一。

【扶疏】ソ　扶蘇。

【扶風】フウ　○力をいたす。又、はらばふ。「疏、腹」「一一敷之」‖匍匐。

【扶匐】ブク　はらばふ。手を地につけて行く。漢書「一一道路」‖扶服。

【扶病】ビヤウ　やまひの介抱する。又、病をしひておす。劉遵鋼詩「爲ノ君一ノ一到二旁山」‖扶疾。

【扶木】ボク　扶桑木。淮南、地形「一一在二暘州、日之所レ出」

【扶木朝暾】ボクチヨウトン　扶桑の木の上に朝日が昇るをいふ。扶桑木は、古、日本に在りきと傳ふ。隋書、音樂志「扶木上三朝暾、崑山沈華氣」

【扶搖】ヨウ　自活する力なき者をたすけやしなふ。

【扶揺】ヨウ　劍の名。史記「一一屬鏤」注「一一屬鏤皆劍名」一記あげ

る。‖掲載。

【扶翼】フヨク ○佳き氣。韓愈文「氣之所ノ鬱蒸而不ル過ル必磅礴ー一ー一」‖扶桑。

【扶桑】フソウ たすけいたく。蘇軾詩「遊知句麗路、老稚相ー一」

【扶翼】フヨク たすける。晉書、孫惠傳「沉二能金門一、則匡二聖德一」○老人

【扶老】フラウ ○としよりをたすける。漢書「撫幼ノ一以關二聖德一」○老人の杖。古尾考略「老人所ノ持杖、日ニ扶ー一」○竹の名、節高く中實す、とするにより、故に名づく。‖笻竹也。○島の名。古今注「ー一、秀而節竹也、狀如ル鶴而大」

【扶留】フリウ 藤の異名。呉都賦「石帆水族、東風ー一」

【扮】

㊀㊁ ハフ ン・ヘ ン 諫 砌 フ 通 ン 香

㊀㊁にぎる（握）○うつかす（動）○まくる（捲）かきまぜる（攪）○史、貨殖傳、註「以椒薑ー一之」（拌和）○よあはす（合）㊀㊁打ーは俗語、○よそほふ（裝飾）いでたちる。

【紛戲子】フンギシ 種種の形によそほへる やくしゃ（俳優）優習謎に主に得意當時多謂二之至善一矣し 也、決二得詐二今一一、紛戲子、故に名づく。‖蹇、赤可ル謂二之至善一矣し 候節、是當、便

【紛奏】フンソウ よそほふよそほひいでたち。

【紛飾】フンシ よそほひかざる、みづくろひかざる。

【抜】

ブン 砌 圓

○ぬぐふ（拭）楚辭、九章「孤子唫而ー一、涙○する（摩）

【批】

㊀㊁㊂ ヘヒ ッ ヘイ 屑 支 齊 ヒ 通 香

㊀㊁㊂（手擊）○おす（推）おしひらく、しりぞける（排）○まろばす（轉）○しめす（示）是非を判決して示す「ー評」「ー判」唐書、李藩傳「制敕有不ル便者、黃紙後ー一之」臣の奏文の末尾に天子が敕答を書く。谷響集「帝表奏尾也」○へら（削）杜甫、上胡「一渡」詩「肩ー雙耳峻」○蔡邕、獨斷「尚書、謂ラ之ー一、乎、ー一ラ之所」上、琵琶。㊂ふれる、さはる（觸擊）

【批鱗】ヒリン 敵の要害の處を排擊する。史、刑洛傳「ー其逆鱗」

【批元】ヒゲン 史、孫子傳「ー一ー搏ル虛、形格勢禁」に充は吮、咽喉なり。搏虛は敵の空虛にして備なきをうつ義。

【批殺】ヒサツ うちころす。左、莊十二「宋萬遇ー一、化妃手鬥、批而殺之」

【批准】ヒジュン ○臣下より上奏に對して君主が其の主張を許可する、準は準の俗字。○條約の案文を其の當事國の主權者が承認する。

【批答】ヒトウ 天子が大臣の奏文に意見を書きて答へらるる。又、其の答文。胡、野獲編、「載政以上有二章奏一、則降二一一一以下則降ル留」

【批點】ヒテン 詩文などの妙所、要所をしめす爲め其の傍にうつ點。四庫全書總目「ー一檀弓二卷」

【批難】ヒナン 非なる事を擊ち難する。漢書、王莽傳「面ー一、注、批謂糾二閉之一也」

【批把】ヒハ 四絃の樂器。批は手を前に推す、把は手を後に引く。風俗通「ー一近世樂家所ル作」‖琵琶。

【批判】ヒハン ○是非をわかち定める。○宰相が臣下の上奏の是非をわかち示す「漢、鹽鐵論、崇禮紀」注」

【批評】ヒヒヤウ 事の是非優劣を評論する。しなさだめする。‖品評。

【抔】

ベン 蒲

てをうつ（兩手相擊）喜びて手をねうつ「歡ー一」「ー舞」

【抔悅】ベツ 手をうちてよろこぶ。鮑照文「見在二强嫌、美不ー一」

【抔手】ベシ 手をうつ。鮑照文「ー一太平」

【抔舞】ベブ よろこびて手をうちてまふ。魏志、文帝紀「誰言之命、莫ル不ニ一一」滿岳賦「英ル不ル一一手庶西」‖抔踊。

【抔踊】ベヨウ 手をうちてよろこびをどる。南史、朱异傳「僅兼一一、傾竹維新」‖歡欣踴躍。

【抔】

ホウ イ 灰 尤 ホウ 音

○すくふ（掬）手にて物を掬ふ。○圓匙ふんど（等）

【抔飲】ホウイン 掌にてすくひのむ。禮運「汙尊而ー一、蕢桴而土鼓」

【抔土】ホウド ひとつかみの土。又、墓の義。漢書、張釋之傳「假令陛下無二長陵一一、陛下且言何以加二其法一」注、抔之土未ル乾」

五　畫

【拗】

㊀㊁ ヨウ・エウ ヤウ 有 圓 爻 巧

㊀㊁「執ー」「ー强」○くじく（拉）○をる（折）○すねる、心がひがむ。○たがふ（違）韓愈詩「世路終難ー一」㊂おさふ（抑）

【拗強】ヨウキヤウ ねぢけてがらじゃら。柔子厚、頻「王臨川（安石）天資亦有ニ一

【拒】

㊀㊁ ヨ キョ 魚 圓

㊀ふせぐ（捍禦）防禦する「拒ー一」「孫子、九地「敵不ル及ー一」○ふせぎ、そなへ「石ー一」「後ー一」○こばむ、ことわる、きき入れず「ー一」「諫」○あたる（抵）○ふたがふ（違）論、「子張「其不可者ー一之」㊁方形。‖矩。○方陣、方形の陣。左、桓五「爲ニ右ー一、以當ニ陳人」

同 圓 圓 圓 ヨ 拒・防・禦・扞・捍・閑の別は防（阜部四畫）の條を見よ。

【拒扞】キヨカン ふせぐ、ふせぎ。蜀志、先主傳、注「連營ニ一一、先主手治」‖禦扞。

【拒諫】キヨカン いさめをこばむ。後漢書、申屠剛傳「ー一ー者塞」‖距諫。

【拒絳】キヨカウ 茨菰の異名。「宋草」蘇軾に「知二陳遵出一一花」詩」ある。

【拒止】キヨシ 防ぎとめる。‖距止。

【拒絕】キヨゼツ ふせぎ、こばむ。‖拒否。

【拒否】キヨヒ 拒絕に同じ。

【拒牽】キヨケン 遼國官の異稱「拒雅」

【抵】

㊀㊁ テイ 齊 圓

㊀ー摸、は持ち去る。○さぐる（探）㊁㊂もつ（持）○くむ（把取）○おびやかす（劫）

【拠】

ケン 寒 圓

○ー處」

【拠矢】ケンシ やををる。又、折れし 鏃手、制度「ー一ー折ー手」‖折矢。

【拠惡】ケンアク いかりをおさふ、怒を抑制する。班固、西都賦「乃ー一而少息」

【拠言】ケンゲン ャ・ヲの二行の音が他の音と合して生ずる熟音。ちゃ、しゅ、きゃ、くわの類。

【拠體】ケンタイ 一定の平仄の式によらざる近體詩。即ち絕句律詩の變格の一種、杜甫の詩に最も多し。「鄭谷詩學ー一子瞻之演」の類の如し、三體詩にー一の節あり。

【扼】

ヤク ケク 陌

○とる（把捉）にぎる（握）○おさふ（抑）「ー腕」‖扼捉。

【押】

㊀㊁ カフ ッ 陷 圓

㊀かきはん（署）さゃな（草名）「花ー一」「署ー一」○おす、おさふ（按壓）○制御をおす、按印する。○管（拘）おさへつけらる、檢ら（束）する「ー送」「ー收」○ふむ、詩に韻字を用ふる「ー韻」㊁雕額を之い ふ。徐陵、玉臺新詠「珠雕以ニ

武、理、爲「ー」○のり（規律）○よる（相因）○なる（習）漢書、息

夫躬傳「羽檄電、述而ー一王」‖狎。○國おす、無理に强ひる「ー責」

【押韻】オウイン 詩の韻をふむ。宋史、藝文志「頌孟ー一十卷」

【押衙】オウガ めつけ役をおきたる鄉官なるさかもり、衙府を管理する職。宋史、歐陽修傳「修遷二翰林學士、使、夏丹、其主、命二貴臣四人一一目、此非二帝制一、以二卿名重、故耳」‖管兼。

【押衙】オウガ 官名、天子の護衛兵の長をいふ、衙は儀仗侍衛の義。唐書「金吾天子ー一」

【押後兵】オウコウヘイ おさへの兵。紀効新書「ー一二十五名、各用二長槍一」

【押字】オウジ かきはんの文字。蘇田錄「今俗謂二草書名一爲ー一也、韻會「押、壓也、今人言二文字押署一、是也」‖花押、華押。

【押收】オウシウ 官にて人民の財產をさしおさへる。‖沒收。

【押署】オウショ 印をおし名を書く、署名捺印する。韻會「押、壓也、今人言二文字ー一是也」

【押送】オウソウ 罪人を護送する。

【押丁】オウテイ 國監獄署の最下級の役人。

【押班】オウハン 百官の位次をとりしまる。又、其の官名。唐書、百官志「明會要、察御史二人ー一」

【押領使】オウリヤウシ 國王朝時代に諸國の亂暴人をとりしまる爲めに派遣せし官吏。

【押】

ヒ 齊 圓

ひく（引）‖拽。

【抗】

イウ 陽 圓

あぐ。臼より物を舉ぐ。詩、大雅「或舂或ー一」

【拐】

カイ 圓

○て（手）あし（足）○えだ（枝）俗に杖の義とす。○かたる、かどはかす、人を誘ひ出して他に賣る「ー騙」「誘ー」

【拐主】カイシュ かどはかす。

【拐兒】カイジ かたり、かどはかし。黃允文、雜錄「嗜歡童、ー一縣三縣人得ル手」

【拐人】カイジン かたり、かどはかし。‖拐兒。

【拐帶】カイタイ かどはかす、かたりて物をもちにげる。

【拐杖】カイジヤウ 國つえ。

【拐子馬】カイシバ 元の兀朮の軍中にて華宋を以て馬隊三人づつを連れ敵に向ふをいふ。宋史、岳飛傳「三人爲ル一一」

【拐騙】カイヘン かたり、かどはかす。政刑大觀、强盜竊盜「ー一犯盜」

【拐】

ヒ 齊 圓

ひく（引）‖拽。

【抗】

イウ 陽 圓

あぐ。臼より物を舉ぐ。詩、大雅「或舂或ー一」

【拐】

カイ 圓

○て（手）あし（足）○えだ（枝）俗に杖の義とす。○かたる、かどはかす、人を誘ひ出して他に賣る「ー騙」「誘ー」

【拐主】カイシュ かどはかす。

【拐兒】カイジ かたり、かどはかし。黃允文、雜錄「嗜歡童、ー一縣三縣人得ル手」

【拐人】カイジン かたり、かどはかし。‖拐兒。

【拐帶】カイタイ かどはかす、かたりて物をもちにげる。

【拐杖】カイジヤウ 國つえ。

【拐子馬】カイシバ 元の兀朮の軍中にて華宋を以て馬隊三人づつを連れ敵に向ふをいふ。宋史、岳飛傳「三人爲ル一一」

【拐騙】カイヘン かたり、かどはかす。政刑大觀、强盜竊盜「ー一犯盜」

【拐】

ヒ 齊 圓

ひく（引）‖拽。

【抗】

イウ 陽 圓

あぐ。臼より物を舉ぐ。詩、大雅「或舂或ー一」

【拐】

カイ 圓

○て（手）あし（足）○えだ（枝）俗に杖の義とす。○かたる、かどはかす、人を誘ひ出して他に賣る「ー騙」「誘ー」

【拐主】カイシュ かどはかす。

【拐兒】カイジ かたり、かどはかし。黃允文、雜錄「嗜歡童、ー一縣三縣人得ル手」

【拐人】カイジン かたり、かどはかし。‖拐兒。

【拐帶】カイタイ かどはかす、かたりて物をもちにげる。

【拐杖】カイジヤウ 國つえ。

【拐子馬】カイシバ 元の兀朮の軍中にて華宋を以て馬隊三人づつを連れ敵に向ふをいふ。宋史、岳飛傳「三人爲ル一一」

【拐騙】カイヘン かたり、かどはかす。政刑大觀、强盜竊盜「ー一犯盜」

【拘】㊀㊁コウ・ク　㊂ヨウ・ク　尤虞　拘通は香コウ俗字

㊀とどむ（止）手にて止む。○とる、とらふ（執）「執一」とら はる。○まがりさはる（曲礙）所多し。史、汲黯傳「不一二文法」法律規則などに一泥せず。㊁かかふ（擁）曲禮「以秩一而退」○かがむ（曲）＝句。○とる（取）曲禮「不」然則自下一之」○ひきあつめる（捜聚）○圖かか反鈎の結果を生じたる意をあら はす。

【拘引】ケウイン　警察官が現行犯又は嫌疑者を警察署にひき立てつれ行く。＝勾引・引致。

【拘忌】クキ　かかはりいむ、氣にかけて過慮し、ばかる。書、蔡邕傳「服飾麗異、無所二一一」

【拘束】コウソク　とらへてとゞめる。＝拘引・束縛。

【拘繫】クケイ　とらへつなぐ。書經、疏「主一一當刑殺者」＝拘束・拘縛。

【拘牽】クケン　かかりあひ、なづみひかれる。宋濂詩「煩慮縈一一」

【拘拘】コウコウ　かかはる貌。又、屈して伸びざる貌。爽澄詩「夫夫落落志、西河

㊀ひろふ（拾）○をる（折）張衡賦「一一若菲而蹻踏」㊁ひらく（斥開）ひろげる「開一」○ひろうし（廣）○ゆく（承）○おす（推）手にて物を推しつける。韓愈「宋一」「明一」＝掃。

同部異讀　拆・開・闢・啓・披等の別は開（門部四畫）の條を見よ。

【拆殘】ダク　開墾と殖民と「一一銀行」＝拓地殖民。

【拆錯】ダク　寺をいふ。後人撰りて拓を招に作る。杜甫詩「更宿一一城闕晚」

【拆若】ダク　若衆風曉」

【拆地】ダク　土地をひらく。一國の領土を擴張する。唐書、吐蕃傳贊「明盤有三邊鄙、而一一夫大」＝開地。

【拆本】ダク　いしずり、古の碑帖を摹印せし本。法帖譜系「往年一一、猶有三典刑」＝搨本。

【拆落】ダク　○ふしあはせ（不遇）おちぶれる。揚雄、解嘲「何爲官之一一也」＝落魄。○廣大なる貌。〔魏都賦〕

【拙】セツ　座

○つたなし、へた。巧の反對「迂一」「窮一」○かがむ（屈）○己己の謙稱。＝愚。○己己の物事に添へて謙辭とす「一文」「一妻」

【拙謙】セツ　拙劣に同じ。

【蹙一拙】セツ　拙きを恥じてあらはさず。世說、輕詆「徐帝聘一、蔡、時魏收文學、北朝之秀、收謙、未交集、以示沈約、約曰、吾國三之左丘、徐遜清、江沈之目、吾國三魏公一一」

【守一拙】セツ　つたなきを守りて己の分に安んずる。陶潛詩「閒一荒南野際一一歸園田」

【拙鈍】セツ　つたなくおろか。抱朴子「以三切卷之至言、爲三一一」

【拙愚】セツ　はとをいふ。衆を蔑むに拙き愚の意。韓愈「拙者美、如愚、巧者美、如一一」＝拙愚。

【拙吟】セツ　つたなき詩歌。＝拙詠。

【拙宦】セツ　住官の術に拙くして下位に在るをいふ。宋之問詩「以手一一、一一、動手遇三瓦蠅」

【拙計】セツ　つたなきはかりごと。蔡邕之詩「一一安足、爲」＝拙策。

【拙妻】セツ　己の妻の謙稱。水滸傳、第六回「奠三一一一同來、洞はいばら貧の貌の貌に、貧度の義。＝拙妻、拙妻。

【拙業】セツ　つたなき生業。貧、貧窮傳「田農一一也、寶業小業也」

【拙工】セツ　つたなき職人、へたな大工。武藏心「大匠不爲一一改」

【拙業】セツ　己の妻の謙稱。李白詩「一一好、業、蠶」＝山妻、荊妻、拙荊。

【拙作】セツ　つたなき出來己の詩藝などを謙していふ。

【拙策】セツ　つたなきはかりごと。＝拙計。

【拙劣】セツ　つたなくおとる。白居易詩「一一才何用」＝劣拙。

【拕】ダ　副　に或作る

ひく（曳）

【拕弗】ダ　ふれをひく。漢書、酷吏傳「一一而入水」

【拖】タ

拕（前條）に同じ。

ひく。論衡、儒增「加面服、一一紳」

【拖曳】タ　ひく。魏志、注「大不一能一行、復令三步人一一」

【拖沙魚】タ　比目魚の異名〔鐵菱〕

【拖柴】タ　むらさきの印綬をひく。高位に登る義。晉書、顧林傳、論「紆一帛一、服一鬼彩一、軒」

【拖】タ

㊀つかむ（攫）つかみ合ふ。○ひく（牽引）○とらふ（捕）罪人を拘捕する。㊁ひきからまる（連引）漢書、嚴安傳「調一而不解」○もむ（揉）

【拖攫】タ　つかみ合ふ。西京賦「羆虎升而一一」

【拖捕】タ　とらへる。＝拿捕。

【拆】セキ　副　に一作る

㊀セキ　㊁セキ

【拆】セキ　つたなくおとる。白居易詩「一一才何用」＝劣拙。

【拕】ダ　副　に或作る

ひく（曳）

【拕弗】ダ　ふれをひく。漢書、嚴助傳「靈、鳴而說、說一一而入水」

【拖】タ

拕（前條）に同じ。

ひく。論衡、儒增「加面服、一一紳」

【拖曳】タ　ひく。魏志、注「大不一能一行、復令三步人一一」

【拖沙魚】タ　比目魚の異名〔鐵菱〕

【拖柴】タ　むらさきの印綬をひく。高位に登る義。晉書、顧林傳、論「紆一帛一、服一鬼彩一、軒」

【拖】タ

㊀つかむ（攫）つかみ合ふ。○ひく（牽引）○とらふ（捕）罪人を拘捕する。㊁ひきからまる（連引）漢書、嚴安傳「調一而不解」○もむ（揉）

【拖攫】タ　つかみ合ふ。西京賦「羆虎升而一一」

【拖捕】タ　とらへる。＝拿捕。

【拆】セキ　副　に一作る

㊀セキ　㊁セキ

㊀ひろふ（拾）○をる（折）張衡賦「一一若菲而蹻踏」㊁ひらく（斥開）ひろげる「開一」○ひろうし（廣）○ゆく（承）○おす（推）手にて物を推しつける。韓愈「宋一」「明一」＝掃。

同部異讀　拆・開・闢・啓・披等の別は開（門部四畫）の條を見よ。

【拆殘】ダク　開墾と殖民と「一一銀行」＝拓地殖民。

【拆錯】ダク　寺をいふ。後人撰りて拓を招に作る。杜甫詩「更宿一一城闕晚」

【拆若】ダク　若衆風曉」

【拆地】ダク　土地をひらく。一國の領土を擴張する。唐書、吐蕃傳贊「明盤有三邊鄙、而一一夫大」＝開地。

【拆本】ダク　いしずり、古の碑帖を摹印せし本。法帖譜系「往年一一、猶有三典刑」＝搨本。

【拆落】ダク　○ふしあはせ（不遇）おちぶれる。揚雄、解嘲「何爲官之一一也」＝落魄。○廣大なる貌〔魏都賦〕

【拙】セツ　座

○つたなし、へた。巧の反對「迂一」「窮一」○かがむ（屈）○己己の謙稱。＝愚。○己己の物事に添へて謙辭とす「一文」「一妻」

【拙謙】セツ　拙劣に同じ。

【蹙一拙】セツ　拙きを恥じてあらはさず。世說、輕詆「徐帝聘一、蔡、時魏收文學、北朝之秀、收謙、未交集、以示沈約、約曰、吾國三之左丘、徐遜清、江沈之目、吾國三魏公一一」

【守一拙】セツ　つたなきを守りて己の分に安んずる。陶潛詩「閒一荒南野際一一歸園田」

【拙隙】セツ　つたなくおろか。抱朴子「以三切卷之至言、爲三一一」

【拙愚】セツ　はとをいふ。衆を蔑むに拙き愚の意。韓愈「拙者美、如愚、巧者美、如一一」＝拙愚。

【拙吟】セツ　つたなき詩歌。＝拙詠。

【拙宦】セツ　住官の術に拙くして下位に在るをいふ。宋之問詩「以手一一、一一、動手遇三瓦蠅」

【拙計】セツ　つたなきはかりごと。蔡邕之詩「一一安足、爲」＝拙策。

【拙妻】セツ　己の妻の謙稱。水滸傳、第六回「奠三一一一同來、洞はいばら貧の貌の貌に、貧度の義。＝拙妻、拙妻。

【拙業】セツ　つたなき生業。貧、貧窮傳「田農一一也、寶業小業也」

【拙工】セツ　つたなき職人、へたな大工。武藏心「大匠不爲一一改」

【拙業】セツ　己の妻の謙稱。李白詩「一一好、業、蠶」＝山妻、荊妻、拙荊。

【拙作】セツ　つたなき出來己の詩藝などを謙していふ。

【拙策】セツ　つたなきはかりごと。＝拙計。

【拙劣】セツ　つたなくおとる。白居易詩「一一才何用」＝劣拙。

【拕】ダ　副　に或作る

ひく（曳）

【拕弗】ダ　ふれをひく。漢書、嚴助傳「靈、鳴而說、說一一而入水」

【拖】タ

拕（前條）に同じ。

ひく。論衡、儒增「加面服、一一紳」

【拖曳】タ　ひく。魏志、注「大不一能一行、復令三步人一一」

【拖沙魚】タ　比目魚の異名〔鐵菱〕

【拖柴】タ　むらさきの印綬をひく。高位に登る義。晉書、顧林傳、論「紆一帛一、服一鬼彩一、軒」

【拖】タ

㊀つかむ（攫）つかみ合ふ。○ひく（牽引）○とらふ（捕）罪人を拘捕する。㊁ひきからまる（連引）漢書、嚴安傳「調一而不解」○もむ（揉）

【拖攫】タ　つかみ合ふ。西京賦「羆虎升而一一」

【拖捕】タ　とらへる。＝拿捕。

【拆】セキ　副　に一作る

㊀セキ　㊁セキ

【拆】セキ　つたなくおとる。白居易詩「一一才何用」＝劣拙。

【拕】ダ　副　に或作る

ひく（曳）

【拕弗】ダ　ふれをひく。漢書、嚴助傳「靈、鳴而說、說一一而入水」

【拖】タ

拕（前條）に同じ。

ひく。論衡、儒增「加面服、一一紳」

【拖曳】タ　ひく。魏志、注「大不一能一行、復令三步人一一」

【拖沙魚】タ　比目魚の異名〔鐵菱〕

【拖柴】タ　むらさきの印綬をひく。高位に登る義。晉書、顧林傳、論「紆一帛一、服一鬼彩一、軒」

【拖】タ

㊀つかむ（攫）つかみ合ふ。○ひく（牽引）○とらふ（捕）罪人を拘捕する。㊁ひきからまる（連引）漢書、嚴安傳「調一而不解」○もむ（揉）

【拖攫】タ　つかみ合ふ。西京賦「羆虎升而一一」

【拖捕】タ　とらへる。＝拿捕。

【拆】セキ　副　に一作る

㊀セキ　㊁セキ

「一一才何用」＝劣拙。

【拕】ダ　副　に或作る

ひく（曳）

【拕弗】ダ　ふれをひく。漢書、嚴助傳「靈、鳴而說、說一一而入水」

【拖】タ

拕（前條）に同じ。

ひく。論衡、儒增「加面服、一一紳」

【拖曳】タ　ひく。魏志、注「大不一能一行、復令三步人一一」

【拖沙魚】タ　比目魚の異名〔鐵菱〕

【拖柴】タ　むらさきの印綬をひく。高位に登る義。晉書、顧林傳、論「紆一帛一、服一鬼彩一、軒」

【拖】タ

㊀つかむ（攫）つかみ合ふ。○ひく（牽引）○とらふ（捕）罪人を拘捕する。㊁ひきからまる（連引）漢書、嚴安傳「調一而不解」○もむ（揉）

【拖攫】タ　つかみ合ふ。西京賦「羆虎升而一一」

【拖捕】タ　とらへる。＝拿捕。

【拆】セキ　副　に一作る

㊀セキ　㊁セキ

【拆】セキ　つたなくおとる。白居易詩「一一才何用」＝劣拙。

【拕】ダ　副　に或作る

ひく（曳）

【拕弗】ダ　ふれをひく。漢書、嚴助傳「靈、鳴而說、說一一而入水」

【拖】タ

拕（前條）に同じ。

ひく。論衡、儒增「加面服、一一紳」

【拖曳】タ　ひく。魏志、注「大不一能一行、復令三步人一一」

【拖沙魚】タ　比目魚の異名〔鐵菱〕

【拖柴】タ　むらさきの印綬をひく。高位に登る義。晉書、顧林傳、論「紆一帛一、服一鬼彩一、軒」

【拖】タ

㊀つかむ（攫）つかみ合ふ。○ひく（牽引）○とらふ（捕）罪人を拘捕する。㊁ひきからまる（連引）漢書、嚴安傳「調一而不解」○もむ（揉）

【拖攫】タ　つかみ合ふ。西京賦「羆虎升而一一」

【拖捕】タ　とらへる。＝拿捕。

【拆】セキ　副　に一作る

㊀セキ　㊁セキ

傳、賈「其多疏略、或有二一一一」‖抵觸。

【抵罪】ティザイ　罪の輕重にしたがひて當の刑にあてる。史、高祖紀「傷ヲ人相及ボス一ヲ」

【抵死】シイ　死に至る。又、死罪に當てる。

【抵掌】シイショウ　たなごころをうつ。勢よく手をうちて話す。戰國策「一而談、趙王大悅」抵一に抵に作る。‖鼓掌。

【抵觸】シイショク　○ふれあたる、ふれをかす。周禮、封人、注「猶衝所ニ以令ヲ不ソ得ヲ一一人」○兩事互に矛盾することをいふ。

【抵當】ティタウ　○ひきあて（擔保）しちぐさ。‖抵押。○法律にて一一幅の目的物。

【抵突】ティツ　つきあたる。後漢書、臧宮傳「內圍愛ニ其一一」‖衝突。

【抵敵】ティテキ　うちもやぶる。後漢書、劉聖公傳「一一書案」

【抵抗】ティカウ　おしのける。抵抗し排斥する。

【抵冒】ティボウ　犯すこと。ひをかす、刑律を觸犯する。漢書、禮樂志「習俗溺ル惑、民人一一」

【拈】ネン　圓

○ひねる（孤）○つまむ「一香」杜甫詩「合西柔葉可ヲ一」

【拈香】ネンカウ　香をつまみくゆらす。祖庭事苑、釋氏之作ニ佛事ヲ、未ダ嘗不ル以ニ一一焉ヲ先」‖燒香。

【拈華微笑】ネンクワビセウ　圓　蓮華を拈りて衆に示ししに、衆其の意を解せざりしが、迦葉而微笑せり、これ其の意を悟りしにて、以心傳心の妙處なり、よりて釋迦は之に佛教の眞理を授けたる故事。五燈會元「世尊在ニ靈山會上ニ拈華示ヲ衆、是時衆皆默然、惟迦葉尊者破顏微笑、世尊云、吾有ニ正法眼藏涅槃妙心實相無相微妙法門、不立文字、教外別傳、付ニ囑摩訶迦葉ニ」

【拈出】ネンシュツ　ひねり出す、談話、又、句を案出する。楊萬里詩「一一老話、問ニ手指ニ未來消尚只愛奚」

【拜】ハイ　圓

○をがむ、おじぎする、體をかがめて敬意を表する「伏一」「起一」「迎一」「遙一」「跪一」○おじぎ。周禮、春官、大祝「大祝辨九一ヲ」○かがむ（屈）かがめ折る。詩、召南「勿翦勿一ヲ」○官を授けられる。いただく、あがりが官を授けられる「一ヲ恩」○手紙又は談話の時などに敬意を表する「一觀」「一借」「一呈」

【拜位】ハイイ　官を授けられる。易林「遷ニ官ヲ授ケラレ位ヲ」

【拜官】ハイクワン　官を授けられる。易林「遷ニ官ヲ授ケラレ位ヲ」

於嘉國、一一ヲ進ル時」

【拜揖】ハイイフ　兩手を上下し、又、兩手を推して胸につける禮。唐書、王縉傳「性簡放、不ル喜一一」

【拜謁】ハイエツ　つつしみてまみえる。史、資治通鑑

【拜恩】ハイオン　けるる。北史、王曙傳「受ニ詔天朝、一一ニ一私室」

【拜賀】ハイガ　つつしみてよろこびを申す。通鑑、後漢均王紀「帥ニ羣臣一一一」

【拜謝】ハイシャ　お目にかかる。對面の敬語。‖拜眉、拜老。

【拜跪】ハイキ　をがみてひざまづく。十六國春秋「爾朱榮跪而不ル起ル命、斯小臣之罪矣」

【拜金宗】ハイキンシウ　金鍍をあがめ尊む主義。

【拜拱】ハイキウ　兩手をこまぬきて禮を爲す。宋松詩「衰病配一一」

【拜具】ハイグ　つつしんでつぶさに申し陳べる。手紙の尾にかく語。‖敬具。

【拜火教】ハイクワケウ　火を神としてをがむ宗教。波斯のゾロアスター教の類。

【拜官】ハイクワン　官に就く時、君の前に拜す、故に任官の義とす。夢溪筆談「唐制、宗耶一ヲ一、卽ニ宿龜門、謝、今三司副使已上一一、則拜ニ辭于階上ニ」

【拜觀】ハイクワン　觀るの敬語。‖拜見。

【拜迎】ハイゲイ　禮拜してむかへる。禮記「不ル敢一一、而拜送」

【拜啓】ハイケイ　兩手を上下し、又、兩手を推して胸につける禮。唐書、王縉傳「性簡放、不ル喜一一」

【拜謁】ハイエツ　つつしみてまみえる。史、資治通鑑

【拜恩】ハイオン　けるる。北史、王曙傳「受ニ詔天朝、一一ニ一私室」

【拜賀】ハイガ　つつしみてよろこびを申す。通鑑、後漢均王紀「帥ニ羣臣一一一」

【拜領】ハイリヤウ

||包圍。

【抱一】ほういつ　一をいだき守る、道をたもつ。老子「聖人―ノ―爲二天下式」―說、守約に同じ、―は少の義なり。

【抱合】ほうがう　○だきあふ。||抱圍。○化學にて異種類の物が物質上の變化なくして一つの物になる。

【抱義】ほうぎ　正しき義理をいだきたもつ。禮記「―ノ―而處」

【抱玉】ほうぎよく　○たまをかかへもつ。劉向、新序「和抱二其玉一泣盡夜哭」○轉じて心に智德をいだくに喻ふ。後漢書「―ノ―乘ノ龍」

【抱懷】ほうくわい　心に思ふ。又、こころざし、しんがく。||懷抱。

【抱關擊柝】ほうくわんげきたく　關は門の閂閉をすることんぬき、門番と拍子木を打ちて夜を警むる者と。共に位ひくき役。荀、榮辱「―ノ―、而不二以爲一榮」孟、萬章「―者、皆有二帝職一」

【抱月】ほうげつ　月をいだく。夏侯湛、寢獸「朝奈挺ノ電ノ夕震ノ」

【抱膝】ほうしつ　ひざをかかへる。白居易詩「影伴ノ身」

【抱節君】ほうせつくん　竹の異名。蘇軾の詩に見ゆ。

【抱葉】ほうよう　飾らざるきぶりを保つ。漢書「兆民反ノ本、一ノ一懷ノ樸」||抱樸。

【抱住】ほうぢう　住は止、だきとめる。任彥昇「大秉二素樸一氏―ノ―之」

【抱朴子】ほうぼくし　八卷、晉の葛洪撰す、內篇は神仙修煉の事を論じ、外篇は時世の得失、人事の是非を論ず。

【抱冰】ほうひう　自ら刻苦辛勤する義。吳越春秋「目夷則攻ノ之以ノ襲、足寒而流ノ之以ノ水、冬寒ノ―、夏還埋ノ之以ノ火」

【抱負】ほうふ　物をいだくこと、おふこと。後漢書、馮衍傳序「四方學士、英ノ不下―ノ―、雲奔二會京師一」轉じて心にいだくかんがへ。

【抱腹】ほうふく　捧腹の誤。

【抱樸】ほうぼく　其の本來の眞性を守りて物欲に煩はされざる義。老子「見ノ素ノ―ノ―、少ノ私寡ノ欲」||抱素。

【抱襲】ほうしう　だきかかへてそだてる。管子「傅太后―ノ―之」

【抱表】ほうへう　すきをもつ。蹠游詩「―ノ―新湖莉、鏡ノ含古岡樽」

【拍】ヒヤク　匣

○うつ（拍・搏）たたく、手のひらを打ち合せて聲を出す。「―手」○樂曲の節。「舞―」「胡笳十八―」○轉に同じ。周禮「饋食之豆、其實豚―」○一實は鏡面。

同音異義　拍・滑・打・撲・征・討等の別は征（彳部五畫）の條を見よ。

【拍子】ひやうし　○音曲の拍節。狹義の調子を助けそろへる義。國○○ひやうし義は上に同じ。○こころあひ、はずみ、機會。

【拍手】はくしゅ　てのひらをうつ。高長庚詩「笑―ノ―呼」

【拍手】はくしゅ　てをうつ。晉書、樂術傳「我昨夢令中馬舞數十人向ノ馬ノ―、此何祥也」||鼓掌。

【拍手喝采】はくしゅかつさい　てをうつてほめそやす。

【拍刀】はくとう　○もりはの刀。「湖幡小品」○柱だて長き佩刀「大雲山房雜記」

【拍賣】はくばい　せりうり。||國賣買。

【拍拍】はくはく　はたはたとうつ。鶴の羽音などにいふ。韓愈詩「青泥搖兩―ノ―不ノ得ノ離」

【拍板】はくばん　拍子を取る爲め打ち鳴らす板。堅木三片を用ひ、其の二を束ね、一片を以て之を拍ち、以て樂を節する物。「野記」元史、禮樂志「―制以ノ木爲ノ板、以ノ繩聯ノ之」

【拍髀】はくひ　○股をうちたたく。後漢書「―ノ―仰ノ天而笑」○佩刀の短きもの。「王莽傳」

【拍浮】はくふ　水をおよぐ。梁簡文帝「少年特愛二乘解一、解ノ衣趨ノ水」||浮拍。泅水。

【拔】ハツ　㊀㊁㊂　ハバツ　イツ　薬　曷　圏　俗抜字は

㊀ぬく（抽）引きぬきて取る。韓愈、送溫處士序「胡取二一人一而用焉」「其丈」ぬきんづつ（擢）「―擢」○うつす（移）易、乾卦「離爲二其丈」ぬきんづつ（擢）「―擢」○俗に誤りて拔を用ふ。㊁わかつ（分析）○俗に調和する義、かきまぜる。

【拌蛙】はんあ　はまぐりをわりて珠を取る。史、龜策傳「鱉石―ノ―、億萬二天資」

【拔】ヒツ　㊀㊁　ヒツ　薬　麻

㊀ひらく（開發）史、五帝紀「黃帝―山通道」ひらける、うらあける。漢書、鄭陽傳「―心腹見情素」○わかつ、分けてやる。左、昭五「―其邑」わかる（分析）○きる、衣服を著る（被）○ふびく（蹶）○―は長きの誤。又、解け亂れる。○きる（裂）史、范雎傳「木實繁者―」其枝」○―蹶は蹶ひおそれる。又、ばらばらになる。

同音異義　拔・閥・閥・肆・啓・發等の別は閥（門部四畫）の條を見よ。

【拔因】ひついん　ひらきけみす。唐書、段成式傳「識因書錄」||拔蓋。

【拔講】ひつこう　詩歌の會にて其の作り詩歌を開きて讀みあげる。

【拔記】ひつき　には、かに起こる。拔は擢。漢書、陳項傳「―ノ―龍旂之中」

【拔距】ひつきよ　人をぬき取る。遊俠傳、距は拒、防禦を使して捕へる義。漢書、甘延壽傳「投石―ノ―、超二手等一」

【拔擢】ばつてき　擢、衆中より抜き出でてまさる。漢書、例韻傳「聰明特達、出乎其不可」―」○はなる（離）たつ（絕）史、孝武紀「龍旂―」㊂めぐる（回）○○としし、はやし（疾）○○にはか（猝）○ひとりだつ（特立）○やはず（矢未）○のごとく（除）史、淮陰侯傳「一趙幟」○城を攻め落す。攻めて之を奪ぐ「攻―」○やどる（舍止）||芟。㊃木が柯えと葉とを生ずる。

同音異義　拔・擢・拜・抽・貶の別は擢（手部十四畫）の條を見よ。

【拔河】ばつか　綱引きの遊戲。氣節文節記「中宗幸二梨園一、命二侍臣一、爲二―之戲一、以二大麻繩兩頭繫二十餘小繩一、每繩數人執之以競、力弱爲レ輸」

【拔解】ばつかい　官吏の無試驗にて採用せらるる義。隨園隨筆「外府不レ試而真、考目二―見一國史補、大抵即免解也」

【拔角胚胎】ばつかくはいたい　胚は雞のけづめ、角は獸の角。反騷の利器を拔び取るに喻ふ。韓愈詩「或拔二其角一或配二其胚一、反騷洋洋、無有二匿龜一」

【拔起】ばつき　には、かに起こる。拔は擢。漢書、陳項傳「―ノ―龍旂之中」

【拔距】ばつきよ　人をぬき取る。遊俠傳、距は拒、防禦を使して捕へる義。漢書、甘延壽傳「投石―ノ―、超二手等一」

【拔擢】ばつてき　擢、衆中より抜き出でてまさる。漢書、例韻傳「聰明特達、出

乎其不可」―」○はなる（離）たつ（絕）史、孝武紀「龍旂―」㊂めぐる（回）○○としし、はやし（疾）○○にはか（猝）○ひとりだつ（特立）○やはず（矢未）○のごとく（除）史、淮陰侯傳「一趙幟」○城を攻め落す。攻めて之を奪ぐ「攻―」○やどる（舍止）||芟。㊃木が柯えと葉とを生ずる。

同音異義　拔・擢・拜・抽・貶の別は擢（手部十四畫）の條を見よ。

【拔河】ばつか　綱引きの遊戲。氣節文節記「中宗幸二梨園一、命二侍臣一、爲二―之戲一、以二大麻繩兩頭繫二十餘小繩一、每繩數人執之以競、力弱爲レ輸」

【拔解】ばつかい　官吏の無試驗にて採用せらるる義。隨園隨筆「外府不レ試而真、考目二―見一國史補、大抵即免解也」

【拔角胚胎】ばつかくはいたい　胚は雞のけづめ、角は獸の角。反騷の利器を拔び取るに喻ふ。韓愈詩「或拔二其角一或配二其胚一、反騷洋洋、無有二匿龜一」

【拔起】ばつき　には、かに起こる。拔は擢。漢書、陳項傳「―ノ―龍旂之中」

【拔距】ばつきよ　人をぬき取る。遊俠傳、距は拒、防禦を使して捕へる義。漢書、甘延壽傳「投石―ノ―、超二手等一」

【拔擢】ばつてき　擢、衆中より抜き出でてまさる。漢書、例韻傳「聰明特達、出

【拔議】ばつぎ　ひらきはらふ。事等を開き國を平げる。劉禹錫「唐詩品彙」「李武皇帝、――經營凡十四年」

【拔置】ばつち　〔物〕「一ノ一詔」三王答」＝拔斥。

【拔剃】ばつてい　髢を剃る。髮陰比事落す、初めて髢となる。「――幾年」＝拔線剃髮。

【拔底】ばつてい　ひらきのべる。「――」

【拔貳】ばつに　「――」＝拔貳。

【拔擢】ばつてき　「――」＝拔擢。

【拔拔】ばつばつ　なが き鎗。劉向「九歎」「服二衆衣之――」＝拔拔。

【拔擺】ばつはい　○草木が風に吹かれて飜り亂れる鎗。司馬相如賦「應ノ風――、吐ノ芳揚烈」○ひらきなびく、聾ひ伏す鎗。史、項羽紀「羽大呼驚下、漢軍皆――」

【拔服】ばつふく　きものをきる。又、著物。北史、李公緒傳「鎧――、無ノ急長之慮」＝拔服。

【拔拂】ばつふつ　拔葉が風に動きて分れる。博異志「綠衣――鏘盈盈、淡染雲間踏」「――雲輕」「――」

【拔漂】ばつひよう　ちゃらめんをひらく。北史「或忘二其年名一者、ノ一以非之」

【拔魔】ばつま　繪畫の筆法の名、魔の葉を拔きたる如き石の筆法の名。南宗畫家皆之を用ふ。

【拔覽】ばつらん　ひらき見る。北史、周明帝「尋武皇帝、――經營凡十四年」

【拔離】ばつり　○ところをうちあける。李陵「詩」「一ノ一詔二王答」＝拔斥。

【拔剃】ばつてい　髢を剃る。髮陰比事落す、初めて髢となる。「――幾年」＝拔線剃髮。

【拔底】ばつてい　ひらきのべる。「――」

【拔貳】ばつに　「――」＝拔貳。

【拔拔】ばつばつ　なが き鎗。劉向「九歎」「服二衆衣之――」＝拔拔。

【拔擺】ばつはい　○草木が風に吹かれて飜り亂れる鎗。司馬相如賦「應ノ風――、吐ノ芳揚烈」○ひらきなびく、聾ひ伏す鎗。史、項羽紀「羽大呼驚下、漢軍皆――」

【拔服】ばつふく　きものをきる。又、著物。北史、李公緒傳「鎧――、無ノ急長之慮」＝拔服。

【拔拂】ばつふつ　拔葉が風に動きて分れる。博異志「綠衣――鏘盈盈、淡染雲間踏」「――雲輕」「――」

【拔漂】ばつひよう　ちゃらめんをひらく。北史「或忘二其年名一者、ノ一以非之」

【拔魔】ばつま　繪畫の筆法の名、魔の葉を拔きたる如き石の筆法の名。南宗畫家皆之を用ふ。

【拔覽】ばつらん　ひらき見る。北史、周明帝紀「性好二典籍一、――覽百家、――」

【拔離】ばつり　○ばらばらにひきなれる。宋玉、風賦「王二其將一、――」○拔葉の散り亂れる鎗。吳均詩「――」

【拔濾】ばつろ　心の中を少しも隱さずうちあける。「肝膽を――す」上官儀、謝二致仕一表「――丹恩、語非二矯誣」

【拔飾】ばつし　○ひらきあらはす。後漢書、耶頭傳「――肝膽」○圖ばつ。廣く人に寢裝する。ひろめる。又、ひろめ。

【拊】

㊀㊁㊂ フ・ホ　通　㊃ フ　國

㊀なづ、なでやすんずる「慰――」左宣十二「――而勉之」＝撫。○うつ（擊・拍）かるくたたく「――心」「――石」○にぎり（握）○つか、つまみ、刀の柄。○樂器、章を以てつくり、中に鐵を入れ、形鼓の如し。㊁つく（附著）る、手を物につける。㊂命――は人名、黃帝の時の名醫。

同音同訓異義　拊・打・撲・拍・征・討・擊等の別は征（彳部五畫）の條を見よ。

【拊金】ふきん　つけ加へる。＝附錄。

【拊絃】ふげん　琴をしらべる。李賦「――安歌、新聲代起」

【拊循】ふじゅん　なでやすんずる。史、司馬相如「性好――、――卒度論」＝撫・慰。

【拔】

【拔】

【拔】

「一一」折二手節屈曲段、也」

【按脈】アンミャク　血液の循環を診察する。素問「素問診者、察色一一」

【按劍】アンケン　おさへる。離騷詩「玉平無二一一」＝抑按。

【按曆】アンレキ　こよみをしらべる。後漢書、律曆志「一一而候之」＝考曆。

【拽】エツ　圏　作本、捷に作る。

ひく（曳・引・拖）地をひきずり行く。

【拽尾】エイビ　身をひく。朱子語類「康節九事繩竈、一一、便一一退」

【捐】ケン　捐（手部七畫）の俗字。

【挍】カク　圏　同校に

○くらぶ（比・角）彼と此とを数をはかる。○はかる（計・量・度）「貫巧不可勝一」○むくゆ（報）論語、泰伯「犯而不一」○かんがふ（較・考）學者の德行行道藝などの優劣をはかり考へる。禮記、「中年考一」正字通「明末、嘉宗ノ諱ヲ避ケテ、校省シテ挍ニ作ル」

同 較・計・謀・圖・量・度・稱・測・料・忖等の別は計（言部二畫）の條を見よ。

【拷】コウ　圏　ガ通ウ書

○かすむ（掠）○うつ（打）罪を白狀させる爲めに打つ。

【拷問】ゴウモン　拷問に同じ。

【拷問】ゴウモン　○拷問。○尋めてきびしく罪をしらべる。＝鞫問・按問。

【拷掠】ゴウリャク　○かすめとる。＝掠奪。○うちてしらべる。＝拷按。

【拷】カク　圏

○（一）うつ（擊）格に通ず。魏志、任域王傳「手一猛獸」○ただかふ（鬪）○とどむ（止）○あぐ（舉）（二）提一はひく（牽引）

【拷殺】ゴウサツ　傳「吐」奴下ノ事、因一一之」

【拷問】ゴウモン　つかみあふ。くみうちする。＝拷問。

【拷問】ゴウモン　拷書、帝奚傳「與二亜人一一」＝拷問。

【拱】キョウ　圏　ク・ケ

○はたらく、手と口と共にはたらく。○とる、もつ（掬持）（二）する（樣）終一而殺之」

「句踐終一而殺之」

【拱揖】キョウユウ　手と口と共に作す貌、いそしく働く形容。詩、豳風「予手一一」

【拱】キョウ　圏　共或は省して

（一）こまぬく（斂手）兩手の指をくみ合せて敬禮する。論、微子「子路一而立」○とる（執）兩手で合せ持つ。又、それ程の大さ。左、僖三「一一爾壽之木」矣」○大いなる璧珙に通ず。（二）をさむ○こまぬく。

【拱揖】キョウユウ　矢能に同じ。揖は揖。

【拱揖】キョウユウ　兩手をこまぬきてえしゃくする。揖は手を胸に著けて敬禮する。宋、呂祖謙傳「謝然一一」＝拱揖。

【拱辰】キョウシン　四方の民が天子の德化に歸する義。論語、爲政「子曰、爲政以レ德、譬如北辰居二其所一而衆星共レ之」に本づく。共・拱通ず。宋史「式奬一一之志」＝拱揖。

【拱手】キョウシュ　○兩手の指を合せて、こまぬく、人を敬ふ禮。曲禮「遭二先生于道一趨而進、正立一一」○手を組みる。「何事をもせず。後漢書、公孫述傳「天水隴蜀、一一自眠」

【拱樹】キョウジュ　兩手もて圍む程の大木。

【拱璧】キョウヘキ　璧の一種。人を見ればこまぬきを立つが如くするによりて名づく。闕井子「帥一一立」禮」＝璧璧。

【拱把】キョウハ　拱は兩手にて圍む、把は片手にて握る。孟、告子「一一之桐梓、人苟欲レ生レ之、皆知レ所二以養一之者」

【拱璧】キョウヘキ　大いなる玉。左、襄二八「與二我其一一」＝拱璧。

【拳】キョウ　圏　ケン通

官「上罪格一而桎」

【挂】ケイ　圏　ケ通ウ書

（一）かく、かかる（掛懸）ひっかける「一一冠」「感一一」○かぎる（畫）○ささはる（礙）＝罫。（二）わかつ（別）分ちて明かにする。荘、盜跖「一一功名」＝解。

とる（飼取）

同 掛・懸・係・繫・繫・繫等の別は係（人部七畫）の條を見よ。

【挂錫】ケイシャク　錫杖をかく。僧の一處に留まるにいふ。釋氏要覽「僧止所レ住處、名一一」僧の遊行を錫飛といふの對。

【挂漏】ケイロウ　もれる。挂は遺記、此を記して彼を漏らす。周伯琦詩「紀勝猶一一」

【挂冠】ケイカン　かんむりをかく。官を退くにいふ。風流動、興レ人書、東都退一一之臣」＝挂冠。

【挂衣】ケイイ　みの。後漢、江愈詩「春雨滿三

一一」＝用衣。

【挂冠】ケイカン　かんむりをかく。官を退くにいふ。後漢書、逢萌傳「萌謂二友人一曰、三綱絕矣、不レ去將禍作、乃挂レ冠二東都城門一、棄二家屬一、浮レ海、客遼東」＝解冠。

【挂齒】ケイシ　齒牙にかける。史記「何足レ挂二于齒牙一」論ずるに足らざる。

【挂綬】ケイジュ　官の印の紐を懸く、官を退くにいふ。元稹詩「陶君三千七、一一出二都門一」＝挂冠。

【挂帆】ケイハン　むしろの帆を揭げる。謝靈運詩「一一出海月」

【挂帆】ケイハン　ほをあげ。祖詩「一一遠色外、鱗浪滿三炎楚」＝挂席。

【挂龍用】ケイリョウヨウ　暴雨の旋風を帶ぶるもの。洪覺範詩「己收一一雲」

【括】クワツ　圏

○くくる「包一」むすぶ（結）しめくくる（約束）○ひきくるめる。ひとまとめにする。賈誼、過秦論「囊一四海」天下を統一する。○とづ（閉）○いたる（至）詩、王風「日之夕矣、牛羊下一」○とりしまる（檢）しらべる。○たづねきはめる（根刷）○はず（矢末）＝筈。○あふ（會）あつまる。詩、小雅「德音一一」

【括囊】クワツノウ　囊の口をとづる。轉じて口を閉ぢて言はず。易、坤卦「六四一一、无咎无譽」

【括約】クワツヤク　しめくくる。

【括約筋】クワツヤクキン　生理學にて環狀の筋の名。兩種の纖維あり、一は覺放の用を爲し、一は收束の用を爲す。膀胱の口、肛門等にあるもの。

【括】クワツ　圏

○ひっさげる（提）「扶一」「一壺」禮、王制「班白者、不レ提一」かけもつ（懸持）○とどのふ（修整）○手をひきてたすける（相扶持）「左提右一」（二）かく（缺）○たづつ（繩）○わりふ、契に通ず。○板に書したる文書。

【括香】クワツカウ　括香を見よ。

【括結】クワツケツ　すべくくる。易繫「一一否閉、賢人乃隱」

【括弧】クワツコ　文章又は數學に用ふる符號。（）〔〕｛｝「」『』の類。

【括香】クワツカウ　とばりにて花を護る囊。王建詩「蓮葉寺穩宗宮中花開、則以重頂幄、裹二蓋曬慈二壓二惜香御史一、參レ之、號曰一一、雲仙雜記、作二括香」

【括囊】クワツノウ　囊の口をとづる。轉じて口を閉ぢて言はず。易、坤卦「六四一一、无咎无譽」

【括】クワツ　圏

○もとどめる。○もとめる。○もとめる。○もと

（排擠）

【掇】サツ　圓

○せまる（逼）韓愈詩「淵鑑相排一」事の降る形容。○挨一ツイは推し進めて進む。○答禮・應接一ツイはふしをくずす。答禮・應接。

【指】シ　圓

○ゆび「手一」大一は拇一、第二は食一、第三は中一、又、將一、第四は無名一、第五は小一。○さす（斥）ゆびさす、さししめす（示）大學「十手所一」○さしまねく（麾）○おもむき（歸趣）趣旨。孟、告子「言近而一遠者、善言也」○むね、こころばせ（意向）「意一」「要一」漢書、孔光傳「不ニ希ニ一ノ荀合」＝旨。

同副類語　指・刺・侍・殺の別は刺刀部六畫）の條を見よ。

【指意】イし　むね。史、孟子荀卿傳「因發明孟子一其一一」＝旨意。

【指甲花】ツカフ　鳳仙花ホウセンカの異名。其の花にて指甲を染めるが故。

【指揮】キし　さしづする。史、淮陰侯傳「嘗有ニ蹈禍之一一一也」＝指麾。

【指揮官】クワンキ　軍隊を指揮する長官。

【指麾】キし　さしまねく。麾は旗の類にてさしづするにいふ。「荀、成相、注」孫奏、爲ニ石仲容一與ニ孫詒一書「誠力雲合、一一風從」＝指揮。

【指畫】クワし　○手指にてえがき、態に示しをしめす。嘯、王羲「凡有ノ一一一於君前一用ノ筋」○ダし指先に畫をつけてえがく、唐の張璪に創まる。

【指環】クワン　ゆびわ。南史、阿羅漢傳「獻ニ金剛一一」＝戒指。

【指顧】コし　○ゆびさしかへりみる。陳師道詩「句寒江山麗ニ一一一」○轉じて手に取る如く近く見える義に用ふ「一一の間に在リ」○迅速をいふ。張衡賦「一一陵忽」

【指爪】ツメし　指のつめ。後漢書、鄭玄傳「以ニ大鯨一掬ニ一一中」唐書、文藝傳「李賀七歲能辭筆ニ沮眉至一一」

【指支】シさ　さくる。唐書「首尾一一」

【指示】シし　○ゆびさししめす。漢書、蕭何傳「獄誠一ニ一歌邑者人也」○さしづする、命令。

【指示代名詞】イシダイメイシ　文法にて事物をゆびさししめすことば。其・此・彼などの類。

【指使】シし　事を指さして人を使ふ。曲禮「六十曰ニ一一」

【指事】シジ　六書の一、其の字の形が直に其の意義を示すもの。上・下・本・末・旦などの類。

【指針】シシ　○磁石のはり。○磁針は常に北を指して方角を示すによりて、轉じて、しるべ、教導の義とす。

【指令】シレイ　たなどこころをゆびさす。事の進だ爲し易き義。「晉、仲尼諸居「治ノ國其如ニ指掌一而已乎」

【指授】シジさし示してをしへさづける。管書、文帝紀「咨嗟一一、制勝千里」

【指趣】シシュ　おもむき、むね、宗旨意義。「華嚴序「會ニ五經之一一」」＝旨趣。

【指斥】シセキ　ゆびさす。嫌言「一一貴伸不ニ顧忌」

【指嗾】シソウ　さしづして使ふ、けしかける。蘇軾詩「北伐ニ夫戎ニ隨ニ一一」

【指導】シダウ　をしへみちびく。＝教導。

【指彈】シダン　つまはじき、指を曲げ念だの行ある人を忘み難ふ義。＝摘斥。

【指定】シテイ　それとさしてきめる「一一送箱」

【指嶺】シレイ　○ゆびにて樣々、ひきかく嶺一に掛に作る。列、黃帝「一一無ニ積雪一」○人の過失又は書物の誤謬などをあばきいだす。北史、王劭傳「一一經史謬誤、爲ニ讀書記三十卷一」

【指點】シテン　一一ゆびさし示す。ニ、點をうつが如し、故にいふ。杜甫、少年行「一一銀瓶索ニ酒嘗」

【指頭】シトウ　ゆびさき。＝指尖。

【指南】シナン　指南車の方角を知らしむる如く、人ををしへみちびく。張衡賦「予習ノ非而塗迷也、爭見ノ一一一於吾子」＝指針。

【指南車】シナンシャ　櫓を挽置せし車。宋書、禮志「一一、宋朝如ニ設車一、設ニ木人於車上一、舉ノ手指ノ南、車雖ニ回轉一所ノ指不ノ移、其起始周公所ノ作、以來ニ遠外遠使一」古今注には黃帝の創作とす。

【指撥】シハツ　ゆびさきにてはじきならす。つめ。嫌字詩「一一絲一一淋風前」

【指名】シメイ　其の人の名をさす。史、項羽紀「非ニ吾所一一一也」

【指目】シモク　手にてゆびさし目にて見る。史、陳勝傳「皆一一陳勝」

【指教】シケウ　ゆびのはしにあらはるる滿愛、又は樂曲のすぢ「一一法」

【指令】シレイ　何書又願書に對する官の命令「一一書」

【希指】キシ　希は旨に同じ、人の氣に合ふやうに勉める。迎合する。漢書、外戚傳＝希旨。

【惜指失拳】セキシシツケン　物ををしみて、大事をあやまるをいふ。侍兒小名錄「宋阿嵌有ノ美目ニ張麗華、美而有ノ體、阮佃夫見悅ノ之、贈袋子嵌、不ノ可ノ得、佃夫怒目「――、塗圖ニ有司ニ、以ニ公事一、罪ノ嵌至死」

【嚴指】キシ　笑氣嚴しくして指を落す。後漢書、高帝紀「會ニ大雪一、士卒一ノ凍者什ニ三」

【優指】ユウシ　ゆびをかがめて數へる。荀、儒效「雖ノ有ニ聖人之智一、未ノ能ノ一也」＝屈指。

【屈指】クツシ　ゆびを折り數へる。＝優指。

【拾】シフ　圓

○ひろふ、とる（掇）○をさむ（收斂）「一收」○ゆづる（射轉）弓を射る時、左の臂に著くる具。○と、とを、十に通用す、官文書、辭書類に多く用ふる。

同副類語　拾・掇・摭・攝・攝の別は探り收むる義。漢書「其取ニ者柴、如ニ淺拾ニ地芹」○掇は拾ひ取るる義、多くひろふに用ふ。詩經「采ニ采芣苢、薄言掇之」○摭・攝の二字同じ、多くひろひ集める義。史記、荀卿・孟子・韓非之徒、生生生攝、言攝春秋之文、以著書」○攝は摭に同じ。

【拾遺】シユイ　○おちのこれるをひろふ。「史、本史公自序」○君主の心づかざる過失などをひろひあげて諫めること。史、汲黯傳「願下出ニ入禁闥一、補ニ過」○同上の事を掌る官名。唐書、百官志「補闕一一、掌ニ供奉諫諍」

【拾遺記】シユイキ　王嘉撰す、伏羲・神農・黃帝以下、晉代に至る遺事を記す。

【拾芳】シフハウ　取り得るの安きをいふ。漢書、夏侯勝傳「其取ニ者柴、如ニ淺拾ニ地芹耳」

【拾級】シフキフ　階段をひろひて登る。曲禮「――レ一聚足連步以上」

【拾收】シフシウ　ひろひをさめる。又、亂れたるものを集めもとの如くに收める。＝拾斂。

【拾集】シフシフ　ひろひあつむ。

【拾掇】シフセツ　たきぎをひろふ。後漢書、承宮傳「爲ニ諸生一一一鋤、苦數年、勤學不倦」

【拾取】シフシユ　ひろひとる。

【拾摭】シフキ　ひろひとる。殺波文「一一遺餘」＝拾攝。

【拾攝】シフセフ　ひろひ取る。王令詩「奚禽冬饑啄ノ地食、一一穀糧一無ニ餘遺」

【拾得】シフトク　ひろふ。蘇軾記「李麟一一小石ニ用爲ニ書鎮」

【拯】ショウ　圓

○きよむ（清）○ぬぐふ（拭）○かわかす（燥）○ふるふ「一衣」＝振。

【拯】ショウ　圓　ジ通書ヲ

○すくふ（救濟）たすく（助）左宣十二「目ニ于習井而一一之」習井は水の無きるど。○あぐ（舉）

同副類語　拯・救・援・濟の別は救（支部七畫）の條を見よ。

【拯救】キウキウ　たすけすくふ。宋書「臨往地芹耳」

【拓】タク　圓

○ひらく、ひらく（開）○ひろふ（拾）○とる（掇）○をさむ（收斂）「一收」○ゆづる（射轉）弓を射る時、左の臂に著くる具。○と、とを、十に通用す、官文書、辭書類に多く用ふる。

同副類語　拓・摭・攝・攝○拾は探り收むる義。漢書「其取ニ者柴、如ニ淺拾ニ地芹」○摭は拾ひ取るる義、多くひろふに用ふ。詩經「采ニ采芣苢、薄言掇之」○攝・攝の二字同じ、多くひろひ集める義。史記、荀卿・孟子・韓非之徒、生生生攝、言攝春秋之文、以著書」○攝は摭に同じ。

【拓道】タクダウ　○おちのこれるをひろふ。「史、本史公自序」○君主の心づかざる過失などをひろひあげて諫めること。史、汲黯傳「願下出ニ入禁闥一、補ニ過」○同上の事を掌る官名。唐書、百官志「補闕一一、掌ニ供奉諫諍」

【拓道記】タクダウキ　王嘉撰す、伏羲・神農・黃帝以下、晉代に至る遺事を記す。

【拓芳】タクハウ　取り得るの安きをいふ。漢書、夏侯勝傳「其取ニ者柴、如ニ淺拾ニ地芹耳」

【拓殖】タクショク　○ふく、ぬぐふ（拭）巾にて垢を去る「拂一」「拭一」「洗一」○きよめる（清）

【拭淨】シキジヤウ　ふききよめる。＝拭清。

【拭清】シキセイ　ふききよめる。＝拭淨。

【拭拂】シキフツ　ぬぐひ去る。韓偓詩「一ニ一朝饋ニ待ニ垂明一」

【拭目】シキモク　めをぬぐひ見る。詳かに觀察する義。漢書、蘇武傳「天下莫ノ不ニ一一ノ一ノ化聽ニ風」

【拭淚】シキルイ　なんだをぬぐふ。＝拭涙。

【拵】ソウ　圓　風元

㊀よる、すわる、すゑる（据）㊁さしはさむ（插）○國こしらへる、こしらへる。製作する。

【拏】ダ　圓　魚麻　同奉に

一一」＝救恤。

【拏恤】ジユツ　すくひめぐむ。唐書、李武帝紀「宜ニ時一一救ニ其彫困一」

【拏贍】ジセン　救ひにぎはす。北史、魏宣武紀「以ニ六鎮大飢、開ノ倉一一」

【拏携】ダケイ　すくひいたはる。唐書「國ノ宜一一」

【拏擊】ダゲキ　襲へたるをすくふ。北史「遂有ニ匡ノ賊一一之志一」

【拭】ショク　圓

○ふく、ぬぐふ（揩）巾にて垢を去る「拂一」「拭一」「洗一」○きよめる（清）

【拭淨】シキジヤウ　ふききよめる。＝拭清。

【拭清】シキセイ　ふききよめる。＝拭淨。

【拭拂】シキフツ　ぬぐひ去る。韓偓詩「一ニ一朝饋ニ待ニ垂明一」

【拭目】シキモク　めをぬぐひ見る。詳かに觀察する義。漢書、蘇武傳「天下莫ノ不ニ一一ノ一ノ化聽ニ風」

【拭淚】シキルイ　なんだをぬぐふ。＝拭涙。

【持】チ　圓　支

○もつ、とる（執）「把一」「支一」にぎる（握）禮、射義「一弓矢」○まもる（守）「護一」○たもつ（保）「保一」もちこたへる、保存する。○たすける（扶）「匡一」「扶一」○たす（制）荀、正名「猶引ニ繩墨一以一曲直」○任一は寺のあるじの僧。○國軍一は水を汲む具。＝鉼有の義「所一」「受一」又、所有の義「所一」

㊀もつ（持）○ひく（引）㊁ひく（牽）○いり亂れて「紛一」○わづらはす（煩）○もつ（持）○のびず「拘一」

【持擲】ジテキ　つかみあひ。揚雄、羽獵賦「闘兎之抵觸、熊羆之一一」

【拿】ダ　圓

前條に同じ。

【拿捕】ダホ　前條に同じ。

【拶】サツ　圓

○わかつ、さく（析）○さる（去）○うつ（拍）

【持】チ　圓　支

○もつ、とる（執）「把一」「支一」にぎる（握）禮、射義「一弓矢」○まもる（守）「護一」○たもつ（保）「保一」もちこたへる、保存する。○たすける（扶）「匡一」「扶一」○たす（制）荀、正名「猶引ニ繩墨一以一曲直」○任一は寺のあるじの僧。○國軍一は水を汲む具。＝鉼有の義「所一」「受一」又、所有の義「所一」

【持資】ジ　十分の地位を保ちて失はず。淮南子「孔子見二老聃一曰、善哉、子一老者乎」宋史「願陛下一守レ成、慎レ終如レ始、蓋易簡の語。」＝持満。

【持戒】カイ　圖佛の倫理・邪淫・妄語・殺生・飲酒の五つの戒をとりまもる。法華經「一一清潔、如二浄明珠一」＝持律。

【持蓄】チク　○はかりごとをもつ。唐書「天下之勢、宿レ一一」○人才を許量する。杜甫詩「一一聖漢盛」

【持議】ギ　己の議論を執り守る。宋史、首授傳「遇レ事、一一不二苟合一」＝持説。

【持久】キウ　長くもちこたへて堅ぜず「一一之計」東方朔、答客難「嚬目一一、積二數十年一」

【持玩】グワン　手にもてあそぶ。白居易詩「魚中得二魂寶一、一一何益耐」

【持鏡】ケイ　ほこをもつ。又、其の兵士。「丈、平原君傳「今楚地方五千里、一一百萬、此霸王之資也」

【持劍】ケン　つるぎをもつ。說苑、子路「一一」

【持國天】ジコク　圖四天の一、東方の天國。一一王は四天王の一、東方の天國を守り善を賞し惡を罰する佛。

【持齋】ザイ　○ものいみを持し守る。唐高僧傳「一一布施」○佛の戒律を守りて魚食する。白居易詩「自日一一夜半羅」

【持参】ジサン　圖もってくる。

【持参金】ジサンキン　圖結婚する時、持ちて行くかね。

【持正】ジセイ　ただしき道をとり守る。晉書「三人兼レ位、足二相一一」

【持配】ハイ　己の意見を固くとり守る。又、其の言論＝持論。

【持節使】ジセツシ　天子よりの節を賜はりて出づる使者。韓愈文「乘相其還二宗室四品一一人、持レ節往使、君其往」

【持廚】ジチウ　もちもち行きておくる。陶弘景詩「不レ堪一一二君」

【持續】ジゾク　永くもちつづける、いつまでもつづく。＝永續。

【持重】ジチウ　おもおもしくする。後漢書「任隗傳「同レ心舉レ力、一一處レ世」

【持筆】ジヒツ　ふでをもつ。魏志、注「提レ牘一一」＝執筆・把筆。

【持病】ジビヤウ　永くわづらひて治せざる病氣。＝痼疾・宿痾。

【持佛】ジブツ　圖自分の居間にする又は身にうけて常に信仰する佛「一一堂」

【持平】ジヘイ　公平にして偏らず。漢書、杜延年傳「議論一一、合二和朝廷一」

【持滿】ジマン　○月を十分ひきしぼる。史、周昭夫傳「彎二月琴一レ一」＝引滿。○十分なる地位をたもちこたへる。淮南子「周公可レ謂能一一矣」＝持盈。

【持參】ジサン　圖結婚する時、持ちて行くかね。

【持正】ジセイ　ただしき道をとり守る。晉書「三人兼レ位、足二相一一」

【持配】ハイ　己の意見を固くとり守る。又、其の言論＝持論。

【持節使】ジセツシ　天子よりの節を賜はりて出づる使者。韓愈文「乘相其還二宗室四品一一人、持レ節往使、君其往」

【持廚】ジチウ　もちもち行きておくる。陶弘景詩「不レ堪一一二君」

【持續】ジゾク　永くもちつづける、いつまでもつづく。＝永續。

【持重】ジチウ　おもおもしくする。後漢書「任隗傳「同レ心舉レ力、一一處レ世」

【持筆】ジヒツ　ふでをもつ。魏志、注「提レ牘一一」＝執筆・把筆。

【持病】ジビヤウ　永くわづらひて治せざる病氣。＝痼疾・宿痾。

【持佛】ジブツ　圖自分の居間にする又は身にうけて常に信仰する佛「一一堂」

【持平】ジヘイ　公平にして偏らず。漢書、杜延年傳「議論一一、合二和朝廷一」

【持滿】ジマン　○月を十分ひきしぼる。史、周昭夫傳「彎二月琴一レ一」＝引滿。○十分なる地位をたもちこたへる。淮南子「周公可レ謂能一一矣」＝持盈。

【持服】ジフク　圖喪にして服用する。

【持牟】ジボウ　とりまもる。ことかたし。獻帝傳「監軍之計、計在二一一」

【持論】ジロン　己の固く執り守る議論。淡書、隱林傳「一一巧變、易家不レ能レ難」

【挃】チツ　圖

○つく（搗）○禾をかる聲。

【挃挃】チツチツ　禾を刈ること。詩「周頌「載レ之一一」

【挑】

㊀㊁㊂　タウ　テウ　ウ　豪・篠・蕭

○かかげ（掲）「一燈」○たわむ（撓）○うつ（擣）○すする（啜）○うすし（薄）能に通ず。○になふ（肩荷）杖を以て物を擔ぐ。○とる（取）○ええらぶ。○くじる（穿抉）○めぐる（宛轉）㊁くひく（引）○もてあそぶ（弄）○いどむ、人の心を興奮さす。史、司馬相如傳「以琴心一之」「又、しかけ」る、いざなふ（誘）「一戰」○たはむれる（戲）○ねる。＝挑。㊂一達は輕佻跳躍して相鋭、達は放恣。又、往來輕佻跳躍して相見る。詩、鄭風「一今達今」

【挑燈】トウ　○挑は高くあげる義。挑燈は燈をあげる。又、かきたてる義。挑燈と用ふ。○燈は高くあげる義。文選「挑レ燈高遊」○燈は衣のつまをとる義、窕・挑・裊・嬲・嬈と用ふ。

【挑撥】トウハツ　たたかひをいどむ。左、宣十二「超厨而一レ一」

【挑燈】トウチウ　「眞月必紗籠、雖レ亦必一一」

【挑燈】トウチウ　○ともしびの火をかきたてる。盛論詩「一一更惜レ花」○トウチウ　圖提灯の別字。

【挑燈】トウチウ　かかげあげる。又しかける。李昇詩「主人若也初一一一」＝挑燈。

【挏】トウ　圖

○かかくひく（擁引）○うごく（動）「一投」

【拓】タク　陌

本拓字の

○うつ（擊）

【拌】ハン

圖かせぐ「國字」

【拗】ヨウ

圖字。

むしる、つかみてちぎり離す。毛る。

【挨】アイ　七　皇

○うつ（擊）○おす（推）次を以て相推す。○おしひらく（旁排）○しひてすすむ（强進）○あひちかづく（物相近）○圖身に受けつる義「一打」「一罵」○圖一拶アイはこと。又、ふしぐくの義。

【挨拶】アイサツ　○前に在るものをおしけて遇ひ。忘憂清夜、節林問道篇「昔者天子登封、泰山、其時、士庶一一、獨召二一縣尉一行レ饗、而前呼目官、人來、衆皆靡然」○圖答禮。應對などの義。

【挹】イフ　緝

○くむ（汲酌）「一水」詩、大雅「一彼注茲」○ひく（引）邪、漢詩「左一彼丘袖」○こまぬく、拱に通ず「敬一」「拱一」○おさふ（抑）しりぞく（退）苟、苟、苟、「所謂一而損之之道也」わがまま抑へ退ける。

同訓異義　挹・汲・酌・酳の別は汲（水部四畫）の條を見よ。

【挹掬】キクク　手にすくふ。又、くむ。蘇軾詩「一一自一一」

【捐酌】ジシャク　「所レ以一一洪流」合肥弥芳上」

【捐損】ジソン　おさへてくりくだる。魏志、減龔后傳、注「后寢食減一一」字解參看。＝損抑・抑損。

【捐注】ジチウ　くみそそぐ。詩、大雅「泂酌彼行潦、一一彼注レ茲」

【捐毒】ジドク　古の國名、今の奉天省治の東北及吉林・黑龍江は皆其の地、今の奉天嶺嶺縣の南六十支那里に故城址あり。

【捐】エン　陌

俗捐字は

○すつ（弃棄）漢書、賈嬰傳「侯自一我得レ之、自我一レ之、無レ所レ恨」○のがれさる（除去）○へらす（損）史、吳起傳「一一不二急之官一」○救助の爲め、己の金品を差出す「義一」○官位を得る爲め、金錢を政府に納めること「一班」○法の名「醫一」「獻一」

【捐金】エキン　金をすてる。後漢書「乃一二一子財、而遂事而舉」

【捐軀】クク　みをすつ。晉書、嵇紹傳「一一身をすてて國難をすくふ。

【捐館】クワンカン　住みしやかたをすてる。賈人の死をいふ。戰國趙策「今秦駘君一一一舍」

【捐生】セイ　いのちをすてる。漢岳駘「甘一一而自引」＝捐命。

【捐棄】キ　棄てられて、飢死してやせ衰くる。漢書、食貨志「蓋有二五年之水、湯有二七年之旱一、而國亡二一一者、以蓄積多而備先具一也」

【捐廢】ハイ　すてて用ひられず。漢書、賈誼傳「流離成二都鄙一、常恐復一一」

【捐忘】ボウ　すてわすれる。阮籍詩「吹噓能以鑑、江湖相一一」

【捐命】メイ　いのちをすてる。漢書、諸葛豐傳「故常願レ捐二一旦之命一」＝捐生・頭命。

【拾】カウ　丙

かきあつめる、ひろ（亂）＝攪。後漢書、馬融傳「散二毛氏族一、羽翼」

【掐】

㊀㊁　カク　コク　陌・麥

○つのとる（角）「掐一」㊁さす、つきさす（刺）＝搾。

【捍】カン　圖

○ふせぐ。禮、祭法「能一大患」則祀之」＝扞。ふせぎまもる（衛）○ゆづる（抬）弓を射るに弦のはじき當るを防ぐ爲めに左臂にはめるもの。○たけし（猛烈）史、貨殖傳「民雖一少」感」＝悍。

同訓異義　捍・防・禦・拒・圉の別は防（阜部四畫）の條を見よ。

【捍衛】エイ　ふせぎまもる。

【捍蔽】ヘイ　ふせぎふさぐ。防止する。魏書、帝紀「部二豪山中險路之處、悉令二一一」

【捍壘】ラン　ばつ、樂器の鼓をかきならすもの、捍は鼓をはじく義。唐書、禮樂志「樂工木爲レ面、象形爲二一一」

【捍遏】カツ　國境を防ぎ守る。魏書、薛虎子傳「且捍且守、不レ効レ一一」

【掘】キツ　屑

つちふる、穿土の器。左、襄九「陳春一、具二糞壤一」

【掘穿】セン　もっぱら。字解參看＝掘。

【掘】

㊀㊁㊂　キツ　クツ　キウ　物・屑・沃

○もも、土を埋の中に盛る。○かきあつめる（持）㊁細長き鋭。詩、周頌「有二一其角一」㊂すくふ。漢書、谷永傳「共服一レ之」＝救。○とどまる（止）○まもる（護）

同訓異義　掘・救・窟・穿・濟の別は救（支部七畫）の條を見よ。

【掘】クツ　圖

ひろふ、ひろひとる（拾取）＝

撰。

同訓異語　掊・拾・掇・撿の別は拾（手部六畫）の條を見よ。

【掊】キ　ひろひとる。北史、周世宗紀「一二衆書」＝拾取・掊擒。

【掊斂】キレン　なをとる。つみなをする。

【掊拾】シウ　ひろひあつめる。蘇味道詩「野蔬衆一一、田叟去謳吟」

【掊擒】キン　ひろひとる、掊は一に擢。擒に作る。史、十二諸侯年表「一一秦秋之交、以著」＝擢擒・擢擒・擢擒。

【捖】

㊀㊁㊂ ①ケツ ②ツン ③ツン　闕　早　寒

①けづる（刮）する（摩）②すり（摩）③すり（摩）〇すり（摩）③すり、けづる。周禮、冬官、註「一摩之工、謂玉工也」＝刮。

【挾】

㊀㊁ ①セツ ②フ　平　葉

①はさむ、さしはさむ、物との間にはさむ。〇もつ（持）おびる（帶）所持する。〇わ（夾）きばさむ（挾）こわきに抱へる。〇恃、ゆみてほこる。孟、萬章「不一一長、不一一貴」〇おびやかす（脅）蜀志、諸葛亮「令諸侯」〇たすけ傳「一一天子、以令諸侯」〇もつ（持）蜀志、趙雲傳、註「先主一一手而別」〇（捔）「一一」

同訓異語　捖・夾・浹・捂の別は物を（手部七畫）の條を見よ。

【捖】ヨウ　平　陽　鹽　に通じて作る。梧桐書。〇ほこる（恃）〇ほこむ（藏）一書は藏書。〇ほまもる（護）〇いだく（懷）〇あふ（會）㊁あまねし。＝浹。めぐる（匝）荀、禮論「方皇周一」〇十干を日に配して甲の日より數へて次の甲の日に至る迄の十日間の稱「一旬」

同訓異語　挾・夾・浹〇挾は物を兩方より はさむなり。孟子「一一泰山一而超北海」〇夾は左右持也、夾鄉と通用す。挾に通ず。〇鋏はさしこむ義、笛をうらるを插鋏といひ、本文の行間に註を入るを、插註といふにて知るべし。

【挾義】キヤウ　正しき道を心にいだく。韓詩外傳「鳳象德、懷真仁、抱一一」

【挾貴】キヤウ　富貴をたのみて人にほこる。孟、萬章「不一挾長、不一一一」

【挾琴】キヤウ　ことをかかへたづさへくる。江總詩「風流一一一」

【挾纊】クワウ　わたを身につけ持つ。左、宣十二「楚子伐鄭、申公巫臣曰、御人多衆、王鴻三軍、猶而無勉、一一、心憚之士、皆如一一、心憚之士、皆如一一、心憚之士、皆如

子孫一一今」○愛んなる錢。左、僅五「均慶一一」

【振鐸】シンタク ○ふるひおそれてつつしびの北史、蕭仲武帝紀「機略嚴明、事無二縱治、于ノ是弱將一一」○亂れたる規律などをきびしく改めただすこと。「官紀一一」

【振卹】シンジュツ あはれみめぐむ。南史、吳平侯蕭像傳「會一年荒、計ノ口一一」＝振恤・振救。

【振宣】シンセン ふるひのべて明かにすこと。「宣文」「一一一圖光」

【振貸】シンタイ にぎはしかす。漢書、文帝紀「體ノ所三以一一一之」

【振盪】シンタウ ふりうごかす。盪は動。＝振動。

【振鐸】シンタク すずをふり鳴らす、鐸は鈴。「振鐸」「司馬一ノ、寧事作ノ樂」

【振振】シンシン ふるひうごく。蘇敏詩「海水一一魚龍驚」＝振動。

【振天】シンテン 聳ぶ天上にまでふるひ響く。家語「子路曰、願得白羽若ノ月、赤羽若ノ日、鼓鼓之音、上振三於天、下振三於地」

【振天府】シンテンフ 國明治天皇の思召を以て日清戰役の戰利品及戰爭に關係ある物の建物。

【振卹】シンジュツ ○ふるひうごく。又、ふるひうごかす。史、留侯世家「天下一一」＝振救・振盪。○物理學にて物體が一定の路を上下前後に往復する運動。

【振恤】シンジュツ すくひめぐむ、恤は憐。孟、滕文公「一一之」

【振筆】シンヒツ 勢よく筆をふるひて疾書する。廣川書跋「弱長史時一一大呼、以疑三其膠愚不平之氣」

【振貸】シンタイ 貧者をすくひにぎはすこと。「虛邢國倉廩、以ノ一一」＝振恤。

【振武】シンブ 武勇をふるひあらはす。國語「一一二手外」

【振怖】シン ふるひおそれる。戰國策「燕王一一大王之威」＝震怖。

【振作】シン すくひなでやすんずる。晉書、日三陰雄勝雄、主三周公一一」

【振賞】シン ふるひいきどにはる。韓詩外傳「一一者、不ノ可三勝數」

【振奮】シン ふるひ勇む。韓愈物詩「一一士卒賤」

【振揚】シン ふるひあげる。晉書、謝萬傳「公一一仁風、開ヲ其自新之路」

【振業】シン にぎはしたまふ。北史、袁翻傳「翻將ノ爲三西軍死亡、將士多舉ノ哀、存而還者、並加二一一」＝振救。

【振旅】シン ふるひものの。史、司馬穰苴傳「三軍之士皆一一」＝懷旅。

【振穀】シン 倉をひらきて救助米を與ふる。振は發。左、文十六「一ノ同ノ食」

【振波】シン 振は震、波は飛、いくさに勝ち兵をさめ整へて還る。左、襄五「三年而治ノ兵、入而一一」

【振鈴】シン 合圖又は事を警告する時にすずをふりならす。又、其のすず。

【振威】シン 勇みふるひて勢はげし。范曄文「威一一、氣勃勃」

【振鷺】シン 鷺が勢よく翼ヲ飛ぶ。詩「周頌「一一于飛、于三彼西雝」」

【振出】シン 國○商巷もが又は手形を出す。○藥を袋に入れ湯に浸して藥氣をだす。又、其の藥。○變六の采をふりはじめる場所。

【捇】 セン 寃

○ながし（長）○ひく（引）○のがる（遁）

【捉】 旋（方語七畫）の俗字。

【捘】 ソン シュン 匿

○おす（推）○おしひらく（擠・推排）○おしつける、つかむ（搶）左、定八「涉佗一一衛侯之手」○おさへる（按）

【捘】 ㊀㊁ ダ キ 夷 厭 ダイ 匹

㊀もむ（按揉）兩手にてすりもむ。＝揉。㊁神に供へる黍稷の屬、供米（祭神食）

【捘揉】ダキュウ こやる、もむ。舊唐書「隋ノ簡僞見負疊壘、雙脚一一弄三蟾晴」＝巖珍。

【捘祭】ダイサイ 神に食物を供へて祭る。又、其の食物。「饗禮」特牲饋食禮「祝命一一注一一、祭神食也」

【挺】 チテイ サウ 迥

○ぬく（抜）吳語「一鈹指鐔」○ぬきんづ（特抜）すぐれる、まさる「一秀」「英一」○なほくもつ（直持）○ゆるやか（寬）說、月令「一一重囚、全其食」○ひくく（引）引き出す「一身」○なほし、ただし（直）まっすぐ。○俗に直立して屈せざる義。○庭に通ず。儀禮、鄉飲酒禮「薦脯醢五一」○梃に通ず。韓愈文「南臨鉅海千一」

同 同 同 ㊁ 挺・揮・拔・抽・拇・敗の別は揮（手部十四畫）の條を見よ。

【挺費】テイヒ すぐれてただしくたしか。

【挺傑】テイケツ すぐれてぬきんでる。又、其の人。晉書「英姿一一」＝挺特。

【挺劍】テイケン つるぎをぬく。戰國策「虎ノ一一而起」

【挺爭】テイソウ 身をぬきんでてあらそふ。

【挺立】テイリツ ぬきんでたつ。晉史、徐邈傳「邈幼而一一」＝挺秀・挺帶。

【捏】 ネチ デツ 匿

○ひねりあつめる（捻聚）土をこねて塞合附會して無根の事を構成する義「一造」○おす（捺）

【捏造】ネツザウ ○土などをこねて物の形をつくる。○轉じて根も葉も無き事實を構成する。

【捏】 捏（海條）の誤字。

【拵】 ヒ 圍

丐むさぼる（食）楚辭、天問「穆王一」

【捌】 ハツ チ 匿 にも作る

○やぶる（破）○うつ（擊）○わかつ（分）○やっ、數字の八に代用す、主に官文書、證書等に用ふ。○さらひ、不穀が指ヲさき、物を賣り買して片づける。又、是非を判斷する。

【捧】 ハン 元

○ひらがへる。＝翻。○俗に拌又拌に通用す。

【捧】ハン 俗字。

【捧腹】ハンプク 腹を抱へ笑ふ。「一一絕倒」

【捧場】ハンバ 舞臺の前方。

【捧持】ハンジ 捧げもつ。

【捧讀】ハンドク 捧げて讀む。

【捧呈】ハンテイ 捧げて呈する。

【捧命】ハンメイ 命を受ける。

【捧腹】ハンプク 腹を抱へ笑ふ。

【捧場】ハンバ 舞臺の前方。

【捧持】ハンジ 捧げもつ。

【捧讀】ハンドク 捧げて讀む。

【捧呈】ハンテイ 捧げて呈する。

【捧命】ハンメイ 命を受ける。

【捧】 フウ 元

手を以て掬ひ聚める。抔に通ず。

【挽】 バン ベン 圓 匿 ビン 通較ずに

○ひく（引）引き張る「一弦」張はつよ弓。○すすむ（進）前かが

【挽歌】バンカ 喪に臨み柩を挽く人の歌。「一一詞」

【挽車】バンシャ 車を挽く。

【挽回】バンクワイ 回復。

【挽留】バンリウ 留まるを引き留む。

【挽船】バンセン 船を挽く。

【挽馬】バンバ 車を挽く馬。

【挽歌】バンカ 喪に臨み柩を挽く人の歌。「一一詞」

【挽車】バンシャ 車を挽く。

【挽回】バンクワイ 回復。

【挽留】バンリウ 留まるを引き留む。

【挽船】バンセン 船を挽く。

【挽馬】バンバ 車を挽く馬。

【掛】 ケイ 蟹

㊀をさむ（收斂）㊁つつ（打）○圖はかゆく、はかどる「進一一」

【捕】 ホ 遇

捕に同じ。

○とる（取）○とらふ（擒捉）「一魚」○罪人を召しとる、其の所に居る者を追ひ捉へるを逮と云ひ、亡げて捉居所の不明の者をたづねて捉へるを一といふ。○巡察（我が巡査の類）一といふ。㊁うつとる（拿取）

同 同 捕取・執・乘・把・操・採の別は取（又部六畫）の條を見よ。

【捕獲】ホカク とらへてしらぶ。漢書「不ノ建三責既一以一一」＝捕治。

【捕彫】ホチウ 彫をとらへる、とらへどころなきに喩ふ。漢書、郊祀志「求之蹟遠、如徐ノ風一一」終不ノ可ノ得」

【捕魚】ホギョ 魚をとらへる。史「司馬自能給ノ網、手以ノ一」

【捕獲】ホカク とらへる。いけどる。後漢臣詩「律頭吏卒雖一一、官司直指三簡衣裳」＝捕拿。

【捕鯨】ホゲイ くじらをとらへる「一一船」

【捕縛】ホバク とらへなわ。捕縛して獄に繫ぐ。漢書、杜周傳「一一繫獄」

【捕獄】ホゴク とらへる。

【捕獸】ホジウ けものをとらへる。

【捕捉】ホソク とらへる。唐書、鄭絪傳「寶位一旅當一一未ノ獲」＝搦捉。

【捕拿】ホダ おさへとる。金は拿の俗字。＝拿捕・捕獲。

【捕治】ホチ 罪人をとらへてしらべる。漢書「盜賊使三吏一一」

【捕鳥】ホチウ とりをとらへる。

【捕亡】ホバウ にげたる者をとらへる。逃亡せし罪人をとらへる。

【捕縛】ホバク とらへてしばる。

【捕風】ホフウ 風をとらへる、とらへどころなき喩、捕影に同じ。李愿詩「持ノ案一一幾時得」夢の說左なき物をもの一一捉影といふ。

【捕吏】ホリ とりて、罪人をとらへる役人。

【捕虜】ホリョ とりこ。＝俘虜。

【捕獵】ホリョウ 狩りとる。遼史、道宗紀「咸雍六年、獵遼人一一」

【捕】 ホウ 元

手を以て掬ひ聚める。抔に通ず。

ら ひ つ ば り て 進 あ る 「 ― 車 」 ○ 死者を葬る時、其の棺の繩を ひ き 送 る 「 ― 歌 」 ○ 國 ひ く 、 鋸 に て 木 材 を き り 割 く 「 ― 木 」 ― ○ う く ろ の 鉋 に て 器 物 を 造 る 「 ― 物 細 工 」

同 同 同 ㊀ 挽・奉・引・挽・曳・延・蓋等の 則 は 奉（手部七畫）の條を見よ。

【挽引】ビン 重き物などを ひ く 。 禮記、「 ― 車 奏 作 之 爭 」

【挽歌】ビン 葬る時に棺の車の 綿 を 奉 く 者 の う た ふ 歌 。 と む ら ひ う た 晉書、樂志、「 ― ― ― 出 ― 寺 波 武 帝 ― 古 今 注 、 薤 露 蒿 里 二 章 、 李 延 年 今 音 ― 二 曲 ― 薤 露 送 王 公 貴 人 、 蒿 里 送 士 大 夫 庶 人 使 ― 挽 者 歌 也 之 、 世 呼 爲 ― ― ― 輓 歌 。

【挽強】ビン 強き弓をひく。老學庵筆記、「以 ― ― 名 ― 手 蔡 醜 閒 ― 」

【挽回】ビン もとにひきもどす。

【挽牽】ビン ひく、ひっぱる。一統志、「舟行 ― ― 五 百 人 方 可 ― 渡 ― 」

【挽請】ビン 挽歌に同じ。

【挽車】ビン ○車をひく。○死人をのせて引くくるまの。＝靈車。

【挽滿】ビン 強くひきしぼりたる弓を引くこと。後漢書、梁冀傳、「 ― ― 」＝挽強。

【挽物】ビン 圓 ろくろざいく。

【挪】ヤ 麻 （手部に同じ九畫）

○手部（八畫）挽・挪・持・捧・掖・掩

死者を葬る時、其の棺の繩を ひ き 送 る 「 ― 歌 」 ○ 國 ひ く 、 鋸 に て 木 材 を き り 割 く 「 ― 木 」 ― ○ う く ろ の 鉋 に て 器 物 を 造 る 「 ― 物 細 工 」

【持】ヂ 支 ㊀ ㊁ レツ・ラチ

㊀ と る （ 取 ） ○ 指 さ き に て つ ま み 取 る 。 詩、周南、「 采 采 卷 耳 薄 言 ― 之 」 ○ な で る 、 す る （ 摩 ） ㊁ と る （ 采 ）

【捧】ホウ 弄（廾部四畫）に同じ。

【掖】エキ 陌 ○ わき、わきのした。＝腋。史、商君傳、「千 ― 之 皮 、 不 ― 如 ― 一 狐 腋 」 ― 之 衣 、 ○ わ き ば さ む （ 挾 ） 「 ― 持 」 ― 人 を 善 き 方 に 導 く 。 詩、陳風、衡門、「 ― 誘 ― 其 君 也 」 前 に 挾 む 。 ○ 手相弄 「 ― 撫 」 ○ あ ざ け る （ 嘲 ）

【掩】エン 陝 ㊀ ㊁ アン

㊀ ㊁ おほふ。おほひかくす。○をさむ（斂）さぐる（過）○かくす（隱匿）○慌へざるに乘じて之を襲ひ取る、不意うちにする。曲禮、「大夫不 ― 寢 」 ○ なでる。史、蘇秦傳、「 ― 以 起 外 」 ○ たすける（扶）○ぜにうち（意錢）「博 ― 」 ○ と ら う （ 閉 ） ○ や ぶ （ 破 ） 「 ― 常 ― 」 ○ 南史、蘇秦傳、「 ― 席 門 常 ― 」 ○ 蔽 ― 人 を 善 き 方 に 導 く 。 詩、陳風、衡門、「 ― 誘 ― 其 君 也 」 前 に 挾 む 。 ○ 傍 に 在 り て 導 く を 誘 と い ひ 、 傍 に 在 り て 扶 け る を ― と い ふ 。

【掩】ヨウ 麻 （手部に同じ九畫）

○ も て あ そ ぶ 、 か ら か ふ （ 弄 ） 「 ― 相 弄 」 ― 撫 ― ○ あ ざ け る （ 嘲 ）

【掖】エキ 陌 ○ 王宮の門。又、王宮のうち。盛藏用文、東西 ― ― 、 側 ― 悉 ― 之 美 ― ＝ 宮 掖 ・ 禁 闥 。

【掖誘】エキ 宮中の助けみちびく。＝誘掖。

【掖庭】エキ 宮中の正殿の後に在る庭。杜甫詩、「花 ― ― 」 書 言 故 事 、「 前 世 文 士 以 ― 中 書 在 右 、 門 爲 ― 右 實 、 又 稱 ― 西 掖 、 劉 公 幹 詩 、 「 謂 ― 相 去 遠 、 隔 ― 此 ― 西 掖 ― ― 」

【掖省】エキ 宮城內の官署、即ち宮內省。唐書、劉詳道傳、「 ― ― 崇 嶢 、 王 言 誥 領 ― 」 ＝ 宮 省 、 禁 省 、 禁 署 。

【掖廷】エキ 宮中正殿の旁ら。漢書、百官公卿表、「武帝更名 ― 永 巷 、 ― 目 ― ― 」 ＝ 掖庭。

【掖門】エキ 宮殿の正門の左右の小門。康熙字典、「宮旁 ― 目 ― 掖 庭 ― 殿 旁 小 門 目 ― 左 右 ― ― 」 ― 豆 ― 液 豆 ― 房 廬 之 旁 ― 液 書 、 成 帝 紀 、 「 ― 入 尚 方 ― ― 」

【掩】エン 陝 ㊀ ㊁ アン

㊀ おほふ。おほひかくす。○をさむ（斂）さぐる（過）○かくす（隱匿）○慌へざるに乘じて之を襲ひ取る、不意うちにする。曲禮、「大夫不 ― 寢 」 ○ なでる。史、蘇秦傳、「 ― 以 起 外 」 ○ たすける（扶）○ぜにうち（意錢）「博 ― 」 ○ と ら う （ 閉 ） ○ や ぶ （ 破 ） 「 ― 常 ― 」 ○ 蔽 ― 人 を 善 き 方 に 導 く 。 詩、陳風、衡門、「 ― 誘 ― 其 君 也 」 前 に 挾 む 。 ○ 傍 に 在 り て 導 く を 誘 と い ひ 、 傍 に 在 り て 扶 け る を ― と い ふ 。 ○ 手相弄 「 ― 撫 」 ○ あ ざ け る （ 嘲 ）

【掩】エン 陝 ○ 死者を葬る時、其の棺の繩を ひ き 送 る 「 ― 歌 」 ○ 國 ひ く 、 鋸 に て 木 材 を き り 割 く 「 ― 木 」 ― ○ う く ろ の 鉋 に て 器 物 を 造 る 「 ― 物 細 工 」

同 同 同 ㊀ 挽・奉・引・挽・曳・延・蓋等の 則 は 奉（手部七畫）の條を見よ。

【挽引】ビン 重き物などを ひ く 。 禮記、「 ― 車 奏 作 之 爭 」

【挽歌】ビン 葬る時に棺の車の 綿 を 奉 く 者 の う た ふ 歌 。 と む ら ひ う た 晉書、樂志、「 ― ― ― 出 ― 寺 波 武 帝 ― 古 今 注 、 薤 露 蒿 里 二 章 、 李 延 年 今 音 ― 二 曲 ― 薤 露 送 王 公 貴 人 、 蒿 里 送 士 大 夫 庶 人 使 ― 挽 者 歌 也 之 、 世 呼 爲 ― ― ― 輓 歌 。

【挽強】ビン 強き弓をひく。老學庵筆記、「以 ― ― 名 ― 手 蔡 醜 閒 ― 」

【挽回】ビン もとにひきもどす。

【挽牽】ビン ひく、ひっぱる。一統志、「舟行 ― ― 五 百 人 方 可 ― 渡 ― 」

【挽請】ビン 挽歌に同じ。

【挽車】ビン ○車をひく。○死人をのせて引くくるまの。＝靈車。

【挽滿】ビン 強くひきしぼりたる弓を引くこと。後漢書、梁冀傳、「 ― ― 」＝挽強。

【挽物】ビン 圓 ろくろざいく。

【挪】ヤ 麻 （手部に同じ九畫）

【持】ヂ 支 ㊀ ㊁ レツ・ラチ

㊀ と る （ 取 ） ○ 指 さ き に て つ ま み 取 る 。 詩、周南、「采 采 卷 耳 薄 言 ― 之 」 ○ な で る 、 す る （ 摩 ） ㊁ と る （ 采 ）

【捧】ホウ 弄（廾部四畫）に同じ。

【掖】エキ 陌 ○ わき、わきのした。＝腋。史、商君傳、「千 ― 之 皮 、 不 ― 如 ― 一 狐 腋 」 ― 之 衣 、 ○ わ き ば さ む （ 挾 ） 「 ― 持 」 ― 人 を 善 き 方 に 導 く 。 詩、陳風、衡門、「 ― 誘 ― 其 君 也 」 前 に 挾 む 。 ○ 傍 に 在 り て 導 く を 誘 と い ひ 、 傍 に 在 り て 扶 け る を ― と い ふ 。

【掖】エキ 陌 ○ 王宮の門。又、王宮のうち。盛藏用文、東西 ― ― 、 側 ― 悉 ― 之 美 ― ＝ 宮 掖 ・ 禁 闥 。

【掖誘】エキ 宮中の助けみちびく。＝誘掖。

【掖庭】エキ 宮中の正殿の後に在る庭。杜甫詩、「花 ― ― 」 書 言 故 事 、「 前 世 文 士 以 ― 中 書 在 右 、 門 爲 ― 右 實 、 又 稱 ― 西 掖 、 劉 公 幹 詩 、 「 謂 ― 相 去 遠 、 隔 ― 此 ― 西 掖 ― ― ― 」

【掖省】エキ 宮城內の官署、即ち宮內省。唐書、劉詳道傳、「 ― ― 崇 嶢 、 王 言 誥 領 ― 」 ＝ 宮 省 、 禁 省 、 禁 署 。

【掖廷】エキ 宮中正殿の旁ら。漢書、百官公卿表、「武帝更名 ― 永 巷 、 ― 目 ― ― 」 ＝ 掖庭。

【掖門】エキ 宮殿の正門の左右の小門。康熙字典、「宮旁 ― 目 ― 掖 庭 ― 殿 旁 小 門 目 ― 左 右 ― ― 」 ― 豆 ― 液 豆 ― 房 廬 之 旁 ― 液 書 、 成 帝 紀 、 「 ― 入 尚 方 ― ― 」

【掩】エン 陝 ㊀ ㊁ アン

㊀ おほふ。おほひかくす。○をさむ（斂）さぐる（過）○かくす（隱匿）○慌へざるに乘じて之を襲ひ取る、不意うちにする。曲禮、「大夫不 ― 寢 」 ○ なでる。史、蘇秦傳、「 ― 以 起 外 」 ○ たすける（扶）○ぜにうち（意錢）「博 ― 」 ○ と ら う （ 閉 ） ○ や ぶ （ 破 ） 「 ― 常 ― 」 ○ 蔽 ― 人 を 善 き 方 に 導 く 。 詩、陳風、衡門、「 ― 誘 ― 其 君 也 」 前 に 挾 む 。 ○ 傍 に 在 り て 導 く を 誘 と い ひ 、 傍 に 在 り て 扶 け る を ― と い ふ 。 ○ 手相弄 「 ― 撫 」 ○ あ ざ け る （ 嘲 ）

【掩】エン 陝 ○ 死者を葬る時、其の棺の繩を ひ き 送 る 「 ― 歌 」 ○ 國 ひ く 、 鋸 に て 木 材 を き り 割 く 「 ― 木 」 ― ○ う く ろ の 鉋 に て 器 物 を 造 る 「 ― 物 細 工 」

同 同 同 ㊀ 挽・奉・引・挽・曳・延・蓋等の 則 は 奉（手部七畫）の條を見よ。

【挽引】ビン 重き物などを ひ く 。 禮記、「 ― 車 奏 作 之 爭 」

【挽歌】ビン 葬る時に棺の車の 綿 を 奉 く 者 の う た ふ 歌 。 と む ら ひ う た 晉書、樂志、「 ― ― ― 出 ― 寺 波 武 帝 ― 古 今 注 、 薤 露 蒿 里 二 章 、 李 延 年 今 音 ― 二 曲 ― 薤 露 送 王 公 貴 人 、 蒿 里 送 士 大 夫 庶 人 使 ― 挽 者 歌 也 之 、 世 呼 爲 ― ― ― 輓 歌 。

【挽強】ビン 強き弓をひく。老學庵筆記、「以 ― ― 名 ― 手 蔡 醜 閒 ― 」

【挽回】ビン もとにひきもどす。

【挽牽】ビン ひく、ひっぱる。一統志、「舟行 ― ― 五 百 人 方 可 ― 渡 ― 」

【挽請】ビン 挽歌に同じ。

【挽車】ビン ○車をひく。○死人をのせて引くくるまの。＝靈車。

【挽滿】ビン 強くひきしぼりたる弓を引くこと。後漢書、梁冀傳、「 ― ― 」＝挽強。

【挽物】ビン 圓 ろくろざいく。

【掖】エキ 陌 ○ わき、わきのした。＝腋。史、商君傳、「千 ― 之 皮 、 不 ― 如 ― 一 狐 腋 」 ― 之 衣 、 ○ わ き ば さ む （ 挾 ） 「 ― 持 」 ― 人 を 善 き 方 に 導 く 。 詩、陳風、衡門、「 ― 誘 ― 其 君 也 」 前 に 挾 む 。 ○ 傍 に 在 り て 導 く を 誘 と い ひ 、 傍 に 在 り て 扶 け る を ― と い ふ 。 ○ 手相弄 「 ― 撫 」 ○ あ ざ け る （ 嘲 ）

起。

【掛金】ケイキン かねを地より掘り出す。遺異記「使二人一ー」

【掛鑿】ケイサク ほりうがつ。＝掛窄。

【掛井】ケイセイ ゐどをほる。孟子「有レ盈者、譬若ニ掘レ井ー」

【掛窄】ケイサク ほりうがつ。＝掛鑿。

【掛】ケイ　ケ通音　圧

○かく、かる。＝挂。ひっかる。圖○ケイ事務の擔任「戶籍ー」又、貴用「ーり貢け」又、家屋の構造アの○手はじめ、著手する「仕事にとりーる」○かけ賣。

同副副類　掛・挂・係・懸・繫等の別は係（人部七畫）の條を見よ。

【掛金樓】キンロウ 酸漿の異名「救荒本草」＝姑娘菜・燈籠兒。

【掛冠】カイカン 官にて制定せし冠をかけてかぶらず、辭職する義。後漢の逢萌が王莽に事ふるを欲せず、冠を東都の城門に掛けて家族をつれて遠東に奔るなりし故事「後漢書、逢萌傳」に本づく。陸游詩「己聞三棄冠、欲ニ一一一」（棄冠は冠の塵もはらふ、出仕の用意）＝挂冠。

【掛錫】カイシャク 巡行の僧のしばらく止り住する義。飛錫の對。釋氏要覽「令僧止所、住處、名ニ一一一者、凡西天、北丘、行必持ニ錫杖、掛レ錫有ニ三十五威儀、凡王宰中、不レ得レ著レ地、必掛ニ於壁牙上ー」

【掛鐘】カイショウ 圖掛け時計。

【掛軸】カイジク 書畫の かけもの。思慶書畫記「唐五代畫廟等名畫一一」

【捲】ケン・クン　㊀㊁　㊀いきほひ（氣勢）「一勇」○いさむ。○こぶし「控一」拳に通ず。○一一は力を用ふる鋭。㊁通まく、卷に通ず「席一」○をさむ（收）

【捲掀】ケンキン 手にぎる。後漢書、張讓傳、注「一一猶ニ拳握ー也」

【捲紮】ケンサツ まきむすぶ。釋名「氣在レ外ー一之也」

【捲捲】ケンケン 力を用ひて努する鋭。莊、讓王「一一乎后之爲レ人、窺力之士也」

【捲鈔】ケンショウ うすきしゐをまきあげる。

【捲手】ケンシュ にぎりこぶし。淮南子「五指之更强、不レ若ニ一一之一拳ー」

【捲土重來】ケンドチョウライ 土を卷く勢を以て重ねて來る。一旦衰へたる勢力を回復して再び襲ひきたる義。捲一に卷に作る。杜牧詩「江東子弟多ニ才俊、一一未レ可レ知」

【捲髮】ケンパツ かみを綣髮にくむ。

【捲勇】ケンユウ 腕力强し。捲は拳。寄語「有一一殷脈之力」＝拳勇。

【掀】キン　㊀㊁　㊀あぐ（擧）かかぐ、手を以て高くさし擧げる。左、成十六「一公以出於漳」○一一は高くそびゆる鋭。韓愈詩「虵鳥一一」㊁ひく（引）＝掣。

同副副類　掀・掣・揭・稽・扛・昂・颺・抗の別は擧（自部十一畫）の條を見よ。

【掀顛】キンテン ふくれあがる。腫脹して値起する。活異錄「一日復作、左腫一一」

【掀鬣】キンレン 鬣の大いなる鬣。醒齋錄詩「海上風雨來、一一雄」＝飛電」

【掀波】ハ あふりあがる。又、あふりあげる。韓愈詩「風颶助ニ凝沈、掀鯨困ニ一一」＝蹴蹴。

【掀搖】ハ あがる。吳萊詩「我將呼ニ巨鰲、浴海欲ニ一一」

【掀瀾】ハ あがりひるがへる。指月錄「天地一一無ニ覓處」

【掀蕩】ハ まひあがる。朱淑詩「空覽ニ曉暉、龍濤共一一」

【捲鬣】ケンレツ すたれをまく。王勃、滕王閣詩「珠簾暮捲西山雨」

【捲尺】ケンシャク 地面を丈量するに用ふる自由に卷容すべし。＝圓尺・帶尺。

【掀】キン　㊀㊁　㊀あぐ（擧）かかぐ、手を以て高くさし擧げる。左、成十六「一公以出於漳」○一一は高くそびゆる鋭。韓愈詩「虵鳥一一」㊁ひく（引）＝掣。

同副副類　掀・掣・揭・稽・扛・昂・颺・抗の別は擧（自部十一畫）の條を見よ。

【掀顛】キンテン ふくれあがる。腫脹して値起する。活異錄「一日復作、左腫一一」

【掀鬣】キンレン 鬣の大いなる鬣。醒齋錄詩「海上風雨來、一一雄」＝飛電」

【掀波】ハ あふりあがる。又、あふりあげる。韓愈詩「風颶助ニ凝沈、掀鯨困ニ一一」＝蹴蹴。

【掀搖】ハ あがる。吳萊詩「我將呼ニ巨鰲、浴海欲ニ一一」

【掀瀾】ハ あがりひるがへる。指月錄「天地一一無ニ覓處」

【掀蕩】ハ まひあがる。朱淑詩「空覽ニ曉暉、龍濤共一一」

【掣】セイ　㊀㊁　㊀ひく（引）弓を引く。○へる「引き止める、ひかへて制する「一馬」「一一」○とどむ（止、制）○つぐ（告）告げ、つたへる。詩、鄘風「一一大邦」○なげる（投）莊、逍遙遊「一一於地」而已」㊁ひく（引）引き去る、の而已」○ぞく（脫）○ひく、弓を引く。○㊁ゆつる（打）莊、外物「一一其頤」○圖ひかへめにする。書「きとめ置く、しばらく待つ「一所」○ヘカ原本のうつし（副本）

【掣藍】セイラン ひかへおきへる。杜牧詩「一一平江十萬家」

【掣唱】セイショウ のどをしめつける、要所をおさへる。周邦彥文「掘樓一一、肝潘裏裏」

【掣魂】セイコン ○仙人の飛びて天に昇る。○宿衛近侍の臣の稱、唐の武冲に喩ふ。張説賦「王喬一一天」○宿衛近侍の臣の稱、唐の武冲一一后一一府を置く。天子宿衛の兵を一一軍と稱す。

【掣御】セイギョ 馬をひかへて制使する。人の自由を制して治める。御加はは馭。書「善ニ手懷撫、短ニ手一一」＝掣馭。

【掣馭】セイギョ 掣御に同じ。陳信詩「一一

【掃】サウ　圖　にもと作る　㊀㊁㊂㊃　㊀コウ　カウ　江運圖

○はらふ、はく（除）はらひきよめる「一一」○さっぱり「一地」○なでる（拂）する（副）杜甫詩「淡一眺扉朝至尊」○すつ（弄）

同副類類　掃・拂・拭・擦・擦・刷・除・除・掃除などと用ふ、帚にて何にても、一いきにさらりと掃ふに用ふ「十里脩蘿聚掃天」の類。○掃はぱっぱと少しづつはらふなり、拂子にて、拂ふやうにするを掃。禮記「迎三尺几杖者拂之」○掃は推し除ノけて用ふ。○擦は いのりて、はらひのぞく。左傳「有ニ水草蘋蘋、則擦レ之」○祓は災を除き、福を求むる意。はらひきよめる。國語「祓禊正」○○祓はみそぎして災をはらふ義。修禊と熟す。○除は よそへかたづける。除惡、除草、除災などに用ふ、不潔なものを除きてきっぱりとする義。○掃はねかへすこと。書經「掃レ亂反レ正、曲禮「衣毋レ掃」

【掃名】サウメイ 樂府集「樂府江南弄曲、梁武帝製、曲和云、一一洛、掃魂舞三春人、曲名取レ此」

【掠】リヤク　圖　ほ通ず

○かすめとる（取）手に取る「收一」○とる（取）手に取る「一一」

【掠奪】リヤクダツ 掠取。後漢書、江革傳「當一一以爲レ糧物一一」

【掠取】リヤクシュ 「博一」「訪一」「拝一」○きこる（撓）大なる者を一といひ、小なる者を一といふ。戰國策「勿牧薪一、莫敢闕東門」○えらぶ、擇び取る。○つむ（摘）

同副類類　掠・採・取・執・秉・把・摘・撮の別は取（又部六畫）の條を見よ。

【採捕】サイホ 水などをくみとる。水經、「一一河流、鹽三成芳酒」

【採掘】サイクツ はちすをとる。梁書、江革傳「年十七作ニ一一詞」

【採掘】サイクツ 礦石を地よりほり出す。

【採光】サイクワウ ひかりを取る、あかりをとり入れる。又、あかりとり。

【採礦】サイクワウ あらがねを掘り取る。鑛物を採掘する「一一冶金」＝採鑛。

【採獲】サイカク とり得る。唐書「一一刊鑛爲ニ五十餘」

【採決】サイケツ 鹽妻が鹽場にて鹽案の可否をとりきめる。

【採擷】サイケツ ○つまみとる。謝朓詩「過レ君母一一、玉盤奉ニ金巵」○衣の裾をかげ折りて帶に插み、物を其の中に貯へる。＝宋摘・採摘。

【採工】サイコウ かねほりの「天工開物」＝採

【採礦】サイクワウ 礦夫。

【採掠】サイリヤク ○薪をとり木の實をひろふ。後漢書、江革傳「當一一以爲レ糧」○ひろひ取る。＝採集・採摘。

【採集】サイシフ とりあつめる「植物一一」

【採研】サイケン 「鈔撮剽掠青一一一黃卷」

【採珠】サイシュ 水に入りて珠を取る。唐の元稹に一一行あり。晉書「今浦部百姓、惟以一一爲レ業」

【採菽】サイシュク ひろひとる。菽は豆。書經、「一一軍言」＝摘菽・采菽。

【採蔡】サイ とりてみがく。晉書、戴逵傳「初爲一一之業」

【採擇】サイタク とりえらぶ。多くの中より取りて用ふる。

【採摘】サイテキ つまみとる。李益詩「一一慵旁雜、春遊晚幕間」

【採點】サイテン ○試驗の答案に點數をつける。○投票又は勝負などの數をしらべる。

【採銅】サイドウ 地を掘りて銅をとる。唐書「元和中、歲一一二十六萬有奇」

【採納】サイノウ 人を引きいれ用ふる。取り上げる。又、うけ入れる。後漢書、耶「一一一

【掃箒】竹の異名〔竹譜〕

【掃港】兵用語。海中に敵設せられ又は沈没せし危険物をとりはらふ作業。

【掃灑】はきて水をすゝぐ。後漢書、趙孝傳「一一待ノ之」李白詩「爲ノ余一一石上月」＝灑掃・酒掃・掃除。

【掃帝】はきの。書鬼「取二一一一、沾二泥汁、書壁」

【掃刷】はらふ。刷も掃。閻雍注「拔拭一一、皆所三以爲二潔清一」＝掃拭・除・掃拭。

【掃愁帝】はらひはらふは酒の異名。蘇軾、飲酒詩「應ノ呼三釣詩鈎、亦雖一一一」釣詩鈎も酒の異名。詩題をつり出すつりばり。

【掃拭】はらひぬぐふ。李白詩「一一青玉案、爲ノ余擎二金觴一」＝掃拭・掃除。

【掃尋】はきの。屈雍、注「其形容如二一一一」＝掃帝。

【掃清】はききよめる。李白詩「長嘯萬里風、一一胸中塵」

【掃晴雨】新るまじにひびに紙にて人形を作り、簪につるすもの。隊餘叢考「呉俗、人雨後、門間中有下剪ノ紙爲ノ女形、手持二一帝、懸二簷下一、以祈ノ晴、謂二之一一一、按元和李後民有二一一一詩一、參ノ初學ノ婆手持ノ帝、挂向陰空一便晴、手、其形可二想見一也」

【掃蕩】○きつ。はらふ。○掃蕩は酒の異名。蘇軾、飲酒詩「應ノ呼三釣詩鈎、亦雖一一一」釣詩鈎も酒の異名。詩題をつり出すつりばり。

【掃帚】はらひはらふ。李白詩「一一青玉案、爲ノ余擎二金觴一」＝掃拭・掃除。

【掃尋】はきの。屈雍、注「其形容如二一一一」＝掃帝。

【掃浩】はききよめる。李白詩「長嘯萬里風、一一胸中塵」

【掃眉】はきまゆ。眉を掃ふ。

【掃除】はらひきよめる。濯は水をそそぐ。酒史、宋高祖紀「百年樓觀、一一初一一」＝掃除・掃酒。

【掃蔘】はらひほろぼす。蔘は滅。＝掃滅。

【掃蔘】蔘參り、蔘祭をいふ〔清通禮〕

【掃滅】はらひほろぼす。元好問詩「溫柔與二寡厚一、一一不二復留一」＝掃蔘。

【掃部寮】圖官、宮中の掃除を司る役所。其の長官を掃部頭といふ。

【拾】 シャ 圖

○すつ、すてる（弃棄釋）うちすつ。○拾に省して舍作る。

賊などを平げほろぼす。○拾拾・拾拾などを除き去る。晉書、劉琨傳「一一一仇恥」

【掃榻】はらひの座をはらふ。人を歓迎する義。蹈游詩「酒罇中丞ノ一具、北門學士倒ノ屣迎」

【掃地】○地をはらひきよめる。國史補「李邏物立性高潔、酢食器飲、所在棄ノ、常ノ一而重」○轍じて全く盡きて殘るものなき義。漢書、魏豹傳「豹、贅秦滅二六國一、而上古之遺烈、一一而盡矣」

【掃除】もりをはらひのぞく。史、信陵君傳「趙王、一一自迎」＝掃清・掃蕩・掃刷。

【掃灑】はらひきよめる。濯は水をそそぐ。酒史、宋高祖紀「百年樓觀、一一初一一」＝掃除・掃酒。

【掃蔘】はらひほろぼす。蔘は滅。＝掃滅。

【掃蔘】蔘參り、蔘祭をいふ〔清通禮〕

【掃滅】はらひほろぼす。元好問詩「溫柔與二寡厚一、一一不二復留一」＝掃蔘。珍。

【掃部寮】圖官、宮中の掃除を司る役所。其の長官を掃部頭といふ。

【拾】 シャ 圖 舍に省して作る

○すつ、すてる（弃棄釋）うちすつ。○拾拾・拾拾などを除き去る。晉書、劉琨傳「一一一仇恥」

【掃榻】はらひの座をはらふ。人を歓迎する義。蹈游詩「酒罇中丞ノ一具、北門學士倒ノ屣迎」

【掃地】○地をはらひきよめる。國史補「李邏物立性高潔、酢食器飲、所在棄ノ、常ノ一而盡」○轍じて全く盡きて殘るものなき義。漢書、魏豹傳「豹、贅秦滅二六國一、而上古之遺烈、一一而盡矣」

【掃除】もりをはらひのぞく。史、信陵君傳「趙王、一一自迎」＝掃清・掃蕩・掃刷。

【掃灑】はらひきよめる。濯は水をそそぐ。酒史、宋高祖紀「百年樓觀、一一初一一」＝掃除・掃酒。

【掃蔘】はらひほろぼす。蔘は滅。＝掃滅。

【掃蔘】蔘參り、蔘祭をいふ〔清通禮〕

【掃滅】はらひほろぼす。元好問詩「溫柔與二寡厚一、一一不二復留一」＝掃蔘。

【掃部寮】圖官、宮中の掃除を司る役所。其の長官を掃部頭といふ。

【掌】 シャウ 圖

○てのひら、たなごころ（手心）「抵一」「反一」「合一」○つかさどる（主）「分一」「兼一」「典一」書、周官「冢宰一邦治」○つかさどる事。つとめ。「職一」○つかさ秩（捧持）詩、小雅「王事一一」

ゑる。宋書、殷淳傳「愛好文義、未嘗逆一」○國喜一は神佛の事に金品を寄進する。施しする。○國中一は善事を行ひて心に欲望のない義。傳燈錄「行、道布施無所希望、是謂二中一一」

【掌身】○いのちをすてる。○國身をすてて出家する。緣愛文「一一施ノ佛」＝舍身。

【掌敬】施しすてる。南齊書、裴子野傳「經藏頌文「一一一滑財、崇二司一、稱註」」

【掌賣】圖物をすてるやうに安くうりなげうり。

【掌假名】圖漢文を和讀するために、字の右旁にそへること。

【掌子】圖すてられし小兒。＝棄子・棄兒。

【掌罔】圖すてゼリふかゝりがけに盲ひ放す惡口。

【掌共持】圖編川時代にみより無き者に濫與せし扶持米。

【掌】 シャウ 園

○てのひら、たなごころ（手心）「抵一」「反一」「合一」○つかさどる（主）「分一」「兼一」「典一」書、周官「冢宰一邦治」○つかさどる事。つとめ。「職一」○つかさ秩（捧持）詩、小雅「王事一一」

【掌賤】○掌中ににぎる。漢書、張敞傳「海內之合、斷二手一一」○ひとにぎり。又、それ程の少許。列、湯問、注「鄭子之所會選事一一耳」

【抵ノ掌而談】掌をうちて盛んに談ずる。戰國策、燕策、見、配二趙王手手掌間一一」

【反ノ掌】てのひらをかへす。事の極めて易きに喩ふ。晏子、正諫「變ノ所ノ欲、爲ノ易二於一一」

【指ノ掌】事の明白にして且つ容易なる義。論、八佾「其如ノ示二諸斯一乎、指二其掌一」

【掌故】○國樂の故實などをつかさどる官。漢方朔、答難「更二謹案諸儀與ノ機變生一、於今之世、曾不ノ得一一」○故實・慣例。史、魯策傳「因二一一、求二漢書、諸試」」

【掌跡】てのひらのあと。述異記「其一一猶花瓣」

【掌大】手のひら程の大さ。

【掌中珠】手の中のたま、人の愛子をいふ。杜牧詩「掌中擎見一珠新」

【掌典】圖宮內省式部職の職員。樂典の都をつかさどる。

【掌祿】つかさどりすべる。唐書

「將軍各一人、一一北衙禁兵」

【運二赤掌上一】手中に取扱ふ、容易に己の思ふ通りにする。孟、公孫丑「治二天下一可ノ運ノ二掌上一」

【掌理】掌中に同じ、理は中。

【授】 ジュ 宿

○さづく、あたへる（予）「天一」「神一」「褒一」○つたへる、教へる「口一」「傳一」「教一」「訓一」「指一」わたす（付與）○さづけ、さづかり。史、淮陰侯傳「陛下所謂天一、非二人力一也」

【授衣】陰曆九月の異名。なかつき。詩、豳風、七月「七月流火、九月ノ一一」

【授戒】圖佛門に入りし人に五戒・十戒・具足戒等の戒律を授ける。

【授業】○學業を教へさづける。漢書、董仲舒傳「學業時爲二博士一、下ノ帷講誦、弟子傳ノ以二久次一、相一一、或莫ノ見二其面一」○生產の業をさづける。＝授產。

【授產】生活する爲めに產業をさづける。

【授貧】ほうびをあたへる。公羊傳、注「明君見ノ勞一ノ一」

【授爵】爵位をあたへて華族に列せしめる。

【授受】授けると受けると、うけわたし。孟、離婁「男女一一不ノ親」

【授首】殺される、己の首を人にあたへる義。諸葛亮「表、兵北征、夏侯一ノ一」

【授時曆】元代のこよみ、農民に穀稼の時節を授ける義。「元史、曆志」書經の「敬授二人時一」の語に本づく。

【授命】いのちをなげ出して盡力する。論、憲問「見ノ利思ノ義、見ノ危一ノ一」＝致ノ命・捐ノ軀。

【授與】わたしあたへる。「晉書一一式」

【捶】 ツイ ヌキ 圖 短

○う、むちうつ（以杖擊）「鞭一」「輕一」＝棰。○つく（搗）禮、內則「欲乾肉則一而食之」○馬をうつ。むち「馬一」＝策。○はかる（掘）物の輕重をはかる。

同訓異義 捶・扑・撻・征・伐・討等の別は征（彳部五畫）の條を見よ。

【捶擊】むちうつ。史記「一一問ノ之」＝捶撻。

【捶殺】むちうちころす。北史、王文同傳「小有一一過、遂ノ瞋罵二而手ノ地一、而一一之」

【捶楚】むちうつ。漢書、路溫舒傳「一一之下、何求而不ノ得」

【捶打】搗擊「一一之」＝捶撻・捶扑・鞭打。

【捶撻】むちうつ。漢書、樂忠「嫂一一一過ノ苦」＝鞭撻・笞撻。

【捶罵】むちうちもつてのしる。釋惠洪詩「往往遭二一一」

【捶楊】むち。史記「執二一一一以鞭二笞天下一」＝笞楚。

【捶扑】むちうつ。魏志、何夢傳「加責一一之罰」＝撻扑・捶打。

【推】 スイ ヌキ 圖 麌 ス通 キ

㊀㊁ タイ

㊀おす。○うつる、おしうつる。うつす（遷移）易、繫辭「寒暑相一而歲成焉」○えらぶ。奉じいただく「一戴」○すすむ（擇）○上としてたふとぶ、奉（奬進）えらびて上に薦める。書、周官「一賢讓能」、庶官乃和」○たづねる、究める（窮詰）㊁おす、おしおとす（排擠）○おしおす、おしおとす（進）おしひらく「一開」○すすむ（進）前に進める。後より送りて之、或輓之」輓は前よりひっぱる。○うつす（移）移し去る。○ゆづる（讓）己の有る所を讓りて人に與ふ。史、淮陰侯傳「一一食食我」○ゆだぬ（委）「一一辭」○國ひたぬ、たつて、敢て、敢て。＝押。

【推移】うつりかはる、おしうつる。周易、繫辭「變人不ノ遲、滯於物」、而能與ノ世一一」

【推讓】己の責任を他人におしつける、己の義務を他に轉ずる。讓は託。

【推右】おしたふとぶ。宜和書譜「爲ノ一一人、所二一一」＝推尚。

【推挹】たてる。南史、任昉傳「昉約ノ代辭宗、深所二一一一」

【推引】人を引き立て用ひる。唐書、蘇頲傳「以ノ一一後進一爲ノ己任」

【推衍】衣條に同じ、衍は敷衍。

【推演】おしひろめる。漢書、外戚傳「不ノ知下一一聖德、逃ノ先帝之志上」、弱志、諸葛亮傳「一一一兵法」

【推恩】恩愛を人におし及ぼす。孟、梁惠王「故一一、足以保二四海一」、海通」

【推勃】眼を吟味する。宋書「官吏一一、異二三百日一、獄未具ノ」＝推問。

【推彈】食を推し去を解きて人に與ふ。恩惠を施す義。史記「漢王解ノ衣衣ノ我、推食食ノ我」

【推校】おしかんがへる。柳宗元文「一一千古、無ノ所二貶讓一」

【推敲】詩句を鍛煉する。湘素雜記「劉公嘉話云、賈島初赴二舉京師一、騎驢得句、欲ノ作二推字一、又欲ノ作二敲字一、思二之不一決、以手作二推敲之狀一、未ノ覺二韓吏部之過一、冒二犯儀仗一、京兆尹張籍、以ノ道義一、爲ノ留ノ車、具ノ以ノ告ノ之、籍曰、敲字佳矣、遂並轡而歸、與ノ論ノ詩、由ノ是名ノ聲大著」

一日於二蹠上一得レ句、云、島宿池邊樹、僧敲月下門、始欲レ吟二推字一、未レ定、途於二驢上一吟哦、時時引レ手作二推之勢一、京兆不レ覺衝至二第三節一、左右擁至二尹前一、島具對二所レ得詩句一、云云、韓愈、京兆尹也、島久謂レ島曰、作二敲字一佳矣、遂與レ島並轡而歸」

【推敲】スイカウ 詩を十分にとりしらべる。唐書「一一詔獄」

【推鞫】スイキク 罪をしらべる。〔宋史、太宗紀〕＝推問。

【推究】スイキウ おしきはめる。周書、蘇綽傳「綽レ心悉レ意、一一事據」

【推鞫】スイキク 罪をしらべる。鞫はただす。＝推問。

【推及】スイキフ おしおよぼす。又、おしおよぶ。

【推窮】スイキウ おしきはめる。唐書、窟宗紀「崔羅漢情欲可見、生更一一」

【推奉】スイホウ すすめあげる。漢書、韓安國傳「所二一一一、皆賢士賢二手己一者」＝推薦。

【推懷】スイクワイ 誠の心を人におし及ぼす。南史、高帝紀「我布衣時、懷便便レ一レ設、款、況在二今日、寧當レ有レ異」

【推擥】スイラン おしらつる。法苑珠林「若二是帝子令利一一一便破矣」

【推屐】スイキ 本をおしたづねる。嵇游詩「沿流岡上君無レ怪、世間一一自二趨狂一」＝推究。

【推敲】スイカウ 罪をおしたづねる。〔宋史、太宗紀〕＝推問。

【推究】スイキウ おしきはめる。周書、蘇綽傳「綽レ心悉レ意、一一事據」

【推鞫】スイキク 罪をしらべる。鞫はただす。＝推問。

【推及】スイキフ おしおよぼす。又、おしおよぶ。

【推窮】スイキウ おしきはめる。唐書、窟宗紀「崔羅漢情欲可見、生更一一」

【推奉】スイホウ すすめあげる。漢書、韓安國傳「所二一一一、皆賢士賢二手己一者」＝推薦。

【推懷】スイクワイ 誠の心を人におし及ぼす。南史、高帝紀「我布衣時、懷便便レ一レ設、款、況在二今日、寧當レ有レ異」

【推擥】スイラン おしらつる。法苑珠林「若二是帝子令利一一一便破矣」

【推屐】スイキ 本をおしたづねる。嵇游詩「沿流岡上君無レ怪、世間一一自二趨狂一」＝推究。

【推鞫】スイキク 罪をおしたづねる。〔宋史、太宗紀〕＝推問。

【推究】スイキウ おしきはめる。周書、蘇綽傳「綽レ心悉レ意、一一事據」

【推鞫】スイキク 罪をしらべる。鞫はただす。＝推問。

【推及】スイキフ おしおよぼす。又、おしおよぶ。

【推窮】スイキウ おしきはめる。唐書、窟宗紀「崔羅漢情欲可見、生更一一」

【推奉】スイホウ すすめあげる。漢書、韓安國傳「所二一一一、皆賢士賢二手己一者」＝推薦。

【推懷】スイクワイ 誠の心を人におし及ぼす。南史、高帝紀「我布衣時、懷便便レ一レ設、款、況在二今日、寧當レ有レ異」

【推擥】スイラン おしらつる。法苑珠林「若二是帝子令利一一一便破矣」

【推屐】スイキ 本をおしたづねる。嵇游詩「沿流岡上君無レ怪、世間一一自二趨狂一」＝推究。

【推敲】スイカウ 詩をおしたづねる。〔宋史、太宗紀〕＝推問。

【推究】スイキウ おしきはめる。周書、蘇綽傳「綽レ心悉レ意、一一事據」

【推鞫】スイキク 罪をしらべる。鞫はただす。＝推問。

【推及】スイキフ おしおよぼす。又、おしおよぶ。

【推窮】スイキウ おしきはめる。唐書、窟宗紀「崔羅漢情欲可見、生更一一」

【推奉】スイホウ すすめあげる。漢書、韓安國傳「所二一一一、皆賢士賢二手己一者」＝推薦。

【推懷】スイクワイ 誠の心を人におし及ぼす。南史、高帝紀「我布衣時、懷便便レ一レ設、款、況在二今日、寧當レ有レ異」

【推擥】スイラン おしらつる。法苑珠林「若二是帝子令利一一一便破矣」

【推屐】スイキ 本をおしたづねる。嵇游詩「沿流岡上君無レ怪、世間一一自二趨狂一」＝推究。

【推鞫】スイキク 罪をしらべ